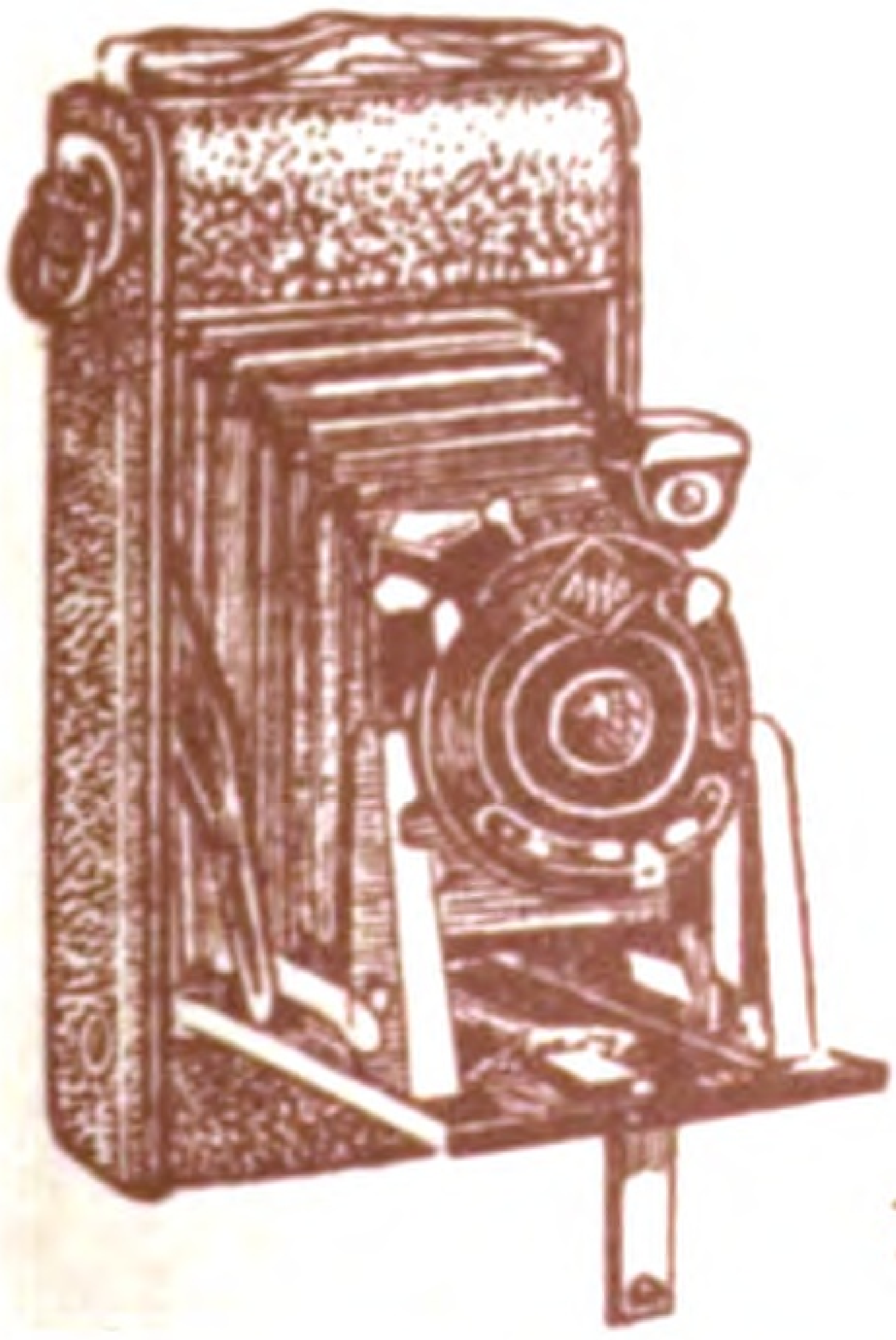
THE CENTRAL REVIEW

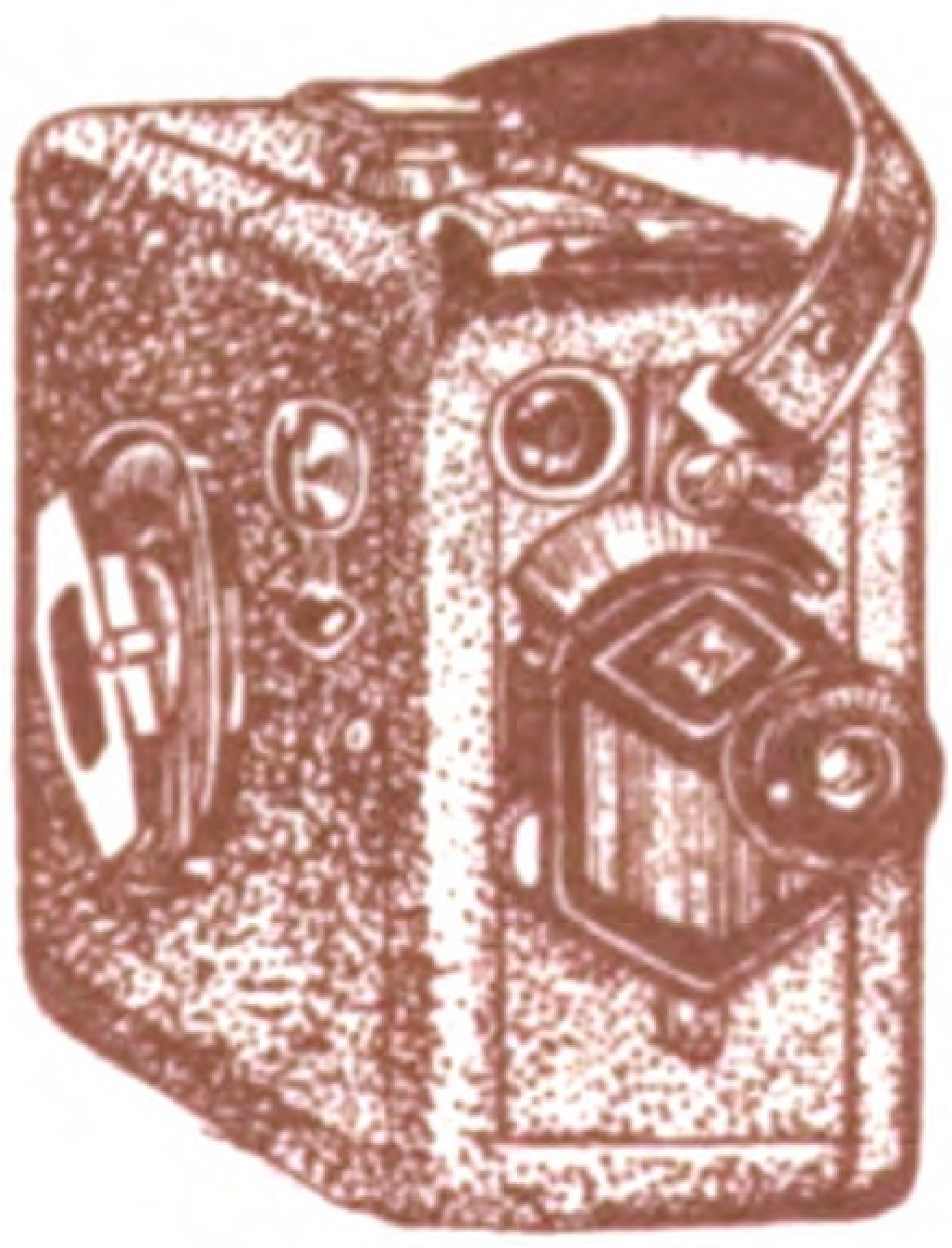
中央公論

2-1930

二月號

第四十五年　第二號　第五百五號





婦人

婦人雜誌界唯一のインテリヂエント・ウイメンの伴侶
そして、また、少しでも女性に關心を持つ男性への反射鏡だ

◆子の愛に惱む上山草人……北川壽雄
遠い夢幻の物語の主人公・支那の鸚鵡の奇怪なキヤラクター・上山草人にも子を思ふ親心はどうすることも出來なかつた。彼の憧れの日本は一子竹二郎君への憧れであつた。

◆親馬鹿時代相……大宅壯一
◆男子不要論……杉浦清
◆良人論……平林たい
◆別れた良人に與ふ……樺山千代
◆モガの良人不要論……粉住愛子
◆結婚破産者の手記（世にありふれた告白でなく、もつと深刻な謂はゞ人妻の性の告白）……掛井冴子
◆女づれの歐米遍路（白鳥の渡歐は實に特異なものである、彼は愛妻を通じて何をみた）……正宗白鳥
◆妻の見た外遊中のクメ（ケイバやトバクに熱中して小說一つ書かなかつた久米の面目躍る）……久米艶子

母を語る

▽八十二歳の生母……横山大觀
▽若き母の思ひ出……若槻とく子
▽偉き女丈夫……市川猿之助
▽夫君の母堂……鈴木たか子

◆百貨店と小賣商……前田繁一
◆手藝のページ……專門家五氏
◆最近の皺の手術法……齋藤一博士
◆季節の味覺……專門家四氏
◆應用圖案のはなし……山形駒太郎

スキー・シイズン

關西スキー場新展望……川方哲二
スキーのＡＢＣ……竹節作太
關東スキー場めぐり……小菅德二
スキー帽子の拵へ方……筒井光康
流行の婦人スキー服……山脇敏子

公論

二月特輯號

定價七拾錢

中央公論社發行

◆だんすほーる移動風景……とばつねろ

◆小唄映畫と現代人心理……北村小松

◆アナウンサー打明け話……松内則三

◆言葉遣からみた現代女性……石川欣一

▽我が妻よ子よ　原阿佐緒

▽肩車のメリイ　鈴木文史朗

▽私の鼻　柳原燁子

▽モダン女學生　堤寒三

▽假面　宇野千代

◆わが娘の結婚（艶子さんと阿部金剛氏との結婚は單に此頃の話題としてゞはなく、も少し社會的な注意を惹く性質のものではないか？）……三宅やす子

◆女代議士の夢（婦選獲得はいつの日か？やがて來る日議政壇上に纎妍を競ふものは誰と誰、先づ列傳體の此の記事を御覽下さい）……北條政子

令孃移動座談會　明日の良人

〔出席者〕

○生馬氏令孃　有島曉子
○作造氏令孃　吉野敬子
○政一氏令孃　小俣愛子
○松村みね子令孃　片山總子
○鐘一氏令孃　須藤和歌子
○遞相令孃　小泉芳江
○本誌當選美人　坂部榮
○本誌記者　佐藤澄子

好評長篇小說

◆杞憂病患者……正木不如丘　山名文夫畫

◆遍路行……下村千秋　中澤弘光畫

◆極光……里見弴　小田富彌畫

◆同志愛……貴司山治　竹中英太郎畫

◆江戸巷塵譜……林不忘　木村莊八畫

內外時評

・勞働組合法案……

・大將の名譽……

・密偵教育……

・政界廓淸の意義……

良人の嘘

・だから笑つてほしい……

・嘘も樂ぢやない……

・果てしなき情算……

・おはよサイノロ爺……

暴力考

ジョルジュ・ソレル著■西川勉譯

完譯

目次

一、階級鬪爭と暴力
二、ブルヂヨアの頽廢と暴力
三、暴力に對する偏見
四、プロレタリアの罷工
五、政治總罷工
六、暴力の倫理
七、生産者の道德
八、暴力辯護論

本書は××的サンヂカリズムの聖典である。同主義は大杉榮の名と共に過去に於ける我國の無産者解放運動史上に巨大な足跡を印した。『總罷工』の提唱は本書によつて初めてなされたるものである。然しこは單なる暴力の提唱ではなく、これに、無産者の持つ獨自の道德的、哲學的基礎付けをしたもの。不朽の名著とし敢へて諸士に推薦する所以である。

定價貳圓參拾錢
送料 内地十八錢 其他二十四錢

■菊判四五〇頁■函入極上製

中央公論社版

最新刊 二月五日發賣

堺利彦著

貧富戰と男女戰

―現代社會生活の不安と疑問―

不景氣・生活難の解剖!!

最古の先覺社會主義者として、多年我民衆運動の第一歩に立つて馳驅して來た彼は、老いて益々旺んなる意氣と情熱を此の一書に托して來るべき選擧戰の費用を産み出さうとしてゐる此書の主眼とするところは、現時の社會組織の缺陷と生活不安の原因を摑み出して親切にこれが禍根を糺明し批判したところにある。ともすれば頑くな理論鬪爭に終始しやうとする社會問題も、此の人の卓拔な識見と老練な筆致によつて痒いところに手の屆く名醫の診斷書となつた。誰が讀んでもよくわかり、誰が讀んでもなるほどと肯づかしめられる。と老來益々冴え來つた名文は多少のユーモアをも含んで、一行一句、流石に若徒の追隨を許さざる獨歩の境地を適くものがある。

堺としひこ！何とその名の親しみ易くなつたことよ。多年解放運動に一身を挺して老ひるを知らぬこの闘士のために、君の浄財を喜捨されよ。

四六判並製
定價一圓二十錢
送料 内地十二錢 鮮滿十八錢

東京驛前 丸ビル五階 中央公論社發行 振替口座 東京三四番

嵐を衝いて……福本和夫

機密費
・その行方……小汀利得……一一七
・餘りにブルジョア的な……片岡鐵兵……一二二
・內幕をあばく……鈴木茂三郎……一二四
・秘戀の味……生方敏郎……一三八

金解禁と議會解散問題の交錯……大山郁夫……一四一

議會解散その日……馬場恒吾……一四九

駝鳥漫談……上山草人……一六一

婚姻自殺九百六十……
鐵道異聞 黨略線の解剖……伊藤金次郎……
ダグラス・ファンを解剖する……長谷川如是閑……九六
女性社會史考……石濱知行……一一七
外國語の世界……花園兼定……二一一
山梨半造と齋藤實……馬場恒吾……二一七
松竹トラスト論……S・O・S……二三八
友愛結婚提唱是非……原田實……二四一



平福百穗筆　　　　溪澗梅草

中間物選集

化粧品店です。寶石店です。フルーツパーラーです。カフエルームです。——都會の盛り場を歩く人なら、誰でも、これ等がきらびやかに軒を列べてゐるのに氣付くでせう。無駄なものばかり——と云ひ給ふな。なんといふ、それは魅力でせう。「**中間物選集**」も、まア、さう云つたやうな……。だから若い人達の間に、俄然、好評大好評です。

9

彼女等と語る時

（新刊）片岡鐵兵著

内容　美人論。文學と不良少女。道徳的な男がいふ。女學生氣質。スキー漫談。道頓堀界隈。妻を感覺する男。モダン日本再吟味。女性の脚。女の着物。所謂モボとモガについて。日活訪問。

近代女性に最も鋭い洞察を持ち、然も未來社會への熱烈な欲求を持つてゐる氏が、多く女性に關する感想を蒐集したもので、近代的な全てのものへのよき指針となるであらう。

10

東京と大阪

（新刊）下田將美著

内容　東京の匂ひ。上野の憧ひ出。須灘山附近。倫敦と東京。霧。大阪の色。關西文化の東漸。關西財人の句帖。高野の萬年草。迫害さるゝ者。誰が罪を負ふか。新しい男女。

東京人は大阪を輕蔑し、大阪人は東京を生意氣だと思ふ。だが兩都のいゝ所も欠點も、著者のやうなよきヂヤアナリストの眼にこそ眞に公平に映るであらう。

中央公論社版・四六判假綴三百數十頁

解散邁進論

——（卷頭言）——

今度の議會は當然解散さるべきだ之が憲政常道の要求である。學界論者の見解は此一に歸着した。無論そは現內閣に依る解散でなくてはならぬ。選擧の公正の爲に期す可からざるに着目する所謂中間內閣論の提唱の如きは固より一顧の値もない。大臣だけ面目でも直接選擧事務に從事する地方官憲の黨見は今俄に之を矯め難く、且選擧だけを公正にやつて後事は多數を獲たる政黨に託し自分は潔く勇退すると云ふ樣な恬淡な大臣を我々は果して今日の故參官僚の間に見出し得るだらうか。我國に於ては未だ選擧を公正にやらせる爲めの中間內閣の實例はない。併し政黨を基礎とせざる官僚內閣が概して選擧干渉に於て政黨內閣と軒輊なく且恒に多數政黨と裏面の結托を締して政界腐敗の勢を激からしめた過去の事實は可なり多い。

解散回避論の中、去年十二月末小泉策太郎翁の朝日紙に寄せた論文は筆の運びの巧妙さに魅せられて多くの人の注目した所であらうと思ふ。趣旨は要するに憲政の確立の爲には樞密院貴族院等政黨に取ての共同の外敵の大に戰はざる可からざるものあり、其外にも內部に在ては選擧革正と云ふが如き超黨派的大問題があるのに復た解散に依て無用の黨爭を激成するのは小局の利害に拘泥して國家の大事を忘るるものではないかと云ふに歸する。成る程樞密院貴族院（まだ外にもあるが）の跋扈は憲政の圓滑なる進展の途上に橫はる一大障碍である。之を適當に始末するは政黨政治家に取て先決の急務でなければならぬ。選擧廓清の問題に就ても同樣の事がいへる。之等の問題こそは各黨各派の共同の力で有效に片付けたらよからうと私も思ふが、併し斯の如き共同戰線は果して今日の政黨者流に期待出來るだらうか。之を一個の提案として一般に今日の政治家に警告するのはいゝ。斯かる大問題があるからとて解散の回避を說くは、朝野兩黨の共同戰線の現實の可能の範圍に說明せられ得るに非る限り、その閑適人の夢たるを免れないと考へる。

解散回避論の一種に、選擧の結果が正しく國民の自由意志の反映として現はるる時のみ解散が正當とせられるといふ論がある。解散したとて選擧が必ずしも公正に行はれぬと云ふ非難は、解散斷行論に取て慥かに一大鐵鎚だ。併し之とても解散回避論の有力なる根據たり得るかどうか。

假りに解散がなかつたとする。陰謀に依て政局の轉換を圖らんとする者の簇出するは期して待つべしであらう。同時に專制時代の殘滓たる特權階級乃至官僚閥の出動に依て政界の異常に動搖せらるることも覺悟せねばなるまい。之を恐れるからこそ、私共は兎に角政權は一に選擧の結果に由る議會政派の多數關係に依てのみ移動せしめる事にしたいと決めたのではないか。政友會がいゝとか民政黨がいゝとか云ふのではない、選擧で勝つた者のみが政權を取れると云ふ大原則の確立が望ましいのである。謂はゞ之は朝野に拓かれた一條の道路の如きもの、無産黨が纔て優勢となつても此道が拓かれて居なくては眞の民衆政治は樹て得まい。政界を無政府的混亂狀態から救ふものは唯此一條の道路の修築の外にはない。この意味に於て今度の解散も正當づけられる。但し之と共に選擧を公正ならしめる所以の途を講ずるの必要は亦斷じて等閑に附するを許さない。

中央公論



第四十五年第二號
二月號
五百○五號

誰がマルクスを矛盾させたか

——一つの反批判、竝に地代論への一寄與として——

猪俣津南雄

一

日本におけるマルクシズムの發展が、いかに暴風的な征服過程であつたかは、およそ社會・經濟の學をもつて世に立つほどの者は最早やマルクスを論じマルクスを批判することなしには存在を主張し得ぬほどの事態となつたことによつても明かである。もちろん、爭つてマルクスを論議せんとする傾向は、すでに世界大戰以來、わけてもロシア革命以來の顯

著なる現象ではあつた。が、しかし、最近の特徴は、前にはマルクシズムに對する「理解」を誇示し、同情者をてらひ、時にはマルキストとも見えるやうに書きなどしたる學者・論客達が、一轉して今や反マルクシズムの旗幟に據り、それぞれの仕方において「論陣」を張りつゝも、おのづから一の反動陣營を形成しつゝあることである。これらの學者・論客達が思ひ切つて假面をぬぎ、よかれあしかれ攻勢に轉ぜんと企圖してゐるのは、一つには二三年來の政治的反動が此人達を勇氣づけたからであり、二つにはマルキストの容捨なき理論的進出が此人達の態度決定を强制したからである。だが、これらすべての表層現象の基抵をなし、中軸をなす大いなる運動は、資本主義そのものの沒落であり、その一面としてのブルヂョア・イデオロギーの崩壞である。そしてこの事態はまた、反動的な學者・論客達の「マルクシズム批判」のうちにまざまざと反映する。それらの謂ゆる「批判」に共通なる特質は、批判の對象物に對する理解の皆無であり、獨斷偏執からの出發であり、從つて單なる批判のための批判であり、言葉の上の否定に終る論議であり、科學的貢獻の絕無であり、なかんづく批判者自身の理論的體系の完全な缺如である。かくして、最近の社會・經濟科學の分野における反マルクシズムの運動も、所詮は反動の性質のものであると共にまた所詮は反噬の性質のものである。

が、それにしても、――たとひそれらが畢竟絕望的な逆襲を意味するものに過ぎないとしても、そしてたゞ自滅への一里塚の一つを刻むに終るとしても、吾々はブルヂョア・イデオロギーを自滅の過程に放任することはならぬ。吾々は、社會的進步の桎梏と化したるものの撤去を早めるために鬪はねばならぬ。

二

讀者の知らるゝ如く、「中央公論」十二月號は、二木保幾氏の論文『マルクスの價値論に於ける平均觀察と限界原理との矛盾』を載せた。此の論文もまた、「資本論の矛盾」を指摘せんがために書かれたものだが、「資本論」の矛盾指摘の斯人と

して登場された二木氏は、氏の先輩に比すればたしかに一つの進歩を示してゐる。ホエム・バウエルク＝小泉信三＝土方成美の諸氏が「資本論」の「矛盾」として指摘したところの「市場価格なるものの矛盾」は、二木氏によつてはもはや矛盾に非ずと卒前に公言されてゐる。即ち曰く、「資本論」第三巻に於て生産価格と一致しない価値、即ち生産価格の以上或は以下であるやうな個々の商品の価値は、第一巻に於ける社会的平均的に必要なる労働量に依つて決定される価値でなければならぬ。無論これは矛盾を意味する関係ではない。」（註一）が、この矛盾ならざるものを矛盾と認じた論者・論客達に対する理論闘争は、二木氏の出現に先立つてすでにマルキストによつて徹底的に戦ひぬかれてゐたのであつた。（註二）従つて、二木氏に見らるゝ一進歩は、反マルキスト陣営全体の公然の一歩退却に過ぎないことは言ふまでもない。

（註一）二木氏論文の一四頁。「　」の中の傍点は筆者が挿入したものである。以下同じ　（註二）この闘争は、日本では就中櫛田民蔵氏の諸論文によつて代表される。

然らば、二木氏は如何なる矛盾を「資本論」に見出したといふのであるか？　吾々は先づ氏の論文の結論を見るであらう。要するに、「資本論」第一巻から第三巻の前半に至るまで、平均観念を一貫させて来たマルクスの価値論は、第三巻の後半に於ける較差地代論に於て、「市場価値」は結局は限界価値即ち限界的な個別的な生産価格或は個別的な価値即ち限界生産価格或は限界価値に統制されると説かれるに至つて、竟に較差地代が剰余価値の分野以外に押しやらざるを得ないといふ一の矛盾に陥つた。此の矛盾は、平均観念と限界観念との矛盾に外ならない。」……「平均観念に於ては、一剰余利潤と、負の剰余とは相殺する。それ故に地代は消滅する。」之に反して較差地代を成立させようとすれば、商品の価値はその商品の生産に社会的平均的に必要なる労働量によつて決定されるといふ価値法則を否定し去らなければならない。」（同上、一九頁）

此の結論を導くための二木氏の論証もしくは説明は、氏の論文の後三分の一（特に一四頁註から一九頁）に展開されてを

り、「資本論」の難解なるとは全く異る意味において難解を極めてゐるが、その論點と論理とを補捉して要約すれば次の如きものである。

（一）商品の需要と供給との平衡點として、商品價格變動の中心點をなし、その意味において市場を統制し市場價格を規制するところの「市場價値」または「市場生産價値」は、結局においてその商品の「價値」または「生産價格」によつて決定されるとしても、その商品種に屬する個々の商品の價値または生産價格の大きさは、生産のために投ぜられる個々の資本——等量・等構成の個々の資本——が、有利な生産條件の下に作用するか、不利な生産條件の下に作用するかによつて異なるであらう。ひとしく米にしても、不利な條件の下に生産される一石は、有利なる條件の下に生産される一石に比してヨリ多くの勞働を要し、費用を要し、從つてヨリ多くの價値を含み、ヨリ大なる生産價格をもつであらう。そこで、米なる商品の「市場價値」または「市場生産價格」は、米總體の各部分によつて異なるところの大小樣々な個別的價値または個別的生産價格のいづれによつて決定されるかの問題が生ずる。すくなくとも、それら大小の價値または生産價格の平均的なもの——即ち平均的價値または平均的生産價格によつて決定されるか、それとも、それらのうちの最大なもの——即ち最も不利なる生産條件に基づける特殊の個別的價値または個別的生産價格——即ち限界的價値または限界的生産價格によつて決定されるかの問題が生ずる。と同時にまた、米なる商品の需要供給の平衡點として價格變動の中心點をなし、その意味において市場を統制して市場價格を規制するところのものは、この限界的に決定された市場價値または市場生産價格であるか、それともかの平均的に決定された市場價値または市場生産價格であるかの問題が生ずる。

（二）マルクスは、一般に、平均的價値または平均的生産價格が市場價値・市場生産價格を規制し、かゝる市場價値または市場生産價値こそが、市場統制的な價値、市場統制的な生産價格として、商品の價格變動の中心點をなし、その意味において市場價格を規定すると説く。即ち、「平均觀察」こそが、「マルクスの經濟理論の樞軸」をなしてゐる。（註一）

(三)然るに――高木氏の理解するところによれば――かやうに平均的価値または平均的生産価値が、市場価格または市場生産価格を決定し、これらのものが市場価格を統制する限り、「較差地代」(註二)なるものは決して生じ得ない。較差地代が生じ得るのは、たゞ農業生産物の市場価格が、生産条件の最劣等なる耕地すなはち限界にある耕地に投ぜられた資本の生産物の個別的価値または個別的生産価格――即ち限界的価値または限界的生産価格によつて統制される場合に限られる。

(四)そこで、マルクスに許された道は二つに一つだ――

(a)較差地代の分析においても、当初に平均観察の立場に立ち、その本来の立場からは到底較差地代を説明し得ないことを正直に告白し、もつて資本論の根幹たる彼れの価値法則――まさに此の平均観察に基づくところの価値法則の徒に拘持し難きことを率直に認めるか、それとも、

(b)較差地代の研究に至るや、突然、価値決定の「限界原理」に縋りつき、それによつて較差地代を説明して理論的一貫性をなげうち、資本論の全体系を分裂させつゝも、たゞ言葉のあやで表面を糊塗し粉飾することに満足するか。

(五)マルクスは――筆者によれば(!)――後者の方法を選んでゐる。即ち、彼は、較差地代論においては、農産物の「市場生産価格は、地代――絶対地代と異なる較差地代――を支払はない土地「即ち限界にある最劣等の土地」の生産物の個別的価値に支配せられると説く(註三)が、これはとりも直さず、較差地代論に於て、農業なる一生産部門の生産物の価値或は市場価値には、同種商品間の競争に依る平均化は無いとする(註四)ものにほかならぬ。「然かも――「他方ではマルクスは依然として――此の「競争による平均化なしに定される限界生産物の個別的価値に支配されるところの」市場生産価格に於いて、「商品の価値の性質、即ち価値が個々の商品の生産に必要な労働時間に依つてではなく、社会的に必要な労働時間――「即ちマルクス本来の立場に従へばまさに平均化されてゐるべき筈のもの」――によつて決定されるといふことが

示されると云ふのである。』(註五)。で、明かにマルクスは、較差地代論において彼れの「平均觀察」を抛棄し、從つて彼れ獨自の價値法則を否定しながら、たゞ言葉だけで「平均觀察」及びそれに基づく價値法則を一貫せしめんと踠いてゐるといはねばならぬ。

(六)しかしながら、かゝるゴマ化しの結果は、拾收すべからざる論理的・理論的破綻となつてあらはれずにはをらぬ。見よ――

(a)較差地代論に至るや彼は、『本來の市場價値でないものを、市場價値と呼んだ』りせねばならなくなつた。

(b)それがために更にまた、較差地代を構成する價値を『虚僞の社會的價値』であるとなすことを余儀なくされ、從つてまた『較差地代を剩餘價値から導かんとする論據』(註四)を全く喪失し、「較差地代を剩餘價値の分野以外に押しやらざるを得なく』(註六)なつた。

(七)だが、果して然らば――と、「資本論と四つに組んだ」二木氏はかちどきあげる――、『較差地代をも勞働者階級のみからの掠奪と觀ようとする立場もまた撤去』されるではないか。そしてそれと共に吾々は――と二木氏はおもむろに階級的偏見に訴へる――『溯つてマルクスの價値法則其のものに既に初めから勞働者階級の被掠奪、被搾取を理論づけようとする動機が潜在してゐたか否かを問ふことも出來よう(!!)』(註七)

(註一)一二頁。(註二)「較差地代」は Differential rent の譯語であるが、それはまた「等差地代」、「對差地代」などとも譯されてゐる。筆者は最も單純な言葉を選んで「差額地代」と譯してゐるが、本論文では二木氏の用語と統一するために「較差地代」を用ひることにした。(註三)一六頁 (註四)一五頁 (註五)一七頁、(註六)一八頁、一九頁 (註七)一九頁

かやうにして二木氏は、「資本論の矛盾――しかも前人未開の最深矛盾を發見された。ただ、およそ「資本論」は間違つてゐるに違ひないと頭からきめてかゝる者には「資本論の矛盾」ほど發見しやすいものはない。だから、問題はただに殘るのである、――誰が「資本論」を矛盾させたか？　マルクスか、それとも二木氏か？

これを明かにするために、吾々はまづ、二木氏の辨證の眼目をなし根柢をなすところのものを、二つに分けて検討するであらう。

第一の論點、――較差地代の説明においてマルクスは、價値・市場價値・市場生産價格・市場價格の決定上の「平均観念」を抛棄して「限界原理」に依據するに至つたと二木氏はいふ。これは果して事實か？　果して正當か？　且つ二木氏の主張が破れゝば、氏の全批判は崩壊する。そしてそれと共にまた、第二の論點も泡沫に歸する。第二の論點とは、即ち、マルクスは較差地代なる剰餘價値が生ずることが出來ず、剰餘價値の分野以外に押しやつた、といふこと。

では、先づ第一の方から――

たしかに、マルクスは、較差地代を説明するために彼れのつくつた諸表にあつては「何等の地代を齎らさざる最劣等地の生産價格が、常に統制的な市場價格となつてゐる」と書いてゐるし、またまさしくさうでもある（註二）二木氏は、早急にも、このことからして直ちに此の市場統制的な最劣等地の生産價格になるものが、大小種々なる諸々の個別的生産價格の平均的なものと相容れないところの「限界的生産價格」であると斷定した。

（註一）「資本論」第三卷第二部、一九七頁

愉快なことには、二木氏にあつては、市場統制的な平均的生産價格と市場統制的な限界的生産價格とが、それに對立せしめられてゐる。これら二つのものは、絶對に相容れない二範疇であり、完全に排除する二概念である。前者が成立すれば後者は斷じて成立せず、後者が現はれるためには前者は必然的に消えねばならぬ――だから、二木氏は、かうした範疇

に立つが故にのみ、「平均觀念」と「限界原理」との「矛盾」を大聲叱呼し得たのである。

だが、――たゞの一顧で足ることだ――、諸々の個別的生産價格の平均的な大きさと相容れないやうな生産價格が、果して市場統制的な『限界生産價格』たり得るだらうか？　全耕地六百萬町歩から取れる六百萬石の米のうち、その千分の一といふ僅小部分の六千石は、全耕地の千分の二足らずの一萬町歩といふ僅少部分の最劣等地・『限界耕地』で生産され、それの石當り生産價格三十二圓が『限界生産價格』即ち最高生産價格である時に、殘余の壓倒的に大なる部分を代表する五百九十九萬町歩から取れるところの五百九十九萬四千石の石當り平均生産價格は三十二圓ではなくて三十圓に過ぎなくても尚ほ、かの大海に涙一滴ほどの少量な『限界』生産物の『限界』生産價格三十二圓が、市場統制的であり得るだらうか？　經濟學ならずとも、健全な常識ならば躊躇なく否なと答へる。俗流經濟學者ならざればみな否なと答へる。が、俗流經濟學者ならば、――しかし、たとひ大海に涙一滴ほどの少量でも、それが全需要を充たすために不可缺の供給である以上、三十二圓は拂はれねばならず、完全なる自由競爭を前提する限り一市場一價格あるのみだから、『限界』生産價格三十二圓は遂に市場を支配せざるを得ない、と辨護するでもあらう。そして俗流の俗流たる所以は、此の場合に、たゞ『全需要を充たすために不可缺の供給』といふフレーズの神秘化のみに依據してゐるといふことにある。この妖害を排し得る誰でもが若し更に一歩を進め、――では、その『限界』價格三十二圓を拂はなければその『不可缺の供給』が得られぬといふのは何故か、と反問するならば、彼等はたゞ、生産價格三十二圓が得られなければ『限界』的資本家達は生産を止めるであらうから、と答へ得るのみである。然らば、此の俗流經濟學の世界に棲息するところの『限界』的資本家なる一人種は、三十二圓の自己の生産價格に對して三十圓を得て生産を續けるよりはむしろ、全く商賣を止めて餓死することを選ぶのか、と問ひ詰めて見よ、――『限界的』な教授達は温顔に笑みを湛えて、否とよ問者、その人達は自己の生産物に對して生産價格の得られるやうな他の生産部門に河岸をかへて資本をおろすのだ、と教へるであらう。

それが教授達の最後の切札である――即ち、一の生産部門における商品が何故にその「限界」生産價格によつて決定されざるを得ないかといふ問題は、いづれかの生産部門における商品もその「限界」生産價格によつて決定されるといふ假定によつて解答される。否、されねばならぬ。然るにその假定こそが問題として提起されたのだ。問題に答へるに假定をもつてする。此の果しない堂々めぐり、――「限界」生産價格はすべて生産部門において市場統制的でなければならぬが故に市場統制的であるといふ、この循環この獨斷をほかにして、「限界」的な教授達の逃げ路はないのである。

そこで吾々が、此人達に見切りをつけて現實にと行くならば、突然にして勃發する恐慌の場合のほかは、即ち常態的な場合には總じて、どの生産部門においても「限界」生産價格の支配を見出すことが出來ないと同時に、すべての生産部門において平均的な「生産價格」が支配するのを見、從つてまた――また「限界」的な教授達を尻目にかけて――自己の生産價格以下の市場價格において商品を生産し續けてゐるところのいき〱とした「限界」資本家達の一群を發見するであらう。彼等は、自己の生産價格以下で賣るところから、平均利潤の全部はこれを得ることが出來ぬ。が、たとひ平均以下の大さにもせよ、多かれ少なかれ利潤を得る。（註一）そして、たゞ單に自己の生産價格で賣れないからといつて、また單に平均利潤を得ぬからといつて、それだけの理由では、彼等が敢へて轉業しやうとしないのは何故かと見るならば、それはいづれの生産部門にも平均利潤をあげ得ない「限界」資本家達が、――限界的な教授達の否定にも拘らず――事實においてあるからである。そして此の限界的な資本家達は、それ〲の生産部門における壓倒的多數となるに至らぬ限り、他の惠まれた大多數の同僚との競爭にうち勝つて自己の高價な生産價格に市場を支配せしめることは、――限界的な教授達の保證あるとないとによらず――どう踠いても出來はせぬ。しかるにまた、限界的な資本家達が、自己の生産價格に市場を支配せしめ得るほどに壓倒的多數を占めるに至つたとすれば、それは彼等の「限界」生産價格がすでに自己の生産部門の平均的生産

價格に接近し、それ故にまさにかの市場統制的な生産價格に近づいたことを意味するものに外ならぬ。

(註一)、筆者が前に例解としてあげた「限界的」農業資本家達に卽して言へば、米價は平均的生産價格三十圓に決定される時に、彼等の個別的生産價格は三十二圓五十錢であるとしても、例へば次の如き割合において優に利潤を取得しうるであらう。卽ち、一石の平均的生産費(マルクスの用語では費用價格)は二十五圓、「限界」的生産費は二十七圓であつて、平均利潤率は二割とすれば、

平均....25圓×0.2=5.00圓(平均利潤)

限界....27圓×0.2=5.40圓(平均利潤を得た場合の利潤)

であつて、「限界」的資本家は五圓四十錢の利潤を得れば平均利潤を得たことになり、米價が三十二圓五十錢ならば、

27.00圓(生産費)+5.40圓(利潤)=32.50圓

といふ計算の下にまさにそれを得るのだが、米價が三十圓の場合には、

30.00圓(米價)−27.00圓(生産費)=3.00圓

となり、三圓の利潤を得るに過ぎないとは言へ、しかも尙ほ、平均利潤の半額以上の利潤を得ることとなる。換言すれば、平均利廻りの二割に對して、一割一步一厘の利廻りを得てゐることになる。

四

で「限界」生産價格が市場統制的な生産價格であるためには、それは同時に平均的な生産價格でなければならぬ。「限界」生産價格が、平均生産價格から遠ざかれば遠ざかるほど、市場統制的であり得ない。「限界」生産價格は、平均的な生産價格と相容れざるものとして、互に排除するものとして、市場統制的であるのではなく、平均的な生産價格を代表するものとして、まさしくそれに近いものとして、たゞさうしたものとしてのみ市場統制的である。二木氏が、較差地代を論ずる

時のマルクスにおいては最劣等の個別的限界的の耕作地の生産価格が常に統制的市場価格即ち「市場生産価格」或は「平均的市場価格」であつて、これは畢竟の土地の個別的に於ける価値以上にも……矛盾に帰すると主張するそのことこそが、矛盾に帰するといはねばならぬ。そやうに、自らの矛盾にそとしいれたことによつてのみ「資本論の矛盾」を発見し得たところの、他に、二、三氏その人による「資本論」理解の限界が見出される。かくして、「資本論」を矛盾させたのが何人であるかの點もまた次第に闡明しつゝある。

で、たしかにマルクスは、彼れの差額地代の論明においては、地代なき最劣等地の生産価格がつねに統制的な市場価格となつてゐると書いてゐる。と同時に彼れは、正当にも、此の統制的な市場価格となつてゐる最劣等地の生産価格即ち市場生産価格であり、一般的生産価格であつて、しかも平均的な市場価格（販賣価格）に等しいものとなしてゐる。（註一）それが、マルクスの差額地代理論の一前提である。吾々は、正当にもといつた。果して然るか？　吾々がすでに前節に質問したところのものは此の問に答へて正に然りといつて余りある。だが、何にもマルクスに即して答ふべきである。

（註一）例へば、「資本論」第三巻第二部、一八九頁、一九七頁、等。

吾々がマルクスの差額地代論を引用するところの「資本論」第三巻第六篇の諸章は、マルクスがノート風に書き残して置いた草稿を彼れの死後エンゲルスが編輯して整理した部分から成り、ところぐエンゲルスが書き込んだ長文の諸補註によつて漸く纏められてゐる。因に、「資本論の矛盾」を掴め當てようと思ふ者は、願はくば未だ半成形態にある此の第三巻の諸章から第二巻の終りの諸節にまたがる地帯をめざして彷徨すべきであるで。

そのうへにまた、不幸にも、たどたどしい筆では天才を発揮したマルクスは、自明なことや、先人のすでに論定したことがらなどは、惜しげもなく省いてゐる。例へば、差額地代の第一形態を論じた第三十九章の始めにも、これらの段階的

敍述をもつて、次に先づ、リカードその他の學者たちの所論から區別した彼自身の分析の特質を敍述する」とあるやうに。――で、マルクスの較差地代の概念そのものにしても、第三篇の全體を通じて各所に散見する諸規定を綜合して把握するより外はなく、そのいづれかを單獨に取りあげて是れがその定義であると示すことは當を得ぬ。たゞ茲での目的に役立つといふ限りにおいて、最も引用に適するものは、むしろ彼れの「剰餘價値學說史」第二卷(第二部)第二章(三)(c)の冒頭にある次の言葉であらう。

『私は、較差地代を、土地の豐度の差から生ずるところの、地代の量的差異――大小の地代と解する。この較差地代は單に、あらゆる產業部門、例へば紡績部門に於いて、この特定の生產部門の平均的生產諸條件よりも優れた生產條件を有する資本家が、一定の市場價格、一層正しく言へば一定の市場價値の下において取得する剩余利潤に相當するものである。蓋し、特定の生產部面の商品價値は、その個々別々の商品に費された勞働量によつて決定されず、該部面の平均的諸條件のもとに生產されてゐる〔所の〕商品に費された勞働量によつて決定されるからである。この場合における工業と農業との差異は、たゞ、一は剩余利潤を資本家そのものゝ懷に、他はそれを地主の懷に流入せしめるといふ點に存し、更らに前者にあつてはそれが流動して恒常性を得ることなく、或はこの、或はかの資本家によつて取得されてそして絕えずまた失はれるのに、後者にあつては、繼續的な、少くとも長期間繼續するところの、土地の差異なるものの自然的基礎の故に、それが定着する、といふ點に存する。』(一〇頁)

較差地代は、あらゆる產業部門における若干の資本家が得る剩餘利潤と本質を同じうし、たゞ農業においてはその特殊事情の故に定着してそして資本家ではなしに土地所有者に歸するが故に地代形態をとるところの剩餘利潤にほかならず、從つて他の產業部門における剩餘利潤と同樣に、當該部門の平均的な生產條件と、それ以上に、良好な生產條件との差異より生ずる所のものを代表する、といふ此の立場は、「資本論」の地代理論においても完全に一貫せしめられてゐる。そし

て、その平均的な大きさのもの——それが商品に費された勞働量乃至價値であれ、生産費乃至費用價格であれ、或は之に費用價格に平均利潤が加へた生産價格であれ、——その平均的な大きさのものが、つねに市場競爭的であり、その意味において市場價値乃至は市場生産價格をなす、といふ觀點もまた、「剩餘價値學說史」及び「資本論」を通して把持しとほされてゐる。では、さうした市場價値・市場生産價格と、問題の最劣等地生産物の個別的價値・個別的生産價格との關係はどうか？それが如何に較差地代論にあらわれて來るか？

較差地代は、本質において剩餘利潤であり、剩餘利潤と同樣に決定される。從つて、吾々は剩餘利潤論にさかのぼらねばならぬ。

五

マルクスの剩餘利潤の理論は、市場價値・市場生産價格の理論と結びついて展開されてゐる。（「資本論」第三卷第一部第二篇第十章

「市場價値は、一面においては、一生産部門においてつくられる商品の平均價値と觀るべきであり、他面においては、一生産部門の平均的な條件の下に生産されこの部門の生産物の大部分を成す商品の個別的價値と觀るべきである。」即ち市場價値は、いづれより見るも平均的な大きさであり、平均化されたものである。この市場價値は當該生産部門の商品の販賣價値（市場價格）の變動の中心を成す（一五七頁）

「市場價値——（そして市場價値について述べたすべてのことは、必要な制限を加へればみな生産價格についても當てはまる）——その市場價値の中には、特殊の各生産部門において最良の條件の下に生産する人々に歸屬すべき剩餘利潤も含まれてゐる……」（二七八—九頁）

いかにして？　それには三つの代表的な場合がある。

第一、――一生産部門例へば農業において、優良な諸條件の下に生産される商品が全供給の大部分（例へば八〇％以上）を占め、中等及び劣等の諸條件の下に生産される商品は僅少に過ぎざる場合。この場合には、該部門に屬するすべての商品の個別的諸價値の總平均が、優良條件の下に生産される壓倒的多數の商品の個別的價値の平均に近接し、此の後者の大きさが市場價値を規制する。此の市場價値の下においては、劣等條件による諸商品は恐らくその費用價格をさへも實現し得ず、中等條件による諸商品は、それに含まれる剩餘價値の一部を實現するに過ぎないといふことも生じ得る（一五八頁）。言ふまでもなく、此の場合には、剩餘利潤は成立せず、從つて較差地代も生じない。

第二、――優等でも、劣等でもなく、兩極端の中位にある生産條件をもつて生産される商品が全供給の大部分を占め、優等及び劣等の生産條件の下に生産されるものは僅少なる場合。この場合には該部門に屬するすべての商品の個別的諸價値の總平均が、中等條件で生産される壓倒的多數の商品の個別的價値の平均に近接し、此の後者の大きさが市場價値を規制する。然る時は、この市場價値以下の個別的價値をもつ商品は、特別剩餘價値すなはち剩餘利潤を實現し、同時に一方、市場價値以上の個別的價値をもつ諸商品は自己の含有する剩餘價値の一部を實現し得ないであらう。（一五七頁）

優等條件の下にある資本家によつて實現されたる剩餘利潤は、該條件が土地の自然的豐度の如きものであつてそしてかかる自然的豐度を有する優良な土地は面積に制限があり、獨占し得べきものとして存在し、また土地所有を通じて獨占されてゐる限り、該土地を利用することの許容に對して土地所有者に支拂はれ、地代に轉化されて較差地代を形成する。

第三、――優等及び中等條件において生産される商品は僅少であり、劣等の生産條件の下に生産される商品が全供給の壓倒的多數を占める場合。この場合には、該部門のすべての商品の個別的價値の總平均が、その壓倒的多數商品の個別的價値の平均に接近し、此の後者の大きさが市場價値を規制する。――これが吾々にとつて問題の場合である。マルクスは言ふ、

この場合においては、両極端において生産される各商品量は互に相殺することなく、劣等な諸條件の下に生産される商品量が決定的である　嚴密にいへば、各個の商品（又は商品の各可除部分）の平均價格若しくは市場價値は、今や、種々なる諸條件の下に生産される諸商品の價値の合計から生ずる商品總量の總價値によつて、また此の總價値の、各個商品に割當てられる可除部分によつて規定されるであらう。斯くして得られる市場價値は、單に優等な諸條件の下に生産される諸商品の個別的價値以上なるのみならず、また中等的諸條件の下に生産される諸商品の個別的價値以上にもなるであらう。が、それは、劣等な諸條件の下に生産される諸商品の個別的價値に比すれば常により以下であるであらう。それが如何なる程度までこの個別的價値に接近し、また遂にこれと一致するに至るかどうかは、一に劣等な諸條件の下に生産される商品量が當該商品部面に占める範圍の如何にかかつてゐる。需要が僅かでも供給を超過するに至れば、劣等條件の下に生産された諸商品の個別的價値が、完全に市場價格を規制することになる。（一六三頁）

此の場合に、市場價値以下の個別的價値をもつ中等條件の商品は、丁度兩者の差額だけの剰餘利潤を實現し、中等條件の商品の個別的價値よりも更により以下の個別的價値をもつ優等條件の商品は、恰度その差額だけ多くの剰餘利潤を實現し、それの各額は此の最小の個別的價値と市場價値との差額に等しいであらう。土地所有を前提する農業においては、これらの剰餘利潤は地代に轉化され、それぞれの差額が規定する較差地代が成立する。

出來るだけ單純化して例解しよう。一生産部門の供給商品——例へば米の——總量を一〇〇とし、うち八〇は劣等地で生産され、中等地及び優等地ではそれぞれに一〇づゝ生産されるとする。そして劣等地の米の個別的價値の平均は五、中等地の米のそれは四、優等地の米のそれは三とするならば、すべての米の個別的價値の總平均は、四・七であらう。

劣等　五×八〇＝四〇〇　中等　四×一〇＝四〇　優等　三×一〇＝三〇　總計　四〇〇＋四〇＋三〇＝四七〇　總平均　四七〇÷一〇〇＝四・七

此の四・七は即ち劣等地米の個別價値の方に最も接近し、從つて後者は市場規制的である。この總平均乃至は總體平

均――マルクスは此の平均點を理想的・觀念的なものとなしてゐる――と精密に一致した市場價値の下においても、勿論、中等地及び優等地には剩餘利潤が生じ、從つて較差地代は生ずる。が、需要が少しでも供給を超過することによつて、(この點は重要である――後に論及)、市場價値が劣等地の個別的價値の平均と一致して五となるならば、中等地の米は皆度の一の剩餘利潤を、優等地の米は二の剩餘利潤を實現し、精密に各土地の自然的豐度の差異を代表するところの較差地代に轉化されるであらう。そして劣等地には、何等の剩餘利潤も、較差地代も生じないであらう。

以上において、優等、中等、劣等といふ代表的な三等級の土地集團についていはれたことは、四、五、六、乃至はもつと多くの等級の土地集團がある場合にも當てはまる。例へばそのうちの最劣等級の土地集團における生産物が全供給の壓倒的多數を占めるとすれば、その限りにおいて、またその時にのみ、それらの生産物の個別的價値の平均が市場統制的な大きさであり、市場價値を規制する。そしてその市場價値が他のヨリ良き諸等級の土地生産物の販賣價格ともなり、一般的な市場價格となる。

また、『生産價格が市場價値に代つて位置を占めるや否や、以上において市場價値について述べたことは生産價格についても當てはまるやうになる。』(註一) 言葉をかへて言へば、以上に言はれたことについてならば、「市場價値」とあるところを「市場生産價格」と讀み、「個別的價値」とあるところを「個別的生産價格」と讀んで差支ない。

(註一)第三卷第一部、一五八頁

最後に、市場價値・市場生産價格による販賣價格決定は、競爭を通じてのみ遂行される。そしてそれ故にのみ、競爭市場に壓倒的多量を占めて優勢な商品群――たとひそれが最劣等級の土地生産物であらうとも――の個別的な諸價値(乃至生産諸價格)の平均的な大きさは、市場統制的なものとなり得る。

六

上來論述し來たれることによつて、次の事は確定された。

マルクスは、較差地代論において、彼獨自の價値法則の「中樞」たる「平均觀察」を維持するどころか、それを一貫せしめることによつての、較差地代を規定した。まさに此點が、マルクスとリカードとを異ならしめる。「平均觀察」の缺如がリカードの地代論を破滅に歸せしめてゐる時に、實にその「平均觀察」を一貫せしめたことこそが、マルクスの地代論を確乎不動の地位に置く。リカードの「限界原理」は「平均觀察」を排除するものであつたことが、價値法則における矛盾を結果したとすれば、正にその謂はれる「限界原理」を克服したことが、マルクスの價値法則の首尾一貫性を確保せしめた。しかるに、「較差地代の範圍においては、何等の地代も齎らさざる最劣等地の生産價格が、常に統制的に市場價格となつてゐる」といふマルクスの言葉を言葉通りにリカードの「限界原理」を讀み込んだ本位田氏は、マルクスの「平均」を切り落してリカードのシルクハットをかぶせしまつた。マルクスの言葉をマルクスの體系に即して理解しなければ、誤解と曲解は避けがたい。だから本氏は確信をもつて飛んでもないことをいひたてられる──曰く「最劣等の……耕地の生産價格といふのは、此の諸生産者の個別的生産價格のことであつて決して全部門における「平均的市場價格」ではない」。（一七頁）曰く、「……地代論において優等地の價格が最劣等地の個別的生産價格を意味するといふのは、價値論における一生産部門の生産物の價値は市場價値（或は市場生産價格）には同部門の平均によるものと平均化しとする、ものだ」（一五頁）等、等。

で、吾々が此の反批判の目的たらしめた本氏のマルクス批判における第一の主要論點の誤謬は、以上の分析でこれを論駁しつくしたとすれば、それはまた同時にすでに氏の第二の主要論點の誤謬の大半をも明るみへ描出してゐる。では、

如何なる誤謬によつて二木氏は、マルクスの較差地代を『剩餘價値の分野以外』に押しやらうとしたか。

誤謬は極めて稀にのみ孤立的な存在である。わが二木氏における、『限界原理』を中心とする誤謬もまた、すくなくとも他の二つの誤謬と結びついてゐる。吾々がすでに指摘した誤謬を、や、ユーモラスに『限界』的な誤謬と呼ぶならば、もう一つの誤謬は、市場價値の決定における『平均觀察』に關する誤謬であるが故に『平均』的な誤謬と呼んでよく、第三の誤謬は農業生産の剩餘價値に關するが故に——また餘りに粗大なるが故にも——『剩餘』的な誤謬と呼ばるべきである。マルクスの較差地代を剩餘價値の分野以外に押し出したものは、マルクスではなくて、此の誤謬の三位一體である。

七

市場價値(乃至市場生産價格)は、或る大きさを代表しなければならぬ。それは先づ、一生産部門のすべての商品の個々別々の價値(乃至生産價格)の總平均と見做し得るし、また見做さねばならぬ。だが、さうした大きさ、——その總平均が直ちに市場價値であるのではない。一面においてはたしかに或る大きさを意味するところの市場價値(市場生産價格)は、他面において、無意識的且つ無計畫的に、社會的に遂行されるところの社會的行爲——客觀的には即ち市場過程・競爭過程——の成果である。この行爲、この過程は、その成果として、一定種の諸商品の販賣價格を、それらの個別的諸價値の總平均の大きさに一致せしめんとする傾向を自身のうちにもつ。後者の大きさにおける變化は、需要供給の不斷の波潤を通じて結局、前者の大きさにそれ相應な變化をひきおこす。これらの意味において後者は前者を統制し、規制する。かやうに統制され、規制されつゝ、かの『社會的行爲』の成果として現はれるものが市場價値(乃至市場生産價格)である。それ故にまた、當の『社會的行爲』が『無意識的且つ無計畫的』なることの必然の結果として、それの成果として現はれる市場價値(乃至市場生産價格)は、たゞ例外的・偶然的にのみ個別的な諸價値(乃至諸生産價格)の總平均——理想的・觀念的な

もの——と精密に一致する。言ひ換へれば、兩者の一致ではなしに兩者の近似こそが、即ち兩者の間の若干の不一致こそが、——更に言ひ換へれば、市場價値（乃至市場生產價格）における若干の偏差の存在こそが、常態である。かゝる偏差は、それ自身一定の方向を持たぬとはいへ、特殊の諸條件の下においては特定の方向に定着するであらう。が、いづれにせよ、偏差の存在は、それ自身寧ろ「價値法則における平均觀察」を傷つけぬばかりでなく、却つて「平均觀察」によつてのみ認識される。同樣に、定着的な偏差の成立は、寧ろ「平均觀察」との矛盾を構成しないばかりでなく、まさに「平均觀察」そのものを通じてのみ究明せられねばならぬ。

かゝる「陳腐」な眞理は、矛盾指摘の新人二木氏の「平均的な誤謬」さへなかつたら、こゝに繰り返す必要はなかつたであらう。

二木氏によれば、マルクスによつて市場規制的とされてゐるところの最劣等地の生產價格・市場價値は、斷じて、本來の意味における「市場生產價格」・「市場價値」ではあり得ない（一七頁）。何故なら、前者は、個別的諸價値の總平均——即ち純計平均。乃至は理想的・觀念的な平均——とは斷じて精密に一致しないから!! マルクスの價値理論における平均觀察と限界原理との矛盾の指摘の論據として、わが二木氏が斯く解釋することの出來るのは、一つにはたゞ、マルクスにあつての「最劣等地」は常に全耕地の大半を占めてゐることを忘れ、從つてそれがほゞ平均的な生產條件を有つことを忘れたところの、彼の「限界的な誤謬」の故であり、二つにはたゞ、觀念的・理想的な大きさとしての市場價値・市場生產價格の一面に囚はれて競爭行爲の成果としての他面を忘却し、從つて偏差の存在を忘却し、——況やそれの定着化などには思ひも及ばなかつたところの、「平均的な誤謬」の故である。

氏は、此誤謬の色眼鏡をかけて、マルクスの謂ゆる「虛僞の社會的價値」の眞實の意義を見究めようと企てたのである!!

吾々は、二木氏がことさらにマルクス地代論のうちから拾ひあげた一つの例解を分析することによつて、氏の誤謬を徹底的に暴露し得るであらう。

例解――假りにいまABCDの四種の土地群があり、小麥一クオターの價格は六〇志で、平均利潤率は二割、Aは最劣等地として五〇志の投資をもつて一クオター(即ち六〇志)を産出し、同額の投資をもつてBは二クオター(即ち一二〇志)、Cは三クオター(一八〇志)、Dは四クオター(二四〇志)を産出するとする。較差地代の規定においては、市場統制的な最劣等地Aの生產價格――投資五〇志プラス平均利潤一〇志――と平均的市場價格とは一致し、且ついづれのクオターもみな此の價格で賣られることを前提するから、次の如き狀態が生ずる。

各等級の土地	供給の小麥(クオター)	同上の資價	同上の生產價格	一クオーター當生產價格	地代
A	一	六〇志	六〇志	六〇	―
B	二	一二〇志	六〇志	三〇	六〇志
C	三	一八〇志	六〇志	二〇	一二〇志
D	四	二四〇志	六〇志	一五	一八〇志
合計	一〇	六〇〇志	二四〇志	(平均)二四	三六〇志

そこでマルクスは曰ふ――「較差地代について總じて注意すべきことは、市場價値が常に生產物總量の生產價格總計よりも大なることである。例へば「右の表」に就いて見るに、一〇クオターといふ總生產物が六百志に販賣されるのは、市場價格がAの生產價格(一クオター當り六〇志)によつて決定されてゐるからである」。ところで、「一〇クオターの實際の(wirkliche)生產價格は二四〇志である。然るに、それが六〇〇志で賣られる。即ち二五〇パアセント高く賣られる。ま

た、一クオター當りの實際の平均價格は二四志である。然るに市場價格は六〇志であるから、これも矢張り、二九〇パアセント高く賣られる」(第三卷第二部、二〇〇頁)

右において、マルクスが、『然るに市場價格は六〇志であるから』といつてゐる時の「市場價格」は、言ふまでもなく、かの純正平均乃至は觀念的・理想的な平均によつて統制されつゝ、定まれるところの、即ち競爭的・社會的行爲の成果としての、一單位當り市場價值(市場生產價格)と同一のものを指してゐる。また、マルクスが右に於いて「市場價值(六〇〇志)」が常に生產物總量の生產價格總計(二四〇〇志)よりも大であるといふ時の「市場價值」は、そのやうにして定まれる、またさうした成果としての一單位當り市場價值(六〇志)の一〇單位分、即ち市場價值總額を指してゐる。そしてマルクスが茲で問題にしてゐるのは、それらの市場價值總額乃至は一單位當り市場價值と、實際の生產價格總額乃至はその一單位當り平均(即ち實際の平均價格)との差異である。言葉を換へて言へば即ち、市場價值に含まれる偏差が問題にされてゐる。

然るに、二木氏は、マルクスの言葉尻を捉へて言はれる、——「こゝでは」、「市場價值」が全然(!)違つた意味のものとなつてゐる」(一七頁)「彼が先きに第一卷に於ける價值と殆ど同一物なるかの如くに(??)扱つてゐた市場價值を、茲では「現實的生產價格」或は「現實的平均價格」と呼び、而して本來市場價值でないものを市場價值と呼んでゐると。(一八頁)

では、何故に、マルクスが茲で市場價值として扱つてゐるものが、二木氏には市場價值以外のものに見えるのか? 市場價值をば單なる大きさとして、しかもひとへに理想的・觀念的な總平均として、一面的にのみ把握することが、二木氏の市場價值理解の「限界」だからである。(一)理想的な總平均は二四志だのに、そしてそれのみが市場價值だのに、茲でマルクスのいふ市場價值はそれと異つてゐる。従つて市場價值ではあり得ない——、たゞそれだけの素朴なこと。(二)理想的な總平均の二四志=二木市場價值だのに、マルクスは不當にも(!)これを「現實的生產價格」と呼んでゐる——、たゞそれだけの素朴なことと(しかも、その素朴な斷定のうちには何ら、かの競爭的・社會的行爲の成果としての市場價值六〇志に對して

マルクスは正當にもかの二四志をば實際の生産價格と呼んでゐるのを、わざと「現實的生産價格」などと讀み紛らかすやうな「現實的」な誤謬さへが含まれてゐる)こゝで、「市場價値」なる概念を、その抽象的な大きさとしての一面、社會的行爲の成果としての一面、等、等のすべての面の統一として把握することなどは、いたづらな「矛盾」指摘者流には全く無緣でなければならぬ。

「限界的な誤謬」と「平均的な誤謬」とを一双のレンズとする誤謬の眼鏡をかけてマルクスを讀んだ二木氏としては、問題の例解においてたま〳〵市場價値の偏差が六〇志と二四志といふ大なる開きを見せてゐることからしてもまた、二つ何か代表するものを全然別個の範疇と見誤るのは容易であつた。だが、この餘りに大なる開きは、たゞ、すべてに例解が必要とする單純化の結果として數字上に現れて來た誇張の一に過ぎない。(註一) 吾々がすでに幾度か指摘したやうに、マルクスにあつては、最劣等の――こゝではA種の――土地の生産物が全供給の壓倒的多數を占める時にのみ、それの生産價格は市場統制的であり得る。然るに、このA級の土地生産物の數量的優位は前掲の例解では全く度外視され、BCD諸級の九單位に對してA級は僅かに一單位と假定されてゐる。かゝる單純化は、それ自身では不當ならずとは言へ、すでにその單純化から結果した偏差の誇張を惡用する「批判」者が現れたからには、吾々はそのA級の數量的優位をも取入れた例解を持つ必要がある。

(註一) マルクスの例解の數字に關する此種の誇張については、地代論の草稿を整理したエンゲルスも述べてをり、且つ一層適切な數字に變更した例解をつくつて補正してゐる。例へば二五〇頁及びその前後を見よ。

そこで、生産物の實價は前例解の通り六〇志とし、ABCD各土地の一單位(例へば一エーカー)の生産物もまた前例解通りにそれ〴〵一、二、三、四クォーターと假定しつゝ、たゞA級の土地群が全耕地面積の大半を占めるために、此の最劣等の土地生産物は全供給の壓倒的多數(例へば約八〇%)を占めるといふ場合を想定するならば、次の如き結果を生ずる。

各等級の土地	一エーカーの供給	各土地の面積	總供給	同上の賣價	同上の生産價格	一クオーターの生産價格	地代
A	一クオーター	六四エーカー	六四クオーター	三八四〇志	三八四〇志	六〇志	—志
B	二	二	四	二四〇	一二〇	三〇	一二〇
C	三	二	六	三六〇	一二〇	二〇	二四〇
D	四	二	八	四八〇	一二〇	一五	三六〇
合計	一〇	七〇	八二	四九二〇	四二〇〇	(平均)五一强	七二〇

即ち、マルクスの例解においては單純化の必要上しばらく度外視されてゐたところの、市場規制的な最劣等地生産物の數量的優位を計算に入れた場合には、一クオーターの平均的な生産價格五一志強のものが其の一割六分高の六〇志で賣られ、合計八二クオーターの小麥は、個別的な生産價格乃至は價値の總計四二〇〇志のものが同じく一割六分高の四九二〇志で賣られ、恰度その差額に當る七二〇志が較差地代の合計として土地所有者の懐に入ることになる。

此の場合には、市場價値(乃至市場生産價格)の觀念的・理想的な大きさをなすところの、筆者の所謂「總平均」の大きさはもはや二四志ではなくして五一志強である。此の五一志強は、Dの個別的價値乃至生産價格の一五志、Cの二〇志、Bの三〇志のいづれからも著しくかけ離れ、Aの個別的價値乃至生産價格の六〇志に近接する。これは、二つのことを同時に示す。即ち、一方では、A地生産物の數量的優位の故に、その個別生産價格が、市場價値・市場生産價格の——理想的・觀念的な——大きさは、決定的に自己の大きさに近づけしめることを示すが、しかし他方では、競爭的な社會的需給[illegible]市場價格は、此の觀念的・理想的な大きさとしての市場價値乃至は市場生産價格五一志[illegible]

て、所要の補充を施した各々の例解は、[illegible]問題にしたところの、市場價値たるもの[illegible]の理想

的な決定點を中心としてその近似點に定まれる市場價格以外の何物でもないことを、此上もなく明瞭ならしめた。そしてそれこそが『本來の市場價値』である。それは、當然にも偏差を含める市場價値であり、その偏差は、こゝでは一クォーターについては九志弱に當り、總計八二〇クォーターについては七二〇志となつて、これが恰度較差地代總額と一致する。

こゝにかうした特殊の偏差を含める市場價値を見るのは、言ふまでもなく先づマルクスの言ふ通り、『市場價格が、A(そのもの)の生產價格(六〇志)によつて決定されてゐるからである』。一層嚴密に言へば、理想的な平均點と一致するよりは寧ろAそのもの、生產價格に一致するものと、あらかじめ前提されてゐるからである。問題は、——言葉尻や數字の大小のそれではなくて、——かく前提することが果して理論的に正當か否かにかゝつてゐる。マルクスの『較差地代の第一形態』の分析・說明は、常にその前提から出發する。それは正當か? 今や吾々は、さきに提起して置いた此の問題に、最終決定的な解答を與へ得る時機に達した。

筆者の知る限りでは、此の特殊の問題に對して、マルクス自身は「個別的」な解答は與へてをらぬ。(それは、前記の如く地代論の諸章がノート風の草稿として遺されてゐるからに違ひない。) だが、『資本論』の全體系がはつきりとそれに答へてゐる。

當の前提は全面的に正當である。何故かといふに、(一)理論的に規定さるべき較差地代は、その最も典型的な姿において把握せられねばならぬ。較差地代は、中等級の土地群の壓倒的優位の下にその生產物の個別的價値が市場價格を決定する場合でさへも、生じ得ることを吾々は前に見た。最劣等級の土地群の壓倒的優位の下に、市價價格が理想的な市場價値と一致する場合には尙更ら較差地代は生じ得る。だが、同じ事情の下に、市場價格が理想的な市場價値・市場生產價格から偏倚(デヴィエート)して最劣等地の個別的價値・生產價格そのものに一致した時にこそ、較差地代はその最も典型的な姿、最も發展したる完成態において現はれる。蓋し、その時にこそ、土地の自然的豐度の差異をあらわす大小の地代としての較差地代が、

不耕地にわたつて少しも求められずに浮び出るから。

(二)では、問題の偏差を成立せしめ、また、その上位偏差を常態化するやうな特殊の條件が農業に存在するか？　吾々は、マルクスの市場價値・剩餘利潤の理論における第三の場合において、『需要が少しでも供給を超過するに在れば、不利なる諸條件の下に生産される諸商品の個別的價値が市場價格を規制するであらう』ことを見た。最劣等地の生産物が、その數量的優位の故に市場規制的であり、市場價値乃至市場生産價格の理想的な決定點は最劣等地の個別的價値乃至生産價格に接近してたゞ僅かだけその下位に存在し、從つて販賣價格もまた競爭を通して遂にその理想的な決定點に落ちつかうといふ狀態にまで達した時、その販賣價格は、特別の突發的な阻止的事情に妨げられない限り、農産物の供給は需要の恒常的増加に追隨し得ざることのために、即ち、追加される新需要が多少とも供給を超過せんとする傾向のために、かの理想的な決定點を越えて最劣等地の個別的な價値乃至生産價格そのもの、高さにまで高まらざるを得ない。茲にいふ、需要が供給を超過せんとする傾向とは、年の豐凶や景氣の變動などによる一時的な需給の喰ひ違ひを指すのではなく、耕作の平均的需要が農業生産の平均的供給を超過せんとする恒常的な——無論相對的な意味においてのその——傾向を指す。かかる傾向は、土地所有そのものが、新しき土地の自由な供給を妨げることから生ずる。言ひ換へれば、もしも地代を拂はなくてよいならば、直ちに耕作されるであらうところの、廣大な面積の土地が存在する（註一）ことから生ずる。吾々の例解について言へば、A級以下の未耕の土地の所有者等は、所持の最劣等地以下の劣等地たる自己の土地にも地代をもたらすほどの高さに穀物價格が高まるまでは耕作を許容せず、それ故に土地生産物の平均的供給を平均的需要以下に止まらしめる。これこそは、『絶對地代』（註二）の成立及び存在の根據である。土地なる要素が農業生産において特殊の重要性を持つ限り、そして此の要素の私的所有が存在する限り、絶對地代の成立は必然であると同時にまた、吾々の指摘したる市場價値・市場生産價格の上向偏差を常態化するやうな價格運動傾向もまた必然性を持ち、法則性を持つ。（註三）

この點はこれまで見逃されてゐた。それだけに特に重要である。リカードは、彼れの誤れる價値理論に基いて、最劣等地生産物の生産價格はその價値に一致するといふ致命的な前提から出發したために、絶對地代を全く否定せざるを得なかつたのみでなく、較差地代論にさへ多くの破綻を生ぜしめた。しかるにマルクスは、その價値理論の正しさと、土地所有の役割の正しき認識との故に、たゞに絶對地代を規定し得たのみならず、まさにリカードに缺けてゐるところの、平均的觀點と「限界」的觀點との統一によつて、較差地代論を擴充した。實に、マルクスにおいて始めて地代論の實質的完成を見る所以である。

(註一)、ニューマン「經濟學講義」、ロンドン、一八五一年。一五八頁。

(註二)、「絶對地代」とは、土地の優劣の差とは無關係に、單に土地の私的所有そのものによつてつくり出される地代である。從つて絶對地代はつねに最劣等地に於いても生ずる。吾々の例解における最劣等地にも絶對地代はすでに生じてゐる譯なのだが、問題を較差地代の究明に限定してゐるために、方法上、度外視して來たものにすぎない。

(註三)、言ふ迄もなく、農業勞働の生産性の急激なる增大、新開國からの低廉な穀物の大量的輸入などは、此の價格變動傾向を妨げる。ことに後者の如きは、直ちに較差地代の激減乃至は消滅をさへをひきおこす。だが、吾々がいま問題にしてゐるのは、較差地代の成立の條件であり、しかもその典型的な場合であつて、減少や消滅の條件ではない。成立の條件が先づ純粹な形において規定された上でなければ、減少や消滅の條件はこれを問題にすることさへも不可能である。

九

で、吾々は、(第一形態の)較差地代を規定するためには、最劣等地の生産價格が市場價格を決定するといふ前提から出發してよいのみならず、また實に出發しなくてはならぬ。

だが、すでに此の前提から出發するとすれば、そして更に最劣等地の生産價格が社會の一般的生産價格に等しいと前提

するとすれば、『較差地代は、一般的な生産價格のうちへ、それを決定するものとして入込むのではなく、却つて此の生産價格を前提する』といふことは自明である。その點が、差額地代を絶對地代と異ならしめる。絶對地代は、一般的な生産價格のうちへ、それを決定するものとして入込んで行く。蓋し、絶對地代は、最劣等地にも生じ、これを取得する土地の土地所有みづからが農産物の供給增加を妨害して價格を高め、もつて自己の地代をつくり出すことによつて生ずる。しかるに、最劣等地には存在しないところの較差地代は、それを得る土地の土地所有みづからがつくり出すのではなく、一般的生産價格と一致する最劣等地生産價格の市場支配が、より優良な土地のみの資本の剩餘利潤をつくり出し、それらの土地の土地所有がそれをたゞ地代に轉化したものに過ぎない。未耕地の土地所有者が自己の土地の絶對地代をつくり出す行動の故に生ずる需要超過が、市場價値(市場生産價格)の上位偏差を生ぜしめ、最劣等既耕地の生産價格に市場價格を一致せしめるにしても、この一致を前提として成立する較差地代が、絶對地代同樣に、一般的生産價のうちへ、それを決定するものとして入込むといふことは、物理的に不可能である。

では、較差地代として土地所有者に取得される價値、——マルクスの前掲例解においては六〇〇志と二四〇志と差額(三六〇志)に當り、各々の擴充した例解にあつては四九二〇志と四二〇〇志との差額七二〇志に當る價値は、社會的には如何なる價値か？　マルクスは、それを「虚僞の社會的價値」と特徴づけた。彼は曰ふ——

「較差地代について注意すべきことは、市場價値が常に生産物總量の生産價格總計よりも大なることである。——『これ即ち資本制生産方法の基礎の上に競爭を通じて遂行されるところの、市場價値(乃至市場生産價格)による決定であつて、かゝる決定のために一の虚僞な社會的價値がつくり出される。この虚僞の社會的價値は、土地生産物が支配を受けるところの市場價値の法則から生ずる。』」(資本論第三卷第二部二〇〇頁)

そこで二木氏は「得たり」と曰ふ——

「〔それは〕確かに價値の社會的價値である。何となれば其れは彼れの價値論において商品の價値量を決定するものとされてゐた社會的に必要な勞働量とは全く關係がない(!)からである」(一八頁)――〔マルクスの較差地代論においては〕、農業物の生産價格は、……常に市場價値、價値、社會的價値、或は平均價値以上(!)の價格でなければならぬ。從つて此の較差地代の社會的總額は此の生産部門に於ける剩餘價値の社會的總合量を超過する(!)部分となる……」(一六頁)――「一般的な生産價格を……前提とする樣に〔マルクスの〕較差地代は、當然に價値の社會的總量以外(!)の量でなければならぬ。斯くして較差地代を剩餘價値から導かんとする論據が撤去(!)せられる。再びリカードに歸る(!)べきか。」(一八頁)

かくて氏は、リカードのシルクハットをマルクスにかぶせただけでは物足らず、『再びリカードに歸るべきか』と誘惑する。と同時に氏は今や、最後に殘つた粗大なる「剩餘」的誤謬にも手をさし伸べる。

リカードの地代論にあつては、一般生産價格と一致するところの最劣等地生産價格は、更にその生産物の價値に一致する。マルクスにあつても同樣に、――と二木氏は言ひたげである。否な、事實において、言つたと異らぬ。だが、マルクス地代論の特質は、彼れ獨自の、唯一の正しき價値理論體系の故に、正にさうした最劣等地生産價格が價値と一致しないことにある。價値以下なることにある。それ故にこそマルクスは、絶對地代を認識し、規定し得た。しかるにリカードは絶對地代を否定した。否な、彼れの誤れる前提の故に否定するの余儀なき破目に陷つた。最劣等地生産物の生産價格が價値と同額であると前提しながら、その生産價格のうちから地代が支拂はれる――(それが絶對地代である)――ことを承認すれば、當の生産價格は價値以上のものでなければならず、地代となれるその超過部分の價値は、商品價値決定上の社會的勞働量とは全く無關係のものとなり、價値の社會的總量以外のものとなり、剩餘價値の轉化ではなくなり、價値でないものとなるからである。

で、わが二木氏が、マルクスの較差地代においては穀物價格が理想的な總平均(五一志强)に定まらずして最劣等地生産

價格云々の意に定まる以上、その生産價格は價値を構成するものとなり、その超過部分に當る地代は、價値決定上の社會的必要量とは全く無關係のものとなり、従つて勿論、餘剩價値以外のものとなり、まさにその意味においてのみ、虚偽の價値一であらねばならぬ、と考へたのは、——すでに指摘した氏の二大誤謬に加ふるに、また、最劣等地生産價格は價値に等しい(!)か若しくは價値以上にある(!)と見る粗大な誤謬が積み重ねたものでなければならぬ。それが「剩餘」的な誤謬である。此の最後の誤謬に於ける二木氏その人は、リカードに歸るべきかどころか、とくにリカードに歸つてゐる。

マルクスにあつては、最劣等地生産價格は價値と一致せず、まして價値以上などではなく、却つて價値以下にあるといふことは、マルクスの利潤率平均化の法則の必然的な歸結である。二木氏その人は、さきには此の利潤率平均化の法則及びその一系としての生産價格の成立を承認し、それがマルクスの價値法則の矛盾一ではなくて發展であることを率直に承認し、マルクス「批判者」としての一大進歩を見せたかに見えた。然るに、二木氏は、その利潤率平均化の法則を認識することが今や氏のマルクス理解のために最も必要となつて來た恰度その時に、一度それを認識し得しめた眼鏡をポケツトへしまひ込み、何處かで拾つた誤謬の色眼鏡にかけかへてゐる。それとも、前の認識・理解・承認そのものが、似て非なるものであつたのか……。

さて、「市場價値」と「市場生産價格」——此の二つのものは、吾々がこれまでの如く剩餘利潤の發生・増減といふ觀點からそれらを扱つてゐる限りでは、互に置き代へられ得る概念である。——世界經濟の關する限りでは、資本主義と帝國主義とは同意語ですらあり得る。だが、個々の國民經濟に就いてなら、兩者は別個の範疇である。子供に對する限りでは、妻と夫はともどもに親であるが、第三の特殊の男性に對する觀點からは、夫と妻が對立する。と同じやうに、一度吾々が觀點をかへ、今や剩餘價値の實現及び社會的配分の見地から、「市場價値」と「市場生産價格」とを扱はねばならぬとなれば、吾々は此の二範疇の共通面よりはむしろこの差別面をはつきりと頭に置かねばならぬ。

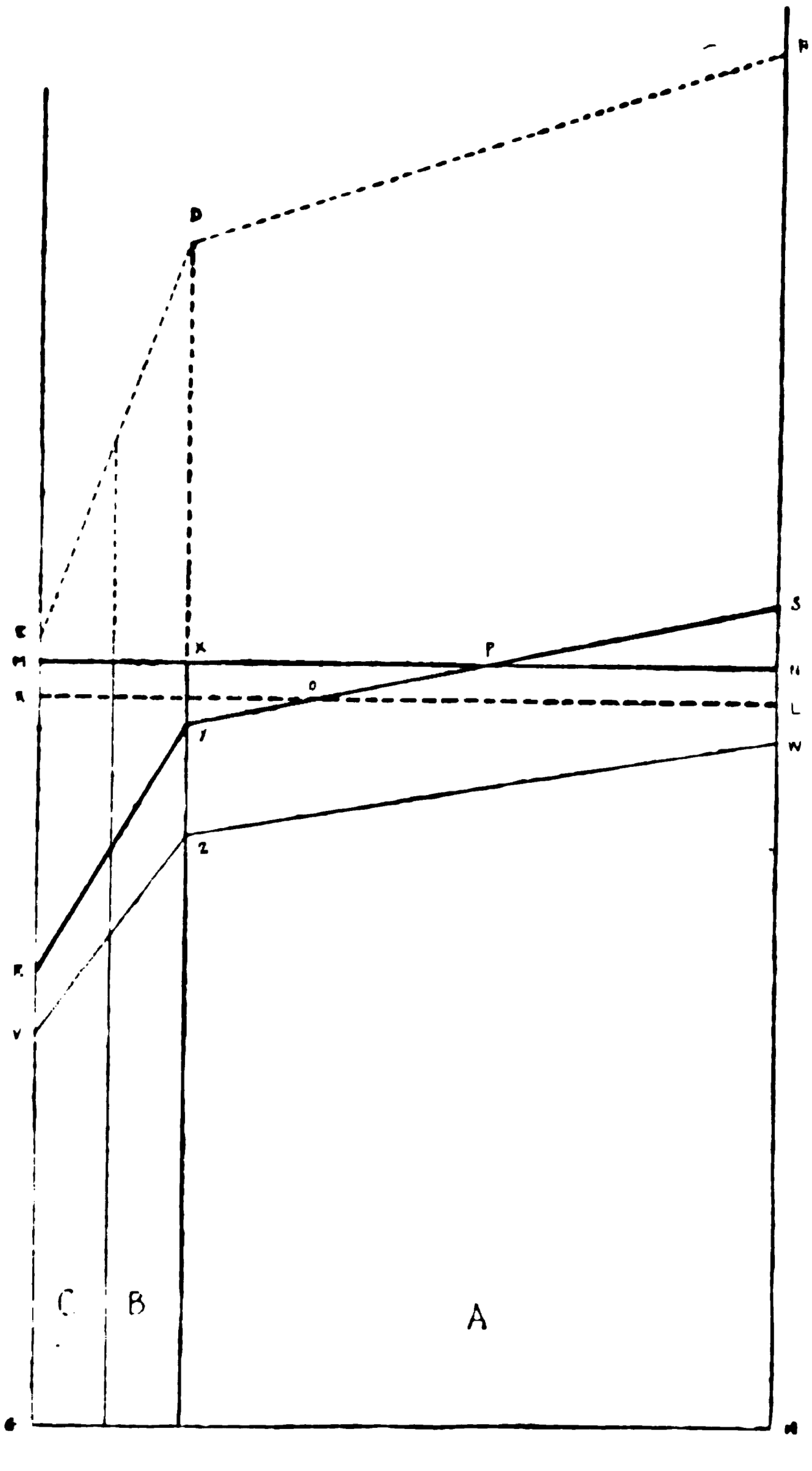
歴史的にも、理論的にも、市場價値は市場生産價格に先行する。前者の支配の下にあつては「等量勞働に對して等量價値を」が實現せんとする。然るに市場價値に代つて市場生産價格が支配するに至れば、「等量資本に對して等量利潤が」が、換言すれば利潤率の平均化が、實現せんとする。今や、すべての生産部門間の資本の競爭の下に、剩餘價値の社會的總額は、社會の總資本に平等に分配されんとし、低位の資本構成を有する產業諸部門に成立した比較的多量の剩餘價値は、その實現の過程において、高位の資本構成を有する產業諸部門へと流れ、その諸資本に歸屬する。

較差地代の規定にあつては、この一般利潤率の支配が、從つて一般生産價格の成立が、前提されてゐる。そして、最劣等地の生産價格が此の一般生産價格に支配されると前提することは、資本構成の低位なる農業において比較的多量の活きた勞働——剩餘價値をつくる勞働——がつくり出した比較的多量の剩餘價値が、(讀者よ、問題はこれだ、)その實現の過程において他の高位資本構成の產業諸部門へと流れてその諸資本に歸屬してゐることを、前提するものである。といふことは即ち、一般生産價格＝最劣等地生産價格で賣られる農產物が、その價値以下で賣られてゐることを前提するものである。更に言ひ換へれば、他の產業諸部門との間に利潤率の平均化が行はれなければ當然に實現するであらうところの價格では賣られずに、それ以下で賣られてゐることを前提するものである。

かゝる事情の下に生ずる較差地代は、まさに農業剩餘價値の分野内にあり、必然的にその一部をなさねばならぬことは、次のダイアグラムが幾何學的な直截さをもつて示すであらう。

底線GHは、農產物（穀物の如き）の總量を代表し、GからHに至るに從つて優等地（C地）の生産物から次第に劣等地（A地）の生産物へと順次に排列されてゐるものと想定せよ。EDFは、これら生産物の價値の高さをあらはし、從つてEDFHGは、農業物全體の價値總量である。いま、VZWをもつて費用價格の高さをあらはせば、VZWHGは費用價格總額を、EDFWVは剩餘價値總量を示すであらう。然るに、平均利潤率・一般生産價格の支配が前提されたから、生産

價格の高さをあらわす線は、EV、DZ、及びFW高線の中間を貫いて例へばRYSとしてあらはれる。然る時は、RYSWZVは、農產物がおの〳〵その個別的生產價格、――マルクスのおの言葉で言へば「實際の生產價格」をもつて賣られる時に生ずる利潤の總額を表はすことになる。これは、各商品に一般的平均利潤を與へるものである。と同時に一方、EDFWZVであらわされた農業剩餘價値總額のうち、EDFSYRに當る部分は、產業諸部門間の競爭による價値實現



の過程において、農業以外の諸產業の資本に歸すべき部分に外ならぬ。

いま、ＲＹＳ線上のＯが、個別的生產價格の總平均即ち理想的な平均點であるとする。農產物の販賣價格が此の點（即ち前の例解の五一志強）に定まれば、點線ＫＯＬは、すべての土地生產物が——實際の生產價格の大小を問はず——一樣に賣れる價格の高さを示すであらう。此の價格で賣られるならば、最劣等地上位の一部の生產物と、中等・優等地の生產物は剩餘利潤を生じ、それが較差地代に轉化される。ＫＯＹＲがそれである。此のＫＯＹＲは、言ふまでもなく、農業剩餘價値の分野內にあり、その總量ＥＤＦＷＺＶの一部に過ぎない。だが、それと同時に他方では、最劣等地生產物のかなりの部分は、此の價格で賣れば平均利潤の一部を失ふことになる。この失はれたる利潤部分の總額は、ＯＳＬに當り、その大きさは、恰度較差地代の總額ＫＯＹＲに等しい。從つて、農業剩餘價値の全體について見れば、一部の農業資本家の失ふ利潤が一部の土地所有者に歸して地代となるといふだけで、他の諸產業の資本に歸すべき農業剩餘價値の部分は不變である。言ひ換れば、此の場合に生ずる較差地代は、剩餘價値の社會的歸屬に變化をひき起さない。

しかるにもし、市場生產價格にＭＫだけの偏差が生じ、農產物の價格がＰ點に定まり、最劣等地平均の生產價格（前の例解の六〇志）に一致するとすれば、販賣價格は一樣にＭＰＮ線の水準にまで高まるであらう。此の場合には、較差地代の總額は增大してＭＰＹＲの大きさになる。が、同時に他方では、最劣等地下位の生產物の失ふ利潤部分は減少してＰＳＮとなり、この大きさは今や、最劣等地上位の生產物に生じる較差地代ＸＰＹの大きさと恰度等しいから、最劣等地全體として見れば、一部の地主の得るところは即ち一部の資本家の失ふものに該當し、平均すれば全體としての最劣等地には何等の較差地代も生ぜぬことになる。較差地代を生ずるのは、たゞ、ＢやＣの中・優等地の生產物のみであり、その地代總額の大きさは即ちＭＸＹＲである。これが、前の例解の二六〇志、吾々の例解の七二〇志に當る。この典型的な較差地代は、前の場合と異なり、一部の農業資本家の失ふところの剩餘價値を地主が得るのでなく、他の產業部門の資本家に歸屬すべ

きもの、一部を地主が得ることになる。しかもそれは、依然として農業に生じた剰餘價値そのものであり、その總量の一部であり、その「分野」内にあることは、日本帝國が地球内にあるのと同じやうに自明である。

で、價値は社會的に必要な勞働量によつて決定されるといふ價値法則が、地代法則の基底をなし、中軸をなしてゐる。價値の法則によつて先づ農業生産物の價値總量（EDFH）が決定されるが、すべての産業部門間の資本の競爭といふ特殊の條件の下に價値法則が自己を徹底せしめることの結果として、農業資本に歸屬すべき社會的價値部分は今やRYSHとならなければならぬ。が、また、資本制生産方法の基礎の上においては、勞働の社會的性質はたゞ同種商品に同一價格といふ仕方においてのみ自己を實現せざるを得ないから、市場生産價格の支配下に一定の個差を持てるMPNHは該當のものが本質的に資本歸屬分となる。較差地代は、此の歸屬分のうちからの地代轉化部分に外ならぬ。かくして、地代法則は、價値法則の發展であり、價値法則からのみひきいだされてゐる。

較差地代が形成する價値は、不合理的見解が認めたやうに、それ自身、優等地の價値、なのではない。反對に、まさしくそれは農業部門における社會的勞働によつてつくられてゐる。また、まさに農業生産そのものに生ずる剰餘價値の一部でもある。が、それにも拘らず、それは社會的には一の市場の價値である。市場價値の社會的歸屬の決定上、農業資本・農業經營上に歸屬すべからざるものの、市價下の歸屬だからである。一の消費者として見た社會が、——當の土地所有者以外の社會が、不當分、農産物に對して餘分に拂つたそのものが、即ちそのマイナスが、土地所有者にとつてプラスとなる。このプラスが較差地代であり、そのマイナスは、商品社會がその社會的勞働時間を、商品交換を通じて、土地生産物の形態で實現するに當つてのマイナスである。較差地代なくしては、在り得ることのない[illegible]

を得べきところを四しか得ぬ」地主にとつてはプラスをなし、個々の全社會にとつてはマイナスをなすところの或る一六、虚偽の社會的價値である。

だが、虚偽の社會的價値の成立が、またその大きさが、農産物の價格を一定の高さに決定するのではなく、農産物の價格が一定の高さに決定された時に虚偽の社會的價値が成立し、その大きさが決定する。これは、競爭を通じて同種商品〃同一價格の原理が支配する結果に過ぎない。だからマルクスは、虚偽の社會的價値を成立せしめるものは『市場價値による決定』であるといつた。此の場合の『市場價値』は、「市場生産價値」と讀んでもよい。兩者に共通なことは、同種商品〃同一價格の原理を通じて剩餘利潤を生ぜしめる點にあるから。が、しかし、此の「原理」、此の「決定」は、資本制生産といふよりは、むしろ、商品交換制の生産——即ち市場價値現象の物質的基礎——そのものに根ざしてゐる。マルクスが特に『市場價値』といふ言葉を用ひたのは、此の一層根本的な意味をもこめてゞある。

現在の生産方法を維持する限り、例へば土地國有によつて較差地代はすべて之れを國家の手に納めたとしても、たゞそのことの故に農産物の價格は變化せぬ。また、商品交換の生産制をつゞける限り、地代に轉化し得べき剩餘利潤は成立する。だが、一度社會が意識的・計畫的な社會協同體に——即ち社會主義社會に——組織され、商品交換制が撤廢されるや否や、虚偽の社會的價値もまた消え失せる。

誰が「資本論」を矛盾させたかは明かである。吾々は、「資本論」の批判者の網膜に映じたまゝの「平均觀察と限界原理との矛盾」そのものから發足した。吾々の反批判的分析の進行の一歩々々は、此の倒立の「矛盾」を解消せしめ、その一切を、批判者自身の誤謬の三位一體の空しき殘骸に還元した。そして崩れゆく矛盾の蜃氣樓に代つて今や、平均的觀點と限界的觀點との統一が、價値法則と地代法則との統一が、最前面に現れてゐる。それが、「資本論」の現實の姿である。

三木氏の論文は、マルクスの價値理論に關して偶ゝ若干の疑問を述べてゐる。だが、それらの疑問は、吾々が本論文において指摘し批判したところの氏の誤解や誤謬と同様に、「資本論」を讀返し讀返すことによってひとりでに消えさる筈のものである。でなければ、それらの疑問は、「資本論」は間違ってゐると頭から極めてかゝるが故の疑問でなければならぬ。そしてもしも後者の性質のものならば、吾々はたゞ氏の論文なるものが、「マルクスの價値法則そのものに既に初めから勞働者階級の被搾取、被搾取を理論づけようとする動機が潜在してゐたか否か」を問ふことを、な、最初からの「動機」として書かれたものであることを知るのみである。

「資本論」を正視することの恐怖——この不思議な恐怖が、一様に反マリキスト的學者・論客を捉へてゐる。此人達は、その不思議な恐怖にうち克たんとして既得の社會的地位を賭す代りに、既得の社會的地位をまもらんがために「資本論」の妖怪と戰ってゐる。——プロレタリアートは起った。感傷主義者でない者はみな戰ふであらう。感傷主義者さへ感傷的な仕方で戰ふであらう。たゞ、結局の勝ち戰をたゝかふか、結局の敗け戰をたゝかふかである。（一九三〇、一、一）

日本銀行の市場統制力

田中金司

一　はしがき

我國に於ても近時民間大銀行の異常なる發達に伴ひ金融市場に於ける日本銀行の將來が漸く問題となるに至つた。丁度「中央公論」編輯部よりこの問題に關し意見を求められたので平素考へて居るところを纒めて一文を草することゝした。

云ふまでもなく我國は近き過去に於て、金融大動亂(昭和二年)を經驗したばかりであり、而かも金解禁を目睫の間に控へて居ると云ふ特別の事情に置かれてある。故に或る意味に於ては現下の狀勢の中には一時的なもの、特殊的なものが含まれて居ることは否定出來ない。日本銀行の市場統制力の問題をかゝる一時的、特殊的事情に關聯せしめて論ずることも決して不可能ではない。然し冒頭に掲出した設題はより根本的なる意味を持つて居る。我國大銀行主義最近の發展が假令金融大動亂の結果、特に其のテンポを速めた形跡はあるにしても、この趨勢は現下の一時的狀勢の如何にかゝはらず、將來に向つて繼續助長されるであらう。この大銀行主義の發展を前にして日本銀行が金融市場に於て將來如何なる地位を占むるに至るやは決して現下の一時的、特殊的事由とともに生じ之とともに消滅すべきが如き問題ではない。この意味に於て現在一、二の特殊的事由の爲めに日本銀行の市場統制力が多少の損傷を蒙つたからと云つて慌てて日本銀行の地位地に墜ちたと悲觀して仕舞ふには當らぬと同時に、市中大銀行の最近の發展を目の前に見ながら日本銀行の市場統制力減退を以て一時的現象なりと樂觀することも出來ぬであらう。

大銀行主義の發達は確乎たる現前の事實である。私は以下この事實に關聯して、日本銀行の地位を考察せんと欲するのである。

二　我國に於ける大銀行主義の發展

近時大銀行主義の發展とともに中央銀行の市場統制が次第に困難となりつゝあることは歐米諸國の大勢であつたが、最近我國も亦其の例に洩れざるに至つた。試みに之を第一、三菱、三井、安田、住友の五大銀行に就き大戰前、金融動亂(昭和二年)前並に最近(昭和四年六月末)の三期に於ける資力の消長を比較すれば發展の跡驚くべきものがある

先づ資本金に就いて見るに五大銀行の拂込資本金合計は大正二年(大戰前年)に於て僅か五千二百萬圓(百萬圓以下四捨五入、以下準之)にして日本銀行の拂込資本金三千七百五十萬圓(四捨五入せず)に比して一倍半にも及ばなかつたが、昭和元年(金融動亂前年)末には二億八千二百萬圓(全國交換所組合銀行拂込資本金總額の二七・二%)となり、日本銀行の拂込資本金三千七百五十萬圓に比し七倍半を示し、更に昭和四年六月末に至つては三億二千二百萬圓(全國交換所組合銀行拂込資本金の三〇・五%)となり、日本銀行拂込資本金(前同じ)の實に八倍半に達するを見る。

又五大銀行預金を日本銀行發券高に比較するに大正二年末に於ては五大銀行預金は一億二百萬圓にして日本銀行發券高四億二千六百萬圓に遙かに及ばなかつたが大正四年上半期に至り前者は後者を凌駕し、四年五年の二ヶ年は前者が之に相當して居たが、六年に入るや五大銀行預金は遂に日本銀行發券高を克服し爾來兩者の懸隔は次第に大となり、昭和元年末には前者は二十二億三千二百萬圓にして後者の十五億七千萬圓に對し約一・四倍を示し、更に昭和四年六月末には實に三十一億八千九百萬圓となる躍進的增加を遂げ後者の十四億六千二百萬圓に比して約二・一倍となるに至つた。因に五大銀行の預金を全國普通銀行預金總額に比較するに大正二年末には二〇・九%(全國交換所組合銀行預金總額に對しては三三・五%)なりしものが、昭和元年末には二四・四%(全國交換所組合銀行に對しては三八・六%)となり、更に昭和四年六月末には三四・四%(全國交換所組合銀行に對しては五二・〇%)を占むるに至つた

かく觀し來るとき大戰以來に於ける我國大銀行主義の發達は目覺ましきものありと云ふべく、之を英國の所謂ビッグ・ファイヴ(註三)が全英國銀行預金總額の六〇・三%、拂込資本金の五〇・五%(一九二七年末)を占むるに比し、又獨逸の所謂ダー・バンケン(D-Banken)が全獨逸普通銀行預金總額の四七・二%、拂込資本金の三五・九%(一九二六年末)を占むるに比し、決して甚だしき遜色を見ないのである。

市中大銀行の勢力の増大かくの如しとすれば、日本銀行が金融市場を意のまゝに頤使すること昔日の如きを得ざるは當然と云はねばならぬ。

三　大銀行主義の發展と日本銀行の地位

大銀行主義の發展とともに日本銀行の市場統制が往時に比して困難となりつゝあることは否むを得ないが、然し又反面より見れば市中銀行の資力が強大となり日本銀行の援助を藉ることが少くなれば日本銀行の市場統制に却つて都合のよいところも生じて來る。從來我國の市中銀行は餘りに多く日本銀行の庇護に頼り過ぎて居りはしなかつたらうか。そして日本銀行はその爲めに却つて市場統制力を損傷されたところがないであらうか。弱き市中銀行に圍繞された強き中央銀行は決して自由にして健全なる市場統制をなし得るものではない。

勿論市中銀行の多くが日本銀行の庇護によらざれば立ち行かなかつた時代には、市場は日本銀行の頤使に甘ずるから、一見日本銀行の市場統制は完全に行はるゝが如き外觀を呈するも、事理は正しく逆である。過去に於て我が日本銀行が弱き銀行の爲めに如何に惱されしかを思つて見るがよい。日本銀行がこれら銀行の庇護の爲めに如何に手足を縛はれ、其の市場統制の爲めに自由且公正に活用すべき資力が如何に拘束されたかはこゝに絮述するまでもあるまい。最近日本銀行の市場統制力に缺陷を生ぜしめし最大の原因は大市中銀行の發展よりも、寧ろ日本銀行の袖にすがらんとする弱き銀行の少なからざることに歸すべきであらう。

倫敦の市中銀行は外國銀行・殖民地銀行を除けば既に久しき以前より英蘭銀行より資金の援助を仰ぐこと殆ど絶無にして、彼等は英蘭銀行より貸出を受けざることを以て其のフィナンシャル・プライドとして居る。歐米の他の主要諸國に於ても市中銀行は中央銀行より貸出を受くることはあるが、之を最小限度に抑制せんとするの慣行があり、平常時に於て中央銀行より巨額の貸出を受くることは其の資産狀態の堅實ならざる證徴として忌まるゝところである。金融市場の相當に發達せる國にありては市中銀行の中央銀行に對する關係は右の二つの典型のいづれかに屬するに至るものである。然るに日本においては平素日本銀行より借り得るだけ借り、之を他に貸出して其の間に利鞘を獲得せんとする銀行が最近までは多數存在し、現今でもなほ其の跡を絶つに至らない。若し、市中銀行が平素中央銀行に依存するにあらざれば中央銀行に市場統制の能力なしとするならば、英蘭銀行をはじめ歐米主要諸國の中央銀行は我が日本銀行

より遥かに統制能力の劣れるものと云はねばならぬ。然し事實法等の正反對にして英國銀行をはじめ歐米の大中央銀行が其の資力の全部を擧げて市場統制に用ひるに反し、我が日本銀行は弱小銀行の救濟の爲めに巨額の資金を固定して市場統制の能力を甚だしく減殺されて居る。

市中銀行の資力薄弱にして事毎に中央銀行の庇護に依頼せざるべからざるが如きは決して中央銀行の市場統制力を大ならしむる所以ではない。市中銀行が一般に強固なる基礎の上に立ち、敢て中央銀行の庇護を必要とせざるに至つてこそ中央銀行は思ふがまゝに金融統制機關としての能力を揮ひ得るのである。パージェスの如きは米國に於て市中銀行が準備銀行より出來得る限り借入を控へる慣習を以て準備銀行の金融統制に必要なる武器の一つに數へ居るくらひである。中央銀行の公定利率は市場利率の上に置かれねばならぬと云ふ議論が屢々繰返さるゝは市中銀行の中央銀行に對する依頼心をなるべく少なからしめ、彼等をして所謂特取銀行たるに甘ぜざらしめんとする趣旨に出づるものと思ふ。嘗て田口卯吉博士は次の如く云はれたことがある。曰く「余輩は日本銀行が銀行に貸出すを以て其任務と爲せることを駁論せしこと數々なりき。日本銀行は須く銀行の銀行たるべし。之を再言すれば銀行の預金所たるべし、決して銀行の貸出所なるべからざるなり。何となれば本行銀行に貸出すことを任務とするに於ては、萬一市場に恐慌の發するに當り、又之を貸出すの餘力なければなり」と。博士がこの言を爲したのは明治三十年である。今より顧れば非常な卓見と云はねばならぬ。歐米主要諸國に於て中央銀行が銀行の銀行なりと呼はるゝ所以は市中銀行が中央銀行に預金をするの意味に於てである。然るに我國にありては少くとも最近までは市中銀行は日本銀行に預金をなすこと甚だ少額にして殆ど云ふに足らず、日本銀行が銀行の銀行なりと云はれし所以は決して銀行の預金所たるの故にあらずして銀行への貸出所たるの爲めであつた。一國金融統制機關たる中央銀行として最も必要なることは一刻も速くかゝる境地より脱することでなければならぬ。

更に大銀行主義が中央銀行の市場統制を困難ならしめるばかりではなく、之を容易にする反面もあると云ふ今一つの理由がある。凡そ銀行は其の資力強大となればなるほど、其の經營は合理的となり措置は公明正大となるものである。否、ならざるを得ないものである。公衆環視の下に立つ大銀行が一國國民經濟の利益に逆行して露骨なる利己的態度に出づることは小銀行の場合に比し遙かに困難である。又大銀行なればなるほど概して勘定の發表が明瞭であるから、中央銀行が市場の形勢を察知

するのに便利が多いだらう。故に中央銀行が理を以て之に臨むならば或る意味に於て寧ろ始末がよいとも云ひ得る。各國的信認を擁ふ大銀行は區々たる小策を弄して中央銀行の政策を妨害することは少ない。寧ろ屢々彼等は中央銀行の政策を援助するが如きことがある。倫敦の市中銀行間に英蘭銀行の公定利率より一・五%以下の利率ではビルブローカー等へ短期通知貸をせざることの協定が存在するが如き、又近く我國の東西大銀行が率先して金解禁の曉、金流出を促進するが如き行動は出來得るだけ抑制すべきことを聲明せるが如き、みな中央銀行の金融政策を尊重する大銀行的襟度の現はれである。

四　日本銀行營業方針更新の必要

前段に於て私は大銀行主義の發達が必ずしも日本銀行の市場統制力を損傷するのみにあらざることを明かにしたが、然し日本銀行は市中銀行の最多數が新取銀行たるに甘んじたる時代の營業方針をそのまゝ新しき時代に踏襲して市場統制の實を擧げ得るとは勿論云ひ難い。大銀行主義の伸展とともに金融市場が今や正に新しき局面を展開しつゝあるに鑑み、この新しき状勢に應ずべき新しき營業方針を樹つるにあらざれば市場を有效に統制することは到底望み得ない。そこで大銀行主義が如何なる變化を、我が金融市場に齎らしつゝあるかを省察するの必要がある。

市中銀行の資力が強大となればなるほど中央銀行に頼る程度は少くなり、少くとも大市中銀行の貸出利率は中央銀行のそれよりも低きことが多くなる。その結果一流の優良手形は一流の大銀行に走り、大銀行は滿期日まで之を自行に保存し、中央銀行に於て再割引に附することは殆どない。中央銀行に再割引を依頼し來るものは概して第二流、第三流の銀行のみであり、之等の銀行に集る手形は第二流、第三流の手形であるから、優良手形は中央銀行より次第に遠ざかる結果となり易い。加之第二流、第三流の銀行を通じて來る第二流、第三流の手形さへも其の量と質とに於て次第に低下し行く運命にある。何となれば之等の銀行も自身が漸次強大となり又は大銀行に合併され中央銀行に依頼する必要が益々少なくなるか、或は中央銀行に依存する代りに強大なる大市中銀行のもとに走ること益々多くなるからである。かゝる傾向は金融市場の發達せる國に於ては何處に於ても見らるゝ現象である。而して我國も亦漸次かゝる状態に向つて歩一歩と進みつゝあるのである。

果して然らば日本銀行が若し從來の營業方針に膠着して限られる數の取引銀行のみを相手にして居るならば、遠からずして

歓迎すべき手形は得られず、歓迎すべからざる手形に満足せざるを得なくなり、かくて次第に割引市場より孤立するに至るの時間なきを保し難い。そこまで行かぬまでも、常時は再割引を申込み来る銀行が稀となり、金融甚だしく繁忙を告げ、堪え難きに至つて[illegible]日本銀行に走るが如き傾向を生ずるから、金融の繁閑時として度を失するの危険なしとしない。嘗てライヒス・バンクの理事たりしルムも夙に独逸がこの弊害に苦しめることを指摘して居る。

人或ひは善良手形が中央銀行に集つて来なければ割引に應じないだけの話であるといふかも知れぬが、この際考へねばならぬことは金本位制の運用が近来新しき方向に向つて進みつゝあるの一事である。在来の金本位制にありては貨幣の数量を支配する最も主要なる要素は金の出入増減にあり、之によつて機械的に貨幣の数量を調節したことになるべく人意を加へざることを以て其の特色としたのであるが、現代の金本位制にあつては貨幣数量の調整が金の移動のみに任せずに之に人意の統制を加へ、所謂統制せられたる金本位制([illegible])を現出せしめつゝあるのである。故に銀行券の発行に就いても従来は正貨準備の数量に於て其の数量を制限すべきものとされて居たが、所謂[illegible]の下にあつては[illegible]に貨幣調節の活機が移りつゝあるを見るのである。正貨準備の規定は現今に於ては銀行券の放恣なる発行を抑制することを以て其の主要任務とするのである。保証発行の意味がかくの如く重要となつて来ると其の基礎となるべき準備物件の供給が大切な問題となる。而して保証発行の基礎となるものは主として中央銀行の信用であるから、一国の貨幣調節が適当に行はれるか否かは實に繋つてこの信用が適当なる方針によつて行はれるか否かにある。

中央銀行の信用が善良なる商業手形の割引の形に於て行はれ、其の基礎の上に保証発行が行はれることが最も望ましきものなることは萬人の認めて異論のなきところである。中央銀行の手形割引を商業手形に限り、又は保証発行の準備物件を商業手形に限る立法例も少くないほどである。かく観じ来ると銀行券の発行と中央銀行の一般銀行業務とは到底引離すことは出来ぬものであつて、前者を後者より隔絶せしめんとしたオーソドックスの通貨主義的精神は現代の中央銀行の経営に於ては維持され得ないものである。人々はやゝもすると中央銀行の銀行券発行業務のみを重要視して、其の背後にある其の一般銀行業務の重要なることを忘れ勝ちであるが、眞に重要なのは寧ろ後者であつて、これさへ適当に行はれたならば銀行券の発行は常

なる手段に過ぎないのである。英國の一八四四年の銀行條例は通貨主義の精神に基き英蘭銀行を發行部（銀行券の發行を取扱ふ）と銀行部（一般銀行業務を取扱ふ）との二部に區別し銀行部よりの影響が發行部へ及ぶことを極力防止せんとしたのであるが、かくの如き考へは今や跡を絶ちつゝある。現今の英蘭銀行の最重要なる部分は實に銀行部にあり、銀行條例が專ら念頭に置いた發行部は其の重要に於て第二次的のものとせられて居る。

そこで若し舊式の機械的・自働的金本位制に留り主として正貨準備發行によつて銀行券の數量を調節すればよいのならば、假令市中銀行が強大となり中央銀行に貸出を依賴し來ることが少くなつても、中央銀行はさして意に介する要はない。又假令新しき統制せられたる金本位制の時代に入るとも、若し市中銀行が平素善良なる商業手形を中央銀行に豐富に供給するならば中央銀行はさまで苦慮するには及ばないであらう。然るに今や世界の主要なる中央銀行の直面せる、而して我が日本銀行の將に直面せんとする狀態は一方に於て新しき統制の精神によつて金本位制を運用すべき必要に迫られ、他方に於て市中銀行より善良なる商業手形を往時の如く容易に獲得し難き狀勢である。これ中央銀行の經營が昔時に比して著しく複雜を極むる所以にして、我が日本銀行も、他の大中央銀行が嘗てなしたるが如く營業方針の更新を計らねばならなくなりつゝあるのである。

こゝに於て市中銀行が平時に中央銀行に救援を求めなくなることは一面に於て中央銀行の資産を固定せしむるが如きことを少からしめると同時に、他面に於て中央銀行は善良なる投資の機會を狹ばめられることゝなる。日本銀行が既にこの狀態に達したと云ふには早いであらう。然し諸國の經驗に鑑みてこの狀態はやがて到來する。然らば、日本銀行はやがて陷るべき上述のディレンマより脫出し、若しくはかゝるディレンマに陷ることを防止する爲めには如何なる方法を講ずればよいか。

五　日本銀行は營業方針を如何に更新すべきや

之に對する答は前節の敍述の中に既に與へられて居る。即ち最も根本的なることは日本銀行が從來の「銀行の銀行」主義（銀行のみに對する貸出機關たる意味に於て之をかく云ふ。以下準之）を緩和して、其の門戶を一般商工業者に對しても開放することである。他にも種々な方策が考へられ得るが、この根本に觸れざる限り結局、一時を糊塗し得るに過ぎぬであらう。嘗ては世界の何處の中央銀行もみな「銀行の銀行」であつた。然し市中銀行が強大となるに從ひ次第にこの主義を維持し得ざるに至つた。英蘭銀行、獨逸ライヒス・バンク等の金融市場の發達の最も早かり

以国に於ける中央銀行は既に夙くより一般商工業者に対する直接貸出を行つて居り、「銀行の銀行」主義を固執するを以て著名なりし佛蘭西銀行においても、近来は一般商工業者に対する貸出に力を注ぐに至り、同行当局者が嘗て米国ナショナル・マネタリー・コムミッションとの会見に於て答へたるところによれば、苟しくも同行に五百法以上の当座勘定を開く者に対しては最低五法の手形でも割引に応ずるとのことであつた。又明かに「銀行の銀行」主義に則つて立案されし米国聯邦準備条例に於てさへも所謂公開市場取引に関する條項が挿入され而かもこの公開市場取引が実際に於て準備銀行の重要なる活動となりつゝあるを見るのである。かくの如き趨勢は中央銀行が之を好むと好まざるとにかゝはらず、市中銀行が強大となるに従ひ招来されるところの大勢である。

勿論一般商工業者に直接貸出すが如きは貨幣制度の結果たる中央銀行本来の職責にあらずして、それはなるべく市中銀行に委ぬべきものであり、且中央銀行としては市中銀行に対してのみ貸出し、市中銀行をして一般商工業者に貸出さしめるが如き方が労も少なく危険も少ないであらう。故に中央銀行はそれが可能なる限りなるべく銀行の銀行たる地位に留るがよいのである。然し上述の如き理由よりして止むなくかゝる地位に変動したるもを得ないのであつて、一般商工業者に直接接觸することなくしては貨幣統制機関としての本来の職責を十分に果すことが困難となり来るのである。

人或は云はん、如何に市中銀行が強大となりつゝありとは云へ、恐慌等の場合に於ては依然として中央銀行に走らざるを得ざる心と、この意味に於て中央銀行の優越的地位は今に猶ほ儼存する。而して中央銀行はかゝる場合に市場維持の重責に任ずれば足るものにして常時は市場をしてなすところに委して可なり」と。然し乍ら現代の中央銀行は恐慌時の為めの緊急機関たることのみを以て其の主要任務とすべきではなく、寧ろ常時に於て絶えず市場を調節統制し出来得る限り恐慌等の勃発を防止又は緩和すべき責に任ずべきものである。これが真の意味における中央銀行の市場統制である。

又或は云はん、假令営利の為めにあらずして政策の為めなりとは云へ、中央銀行が市場に出で、市中銀行と競争の地位に立つことは望ましくないと。然り、望ましくないことである。然し主要諸国の大勢は中央銀行がこの望ましからざることを敢てせざれば市場の統制を完全になし得ざるに至りつゝあるのである。

こゝに於て日本銀行もやがては市場の資金力を緩和して所

謂個人取引に進出せざるを得ざるに至るであらう。そして善良なる商業手形であるならば銀行の介在を待たずして、直接商工業者より買取るべきであらう。又市場に於て所謂市場利率の適用される最優等の手形に對しては曾て獨逸ライヒス・バンクが一八八〇年より一八九六年まで實行し、又英蘭銀行が一八七八年以來實行し居るが如く、市場利率による割引を開始するのも亦一法であらう。

更に日本銀行は商業手形を買取る上に自由なる態度を持するのみならず、若し金融統制上必要なる場合には一旦割引したる手形を市場に賣出すことを實行する方がよいと思ふ。日本銀行のなし得る營業の範圍を規定せる日本銀行條例第十一條、並に日本銀行定款第二十一條の中に手形の買入のみを擧げて賣出を掲げず、而かも條例第十二條、並に定款第二十二條に前條に記載する事業の外諸般の營業に關渉することを得ざる旨の規定存するの趣旨より、日本銀行は一旦割引したる手形を再び市場に賣出し得ずと解釋する者あらば、私は然らば條例並に定款に改正を行ひ獨逸新銀行法第二十一條、同舊銀行法第十三條に於けるが如く、又白耳義ナショナル・バンク定款第十七條に於けるが如く、手形の賣買をなし得る旨を明記すればよいと答ふるのみである。

かくて若し日本銀行が商業手形を買取る上に於て從來よりも自由なる態度を採るならば我國に於ける商業手形の流通は少なからず促進されるだらうと思ふ。勿論日本銀行の割引すべき手形は善良確實なる手形たることを要し、劣等なる手形に對しても門戸を開放する必要は更にない。商業手形の優遇とは決して質の劣つた手形に對してまで割引の便宜を與へると云ふことではない。善良なる手形に對しては、其の手續を簡便にし其の利率を低くして、優遇の途を講ずると云ふことでなければならぬ。

かく云へば論者は更に云ふであらう。「日本銀行が如何に優遇せんと欲するも、それに値する優良手形が缺乏して居るから止むを得ない」と。或る意味に於て確かにそれに違ひない。然し他の意味に於ては優良手形が缺乏して居ればこそ益々之に對する優遇の方法を講じ、其の流通を促進する必要があるとも云へる。米國聯邦準備制度が割引市場の創設の爲めに如何なる努力と犧牲とを拂ひ、而して如何に迅速に其の目的を達したかは米國が曾てありし狀態と同樣の狀態にある國に對する屈强の教訓である。

六　結語

以上の如くにして私の到達した結論は次の如くである。大銀行主義の發達は或る意味に於ては日本銀行の市場統制を困難ならしむるものであるが、他の意味に於ては弱小銀行の救援の爲めに固定せしめられる資力を解放して之を市場統制に活用し得るの利益がある。然し同時に時代の進運は漸く日本銀行をして「銀行の銀行」たるの地位に晏如たるを困難ならしめつゝある。こゝに於て日本銀行は舊來の營業方針に更新を加へ新時代の要求に應ずる必要あり、若しかくするならば大銀行主義の發展に直面してなほよく市場統制の實を擧ぐるを得るであらう。素より私は繰返して叙べし如く、日本銀行が急遽かゝる營業方針の更新をなすを必要とするほどに事態が切迫して居ると云ふのではない。たゞ我が金融市場がかゝる方向に向ひつゝあるのは事實であるから、日本銀行は今よりして既に以上の諸點を愼重に考慮すべきであらうと信ずる。かゝる營業方針の更新は俄かに之を行はざればなし得ざる性質のものではなく、徐々に按配加味して行けるものであり、且つ行くべきものであるから、その時機未だ到らずとなして何等の策を講ぜざるは採るべきでないと思ふ。

現代センセエショナリズム

室伏高信

一

「現代センセエショナリズムだつて？」
「うん」
「變な言葉をあんまり使ふなよ」
「うん」
「君ものぼせてゐるやうだね」
「うん、僕も時代もね、みんなのぼせてゐるんだよ。」
「だからセンセエショナルとでもいふのかね君は？」
「そうのやうな、そうでないやうな」
「まさか認識論じあるまいね」
「そりあそうさ、昔のロックでもなけれりや、また近頃のマッハでもないさ。自我も世界も要するに感覚だなんていふんじあむろんないんさ。——それどころか、僕にいはせると感覚を超克したところに自我も世界もあるんだ」
「では君は感覚否定なのか？」
「馬鹿あいつちやいかんよ。マルクスに反對するものが資本主義者ときまつてはゐないやうにだ、感覚の彼岸を説いたからつて感覚否定じあないよ。——この現實の感覚を誰れが否定ができるものか、われわれの感覚自身が第一承知してくれないんだ」
「でも感覚は世界でも自我でもないと君はいつたじあないか」
「むろんさ、マッハなんぞの世界理解は全く皮膚のやうに薄いんだ。玉葱の皮をむくやうに、われわれの感覚を一つ一つ分析して見給へ、自我も世界も、いや感覚でさへも逃げてしまうから」
「しかし、その皮がなくては玉葱もないんだらう」
「それもむろんさ、皮でもなく、また皮のほかにもないんだ。君は戀をしたことがあるかね？」
「一二回」
「何んで戀をしたんだ？」
「何んでつて、僕がしたんだよ」

「君のどこでしたんだ？」
「僕の、そう、魂さ。僕はプラトニクだからね」
「そんな魂にきまつてゐるさ。魂のない戀愛なんかはないんだ。だが君の魂はどこにあるんだ。一寸でいゝから見せてくれないか」
「魂を見せろつてッ魂は君、江の島の辨天様のやうに祕閉な洞窟の中にゐるよ」
「嘘をつけろ！」
「嘘なつけると逃げていつてしまふよ」
「神の國はこゝに見よ、彼處に見よといふ所にあるものではないと、キリストのやうに君もいふのか」
「うん」
「そうなんだ、神の國はこゝに見よ、彼處に見よといふやうな、昔の十字架のパノラマのやうなものにゐないんだ。けれどもまたこゝにも彼處にもそれ自身を示してゐるんだ」
「君は、では、魂を見たことがあるんか」
「あるさ、そりや」
「見せてくれないか、一寸でいゝから」
「君が戀人であつたらね」
「戀人にだけ君は見せるのか」
「さふそうだね——君だつてダンテ位は讀んでゐるのだらう。あのダンテの可憐な戀愛について見給へ、あのダンテでさへもベアトリチエのことを思ふ度に、魂いきぶしさを覺えたとともに、その肉體がふるへたといふにあたいか。戀愛が靈神であればあるほど肉體が一層に振動するんだ、心臓の鼓動はいやに激しく、目も眩み、胸は躍り、血の循環が早くなり、それから最も肉體的な肉體に異常な變化が起つてくるんだ」
「魂がそこにあるんか」
「魂がそこにあるんだ。魂自體が感覺に感覺だが、そこに一つのセンセエションが起つた時には、感覺は魂によつて接觸されてゐるんだ。あゝわがラウラよ、肉な肉に、靈な靈にといつたシラアの氣持ちがこゝのところをよく表現してゐるよ」
「感覺は實に微妙だがね、非常に」
「うん、俊鶻のごとくに微妙だといふ詩人がある位ひだからだよ」

二

「ところで、現代センセエショナリズムの現代とはどういふわけか。感性にも現代だの、古代だの、中世だのとあるいかいッ」
「あるともさ、何ごとにつけてもこの現代といふやつがあるんだ。これをモダンといつてもいゝ。モダンといふと一層にセンセエショナルだ」
「何ごとにつけてもッ」
「何ごとにつけてもさ、一つの例外もなしと強いアクセントでいつてもいゝんだ。このアクセント自體が現代のシムボルだといつてもいゝんだ。——現代はアクセントの時代だといつてもいゝと僕は思ふ」
「それでッ」

「それでだ、何ごとも時代の制約をうけずにはゐられないのだ。つまり傳統の代りに環境が支配するんだ。それだけにまた何もののうへにも時代そのものが表現されてゐる。凡てのものが時代の兒だ――ま、兒か寵兒かは別とするも。感覺はその最も鋭敏な代表者だといつてよい」

「この頃の女性の感覺のやうなものは君の所謂時代の表現といつてよいだらうと僕も思ふね」

「さうなんだ、女性は一層に感覺的なんだ。だから一層に時代的なんだ――見よ、彼女等の皮膚のうへに時代精神の躍つてゐるのを！」

「時代精神はカフエやダンスホオルで躍つてゐるのぢあないか」

「むろんさ、カフエでも、ホオルでも。カフエやホオルこそは時代感覺そのものなんだ――これはあまりに感覺的な感覺ぢあ あるんだがね、しかしまたこのあまりに感覺的――ニイチエ流にいふと、あまりに感覺的な、あまりに感覺的な、ところが今日の時代であるのだ」

「今日といふと？ 昨日は感覺的ぢあなかつたといふのか」

「いつも感覺の時代だとか、センセエションの時代だとか思つたら君大間違ひだよ。あのストアの時代――閑の幸福といふやうな時代のことを考へて見給へ、センセエションなんてものは輕蔑の的だよ、それから凡ての感覺的なものがね」

「靜的な時代と動的な時代とを君は區別しろといふのか」

「形而上學的の時代と社會學的の時代といつてもいゝんだ。傳統の支配する時代と環境の支配する時代とも。――前者には時間の觀念がない。だから時代といふ觀念もない。だからまたセンセエションといふ觀念もない。センセエションといふことは完全に時間的な現象なんだ、空間的擴がりであることの代りに」

「流れてゐるものでなくちあセンセエションは起らない……」

「流れて、生きて發展して、沒落するんでなくちあ時代感覺も起つてこないし、また感覺的な時代も生れはしないんだ」

「新感覺派つてやつはどうだね、あゝいふのが現代センセエショナリズムといふのか」

「新感覺派か？ あいつは君、一番大切なものを置き忘れてきたんだ。カイザアなぞの表現派が魂々でとう／＼夢遊病者になつてしまつたやうにさ、こいつはまたその魂をすつかり忘れてきたんだ」

「淺薄だといふんか」

「皮膚のやうに鋭敏といひたいところもあることはあるが、しかしこいつは皮膚のやうに淺いといつた方が當つてゐるよ――あの色男のやうな無力さを見るがいゝ」

「でも、あれには文明人的なデリキヤシイはあるね」

「さうなんだ、正にパリジヤンそのものだよ。だが、デリキャシイはあるが頽廢的な、垢拔けはしてゐるが滅亡しかゝつた、總じて野蠻性――アメリカ的な、そしてまたアメリカ的・アフリカ的な野蠻性の欠乏と、この欠乏からくる弱々しさを見るがいゝ、このスペエト・ソアイトの、力と魂とを喪失した、都會のプチ・ブル的な藝術を」

「では新感覺派なんて全然無意味だと君はいふのか」

「氣が早いね、君は。凡ての存在するものに、無價値だといふことと存

僕にするよ」少しも僕には[illegible]

といふことは非常に面白いといふことになるだらう。感覚派だつて、ニヒリズムだつて、フォビズムだつて、もしくはプロレタリアだつて、小川未明、山本有三だつて、みなそれぞれの意味はもつてゐるよ、時代的の——いやもう概念であるのみなんだ、だがこうしたものは単なるニキビのやうなものさ、何等かの兆候だといふだけの意味なんだ」

三

「現代センセエシヨナリズムとは、それでは感覚とは文明だといふのか」

「ノン、ノン、ノン、ただ感覚と感覚なんだ、その文学自体が示してゐるとほりにさ。だがこれはわれ／＼の意味にはなつて時代の表面なんだ、われ／＼の個々人の感覚ではなくつて時代感覚そのものなんだ——時代そのものは一つの感覚だといつてもいゝ、伝統の代りに感覚の支配する時代はいつも時代そのものが一つの感覚なんだ」

「感覚といふ意味でならセンセエシヨンといつてゐるのじやないか」

「それはむろんのことさ、センセエシヨンから[illegible]とか、センセエシヨナルだとかね、だがこれだつて要するに時代感覚の表現でもあるし、また時代感覚に添へると、いふことのほかには如何なる意味もないんだ——後々時代感覚的なものは殆んどセンセエシヨナルんだ」

「で、今日はセンセエシヨンの時代だといつてもいゝんだね」

「今日はセンセエシヨナルの時代さ、一つの顔のあらゆる要素で　ボス

なアだとか、円本だとか、官僚だとか、様式派だとか、新聞だとか、学者だとか……」

「でも、大学だとか、博物館だとか、学士院だとか、図書館だとか、村だとか、随分時代遅れのしたものもあるじやないんか、就中あの門の皆の多い陰りの何百何十萬といふ大学生が今頃マルクス以前の古典派経済学の講義かなんかを筆記してゐるところなんざあ、昔の版画御絵の代りに講壇が支配するといふ、様な逆さにしたやうなものだ」

「そりやさうしたものもあることはあるさ、けれどもそれだから大学でも学士院でも現代じやないんだ、矢張り博物館だよ、生きながらの博物館だよ——マリネッチにいはせると、これ等の化物たちはだ、考へもしなければ、息きもしなければ、成長もしないし、それから感情もオリヂナリチイも何もないんだ、模倣、模倣、模倣、模倣、たゞの模倣なんだよ、これは」

「廣告術一手段も、しかし、やりきれないね」

「たまらないね、トッカピこの廣告が毎日凝ませられちまつたけれど、日本でも、もう一番悪いなにか出して一番大きい廣告をするんだが一番もうけてゐるといふじやないか」

「廣告もまた一つの時代感覚なのか」

「さうなんだよ、時代の顔だよ。新聞の廣告面を注意して見てゐると、これだけでも時代が分つてくる」

「シドアナリズムが一番多くセンセエショナルの要素を一つはゐるないか」

「さうだらうと僕も思ふよ　センセエシヨンの時代はまたジヤアナリズムの時代だつて、メリケン・ジヤアナリズムの時代だつては」

「ジヤアナリズムといふと、ひどく悪るく考へてゐるものもあるね」

「うん、あるよ。相當分りのよいやうな人間でさへ、ジヤアナリズムといふとひどく下品なものゝやうにいふのがむしろ普通だ、かういふ連中だよ、また古るいイデオロギイからの脱却を叫びながら彼等自身がこの古るいイデオロギイから脱却しきらないでゐるのは——彼等はまだ形而上學の方が時代文學より貴重だと思つてゐるんだよ。それから傳統によつて支配されてゐる人間の方が環境によつて支配されてゐる人間よりも。——それからまたこの人たちなんだ、時代々々と口にはいつてゐながなら、そしてまた彼等自身完全にまで時代の支配をうけてゐながら、ジヤアナリズムが時代のリズムそのものだといふことを知らないでゐるのは」

「ジヤアナリズムは何んといつても力だね」

「時代のリズムを代表してゐるからなんだ。——時代のリズムそのものであるからなんだ」

四

「時代のリズムと君のいふのは？」

「機械のリズムといつてもよい。二十世紀の聲は機械の聲だと誰やらがいつたことのあるやうに、——トオキイ、ラヂオ、蓄音器、それから工場に鳴り響いてゐる騒音の數々をあげるまでもない、時代そのものが機械の時代、時代の音律そのものが機械の音律、時代のテムポが機械のテムポ——機械の魔の手が時代を握りしめてゐるのだ」

「昔の文明とこゝに一つの混同しがたい區別があるといふんだね」

「さうなんだ、今日の文明に比べると、ギリシヤでも、埃及でも、アッシリヤでも、それがあの帝國的なロオマ文明であつてさへも、一つの農業文明だ」

「ロオマが農業文明だつて？　矢つ張り農業文明だつて僕はよくいつてゐたじやないのか」

—「そりあ農業文明にあ違ひないさ、凡ての文明が、だけども僕、今日の文明とロオマ文明とを比較して見給へ、スペングラアなぞはロオマ文明のうちに今日の文明は恐く存在してゐたやうにいつてはゐるが、しかし、そこには最も重大な區別があるんだ。一方は同じ一個の農業文明であるのに對して一方は純然たる機械の文明なんだ。だからロオマ文明には擴がりはあつた、けれども進歩といふものは無かつたんだ」

「僕は進歩を謳歌するのか」

「謳歌でも禮讃でも陶醉でもない、認識なんだ。今日の文明は進歩の文明といつていゝんだ。進歩、進歩、進歩——これが近代文明の理想でもあるし、動力でもあるし、原則でもあるんだ。進歩のある間は近代文明は決して滅亡しないよ。ゴオト人の侵入位ひのことで沒落したロオマ文明と根本的に違ふところはこゝなんだ」

「だからこの文明は單なる擴がりの文明であることの代りに時間的文明だと僕はいふんだらう」

「なるほど、この文明の性質は――時間的であり、動的であり、そして、この種の文明が頂上に近づいた時に――つまり高度文明の時期に到つてきた時に、この時間的であること、動的であることが一時に高度になつてくる。だから機械のリズムが高速度――さうなんだ。ここにもはや生物的な制限がなくなつたのだ。人間の足は自働車に依つて数倍も強力なものになつたらう。その声はマイクロホオンを通して数千哩に伝はつただらう。その耳はアメリカに歌つてゐる美しいソプラノに聴きとれることができるだらう。彼の手は輪転機を通して一分間に[illegible]も書くことができるであらう。それから彼の足は自働車を通して一時間に[illegible]百哩。飛行機を通しては一時間に[illegible]哩も走ることができるだらう。機械のリズムそのものが一つのセンセエシヨンだ。J・O・A・Kが電波を通して空中にセンセエシヨンを撒す。新聞が活字を通して一週[illegible]にセンセエシヨンを撒すだらう。演劇だつて、映画だつて、活動だつて。小説だつて――小説だつて一[illegible]へ、通俗小説とか、高級小説とか、その区別は高級でも、通俗的でもなくなつて、中間の芸術といつたやうなものがなくなつてきたストア的なものが全然没落してしまつたのさ。そして如何なるものであつても、時代にセンセエシヨンを興すことができるか、でなければそれ自体一つのセンセエシヨンであるやうなものでなくては存在理由がなくなつてしまつたことなんだ」

「成程ねえ……」

「だからこのことは、政治でも、芸術でも、時代のセンセエシヨンと一致しないものか、もしくはセンセエシヨンに[illegible]しうるものでなくちや。――[illegible]だけど[illegible]の時代[illegible]」

「センセエシヨン、この時代なんだ、

「センセエシヨン、この時代は[illegible]の時代[illegible]

ラ・ボウはどうだね。あの女の[illegible]日本へ。今井が日本であり、今日であり、時であり、また生活でさへあるのか――今井が一つのセンセエシヨンであるのか。そしてこのセンセエシヨンこそ正に時代のリズムをその意味において――といつては大いさではあるが時間において代表してゐるのだ。彼女こそは時代の性質だといつてよいのだ」

「しかしあんなには少し[illegible]だね」

「[illegible]は[illegible]さ。例の新聞の支配する時代であり、今日では、あんな女は[illegible]ないんだ。けれどもあ、しかなし時代に[illegible]あるからしも、新聞が[illegible]の代りに[illegible]によつて包まれてゐることを[illegible]してゐるんだ。時代のリズムに耳を傾けよ。そこにクララ・ボウの踊つてゐる足音が聞えてくるぜ」

「あんなおどけたものが時代の象徴なんだか」

「さうなんだよ。驚きには非ず、嘆きにも非ず――だ。時代批評といふよりは時代[illegible]芸術的分子をもつてくることはそのこと自体時代錯誤なんだよ」

「今日は芸術的時代にあたいといふのか」

「なるほど、それは今日は一つの[illegible]時代なんだ。クララ・ボウとか、おどけとか、センセエシヨンとかいふものに一つの[illegible]時代なんだ」

「こんな時代はどこへ行くのか？」
「どこへ行くかつて、目的のないのが現代なのだ。目的なく、理想なく、たゞ動く、たゞ生きる、たゞ踊る、たゞ愛し、抱擁し、離別し、何のことはない一つのレビユウだ」
「レビユウにも幕はあらうが？」
「あるどころじあない、幕が早いんだ。急テムポは急轉歩だ。テムポの早いといふことそれ自體が一つのキヤタストロフエの近づいてゐることを示してゐるのだ。人心がイムペエシエントになつてゐる理由の一つもこゝにある。せつかちだ。イムペエシエントだ。キヤタストロフエだ。ジヤアナリズムだ。センセエシヨンだ――そして偉大なセンセエシヨンだ」
「偉大なセンセエシヨンといふと？」
「小さいセンセエシヨンから大きなセンセエシヨンへ――センセエシヨンはそれ自身を一歩々々偉大にしてゆかなくちや刺戟の力がないんだ。モルヒネの注射のやうにね。そこで僕はこういふんだ、皮膚のセンセエシヨンから魂のセンセエシヨンへと。新聞雜誌的なジヤアナリズムからイエス的な藝術的ジヤアナリズムへと。――火のやうなセンセエシヨンが、そうだ魂によつて浸透されたセンセエシヨナリズムの時代がきたるであらう、凡ての兆候は既に熟しつゝある！」

七花八裂の無產政黨

山川均

×

わが國における無產者政黨樹立の運動は、單一政黨を標語として出發したが、そして今日到達したところは、一ダース有餘の合同政黨と地方政黨との分裂對立の狀態であつた

大正十四年における、最初の單一無產政黨の企てが失敗して以來、四ヶ年間を通じてわが國の無產者政治運動は、たゞ一直線に、分裂の一途を辿つて走つてゐる もちろんその間には、少しの消長や、併合や、離合があつた。例へば昭和二年の末には、何れも同黨の指導以外の方法による一切の合同に原則の上から反對してゐた協作主義者は、當然としてその主張を翻へし、新勞農黨をして、すべての無產政黨との合同を提唱せしめたことがある。このマヌーヴァーによつて、その作者は、たしかに若干の效果をあげたといふことが出來る 上の方でこの指導者たちが、輝やける指導精神や尖つた指導精神をもつて對立し、鬪爭と立場を指して、大衆を跳び越して躍進してゐたが、下の方の仲間のうちでは、勞働者と農民の大衆は、一つの利害を擁護するために、何故に三つ又は四つの政黨が必要であるかを、はつきりと見分けることができなかつた。そこで大衆は、やゝもすれば合同論と戰線統一の主張に耳を傾けようとした。これらの大衆をして、合同論に對して好意を寄せしめるためには、實踐によつて、合同の不可能を知らしめることが、最も有效な方法であつた。昭和三年末の全無產政黨合同提唱のマヌーヴァーには、少くとも、かういふ副次的效果があつた。

昭和三年の末には、日本勞農黨、無產大衆黨、日本農民黨などの七政黨の合同によつて、日本大衆黨が成立した。日本大衆黨の成立は、分裂傾向に對する統一傾向の勝利として、過去三年間の分裂への傾向に終局を與へ、わが國の無產政黨運動に一

新時期を開いたものとして、大衆の歡呼を受けた。けれども實際には、七黨合同も、分裂から分裂への途上における一つの挿話に過ぎなかつた。即ち日本大衆黨は、組織の上の合同がまだ完成せぬうちに早くも龜裂を生じ、數ヶ月の後には、事實上において、既に合同前の諸要素に分解したばかりでなく、この分解の過程は、なほ半ヶ年の間繼續され、昭和四年末の日本大衆黨の大會において、分裂は初めて完成された。日本大衆黨の分裂の結果は、さきの日本農民黨の要素を主要構成分子とする山梨農民勞働黨、舊無産大衆黨の要素による東京無産黨、秋田無産黨の成立、大阪および神戸その他における地方無産黨の計畫となつた。

日本大衆黨の過去一年間の存在は、合同前の諸要素への還元の作用に過ぎなかつた。七黨合同の失敗もまた、大衆をして戰線の統一に失望せしめるために、大なる效果のあつたことは爭ふことができぬ。この分裂が何人の負ふべき責任であつたかについては、舊日本勞農黨の指導者と舊無産大衆黨側との見解は全く相反してゐた。そして兩者の間の、十ヶ月間に亘る爭鬪となつた。この責任の何パーセントを前者が負ひ、何パーセントが後者に屬すべきであつたかは、勿論、精確に計算することはできないが、恐らくは何づれの側においても、若干の責任はこれを回避せぬにちがひない。現に舊無産大衆黨側が、その指導者の除名に反對して組織してゐた分裂反對同盟を解體したことは、事實の上において、過去の行動における若干の誤謬を認め、従つて一半の責任をも認めたことを意味するものであつたと同時に、この誤謬の清算を意味するものでもあつた。けれども日本大衆黨が舊日本勞農黨に還元しようとする作用は、これによつて阻止することはできなかつた。舊日勞黨への還元の決意は昨年末の大會において、斷乎として決定的に宣明された。政治戰線の統一を主要な標語とした舊無産大衆黨の要素が、再び東京その他の地方政黨を組織せざるを得ない立場に追ひ込められたことは、大なる皮肉には違ひないが、若し舊日勞黨への還元の作用が、現に避くべからざるものだとしたならば、(それが何故に不可避となつたかは暫らく別問題として)、東京無産黨その他の地方政黨の樹立もまた、現に避くべからざる歸結であつたと云ふことができる。

×

七黨合同の失敗を、第一番と云ふことができなければ(第一番の名譽は資本家と地主とその政府に讓るとして)少なくとも二番目の熱心さをもつて拍手喝采した者は、社會民衆黨の一部

の指導者諸君であつた。「社會民主々義の大旆の下に進む社會民衆黨と共產主義を指導理論とする左翼政黨は、それぐ確固たる理論的基礎とその統一とを得て存在する社會が必然性を有するが、これに反して指導理論を問はない不合理な結合によつて生まれた日本大衆黨が早晩分裂し、「右二黨のいづれかに留するに至るべき宿命を持つてゐる」ことは、「常に吾々の指摘したところだつたから、云はんことかやない、「統一病患者」よ、今度こそ思ひ知つたらう！」これが社會民衆黨の一部の指導者諸君の口吻であつた（當時の日本民衆新聞の社說、一般新聞に掲げられた談話を參照せよ）。

確かに七黨の合同は、これらの指導者諸君に、先見の名を成さしめんが爲めに成立したかのようであつた。少なくとも、或る短い時間の間に起つた目前的な事實とその成り行きとに眼界を限つて云ふならば、諸君には先見の明を誇るべき充分の權利があつた。

ところが「六ヶ月に至らずしてこの醜態をさらすとは」、除りにアッケなさ過ぎると諸君の批評した日本大衆黨の分裂から、まことに六ヶ月に至らずして、今度は「確固たる理論的基礎」の下に立ち、「社會的必然によつて統一せる」筈へであた諸君の社會民衆黨が分裂した。この第一次分裂によつて、社會民衆黨は、大阪における赤松派組合勢力の約七割と、小山代議士の大部分とを失ひ、第二次の分裂によつて、東京における勢力の一部分を失つた。そして社會民衆黨は、いま第三次に分裂の危機を孕んでゐる。吾々は社會民衆黨のためにこの分裂を悲みこそすれ、決して支配階級と共に拍手喝采して先見の明を誇るものではない。けれども社會民衆黨の分裂のうちからも、一定の教訓を得なければならぬ。即ち、日本大衆黨の分裂が、社民指導者の理解したように、戰線統一論の不合理の必然的な結果であつたとするならば、社會民衆黨の分裂は、この黨の結合のうちにも不合理を含んでゐたこと、そして確固たる理論的基礎の上に立つと假想せられたその統一には、何らの社會的必然も照應してゐなかつたことを實證したものだと結論しなければならぬ。

×

かうして現在わが國には、三つの全國的な無產者政黨のほかに、社會民衆黨から分裂した要素によつて、近く第四の全國的政黨が樹立される。十一（近くなほ二三を加へるであらう）の地方的政黨のうちの六政黨によつて、地方政黨協議會が組織せられてゐる。そして東京府會議員以下の對外府大衆黨系の地方政黨がこれに加盟したならば（そして社會民衆黨の大分裂を機會に

廣汎な合同が實現せられぬならば)、地方政黨協議會もまた、別個の全國的政黨に變形する可能があるばかりでなく、寧ろそれは避けがたきことゝ思はれる。そしてわが國には、五つの全國的な無産政黨と、數個の地方政黨とが並立することゝなる。

かように無産政黨の戰線は、四分五裂の狀態を通り越し、七花八裂の有樣であるが、この分裂への傾向も、もはや今日はこの絶頂に近づいたものと思はれる。尤も社會民衆黨が第三次分裂の危機にさらされてゐることは、先きにも言及したところであつて、この危機が、總選擧後に如何に發展するかは、遽かに豫測を許さない。しかる最近の大會によつて、謂ゆる「雜分子」なるものを一掃して水入らずの舊日勞黨に還元した日本大衆黨の前途といへども、必ずしも樂觀を許さぬものがある。かように無産政黨の分野には、なほ一二の動搖があるにしたところで、過去四ヶ年間を通じて進行し來つた分裂への傾向が、もはや峠の絶頂に近づいてゐることだけは、爭ふことができぬ。そして勢ひの極はまる所は、おのづから新たな方向への出發點となることは疑ひがない。

×

無産政黨のおはたゞしい離合集散は、そも〳〵何を意味するであらうか。云ふまでもなく、わが國における無産階級の政治勢力、從つて新興階級の政黨は、なほ形成の過程のうちにあるものであつて、この途上における部分的目前的な現象を見て、決定的な判斷を下すこと（例へば或る合同の試みの失敗によつて、單一な共同戰線黨の不可能が決定的に立證せられたもの、如くに考へること）が、保守的反動的な指導者にのみ相應はしい淺薄の物の考へ方に過ぎないことを教へてゐる。現存の三つの全國的政黨のうちでも、社會民衆黨は、社會民主々義黨なることがその指導者によつて明白に宣言され、從つて、充分に固定化した黨であるかの如く見做されてゐた。またこれらの指導者自らも、その政黨をもつて、「確固たる理論的基礎と、その統一とを得て存在する社會的必然性を有する」政黨だと信じてゐた。これに反して吾々は、比較的に固定化したかのような社會民衆黨すらも、尙ほ充分に社會民主々義黨として固定化したものではなく、從つてその限りにおいては、合同を可能とするといふ見解に立つて、社會民衆黨をも含む戰線の統一を主張した。そして社會民衆黨の最近の分裂は、社會民衆黨の結合に、何ら安定性のなかつたことを立證したのである。

この事柄は、現在の對立した無産諸政黨の分野は、社會民衆黨の或る指導者諸君の理解したように、「社會的必然性」に基づ

いてゐるものではなくて、逆にそれは、[illegible]時期的な[illegible]に応じ、[illegible]分裂[illegible]化して[illegible]るものといふことを、[illegible]の傾向を示してゐる。[illegible]政党の分野が常に[illegible]して安定しないのは、それが[illegible]時期的の必然または必要と[illegible]てゐるからであつて、[illegible]政党の分野が[illegible]時期的の必然と一致することを[illegible]てゐるものは、少数指導者の[illegible]――分裂主義、[illegible]主義[illegible]といふことを、[illegible]の傾向なく示してゐる。[illegible]政党の分野が、[illegible]の指導者[illegible]の[illegible]用せられる[illegible]が[illegible]一致し、[illegible]の上に[illegible]れるまでは、いかなる政党[illegible]合の安定をも[illegible]、[illegible]は、これまでのやうな動揺[illegible]が、[illegible]されるにきまつてゐる。かように[illegible]な分裂に分裂を重ねてゐることは、[illegible]的[illegible]的な指導者の理解するやうに、[illegible]に[illegible]して[illegible]いてゐるものではなくて、これらの指導者[illegible]の分裂主義に対し――その分裂主義に[illegible]――[illegible]化しようとする企てに[illegible]――[illegible]してゐるものにほかならぬ。[illegible]八[illegible]、[illegible]、その事[illegible]に対する[illegible]が開くことまでするならば、この[illegible]ことができる。

分裂から分裂への傾向が[illegible]に[illegible]し、若しくは[illegible]に近いことしたならば、新たな方向への作用は、果してどのやうな形態で行はれるであらうか。これは極めて興味ある問題である。けれども、同時に、答へることに極めて容易でない問題である。[illegible]なる場合を[illegible]像し得るにもせよ、大体においては、二つの道の一つをとらなければならぬ。即ちその一つは、[illegible]一の主要な中心勢力が[illegible]の形成され、その他の分散した[illegible]勢力が、この中心に向つて集る場合であるし、第二には、かような中心的な勢力の存在せぬ場合、そして中心的な勢力の存在しないといふことの[illegible]が、[illegible]つて合同を促進し、または[illegible]れを容易にする場合である。

では現在の[illegible]は、その何れの場合に近いだらうか。分裂につく分裂は、かような中心点となるべき勢力を形成する代りに、これを消滅せしめたといふことができる。[illegible]、[illegible]のそれらくは、数的勢力において[illegible]である。けれども、大体においては相比較する勢力であつて、現在の[illegible]下にある限りは、[illegible]い[illegible]のうちに有力な中心勢力が形成されることへき、[illegible]しているものの[illegible]い。そこで[illegible]合

後の無產政黨の分野については、大凡そ次の如き二つの場合を豫想することができる。第一の場合は、社會民衆黨の分裂と新政黨の樹立(ことに、第三次分裂に危機が不可避であつた場合)を機として、相當に廣い範圍に亙る合同が成立する場合であつて、この場合には、合同によつて、一つの有力な中心勢力が形成せられることゝなる（これは勿論、合同の包容する範圍如何に懸つてゐるが）。

第二の場合には、右の機會に廣汎な合同が實現されないで、社會民衆黨から分離した要素と主要な構成分子として（或は日本大衆黨の一部分を併せて）新政黨が樹立され、他方には、地方政黨協議會が別個の全國的政黨に變形する場合であつて、この場合には、有力な中心點が形成せられる代りに、或る時間の間は、まづ數個の中心に勢力が集積せられ、この集積せられた小中心の間に、集中と統一の作用が進行しなければならぬ。

×

いづれにせよ、現在の分裂狀態がなほ相當の年月の間繼續するものとしたならば、わが國における新興階級の政治勢力の結成が、著しくその進行を妨げられることは、疑ひの餘地がない。大衆は政治運動と無產政黨一般に對する信賴と興味を失ひ、或は近い將來に、政治運動の沈滯期を現出することさへも豫想することができる。

戰線の分裂はいろ〱な意味において、無產政黨とその運動との、精神上の墮落を誘致する危險がある。就中、最も低劣な種類の墮落は、金錢に絡まる墮落である。現在のような分裂狀態にある限り、黨員の黨費によつては、政黨を維持することさへも不可能であつて、それは勢ひ、何らかの方法で金を拵らへる手腕のあるものが、黨の實權を握る形勢を馴致する。いなかような傾向は、旣に或る程度まで現はれてゐると云つてよい。かような狀態が馴致せられたなら、無產政黨には、もはやブルジョア政黨を暴露する資格はない。

政黨は、謂ゆる「幹部」の金の才覺によつて維持せられるものだといふ觀念は可なりに一般的となり、正確に黨費を收めることが、寧ろ例外となりつゝある。昨秋の某黨の創立大會は、三百有餘の代議員を狩り出すために、二千圓を費やしたと傳へられてゐるが、これは必ずしも某黨のみではない。規定の黨費の納入が正確に行はれてゐる黨は、恐らくは稀れである。最近の東京無產黨の創立大會が、黨員中の有志から一名二十錢の醵出をして一部の經費を支辨したことは、寧ろ例外的な場合と云つてよい。

小黨分立は、資本による買收を制限する。それは、勞働組合幹部以外に求めることを餘儀なくする。現に日本大衆黨の分裂も社會民衆黨の分裂も、幹部の金錢問題に絡まつてゐることは、必ずしも偶然の暗合だとはいはれない。ブルジョア政黨が分裂すべからざる點から經費を引き出したといふ場合にも、それは畢竟、その政黨が代表するブルジョア階級の或る者の懐中からであつて、階級的には必ずしも不正ではない。これに反して無產政黨の場合には、黨の領袖が、或る個人の金の寄附の不純に頼つてゐるとしたならば、反對階級から資金を仰ぐ嫌疑を被合と非すべからざる必要とは、極めて大きいと云はなければならぬ。どちらがどちらを壓倒する勝者になるだらうか！

この一事のみから見ても、政治戰線が分裂の現状にあるかぎり、無產階級の政黨は、健全な發達をすることはできぬ。

資本王國の財産調べ

高橋龜吉

住友王國論

一、住友の産業支配網

住友は、三井、三菱に次ぐ我國第三の大財閥である。三井の資産が大約八億、三菱が五億に對し、住友は大約二億（詳はしくは後述）と云ふところであらう。ところで、住友の産業網は、その資産の割に、他に比し著しく小規模だ。住友王國が、これ迄、保守鎖國主義でやつて來た結果である。尤も、大正六年及び九年の兩度に亘り、住友銀行を公開して、その結果の良好なるに自信を得て、爾來、舊來の鎖國主義を一掃すると共に、進んで、他の財閥其他との事業の提携をも辭せざるに至り、更に、最近に至つては、積極的に各種事業に愈々積極的に進出することゝなつた。

斯様にして、住友王國の産業網は、近時、漸く、大財閥として大なる遜色を見ざる體容を稍々整へるに至りつゝあるが、しかし、時已に、多くの有望事業は、それ〴〵、その勢力範圍定り、如何に住友王國の財力を以てするも、急激なる産業網の發展は徐々であるが、しかし、巨大の資力を背景とする住友王國の進出振りは、昭和二年の金融大恐慌を轉機にして、漸く目覺しくなりつゝある。思ふに、金解禁後の我が經濟の受難期を通して、更に、大財閥の活躍は刮目するものあるべく、此の機會に、住友王國は更に一大進出を試みるであらう。

それは兎に角、現在までに於ける住友王國の産業網について云へば、金融資本の産業支配としての進出は未だ極めて限られ、その大部分は、別子銅山と住友銀行とを中心として發展した部

は、嫡出子的産業の一団であると云ふことが出来る。例へば、別子銅山の原鋼加工事業として住友伸銅鋼管、住友電線製造が巣立ち、その嫁分として住友製鋼所が併立した。更に、別子銅山の電気部が巣立つて土佐吉野川水電となり、又、別子銅鑛製錬上の副産的事業（含有硫黄分利用）として住友肥料製造が發達したと共に、別子銅山用の石炭自給を中心にして炭礦事業に手が伸び、それが獨立して住友九州炭礦となり、その經營が北海道の住友坂炭礦の經營となつた。而して、以上諸事業のオフィスを基礎として發達せるものが住友ビルヂングだ。更に、以上の諸製造品販賣機關に住友合資直営の販賣所がある。しかし、此の販賣所は、三井物産、三菱商事の如く、一般商事会社としては活動せず、專ら、住友財閥關係事業製産品の賣込機關たるに過ぎぬ。しかも、その賣込も、相手が主として、陸海軍、鐵道省、遞信省、東京市其他の地方團體、等の官公廳關係のもの多き状態である。加ふるに、この販賣所は、直系事業に必要とする購入品の仕入れにすらも關係しないと云ふわけで、全然、商事會社としての活動ではない。斯く、住友が、商事会社としての活動を全く避けてゐるところに、依然、住友財閥に保守的空氣が今尚漂つてゐることを何人も否めない。しかし、但し、住友財閥が、三井物産、三菱商事の如く、商業分野に進出することを許容は、已に、此の販賣所に於て窺知されつゝあるわけである。

轉じて、住友銀行から巣立つた事業を見るに、その第一嫡出子は住友倉庫で、これはもと銀行業の一部から獨立したものだ。第二嫡出子は住友信託で、第三のそれは住友生命だ。而して、以上、別子銅山及住友銀行並にそれから巣立つた事業のそれぞれは、別掲系統圖表の如く各々その關係産業に手を伸ばしてゐる。これが、住友王國直系産業網の根幹だ。

斯く、住友王國の産業網は、云はゞ自然成長的である。勢ひ、その事業の經營、スタッフ等が十分に出來てゐる。住友系事業が、從來、企業的に云つて、少からず堅實であつた所以は茲にあるわけで、住友王國の特色の一つである。

以上の根幹産業の外、住友王國は最近、その巨大な金融資本をバックにして、新産業分野に進出しつゝあることは已述の如くである。而して、その新事業として注目すべきものに、日本樂器、日米板硝子、扶桑海上火災等がある。日本樂器は單に東洋一の樂器製造のみならず、木工製品、ベニヤ板等を産する。そこで、住友は、合資直營の林業の加工機關として、之に目をつけ、手に入れたものだ。日米板ガラスは米國のリビー・オウエンス・シート硝子會社と、住友、三菱、島徳との提携事業だ。又、扶桑海上火災は、住友、東京海上火災（三菱系）日下汽船

住友系諸會社系統圖

「備考」表中*印は住友の支配力が大體に決定的なもの。無印は同じく準支配的なもの。△印は住友の支配力未だ以上の如くならざる關係會社である。

住友合資
- 鴻之舞鑛業所
- 大萱生鑛業所
- 高根鑛業所
- 林業所
- 販賣所

直系會社
- 住友銀行 — *ハワイ住友銀行。*シヤトル住友銀行。*加州住友銀行。*攝前銀行。*三州平和銀行。*和歌山倉庫銀行。*佐賀百六銀行。△昭和銀行。△大阪合同紡績。△帝國蠶絲倉庫。△南滿洲鐵道。
- 住友信託 — △福島紡績。△合同毛織。△大日本セルロイド。
- 住友生命保險 — △日本相互貯蓄銀行。
- 住友電線製造 — *藤倉電線。中華電氣製作所。△日本電氣。
- 住友肥料製造 — イソライト工業。
- 住友倉庫 — *富島組。
- 住友別子銅山。 住友九州炭礦。住友坂炭礦。住友伸銅鋼管。住友製鋼所。
- 住友ビルデイング。 土佐吉野川水電。

傍系會社
- 日本樂器 — 山葉洋行。
- 大阪北港。 扶桑海上火災。日米板硝子。九州送電。

關係會社
- 大阪商船。 日本ビクター。汽車製造。阪神電氣鐵道。九州電氣軌道。
- 北海道電燈。 泉尾土地。
- 若松築港。 日本電力。九州水力電氣。伊豫電氣鐵道。日本電氣證券。
- 留萌(るもい)鐵道。 エンパイヤ・ランドリー。
- 東亞興業。 東洋窒素工業。南米土地。山東鑛業。金福鐵路公司。
- 日清汽船。 日本無線電信。
- 日本航空輸送。 北樺太鑛業。北樺太石油。日本銀行。三井信託。

その提携事業だ。ところで、以上二事業ともに、住友はその最大株主たる上に、島徳又は山下の持株が何れも住友銀行に擔保に流入つてゐる關係から、その支配力は決定的になつてゐる。これは又、日本樂器についても同樣だ（但し日本樂器は住友信託、住友生命より融通）。こゝに、われ等は、住友が傍系產業を金融資本的に支配するに至つた代表的事例を見出すのである。尚は、日本樂器と關連して、住友は更に、日本ビクターに關係した。これは、住友電線と提携せる米國ウエスターン電氣とヴイクターとの密接關係から流を發すると云ふが、兎に角、住友が、かゝる方面に進出せんとしつゝあることを窺ひ得る。

住友の傍系事業には、更に、大阪北港と九州倉庫がある。前者は、大阪港口近邊に大土地を所有する住友、島徳、渡邊三家の共同事業の土地會社だが、住友が斷然リードし、後者は、住友王國の水運事業への進出第一歩の事業として、去る大正十四年新設されたものだ。

右の外、住友には、單なる關係事業が多少ある。中でも、歷史的に及び人的に關係の深いのは大阪商船だが、しかし、要するに單なる一割の關係率以上のものではない。その他の關係事業の大部分は系統圖の示す如く、大財閥の共同出資事業である。

斯樣にして、いま、住友王國の傘下にある事業は、合資直屬のものを除き、直系十三社、傍系五社、それ等の子會社にして支配的のものの九社、同上準支配的のものの三社、單なる關係會社九社、外に住友合資直屬の關係會社二十六社、總計六十五會社である。しかも、以上諸會社中、大會社として、第一流に屬するものは住友銀行一つと云つてよい。三井、三菱、安田、大倉等が何れも百數十社を算したのに比し、少からず、その規模の未だ小なることを否み得ないであらう。詳はしくは、別掲系統圖の示す通りである。

二、住友王國の人的支配網

住友王國の總本部は云ふ迄もなく住友合資會社である。が、最近までも、住友の事業支配は、封建的な仕來り政制度であつて、銀行を除けば、他は何れも雜然と「住友總本家」に直屬した事業であつた。然るに、時勢の大きな波に搖られて、遂に住友王國の產業組織は改革せられ、こゝに大正十年二月、現在の住友合資會社が生れた。

しかし、最初は、依然、その直下に、舊「住友總本店」の事業を直轄したが、その後、漸次之を獨立の一會社に仕立て、分

醸し、いまや、住友合資會社直屬のものは、圖表の如く、三つの小鑛業所と林業及販賣所のみとなり、他は何れも持株に由つて之を統制するに至つた。卽ち、他の大財閥のそれと同じく、住友合資會社は、單なる一個の保善社として、總事業を支配統轄する總本部となるに至つたわけだ。試みに、いま現在の形に於ける住友直系事業の設立年月を見るに、左の如く、銀行と製鋼所と水電と電線製造所とを除けば、他は何れも、合資設立の大正十二年以降であつて、之に由り、住友直系事業の陣容が、今日の組織を有するに至つたことの如何に最近のことであるかを窺ひ得る。

住友銀行	明治二十八年
住友製鋼所	大正四年
住友電線製造所	大正八年二月
土佐吉野川水電	大正九年十二月
住友倉庫	大正十二年八月
住友ビルヂング	大正十二年八月
住友生命(買收)	大正十四年
住友肥料製造所	大正十四年六月
住友信託	大正十四年七月
住友伸銅鋼管	大正十五年七月
住友別子銅山	昭和二年六月
住友九州炭礦	昭和三年七月
住友坂炭礦	昭和三年七月

斯く、住友王國の支配組織は、形式的には最近著しく近代化して來た。しかし、形式的改革は容易だが、實質が之と一致するに至るは容易でない。實質上の住友王國は、依然として君主專政の遺制に圍まれてゐる。例へば、三井、三菱王國に於ては、各事業はそれぐ〜多大の獨立性を有し、謂はゞ一種の聯邦制であるのに對し、住友王國は著しく中央集權で、各事業主腦者の獨立性は極めて限られ、重要事項は一々、合資幹部の認可を要する。その上に總理事が、文字通り專政君主權を持つてゐる。斯樣なわけで、住友王國の合議組織が、名實ともに備はるに至るには、更に相當の年月を要するであらう。

それは兎に角、住友王國の陣容を見るに、總本部たる合資は、拂込資本金一億五千萬圓で、その全部が吉左衞門一家の出資にかゝる。此點、三井が十一家、三菱が兩家に別れてゐるのと異つてゐる。合資の社長には云ふ迄もなく吉左衞門氏が据つてゐるが、その總理大臣格は總理事の湯川寛吉である。而して、その業務執行員は常務理事の小倉正恒、理事の肥後八次にして、監事が松本順吉である。此の外に、銀行の八代則彦、信託の今村幸男、電線の秋山武三郎の三氏が準重役として揃ひ、以上で住友の最高幹部を形成する。而して、此の下に、各事業の首腦

者が居並ぶのであるが、いま、その重なる者を、前記最高幹部と併せ一表にして見れば左の如くである。

合資会社

社長	住友吉左衛門
總理事	湯川寛吉
常務理事	小倉正恒
理事	肥後八次
監事	松本順吉
人事部長兼	肥後八次
經理部長	大屋敦
總務部長	川田順
工作部長	日高輝

住友銀行	八代則彦
	加賀覺次郎
	大平賢作
住友信託	吉田眞一
	今村幸男
別子銅山	鷲尾勘解治
九州炭礦	山本信夫
住友生命保險	國府精一
住友電線製造	秋山武三郎
住友肥料製造	日高直次
住友倉庫	山本五郎
住友伸銅鋼管	吉田俊之助
	山中榮吉
住友製鋼所	加藤榮
	荒木宏

これ等の最高幹部及び各々は、更に、直系、傍系その他の支配會社並に關係會社に、重役として名を列して、住友王國の各事業を色々の關係に於て統轄してゐる。いま、その重なる者を左に列記するであらう。

住友吉左衛門（住友合資會社社長）——住友銀行取締役、住友信託取締役、住友倉庫取締役、住友生命保險取締役、住友別子銅山取締役。

湯川寛吉（住友合資會社總理事）——住友銀行取締役會長、住友別子銅山取締役會長、住友電線製造所取締役會長、住友倉庫取締役會長、住友生命保險取締役會長、住友伸銅鋼管取締役會長、住友製鋼所取締役會長、土佐吉野川水力電氣取締役會長、住友信託取締役、大阪北港取締役、藤倉電線取締役、東洋窒素工業監査役、大阪商船取締役、東京興業取締役、南米土地監査役、南滿洲鐵道監事。

小倉正恒（住友合資會社常務理事）——住友肥料製造所取締役會長、住友坂炭礦取締役會長、住友製鋼所常務取締役、扶桑海上火災保險取締役、土佐吉野川水力電氣取締役、大阪北港取締役、住友倉庫監査役、住友ビルデイング取締役、山東礦業取締役、住友電線製作所取締役、九州送電監査役、住友信託取締役、住友生命保險取締役、住友伸銅鋼管取締役、住友別子銅山取締役、日本電氣證券取締役、全滿鐵路公司取締役、住友倉庫取締役。

肥後八次（住友合資理事）——住友伸銅鋼管株式會社取締役、住友電線製造所取締役、住友肥料製造取締役、住友九州炭礦株式會社取締役、大阪北港株式會社取締役、土佐吉野川水力電氣株式會社取締役、住友別子銅山株式會社監査役、住友製鋼所監査役、九州送電取締役。

大屋敦（住友合資經理部長）——日米板硝子取締役、九州送電取締役、東洋窒素工業取締役。

川田順（住友合資總務部長）——住友ビルデイング常務取締役、住友製鋼所取締役。

八代則彦（住友銀行常務取締役）——住友信託取締役、住友倉庫監査役、住友伸銅鋼管監査役、住友ビルデイング監査役。

大平　賢作(住友銀行常務取締役)――住友電線製作所監査役、昭和銀行取締役、和歌山倉庫銀行取締役、住友ビルディング取締役、佐賀百六銀行取締役。

鈴木　謙三郎(住友銀行常任監査役)――和歌山倉庫銀行監査役、佐賀百六銀行監査役。

加賀　覺次郎(住友銀行常務取締役)――日米板硝子監査役。

國府　精一(住友生命保険專務取締役)――住友銀行取締役。

鷲尾　勘解治(住友別子銅山常務取締役)――土佐吉野川水力電氣取締役。

山本　五郎(住友倉庫常務取締役)――富島組取締役。

日高　直治(住友肥料製造所常務取締役)――富島組監査役、エンパイヤランドリー取締役、住友ビルディング取締役、住友製鋼所監査役。

秋山　武三郎(住友電線製造所常務取締役)――中華電氣製作所監査役、藤倉電線取締役。

三、住友王國の資本網

住友王國の資本源は、住友合資自らの資産と、その支配下の金融資本から成り立つ。先づ、住友合資自らの資本を見るに、その表面上の資産は一億五千萬圓である。一體、大財閥の資産は、何れも、その表面上の資産よりも尠からず多いのが常だ。ところで、住友合資は、その設立が物價の尚ほ極めて高價であつた大正十年二月であつたから、その後に於ける物價の下落を顧れば、他の財閥の如く評價上の含み――悪く云へば秘密逃れの財産隠匿――はさう甚しくはないわけである。尠くとも、周圍の事情から云へばさうである。先づ、この點を頭に入れて置いて他の財閥のそれと比較する用意が要るであらう。

扨て、住友王國の資産であるが、筆者の調査し得たる範圍(その詳細は後掲)だけで、住友合資の株式會社出資額は、拂込金額で、左の如く、約一億三千五百萬圓を算する(但し算出の仕方は總株數に對する住友合資の持株數の率を求め、此の率を各々會社の拂込資本額に乘じたものである。以下各表の算出の仕方は皆右に同じである)。

直系親會社拂込金	九八、九六八千圓
傍系會社同上拂込金	二三、九四四千圓
關係會社拂込金	六、五五二千圓
合計	一二九、四六四千圓
外住友一家の名に出る所有	五、五四二千圓
總計	一三五、〇〇六千圓

扨て、これ等事業投資の實價如何であるが、昭和四年上半期に於ける成績について見れば、銀行、信託、生命、別子、電線、肥料は別だが、その他の直系事業は何れも八分以下の配當で、中にも倉庫と、住友坂炭礦は無配、伸銅と製鋼所とは五分である。爾平價金解禁後に於ては、更に、その打撃鮮少ならざるものと見ねばならぬ。尤も、この低配當は、他のボロ會社のそれ

と限り、未だ投資時代で他日の飛躍を培ひつゝある結果であるが、尤も、現在、この收益力の少いことに變りはない。加ふるに、從來、住友王國を育て上げた偉大の飛箱別子銅山（拂込資本千五百萬圓）は、その命脈いよ／＼涸渇し、大體に今後十年、如何に永くも十五ヶ年後には廢山の運命にあつて、已に當局者は、その後に於ける更生策として、銅山より工業への轉換策を講じつゝある有様である。更に、住友合資が約二千百萬圓を所有する大阪北港土地會社も無配である。

住友王國の事業には、銀行、信託その他拂込資本の五割以上の市價を有する優良事業も少くないが、しかし、以上の如き收益價値乏しき事業も相當あるわけ故、住友王國投資事業の評價は、之を平均して、その拂込資本の二割乃至三割增位と見て大過ないのではあるまいか。さうすると、以上住友王國の持株資價は二割增と見て一億六千二百萬圓、三割增と見れば一億七千五百九十萬圓となる。外に、住友には、合資直屬事業がある。その林業部は、朝鮮と北海道に山林を持つてゐるが、未だ投資時代で收益期に至らないが、その資產數百萬圓を算する。尙ほ、別に地所課があつて、丸の內、鶴見、大阪市內等に少からぬ地所を持ち、その資產又何百萬圓だと云はれてゐる。加ふるに販賣所亦、少からぬ資產を持たなくてはやつて行けぬ。外に、合資直屬の三鑛業所の資產がある。いま以上合計を一千九百萬圓と概算すれば、住友王國の資產は總計約一億八千萬圓乃至一億九千萬圓となる。

右の外、筆者の調査に於てもその拂込不明の額が、後掲の如く相當あり、又、筆者の調査漏れ（就中中小額投資は全部漏れてゐると云つてよい）も尙ほ少からずある筈であり、加ふるに、住友家の地所家屋骨董品、什器等、更に筆者の眼の屆かぬ隱れたる資產等々を入れゝば、それ等の總計が尙ほ數千萬圓近くを算するであらう。果して然らば、住友王國の資產は、大體に二億圓內外だと見て大過ないのではあるまいか。問題は借入金の如何だが合資がその固定投資を借入金に賴るが如きことは、住友の健實主義から云つて、絕對にないと云はれてゐる故、この點は無視してよいわけだ。

住友王國の資本源には、以上の外、銀行、信託、保險の金融資本がある。その總額は、別掲第一表の如く約九億四千七百萬圓の巨額を算する。此の中には、預金その他が入り組んで計算が多少ダブツテゐるものもあるが、大體に、この額だけは、住友王國の支配下に立つ金融資本である。而かも、此の中、住友系の出資額は僅かに三千二百八十萬圓にして、その金融資本總額に對する割合は僅かに三％四六である。而して、この率は、

之を住友合資のみに限つて見れば更に僅少にて、その額二千九百八十萬圓、同上率三%一五である。以て住友王國が僅少なる資力にて、如何に巨大の資力を支配してゐるかを窺ひ得るであらう。詳はしくは第一表を見られよ。

(一)住友支配の金融資本高表　(昭和三年末現在)

	株主勘定	預金信託又は責任準備金	(A)合計	(B)住友系所有資本	(A)對(B)の率	(B)對(A)の率	(C)住友合資所有資本	(A)對(C)の率	(C)對(A)の率
住友銀行	千円 七五、五〇〇	六四二、八六三	七一八、三六三	二八、三一五	三%九四	二、五三七%〇四	二七、七五五	三%八六	二、五八八%一三
同上支配銀行	千円 二、五二六	二三、七九三	二六、三一九	一、九七七	七%五二	一、三三一%二六	—	—	—
住友信託	千円 六、七五〇	一八四、七〇九	一九一、四五九	一、八三〇	〇%九六	一〇、四六二%四四	一、三七五	〇%七二	一三、九二四%二九
住友生命	千円 一、一〇五	九、四五〇	一〇、五五五	六八〇	六%四四	一、五五二%二二	六七五	六%四〇	一、五六三%七〇
合計	千円 八五、八八一	八六〇、八一四	九四六、六九五	三二、八〇二	三%四六	二、八八六%〇九	二九、八〇五	三%一五	三、一七六%三〇

(備考)以上の外住友銀行支配の在外國銀行三行の預金約一千萬圓、同上資本六十萬圓であるも便宜之を除外して計算す。

扨て、住友王國は、以上兩者の如き大資本を擁して、如何なる事業網を張つてゐるか。例の如く合資直屬以外のものを、直系、傍系、關係會社に三大別し、更にそれ等の子會社を支配的、準支配的、關係會社に細分して見るであらう。

先づ、直系會社であるが、これは、第二表の如く十三社、拂込資本一億三千二百萬圓を算する。而して、この中、住友系の所有株割合は八〇%五三、住友合資の同上七四%九四である。住友王國の投資割合が著しく高い。これは大體に三井三菱と同じで、直系事業の多くが尙ほ鎖國的なることを伺ひ得る。然り、直系會社十三社中、之を一般に開放してゐると見るべきものは、銀行、信託、ビルディングに限られ、電線は米國ウエスターン電氣との提携であり、その他は大體に住友王國の一族郞黨の獨占である。詳はしくは第二表の如し。

(二)直系會社資本支配表　(大體昭和三年末)

會社名	拂込資本金	住友系所有	同上株式所有割合	住友合資所有	同上株式所有割合
住友銀行	千円 五〇、〇〇〇	千円 二八、三一五	% 五六・六三	千円 二四、九七〇	% 四九・九四
住友信託	五、〇〇〇	一、八三〇	三六・六〇	一、二五〇	二五・〇〇
住友生命保險	七五〇	六八〇	九〇・六七	六五〇	八六・六七
住友電線製造	一〇、〇〇〇	七、五〇〇	七五・〇〇	六、二五〇	六二・五〇
住友肥料製造	一、八〇〇	一、七六七	九八・一七	一、七六七	九八・一七
住友倉庫	一五、〇〇〇	一四、九四〇	九九・六〇	一三、六四〇	九〇・九三
住友別子鋼山	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一〇〇・〇〇	一五、〇〇〇	一〇〇・〇〇
住友九州炭鑛	五、〇〇〇	五、〇〇〇	一〇〇・〇〇	五、〇〇〇	一〇〇・〇〇
住友坂炭鑛	二、〇〇〇	一、一三〇	五六・五〇	一、一三〇	五六・五〇

住友伸銅鋼管	九,〇〇〇	一五,〇〇〇	一〇〇・〇〇	一五,〇〇〇	一〇〇・〇〇
住友製鋼所	九,〇〇〇	八,九五九	九九・五四	八,〇九六	八九・九六
住友ビルディング	六,五〇〇	三,二五七	五〇・一一	三,二五七	五〇・一一
上佐吉野川水電	三,〇〇〇	二,九五八	九八・六〇	二,九五八	九八・六〇
合計	一三三,〇五〇	一〇六,三三六	九〇・五三	九八,九六八	七四・九四

(備考)住友合資中には住友一家の持分を含む

これ等直系會社は、圖表の如く子會社を持つてゐるが、しかし、三井三菱のそれに比し、その數も其の資本も極めて少ない。即ち、その支配的なものは、第三表の如く、合計六社、その拂込資本七百五十六萬圓で、住友系がその五五%八四を占めてゐる。子會社と雖も、その關係の著しく密接なることを窺ひ得る。

(三)　住友直系會社の支配的子會社(大體昭和三年末)

會社名	公稱資本	拂込資本	住友系所有	同上割合
和歌山倉庫銀行	五〇〇千円	四一〇千円	四〇四千円	九八・五〇%
佐賀百六銀行	二,〇〇〇	五〇〇	四二九	八五・七〇
小計	二,五〇〇	九一〇	八三三	九一・五四
豐前銀行	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
三州平和銀行	一,〇〇〇	二五〇	—	—
以上合計	四,五〇〇	二,一六〇	△一,九七七	△九一・五四
藤倉電線	五,〇〇〇	四,四〇〇	一,六七三	三八・〇〇
富島組	一,〇〇〇	一,〇〇〇	五七三	五七・六
總計	一〇,五〇〇	七,五六〇	四,二二三	五五・八四

(備考)△印は住友系所有分明のもの丈を以て不明の分までも合計推算したものである。以下諸表皆同じ。尚ほ住友銀行が營業の便宜上、外國銀行を子會社として持つてゐる(圖表を見よ)が之は省略す。

而して、同上の準支配的子會社は二社で、外に傍系會社の準支配的子會社を加へて三社になるが、何れも小會社でその合計拂込資本金は僅々二百七萬五千圓に過ぎない。第四表の如し。

(四)　住友直系及傍系會社の準支配的子會社(大體昭和三年末)

會社名	資本金	拂込資本	住友系株式 金高	住友系株式 同上株式所有割合
中華電氣製作所	一,五〇〇千円	四八八千円	一〇千円	二・〇八%
イソライト工業	二〇〇	五〇	—	—
*山葉洋行	三七五	三七五	—	—
合計	二,〇七五	九一三	△一九	△二・〇八

(備考)*印は傍系會社。

次は傍系會社であるが、これもその數未だ僅か五社に過ぎず、資本も大阪北港土地會社の三千五百萬圓を除けば他は皆二三百萬圓臺の小會社である。詳はしくは、第五表の數字に説明をゆづる。尚ほ、傍系會社には、已述の準支配的子會社が一社あるのみで、他に支配的子會社は一つもないことも、三井三菱のそれに比し著しく單純である。

(五)　傍系諸會社表(大體昭和三年末)

會社名	拂込資本金	住友系所有株式	同上株式所有割合	住友合資所有	同上株式所有割合
大阪北港	三五,〇〇〇千円	二一,五九九千円	六一・七二%	二〇,九四四千円	五九・八四%

日本樂器	三、七〇〇	四八六	一三・〇〇	四八六	一三・〇〇
扶桑海上火災	二、五〇〇	四九九	一八・二七	四五九	一八・三七
日米板硝子	三、二五〇	一、一〇三	三三・九四	九三三	二八・七〇
九州送電	二、五〇〇	五一九	二〇・七五	四五六	一八・二五
合計	四六、九九〇	二四、一六六	五一・四三	二三、二七八	四九・五四

以上が、住友王國の支配下にある事業會社のすべてゞある。しかし、住友王國は、この外に、筆者の「所謂關係會社」がある。いま、住友合資自ら投資してゐるもの、重なるものを擧ぐれば第六表の如くである。

（六）住友合資の直接關係せる諸會社表（昭和三年末）

會社名	資本金（千圓）	拂込資本（千圓）	住友合資所有 金額（千圓）	住友合資所有 同上株式所有割合（%）
東西興業	二〇、〇〇〇	一三、〇二三	三五八	二・七五
金福鐵路公司	四、〇〇〇	二、〇〇〇	七五	三・七五
汽車製造	六、〇〇〇	三、五二五	一五九	四・五一
日本電力	一二〇、九五五	八二、二五四	四九四	〇・六〇
九州水力電氣	八六、〇〇〇	六三、一九〇	四一三	〇・六六
伊豫電氣鐵道	三〇、九八七	二三、八五九	一七四	〇・七六
阪神電氣鐵道	五〇、〇〇〇	三五、〇〇〇	三、二五三	九・二九
九州電氣軌道	五〇、〇〇〇	二九、六〇〇	二二九	〇・七四
日清汽船	一六、二〇〇	一〇、一二五	一七	〇・一七
泉尾土地	四、五〇〇	四、五〇〇	一五五	三・四四
若松築港	三、六〇〇	二、二五〇	一〇九	四・八四
三井信託	三〇、〇〇〇	七、五〇〇	三〇〇	一・〇〇
日本無線電信	一〇、〇〇〇	八、七五〇	八〇	〇・九一
日本航空輸送	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	三三	〇・三三
日本ビクター	二、〇〇〇	七〇〇	一一二	一六・〇〇
北樺太鑛業	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇	六四	一・六〇
北樺太石油	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇	一六	〇・四〇
北海道電燈	五四、〇〇〇	三五、〇九〇	六六	〇・二〇
日本銀行	六〇、〇〇〇	三七、五〇〇	三三五	〇・八九
東洋窯業工業	五、〇〇〇	一、二五〇	一五六	一二・五〇
南米土地	一、一〇〇	五五〇	五〇	九・〇九
大阪商船	一〇〇、〇〇〇	六二、五〇〇	一〇〇	〇・一六
小計	六八四、三四〇	四八六、六四〇	六、五五〇	一・三五
山東鑛業	五、〇〇〇	二、一二五	—	—
留萌鐵道	二、五〇〇	一、五〇〇	—	—
日本電氣證券	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	—	—
エンパイヤ・ランドリー	二〇〇	一〇〇	—	—
合計	七〇一、〇四〇	四九六、三四〇	△六、六七四	△一・三五

この中、大阪商船は、歴史的にも重役關係に於ても、金融關係に於てもその關係は少からず密であり、日本ビクター亦特殊の關係に立つてゐる。又、阪神電鐵は啻にこの特殊の少からず大であるのみでなく、金融關係に於ても密接の關係がある。その他の投資も何かの關係にあるものが多いが、しかし、又、單に大財閥の共同出資的「國家事業」として投資せるものも少からずある。而して、それ等會社の公稱資本合計は約七億圓、その拂込資本金合計は四億三千六百餘萬圓にて、その中、住友合

資の投資せるものは六百六十七萬四千圓、率にして僅かに一%五三である。

この外、住友王國の直系合社が投資せるもので、單なる關係合社に過ぎざるものが、圖表の如く九社ある。その内容は簡略のため省略するが、いま其の資本總計を見るに、公稱五億三千七百萬圓、拂込四億三千三百圓、うち、住友系の持株（日本相互貯蓄、日本蛋紙不詳）合計八十七萬七千圓である。

四、住友王國の資本的支配力

住友王國の産業的資本網は以上の如くであるが、いま、次いで、これ等の資本網の總計と、之に對する住友王國の支配力の程度とを見るであらう。別掲第一表は、その鳥瞰的統計であるが、之に由れば、住友王國の支配下にある事業會社は、合資直屬の分を除き、公稱資本總計二億六千萬圓、同上拂込資本一億八千七百五十一萬三千圓である。しかし、之を三井三菱のそれと比較すると、左の如く、住友は著しく見劣りがするのみでなく、王國自らの純資產からいへば約三分の一に過ぎぬ安田王國にすら遙かに及ばない。

	公稱資本（千円）	拂込資本（千円）
住友支配會社	二六〇、九七五	一八七、五一三
安田支配會社	六八八、六〇五	三六一、六三三
三菱支配會社	九六〇、〇〇〇	六九〇、九〇〇
三井支配會社	一、一六〇、八〇〇	八〇七、一一一

住友の事業界支配への進出スタートが、大財閥中、一番後れて、ために、いま尚ほ、他のそれに追つき得ないでゐる反映たる

（一）住友支配の諸會社資本表

	A 住友の支配下に在るもの 公稱資本（千円）	A 拂込資本（千円）	B 同上準支配下のもの 公稱資本（千円）	B 拂込資本（千円）	以上合計 公稱資本（千円）	以上合計 拂込資本（千円）
直系十三社	一六五、〇〇〇	一三〇、五〇〇	—	—	一八五、〇〇〇	一三〇、五〇〇
傍系五社	六〇、〇〇〇	四六、九九九	—	—	六五、〇〇〇	四六、九九九
直系子會社	二〇、九〇〇	七、五六六	一〇、七〇〇	五〇八	三一、六〇〇	八、〇九八
傍系子會社	—	—	一七五	一七五	一七五	一七五
合計	二五八、九〇〇	一八六、六〇〇	一〇、八七五	九〇	二六〇、九七五	一八七、五一三

以上は、住友王國の支配下に立つ諸會社のみであるが、その外、住友王國が關係せる會社を加算すると、住友が色々の關係に於て參與せる會社資本合計は、第二表の如く、公稱約十五億圓、拂込十億五千餘萬圓となり、之に、住友合資を加へると公稱約十六億五千萬圓、拂込約十一億圓となる。

（二）住友支配及關係諸會社資本高表

	公稱資本（千円）	拂込資本（千円）
住友支配諸會社	二六〇、九七五	一八七、五一三

住友合資關係會社	七〇二、〇四一	四三八、一四〇
直系及傍系關係會社	七九七、七六六	四二三、六八六
合計	一、四九九、八〇七	一、〇五七、一二四
住友合資資本金	一五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇
總計	一、六四九、八〇七	一、三〇七、一二四

以上の如き巨大な資本を統轄するに、住友王國は、それぐ幾何の資本を以て之を支配してゐるか。いま、その住友王國支配下に在る會社について總括的に之を見れば、その詳はしき内容は第三表の如くである。こゝで注目すべきことは、傍系會社に於ける住友王國所有割合が、他に比し著しく高いことである。例へば住友系のそれが五一%四三なるに對し、三菱は一〇%七三、三井は二六%三三である。

	王國系統全體	同上中王國一家の所有
住友	五一・四三%	四九・六四%
安田	三九・〇〇	三六・〇〇
三菱	一〇・七三	四・二七
三井	二六・三三	二四・七九

之に因つて、住友の投資が、最近開放的になつたとは雖、尚ほ、如何に鎖國的遺風濃く、従つていま尚ほ著しく集約的であることを容易に窺ひ得るであらう。兎に角、住友王國の投資は斯く集約的なる結果、その支配下にある諸會社に對する所有資本割合は極めて高く、平均して、住友系全體で七一%八六、住友合資及び一家で六八%一五である。その支配力の如何に絶對的であるかを看取するに難くないであらう。委はしくは、第三表を見られよ。

（三）住友系會社資本と住友合資及住友一家の投下資本

諸會社の位地	公稱資本	拂込資本	住友系所有	同上割合	住友合資及住友家所有	同上割合
住友合資	一五〇、〇〇〇千	一五〇、〇〇〇千	一五〇、〇〇〇千	一〇〇・〇〇%	一五〇、〇〇〇千	一〇〇・〇〇%
直系十三社	一八五、〇〇〇	一三一、〇五〇	一〇八、三三六	八〇・五三	一〇四、五二〇	七九・一
傍系五社	六三、〇〇〇	四八、九九〇	二四、一六六	五一・四三	二三、一七八	四九・五五
支配的直系子會社	一〇、五〇〇	七、五六〇	四、一一一	五五・八四	—	—
支配的傍系子會社	—	—	—	—	—	—
以上小計	二五八、五〇〇	一八六、六〇〇	一三四、七一四	七二・一〇	一二七、七八八	六八・四六
準支配的直系子會社	一、七〇〇	五三八	二九	二・〇八	—	—
準支配的傍系子會社	三七五	三七五			—	—
以上合計	二六〇、五七五	一八七、五一三	一三四、七四三	七一・八六	一二七、七八八	六八・一五
合資及住友一家關係會社	六六二、〇四一	四三六、二四〇	八、六六七	一・五	八、五五五	一・五

最後に、例の如く、別掲第四表に由つて、住友王國が元質幾何の資本を以て、どれだけの資本を支配してゐるかの、更に正確なる割合を求めるに、住友系全體としては、一億三千萬圓の投下資本を以て、その一倍四割三分餘に相當する一億八千七百萬圓の資本を支配してゐるが、更に之を住友合資及同一家のそ

れについて見れば、その投下資本の一倍四割六分餘に相當する資本を支配してゐることになる。委しくは第四表を見られよ。

（四）住友の支配會社資本と住友の投下資本との割合

	直系會社	傍系會社	合計
(イ) 現會社拂込資本	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ロ) 支配的子會社同上	[illegible]	—	[illegible]
(ハ) 以上小計	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ニ) 準支配的子會社同上	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ホ) 總計	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ヘ) 現會社に於ける住友系所有高	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ト) 同上住友合資及住友家所有	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ヘ)に對する(ハ)の%	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ト)に對する(ハ)の%	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ヘ)に對する(ホ)の%	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(ト)に對する(ホ)の%	[illegible]	[illegible]	[illegible]
(イ)に對する(ホ)の%	[illegible]	[illegible]	[illegible]

此の率は、三井、三菱に比し、遙かに低い。例へば、後者の率に於て、住友の一倍四割六分なるに對し、三井は三倍一割七分餘、三菱は三倍七割六分餘であつた。これは、住友王國が、いま尚ほ主として産業資本的に活動してゐて、未だ、その金融資本家的活動が、極めて幼稚であることを反證する。だが、最近に於ける住友王國の活躍振りに顧みて、此の率は、遠からざる將來に於て、三井・三菱なみに進歩するであらうと思はれる。

五、住友系事業の位地

現在に於ける住友系事業の中心は金融業と重工業である。發生的には、銅鋼業が住友王國の脊骨であつた。しかし、いま、住友王國の背骨をなすものは金融事業である。住友銀行と住友合資はその進展の堅固な脚場をなすものであるが、大正十四年に至り、住友信託を新設し、更に同年生命保險業に手を伸ばした。即ち、當時、下郷傳平氏が持て餘してゐた日出生命を買收して今日の住友生命を築き、更に又、傍系として扶桑海上火災を乘取つてゐる。加ふるに、住友銀行は、その系下に四つの小銀行と三つの在海外銀行を從へ、威風堂々と金融界に乘出した。かくていまや、住友は、その信用に於て、三井、三菱に次ぐ大金融王である。將來、恐らく、住友生命及扶桑海上火災を脚場に、經驗を積み、スタッフを揃へて、更に保險界に一大飛躍を試み、いよいよ、大金融王國の陣容を整へるであらう。

ところが、他方に於て、從來、今日の大住友を培つて來た別子銅山は、已述の如く、その命脈が十年の後に迫つてゐる。かくて、當局者は、その廢山後の轉換策として之を製作事業化すべく已

に準備的努力を拂ひつゝあると云ふ。顧るに日本石油から新潟鐵工所が巣立ち、日立鑛山から日立製作所が發達した。別子銅山がその廢山後、其設備とスタッフを利用して製作工業に更生する望は、少からぬ困難を伴ふとは雖も、決して無謀ではない。果して然らば、住友王國將來の鑛業は二つの中炭礦山のみで、云ふに足らざるものとなる。

斯樣なわけで、住友王國はいま、鑛山事業の代りに、各種の製作工業の方面に進出せんとしてゐるものゝ如く、少からぬ捨石的投資を敢てして、他日の發展を育みつゝある。即ち、住友電線（及びその子會社の藤倉電線等）、伸銅鋼管、製鋼所を中心にして、斯界に着々と地歩を占めつゝある。而して、住友電線は大正九年日本電氣の手を通じて米國のウエースターン電氣と提携せる外、最近には米國アルミナム會社と握手してアルミ工業にも一大進出をなしつゝある。

だが、それだけでは、住友王國の產業網としては貧弱だ。加ふるに大金融資本の使ひ道もない。こゝに於て、住友王國は、一方には、日米板ガラス、日本樂器等の雜工業方面に手を伸ばすと共に、これ迄、大財閥の進出最も少き電力界に少からず食指を動かしてゐるかのやうだ。例へば、特殊事業の土佐吉野川水電を外にするも、九州送電に已に手を出してゐる。尙ほ、住友王國は、いまのところ商業方面の活動に殆んど手をつけてゐない。多くの財閥が其の商事會社の大失敗より破綻せる最近の事實のために、愈々、住友をしてその方面への進出を躊躇せしめつゝある。しかし、早晩、現在の合資直屬の販賣所が、その方面に活躍するに至るは必至の勢ひであらう。

しかし乍ら、住友王國の產業界進出の努力は、漸く、最近に於けるスタートである。しかも、今日の我が產業界の分野は、已にその重なる方面の繩張りが定つてゐて、急に、住友の進出を容れる事情でない。斯樣のわけで、住友王國の產業は已述の直系事業を除けば、他は何れも未だ云ふに足るものはないが、しかし、以上已述の新事業に由つて、住友王國の積極的進出運動の鋭鋒を窺ふに難くない。

以上の如き事情のため、住友王國の產業は、傍系に乏しく、且つ、直系事業のいま尙ほ投資時代、基礎工事時代に屬する色彩強く、從つて、子會社關係のものも極く限られてゐる。のみならず、事業全體として見て、大會社に乏しい。即ち、拂込資本の最大なるものは、住友銀行の五千萬圓、大阪北港の二千五百萬圓、別子銅山、住友倉庫の各一千五百萬圓にして、他は何れも千萬圓以下である。三井、三菱に比しスケールが著しく小なることを感ぜざるを得ぬ。だが、しかし、住友が漸く活潑に產

業支配擴大のため進出し始めたのは、已述の如く最近のことに屬し、その努力の結果が如何に實現するかの實績は、寧ろ今後のことである。三井、三菱二大財閥の已存繩張りを向ふに廻して、將來、新進の住友王國が、その支配下の巨大なる國家的金融資本力を、如何なる方面に利用し、以て新天地を如何に開拓せんとするか。それの如何は、今後に於ける我が財界分野圖の色分けを決定する最も興味ある問題である。

最後に、住友王國は、安田王國と共に政黨的關係の最も少ないことが、その特色である。だが、最近、住友直系事業の雄として大をなしつゝある電線、伸銅鋼管、製鋼所の三つは、專ら、その販路を官廳需要に繋いでゐること已述の如くである。更に、住友の新に進出せんとしつゝある電力界も、水力權及び電氣供給權を通じて政權と密接なる關係を內具してゐる。かゝる物質條件の下に於て、今後住友王國が、依然、從來の如き稀薄なる政黨關係を維持し得るか否かは極めて疑問であると云はざるを得ぬ。

資本論の冒瀆

――本誌前々號所載二木保幾教授の論説を讀みて――

三木清

一

マルクス經濟學は自覺された方法論をもつて武裝されてゐる。これがこの經濟學の强味であつて、その方法論的なものに對する意識なしにそれを倒さうとする者は却つてみづから倒されねばならぬ。それ故にわが國に於けるマルクス價値論の排撃の幾多の試みが失敗に歸した後に、方法論について特別な關心と教養と更に自信とを有せられる二木保幾教授が終にこの排撃の舞臺へ打つて出られたことは偶然でない。しかしマルクスは教授の學的功名心の對象となり得るものでなかつたやうである。

　二木教授は先づマルクスの價値論が平均觀察を基礎とすることを云はれてゐる。これはそれ自體としてはもちろん正しい。しかしながら教授はかかるいはゆる平均觀察がマルクスにおつて彼の經濟學の最も一般的方法論的特色たる客觀的社會的立場の上に立つてゐることに充分注意されてゐない。反對に教授はアトミスティックな立場に立つて平均を理解されてゐる。換言すれば、平均は教授に於ては、個物をもつて現實的なものとしそれから出發して作られた構成物に過ぎぬ。從つてそれは第二次的なもの若くは第三次的なものである。かかる平均はもとより特殊な歷史的規定をみづからに於て具へることが出來ない。かくてはマルクスのいふ價値は影の如き存在とならざるを得ない。ところでマルクスは云つてゐる、「ブルジョア社會の洒落は、生産のなんら意識的な、社會的な統制が先天的に行はれてゐないところにまさに存してゐる。理性的なものそして自然必然的なものはただ盲目的に作用する平均としてのみ自己を貫徹する。*」この簡單な言葉のうちにマルクスのいふ平均の意味は最

も明瞭に表現されてゐるであらう。不均は盲目的な不均である。しかもそれはブルジョア社會のうちに、その生産が無統制であればあるだけ一層強く、自己を貫徹しつつある現實である。かかる自然必然的な不均こそこの社會に於ける理性的なものである。それだからこそマルクスにとつて價値は影の如き抽象物でなく、却つて資本家社會の諸對象のまさに「對象性」そのものを形作るものなのである。

* クーゲルマンへの手紙、五四頁

マルクスによれば、商品の價値を形成する實體は抽象的な人間的勞働であり、この價値の量はこの勞働の量によつて測られる。この場合いはゆる不均觀察は如何にはたらいてゐるか。ところで商品の價値は人間的勞働そのものを、人間的勞働一般の支出を表示する」と彼は云ふ。それは特殊な發達をしてゐないあらゆる普通の人間が、平均的に彼の身體的有機體のうちにもつてゐるところの、單純な勞働力の支出である。單純な平均勞働そのものは、異つた國々と異つた文化諸時代とでは、もちろんその性質を變ずるが、しかし一の現存の社會では與へられてゐる。複雜勞働は自乘されたまたはむしろ倍加された單純勞働としてのみ妥當し、かくて複雜勞働のより小なる分量は單純勞働のより大なる分量に等しくなる。この還元が絶えず行はれてゐることは經驗が示してゐる。* 價値の實體をなす抽象的な人間的勞働は單純な平均勞働として明かにされる。しかしこのとき平均は抽象的な構成物と考へられるのでなく、却つてそれは一定の社會に於ては「與へられて」をり、「經驗が示す」ところの客觀的な現實と見做されてゐる。マルクスは他の箇所で更に明瞭な言葉をもつて語る、商品の交換價値をそれらのものに含まれる勞働時間で測定するためには、種々なる諸勞働それ自體が、無差別な、一樣な、單純勞働に、簡單に云へば、質的には同じであり從つてただ量的にのみ區別される勞働に、還元されてゐなければならぬ。かかる還元は一の抽象のやうに思はれる、しかしそれは社會的生産過程のなかで日々成し遂げられる一の抽象である。凡ての商品の勞働時間への解消は、凡ての有機體の原素への解消に比して、決してより大なる程度の抽象ではないがまた同時にそれと同じ程度に於ての實在的なる抽象である。**

* 岩波文庫版「資本論」第一卷第一分冊　五四頁。

** 河上・宮川譯「經濟學批判」九頁。

ここでまた我々はマルクスが抽象的な人間的勞働といふ場合の「抽象的」が如何なる意味のものであるかを明かに知ることが出來る。彼がこの概念を平均勞働の概念をもつて表現したのは、一面に於て、ここにいふ抽象的が決して非現實的なもので

ないことを示すためである。そこで彼は「一般的な人間勞働といふこの抽象物は、與へられたる社會の平均的個人の各々が爲し得る平均勞働に於て、現實に存在する。」と述べてゐる。總じて辯證法に於ける諸範疇並びに諸概念は、それらのものが社會的歷史的事實に相應する現實的なものである。それらのものが抽象的であるといふことは、それらのものが現實的であることを妨げるものでなく、却つて反對である。なぜなら社會的歷史的存在そのものが、その發展の過程に於て、かくの如き抽象的な範疇または概念によつて現實的に表現され得るが如き事實をみづから抽象してゐるからである。抽象は何よりも「社會的生産過程のうちで日々成し遂げられる抽象」であり、「實在的なる抽象」である。かかる存在そのものに於ける存在の抽象が歷史のうちに行はれてゐるが故に、辯證法的な抽象的な理論は、理論でありながら、なほ現實的であることが可能である。マルクス經濟學の諸範疇及び諸概念は凡てこのやうな性質を擔つてゐるのでなければならぬ。しかるに二木敎授はこのことについてなんら理解されることがない。そして敎授は、マルクスは「價値を一の類概念として規定した」と云ひ、またその商品は「商品の類概念である」と云はれる。類概念といふ言葉は形式論理學の言葉であつて、辯證法的な概念構成とはまさに反對のものである。それはアトミスティックな立場に於て構成されたる、非現實的な、從つて非歷史的なものである。

社會的歷史的な立場はマルクス經濟學の基礎をなしてゐる。これを離れてそれのひとつの概念、ひとつの範疇と雖も理解されない。抽象的な人間的勞働または平均勞働が現實的であるのはもとより一定の社會的條件のもとに於てである。かかる抽象性または平均性に於ける勞働は、それ自體がやはり歷史的諸關係の產物である。それは「個人が容易に一の勞働から他の勞働に移つてゆくところの、そして勞働の一定種類が個人にとつて偶然であり從つて無關心であるところの、一の社會形態に相應する。」それは、資本主義社會に於ての如く、あらゆる種類の勞働生產物の全面的な讓渡により、それらの生產物に現はれた現實的な種々なる種類の勞働が極めて發展せる一個の「總體性」を形作るに至つてゐるといふことを前提するのである。このやうな大量的な事實を全體的に考察するときに於てのみ、マルクスのいふ平均の意味は把握され得る。そのとき我々は、ローザの云つた如く、「この平均は、單に一の理論上の思想形象であるばかりでなく、却つてまた一の實在的な、客觀的な事實である。*」ことを知り得るであらう。ところでマルクスはこのやうな抽象的な人間的勞働を說明していふ、「裁縫勞働と織物勞働とは質的

に異なる神經的活動ではあるが、兩者ともに、人間の腦髓、筋肉、神經、手、等々の生産的な支出であり、且つかかる意味に於て兩者ともに人間勞働である。それらは人間の勞働力を支出するについての二つの異れる形態たるに過ぎない。このことから二木保幾教授は極めて奇抜な結論を引き出される。曰く、マルクスの價値抽象は價値の社會的性質をすらも抽象し去つてゐる。即ち教授によれば、然し人間の腦髓、筋肉等々の生産的行使は總べての形態の有用勞働に共通したことではあるが、此の共通性には社會的性質を認めることが出來ない。其れは生理的關係であつて社會的關係ではない。然しながらマルクスの考察の仕方は、教授のそれとは逆に、かかるいはゆる生理的關係そのものを社會的に見るところに、その特色をもつてゐるのである。第一に、マルクスは勞働者のかかる身體的な生理的な勞働力をそれ自身また一個の商品として觀察する。そして「勞働力の價値は、凡ての他の商品と同じく、この特殊な商品の生産に、從つてまたその再生産に必要なる勞働時間によつて規定される。」と彼は考へる。第二に、彼は、既に述べた如く、かかるいはゆる生理的關係はただ特定の社會的歴史的條件のもとに於てのみ、一般的な勞働として、社會的意味を擔ふ、と說く。それは、例へば、手工業的な、そこでは勞働が個人に結合して或る特殊性に成長せねばならぬが如き生産關係にあつては、もとより社會的意味をもち得ない。第三に、このやうな生理的關係なるものは、生理的關係として問題になつてゐる──それは生理學に屬するであらう──のでなく、却つてまさに生産的な勞働力」として問題になつてゐるのである。かくの如くにしてマルクスは實に抽象的な人間的勞働をもつて諸商品に共通な「社會的實體」と呼んでゐる。＊＊二木教授に對してなほマルクスは次の言葉を記してゐる、「商品體の感性的に粗い對象性とは正反對に、商品體の價値對象性の中には自然的物材の一分子だに入り込んでゐない。だから我々は如何に個々の商品を捻り廻したからとて、それは到底價値物として把捉され得ない。けれども我々がもし、商品は同一の社會的單位の、人間勞働の、表現である限りに於てのみ價値對象性を有すること、それ故にその價値對象性は純粹に社會的なものであることを思ひ出すならば、商品の價値對象性はただ商品と商品との社會的關係に於てのみ現はれ得るものなることもまた自明である。」しかるに二木保幾氏のマルクス解釋を一般的に特色づけるものはその非社會的な、從つてまた非歴史的な見方である。

＊　金田・高山譯、ローザ・ルクセンブルク「資本蓄積論」一〇頁。

＊＊　岩波文庫版「資本論初版鈔」二七頁。

二

さて二木教授のマルクス價値論に對する第一の疑問なるものはかうである。それは「マルクスが交換される二種類の商品は價値に於て相等しいものだと云ふことを前提し、然かも此の前提を勿論證明してゐないことについてである。」この疑問はもとよりなんら新しきものでなく、人々によつて屢々繰り返されて來たところのものである。教授の文章のうちには二つのものが含まれてゐる、即ち、等價物同志の交換といふことをマルクスは「前提し」、そして彼はこの前提をもちろん「證明し」てゐないといふのである。ところでマルクスによれば、それは或る意味では「前提」であるけれども、同時にそれは「現實」であり、現實である限りそれは指示されればよいのであつて、もちろん證明を要しないことである。先づそれは如何なる意味に於て一の現實であるか。マルクスは商品生産をもつて「そこでは盲目的に作用する無規則性の平均法則としてのみ規則が自己を貫徹し得るところの生産の仕方」として特色づけてゐる。彼の價値法則はかくの如き商品生産社會に於ける平均法則にほかならない。「平均に於て等價物同志が交換され且つ各人はただ商品をもつてのみ商品を買ふ。」と彼は云ふ。しかるに平均は、さきに述べたやうに、單に一の理論上の思想形象であるのみならず、却つてまた一の實在的な、客觀的な事實である。それはただ個々の事實に捉はれることなく、大量的な、社會的な觀察をすることによつて理解され得る現實である。等價物同志の交換が現實であるといふのはこの意味である。普通に人々は價格のみをもつて事實であると見做してゐる。價格から價値へ進むといふことは、レーニンの語を用ゐれば、「偶然的な個々別々の關係から正常的な大量關係に進む」ことである。* それは同時に事物の現象形態からその本質に貫き入ることでもあらう。本質は純粋なものである。「その純粋な姿に於ては、商品交換は等價物同志の交換である。」然しながら「事物は現實に於て純粋には起らない」といふ意味に於て、そしてその意味に於てのみは、等價物同志の交換といふことはなほ一の「前提」と見做されることも出來よう。しかもそれは前提として勝手氣儘なものであるのでなく、却つてまさに現實的な前提である。

* 河上譯「レーニンの辯證法」一二頁。

ここで次のことが云つておかれねばならぬ。事物をその純粋な本質に於て考察するためには抽象が必要である。經濟現象の形態の背後に隱れてゐる實質を發見しようとする限り、理論經濟學は抽象によらざるを得ない。抽象なくして一般に科學はあ

り得ない。抽象することは全く原則的な方法である。なぜなら他の方法によつては經濟關係の内部的秩序を研究することは不可能であるからである。とレーニンもいつてゐる。具體的な現象は直接に認識されることが出來ない。例へば、價格は具體的なものである。もし我々が價格の本質を把握し、それを支配する法則を見出さうとして、具體的な價格から直接に出發するとすれば、我々はなんらの結果にも到達することが出來ぬであらう。蓋し「具體物が具體的であるのは、それが多くの諸規定の總括であり、従つて多様の統一であるからである。*」マルクスの此言葉は全く辯證法の精神に於て語られてゐる。即ち、あらゆる具體的事實、並に實際な、一切の現象は、通常なんらかの一個の法則の作用の結果ではなくして、一系列の法則及び極めて雑多なる影響の交錯、並びにその相互制約の結果である。かくて例へば、價格は價値法則の現はれである。しかし資本主義社會にあつては價格の大いさは平均利潤の法則の影響のもとに變動する。なほ現存社會に於ける資本主義的要素と非資本主義的要素との相互關係もまた價格の大いさに對して働らきかけるであらう。その他需要供給の相互關係、等々のものが之に影響を及ぼすであらう。これら凡ての要素の結合の結果が資本主義社會に於ける價格なのである。いまもしかゝる事柄にして完全に理解されるならば、二木保幾教授の論文の全體の構成が如何に非方法的であり、従つて非科學的であるかが理解されるであらう。具體的なものを「多様の統一」として、「多くの諸規定の總括」として初めて「結果せしめる」といふ、資本論の辯證法的構成について、教授は何事も理解されざるものの如くである。却つて教授はマルクス資本論の中からただ勝手に隨意の個所を取り出し、そこに取り出された具體物または複雑な範疇をばその組成要素に結論に分解されることなく、マルクス價値論に於けるいはゆる不屆について云々されるのである。このやうな不謹愼は、一般に科學の、特に辯證法的な科學の惜むところである。辯證法的な科學はただ一歩一歩と「抽象から具體へと昇する方法**」によつてのみ把握され得る。一切を一緒に混合するところにはもとよりなんの方法も存在しないのである。

* 河上・宮川譯「經濟學批判序説」三七頁。なほ村山譯、コーン「プロレタリア經濟學の方法論」三四頁以下参照。

** 前掲箇所、三八頁。

しかるにかくの如く事物の本質を純粹に見出すためにマルクス經濟學にとつて甚だ重要な役割を演じてゐるところの一の方法論的なものがある。それは「平衡の公準」と名づけられてゐる。* マルクス學説の解説にあたつて普通には顧みられてゐない

このものに注意を向けることによつて、我々は河上教授の疑問なるものに答へるであらう。」マルクスは生産關係の資本主義的體系を理論的に把握するに際して、この生産關係の存在の事實から出發する。この體系にして現存してゐる以上、社會的諸欲望は、充分にか不充分にか、いづれにせよ滿足されてゐるのでなければならぬ。しかるに資本主義社會のやうに、社會的分業を伴ふ社會にあつては、この事實は全體系のうちに一定の平衡が存在してゐなければならぬといふことを意味する。理論經濟學の問題はこのやうな平衡の法則を發見するにあると見られることが出來る。そこでマルクスは問題を次のやうに提出した。平衡は存在してゐる、如何にしてそれが可能であるか。平衡は破壞されてゐる、如何にしてそれが再建されるか。これが平衡の公準と呼ばれる方法論的なものである。それは理論經濟學をまさに理論經濟學として成立せしめる一の前提であり、しかもこの前提たるや同時にまた一の事實である。** 社會的體系を平衡の見地から考察するといふことは、もとよりかの豫定調和の思想とはなんのかかはりもなきことである。むしろこの考察はこの社會體系の「存在」の事實並びにこの體系の「發展」の事實から出發するのである、そしてこの體系に發展があるといふことはその平衡が靜的なものでなく、却つて實に可動的なものであることを意味するのである。」マルクスの言葉によれば、「種々なる生産部面がかやうに絶えず平衡せんとする傾向は、この平衡の間斷なき撹亂に對する反動たることを示すものに過ぎぬ。作業場の內部に於ける分業にあつては先天的に且つ計畫的に規律がはたらいてゐたのが、社會の內部に於ける分業にあつてはこの規律は、ただ內的な、無言の、市場價格のバロメーターの變動のうちに認め得るところの、商品生産者の無規律な氣隨を制御するところの自然必然性としても後天的にはたらくのみである。」*** 平衡の原則もまた商品生産社會を制御し、支配しつつある一の暗默な自然必然的なもの、理性的なものである。

* 佐野文夫譯、ブハリン「轉形期の經濟學」一八二頁以下參照。

** ローザ・ルクセンブルク「資本蓄積論」第一編第一章參照。

*** 資本論(エンゲルス版)第一卷三二一頁。

平衡の原則がこのやうに自然必然的なもの、理性的なものであるが故に、「抽象的に觀察すること、即ち簡單なる商品流通の內在的諸法則から流出せるにあらざる諸事情を度外視すること」が可能であり、この可能性が同時に現實性を擬ふことが出來る。そしてこの見地から見るならば、マルクスの價値法則が一の平衡法則であることは疑はれないであらう。有名な彼の文章がそのことを示す、「種々なる欲望に相應する生産物の量は、

社會的全勞働の種々なる且つ分量的に規定されたる量を必要とすることは、どんな子供も知つてゐる。社會的勞働を一定の割合に配分することのかゝる必然性は、決して社會的生産の一定の形態によつて排除されるものでなく、むしろただその現象の仕方を變じ得るのみであるといふことは、分りきつたことである。自然法則は總じて排除されることが出來ぬ。歴史的に異つた狀態のもとで變じ得るのは、かの法則が自己を貫徹するところの形態のみである。そして、社會的勞働の聯關が個人の勞働生産物の私的交換として行はれてゐる社會狀態のもとでは、勞働のこの比例的な配分が實現されるその形態は、まさにこれら生産物の交換價値である。*」マルクスの價値論はここから出發してゐるのである。

● クーゲルマンへの手紙、五三、五四頁。

三

いまもし右にいふ平衡の公準の意味にして正しく理解されたならば、二木保幾教授の疑問の第二及び第三のもの——そこでは單に二つの論點が提出されてゐるのでなく、むしろ多くのものが不當に混ぜ合はされてゐるのである——の多くは消滅してしまふであらう。マルクスはいふ「商品のその價値に於ける交換または實用は合理的なもの、その平衡の自然的法則である。これから出發して、これとの相違を説明すべきであつて、逆にこの相違からその法則そのものを説明すべきでない。**」彼の意味はかうである。價値の問題を純粹に提示し且つ解釋するためには、價格の變動から眼を背けねばならない。人々はつねに需要供給に關説することによつて價値の問題を解かうとする（二木教授もその例である）。しかるに需要供給の相互關係の變動はただ價値と價格との背離を説明するだけであつて、價値自體を説明し得るものでない。商品の價値の何物であるかを發見するためには、我々は需要と供給とが平衡を保つといふことを前提した上で問題を把握せねばならぬ。そこでマルクスはいふ、「需要と供給とは事實に於ては決して一致しない。……しかし經濟學にあつてはそれは一致すると假定される、何故であるのか。諸現象をその合法則的な、その概念に相應する姿に於て觀察せんがため、言ひ換へればそれを需要供給の變動によつて惹き起される假象から獨立に觀察せんがためである。**」ここに平衡の公準の方法論的意味は見紛ふべくもなく明かに述べられてゐるであらう。しかるに二木教授は平衡のかかる方法論的意味について何ら考慮されることがないのである。そして教授は「需要供給の平衡狀態にある價値は需要供給の關係のみでは説明され

得ないが、然しまた此の關係から離れても說明され得ない。」と云はれる。しかるにマルクスによれば、需要供給の關係から離れて說明され得ないのは個々の具體的な價格であつて、決して價值自體ではないのである。

* 資本論第三卷第一部一六七頁。

** 前揭箇所一六九頁。

同じやうにして二木保幾教授の他の疑問、いな混亂もまた說明され得るであらう。教授は先づ資本論の「第一卷と第三卷との間に於ける著しい相違は競爭が第三卷に於ては重大な役割を演じてゐる」ところにあると述べられる。そしてマルクスから次のやうに引用されてゐる。「競爭が先づ一生產部門に於て成就することは……市場價值……の構成である。然し種々なる生產部門の間に於ける資本の競爭は初めて生產價格を成立させる………。生產價格の成立には、市場價值の其れよりも、資本主義的生產方法のより高き發達を必要とする。*」(二木教授の引用のまま)。續いて教授は云ふ「斯くして一方に於ては、若し價值と市場價值とを全く同一のものだとすれば、第一卷に於ける價值は競爭に依つて構成されるものでなければならないと同時に、他方に於ては、價值が理論的にも亦歷史的にも生產價格に先行するかの如き觀を呈する。」價值は果して、教授の語られるやうに、競爭によつて「構成」される、とマルクスはこの箇所に記してゐるのであらうか。さうではあるまい。教授の誤解はこの場合ひとつの誤譯から來てゐるものの如くである。二木氏がここに構成」と譯される言葉は原語では Herstellung であつて、英譯本には establishment とある。建設する、出來上らせる、といふほどの意味であらう。しかるにマルクスが勞働は價值の實體を「形成する」といふとき、彼は bilden といふ語を用ゐてゐる。英譯本では create または form となつてゐる。この場合には構成すると譯してもよからう。しかも教授の引用された文章は省略なく譯さねば分らぬものであるに拘らず、教授は故意にか、不用意にか省略されてゐるのである。いまこれを譯せばかうである。「競爭が先づ一の生產部面に於て成し遂げるのは、諸商品の種々なる個別的價值から(それを均衡化して、三木註)等一なる市場價值及び市場價格を建設することである。同じ所でマルクスはまた「種々なる個別的價值が一の社會的價值に、上述の市場價值に、均衡化されてゐるためには、同じ種類の商品の生產者間の競爭と、彼等が共通にその商品を供給する一市場の存在とを必要とする。」とも云つてゐる。——この文章もまた教授によつて故意にか、不用意にか、省略的に記されてゐる。——そこでマルクスの意は明かである。競爭は諸商品の種々なる個別

的價値の均衡または不衡をもたらす。かかる不衡の見地から見られるならば、市場價値は「平均價値」として見られ得る。ここに我々は何よりもかの不衡の公準を思ひ起すべきであらう。マルクス資本論に於ける研究は不衡の體系の解剖をもつて始められてゐる。そして次第に複雜な要素が取り入れられて來る。體系は動搖して可動的なものとなる。しかし激烈な不衡破壞があるにも拘らず、體系は全體として維持されてゐる。不衡の破壞によつて新たな、謂はば一層高級な不衡が現はれて來る。不衡の法則を認めた後に初めて、更に進んで體系の動搖の問題を提出することが出來る。マルクスは不衡を破壞するだけでなくそれを再建するところのこの運動の法則を把握することが必要であると考へた。このやうにして、市場價格の法則が動搖の法則であるやうに、競爭の法則は破壞された不衡の間斷なき再建の法則」である。＊従つて競爭は、それが價値の＊＊體系を構成するものの如く見ることは一本教授の如くすべきでなく、却つて競爭は不衡を再建するものとして、それが價値法則と價格の法則との關聯に對する見通しを與へるものと見らるべきである。

＊ 資本論第三卷第一部一五九頁。

＊＊ ブハーリン前掲書一八四頁。

私は一本保雄教授の論文の中心的論點へ進んでゆかう。教授の結論はこの場合次の通りである。要するに資本論第一卷から第三卷の前半に至るまで平均觀察を一貫させて來たマルクスの價値論は、第三卷の後半に於ける較差地代論に於て「市場價値」は最劣等耕作地即ち限界耕作地の個別的な生產價格或は個別的な價値即ち限界生產價格或は限界價値に統制されると說かれるに至つて、遂に較差地代を剩餘價値の分野以外に押しやらざるを得ないと云ふ一の矛盾に陷つた。此の矛盾は畢竟平均觀察と限界原理との矛盾に外ならない。然かも此の矛盾を生ぜしめてゐる一の條件は較差地代を剩餘價値から導かんとすることに其れである。この文章そのものが極めて不嚴密である。マルクスは、教授の云はれる如く、「較差地代を剩餘價値から導かうとする」のであらうか、精密に云へば、マルクスは較差地代を平均利潤以上の「超過利潤」から說明したのである。従つてその理論の構成に於ては、凡ての資本に對する平均利潤が前提され、従つてまた生產物は凡て生產價格をもつて賣却されるものと假定されてゐる。それだから彼は「最劣等地の生產價格によつて市場價格は規定される」と云ふのである。マルクスは書いてゐる、「地代の研究に於ける困難は、農業資本によつて作られたる剩餘生產物及びこれに照應したる剩餘價値一般を說明することに存

するのではない。この問題はすでに一切の生産資本が作り出す剩餘價値の分析をもつて解決されたところである。困難はむしろ、相異つた各資本によつて作られる剩餘價値が平均利潤に均等化した後に、即ち各資本がそれぞれの相對的大小に比例して總剩餘價値（社會的總資本が一切の生産部面から作り出した剩餘價値）の分配を受けた後に、なほ殘るところの、土地に投ぜられた資本が地代の形で土地所有者に支拂ふ剩餘價値超過分なるものは、そもそも何處から出て來るかといふことを論證する點に存してゐる。蓋し剩餘價値が右のやうに均等化された後に於ては、苟くも分配し得べき一切の剩餘價値はすでに分配し盡されたかの如く見えるからである。……要するに地代分析上の全困難は、平均利潤以上に出づる農業利潤超過分を説明することにある。それは剩餘價値をではなく農業獨特の超過剩餘價値を、從つてまた『總生産物』をではなく他の産業部門の純生産物以上に出づる農業上の純生産物超過分を説明することにある。」地代の問題の核心が何處に横たつてゐるかは全く明瞭にここに示されてゐるであらう。そしてそれによつていはゆる平均觀察なるものがそこでは用をなさぬことも同時に明白であらう。然しながらこのことは價値法則、從つてまた價格の法則がそこでは全然排棄されるといふことを意味するのでなく、却つて地代の問題が謂はば一層高次の問題であることを意味する。從つていま較差地代に關して、超過利潤、それ故にまた超過剩餘價値を説明するために、二木教授のいはゆる限界原理なるものが持ち出されてゐるとしても、それは價値法則になんら矛盾するものではあり得ないのである。我々は複雑なものから單純なものを説明すべきでなく、却つて複雑なものは單純な諸規定の總括として示さるべきである。較差地代の問題は平均利潤の問題を前提した上で、しかる後に初めて問題として成立するのである。ところで較差地代が存在するといふことは、二木教授が想像されるやうに、なんらか非社會的な、生産關係から獨立に存在する一の自然的事實であり、從つてその意味に於て純粹に社會的なマルクス價値論に一の矛盾をもたらすものでもあらうか。却つて反對である。マルクスは二木教授の取り上げられた表に續いてまさに次の如く云つてゐる。「これ即ち、資本主義的な生産の仕方の基礎の上に於て競爭を通じて自己を貫徹するところの市場價値による決定であつて、かかる決定のために一の虚僞の社會的價値が作り出される。これは土地生産物が支配をうけるところの市場價値の法則から生ずるものである。生産物、從つてまた土地生産物の市場價値決定は、必然的に生産物の交換價値に立脚するところの、そして土地とその豐饒度間の

前提には左右しないところの、一の社會的行爲である。尤もこの社會的行爲は、無意識的目的無意識的に、社會的に遂行されるものである。もし本教授にして、マルクスの長を寫し取られたついでに、この文章を注意深く讀まれたならば、教授の論文は恐らく出來上らなかつたであらう。なほ次のことを考へてみればよい。自然力は剩餘利潤の源泉ではなく、むしろただこのものの自然基礎たるに過ぎない。なぜならそれは勞働の生産力を例外的に高める自然基礎であるからである。このやうにしてまた較差地代は、その本質に於て、なんら農業のみに特殊なものではないと見られ得る。そこでマルクスは書いてゐる。單なる較差地代は理論的になんらの困難をもたない。それは如何なる工業的生産部面に於ても、平均條件よりもより善い條件のもとにはたらく如何なる資本によつても存在するところの、剩餘利潤以外の何物でもない。農業にあつては、それが異つた種類の土地の自然的豐饒度の異つた度合いといふが如き堅固な且つ（比較的に）固定的な基礎にもとづけられてゐるの故をもつて、固定化するといふまでである。かくていはゆる限界原理なるものがマルクスにあつては如何に相對化されてゐるかを知り得るであらう。それと同時に我々は資本論の全體系を貫いてゐるものが要するにかの平均の公概といふ一の方法論的なものであることを認めずにはゐられないであらう。

* 資本論第三卷第二部二〇〇頁。

** マルクス・エンゲルス往復書簡集、第三卷八二頁。

教授の疑問なるものはその他若干殘されてゐる。しかしそれらは凡て教授のマルクス理解の單なる不清潔から來てゐるやうに思はれる。私はいまそれを一々掃除する暇もなく、また指定された紙數も盡きたから、これで一應打切らう。原理的なものについてはもはや述べられた筈である。マルクス學說に於ける「平均」の意味は明かにされ、いはゆる限界原理がこれに抵抗し得るものでないことは示されたと思ふ。秩序と清潔との必要なのは單に生活ばかりでなく、また實に科學に於てさうである。

かくして家賃値下を實現せよ

松谷與二郎

一

近時家賃値下問題が矢釜しくなり、新聞を通じての輿論は勿論、警視廳でも内務省でも又東京市でも此問題に力瘤を大分入れて居る。此際徹底的に此問題を討議研究して之れが解決を圖ることが目下の緊要事ではあるまいか。

處で吾國の家賃が果して安いのか高いのかと云ふことを一應檢討する必要がある、吾國と云つても先づ東京市内の借家人は一體どれ丈の家賃を支拂つて居るかと云ふに、大體借家人は其月收の約四分の一乃至三分の一と云ふのが標準となつて居る。例へば月收百圓の借家人は大低二十五圓乃至三十圓を支拂ひ、五十圓の月收者は十圓乃至十五圓の家賃を支拂つて居る。借家人の負擔も大なりと云ふべきである、こんな高い家賃を支拂つて居る國は世界各國を通じて一寸類例を見ないのである。米國では其收入を標準として月收の大體四十分の一、英國は約三十分の一、獨逸の二十八分の一、佛國の二十九分の一の類で、勿論是れは彼の地と日本との建築様式の相違か、收入の點で相當の開きがあるから一様には言はれぬが、日本の如く其の月收の三分の一乃至四分の一と云ふが如き高い家賃は絶對に支拂つて居ないのである。以上は吾國借家人の懐ろ勘定を標準とした調であるが、一方是れを家主側から採算して見ると家主は貸家を建築すると五年經てば大體其の元を取返して居り、七年も掛つて元を取返す家主は餘程間抜けな家主とせられて居る、然らば日本の借家は大體何年位其生命を維持するかと云ふに、裁判所の調査では三十年を生命として居ると鑑定せられて居る、勿論三十年を保たすには大修繕の經費を見積る必要があるから、夫

れを差引て大體二十五年位保つものと假定して、其借家が五年で建築費を回收するものとして、殘期二十年は家主は何等の勞力を費さずして家賃を收得することゝなり、地代、税金を差引た殘餘は全部家主の懷中に流れ込むで來る勘定になつて居る。世の中に色々の商賣もあるがこんなボロイ商賣は餘りない。

世間では一番因業な悪い商賣を高利貸だと云つて居る、然るに高利貸に云はせると十人の中の二三人は金利は勿論元金迄も踏倒してシヤア〳〵して居る、そんな關係で利息の高い位は致方がないと云つて居る、成程そうであらう、たれに比較すると家主位樂な商賣はあるまい、いくら無法な借家人でも借家を背負つて夜逃する者も居ないから結局損をしても、せい〴〵家賃の半年か一ケ年踏み倒されるのが關の山である、從つて現在家主は貸家から得る一年に一割乃至四割と云ふ利割りは何と云つても高過ぎると思ふ。

二

然らばこんな高い家賃を日本の借家人はどうして默つて拂つて居るのであらうか。何とかして今少し家賃の値下の方法はなからうか。

それには大體二つの方法がある、一は現在の借家法第七條に依る家賃値下の方法で、今一つは家賃値下の大衆的運動である。

私は法律家たる立場から先づ借家法第七條に依る家賃値下の方法について少しく攷究して見たいと思ふ、借家法第七條には

「建物ノ借賃カ土地若クハ建物ニ對スル租税其他ノ負擔ノ増減ニ依リ土地若クハ建物ノ價格ノ昂低ニ因リ又ハ比隣ノ建物ノ借賃ニ比較シテ不相當ニ至リタルトキハ契約ノ條件ニ拘ラス當事者ハ將來ニ向テ借賃ノ増減ヲ請求スルコトヲ得」と規定してある。即此規定に依れば、

家賃が家屋の價格の上り下り又は租税の負擔の増減のあつた場合は協定家賃の如何を問はず家賃の値上又は値下を家主又は借家人より其相手方に向つて請求することが出來ると云ふのである、換言せば地租や家屋税が上つた場合又は家屋の價格（物價）の上つた場合は家主は前は二十圓の家賃でも之を二十五圓に値上を請求することが出來るし、又反對に物價や租税が下つた場合には借家人は其家賃の値下の請求を爲すことが出來ると云ふ規定である。

元來此借家法は大正十年の制定に係り當時吾國は歐洲戰亂後の經濟界の好況時代で、物價はドン〳〵昂騰し、家賃の如きもドシ〳〵上つて行つた眞最中に制定せられたもので、當時家主

から家賃の値上を借家人に請求しても、借家人は契約を盾に家賃の値上を承諾せざる場合に、之を防止する目的の下に制定せられた法律であつて、家主と云ふ資本家を保護する爲めの規定であつた、勿論此規定には其法文に示すが如く、物價の高低、公租の增減に依り、家賃の値上、値下、共に要求することが出來る樣規定されて居る、從つて家主保護の規定とのみ邪推するのは不當であると云ふ批難も起り得るのである。乍併それは表面で、公平を衒ふ起草者の立法技術が、偶々借家人に勿怪の幸を齎らしたものであることは本法制定當時の吾國の經濟狀態が雄辯に其間の消息を物語つて居る。こんな工合で本法制定の目的が家賃保護にあつたとしても、已に法文として物價下落の場合は借家人から家賃値下の要求が出來ると規定されてある以上物價下落の極端な今日では、借家人は先づ此規定を逆用して家主に向つて家賃値下の要求を爲すべきである。

然らば其方法如何……其方法は極めて簡單で、借家人は口頭で家賃値下の要求を家主に直接爲せばよい、夫れで法律上の效力が發生する譯である、併しこんな口頭の要求では、後日裁判になつた時、家主は之を否認し、そんな要求は受けては居らぬと主張することは必定であるから、此場合に備ふる爲め借家人は內容證明郵便で、

(1)私の借りて居る貴殿の所有家屋は家賃が高過ぎる。
(2)家賃三割の値下を相當と信じます。
(3)借家法第七條に依り減額の要求を致します。

と書いて家主宛に差出せばよい、此減額の請求は法律上極めて重大な效果を發生するもので、此要求を、法律上形成權と云ひ、當事者の一方の通告により法律上の效果を發生し、前の家賃は當然値下せらるゝ運命に置かるゝのである。

然らば借家人の要求通り果して家賃の値下となるか、否かが玆に一つの問題となるのである。夫れには其家賃が高過ぎるか否か、三割減を相當とするか否かを判斷することが必要である、是れは結局裁判所の判決に俟たなければならないのである。處で其判斷は何人より之を求むるか、借家人から家賃の値下を要求した以上、借家人側から先づ家賃値下の裁判を起すべきである。乍併是れは隨分厄介な話であるから、實際問題としてはそんな厄介な訴訟などをするより、三割位はどうでもよいと云ふ氣になり、こんな立派な法律がありながら借家人は裁判と云ふ億劫な手續と費用と時間と心配をするよりも、我慢をし「諦める」と云ふ樣になり、家賃は何年たつても値下とならないのである。

然らば他に方法がないのであろうか、否、他に尤も簡便な方

法がある。それは借家人は先程云つた様に二割値下要求の内容證明を出すと同時に其翌月分からは二割を天引して家賃を家主に交付すればよいのである。若し家主が受取らなかつたら、其時は面倒でも一回分だけでも供託局へ供託すればよいのである。そうしてあとは家主の爲すが儘に放任して置いてよい、さすれば家主も驚いて必ずや嚴重なる催促を爲すであろう、それでも借家人は之には相手にならず只儘にして置けばよい。

結局家主は訴訟人となり二割値下を承諾するか又は家主側より裁判所に向つて家賃滯納を理由として出訴するであらう。其時は借家人は相手方の出訴を利用して裁判所に出廷し、前記の内容證明書と供託書を提出し、家賃値下の要求を爲すべきである。

夫れ現時の裁判所は資本家階級の擁護機關であると觀られて居る、否裁判所自體よりも現行法規全般を通して資本家保護の制度となつて居る。今一々其例證を擧げるのは問題外だから之を差控へるが、孰れにしても現行法は資本家の爲めに造られて居ると云つても差支なからう。從つて裁判官も因襲の久しき不識く〜の間に此風を馴致し、夫れが裁判の上に反映すると云ふことは爭はれない形勢である、右樣の次第で裁判官が本案裁判を爲すに當り家主の爲めに有利に導かうとしても現下の家賃値下の聲が餘りに大きく社會に反映して居る以上、此聲勢を無視し借家人の僅か二割の要求を拒否することは出來ないと私は信ずる、況んや裁判官の多數も恐らくは借家人たる以上、現在の吾國の家賃の不合理なることは十分之を了知すべく、從つて本案訴訟については借家人は多くの立證を要せずして家賃値下の要求が貫徹し、勝訴の判決を得ることは論者を俟たずして明瞭であらう。私はこうした運動を所々に於て爲すが、到る處多大の反響あり、相當の效果を收め、其地方に於ては大抵少きは一割多きは三割の値下が實行せられ之を平均するも二割の値下が實行せられた事は私達の快心措く能はざる所である。

三

以上述べた如きは借家人對家主間の個人運動に依る家賃値下の方法である。併し吾々は是れに滿足し放任して置いてはならない、何故ならば天帝が人間を地上に生みたる以上は吾々は其地上に生きるの權利がある、即ち住居權は吾々人間が天帝より與へられたる天賦の權利である、此見地よりして吾々は借家問題を檢討攻究し、國家に向つて其保障を強要する權利がある、國家としても亦此吾々の天賦の權利を尊重し其住居に安住せしむる方策を講ずることは國家最大の義務でなくてはならない。

然るに吾國現在の法律制度の上から見て國民の住居權が果して確立して居るのであらうか、又國民生活の實狀から見て住居の安定が保障せられて居るであらうか、否々、國民の住居權は現行法律制度の上からも、又實際生活の關係から見ても、何等其の安定が確保せられて居ない。日本國民の九十二パーセントは何れも借家人であり、而して其借家人の地位たるや實に不安定も甚だしく、家主と云ふ搾取者の意思如何により明日からでも其の家を追はるゝ運命に置かれてある。其一例を擧ぐれば假りに半年一年の敷金を入れてあつても一ヶ月家賃を滯納したと云ふ理由で家主から立退を迫らるれば否應なしに其家を明渡さなければならぬ制度になつて居る、夫れでは何の爲めに敷金を入れて置くのか判らんではないか、已に敷金を入れ家主を保護して居る以上せめて其の敷金の存在する期間丈けでも其家に住居せしむるのが當然ではないか、然るに現在の吾國の法律制度はそんな道理の上に立脚した法律ではない、如何にしたならば家主と云ふ搾取者に損害を與へないで濟むかと云ふ搾取者擁護にのみ沒頭して出來た法律である、從つて家を追はれて街頭に彷徨する借家人の憐れなる姿なぞは立法者の念頭にはないのである、假りに街頭に追はれぬ迄も來月の家賃の心配なしに生活し得る借家人は幾人あるのであらうか。

こんな不合理な、殘酷な、法律がまたとあらうか。私は此法律制度と暖かいベットを追はれて此寒天に淺草公園のロハ臺に夜を明す無數の窮民とを比較對照して、或る呪はしささへ感ぜざるを得ないのである。

回顧すれば私達が全國借家人同盟を組織し此不合理の制度を匡救改正すべく、演說にポスターに、宣傳ビラに、色々の方法で住居權の確立と家賃値下の運動を起して來たのは今から丁度四年前であつた。當時當局官憲は私達の運動を目して平地に波瀾を起す危險の運動なりとして、極力之を彈壓し、ポスターを貼れば剝され、ビラを撒けば交通妨害と云ふ名の下に二十九日の拘留處分にすら處せられ演說會は何時も注意、中止、解散、檢束が常例となり、餘りの彈壓に悲憤慷慨幾夜眠られぬ夜が續いたか知れなかつた、こうした彈壓の下にも私達の運動が着々效を奏し世論を喚起釀成し今や家賃三割値下が當然の如く視られ、而も夫れが現に實行せられつゝあるに到つては實に會心の笑みを禁ずる能はないのである。

四

乍併吾々は只單に家賃値下問題のみを目標として進むべきではない、住居權の確立と云ふことが吾々の最後の目標である。

然らば其の運動は如何なる主張、方法、手段、により為さるべき乎。私達の理想から云へば全國の家屋を全部國家の管理に移し、今少しく住心地のよいものとし、適當に案配賃借せしむるを尤も適當の方法と考へる、乍併是れは現在吾國の經濟組織と財政とに鑑み一寸出來ない相談である。只次善の方法は現在獨逸に於て行はれつゝある如く現在の借家を町村役場に調査登錄せしめ、其坪數、間數、家の新舊、土地の狀況を參照し、地代、租税、金利等を斟酌し、一定の賃料を定め之を賃貸せしむることである　其賃料の如きも一週間分の前納を以て足り、敷金、權利金の如きは之を禁ずべきである、而して若し一週間分でも家賃を滞納したものがあつたならば、町村の公力を以て其家屋を明渡さしむことにすればよいのである、さすれば借家人も僅か一週間分の前納で適當の借家を得べく、家主も又賃料滞納に依る損害を免るゝことが出來るのである、而して若し借家人中失業し、又は其の家族中病者死亡者等のあつた場合は、宜しく家屋の明渡執行を町村公吏に於て延期し、猶豫を與へ以て一脈の温情を示すことにすれば一層完全である。

五

然らば如何なる方法に依り吾々の此運動を達成すべき乎、勿論私達も今後筆に、口に、此運動を繼續し、凡ゆる彈壓に抗し此運動に精進するであらうと共に、全國の借家人も奮ひ立つて此運動に參加し大聲疾呼現在の制度の不合理と全國借家人大衆の窮狀を當局大臣に達すべきである。

現濱口總理大臣は現に官吏の一割減俸に際し、僅か七八十人の檢事諸公の反對運動により、極めて卑怯に閣議の決定を飜した紳士聰明の士である、道理ある主張に對しては極めて從順で之に聽從するに吝なるものではなかつた。

依つて私は叫ぶ、全國借家人大衆よ。起て、起つて吾々の妥當にして道理ある主張を強調せしめ、濱口首相に向つて其採擇を懇請すべきである、彼れの正直なる必ずや吾々の主張を直ちに受け入れ其實現に努力することを誓ふであらう。

此吾々の道理ある主張を容れなかつたら、それこそ彼は卑怯者であり欺瞞者である、何となれば彼れの減俸一割減の閣議撤回は道理に聽從したものにあらずして與黨の疑獄摘發を懼れ檢事の意を迎合したものと見らるゝからである。私は信ずる濱口總理大臣は決してそんな卑怯者でも欺瞞者でもない、彼は實に愛すべき正義の士である、從つて彼は全國借家人大衆の悲痛なる此叫びを聽いては彼は萬難を排し必ずや吾々の要求の實現に勇敢であらうことを私は信じ斷言するに躊躇するものではない。

新勞働組合法案を評す

孫田秀春

政府が曩に社會政策審議會を設置し其の答申を得て、目下内務省をして新勞働組合法案を立案審議せしめてゐることは、讀者の夙に了知せらるゝ通りである。内務省社會局案なるものゝ内容は、過般來新聞紙上其他に於て、すでに公にせられてゐるから、茲に詳細は略するが、中でも審議會の答申要綱を基礎として作られた部分の規定は、該法案の骨子を成す重要な部分であるから、説明の便宜上念のため次に之を揭出して見ることにする——

諮問第一　職業別又は產業別の組合のみを認むべきや

答申　職業別又は產業別の組合に限るべからず

理由　勞働組合法は自然に生れたる一切の勞働組合を法律上公認するを趣旨とす

諮問第二　聯合組織を認むべきや

答申　認むべし

理由　現在最も有力なる組合は聯合組織のもの多し之を法律上認めざるは勞働組合法たる意義を大に減殺す

新法案第一條　本法ニ於テ勞働組合ト稱スルハ勞働條件ノ維持改善ヲ目的トスル勞働者ノ團體又ハ其ノ聯合ヲ謂フ

勞働組合ハ前項ニ揭グルモノヽ外組合員ノ共濟、修養其他共同利益ノ保護增進ヲ目的ト爲スコトヲ得

諮問第三　法人格取得を組合員の任意とすべきや

答申　組合の任意とすべし

理由　法人たることは小組合には不利益のみあつて利益なし法人を強制するときは合併、分割、解散等の手續煩雜にして組合は法律に依ることを欲せざるに至るべし

新法案第四條　勞働組合ハ規約ニ法人タルコトヲ定ムルニ因リ法人ト爲ルコトヲ得

諮問第四　組合員たるの故を以て勞働者を解雇することを禁ずるや

答申　禁ずべし但し制裁を付すべからず

理由　勞働者の團結權を認むる以上組合員たるの故を以て解雇するを禁ずるは當然なりしかし之に制裁規定を付するは不穩當なり

新法案第十二條　雇傭者ハ勞働者カ勞働組合ノ組合員タルノ故ヲ以テ之ヲ解雇スルコトヲ得ス

雇傭者ハ勞働者カ勞働組合ニ加入セサルコト又ハ組合ヨリ脱退スルコトヲ雇傭條件ト爲スコトヲ得ス

諮問第五　同盟罷業に因る損害賠償義務の免除を如何にすべきや

答申　免除すべし

理由　同盟罷業に因り他人に雇傭關係上損害を生ぜしむることあるも勞働者の地位の向上を計らんとするため已むを得ざる所にして之に賠償を命ずるは同盟罷業の自由を奪ふこととなるを以て賠償義務を免除するの要あり而して損害賠償義務の免除は獨り勞働組合のみならず役員に及ぼさざるべからず

新法案第十三條　勞働組合ノ役員又ハ組合員カ勞働條件ノ維持又ハ改善ニ關シ勸誘其ノ他ノ方法ニ依リ他人ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ又ハ雇傭契約ヲ解除セシメ若ハ之ヲ締結セサラシメタルニ因リ雇傭者ニ生セシメタル損害ニ付テハ勞働組合、其ノ役員及組合員ハ賠償ノ責ニ任セス

諮問第六　組合の監督に關し如何に規定すべきや

答申　組合の行爲安寧秩序を亂る場合は主務大臣は組合の解散を命し得ることとすべし

理由　治安警察法に依り安寧秩序を保持するため結社禁止をなし得るも勞働組合に對しては特殊の監督規定を設くるを妥當とす

新法案第十七條　勞働組合ノ行爲安寧秩序ヲ紊ルトキハ主務大臣ハ勞働組合ノ解散ヲ命スルコトヲ得

諮問第七　勞働協約に關する規定を設くべきや

答申　設くべからず

理由　勞働協約の實例未だ少く之に關し規定を設くる時期に達せず規定を設くるときは別個の法律とし詳細なる規定を設くべし

大體右の通りであつて、之を通觀するに今回と雖も、別にたいして新規な規定を取入れやうとしてゐる樣子も見受けられない。第五十一議會當時の政府案に對する各方面の非難攻撃に幾分の敬意を拂ひ、或る程度に於て世論に報いんとしてゐるかに見えるだけのことである。別段取り立てゝ云爲すべき程の規定は、見渡す所先づ全然無いと言つていい。組合の種別制限を撤廢し、組合聯合體を認め、法人格取得を選擇的にし、組合監督の規定を幾分緩和したなどは、實は皆過年來の輿論に於て、當然なる所として要求せられてゐたものに過ぎぬ。其他組合員たるの故を以てする解雇を禁止せること、同盟罷業の場合の損害賠償義務を或る程度に於て免除したことなども、規定の形式は兎もあれ、實質的には大體過年の法案に於て規定せられてゐた所と同一である。要するに諮問第六に至るまでの内容を通觀してみても、當然なる所を當然に取入れたといふ迄のことであつて、過年來の輿論以上に一歩も出ず、依然勞働協約に關する規定を全然敬遠し去つてゐる所などから考へると、大正十四年の社會局私案に比し尚著しい遜色があるものと言はなければならぬ。しかのみならず新案に在ても勞働組合取締に關する幾多の規定が殊外念に作り上げられてゐて、當局の立案の態度

なるものは、組合の誘導助成といふよりかは、徒らに之が[illegible]取扱ひにし無用に警察眼を光らしてゐるやうにも見え、從て草案全體としては、宛も刑罰法規か手續法規と謂つた風な重苦しい感じを與へるものを爲つて仕舞つてゐることも遺憾である。尤も我國現下の政治關係、産業關係からすれば、先づ此[illegible]のが、ほんとうであるかも知れぬのであるが、折角かやうな重大方面を法律制度に固定して仕舞ふものであるならば、も少しお互に考究し反省して見る必要が有り又其の餘地が殘されてゐるのではあるまいかと思はれるのである。今法案全體の立案の態度と謂つたやうなことは姑らく措き、上に掲げた答申並に規定の内容に付き次に少しく批判を試みて見たい。

一

先づ第一に組合の職業別、産業別の制限を撤廢し、其の聯合體を認めたいといふ點、之は當局の大英斷であつて、之に對しては吾人は滿腔の敬意を表さねばならぬ。之に依て過年の法案の採つた勞働組合分散主義が棄てられ、勞働者團結の範圍と態樣とは全く自由とせらるゝに至つた譯である。即ち嚮法案では、勞働者は職業別又は産業別の團結以外には途がなく、しかも其の聯合が法認せられてなかつたから、勞働組合は謂はゞ兎糞的に個々バラ〳〵なものとして出來ていく外はなかつた。夫れを同一又は類似の職、又は技能、乃至は産業の如何に關係なく、自由の形態を取つて如何樣にも發展して行き得る途が拓かれた、否此途が法認せられたといふことは、勞働組合の發達のために大に慶賀せねばならぬ所である。從て新案第一條には特に「勞働者の團結」といふ字句が設けられてゐるけれども、すでに[illegible]撤廢せられた以上解釋論上は、最早之は無用の文句である。

偖てさうだとして、茲に爲政者並に資本家の特に恐るゝ所は、斯く無制限に團結の自由を許容するものとすれば、勞働組合の勢力が頓に增大し、其の結果として次第に本來の産業的目的即ち、「勞働條件の維持又は改善」の本質的目的を離れて、其の運動が政治的色彩を帶び、遂には英、獨等に起つたやうな大規模のゼネラル・ストライキに至りはしまいかといふ點である。若しこゝに至るとすれば、場合に依ては之に解散を命じ得る方法は勿論ないことはないのであるが、事前に之を防遏する手段方法が欲しいといふのが一部の人々の希望であるやうである。或は又此點を異常に恐るゝ餘り、更に溯て、勞働組合の種別は嚮法案に於ける如く矢張り之を職業別又は産業別の兩種に制限すべしとなす議論も、資本家などには可なり多いやうに見受けられる。成程組合勢力の增大と共に漸次に政治的團體行動を起すといふことは、既成政黨並に資本家方面に取つては一大脅威であるのには相違ないが、しかし勞働組合に向て絕對的に如何なる程度の政治運動をも、禁遏するといふことは到底出來得ることではない。又假りに之を禁遏した所で、或る程度の政治的行動は必ず勞働組合に於て取ることになるであらうし、又之を採らない譯には行かぬであらう。尤も其の政治的行動を全然禁止し得る方法は有ることは慥かに有る。一方に勞働組合の目的を嚴正に限定し、他方「勞働組合が目的外の行爲を爲したるときは、主

務大臣に於て之が解散を命じ得る」旨の規定を置けば却へて行けぬことはないであらうが、其の結果が却て不味い。労働組合解散の結果を生じ、組合運動が徒らに悪化せしむる虞なしとしない。斯様に政治運動が絶対的に禁遏し得ないものであるとするならば、次で考ふべき方法は、禁遏に代へて寧ろ或る程度に於て之を自由にし、一定の限界内に於て、即ち合法にして秩序ある行動を取らしむるといふことであらねばならぬ。こゝに「一定の限界内」とは言ふ迄もなく、労働組合の本質的目的が離れざる限界内の意味である。換言せば労働條件の維持又は改善の目的の範囲内の意味である。此の範囲を脱した場合には其の行動は最早労働組合の行動ではないのであるから、労働法理論上、之を保護すべき理由は毫も存在しない。之に反し労働組合の本質的目的の達成に関する限り、営利的行為は勿論政治的行動と雖も之を合法的のものとして許容して行かなければならぬのである。此の限度は固より個々の場合の解釈問題と為るのであるが、一般的概念的に言へば先づ大体此の様なことにならう。社会局新案の第十七條が単に「労働組合ノ行為ガ安寧秩序ヲ紊ルトキ」と謂ひて、稍寛大なる規定の仕方をしてゐるのは、要する所右様の見解に出づるものであつて、産業的目的と密接なる関係が存する限り、組合の政治運動其他を許容するの趣旨であらうと、善意に私は解してゐる。此点が法案の進歩的な方面として敢て推賞しなくてはならぬ。強て之を謂へば該十七條の規定は、すでに治安警察法第八條第一項の規定が存する以上、別段必要のない規定である。別に傳家の宝刀を二本迄も備付けて、威して見る必要も無さそうなものである。

二

第二に法案の第十一條、第十二條の規定に付て考へて見たい。此の二箇條は所謂団結権の保障に関する規定であつて、すでに旧法案にも存してをり、唯第十一條に於て「云々の意思表示又は約定を無効とす」と書いてあつたのを、今度「云々することを得ず」と改めた丈けであつて、其他は旧規定の文言と少しも異る所はない。是等の規定は其の形式からすれば、確かに労働者に向て団結権を確保してゐるものと謂へる。即ち先づ第十一條は、団結権の積極的方面を保護した規定である。「雇主は組合員たるの故を以ては、最早労働者を解雇することが出来ない。又労働組合に加入せざること、又は組合より脱退することを以て、雇入の條件と為すことを得ない」といふのであるから、之が法律と為つた暁には、労働者は大手を振つて組合に加入し、又組合員のマークをブラ下げても、首にせらるゝことはないことに為り、茲に団結し得るの権利が一応完全に与へらるゝこと、為る。而して又第十一條は第十二條に対して、団結権の消極的方面をも保護してゐる。「労働組合が組合員の足止策として其の脱退に関し不当なる條件を付することを許さない」といふのであるから、組合員は今迄の組合が気に入らなければ、何等過重の負担や制裁を忍ぶことを要せずして、之より脱退し、自由に他の組合に移ることが出来、又若し一も然るべき組合が無ければ、何れにも加入せずして単独にて止り得ることをも、法律が保護してゐ

るものと視ねばならぬ。即ち第十一條は所謂勞働者の非組織權、非團結權を保護してゐるものと見るべきである。斯く觀察し來れば此の二箇條の規定に依て、勞働者の團結自由權は雙面より保護せられ、殆んど餘す所なきかにも見えるのである。併し夫れは前にも言つた通り、是等の規定は[illegible]形式的に二者の場合の話であつて、[illegible]規定の實質的方面を穿て見るときには、人々の安心してゐるやうな團結權の保護は實は甚だ怪し氣なものであるとが、分つて來るのである。夫は何故であるか。先づ第十一條の方から調べて見る。本條は舊社會局案には、無かつた規定であるが、たしか京阪側實業團體の要求に依り、行政調査會が舊法案に之を挿入したのであつたやうに記憶する。其の目指す所は勿論非組織權の保護に在つたのではなくして、傭主側の勞働組合の切崩し、罷業時の買收の利便に資せんとするに在つたことは言ふ迄もない。斯かる不純な動機を孕んでゐる此の規定―然らずとしても、兎角さう解され易い此の規定は、厳正を標榜する當局の立場としては、寧ろ之を削除すべきではないかと私は考へる。組合員の脫退に關し「不當なる條件」を定め得べからざることは、別に本條の規定を俟つ迄もなく、解釋上既に明らかなる所である。然るに若し斯樣な條文を置くときには、「不當」なる文字の解釋如何に依ては、勞働組合は濫りに、當該規約の變更を命ぜられ又は無效を宣言せられて、著しく組合統制力を減殺せらるゝことに、爲らねばならぬであらう。次に第十二條の規定と雖も、亦同樣に然かく團結權を確保してゐるものではない。同條には舊法條と違つて「云々することを得ず」と規定し禁止的な形式を取つてゐるから、傭主には幾らか強く響くと言つたやうなことはあるであらうが、之には舊社會局案第二十一條の如き、罰則が附加せられてないから、實際上の效果は甚だ薄弱なものに了ると觀なければならぬ。制裁なき規定であるから、傭主側に於ては或は從來通り平[illegible]理[illegible]て、[illegible]ないものとも限らない。[illegible]として之が行はるゝであらうと私には考へられる。其結果は何うなるかと云へば、常に不當解雇を理由とする爭議の頻發である。若し之が勞働法理論の普及し、勞働組合の發達した歐洲であれば、禁止規定に違反する解雇の意思表示の無效を主張して、裁判沙汰と爲り當該勞働者の勝訴と爲つて其の權利は保護せられるけれども、如何せん我國勞働者並に勞働組合の現狀を以てしては、未だ權利爭議の方法に依る法律的解決手段を彼等に求むることは尙未だ無理である。彼等は寧ろ常に喜んで團體的爭議の方法に訴へるであらう。斯くしてこゝに無用に勞働者の感情を惡化し、徒らなる鬪爭を醸成するの結果に立至らしめぬとも限らない。立法者にして、初めより御座成りならば則ち止む、否らずして若し眞に團結權を確保せんとするならば、やはり之に制裁規定を附するのが寧ろ賢明なるやり方である。

三

第三の點は、勞働爭議の場合の損害賠償責任に關する第十三條の規定の問題である。本條は勞働爭議に當り、傭主に生ぜしめたる損害賠償責任の免除に付て規定をしてゐるが、之に付ては大凡次の四點に注

屈しなければならぬ。先づ(1)こゝに免責を受くべき爭議の種類は或者が他人をして、「勞働ヲ停廢セシメ又ハ雇傭契約ヲ解除セシメ若ハ之ヲ締結セサラシメタル」場合に限られてゐる。卽ち勞働法上前段は同盟罷業、團結的怠業を行はしめたる場合であり、後段は所謂ボイコットを爲さしめたる場合に關してゐる。若し文理解釋に忠實ならば、免責は唯是等二者の場合に於てのみ認められ得るものと解するの外はない。從て今或者が他人をして熟許官傭の爭議方法に出でしめたとしたならば、之に因て傭主に生ぜしめたる損害の賠償問題は、如何に之を處理する者であるか、先づ此點が一の疑問である。次に(2)本條は其の爭議の原因を限定して唯「勞働條件ノ維持又ハ改善ニ關シ」所謂行爲を爲さしめたる場合に於てのみ免責を得せしめてゐるが、すでに法律が勞働組合に向て此種の產業的目的以外に種々なる附隨的な目的を許容してゐる以上、之に關し問題の起る場合をも考へ得られるのである。故に今例へば共濟修養其他の目的に關して或者が他人を誘惑し、勞務を停廢せしめたとしたならば、之に因る傭主の損害の賠償は之を爲さしむるの趣旨であるか、此點が第二の疑問である。更に(3)本條は免責を受くべき者を勞働組合、其役員及び組合員の三者に限定してゐるが、所謂の行爲を爲し得べき者は尙他に幾らも考ふることが出來る。勞働組合に屬せざる勞働者、而も自己の屬する工場の如きに於て他の職工を勸誘して勞務を停廢せしめたるときは、之に因り傭主に生じたる損害は彼をして賠償せしむるの趣旨であらうか、甚だ不明である。若し之を賠償せしむるものとせば、兩者の間に權衡を失するであらうし、又若し賠償せしめずとせば、此規定丈けでは少くとも、解釋上の疑義を生ぜしむるに充分である。或は本條は勞働組合の規定であるから、組合員以外の者に付ては、全然考へてないと云ふかも知れぬ。若し然りとしたならば、立法者は問はずして勞働者の組合加入を事實上強制するの法律を作つたことゝ爲らねばならぬ。是等の點に付ての疑念は其の三である。最後に(4)本條は所謂の行爲を爲さしめたることに就てのみ、賠償責任を免れしめてゐることは甚だ解するに苦しむ所である。勞働組合の役員及び組合員が他人を勸誘して、例へば勞務を停廢せしめ、自己も亦同時に之を爲したるときは如何。又勸誘されたる他人が之に應じて、勞務を停廢したるときは如何。是等に因て傭主に損害を及ぼしたるときは、賠償責任の問題は如何に之を解決せしむる積りであるか、此の點に就ては、故意か過失か法案には一言の言及する所がない。此の問題は要約すれば、勞働爭議は不法行爲と爲るや、債務不履行と爲るやの問題に歸着するのであるが、察する所立案者の考では、本問は大分議論のある點であるから、之を勞働法學上の解釋問題に一任せんとする肚であるでもあらう。果して然りとするならば、本條はいつたい何を規定した事に爲るのやら、規定の仰々しき割合には內容甚だしく貧弱にして、殆ど無用の事柄を規定してゐるものと云へぬではない。其規定する所は唯勸誘行爲、其他が不法行爲を構成するものに非ずと謂つた丈けであつて、毫も同盟罷業其他の責任問題に觸れてゐるものではない。例は、治安警察法第十七條第三十條の廢止に於て、第三者の刑事責任を免除したのと相對して、本條に依り其の民事責任を免除し

たゞ斯解釋上初めより存在しない責任に付て、免責する旨を宣言してゐるに過ぎないものと謂はねばならぬ。曩の審議會の答申第五には明らかに「同盟罷業に因る損害賠償義務を免除すべし」とあつたに拘はらず、同盟罷業其ものに因る損害の賠償問題には、一言も觸るゝ所なきは吾人の期待に背くこと甚だしく、吾々の齊しく失望を感ずる所である。之れ本條に對する不滿の其の四である。

四

最後に一言したきは、諮問第七に「勞働協約に關する規定を設くべからず」と爲し、前法案に於けると同じく、何等の規定を法案中に收めなかつた點である。之は私共には最も遺憾に思はるゝ點であつて、折角勞働組合法を作り乍ら、團體交渉に關する規定を設けないといふことは宛も龍を畫いて睛を點ぜざるにも等しいやり方である。本來勞働組合を法認するといふことは、勞働者團體の存在を明らかにし、勞働協約の相手方たる資格、換言すれば法律上の意味に於ける團體的交渉能力を認めてやることであるのに拘はらず、之に關する規定を忌避し去つたといふことは、如何にしても殘念至極である。聞けば實業家團體に於て極力之に反對したといふことであるが、之は勞働協約本來の性質と機能とに對する誤解から來てゐることであり、又既往の勞働者側の個々與へた惡先入から發してゐることであらう。何れにしても、今平和的制度である所の勞働協約が、宛も一種の鬪爭形式であるかの如く、一般に考へられてゐることは洵に遺憾に堪えざる所である。此事に就ては過般「社會政策時報」(十一月號)に於て論じて置いたから、重ねて申述べないが、勞働組合を法認して、而も團體交渉權を與へないといふことであれば、謂はゞ「傭主に相手にされない勞働組合」を勿體らしく認めてゐるといふ奇觀を呈することに爲らねばならぬ。相手にされない勞働組合ならば、腕力沙汰でも相手にさしてやり度いのが、勞働組合側自然の人情であらう。こゝにも亦實力鬪爭の餘地が態々殘されてゐるやうに私には思はれるのである。一般に爲政者に於ても資本家に於ても、尙又勞働者側に於ても、も少し法律的鬪爭——堂々たる陣容を張つた嚴正公平な無理のない法律的鬪爭に入り、又入らしむるやう策と考慮して欲しいものである。

秋田縣前田村小作爭議

三輪壽壯

□

秋田縣北の大館町から十五里、青森縣から古河鑛山のある阿仁合町に至る中途で奥里から八里の奥地――そこに此問題の前田村五味堀の部落がある。

昭和四年十一月上旬、もう降雪期中旬の山々に降るが、阿仁部地方は一度降つて阿仁合町より一時道九里、沿線の八竹町村を除いて阿仁部地方と謂ふ――も村々ときてはゆかのが時節。道路はくぼんで泥濘、寒路で、殆ど通過し自動車でその泥濘に車輪を埋するといふ交通難の時期であつた。

村民は秋田縣北きつての大地主庄司一家、小作人は大正十四年以來農民組合の鐵の如き團結を以て一團となり二十名地主は固く集つてゐた樣に、互々相對峙して一種氣味の悪い睨合の狀態は數十日續いた。遂に十一月二十六日五味堀部落に屯する爭議團員を檢束せんと闖入した米内澤警察署員との間に白刃が閃めき巡査部長が腕を斬られたと新聞紙は報じた。それが所謂騷擾事件の發端、縣警察部、各地よりの應援警官隊、檢事の急行となり、一方爭議團は廿六日夜團員の非常召集を行ひ、大又川を前にする小高き丘陵の天險を擁し、河原の石は防寨となり、俄仕立てではあるが火見櫓が設けられ、野天に風呂桶四つを据ゑたところは籠城攻めの用意ともいはれる位、日本刀、山刀代りの鉈の山、交代夜を徹しての火見櫓の見張、爭議團員と男女約二百名悲壯な切迫した氣持が銘々の胸に漲つた。十一月廿八日の秋田魁新報は實況を叙して曰く

「廿七日午前九時半から下米内澤署長以下三十數名の警官を引連れ組合幹部逮捕に向つた。之に從つて自警團と稱する北秋田郡非組の百三十餘名が槍、日本刀を提げて物々しいいでたちで組合本部のある五味堀部落の上村といふ小高き丘を目ざして轉々と詰めかけ槍を揮つて威嚇した。遙に之を眺めて居た百名位の組合員はにはかにどよめき一同は殺氣に滿ち嵐の様な喊聲を擧げて石を拾つて一齊射撃を開始したので警官隊も自警團も一歩又一歩退却し、約一時間にわたつて上村の丘から投出す石礫に射すくめられ遂に一時警官隊に八名の負傷者を出した。尚組合側では○○○○は腎部から腹部にかけ一槍で突き抜かれ生命危篤△△△△は肩間を割られて重傷外一名の輕傷者を出し十時半石合戰は一先づ終つた。」

又四日の同紙は報じて曰く。

「前田村は今さながら、戰場の巷と化して居る。絶えず負傷者を運ぶ泥だらけの自動車、棍棒を携へる自警團の中には眞黒な庄司村長がカーキ色の登山服を着て三尺餘の黒柄の古刀を腰にさして手には木刀を携へて居るやら梅村支配人は左手に棍棒を右手にピストルを握つて自動車のあとを追ふなど目立ち、闘爭を擔ふもの大島の槍の柄を揮

つて突き出すもの……庄司秀藏氏は烏打帽を目深に被り九郎判官義經氣取りで間道の岩崖を傳つて川淵に降り、阿仁川の激流に船を浮べて自警團を指揮する。』

之を見ると庄司一家も大分遣てたらしい。元亀天正の頃の軍記を見る樣な感がする。

『何といふ警察の無力』――さう庄司兵藏は新聞記者に語つたとか。二百か三百の爭議團に對して物々しい軍隊出動說さへも傳へられた。

爭議團で采配を振つて居た可兒吉雄君が當時語つたことがやはり魁新報に載つて居る。

『僕等は來年の春までは持久戰で行かうと思つて居た。それだのに警察では三十圓位の旅費をもらつて僕等幹部に退去してくれといふ。退去しなければ力にかけても退去させるといふ樣な口吻をほのめかした。僕等も血の氣のある男だ。こんなことで退去されるか。そうして居る中に小笠原正美君に取調べたいことがあるから米内澤まで出て來いといふ。愈々以て我々を一人々々呼んで檢束する覺悟だなあと思つた。しかし僕等は出來る限り隱忍自重した。しかるに何事ぞ二十六日最上部長が「檢束だ檢束だ！」と土足の儘で事務所の疊の上を荒し廻つたのだ。玆に於て小笠原君の血は逆流し小笠原君所持の日本刀は部長の血を甜めたのだ……二十七日の九時半頃から警官隊の一隊と暴力團が槍、刀、ピストル等を手に〲持つて我が五味部落に犇々と押し寄せて來るではないか。この有樣を見て同志は默つて居ると思ふか！僕も之以上は制止しかねた。矢は弦を放れ石は飛び血の洪水だ！僕等の要求を容れない限りもう一度！二度！三度死ぬまで竹が砂利になつても闘う。』

然し可兒君は意氣の男だが涙の人である。縣警察首腦部と組合代表者數次の交涉の後、可兒君は之以上多くの犠牲者を出すに忍びずとなし、涙を呑んで次の形式で廿八日午後四時圓滿妥協して戈を收め、可兒君等九名の幹部は警察に自首した。

條件

一、昨日の約束に基き庄司家に極力和解勸告にわたりたるところ庄司家においても過般裁判所長に示したる最後案にて解決したきものなりとす。

一、誠心誠意調停に努めたるも成立の見込みなきを以てこれ以上反抗することをやめ自首せられんことを望む

一、前記一項の條項を基礎とし大館裁判所に和解方法を開かすべきことを努力することを約束す。

米内澤警察署長

千葉清治

小作人代表清水忠治殿

爭議團の情報に曰く。

『世にも悲慘な爭議團大會は男女三百名の團員に依つて構成された。可兒、川端兩君の挨拶は滿場の小作人大衆の肺腑を抉り號泣せしめた。

――今吾々は矛を收めて自首する。然しながら諸君は飽くまでも爭議團を死守せよ。全國の同志は擧つて吾等を援けるであらう。最後の勝利は斷じて吾等のものだ。

――』

かくて可兒吉雄、宮山慶治、川端一二三、小笠原政美、尾山善作、大田勝正、佐藤清吉、熊谷甚藏、木村利藏の九名は警察のトラックに乘じて小作人の涙の見送を受けて大館刑務所に送られたのであつた。

可兒君は足尾鑛山の鑛夫でたゝき上げ大正八年の爭議に參加して足尾を首になり、阿部熊作久君を組合長とする全日本鑛夫組合の幹部として或は秋田に或は常磐に活動して來たのだが、小坂の煙害爭議から秋田の農民運動との緣故をもち、日本大衆黨秋田縣聯合會を中心として秋田の鑛山、農村の組合運動を指導して居たので、今回の前田村爭議の指導者となつたわけである。可兒君は情の男である　彼が別子爭議の爭議資金對を救ふ道として考へついた東京市の僞紛持講事件一同君を結局自首せしめた所以のものは、此事件で他に一切迷惑を及ぼす人がないといふことを保險事の一木村太郎氏（一木宮相の息）から聞かされて來たつた。私は間仁川の前を以て擔ふたいつた可兒君が三百の農民男女に累の及ぶのを恐つて自首しか樣な誤なくし考へることが出來ない。

宇田君は鑛山できたへた男。小宮原君も小既で[illegible]鑛山と農村を背景とする福[illegible]げて居る。北九州炭坑地方の暴力團の女のドに腕を嫌へた淺原健三君、今は長崎の市會議員をして居るが香焼炭坑騷擾事件の首魁と目された今村等君　また加藤勘十君にしろ鑛山勞働運動で磨きをかけた人である。鑛山の中でも足尾は殊に選抜きの戰闘的分子を輩出せしめた。栃木縣會議員で政治的に活動する石山寅吉君なども渕和しい方である。別子爭議で會社の暴力團數百を二三人の同志と共に叩退した高野三大君、日本勞働組合同盟の幹部でサイボンと渾名された圓家博君、大衆黨本部の留守居役を承つて異常の能力を發揮して居る高橋長太郎君、また秋田縣下で可兒君等と共に重要な役割を演じて居る川出鐵次郎君、[illegible]鑛山の爭議[illegible]中村[illegible]君、東京府大衆黨の名物男[illegible]木君、高原君それに本件の可兒君、宇田君など數へ來れば十指に餘る一騎當千の士が居る。麻生大衆黨委員長が北[illegible]出來る選舉區が他にあるにも拘らず思出多き足尾鑛山を背景とする栃木縣から、同じ男の意地を通さうとするも、勞働運動のエルサレムを回復して己の戰士に報いようとする同君の義侠心が然らしむるのであらう。

前田村の小作問題は普通の小作關係よりとは異つた永小作權の主張を裏付ける樣な慣行を含んで居る。小作問題の權威小野武夫博士は「永小作論」中に秋田縣前田村の小作關係を永小作なりと論斷した。博士が大正十一年所同地を實地調査したとき、庄司家は多くの文獻を誇らかに持出して日本全國に今はその慣行を法律の成文で打破されて殘り少なになつた永小作慣行の珍らしき一例であるとの博士の證辭を喜んだものであつた。然し永小作が小作人の權利を確保するものであることを知つた庄司家は大正十二年七月庄司前田村長の名を以て當局に對し「永小作に非ず」と旨取消を申立てゝ居る。小野博士は庄司家小作關係は主人がその家のドリ男作男等に田地を分ち與へた所謂「分與永小作」であるとし小作人を作子と呼ぶ習慣の存在を其論據なりとした。併し他地主の負擔すべき租稅が小作反別の割賦に應じて小作人に轉嫁され小作料の一部を形成して居る。小作米を作徳米と呼ぶのも永小作である證として一般に知られる。又小作料を[illegible]として一借入[illegible]出來[illegible]前の

承諾を要せずして賣買譲渡し得る物權的慣行も永小作權たることを裏づける證左である。

以上の如き法律關係に然しながら前田村に農民組合が組織され地主が訴訟を以て之に對抗する樣になるまでは農民自身殆んど氣にもかけなかつたところである。大正十四年夏のことであつた、地主は從來小作料反當三斗七升五合と轉嫁稅額反當平均六圓前後(米にして二斗乃至二斗五升)とを徵して居たものを、其稅金轉嫁制を廢して其代り七斗五升の小作料を取る事に改めようとした。約十割の値上である。小作人の間には反對論が起つた。その時阿仁合町でかねてより鑛山勞働問題や思想問題に關心を持つて居た佐藤、小武海二君、米内澤町の庄司家小作人を糾合組織して居た奧田君と此三人が柱となつて農民組合を組織し、日本農民組合の三宅正一君次いで組合長杉山元治郎氏來りて正式に日本農民組合に加盟し、めざめた農民は鞏固な團結を作つて殿樣地主庄司家と對抗するに至つたのである。

地主は狼狽すると共に憤つた。早速十五年春組合の強硬分子四名に對し土地返還請求訴訟を提起したが小作人側の管轄違の抗辯の爲一敗地にまみれて了つた。小作人側は舊制小作料額を納入せんとして地主の不受領にあひ不納同盟の戰術を取らざるを得なくなつた。

爾來五ヶ年法廷に田園に地主小作人の對峙と鬪爭が續けられた。法廷に持出された訴訟件數百二十件、小作人勝訴五件、示談解決七件其他の理由により確定せるもの八件を除き他は上訴せるもの悉く、小作人の敗訴となり、昭和四年十一月現在大審院二件、宮城控訴院五件、秋田地方裁判所一二件、秋田地方裁判所大館支部一四件、大館區裁判所六七件を數へた。此法廷戰を一手に引受けて奮戰したのは辯護士細野三千雄君である。細野君はさきの東京市議職に四谷區から推し立てられて惜敗したが彼は東京の自宅に居ることは一箇月一週間もない位で、新潟山形秋田から近くは群馬茨城あたりまで關東東北を轉々として巡つて寢室は汽車それも食堂車で正宗二合瓶一本を傾けて來て三等車の中に五尺七寸の長身を海老の樣にして眠るのが極樂だといふ精力家。小作人が五年間執拗な抗爭をつゞけて來た半面には細野君の並々ならぬ努力が與つて力あることは前田村の小作人を始め秋田の農民の認めて居る所である。だから來るべき總選擧には本人がいやといつても秋田縣第一區から當選すると息まいて居る。

前田村小作爭議解決の爲には裁判所も隨分骨を折つて白井秋田地方裁判所長も自ら出馬して調停に和解に努めたが結局十月中旬その效空しく決裂してしまつた。之より先地主側は小作人の襲來に備ふる爲數萬金を投じて堅固な地下室を作つたと傳へられた。大館町の鬪犬業者の暴力團をして爭議團指揮者の可兒君をやつつけさせる計畫がもれて來た。暴力團の自警大十數人が庄司家を護衛して小作人側の戰意をいやが上にも煽り立てた。かくて血腥い十一月二十六日が來たのである。

事件の後爭議團は陣容を建て直して餓死するとも要求を引込めぬ氣勢を見せた。米内澤署長の入れた一札に基き大館裁判所の調停は開始されたが、流石頑冥な地主庄司兵藏氏も時代の趨勢と生活の根柢を脅かさるゝものゝ反抗の如何に恐るべきものかゞ呑みこめたものか遂に折れて十二月二十七日左の和解が成立した。

和解條項

一、原告(地主——以下同じ)は被告(小作

人（以下同じ）に對し其所有土地を從前通り小作せしむること。

二、小作慣行は從前通りとし、原告主張の小作料額は被告に於て承認し、大正十四年度以降の小作米に適用する事。但土地等位見込違の爲著しく他と均衡を得ざる箇所に付ては其小作料を原被告に於て更に協議の上適當の修正を加ふること。

尙不作の場合に於ては相當毛引を原告に於て認むること。

三、小作料の納期は每年十二月末日限りの事、尙被告は原告に對し別紙小作證書を差入るべきこと。

四、大正十四年度より昭和三年度に至る各未納小作米は昭和五年一月末日に至る迄被告に於て之を各借米證書に改め之を原告に差入れ該借米は昭和四年十二月より向ふ十箇年に亘り各納期に之を分納すること。但被告に於て昭和四年十二月より同七年十二月迄向ふ三ヶ年間猶豫置き同七年十二月より七箇年間に亘り各納期に平等分割の上支拂を了する事を得。

尙係爭に關し被告に於て假差押執行取消並に强制執行停止の爲擔保として供託したる金員及强制執行に依る換價金は被告に於て前示未納小作米の支拂に卽時充當し其の殘米に對し本文の如く支拂を了すること。

五、昭和三年以來原被告間に於て執行の結果被告に於て原告に返還したる田地に就ては原告に於て返還前と同樣被告に小作せしむること。

六、前示第三項の期間内に小作料を完納したる被告に對しては原告は一等位田地（小作料一反歩七斗五升）一反歩に付五升の割合を以て奬勵米を卽日給與すること。但被告が豫め原告の承認を得たる時は納期後一ヶ月以内に限り右本文を適用すること。

七、原告に於て被告に對し本訴請求中地所引渡棧の請求は之を拋棄すること。

八、原被告間に於て將來若し右小作地に關し紛爭を來す如き場合あるに於ては假令本條項中明文なきものと雖本條項の精神に基き誠心誠意の下に之が平和的解決を期すること。

九、訴訟費用は各自辨たること。

右の和解成立と共に前田村爭議は一段落を告げた。然し右の條項の外に條項に謳はれて居ない條件を逸してはならない。それは爭議費用一萬圓を地主から小作人に支拂ふことゝ、小作人の耕作地に假執行をして稻田を荒した損害一反歩に一石宛を地主が賠償することとである。小作爭議に爭議費用、之は必ずしも前例のないことではないと思ふが土地を引揚られもせずして此巨額の費用を支出せしめたのは兎に角一新機軸を開いたものといへやう。

東北の眠つて居る樣な農村に天下の耳目を聳動する樣な小作爭議が起る。濱口首相のお國許に漁民騷動が起る。昭和五年天下多事なりと誰が期し得やうか。（昭和五年一月六日）

嵐を衝いて

福本和夫

一、金解禁と無産者運動

　大正九年以來、まさに、十年の不景氣である。しかもなほ、此の不景氣をもつて、大正九年の恐慌と、十二年震災の打擊とに、因るものとし、所謂景氣變動上の、單なる不景氣で、およそ資本主義經濟に必然な、一時的現象にすぎず、と考へて、世人は徒らに、おのづからなる一陽來復の春を、期待してゐたものである。ところで、どうだらう。株式會社の解散、それも專ら、閉鎖乃至倒壞によつて、解散し去つたもの。大正九年より十三年までの間に、三十億五千萬圓、減資したるもの同じく十二億圓であるから、大戰時中より大戰直後にわたる、財界の沸騰時代において、ブク〳〵と、泡沫の如く、泡立つた所謂泡沫會社の如き、先づ、大抵は、整理されたものと、みてよからう。其の上、しかも、十四年以後に於いても、年々、五億圓内外の解散、二億圓内外の減資をつゞけて、昭和三年迄、解散額二十億八千萬圓、減資額七億八千萬圓を、見てゐるではないか。尤も十四年以後の解散は、主として、合併による解散であるが、前後通算して見れば、大正九年より昭和三年にいたる、その解散額において、五十一億三千萬圓、減資額において、十九億八千萬圓の整理となつてゐるのである。九年の恐慌及び十二年震災の打擊は、およそ整理されつくした、といつて差支へあるまい。しかも益々、不景氣は不景氣でないか。

　大正十二、三年頃に於いては、また、日本は世界一の高金利國だから、不景氣なんて、此の金利さへ低下すれば、おのづから景氣は、好轉するであらう、と主張されもしてゐた、もので

あつたが、昭和二年以來の金融緩慢と、二年および四年の預金利率引下げに因る、低金利の結果は、どうであつたか。

先づ、銀行會社計畫（即ち、新設および増資）資本の推移を見よ。昭和元年の十六億八千萬圓より、二年の十五億六千萬圓、三年の十四億九千萬圓と、むしろ年々、減少の傾きにあるではないか。たゞ、從來の山の如き、高利社債の堆積が、此の低金利に惠まれて、しきりに低利社債へと、借替へられたことは金利負擔を輕減し、それだけ負債整理に役立つた、ものとはいへる。大正十四年以來、年々七億四千萬圓乃至十一億圓の、社債發行に對して、償還高の比率が、十四年の三六・九パーセントより一躍して、昭和元年六九・六パーセントとなり、二年には六七・九パーセント、三年にはつひに、七九・二パーセントとさへなつてゐるのは、昭和元年以來、低利借替社債の發行が、いかに旺盛であつたかを、物語るものであるが、未だ借入れ元金を返濟するまでには、容易にいたらないのみならず、過剩の遊資も既に、それぐ、昭和三年中に、その落ちつくべきところにおちつき、低利借替による整理も、四年上半期以來、ちよつと一段落のすがたである。三年上半期七億三千萬圓であつた、會社債の發行が、四年上半期には、四億八千萬圓となり、また同じく三年上半期、三億七千萬圓であつた、銀行會社計畫資本中の、社債及び借入金が、四年上半期においては、九千萬圓に激減してゐるからである。

およそ生産費が問題となるとき、企業家はすぐに、賃銀高を訴へるのであるが、いづくんぞ知らん、大抵の會社では、山の如き借金の利拂ひ、乃至は割高な原料費が、むしろ、生産費中の主要部分を、なしてゐるのを見るのである。

今日までの減資、解散と、大いに期待されてゐた、低金利の恩惠もつひに、かくの如くして、景氣を好轉しはしなかつた。不景氣は依然として、深刻化するばかりである。なに故であらうか。

かの能率増進、科學的管理といつた方面から、大戰先づ、米國におこつた、産業經營上の新運動は、一九二五、六年頃から、獨逸をおとづれ、あらたに合理化運動なるスローガンのもとに、大戰によつて不健全に膨脹し、すでに崩壞に瀕した、獨逸全産業の再組織運動となり、轉じてさらに英國にわたり、英獨其他、ヨーロッパの資本主義に、所謂一時安定を、もたらすにいたつたものであるが、其の後、一九二七年、ジュネーブの國際經濟會議と、これに基く、翌年の國際經濟諮問委員會の、決定と宣傳によつて、今日、資本主義諸國の世界的標語である。けだし、世界大戰を契機として、世界の資本主義經濟は、す、

くなくとも、二つの新らしい事實に當面した。社會主義經濟組織の出現と、植民地における資本主義の擡頭、これであつて、大戰後の今日はもはや、以前の如く、處女的植民地を開拓してそこにドシ／＼と、新規の購買力を植付けうる時代ではなくなつた。しかも況や、内には、大衆の窮乏による、購買力のおどろくべき減少があるに、おいてをやだ。市價經濟が行詰つて、原價經濟の發展に、すなはち、生産原價の低下に活路を求めざるを得なくなつたと、せらるゝ所以である。

列國の最近における、對支輸出を見るに、一昨年より昨年への、輸出増加率、英國が六割一分五厘、米國が五割一分五厘、獨逸また四割なるに比して、我が國は僅かに、九分八厘であつて、堂々たる米國の東洋進出と、英獨のすさまじき捲土重來はまつたく驚くの外なく、いはゞそれだけ、我が對支輸出は、相對的に低下したもので、勿論それには、我が武力干渉などの招いた、所謂日貨排斥等々の反響に、よるところなしとせぬは、いふまでもなけれど、畢竟は、英米獨の、低下した生産原價が割高な我が生産品を、驅逐したものに、外あるまい。

世界經濟の、かやうな動轉のうちに、我が資本主義經濟のすがたを、みつむるとき、深刻なる我が財界不況の根因は、はじめて、おのづから明かに、暴露せらるるであらう。

第一に我が國にはなほ、商業によつて、直接支配せられてゐる、中小企業や、生産原價なるものを、てん／＼、問題に採りし難いやうな、手工業的企業が、極めて廣汎に、存在してゐるがためにいきほひ膨脹の經濟であり、市價經濟たらざるを得ぬ傾きにある。第二に、從つて、これらの中小企業以下は、もとよりのこと、大企業と認むべきものも、殊に大戰時中より大戰直後にわたる、放漫放埒なる經濟の結果、其の大部分は、ひとしく、品質不良、過大評價の固定資本と、山の如き社債借入金の堆積によつて、慢性的な門擴張生産不良にかゝつてゐる。ために、生産原價は高からざるを得ず、しかも工場生産額は、大正十三年の六十六億圓より、十四年の七十億圓、昭和元年の七十二億圓と、むしろ増加をつゞけてゐるのであるが、しかも、第三に、國内の購買力は、近時、著しく減少してゐるものと、みなければならぬ。先づ、勞働人口指數を見よ。昭和元年の一〇〇・〇一より、二年の九四・〇八、三年の九〇・三四と、慘たる低落をつゞけてゐるではないか。失業者群の無遠慮な排出は累積し來つて、其の總數、最近おそらく、八・九十萬人を下るまいと推算せらるる。定額賃銀も亦、元年の九九・九八より、二年には、九九・九六となり、三年には更に、九九・〇六と低落してゐる。たゞ玆に、實收賃銀なるもの、元年の一〇三・〇七より、

二年には一〇・三パーセント、低落したが、三年にいたつては、却つて、一〇・九七パーセント、今年度の増騰を示してをり、人或は、これをもつて、勞働條件の改善を説くが、輕卒の甚しきもので、我我の見るところによれば、おそらくこれ、勞働時間の延長による割増金収入の結果であり、それこそむしろ勞働條件の、最近における一段の惡化を意味するものでなければならぬ。賃銀引下げ、解雇乃至、組合に對する壓迫、破壊を、原因とする爭議が、六割五分の多きを、占めるにいたつてゐる近年の爭議傾向は、そも／＼何を物語るか。次にまた、都市勤勞小市民の窮乏、沒落も、みのがし難き、最近の顯著なる事實であらう、

我が農村勞働者は、三百十一萬人と計算され、或は三百二十萬人といはれてゐる　其の中に、半プロレタリア農民たる、小作農が百九十萬戸で、耕作戸數の二割七分を占めてをり、さらに、小作兼自作の農民が、四割三分で、二百三十一萬戸といふのであるが、工場鑛山勞働調合の示すところによれば、大正十四年、工場勞働解雇者中、歸農者三十萬八千人、鑛山勞働解雇者中歸農者四萬一千人、計三十四萬九千人であつたものが、昭和元年より激減して、二年には、工場解雇の歸農者二十三萬九千人、鑛山解雇の歸農者三萬人、計二十六萬九千人にすぎず、農村の窮乏は、すでに、もはや、工場乃至鑛山よりの歸農者を、吸收し得ざる限界にまで、達しつゝあるものと考へられる。勞農大衆の犠牲と壓迫とにおいて、一切が遂行せらるゝ、我が國當然の結果として、こゝに驚くべき購買力の縮小が、不可避である。所謂財界の蹉跌と、生産の過剰は、必然でなければならぬ。

現に見よ、企業會社の拂込資本現在高は、大正十四年の八十八億圓より、昭和元年の九十三億圓、二年の九十八億圓と増加してをり、次に、企業會社社債の現在高も、十四年の十六億六千萬圓より元年の十八億五千萬圓、二年の二十一億圓と増加してをり、更に、銀行より企業會社への長期貸付金（證書貸付金）も、昭和二年三月の八億七千萬圓より、三年六月の九億七千萬圓、四年六月の十億五千萬圓と増加してゐる。かやうな企業資本の増加に對して、先づ、割引手形は、昭和二年三月の十五億二千萬圓より、三年七月の十億四千萬圓、四年六月の十億一千萬圓と低減してをり、次に、手形交換高も、元年の八百八十九億圓より、二年の六百二十四億圓、三年の三百二十二億圓と低減してをり、更に輸出貿易額も、大正十四年二十三億圓より、元年の二十億圓、二年の十九億九千萬圓、三年の十九億四千萬圓と低減してをり、總じて取引の方面は、どの點から見ても、確實に年々の低減となつてゐるではないか。

また、鐵鋼、石炭、木材、セメント、製紙、製糖、ビール、

過燐酸、硫安、等々に一割乃至四割といふ、生産制限の協定が近時しきりに行はれつゝある所以もこゝにある。これらは、大工業中、公然、カルテルの統制下に、生産の制限を實施するものであるが、其他にも、或る程度に、事實上の制限をやつてゐるものも、かなりに多く、また、中小企業、就中、地方織物業等に、限産乃至全休決議が、近頃、所在に、あらはれてゐるではないか。たゞに生産制限にとゞまらない。其の他、操短協定、價格協定等が、昭和二年の恐慌以來、續々、行はれ來つた所以も亦、結局は、こゝに存しよう。

要するに、以上の如き、内外の諸事情が相作用して、今日の我が不景氣を成すもので、おもへば、我が景氣の、しかく容易に好轉せざる、固より、知るべきのみである。減資、解散、低利借替、少々の減食ぐらゐでは、慢性胃擴張の、我が企業會社の、生産不良は、そもそも退治さるべくもないのである。

昭和二年の恐慌以來は、我が國でも、所謂合理化なるものが熱心に唱へられ、一方、企業會社の整理、合併による、集中化、組織化乃至統制化が、大金融資本の要請によつて、急速に促進せられ來つたと共に、これと相俟つて、所謂規格統一、製品單純化、共同販賣、商業組織の配給系統化、固定資本の質的向上、生産能率の増進、等々への努力の傾向も、何程かすでに、見らるるところ、すべてこれ、大工業主義、高度資本主義への行進である。鐵鋼業における最近の官民鐵鋼分野協定の實現の如き、或はまた不況對策の一として、近く企圖されたる造船業者の分野協定の如き、まさに、作業の專門化、商品の單純化をめざすものといふべく、現に、八幡製鐵所において、其の作業能率が近年著しく改善された、最大の原因は、設備の改善と、製品の種類を少くして、各品種毎の多量生産につとめた、點に存するといふ。

最近數年間、我が炭坑業における技術上の進歩は、顯著なるもので、その結果、人力を省き、鑛夫一人當りの能率を增進し、殊にこゝ二三年間において、其の增率の甚しきを見る。即ち全鑛夫一人當り、一年採炭高、大正七年より十年迄は、約九十噸邊に停滯せしものが、大正十一年より百十一噸となり、漸次增大して、昭和三年は百四十二噸であり、全國鑛夫數は、大正八年に比し、今日は、三分の二に減少し、三十四萬八千人より、二十三萬五千人に低下してゐるが、しかも全出炭量は、却つて增加してゐるのであるとは、九州某炭坑社長の報ずるところであるが、前記八幡製鐵についてみても、大正十三年に於ける、一噸當り、勞働者延人員は、十人で同じく石炭消費量は、三・五八噸であつたものが、昭和三年には、其の延人員において、七人、その消費量において、二・四八噸に減じてをり、また日本鋼

管では、一噸當り勞働者延人員、大正十三年が七・一〇人で、同じく賃銀は、一九・五九圓であつたものが、昭和三年においては其の延人員が四・三九人、賃銀が一四・〇二と、かなりな低下を示してゐるのである。紡績聯合會加盟會社は、昭和三年以後五十七萬錘の増錘をなして、ために、女工人員數は、大正十五年一月の十四萬人より、昭和四年三月には、十三萬人に減少したものであるが、しかも此の間において、女工一人一時間當り生産高は、百三十九匁より、百八十匁に増加したと、いはれてゐる。

しかしながら、慘憺たる失業者群の續出と、賃銀の低落とを齎らした、我が企業の整理、淘汰、集中と、生産能率若干の改善も、到底また生産原價の低下を、一般に實現せしむるにいたらず、物價は依然割高に保合のすがたであり、收益率(一利潤率)もしろ、低下を示してゐるのではないか。東京卸賣りの物價指數は、昭和二年六月二二七・〇、三年六月二二三・五で、四年六月は二二一・七であるから、大して低下せるものとはいへまい。小賣りの物價の指數は、二年六月が一八八・八で、三年六月は一八〇・六と低下したが、四年六月に至つて、一八三・八と上がつてゐるありさま。しかして企業會社の收益率たるや、これは、昭和二年下期の、製造工業が一・〇〇で、其他工業が一・二〇、平均一・〇六であつたものが、三年下期においては、製造工業が〇・八五とさがり、其他工業が一・一三とさがり、しかうして、平均が〇・九七、約一割方の低落ではないか。さらに、收益率のバロメーターともいふべき株價についてみても、これまた、三年六月から、ほとんど全く一本調子の低落といつてよく、四年六月では、三割方の低落であり、もしそれ、取引所にいたつては、實に七割方の暴落である。

所謂困難なるもの、根本的な矛盾、逆調は、要するに、毫も解決されてはならぬ。

後進國日本の我が資本主義は、いふまでもなく、英獨等の先進資本主義と異なり、むしろ、この點、米國とその軌を一にして、今日なほ、上向線を辿つてゐるものであり、かの所謂激烈沒落論者も、其後、激烈に一變して、みな一樣に今日は、上向線論者であるから、其の點はもはや問題であるまいが、兎角、物は極端から極端へと、振子の如く、振動せざるを得ぬものか、其の激烈な一變と共に、これとは、またしても先の議論上に、幾何學的な上向線を、一本引いて、我が資本主義を[illegible]、明治四十年の前後にても、[illegible]の如く。[illegible]反動政策は、封建突[illegible]、[illegible]、上向的[illegible]從つてそれ故に、[illegible]自由主義的であり、動搖期で、所謂純粹

せしめ孤立化せしむべきものに當ること[illegible]、ために、却つて眞に、今日孤立化せしむべき對象としての、社會民主主義をばつひに見失つてしまつたものも、なかには、あつたが、それはさておき、我が資本主義の上向線上には、尖銳深刻な矛盾、ほぐし難きなやみが、さながら執念な蛇にも似て、あくまでわだかまつてゐることを、玆に、見のがしてはならぬ。

　而して、我が財界の、かやうな根本的な矛盾、逆調は、金輸出禁止といふ所謂見えざる關稅障壁の溫床内に、はぐくまれたもので、執拗な我が企業會社の慢性胃擴張、慘たる財界十年の不況にも拘らず、或はまたそれ故に、一般物價は割高で、貿易は入超つゞき、在外正貨は消失し、爲替相場は激落し、國家の歲入は減じて、しかも歲出は依然たりといふ有樣である。見よ。昭和三年において我が國家の一般會計歲入は、十七億一千萬圓で、大正十年に比して、すでに、一割七分を減じてゐるに拘らず、なほ歲出においては、十七億一千萬圓で、一割四分公債においては、五十七億五千萬圓で四割一分の、膨脹となつてをり、一般物價は四年六月、英國に比して二割七分、米國に比して二割二分の割高である。貿易は、大正八年以來の入超つゞきで、昭和三年迄の入超額三十二億圓、戰時出超期の出超額十四億圓を超ゆること、すでに十八億圓であり、しかして、貿易外の受取勘定もいきほひ低減しつゝあつて、これら貿易および貿易外勘定の收支通算を、いま、大正十三年以來についてみるならば、年々、一億三四千萬圓乃至三億圓の支拂超過となつてをり、在外正貨は四年三月、僅かに九千萬圓といふから、大正八年に比して、實に、十二億五千萬圓の激減に當る。外國爲替の相場は、つねに亂高下を免れず、四年六月の如き、對米相場四十四弗、正に平價をくだること、一割方ではないか。

　打ちつゞく、企業界の不振、國際貸借のマイナス、國家財政の膨脹、しかうして、國債の大暴落、これでは到底、破産の外なしと、いふので、緊縮方針、この上はもうたゞ、金の輸出禁止解除のみと金解禁政策なるものが、愈々この七月以來田中 放漫」內閣に代つた、濱口「緊縮」內閣により、現實當面のスローガンとして絕叫せらるゝやうに、なつたものであるが、彼等の希望の如く、これによつて果して、財界十年の暗雲、一朝にして、晴朗の天をのぞみ得るや否や。

×　×　×

　おもへば大正六年以來、日本の金輸出禁止は、十二ケ年を經過する。しかも此の間、解禁可能の時機なしとせず、なかんづく、一九一九年我が大正八年、米國解禁の際の如き、財界の諸

條件はまさに我が解禁を許したるに拘らず、支那への資本輸出に供ふるため、所謂支那投資供給のためにする、金保有の考慮よりして、時の原内閣は、解禁の好機をあたら、逸したのであつたが、爾來、歐洲諸國の間には、續々解禁が行はれ、殊に、一九二四年(大正十三年)八月には獨逸が、ついで翌一九二五年五月には英國が、越えて一九二七年十二月にはイタリーが、しかうして一九二八年すなはち昨年六月には愈々、フランスが解禁するにいたつて、今日ではもう、殘るところ、僅かにスペイン、ポルトガル、ルーマニヤ、しかうして日本である。

ところで日本も、内外の形勢もはや、過去十二年の封鎖を破つて斷然解禁するの外、ニッチもサッチも行かなくなつたといふのが最近の情勢であるが、しからば先づ、如何に解禁されるであらうか。かの英國やスエーデンなどに於ての如く、舊平價による解禁(平價解禁)が斷行さるゝか。はたまた、ドイツやフランスなどの如く、平價を切下げ、新平價において解禁されるであらうか。

先づ對米爲替相場の動きを見るに、昭和四年六月、四十四弗内外に低迷してゐたものが、この八月半ば以後は、四十八弗に近く、金解禁がいよ〳〵現實當面の問題となつてより、僅か二四ヶ月にして四弗の反撥を見たわけであり、今日では平價を下るすでに三分内外の低落にとゞまる。六月以來、實に、七分方の回復ではないか。

しかして次に、我が純金保有の總量だが、これは大正八年以來、在外正貨こそ、十三億五千萬圓の激減で、この三月末ではもはや九千萬圓を殘すにすぎぬといふが、在内正貨の方は昭和元年に於いて十一億三千萬圓、現在なほ十億六千萬圓を維持してゐる以上、我が爲替安今日の趨勢から、どうして直ちに、我が爲替平價基礎の崩壞を説き、我が圓貨の歴史的價値の亡滅を斷じて、俄かに、これを、かのマルクや、フランや、リラの如く、さながら一片の反古同樣に下落して、つひに平價の切下げ、新平價解禁を餘儀なくせしめたるものに、比するを得ようぞ。

しかも況や、日本の財界もとより、いまなほ、放漫なる膨脹の狀態にありとはいへ、數年來、既に何程か、收縮の方向を辿りつゝあるにおいてをやである。見よ、我が事業會社の減資解散額は、昭和元年の七億六百萬圓より、二年の七億一千三百萬圓となり、三年は十一月迄の統計において既に、七億三千六百萬圓の收縮を示してゐるではないか。またこれを、日銀の兌換券發行高に見るも、大正九年二月の平均額十三億圓が、昭和三年九月には、十一億五千五百萬圓となり、四年九月では、更にそれより一分三厘を減じて、十一億四千萬圓となつてをり、彼

然膨脹の狀態にある、我が通貨の流通も、その傾向はといへば何程かすでに收縮の方向に、あることが見らるゝではないか。

されば、もし新平價によつて解禁せんか、此の論者の衷心希望する、混亂と打撃の回避は、依然困難なる上に、インフレーションの出現こそは、必然免れざるところであらうと考へらるる。而してインフレーションはさらに物價の騰貴を來し、實收賃銀の低下を結果せずには、やまないであらう。

かのドイツやフランス乃至は、イタリーに倣はんとする、我が國新平價解禁論成立の困難が、こゝに存しないかといへば、或は直ちに、我々を舊平價解禁に贊成し、追隨するものとでもみなすものもあるか知らぬが、それこそ輕率曲解の甚しきもの、問題はさう簡單ではない。マア落着いて聽きなさい。

昭和三年六月以來、株價はまつたく一本調子の低落といつてよく、東株調査の指數によれば、三年六月の一二四が、四年六月では九〇となり、實に二割八分の激落振りである。日銀の調査はこれと稍趣を異にするかに見ゆるが、いづれにしても、激落の一路を示してゐることは同じで、三年六月の指數一一四が四年六月には一〇四となり、四年八月にいたつては、つひに一〇〇臺を割つて九五となつてゐるのではないか。三年六月に比しては一割七分方、四年六月以來は八分六厘方の低落にあたる。

しからば、最近の物價はどうかといふに、日銀調査の卸賣物價指數に從へば大體保合をつゞけてゐた。三年上半期は、下半期にいたり却つて、若干の反騰さへ見せたのであつたが、四年一月以來は、漸く低落歩調に轉じ、九月の指數二一七・五であるから、三年六月の二二三・五に比して二分六厘方、四年六月の二二一・七に比しては、八厘方の低落を、見たわけではあるが、この六月以來、爲替相場の回復率が、七分に及び、また株價が、八分六厘の激落を示してゐる今日、物價の低落率はなほ僅かに八厘といふのでは、いまだ殆ど見るべき低落を見ざるものといつてよく、現に四年八月、米國物價指數の一四五・九に對する、日本物價は一七三・七で、實に一割七分の割高であり、これを金物價に換算するもなほ一割四分の割高ではないか。大いに我が物價の低落すべく、またしうる餘地は、かくの如く、まだ殆んど其のまゝに、殘されてゐるのであるから、こゝに舊平價解禁後は、先づ爲替相場の回復、安定と通貨流通の急激なる收縮とよりして、必然に、物價の激落を見るものと考へらるゝ。

英、米、獨、中央銀行の割引歩合は、いづれも六分乃至七分の高率なるに比して、我が日銀、現行の割引歩合は、日歩一錢五厘、これを年利に換算して、五分四厘七毛の低率である。世界の主要國中、五分半以下といふ低金利國は、日本を除いて僅か

にフランス、スイスの二国を数ふるのみ。金解禁にふみきつた従来の我が低金利をして、国際的水準にまで、騰貴せしめずには措かぬであらう。

かやうな低金利と物価高とに恵まれて、我が主要企業の株式配当率の如き、利潤率年々の低減に拘らず、三年六月の一〇・〇七一より、四年七月の一〇・七三と、却つて、増加さへしてゐる現状であるが、解禁後は、これら恩典の消滅と共に、イヤでも低落するの外なかるべく、従つてまた、解禁後における、物価の低落、金利の騰貴、配当の低下により、昭和三年以来激落の株価も、更に再び、低落せずにはやまない。

ところで、右の為替相場を、さらにたかめて、少くも平価にならし、貿易製品たる我が物価は引下げて、少くもこれを、物価の国際水準にちかづけ、ひいてまた、世界の金利水準にまで、我が低金利が引寄せられんがためには、どうしても断然、こゝに要す。我が価値尺度、通貨価値の世界化が、必要である。金輸出禁止の故に、爾来数ヶ年、世界と切断されてゐた我が価値尺度、通貨価値を再び、世界の価値尺度、通貨機構のうちに先つ回復し、世界水準の上に、立たしめねばならぬといふ。これが金解禁であつて、いはゞ、今日まで、かたくなに、我が日本の市場を遮断して、世界と異なる水準に、保ち来つた水門の扉が、そこで、サット一時に、切つて落さる丶といふわけ。従つてこれより世界経済との、なに障害なき合流作用は、滔々として奔流し始めるであらう。かくて我が金解禁、特に旧平価解禁こそは必然こゝに、(一)為替相場の回復、(二)物価の激落(三)株価の惨落、(四)通貨の収縮、金利の騰貴、といふ一聯の作用を怒濤の如く、捲き起すに相違なく、ために、従来大衆の犠牲において我が資本家が、ひとり、金輸出禁止の温室内で不当に恵まれてゐた為替安、物価高、金利安といふ、所謂見えざる関税障壁の如き、秋風一過、跡方もなく、吹き払はれてしまふであらうことは、また固より多くいふをまたぬ。要するに、非解禁国日本のために、これ迄国際為替相場に附せられてゐたハンディキャップは金解禁によつて、イヤオウなく、取除かる丶の外なく、しかうして由来我が国には、(一)中小規模の商工業がなほ多量に残存するのみならず、(二)大工業に属するものと雖も多年金輸出禁止の温室になれて、惰性的拡張の生産本位に、かかつてゐるものが多く、なかにも殊に、(三)紡織業、醸造業、製造業等々の如く、従来の為替安、物価高、低金利の恩典で、やうやうにして、採算し得てゐたものも、少くないといふ仕末、いま旧平価解禁によつて、俄然に直面せらるゝ、為替相場の回復、物価の激落、金利暴騰の打撃が、それだけでもつて既に

如何に手痛くこたへるであらうかは、固より知るべきのみである。しかも況や、これらは未だ、金解禁作用の、いはゞ、流通方面、市場方面ともいふべきものにとゞまる。これら流通方面の作用の、滔々たる奔流の底深くヂリ／＼と動くところの生産方面の作用が、こゝに見のがされてはならぬ。しからば、金解禁の生産方面の作用とは何か。曰く、驚くべく、割高な我が生産原價を、斷然引下げて、これを既に、合理化されたる歐米資本主義國の安い生産原價にまで、接近せしむることである。我が生産原價の國際的平準化、これこそ、我が爲替相場の囘復、物價の激落等々を、實際上に、持續安定せしめ、實現する所のものである。

從來、殊に金輸出禁止の溫室内に、はぐくまれ來つた我が財界の、不健全なる膨脹狀態も、いよ／＼舊平價解禁で、爲替相場の囘復、物價の激落、株價の暴落、金利の騰貴等々の、慘たる暴風にさらされては、一たまりもなく、蕭然として、收縮化するの外はあるまい。そして由來、放漫膨脹にのみなれ來つた我が財界が、かくの如くして、こゝに斷然收縮化するところ、必然にまた、ヂリ／＼と昭和二年の恐慌以來、蠢動してゐた所謂産業の合理化は、たちまち拍車をかけられた悍馬のいきほひで、かけり出すであらう。山の如き、不良固定資本の堆積、おびたゞしき中小規模の商工業、驚くべき割高な生産原價の、我が資本主義が、これからそも／＼、ハンディキャップなしに、國際競爭場裡に、立とうといふんだから、これはけだし、免れ得ざる運命といへよう。といつたからとて、斷つてをくが、それは少しでも、合理化に追隨し、協調していゝなどと、いふことを意味してゐるものでないことは、いふまでもない。

こゝに所謂産業の合理化とは何か。資本主義の高度化であり、組識化であり、しかうして、生産原價の低下、平準化でなければならぬ。

ひとたび、我が價値尺度、通貨價値の世界化にはじまる。金解禁が、我が財界膨脹の否定、收縮化を通じて、日本資本主義の合理化、世界化にいたる所以である。

それ故に、多くの慢性胃擴張會社や乃至は、中小規模の商工業にとつて、金解禁特に、舊平價解禁こそは、正に一大脅威であり、わけても、從來の爲替安、物價高、低金利の恩惠で、漸く採算し得てゐたやうな企業にとつては、それこそいよ／＼、いのちがけの問題であらねばならぬ。かの新平價解禁論なるものが、財界の一隅に唱へらるゝ、客觀的根據は、こゝに存する。といへば、それ或は然らん、しかも我が鐵鋼業者の如き、必ずしも、新平價解禁論者たらざるは、どうしたものかと、反問せ

られるであらうが、恐らく我が織物業たる、専ら大衆向の綿布輸出するところ、新平価解禁による一切の打撃の如き、これを十分につぐなふべく、別に、より安易な、全く鎖のいゝ、圖々しい「手段」を、講じてゐるからである。見よ、金解禁をひかへて、紡績協同は率先、すでに、関税の引上げを臆面もなく、堂々と、要求してゐるではないか。

世界の一大恐慌。しかうして、企業合理化の暴風は、必ずや恐るべき恐慌と、峻烈なる賃銀の低落、滔々たる失業の大洪水とを、伴ふものと豫想せらる。いまこれを、ヨーロッパ諸國の経験に徴するに、おほそ、金解禁の行はるゝところ、新平価、旧平価いづれの解禁においても、そこに所謂合理化が暴風の如く進行して、資本組織の強大、生産原価の低下を見、おほそ合理化の進行するところ、そこに實收乃至定額、其いづれにもせよ、峻烈なる賃銀の低落と、失業大洪水の滔々たる、氾濫とを、現出しないではないか。先づ、ドイツを見よ、一九二四年八月、新平価解禁をやつて、一九二五年六月には、全部失業十二萬、一部失業十六萬と、いはれてゐたものが、二五年末にいたつては躍、全部失業七十一萬、一部失業六十九萬と、報告されてるるのである。次に一九二五年五月、新平価解禁をやつた英國は、どうかといふに、二五年七月にはすでに、世界の耳目をそばだてしまつた、あの炭坑大罷業が爆發し、翌一九二六年には、それが實に、爭議人員二百七十五萬、約半七ヶ月にわたる、驚くべき全國大罷業にまで發展して、二十五年六月、百四十萬の失業は二十六年六月には、炭坑業を除いて、しかも百七十萬と、いはれてゐるではないか。其他、イタリーの如き、一九二七年六月の全部失業二十一萬、一部失業十萬より、同じく二七年末には全部失業四十一萬、一部失業十一萬と、激増してをり、世に繁榮をうたはるゝ、かの米國においてすら、今日すくなくも、百九十萬乃至二百萬の失業が見られ、或は四百萬とさへ、推定されてゐるといふ有様、世界は正に、失業の洪水である。ノアの洪水以後の、大洪水である。

我が失業總數は、最近およそ、八九十萬人と推算せらるゝ。しかも今日金解禁に直面して、益々我が勞働に加へられつゝある、飽くなき搾取と無謀なる攻勢の展開とを直視せよ。昭和四年一二月における、まことに悪辣な、かの産業委員會法案なるものをめぐつて、そも／＼何が示されたか。近年爭議統計は、そもそも何を物語りつゝあるか。(以下數行削除)

所謂資本主義合理化の結果、殊に、米獨兩國の如き、或る計算によれば、戰前の貨幣價値に換算して、今日たしかに、二割

以上の生産原價引下げに、成功したといはれるが、實際生産額の增加率は、生産力擴張率の遙かに下にあつて、ドイツの生産力の如き、戰前の三倍に擴張して、しかも其の實際の生産額は却つて二割方の減少であるといふ。次に米國の生産額は、一九二三年より一九二八年の間に、一割一分の增加を示してゐるに對し、生産力の方は、この間に、二割方の擴張で、勿論、ドイツの示す、生産力と生産額の開きに比しては、大いに生産額の增加も、見らるゝわけであるが、しかも仔細にこれを觀察すれば、かの所謂賦割販賣制度の盛行によつて、米國の大衆購買力が今日其の實力以上に、吸收されてゐる點に、負ふ所、尠しとせぬではないか。いづれにしても、かくの如く、合理化の結果たる、生産力の整理擴張が、たしかに、それにあひ應ずべき生産額の增加を、伴つてゐないのは、何故か。ひとへに、横暴專恣なる資本の利益のために、所謂合理化なるものゝすべてが、專ら勞働の抑壓と犧牲とにおいて遂行され、ために著しく大衆の購買力が、激減したる必然の結果ではないか。されば金解禁後斷じて、大衆購買力の減少を許さゞるのみならず、進んでこれを增大せしめ得んがために、必要なる諸條件を、今日に準備すべくたゝかふこと、金解禁をひかへて當面主要の任務は、これであつて、これこそが、若干の輕小な、形式上技術上の準備を除いて、およそ金解禁のために、なさるべき最も肝要にして十分なる解禁準備とみなさるべく、しかして直接、金解禁に對する、かやうな準備對策として、先づ第一になさるべきは、およそ惡壓の撤廢であり、第二に、組合法小作法の制定、團結權罷業權等々の確立であり、第三に、最低賃銀法、七時間勞働法の制定であり、第四に、失業保險法の制定、第五に、租税制度の改正等々ではあるまいか。そして、これらの條件實現のために斷然、大規模な組織化の促進、頑強なる戰線の統一が、はかられゝばならぬことは勿論である。（以下數行削除）

我が農業經濟調査によれば、小作農民總收入の三割は、農業外收入で、其の農業外收入の六割までは、俸給勞銀收入であるといふから、純農業勞働者に次いで、此の小作乃至自小作農民が、金解禁後の農村不振から來る、俸給勞銀收入激減の結果、受くるところの苦痛は、けだし、すくなからぬものと、豫想せらるゝ。況や、これに加ふるに、他方農業收入中、其の主要部分を占むるところの、養蠶收入がまた、金解禁後における、深刻なる製絲業不振の影響を、免れざるであらうに、おいてをやだ。特にもし、金解禁が、農村から繭賣出しの、五月乃至八月の交にでも行はれたら、それこそ、我が製絲業者が、金解禁から受くる、深刻なる打擊も、あげて、繭價の激落を通し、二百

萬一の落莫小作民に、轉嫁されるに相違ないから、當然に、左月乃至八月の解禁期は、我が小農民のためには、是非とも避けらるべきである。

新平價解禁は、必ずや、割高な我が物價の激落を來して、一般に大衆生活費の低下となり、それだけまた、實收賃銀の騰貴となるわけで、此の點一應は、大いに歡迎されてい、筈であるが、やがて、實額賃銀の絕對的引下げ、どえらい失業者の激增か、少くも現狀の下では、豫想されざるを得ないのだから、何にもならぬ。といつて、新平價解禁で行けばどうかといふに、キツト所謂インフレーションのために、更になほ、物價の騰貴となり、それだけまた實收賃銀の下落となり、しかも我が財界の放漫不仕末が、ズルノ＼と續けられて、つひにまた、解禁後の沈滯と不振とは、よし新平價の切下げ解禁によるも、到底これを免るべくも見えぬのであるから、我々にとつて、金解禁はいづれにしても深刻な悼、命がけの問題で、風雲まさに暗憺たる、悪戰苦鬪の展開は何人も豫想するに難からぬ。こゝに於てか、舊平價解禁の方は、いづれかといへば、現狀維持に近く、ひたすら、緊縮、緊縮のへによつて、何程か急激な打撃を、避けうべく見て、恐らく協調主義の、合理化兩者にとつては、正にこれこそ、最も打算的な合理的方法として、(少くも、公平に見て、成程、彼等自身にとつては、たしかに、さうにちがひないから一應歡迎し追隨されるでもあらうが、果して一般に、さういへるか、どうか、大いに疑問だと思ふ。これに反して、およそ金解禁と、それが捲き起す合理化の旋風を前にして、敢然とたたかひを決意せるものにあつては、新平價解禁か、舊平價解禁かの是非の論議なんかよりは、むしろ問題の重點は、金解禁と合理化の旋風、失業の大洪水、これら一切の暗澹たる前景を敢ておそるるところなく、直視しつゝ、如何に、かの大衆購買力維持增進のために、必要なる諸條件を、準備、獲得すべく、努力するかに存しないか。(以下數行削除)金解禁後の、慘たる旋風と洪水の氾濫に、是非なく荒さるゝであらう全國の都市と農村に、審判として如何なる希望の曙光を送るものは無れた。

ところで金解禁の準備と稱して、今日一般に考へられてゐるものは何か。一にも消費節約、二にも消費節約、三にも消費節約、それから漸く僅かに、小規模な、失業救濟事業としての土木、これではないか。ひとへに消費節約とは、無策も甚しい。結局、却つて、産業の衰頽沈滯に終らずんば何たる。それとも、産業の衰頽が金解禁に次ぐ一歩前進でもあらうか。しかも消費節約の一本で行くところ、從來の傾向が示すところ、推斷すれば、必ずや、次いで考へらるるものは、緊縮一本槍、それからむ

いて、賃銀引下げの發軔と來る。(以下數行削除)。これでは前途多難、固より知るべきのみである。消費節約の宣傳よりは、堂堂と、地租、營業收益税、所得税、資本利子税、相續税等の加重税制の改正で、ドシ〳〵惜みなく、確實に、吐き出させるに限る。しかして次に、失業救濟といへば、我國では從來、專ら土木事業のみが考へられがちで、失業大洪水の氾濫、治水は古來土木に如くはなしと、いふわけか知らぬが、おそらくそれで、若干の日傭失業者を拾ひ上ぐるの外、滔々たる失業大洪水の氾濫にのぞんで、果してどれだけの效果が、期待され得ようか。

二、此税制を見よ、財政を見よ。

一

昭和三年の實行豫算において、國家の一般會計歲入は十七億九百萬圓であつて、うち十億六千九百萬圓、即ち六割二分が、租税收入である。尤も租税收入として豫算書が掲ぐるところは、所得税以下、十四税目も、九億百萬圓であるが、次に掲ぐる、官業官有財產收入項目中の、專賣局益金一億六千八百萬圓は、もとより實質上、租税たるものであるから、これを加へて、十億六千九百萬圓の租税收入となるのである。此の租税收入中(一)先づ、純粹に商工資本家竝に地主の負擔する部分は、およそ何程かといふに所得税の二億一千百萬圓、地租の六千七百萬圓、營業收益税の六千三百萬圓、資本利子税の一千六百萬圓、相續税の三千百萬圓等の、計三億七千八百萬圓で、租税全收入の、僅かに三割五分にしか當つておらぬ。英國では、租税全收入のすでに五割を、所得税が占め、相續税すら、八分七厘に及んでゐる、といふのであるが、我が國の所得税は、僅かに一割九分を占むるもの、相續税の如きに至つては、一分九厘にしか、過ぎないのである。

次に、(二)一般大衆の負擔する部分であるが、先づ、酒税の二億三千八百萬圓、砂糖消費税の七千九百萬圓、織物消費税の三千五百萬圓、清涼飲料税の四百萬圓、是れに煙草消費税たる、專賣局益金の一億六千八百萬圓、計五億二千四百萬圓の、所謂消費税なるもので、これが實に、租税全收入の約半額、四割九分を占めてゐる。加ふるに一億四千萬圓の關税、これがまた結局、大衆の生活を脅迫せずには、おかないところの税負擔であるから、都合六億六千四百萬圓、六割二分といふものは、瘦せた大衆の肩の上にも、ひとしくかけられてゐるわけである。負擔の均衡を得たるものとは、いへまい。といへば、何に、消費税は、一般大衆のみの、敢て負擔するものでは、あるまいといふものもあらう。いふまでもなく、消費税は勿論、消費税で、一般大衆のみに、決して限るものでは、ないが、およそ生活の絶對必需品、

乃至は必需的嗜好品の消費には、所謂エンゲルスの法則なるものが、支配してゐることをおもはねばならぬ。決して煙に卷かうといふのではないが、早い話が煙草である。ツエッペリンのやうな形した、香り高い外國葉卷と、痩せた國粋バットとの相違が重役室にフンゾリかへつた、ビール樽と、バットのやうに詰められた、バラック校屋の勞働者との間に、よし當然、構はつてゐやうとも、かれの目にくゆらすところが、到底、これのバットの數百千倍にのぼりうると、いふわけのものおや、あるまい。其他、酒、砂糖等々、おほむねまた、かくの如しである。

以上は國税についてゞあるが、次に地方税につゝいて、先づ都市についてみれば、第一に其の歳入中、租税收入に比して、租税外收入の占むる割合が、こゝでは、非常に高いのに、おどろくのである。而して、此の税外收入中、主要なるものは、市債乃至使用料、就中、電車賃其他、電燈、瓦斯、水道料等々の使用料であるが、このうちの市債は結局、市歳入中より償還するの外なきもの、即ち、其の大部分は、いづれの時か使用料等税外收入の負擔に歸するものと、いつてよく、殘るところはつまり、使用料であるが、これがまた、さきに、煙草についてみたるとほゞ同じ道理、一般大衆の中に負擔と、なるところのものである。しかもいま、東京大阪以下の六大都市において、市歳入の、實に八割八分までが、この税外收入によつてゐると、いふのだから、おそれざるを得まい。六大都市を除く、其他の大中都市で六割、人口五萬以下の小都市でなほ、五割二分、といふものが、我が都市の税外收入であるのである。ところで、米國ではどうであらう。十萬以上五十萬未滿の中都市において、六割一分は財産收入で、税外收入の占むるところは、僅かに、三割九分、しかも更に、五十萬以上の大都市になると、財産收入が六割七分となり、税外收入は、却つて減少して、三割三分にすぎないと、いふではないか。

しからば、第二に、其の租税收入の方面について、負擔の均衡は、さらにどうなつてゐるかと、いふに、昭和二年度豫算の、全國都市税收入總額一億二千萬圓中、(一)專ら、商工資本家並に地主の負擔するものは、國税たる(地租、營業税、所得税)に對する附加税としての、地租、營業税、所得税であるが、いまこれら三種附加税の合計、四千二百萬圓なるに對して、(二)專ら、勞働者並に勤勞小市民の負擔に、かゝるものとして、地方營業税の附加税四百萬圓と、雜種税の附加税一千七百萬圓、合計二千百萬圓を見るのであつて、即ち、商工資本家並に地主は、僅かに倍額の負擔を、自ら課してゐるに、すぎないのである。

こゝに地方(府縣)營業税とは何か。雜種税とは何か。ともに府縣が新に課税するところの、府縣税なるもので、都市、町村はさらにこれに附加税を課するのである。國税たる營業税に向つて、府縣も都市も町村も、それ〴〵、附加税をかけるのであるが、この國税たる營業税の、免税點以下の、つまり、國税にもれた小營業者に、府縣が新に、課税するもの、これが、地方(府縣)營業税であつて、うち商業税が六十一種に、工業税が六十三種、所謂職工税なるものはこの工業税中に、ふくまれてゐるものであるが、商工併せて、實に百二十四種の、煩瑣きはまるものである。次に、雜種税は、勿論、國税ではない。其の名の如く課税標準は、まつたく雜多で、かの車税をはじめ、船税、自轉車税、等々、それこそ鵜の目鷹の目、實によくも數へ上げたり、これがまた百四十種である。尤もなかには、遊興税、藝妓税などの如く、まことに當然のいたり、殊勝なものも、ないではないが、其の殆ど全部は、無理なものばかりで、さきの地方營業税の大半と共に、これこそ、まつたく文字通り、×××の税網とよばるべきものである。

昭和二年度豫算の、全國道府縣税收入總額二億五千百萬圓中、國税附加税としての、地租、營業税、所得税は、合計一億二千八百萬圓なるに對して、全國道府縣が誅求するところの、地方營業税は一千萬圓、雜種税は五千三百萬圓、合計六千四百萬圓でこゝでもまた、地租、營業税、所得税、附加税の正に、半額を占めてをるのである。

次に、主要な問題は、農村の税負擔であるが、私の今、用ひるところの統計は、一概に、町村と、町をもふくめて、をるから、暫く、是れによると昭和二年度豫算の、全國町村歳入總額四億八千二百萬圓中、税收入は二億七千萬圓、すなはち、歳入の五割六分であり、しかして、此の二億七千萬圓の税收入中(一)專ら、地主、並に商工營業者の負擔たる國税附加税は、地租附加税の三千五百萬圓、營業税附加税の一千三百萬圓、所得税附加税の百萬圓、合計四千九百萬圓なるに比して、(二)專ら小農民並に小勤勞民の負擔にかゝるものは、雜種税附加税の三千二百萬圓、地方(府縣)營業税附加税の五百萬圓、合計三千七百萬圓の多きを占めてゐる。こゝではすなはち、小農民並に小勤勞民の負擔は、更に重く、地主並に商工營業者の、十に對する七・六の割合である。

なほ、町村税中、特に注目するを、忘れてならぬものに、一億四千五百萬圓、すなはち、町村税收入の五割三分、正に半額以上を占むるところの、戸數割なるものがある。およそ、地租、營業税、所得税等の國税に對する、地方附加税の課税には、そ

れぞれに、ことなる制限が附せられ、ために、これには、地方の流入として、著しく融通を缺くに反して、戸數割にこそ、容赦なく一切の、貧民戸數をも、追及し得ると共に、しかも比較的、制限少なく、屈伸性に富むところ、多いからである。いひかへれば、幾重もの障壁によつて、十分に町村の有產階級は、課稅より自らを防衛しえてゐるに反して、此の戸數割なるものによつて、農民其他貧民戸數はもれなく、いつでも自由に、町村支配者級の御都合次第、課稅せらるゝの自由を與へられてゐるからである。およそ町村の有產階級にとつて、これほど都合いい稅法がまたとあらうか。而して、今日所在に見らるゝ、不在地主の如き、依然其の町村に、財產乃至所得をおきながら、一片の單なる轉住、不在によつて、完全に其の戸數割の賦課を免れ得るにおいてをや。且日人頭を通じて、しかも平然と、等しく下なつかね、これを待つの外、どうとも追及の方法がないといふ、これが今日の、町村稅制である。

二

大正元年において、五億九千萬圓であつた、國家一般會計歳出の昭和二年度豫算は、十七億六千萬圓で、約三倍の膨脹であり、更に地方歳出にいたつては、この間に、三億四千萬圓より十六億二千萬圓と約五倍の膨脹を示してゐるのである。なほ、國家の歳出には一般會計のほか、特別會計歳出があり、昭和二年度において、三十億七千萬圓であるから、一般會計特別會計合して四十八億三千萬圓となるわけであるが、兩者の間に相重複する部分、一億二千萬圓を、控除しなければならないから、差引純計三十六億二千萬圓といふもの、これが昭和二年度國家の歳出豫算である。

歳出のかやうな膨脹と共に、いきほひ、公債も亦增加せざるを得ず、同じく大正元年より昭和二年の間に、二十五億圓の國債は倍加して、五十四億圓となり、地方債にいたつては、三億圓より十五億圓と五倍の膨脹振りであるが、さて、これらの尨大な國費及び地方費は、いづこへ行くか。

我が國家歳出の、第一の特長は、いふまでもなく、つとに尨大な軍事費と、されてゐる。昭和二年の實行豫算についてみるに、先づ、經常部歳出において、陸軍省所管一億七千六百萬圓、海軍省所管一億四千三百萬圓を主とし、これに、內務省所管中、徵兵費軍事救護費の二百萬圓、遞信省所管中、陸海軍人年金及び恩給扶助料の九千九百萬圓を加へて、計四億三千萬圓、次に臨時部歳出において、陸軍が四千八百萬圓、海軍が一億一千九百萬圓で、計一億六千七百萬圓、經常、臨時あはせて、五億八千七百萬圓となる。なほ、特別會計の方面に、一億一千七百萬

圓を見るのであるが、これには、何程か、一般會計と重複してゐる部分も、勿論あらう。特別會計は暫く措き、一般會計のみについてみても、我が一般會計歳出十七億九百萬圓中、五億八千七百萬圓、すなはち、三割四分の多きを、占めてゐる。これが軍事費であつて内閣統計局の示すところによれば、列國軍事費の其の總歳出中に占むる割合は、一九二七年(昭和二年度)において米國の一割九分、佛國の一割七分、英國の一割四分、獨逸の七分なるに比して、日本は二割七分、高く群を拔いて、第一位にをる。まして、この二割七分たる、昭和二年度の、我が軍事費總額を、四億四千萬圓とみてのものであるが、實際は遙かに多く、少くとも五億七千百萬圓を下らざるにおいてをやである。從つて、出兵なんか、まことに易々たるもので、さきにはシベリアに向つて、五億五千萬圓、最近はまた、支那に對して六千萬圓といふ、出兵費を見てをる。

第二は、莫大な産業補助金の支出で、これが年々、一億圓以上に出でてをる。また、昭和二年の金融恐慌の如き、これを財政的見地よりするならば、八十八銀行に對す、八億八千萬圓の損失補償法によつて、救濟されたものといつていゝであらう。

しかうして、我が勞働のためには、といつて、嚴密にこれをつきつめてみれば、固よりみな、あやしいものばかり、殘るところ何もなし、といふことにならうが、最もルーズな意味において然り、最も大ザッパに見て、先づ勞働のために、何等かのかはりを持たうかと、考へらるゝ程度の費目を、いま、豫算書中より、丹念に、拾ひ集めてみるならば、其のすべては、およそ次の如くでもあらう。先づ經常部において、健康保險國庫負擔金の三百二十五萬圓を筆頭に、國際勞働機關帝國事務局費の十二萬圓、これなどは最もあやしいものであるが、次に、職業紹介所事務局費の十七萬圓、第二に臨時部において、こゝに、社會事業調査及び獎勵諸費の十二萬圓、工場災害豫防並に工場及鑛業衛生調査費の五萬圓。以上合計して、驚くなかれ、タッタ三百七十萬圓。實にこれ我が歳出純計三十六億三千萬圓の其の一千分の一に、當るところの支出である。しかもどうして、勞働抑壓のためとなると、ドシドシと惜みなく、小切手を振出してをる。三年度追加豫算として、振出されたる、司法警察費の二百三十五萬圓。これは司法、内務兩省に亙るものであるが、其の目的については何人も記憶するところ、多言を要すまい。それから、文部省所管において、二百三十萬圓の反動思想毒化斯宣傳費が振出されてをる。ごく大ザッパに、財政上より見たる××はまづ、かくの如きものである。

昭和三年度の、全國都市歳出豫算は、六億九千萬圓であるが、

うち職業紹介所其他の社會事業費なるものは、一千百萬圓、僅かに歳出の一分六厘である。もしこれ更に、道府縣や市町村にいたつては、もとよりお話しにならぬ。全國道府縣歳出四億八百萬圓中、社會事業費は所在の府縣において、一兩年來、急激に増加したと、いはれてなほ三百萬圓を出でず、町村においてもまた、其の歳出四億八千三百萬圓中の四百萬圓を見るに、過ぎないのである。

近時、我が町村歳出について見のがし難き一大特長は、教育費の二億三千六百萬圓で、歳出の實に半額といふものを、町村では、教育が――といつても、其の殆んど全部は、義務教育費であるから、義務教育費が、食つてしまつて、他に何等、活潑なる財政能力を働かさない。全國市町村の義務教育費二億二千萬圓に對し、わずかに國庫は年々、四千萬圓を負擔してゐるに止まる。それでは到底何にもならない。年々膨脹する子供の義務教育のために、たゞそれのみに、殆んど全力をつくして、疲弊し切つてゐるといふのが、我が町村財政の現狀である。

×　　×　　×

從來の財政學では、一般に國家の政治との關係のみがみられて、國家の經濟機能、經濟主體としての國家が、比較的に輕く大ザッパにしか取扱はれてゐないが、それではどんなものであらうか。勿論それ自身立入つて論ずべきではあるまいが、經濟、經濟主體としての國家を明白にしたければ、財政の問題も明にしえないではあるまいか。

痔持ちとヴイタミン

痔が痼疾になつたものは容易に癒りにくいものですが斯様な人が偶然肝油又はヴィタミンAを飲み始めて永年の痼疾が癒つたといふやうな例を時々聞きます、兎に角痔に對しヴィタミンが良いのは事實です、獨逸から來て居るデシチンといふ軟膏がありますがこれもヴィタミンAを外用にしたもので痔の痼疾に大變よく效きます、肛門のたゞれたのや脱肛等には脱脂綿に塗つてをさへて置けば宜いのですが内痔用には坐藥も出來て居ります。これ迄の痔の藥のやうに麻痺藥でなく、一種の皮膚及粘膜強壯劑とでも云ふべきものです、ヴィタミンAの外用で痔の痼疾が癒るといふことは一つの新しい發見であるに相違ない。

機密費

その行方

小汀利得

一

機密費の行方。疑獄ばやりの今日機密費の問題は特にわれ〳〵の興味を惹く。

いや疑獄ばかりぢやない、所謂『機密費』が一番大量に動くのは、總選擧である。全國に少くとも三千萬圓の金がバラ撒かれる。その中の八割までは『機密費』である、この八割の二千四百萬圓の使途が明るみへ出たら最後、四百六十有餘の代議士の九十九パーセントは間違ひなく、中村啓次郎君と運命を共にしなければならない。法定選擧費用を超過させないで當選した代議士が、全國に一體幾人ある？

代議士中の四百五十何人かは、いづれも、『中村啓次郎』だが、たゞその超過選擧費用を機密に支出した爲めに失格の厄を免れて居るのである。選擧に『機密費』が動くのは支出の方丈ではない。收入の部に於いてはもつと大規模に動く、選擧事務長とか、運動員の候補者に對する場合に於いても、さうだが、また候補者自身若くは政黨自體が、選擧費用を調達する場合に於いて、最も著しく所謂『機密費』は動く。新年匆々仙石老人が政府黨の選擧長安達内相に會つたり、野黨の犬養總裁に會ふんだとか、會つたとか云はれるのも、畢竟するに、すべてこの『機密費』に屬する問題を中心とする。

しかし選擧の『機密費』稼ぎは、去年の疑獄摘發以來朝野兩黨とも頗る困難となつて來た。總選擧費の九割二千七百萬圓が、資本家、政商の懷を當てにするものである以上、今日の時勢では調達は至難の業に屬する。野黨たる政友會があらゆる屈辱を忍んでも、解散を回避せんとするのは、つまるところ、この『機密費』に自信が無いからである。民政黨は政府黨だから、流石に景氣がいゝ、野黨の尻込みするのに氣を得て、頻りに解散々々と叫んで居る。しかし、何となく解散の聲に底力なく、政機の動もすれば微妙な動きを見せんとする氣配の有るのは、野黨と同じやうに選擧費即『機密費』に確たる自信を得られないからで、幾分景氣がいゝのは、野黨のマイナスを以て自黨のプラスに勘定するからに外ならない。

二

今日世の中に普通に考へられて居るところの機密費なるものは、殆んどすべて括弧付の所謂機密費であるが、この括弧の所謂形容詞抜きにした正銘正銘の機密費が、ちやんと法制上、財政上に存在し、年々の政府豫算に組込まれて居る額も相當大きいものである。

いま昭和四年度の豫算を見ると一般會計丈で二百四十九萬八千四百圓。それに特別會計の八十八萬七千八百七十五圓を加へると、三百三十八萬六千二百八十一圓と云ふ大きな金額に達して居る。一應各所管別に見る。

（一般會計機密費）

外務省　百四十五萬圓

内務省　二十四萬三千四百六十圓

内（本省　六萬七千二百圓／地方廳　十七萬六千二百六十圓）

大藏省　十一萬一千五百八十八圓

内（本省　九千六百圓／出關　十萬圓／稅關　千九百八十八圓）

陸軍省　五十三萬二千二十五圓

海軍省　八萬圓

司法省　十六萬八千圓

遞信省　三萬圓

拓務省　八萬三千圓

計　二百四十九萬八千四百六圓

（特別會計機密費）

朝鮮　四十五萬三千百五十圓

内（總督府　二十七萬圓／地方廳　十八萬圓／専賣局　三千百五十圓）

臺灣　二十四萬五千圓

内（總督府　十七萬五千圓／地方廳　十八萬圓／専賣局　三千百九十圓）

關東廳　二萬圓

樺太　二萬圓

南洋廳　八千圓

帝國鐵道　四萬圓

専賣局　千七百二十五圓

計　八十八萬七千八百七十五圓

合計　三百三十八萬六千二百八十一圓

これで見ると、機密費を持つて居ない省は文部、農林、商工の三省のみである。そして現内閣は組閣の初めに當つて前内閣の立てた豫算に思ひ切つた大斧を加へ、また小細工もして、荷くも政友會の黨勢擴張になるやうなものならば、千圓二千圓の經費まで削減を加へたが、それにも拘はらず、この三百三十八萬圓の機密費には一錢も手をつけなかつたところ、流石に政權を取つて見れば、自分達の勝手に使へるポケット・マネーは一錢でも多く欲しいと見える。

三

さてこの機密費の行方だが、外務省や陸軍、海軍は一應尤もと思はれないでもない。たゞ内務行政や財務行政にどうして特別の機密費が要るかは、一寸理解出來ないところだが、大藏省は脱税の密告者に報酬をするといふやうな方面に、主として九千六百圓の機密費を使つて居り、内地、朝鮮の専賣局がそれぞれ千七百圓だの、三千百五十圓だのと云ふ少額の機密費を持つて居るのも、同樣スパイに使ふ。旅行者は誰しも經驗することだが、下關つ[illegible]戸で上陸して汽車に乗り一驛を通過して落付いたかと思ふと刑事が來て「失禮です

——機　密　費——

が燐寸を一寸』と來る。乞はるゝまゝにマッチを與へると、頻りにポケットをさぐつてた手を空で出して『相濟みませんが、煙草を一本』とツウ／＼しく出る。普通一二等客にはこんな變な禮儀を知らない奴が居る筈はないと思ひながら、親切に外國製の葉卷や金口でも與へやうものなら、妙なスリ見たいな目付で箱を睨んでる。あれが專賣局や税關のスパイだ。迂濶に脫税品でも出して一本惠まうものなら、直ぐに一寸來いを喰ふ。

この種の低級なスパイ政治の惡果が、嘗つて喧ましい法律問題となり、遂ひに大審院の法廷まで煩はして裁判長横田秀雄博士から無罪の判決を受けた一厘葉煙草事件のごときものを生み出すのである。一厘葉煙草事件と云ふのは、葉煙草をつくつて居る百姓、すなはちその煙草品の持主が、うつかり一つ葉を取つて吸つたのを、專賣局の小役人に見付けられ多額の罰金を課された事件だ。

內閣の十萬圓、之れは全く總理大臣のポケット・マネーと云ふよりは內閣書記官長の小使錢で、これで以て小は『君一つ飯を食はふ』から、大は色々の策動に使ひ、時には院外團、勢力團が強請る目標とされる、ところが今日の世の中では一年十萬圓、月額八千數百圓では、何程の仕事も出來ないので、新聞に毎日名の出るやうな內閣書記官長は、どうしても[illegible]機密費で足りなくて、その地位を惡用し、所謂『機密費』を別に稼ぎ出さなくちやならなくなる。內閣の機密費と云へば前內閣が横死して、いざ城明け渡しとなつた時に、あとの內閣へ引繼ぐべき七月以降九ケ月分月額七萬五千圓を足りなくして、鳩山君は大いに騷いでた。その內三萬圓は閣僚某君が一寸貸せと云つて持つて行つた切り返さず、田中總理に話しても『おらは一萬圓しか出來んよ』とすまして居たと云ふ挿話もある。しかし、そこが機密費の機密費たる所以で、機密費は他の豫算と違つて、會計檢査院の檢査を受けるものでなく、全く當該官廳が自由に使ひ得るものだ。

四

かう云ふ小口に對して、外務省は流石に大口の機密費を持つて居るが、實際はこの外務省のは大抵年々きまつた使途があつて、內閣のいやうに、大臣のプライヴエートのものは小い。何しろ全世界の大公使館、領事館、商務官に分けてやらねばならないし、そのまた出先官憲も世界大戰以後は大小不良の徒にゆすられたり、借り倒されたりするので、額の多[illegible]。

しかし何と云つても機密費では、全淀川の半分に近い大株主なので、工面は惡い方でなく、ヴエルサイユの媾和會議の時なんか、代議士その他の連中に大口にやられた。取つた中には本省から全部の旅費を貰つて、その上にパリの大使館から貰つたり借りたり、しかも內地への通信には、當の外交當局のやり方を遠慮なくコキ卸したなど、云ふ凄いのもあつたさうだ。

それから政府では無いが、警視總監の機密費と云ふものは莫大なもので、田中內閣の宮田君の時代に年額十五萬圓を一躍三十萬圓に增額した。當時この機密費を支出する東京府會では喧ましい議論も出たが、ひどく反對すれば、妙なところで復仇されるし、また上手に立廻れば、增額機密費の上前がはねられるからでもあらう、結局倍額增加は府會を通過

して、昭和四年度以來から三十萬圓になつた。その理由は共產黨事件等で特に行き詰つたことになつて居る。

警視總監の機密費の最も正當なる使途は、高等警察へのそれである。或る大事件が起つて刑事に大活動させやうと云ふ時には、相當金を持たして置かなきやならん。彼れはそれで以て一杯飲み、また飲ませる事もあらうし、出先きで急に變裝するとなれば、變裝代も要る。さらに所謂「犬」も使はなければならない。

「犬」と云へば、共產黨その他左傾方面の警察官より頭の進んだ連中の犯罪は、刑事單獨の活動では、絕對に——と云つても、いゝ程——目付かりつこない。大概この機密費に迷ふ裏切者のスパイによつて、發覺される。

犬も中には頭のいゝのがあつて、警視廳はもとより、內務省の機密費まで、捲き上げながら、一向スパイ本來の役目は果さないのも一二はある。大正十二年の震災の時に亡くなつた某君なんかは、それを世間に公言し、また世間も不思議とは思はない程、いゝ氣になつて居た。

その外警視廳へは、スパイのやうな顏をして、機密費をゆすりに行くものも、いつの時代にも少くなく、宮田君時代なんかは部下は押すな／＼の賑ひを呈することがあつた。益／＼實業家のとこへ行つて、下手に凄文句でもいへば直ぐ一寸來いを喰ふ。たとひ凄文句なんか並べなくとも、三文雜誌が、素つ破拔き記事を出して置いて、廣告を取りに行けば、恐喝で無くとも直ぐ恐喝取財でやられる。そこへ行くと閣下へ短刀直入行く分は何の罪にもならないのみか、反つて代議士にでも出る緣を結ぶことにさへなる。これは警視廳に限らず、官廳はすべてさうで、陸軍省、參謀本部なんかは、その本場とされて居つて、今市ケ谷に居る前某大官なんかは、明治三十九年日比谷でポーツマス條約反對の、大民衆運動をやつてた時代から軍部とは特別の關係があると噂されて居たもんだ。

警視總監の機密費と云へば、今はさうでもあるまいが、古い時代には半分は總監自身の懷へ入れたものださうで、警視總監一度勤めれば、一生食ふに困らない、と云はれたものだ。

最後に斷つて置かなきやならないことは、丸山君が總監になると、三十萬圓の機密費は餘りに多過ぎると云ふので、自ら二十萬圓に減額を申出でたから、昭和五年度からは二十萬圓に減額されることゝなつた。

五

今述べた機密費はまだ／＼何と云つても小口のものばかりだ。

陸海軍は實に二千六百五十萬圓と云ふ驚くべき機密費を一手に使つて居る。西比利亞出兵で、それは實に千餘萬圓の國帑を有耶無耶に西比利亞の曠野に使ひ捨てた。臨時軍事費特別會計中での出來事で、陸軍の責任になつて居るが、實際は、陸軍と海軍だけの仕事といつていゝ。清瀨一郎君以下が第五十二議會の決算委員會と本會議で大いに痛擊して居り、ちやんと速記錄にも載つて居るが、それは當時の陸軍大臣田中義一、次官山梨半造その他の名義で以て銀行に多くは九十萬圓、少きは二十萬圓位の預金をしたり、また公債を買つて利息を儲けたり亂暴の限りを盡して居る。

しかもその預金や公債は、臨時軍事費の中

から二十四萬圓を靖國神社に奇附たしたりしたもので、全く不法なものであるが、陸軍では議會でちやんと機密費として、協賛を經たもの以外に、勝手に大藏省に要求書を提出して、機密費をつくつて居る。

議會でこの事が大いに論議され、淸瀨君や柏田忠一君が政府を痛烈に攻擊すると、時の與黨の連中は、淸瀨君を國賊呼ばはりをなし、遂には暴力沙汰にまで及んだ。

かくして日本の財政では、機密費は、政治の腐敗、政治家墮落の一大原因を成して居るが、それにも拘らず、機密費の問題が餘り世上の問題とならないのは、朝野兩黨がお互ひにこの機密費を利用し惡用するので、あまり論議しないからである。

序でに外國の機密費で一番大口のを擧げると、それはイギリス政府のである。イギリスには四千萬圓と云ふ莫大な外國使臣御馳走基金があつて、ロンドンに開かるゝ各種の會議には、一流のホテルの宿料からその外車馬賃でも何でも一切合財英國政府で拂ふ。日本の外交大官でこの御馳走にならぬものはあるまい。

恐らく今度の軍縮會議の全員も、この四千萬圓のうちから御馳走を受けるだらうから、その點から見れば百三十五萬圓の派遣費は甚だ贅澤なものだと云へる。尤も全權以下全員がイギリスの機密費で賄つて貰つて、その代り浮いた金を全權の機密費に使へば相當氣の利いた話だが。

六

次ぎは民間の『機密費』だ。それは商事會社や機械工場で政府や大銀行會社へ賣り込みするものゝ、營業費として支出するものが重で、あとは重役賞與並びに交際費と稱する中に含まれる。

所謂機密費を一番フンダンに使つたのは、潰れた鈴木商店で、內外本支店その他で少くとも年額百萬圓は下らなかつたと云はれて居る。その機密費を撒いた大使が藤田謙一君で公使格が長崎英造君だつた。

だから藤田君は買收事件で取調べを受けると、例のアイヌのジヤズ見たいな言葉で、金をやつた人間の名を何百人も讀み上げ、中には×××の某君あたりまで有つたとのこと、おかげで、同君は意外にも直ぐに保釋になつた。

高田商會がまた斷道の大家で、潰れる前なんか千圓の商賣をするのに、うつかりすると三百圓も飮んだり使つたりしたと云ふのが、あの店の潰れる、直接の原因となつた程である。

鈴木や高田は例外であるにしても、大概貿易商、賣込商等の商事會社には『機密費』が多いが、そこへ行くと銀行は商賣が堅實丈に、『機密費』は極めて少額で、日本銀行なんかでも、一年五十四萬圓からの重役賞與及び交際費を計上して居るが、この中で大きな支出は新聞雜誌の廣告、政府から勸誘を受けて、山縣公の銅像に五千圓出すとか、大藏大臣の紹介狀を持つて來た、代議士候補者に千圓やるとか云ふ位のもので、しかも政府の機密費と違つて、すべて監事が見ることになつて居る。

三井や三菱では『機密費』はすべて總本山たる三井合名と三菱合資が使つて居つて、この額は秘中の秘だが、總選擧なんかの時には大きな額に上るだらう。

餘りにブルジョア的な

片岡鐵兵

赤化防止策のための機密費、これが多分、今は機密費の中の最高額をなしてゐるだらう。

無産派どもが、赤化防止の國十名取りで、機密費の上に密集してゐる。

×

一番、唾棄すべき奴は、この機密費にうるほされて、ソヴイエツト・ロシアのわる口を尤もらしく書き送るジヤアナリストだ。

誰かが、ちよつと文筆の巧いのが、歐州見學に行く。すると、機密費が、彼の旅費をとる。

「好いか、ロシアのわる口を、極力書くんだぜ。生き地獄に陥れてゐるとか、評判がわるいとか、百姓が政府を恨んでゐるとか……まあそんなのは云ひ古るされた惡口だが、せいぜい新しいネタを探して來て、書き送つて呉れたまへ。」

「そこは巧く書きます。大へん公平に見せかけてある口吻だといふ假面をかぶつてね。そいつは私の得意とする所ですから、御安心下さい。そこで、報酬は、いよいよ幾ら位頂けますかな？」

「君の一生の生活位は保證出來る、とまア思つといて好いだらう」

こんな恥知らずの取引きが行はれてゐるとも知らないで、讀者は、機密費で買はれた嘘八百をよろこんで讀んでゐる。

×

ついでに、今、ソヴイエツト・ロシアのわる口を巧く書いたら、どこの資本家政府でも莫大な報酬で買ひ上げて呉れる。勿論さういふ契約をするといふ約束で、資金を貰ひ、それでロシヤへ旅行することも出來るわけだ。旅行したい人は手をあげたまへ。

×

斯る恥知らずのジヤアナリストの、世界最大の實例は、バルカンの作家イストラツチである。

彼は、以前は左翼作家であつた。次にさう裝つてゐた。同情者としてロシアに招待され、大へんな人氣だつた。ロシヤに滞在中の彼の言動は左翼の闘士としての立派さに溢れてゐた。彼はロシアに感激し、ロシアを讃美した。そして、至るところで同志として絶大の歡迎を受けた。

ところが、どうであらう。ロシアを去つて一度び、ドイツ、フランスの國土に足を踏み入れると、故國の「機密費」と、歐州資本主義國の「機密費」とが、嵐のやうにイストラツチに吹きつけた。彼は手もなく誘惑に降參した。そして、直ちに、確かフランスであつたと記憶するが、ブルジヨア新聞に大々的に發表したソヴイエツト・ロシアに對する嘘八百

の悪口を撒き散らした。

故國に歸つたイストラッチは、資本家地主に對するこの功績によつて、一躍「大臣」に任官した。現在も、彼は大臣である。

作家が、資本家地主に奉仕するためには、勿論嘘八百を書き並べなければならない。最もセンセエショナルに、最も大きな嘘をつけばつくだけ――民衆をだませばだますだけ――彼の功績は偉大である。

イストラッチの場合、それは十分に大臣になるだけの價値がある。

今や、ブルジョア社會では、「嘘」で出世することが、公然の合理性を持つのである。

×

ソヴイエット・ロシヤの發展、その新鮮な成長を、悪意に解釋し、いがめて報導するためには、大した頭はいらない。それは誰にでも出來る。イストラッチが、お手本を著述してるから、それを日本語で焼き直せばよろしいのだ。

官費で洋行したい者は、機密費へ媚びかゝろが好い。娼婦のやうに。

×

機密費は、要路の大官にばかりではない、あらゆる政治單位、企業單位、生活單位に用意されてある。

縣にも、市にも、町村にも、そして會社にも、銀行にも、商店にも。

家庭にも。

×

家庭の機密費については、それが何にあてられ、いかに利用され、いかに結果するかを諸君はいろ／＼知つて居られるだらう。

多くの場合、家庭の機密費といふよりは、良人の機密費といふ方が適當だらう。勿論、細君にだつて機密費は必要であらう。だが、多くの良人は、さういふ機密費を捻出するだけの充分な金を細君に渡し得ない。

だから、細君がこれを捻出するためには、血の出るやうな苦心が要るのである。

×

女は、家をよくするために使つた金高を、良人に秘密にするものではない。家計簿に記入することの出來ない費途、良人には打ち明けられぬ失費。それらの多くは、それを知らせると良人を怒らせ良人を不愉快にさせるところのものに違ひない。卽ち、細君自身の秘密な快樂――或はそれの露見を防ぐための費用、それが機密費である。

×

隣りの婆さんへのお使ひ賃。口どめ料。×××に與へた小遣ひ。等々。

×

良人の機密費とは何か、細君に知らせてはならぬ費途。お〻何とその必要は我々にとつて多すぎるのだらう―

×

良人は云ふだらう、

「女房がもつとわけの分る奴なら、もつと大つぴらに、明るく、金の費途を發表することが出來るのだが……」

細君は云ふだらう、

「男つてものが、もつと理解がある。そして家庭に於ける民主々義的精神を持つてゐるのなら、妾だつて一寸所でピク〳〵、内證の金なんか使はなくつても好いんだわ」

だが、家庭にあるのは昔ながらの封建的家長主義である。その本質に於て、こゝでの生活は常に暗い。

×

道徳も、感情の組織も、良人にとつて都合の好いやうに出来てゐる。「細君の機密費」と云へば、何だか罪悪的な、暗い感じが伴ふ。そして「良人の機密費」といへばそこに何だか、ユウモアな気分さへたゞよふ。そして、ほの暗いバアの光線や、輝かしいジャズの響きさへ幻想される。

×

何といふケチなことだ！

或る良人は遊蕩のために、或る良人は内證でわるい病気を治すために　これらの小市民的機密費のケチなことを見よ。

×

さうして、このケチな、醜い機密費が、その何萬倍かの巨大な形でいはゆる政府の裏面に、公然の秘密として、何らの罪悪でもないかのやうな顔をして、流動してゐる。

そして、最も重要なことは、それらの金が、つまりは被壓迫大衆の血と汗とから搾取された金である、といふ事實だ。

そして又、その巨大なる機密費が、支配階級自身の間に山分けにされ、その手さきである政府のゴロツキや、遊民や社會の寄生的存在の懐ろを肥やすものであることを知らなければならない。

×

「家計簿に秘密や嘘のないやうにしませう。」

國家の「家計簿」も亦！

内幕をあばく

鈴木茂三郎

一

烏賊(いか)が、海中に於ける生存を維持し防衛する爲に、墨汁を使用するが如くに、ブルジョア階級のあらゆる部分が使用する墨汁に、機密費がある　此の革命の墨汁はこれを自由に使用することによつて、ブルジョア階級の不正とカラクリを隠蔽し、自己の利益と安全を保障するのである。

機密費とは如何なるものであるかは、故大將田中義一に關する所謂機密費問題によつて明かである

彼は原政友會内閣の下に陸軍大臣となり、西比利亞出兵を種に僅に陸軍機密費、一千餘

萬圓を、タッタ二年半の間に費消しつくしたのである。卽ち大正三年九月、大隈内閣によつて行はれた靑島攻擊より、日本艦隊の南洋、地中海遠征を經て、更に西比利亞出兵及サガレン駐兵に至り、同十四年三月末日に至る間の臨時軍事費特別會計中の機密費は

海軍省機密費　一、七一三、三〇〇圓
陸軍省機密費　二四、四七六、六三九圓

で、更に陸軍機密費の使用額を内閣別にして見ると、

大隈内閣	一五三、六〇〇圓	（靑島戰役終る）
寺内内閣	三、四二四、五二五	（西比利亞出兵）
原内閣	二〇、六九九、五一四	（同　前）
加藤内閣	一五〇、〇〇〇	（同　前）
計	二四、四七六、六三九圓	

右表に見る如く、大隈内閣が靑島戰役に僅か（？）十五萬圓であつたのが、西比利亞出兵と共に漸增し、原内閣、卽ち田中陸軍大臣の時に至つて、一躍、二千萬圓余に上り、陸軍機密費總額の約八割と云ふ巨額に達したのである。原内閣の生命二年八ヶ月、其の間に斯くも巨額な機密費が一體何に使用されたのか。第五十一議會に於て、原内閣時代の機密費激增に關しての質問に對し、當時の陸相宇垣一成は、左の理由を「西比利亞駐屯軍內閣の狀勢」の爲だと答辯した。が、果してさうか。同じブルジョアジーの他の代辯者をして語らしめやう。

『先刻は大正八、九年頃は西比利亞は忙はしかつた時分であると仰しやるが、それは嘘であります。丁度大正九年一月の議會に於て、田中陸軍大臣が此處で演說されてゐる。大正八年度と云ふものは、西比利亞は手控へた。日本軍隊は半分以上引返して、僅か二萬五千だけでもつて西比利亞を守つて居つたのであります。……其の年の三ヶ月分の經費として貳千五百萬圓、所が茲に私が疑を持ちますのは、大正九年一月二十二日に憲政會及國民黨より普通選擧案が提案せられ……二月二十六日に議會は解散に相成つてゐる。議會の解散と豫備費の莫大なる支出が相前後して居りますが爲に、國民が茲に疑惑を懷くのであります。……此の一月二十四日の一日貳千五百萬圓と云ふ豫備金支出が、選擧とは關係が無いと云ふことを證明なさつたならば、國民は安心を致すことと思ふのであります』（大正十五年衆議院議事速記錄——淸瀨一郞）

二

機密費はブルジョア機關のあらゆるところにある。政府的支配機關では（イ）政府の國庫豫算、（ロ）府、市、警視廳等、會社、銀行では、その殆んど總ての收支のうちにある。

昭和四年度實行豫算に於ける機密費

（一）一般會計

外務省	一、四六〇、〇〇〇	陸軍省	三二二、〇二五
内務省	二七、二〇〇	海軍省	八〇、〇〇〇
地方廳	二七八、三六〇	司法省	二六八、〇〇〇
大藏省	九、六〇〇	遞信省	三〇、〇〇〇
内閣	一〇〇、〇〇〇	拓務省	八二、三五五
税關	一、九六八	小計	二、四九八、四〇六

（二）特別會計

專賣局	一、七二五
鐵道省	四〇、〇〇〇
朝鮮總督府	二七〇、〇〇〇
同地方廳	一八〇、〇〇〇
同專賣局	三、一五〇
臺灣總督府	一七五、〇〇〇

地方費	七〇、〇〇〇
關東廳	一二〇、〇〇〇
樺太廳	二〇、〇〇〇
小計	八七九、八七五
合計	三、三七八、二八一

政府の公然の機密費は右の如く一般會計に於て武百四拾九萬八千圓、特別會計に於て八拾七萬九千圓合計參百參拾七萬八千圓に達する。

機密費の總額は年々、年によつて相違はあるが、斯く巨額の公然の機密費が國帑を費のうちに含むは、光輝ある政黨政治の歴史に輝く日本のみである。各省のうち機密費の最も多いのは外務の百四拾五萬圓、ついで、陸軍の參拾參萬圓、内務の武拾萬圓、朝鮮總督府の武拾七萬圓等であるが、内務及び陸軍省の國内及び國際スパイ費に機密費が使用されるのを除いては、大部分文字の如くこれは機密費であつてどう處分されてゐるか外部から窺ひ知る事は出來ない。

前首相濱口氏の例の十萬圓が紛失したのは緊縮時代の機密費から支出されたと云はれ、前田中内閣時代に機密費の××が贈賄金にしたとさへ噂へられ、又故田中首相が外務大臣を兼任した一面の理由に、外務省の機密費を政黨運動のために利用せんがためであつたことは××である。

(ロ)の中、府縣市等自治體に於ける機密費も亦、豫算面から削除し得ない。東京市に於ける機密費は、市長が交際費の名目で一萬六千五百圓、電氣局長が一萬五千圓である。が斯る多額の交際費が入る筈もなく、大部分は市議會操縦費に費消されるのである。次に警視廳の機密費は市長の府知事、東京府知事は從來の交際費一萬九千圓が比較の府縣で、二萬三千圓に改額された)とは比較にならぬ程多額であつて、警視總監の機密費は、大正十四年度まで、十五萬圓だつたものが、昭和元年に十五萬七千五百圓となり、同二年に十八萬圓に、更に宮田光雄總監の要求で一躍三十萬圓に増額されたが、緊縮内閣の異質なる××丸山總監によつて、昨年十一月二十一日の所管で、十萬圓を削減し、昭和四年度より二十萬圓となつたのである。

總監の機密費は、主として官房主事によつて取扱はれ、部長、署長から巡査長の手を経て、強、竊盜から賭博犯人を押へた勇敢なる刑事巡査への賞與　巡査部長に迄、配分されて或ひは、プロ、ブル新聞への寄付となり、官房主事室へ押しかける院外小壯力團への恩賞ともなる。又、スパイ政治の資金となり、所謂選擧の日給ともなり、府會議員の恩寵ともなる。某新聞の傳ふる所に依れば、昨年七月宮田前々總監が和歌山疑獄事件で、辭職する前後數ヶ月の間に、昭和四年度分機密費中十萬圓(?)を費消してゐた事を、丸山總監が發見し、「何うも面白からぬ」と憤慨し、和歌山事件に不良から一たん受取つたか發覺を恐れて後日返却したといふ十萬八千圓(?)は此の機密費で支辨したのだらうと報じてゐた。等々、以上によつて警視總監の機密費の支途も充分推測するに難くないところである。

次きに、會社、銀行の機密費について見やう。之等の機密費は、知事、市長の交際費の如く、「重役賞與」又は「交際費」の名目で支出される。ただ、會計について見ると、滿鐵の約六十五萬圓(但し滿蒙を除き)中樞以下同樣な事項に、內地會計で、三井

物産の四十五萬圓、鐘紡二十五萬圓、東京電燈三十萬圓、東邦電力二十八萬圓、東洋紡績二十九萬圓、王子製紙二十九萬圓等で、此の中事實重役の手に殘る金は僅か二割五分位ひで、殘餘の七割五分は、純然たる機密費で、大部分政黨方面に、バラ撒かれるのである。尤も中には、機密費と稱し乍ら自分の懐中に全部入れてしまふ重役のあるのは、無論である。

三

だが、國庫豫算に於ける機密費、考課狀に於ける重役賞與及び交際費として公然と計上されたものは、ブルジョア機關の機密費としては、ほんの少額なもので、實際上の機密費は豫算や考課狀の上に現れてはゐない。

内閣の機密費の拾萬圓ぽつちりのものは、國會を一度迎え、地方長官會議を召集すれば、接待費に吹き飛んでしまふ。内閣の機密費が十萬圓ばかりで足りる譯がない、もつと大きな機密費は豫算や考課狀に關係なく、闇から闇へと、動員されてゐるのである。

各省にしても、他の款項目の使ひのこりから、機密費に流用されてゐる。

そしてその方が額が多いやうである。

鐵道、遞信はそう云ふ點に於て國營産業の資本家である關係上事實上の機密費は最も豐富である。

銀行、會社にしても、瀆職事件がその一端を我々に曝露してゐるやうに、考課狀面の機密費にない巨額な事實上の機密費が闇から闇を、縫はれて流動してゐることを、我々は容易に窺知し得るのである。

では闇を動く金は何處から出てゐるか。普通、建設費又は營業費からはぢき出されるのである。隨つて考課狀には建設費がいくらとあつても、其の中には機密費に支出されたものが含まれて居り、不當に高く評價されてゐる譯で、一と度び瀆職事件曝露するに於ては、之が埋合はせは、重役が負擔するのが通常である。だが重役にそれだけの私財があるとは限らない。では何うして此の埋合はせをするのか。そこには所謂トンネルと稱する拔け道がある。即ち機械其他の器具購入、建設工事等に對するコミッションから吐出すので、其處にも大きな機密費が闇から闇を流動してゐるのである。然して最も端的に我々に其の實例を示すものとして、例へば滿鐵の機密費は年三十萬圓から五十萬圓、更に百萬圓となり最近は五十萬圓に減額され、また約六十五萬圓(利益率により異る)になつてゐる。川村竹治時代には、機密費の大部分は、滿洲、支那に使用されないで、内地に逆輸入され、貴族院の操縦費として使用されたもので、之等の機密費は、翌年度分をも使用することに依り必要分だけ臨時造り出されるのである。とは云へ、表面上のかゝる機密費は知れたものである。

先年山本条太郎が、サラリと滿鐵總裁の椅子を投げ出した為、山本の往生ぎわの悪かつたに比べ、男をあげたとほめられたものだが、何ぞ知らん、實は機密費を造る準備中に内閣破産となり、之が曝露を怖れ新内閣の御機嫌をとつたのであつたとは、知るものぞ知るである。

東洋拓殖の東亞勸業と云ふボロ會社を滿鐵へ引取り、他方朝鮮へ乘出して、昭和製鋼所創立のために七百萬圓を投じ、東亞勸業に土地買收の獨占仲介者を指定し、一割五分の獨

[illegible]教社へ與へたのは何故？
且つ三十八錢で買占めさせた敷地七十萬坪を
坪十圓で何故賣上げたのは何故？
此の二つの事實によつて議會の新營費一千萬圓の中、大部分が機密費として潰用しやうとしたと云ふ疑惑が持はれても致し方がないではないか。
隱された事實上の[illegible]の機密費は、恐らくして[illegible]れるのである。

ことわり書

私は[illegible]分のため[illegible]敷地案を中[illegible]一[illegible]が、中央公論の[illegible]に對して[illegible]判つたので、やむなく其を一月二十日夜當時機密費の數字を調べて[illegible]友人を[illegible]たが[illegible]所々の時に、[illegible]の[illegible]路し[illegible]的に[illegible]に[illegible]中央公論に對する[illegible]を[illegible]すために[illegible]のうちに[illegible]して[illegible]である。

（一月六日）

秘戀の味

生方敏郎

昨年或る大政黨の首領になつた或人が、まだ總裁になつた頃、二千萬圓の機密費が首領[illegible]したとかしたいとか[illegible]下の間に上つたのは、[illegible]十年前の話の事、其人は已に死し、死と共にその噂も忘れられて行く。

だと云ふ噂にもせよ、一千萬圓の機密費を持つた時の心持は何んなものだつたらう。二千萬圓十萬圓でも、それが[illegible]の金でなく、自分が秘密にして使ふ金の味。讀者よ、一寸想像してみるがいい。

だが、こいつは恐らく[illegible]サラリーマンたちの覗いてみることさへ許されぬ[illegible]らしい[illegible]。

その[illegible]といふ點から云へば[illegible]の如く[illegible]あつたからう。月給日に[illegible]一[illegible]のまゝ[illegible]の前に投り出して[illegible]後から[illegible]家の代、[illegible]代、[illegible]代、[illegible]、[illegible]本の一月分、[illegible]の目の下に記入されるものであ[illegible]婦の手から拂ひ[illegible]せる。

[illegible]なれば[illegible]苦しいのは[illegible]作で、その[illegible]額の目くされ金から家賃[illegible]小[illegible]への拂ひ、若し夫れ[illegible]に至つては[illegible]より[illegible]別に[illegible]おかなければならない　と云ふのだから、[illegible]のために細君が何んなに頭を使ふかは、考へてみると氣の毒と云ふ[illegible]。

私は前から月給を受け取ると[illegible]まリイブに手渡しします。[illegible]如何にも[illegible]らしく、人[illegible]で語る男に時々[illegible]、その[illegible]にもならない　[illegible]私なんかは[illegible]一[illegible]と云つて[illegible]だらう。

サラリーマンの[illegible]な收入では、其人の妻も機密費はおろか、[illegible]。
[illegible]のボーナス、これも[illegible]一種の定收入[illegible]のに成つてしまつては、[illegible]。

裕なんか浮いて來ない。ボーナスが取れたらショールを買はうとか靴を買はうとか、既に半年も前から豫算の中に計上されてゐる。それが入つても當り前だ。嬉しくも有難くも何ともない。あてにしたより少なかつた日には、それこそ悲劇だ。泣つ面に蜂だ。

サラリーマンも部長級課長級にまで進み、何うかすれば賄賂の少し位轉がり込むところ迄に榮達すると、そこで漸く機密費と稱する餘裕が生まれる。

何と嬉しい女房に内所の金。そして細君の方でも亦たへそくりと稱する機密費が生み出せる。

だから要するに機密費はプチブルジョア以上の者の享樂出來る人生の幸福なのだ。所得の中から生活費を取りのけて、更にまたその他保險金貯金等々を取り除けて、其取りのける際に手際よくそッと別に取りのける金でなくては機密費にはならない。

だからそれには相當の所得を豫想する。

だが、實のところ之は表て向きの話で、機密費は其手際次第で、ずゐぶん苦しい家計の中からでも生んで生み出せないことはない。

例へば戀愛だ。戀なんてものは、何んな境遇にゐても出來ないものではない。ことに人に秘めた戀、それが此機密費に似てゐる。

對手がたとへ錦繍花を欺むく美人であるにしても、親類朋友から許された戀愛の悦びは餘り大したものではない。すぐさま小說の材料にして、其原稿料を以て、嫉妬するやうな戀愛の價値はタカの知れたものである。其小說の藝術的價値の方は安價か夫れとも高價か俄に決定し難いとしても、書かれたる戀愛其物の方は確かに安價なものだと言ひ得る。

だから私は人々に決して閑話きする勿れと常に云ふ。他人の目に觸れるやうな戀愛の愉悦の如きは、之を秘めたる戀と比較して到底同日の談では有り得ない。

浮名を流した程度に依つて、彼又は彼女を幸福な戀人と思ふのは淺薄だ。彼又は彼女と戀愛に就いて語つてみて其理解の程度如何に依つて幸福な戀人たるか否かが決定される。

異性に對する理解の程度に從つてのみ、彼又は彼女の戀愛的生涯を知り得るのだ。

本當に甘い戀、身も魂も溶けて流れるやうな戀愛の悦樂は、お月様の光にさへ覗かせなかつた戀愛の中にのみ潜在する。

まあ、お金にしてみても、人に内所で使ふことの樂しみは、之とほゞ似たものなのだ。

では、何故秘密の味はそんなに甘いか？

然り、其處には絕對の自由が有るからだ。誰からも何とも批評されない、否誰も彼も知らずにさへゐるのである。

其上更に若し知れたら、と云ふ冒險の危惧が伴へば、一層悦樂は增加する。

子が親にかくして使ふ金、良人が妻にかくして使ふ金、それは同じ十圓札でも極りきつた生活費——家賃や米代や教科書の代を支拂ふのと較べて、正に千金の價値があらう。大屋に拂ふ家賃のバカ／＼しさは、それが單に高いからといふばかりではなしに、當然拂ふ可き金と思ふところから、一層にバカ／＼しく成るのである。

匿名で寄附し匿名で同情金を出した善男善女でなくては、喜捨の眞實の甘味を知つた者ではないのだ。

耶蘇右の手の爲す善き業を左の手に知らすること勿れ、とは實に千古の金言である。右手のことを左手にすら秘密にする。此人にし

一刹那一刹那に行い結果を生ずる資格がありとはいふことが出来よう。此様に善事たると惡事たるとを問はず、人知れず、行つてその醍醐味を感受し得られるのだ。

美人の樣な盛裝させて新流行の衣裳に飾り繁華な街を伴ふて行く。人々から愛らしと見られ美しと見られるのは嬉しからう。併しそれも隱れて街を行くのでなければ興は盡きる。

何事に依らず、人に見せびらかしの好きな人間も世には在る。すべてが見てくれだ。[illegible]めくなんだ。美しい裝、美しい着物、美しい家、美しい行爲、すべてが他人に見て貰ひたいといふ部類の人。

彼等は人に知られんとして常にラッパを吹く者である。

成程見られる事にも樂みはあらう。併し乍らそれは虚榮だ。見られることから來る虚榮にも、唯一つの深刻味は、それは見た人々から羨まれ嫉妬される事だけだ。成金どもが札ビラを切るの快感は、他人の嫉妬むを誘致して快感の反射と成り、ふんぞりかへることなのだ。此處にも一種變態の深刻味が無いわけではないが。

さてそれでは此種人間の秘密性の快感は如何樣なものだらう。といへば、それは何でもいいのだ。美人を購ふを要せず金殿玉樓を買ふを要せず、それは一杯のカクテルであつても、又一本の卷煙草であつても、其愉悅は十分だ。

政治家や實業家の機密性からこそ、いろんな樣態を生み出すこともあらう。平凡なサラリーマンの秘密性の働きは、其用途を研究してみたところで、別段ロマンティックなこともなければヒロイックな光彩も無い。たゞ、小さなカフエーの女給を相手に、若し少し多く出たとしても弱身を見られる程度のものかも知れない。ブルジョアの不良行爲が如何はしい者を裝ふとしたところで、餘りに平凡でいふに足りない。

況んや奥さんの貯蓄金に至つては、苦も良人に隱す必要の無いところの約いた樣途への玩具とか作娘の娘のための着物とか、唯こつそりとデパートを覗す理由であるにすぎないのだ。

よしこれが自分の平凡な日用品に費されるにしてからが、之れ新しき秘密性を所有する人々は、現代に於ける幸福者だ。

だが一寸手紙を持たせて何處でへ使を出す位の秘密性はモダンな人に必要かも知れない。又嫉妬深い夫人でなくとも不良な良人の散步の地圖を他人に頼んで踏查する場合の費用も必要かも知れない。

又夫婦とも、將來はますます自動車代、心附け、その他、ランデヴーの費用などいふものも年々殖えるばかりだらう

從來の夫人たちは自分の良人の如何なる行爲が、將來は何處の良人の浮氣をなくす時代が來るかも知れないし、良人は何處の奥さんの洋服や帽子の費用を心配せねばならなくなるかも分らない。

我々は政黨や政府の秘密に立ち入るたりの秘密性の用途に就いて知る由も無いが、凡て此種類に依つてのみ經營の機構する現代に於いては、其利用は非凡断か機微にでも向ふ性質のものであるだらう。恐らく彼等は莫大の機密費無しには何事をも爲し得まい。そして他の半面に施す者も亦非常に有するものであることは疑を容れない。そして彼等にこそ又彼等のみの知る極度の甘味が存在するに相違ない。

金解禁と議會解散問題の交錯

大山郁夫

一

濱口内閣出現以來、『解散々々』の呼び聲が、絶え間なく政治市場に聞かれた。組閣後二十四時間以内に於て既に、ブルジョア新聞の多數は『速かに議會を解散して信を國民に問へ』といつたやうな、ステレオ・タイプにしたやうな註文やら勸告やらを、憲政常道論のレッテルで粉飾して賣り出した。そして、かうした政治上のイデオロギーに關しては完全にブルジョア新聞の影響力の下にある『公衆』は、早速それを引き取つて、ひたすら流行に遲れまいと競つてゐたもの丶如くであつた。

理由として擧げられてゐたものは、今更ら事々しく追演するまでもなく、極めて簡單な一本筋のものであり、また卒直に形式的なものでもあつた。たとへば、——

田中内閣の倒潰は、不戰條約問題や滿洲某重大事件を契機として、同内閣と樞密院および軍部との間の衝突によつて惹き起されたものであり、從つて濱口内閣の出現は、その與黨である民政黨の力で戰ひ取つたものではない。かくして、それは單に、元老西園寺老公もこの頃では無條件的に承認するやうになつて來てゐる政黨内閣主義の確定の下に起つた一個の偶然の事象にすぎないものであつて、國民の信任が何等かの形でその上に表現されてゐるものとはいへない。それに民政黨は、當面明かに衆議院に於ける少數黨として、『僞造の多數』でも何でも兎に角形式上は立派に多數を擁してゐる正面の大敵政友會に對してゐるのだから、このまゝでは次の議會が切り拔けられないに決まつてゐる。そこで、もし次の議會がどうせ解散になるものとすれば、濱口内閣は今のうちに即

時解散を斷行して、それに續く總選擧を通して表現されるであらうところの國民の信念の上に立つて、更始一新の政治を行ふべきだ」等々。

つゞめて言へば、かういふことが、解散論の最も根本的な要點として、盛にブルジョア諸新聞の上に書き立てられたものであつた。だが、かうした議論は、畢竟するに、單純に一應の表面上の主張として見られるべきものにすぎなかつたのである。少くとも我々は、もつと根本的な一事實として、田中内閣に對する當時の一般的な不評判が、さうした一切の主張の上にまざまざと反映されてゐたといふ一事實を無視することが出來ない。また無視してはならない。

今更ら死屍に鞭うつも耐へないことだが、それにしても非常に「反動内閣」の名を以て呼ばれてゐた田中内閣の失政振りは、いまだに一般民衆の日常の話題に殘つてゐるものである。三年前の金融恐慌の直中に生まれ出た同内閣は、その二個年餘の在任期間を通して、腐化た封建的軍閥支配の再來を思はせるやうな、彈壓一點張りの暴壓政治を憚るところなく實行した。そして、その下に廣汎なる範圍に亙る大衆の生活は、陰慘極まる暗雲に鎖されてゐたかの觀を呈したものであつた。それ故に、如何なる原因からにもせよ、その田中内閣が一朝忽然として一倒潰した瞬間には、大衆は久々に晴れやかな天日を仰いだやうな氣分になつて、思はず一度にどッと歡聲を擧げた。そして、さうした匆卒の間に後繼内閣の本質を充分に批判する餘裕を持たなかつた大部分の大衆は、濱口内閣を少くとも田中内閣よりは幾分か、より自由主義的な内閣として色彩づけた多くのブルジョア新聞の宣傳に乘つて、可なりの好意を以てその出現を迎へた。

かくの如く濱口内閣に大衆の好意を導くことに成功したブルジョア諸新聞が、そこから更らに一歩を進めて、議會の即時解散を叫んで極力同内閣を激勵するに至つたのは、事柄の當然の成行であつた。「鐵は熱した瞬間に打て！」といふのが、その眞意圖であつた。そして、その言葉のうちに、「今こそ政友會を徹底的にやッつける絶好機會だぞ！」といふ示唆が一杯に盛られてあつたのは無論である。

二

だが、何故にそれらのブルジョア諸新聞は、さほどまでに濱口民政黨内閣の地盤固めに熱中したのであるか？──私はこの問題をも、茲で序に一應片附けてしまはねばならぬ。

尤も私は前に、この事實の原因を一應田中内閣の一般的不評

制といふことにしておいた。だが、斷るまでもなく、それほどこまでも、單に一應の説明以上に出るものではないのだ。で、この問題に對する決定的解答は、結局は濱口内閣の出現の政治的・社會的意義――もしくは今少し精密にいへば、濱口内閣が金融資本の支配の確立のために帶びしめられた使命――との何等かの聯關に與へられねばならないのだ。

わが國の金融資本閥は、かつて金融恐慌によつて追出された社會的擾亂期に際して田中軍事内閣の出現を必要としたと同樣に、今やその金融恐慌の跡始末としての財界の整理の目鼻が一應つけられた時に當つて、より計畫的に、より着實に、金融統制の方向に進み入り得る政府の出現を必要とするに至つた。そして白羽の箭は濱口内閣の上に立てられた。

かくして出現した濱口内閣は、果然『如何なる犧牲を拂つても』金解禁を斷行しようとしてゐるの決意を、堂々と天下に宣言して政權の地位についた。

金解禁の斷行！　金本位制への復歸！　世界經濟との協調！　これこそ現在わが國の金融資本がその躊躇なき完成を企圖してゐるものだ。今日金融資本の支配下に於て、この事業に堪へ得ない政府は、直ちにその地位から退かねばならぬ。この事業の成功的遂行に自信と能力とを示し得る政府のみが、確實な存在の理由を持つものとして、その地位に止まることを許される。

金融恐慌に伴つた社會的擾亂の鎭壓と、民衆の負擔に於て十億の財閥救濟案を押し通したこと、日本共產黨の檢擧と、等々によつて金融資本に對して無二の忠勤を抽んでた田中内閣も、さすがにこの大事業の前に一歩たぢろいだ。如何に金融資本の屈强の走狗たることに甘んじてゐたとはいへ、田中内閣は要するに金融資本の支配の確立への過渡時代に於ける一個の產物であつた。從つてそれは、かゝるものとして、尙ほ大地主や產業資本への樣々の特殊利益の約束によつて、少からずその手足を緊縛されてゐた。のみならず、この田中内閣は、濟南出兵とか、滿州某重大事件とかを通じて、世界の公論の審判廷に於て無謀なる暴力行使者の烙印をうたれてゐた關係上、直接間接に金融統制に關聯して、名だけでもの國際的協調機關に參加するには、最も不適任であることを自ら證明した。かくして田中内閣は、澁々ながら旗を卷いて退場した。

入れ違ひに登場した濱口内閣の前に、改めて金解禁斷行の大事業がおかれた。この新内閣が『如何なる犧牲を拂つても』それを完成することを宣言したところを見るとその熱情の程が窺ひ知られた。そして、この上窮まりなく移り行く不景氣の增進、失業問題の層一層の深刻化、都鄙一般に通じての窮乏の加

漸次的進行、金輸出再禁止の政治的自由の一の上の掃蕩、等々。かうしたものが、その金解禁斷行の途上に於て拂はれるべき犠牲として知られた。

さらにこの事變の重大性は、金解禁とこの聯關に於て反復的にいはれてゐる「世界經濟との協調」といつたやうな言葉の上に、強く示唆されてゐた。「世界經濟」――それは窮極に於て一體何を意味するか？それはその純粹な結晶形態に於て、本國および植民地的領土の無産大衆への飽くなき搾取抑壓の基礎の上に打ち建てられてゐる帝國主義列強の經濟の綜合體ではないか？それ故に、かゝる言葉の使用は、直接にいはゆる産業合理化政策および帝國主義戰爭準備への聯想を喚び起すことによつて、無産階級の眼前に一種の曖昧たる絶望的な見通しを展開することに外ならないのだ！

濱口内閣はかゝる大事業の成功的遂行の使命を意識して政治舞臺に登場した。しかも今日の日本はムッソリーニの獨裁下のイタリーではないから、濱口内閣は立法部――議會を通して、それをしなければならぬ。從つて議會は執行部――政府の傀儡となつて動くまでに骨拔きにされねばならぬ。尤も、近年のわが國の議會は段々とさういふ風のものに成りかゝつて來てゐることは事實であるが、しかも濱口少數黨内閣の出現の際に於て衆議院内の絶對多數を擁してゐた政友會は、またまた田中反動内閣の餘威を負うて、相當に鼻息が荒かつた。なるほど現在でこそ政友會は、來るべき休會明けの議會の劈頭に於て不信任案を出しもしなければ、現内閣の重要政策には盡く反對もしないなど、言つて、まるで爪牙を拔き取られた猫のやうに溫順になつてしまつてゐるが、しかし濱口内閣出現當時に於てはもとより、例の昭和四年度實行豫算の説明會（？）の際に至るまでは傷ついた猛虎の如き勢ひを以て尚は盛に咆哮をつゞけてゐた。かゝる状態の下に於て濱口内閣にとつては、解散によつて衆議院に於ける絶對多數黨となることが絶對に必要事だと見られた。ブルジョア諸新聞が、濱口内閣に大衆の好意を導くことに腐心し、さらに同内閣に向つて議會の即時解散、總選擧の躊躇なき實行を熱烈に慫慂したのは、かうした雰圍氣の中に於てゞあつた。無論それらのブルジョア諸新聞が一齊にその間の複雜な諸關係を明確に看取し得たとはいへないであらう。だが、彼等も畢竟は、金融資本の強き影響力の下におかれてあるのだから、そこに醸し出される雰圍氣の動きには極めて敏感であるのだ。

三

濱口内閣の組閣後二十四時間以内に叫び始められた「解散々

々の聲はその後も引き續き叫ばれて來た。無論、その間に多少の變化が起つたことは事實だ。卽ち當初の『卽時解散』の聲はいつしか『年内解散の聲に變はつて、昨年末に及んだ。更らに今年に入つてから、それは再轉して、『休會明けの議會の劈頭に於ける解散』の聲に變はつた。だが、その理由として述べられてゐるところのものは、徹頭徹尾依然として、『濱口内閣は少數黨内閣だから、解散および總選擧を通じて信を國民に問はなければならない』といふ憲政常道論を基調とする形式論の一點張りだ。しかもそれを最も熱心に唱へてゐるものは政府自身であり、そしてそれを間斷なく大衆の耳に放送してゐるものはブルジョア諸新聞である。

かゝる解散論の騒がしきコーラスのうちから、果たして解散が一個の具體的事實として現はれるに至るであらうか？ そのことを今茲で豫言するが如きことは、全く無用の業である。何となれば、この一文を載せた本誌が市場に現はれるであらう頃には、それに關する狀勢が一般世間に明確に知れ渡るやうになつてゐるであらうから

だが、我々はこの機會に次のことを一言しておきたい。我々は『解散々々』の呼び聲が、必ずしも常に具體的事實としての解散に結果するものとは限らないことを知つてゐる。先年若槻内閣時代にアハヤ目睫の間に迫まつて來てゐた解散の呼聲が、僅々數分時に亘る三黨首の會合を通じて、瞬く間に跡方もなく消散せしめられた事實を記憶してゐるものは、何人もこの意見に異議を挾まないであらう。

と同時に、我々はまた、濱口内閣が解散斷行の誘惑を非常に多分に感じてゐることをも、容易に理解し得る。民政黨が多年の調和不可能の政敵として見て來た政友會を粉碎する絕好機會は、現在の瞬間を除いては再び容易にやつて來さうにも思はれない。田中内閣の反動的支配が生んだ民衆の政友會に對する一種の自由主義的憤激は、まだ全然鎭靜に歸してゐるとは言へない。金解禁斷行の使命を公然宣言しつゝ出現した濱口内閣が田中内閣に劣らぬ反動性を帶びた政府であることを體驗によつて知つてゐるものは、直接にその彈壓の衝に當つて來た戰鬪的勞働者農民群だけであつて、爾餘の大衆の間には、『濱口内閣は少くとも田中内閣よりは幾分か、より自由主義的な政府だ』といつたやうな、ブルジョア諸新聞によつて熱心につくり出された幻覺は、今尙ほ多分に殘つてゐる。如何にも、濱口内閣の出現以來間斷なく行はれて來た幾多の疑獄事件の摘發は、初めのうちこそ次の總選擧に於て民政黨のために有利に展開するであらうことを豫想せしめるやうな形勢をつくり出しつゝあつたが、中

途から金に轉じて行つて、更に民政黨の側からも若干名の閣僚を送り出したことによつて、今までの一黨に限られた内閣の間に、分子の均衡が崩れる結果に陷りて來てゐることは、疑ふべからざる眼前の事實である。たゞ、現在政權を握つてゐる民政黨の遣口から來る興味、その限りが、ら來る一切の策略でもつて臨むの傾いがある。殊に近年來、我國に於ても、金融資本の強度の下に統治機構、立法機構に對しても當面の堅絕對的地位を占めつゝあることは、隱れもない一個の政治的事實である。かくして、この濱口内閣の前に開かれてゐる展望は、解散——總選擧——他の或る黨への政權移讓——再歸來——政黨間における對の絕對多數——といつたやうな、循環の道に外ならない。それはまた狹い道であるのである。

四

だが、我々の當面の問題は、以上の觀點だけにあるのではない。決して且終局的に解決し得られない。さうしたことの一切の背後のうちに加へつゝも、一見これに對して超然的な存在の下に得るものは、たゞ金融資本閥の意向に外ならないのだ。

金融資本の側から見て、濱口内閣の内容である政黨が解散および總選擧を通じて絕對多數黨となるであらうことは、當ましきことゝ考へられてゐるであらうか？ それは無論、一應は望ましきことゝ考へられてゐるのに相違ない。何となれば、それは政局の一應の安定を意味するからである。或る程の重大なる世界的事情に伴ふべきことが當面に預想されてゐる金解禁の時期間に一步を踏み入れた金融資本は、この際爲替相場の安定を希求してゐると少くとも同程度に熱心に、政局の安定を希求してゐる。そして、その安定が、國の大小邊から見の不先き未定金融資本の繼續たることを以て自ら任じてゐる濱口内閣の下に持ち來たされるであらうことは、金融資本に取つては決して不滿足なことではないのだ。

だが、同じ結果が、解散——總選擧といふやうな不利面倒な、各種の犧牲を伴ふやうな、しかも或る意味に於て多少の冒險的動搖をも惹き起す可能性のあるやうな手續を經ずに、もつと平穩な別個の經路を通して獲得されるのは本然ないであらうか？ 必ずしも不然ないとはいへない。そこに政友合同なる提近來に突然に解散回避論が提唱されるに至つた現象があつた。かつて傳へられた獨見のやうに喧嘩をつゞけてゐた政友會が間もなく分裂を取られた論の如く内閣に入つてしまつたのは、決して偶然ではないのだ。

かつて各方面に亙る疑獄事件の曝露が騷然を極ましき勢ひを以て進行しつゝあつた際に、私は或る論文のうちに於て、それによつて暴き出されつゝあるブルジョア諸政黨間の動搖は、要す

るにブルジョア諸政黨間の戰線統一の過程の上に於ける一現象にすぎないものだといふ一點を力說しておいた。私はいまだにその論旨を撤回する必要を認めない。

衆議院に於ける絕對多數の獲得を目指しての民政黨の解散への突進。當面の難關を切り拔けようがための政友會の必死的な解散回避運動。現下の政局の上に際立つて現はれてゐるこの二つの渦卷きは、しかし諸共にブルジョア諸政黨間の戰線統一の目標に向つて動いてゐる。兩者のうち、何づれがやがて現下の政局の全面を引き摺つて行く力となるであらうかは、結局何づれが、より平穩な方法に於て金融資本が希求してゐる政局の安定に、より多く貢獻するであらうかの見込みによつて決定される。いふまでもなく、さうした見込みの最後の裁斷者は、政局の背後にあつて指揮杖を揮ふ金融資本閥である。

私は今茲で、休會明けの議會の解散非解散に關して、一切の豫言を避ける。けだし、金融資本閥の意向の刻々の轉換を精密に跡づけて行くやうな仕事は、實際上現在では我々に出來ないことだからである。だが、結局いづれの側にサイが投げられるにもせよ、その歸着點はブルジョア諸政黨間の戰線統一の漸進的完成にあるであらうといふ一事は、我々にとつては一點の疑問の餘地のない結論である。

無產階級の政治的進出に對して、ブルジョア諸政黨の戰線統一の必要を意識しだしたのは、決して昨今に始まつたことではない。だが、金解禁の實施期が開始された今日に於ては、それは最早議論の問題を通り越して、實行の問題に移つて行つた。政友會や民政黨の間に存續して來た調和不可能に見える傳統的確執の如きも、決してそれを阻止する力を持つてゐるものではない。さうした傳統的確執も、畢竟彼等が代表する階級内での内部抗爭にすぎないものである。それは共同の敵としての無產階級の攻勢に直面しては、必要に應じて直ちに停止し得られる性質のものである。

それに、ブルジョア諸政黨間の戰線統一は、決してそれらの諸政黨の渾一融合を意味しない。それらの諸政黨は、今後も尙ほ長期間に亙つてそれぐに獨自の地位を維持して行くであらう。そしてたゞ刻々の必要に應じて相互間の共同鬪爭の形で無產階級の政治的進出に對する彼等の戰線統一の實效を收めることに努力するであらう。立憲政治の外形が、支配階級の立場から見るも、まだ一種の高き政治的價値を保有してゐる狀態にある今日の日本に於ては、ファシズム治下のイタリーに於て見られるやうな一黨獨裁の實現の必要は、急に認められるには至ら

ないであらう。それは一つには、現在のわが國に於ては、執行權の立法權に對する優越的地位が既に略ぼ完成されるまでになつて來てゐて、從つて議會は最早政府に對する牽制機關でなくなり、逆に完全に政府の指導下におかれるやうになつて來てゐる關係上、實質上の金融獨裁の目的が、外形上の議會政治の粉飾の下に達成し得られるやうになつて來てゐるからでもある。

更に又、ブルジョア諸政黨間の戰線統一は、今や着々と實行期に突入しつゝある事は、掩ふべからざる事實である。解散問題運動に沒頭してゐる政友會は、その現總裁の口を通して、政友會は金解禁の實施期の遲速に關しての民政黨との意見の相違に頓着なく、その斷行一旦決定された今日となつては、當然それから生ずべき一切の損害を緩和するために、完全に濱口內閣に協力することを辭さないであらう——といつたやうな趣旨を發言せしめてゐる。それが政友會の本音であることには、毛頭疑ひがない。

ただ、いふところの、金解禁の斷行の結果として當然生ずべき損害に對する緩和策として豫想し得られるものは何か？ 産業合理化の促進、際限もなく増大する可能性のある軍事豫算の強行。さうした一切の施設に伴つて必然的に起るべき失業問題の深刻化および一般大衆の窮乏化の激勢に對する大衆的反抗運動への××の層一層の加重。全被壓迫大衆の手から言論・集會・出版・結社・選擧の自由を始めとし、團結權・團體交涉權の剝奪一切の政治的・社會的自由の、この上の××。等々々、その他無限。

現在ブルジョア諸新聞の上に喧傳されてゐる通りに休會明けの議會の解散が果たして實現されるにもせよ、はたまた、政友會が熱望してゐる通りにそれが回避し得られるにもせよ、今後の政治舞臺に於ては、「金解禁斷行の善後處置」として、ブルジョア諸政黨は、必ずや上に例示されたやうな諸政策の實行に於て、完全に協同一致の態度に出るであらう。換言すれば、彼等は相互間に於てこそ尚ほ依然として調和不可能にさへ見へる傳統的確執を續けながらも、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得とのために結びたつ無產階級の政治的進出に直面しては、それに對して緊密なる共同戰線を張ることを寸刻も躊躇しないであらう。

わが勞農黨は、支配階級の側に於ける議會解散の眞意の有無に拘はらず、夙に第五十七議會の即時解散要求を高く掲げて、その下に敢然と戰つて來た。それは、根本に於て支配階級の如上の企圖に對するわが黨の徹頭徹尾非妥協的な鬪爭態度の表明を意味するものであり、同時に支配階級の驅使の下にさうした企圖の實現のために全被壓迫大衆への搾取手段および彈壓・欺瞞政策の樹立に向つて盲進するブルジョア議會の陰謀に對する宣戰の布告を意味するものである。

議會解散その日

馬場恒吾

議會初まつて以來、昭和三年田中内閣が行つた解散迄を入れて、解散の度數十二回、今日濱口内閣が議會を解散すれば、それは第十三回目の解散になる。

蓋し此雜誌が市中に出る日（二十一日）は衆議院解散の日であるべく豫想される。議會の解散に豫想されるものと、豫想されないものとある。今回の解散のやうに前から解散があるものと豫想されてゐる場合には其光景がさほど劇的であり得ない。豫想されない時に解散される場合は樣子が全然違ふ。

例に依ると法制局長官が紫の袱紗を持つて來て衆議院書記官長に渡す。書記官長がそれを議長に渡す。議長が立つて、只今詔勅が下りましたと云ふとき、今まで鼎の沸く如く騷ぎ立つて居た議場も水を打つた如く靜まる。陰森た空氣がサッと流れる。議員の顏に死相が描かれる。彼等は詔勅に敬意を表する爲めに全員起立する。大臣席も政府委員席も皆起立する。

其瞬間に議員の頭に閃めくものは、彼等自身の選擧區の光景である。約一ケ月間地方の有力者に屆められ通しに屆められた事、命を拵へるに苦心をした事、連日連夜演說會に引張り廻された事、それが總べて水泡に歸して、これから又一ケ月さうしなければならぬ事、それらがごつちやになつて頭の中を掠める。

彼等は慣例に依つて萬歲を唱へる。そして議場の外に出ると、驅け足で議院内郵便局に殺到する。自分の選擧區の有力者に電報を打つ爲めである。『元は只今議會解散になつた。宜ろしく頼む』と云ふ電文であつたが、普選になつて、[illegible]出來ない規則になつた。それ故に此時の電報[illegible]時以來『只今議會解散になつた』と云ふ丈けの文句に切り詰められた。

犬養政友會總裁は解散を歡迎するのは安達と無産黨許りだと云つた事がある。それを註釋して、彼れはかう云つて居る。あれは必ずしも政友會が解散を恐がると云ふ意味ではない。兵隊が戰爭に行く。其出發に際して、誰れも死にたいと思ふものはない。だけれどもイザ、戰爭となれば死ぬる事なんかは平氣で突貫する。初めから解散されたいと思ふ議員はない。だけれど、其場になると、解散を眼中に置かずに戰ふのだと。蓋しこれは議員心理の眞實な處であらう。

豫想されない解散は大正九年に原敬が普通選擧問題を捉へて解散した場合である。其時は政府に味方するものが多數であつた。野黨の出した普選案は少數で否決される運命に決つてゐた。だから、政府としては強いて解散する必要もなく、議員も亦解散を豫想してゐなかつた。然るに突然政府が積極的に出て解散したのであるから、野黨は不意に取られた。

議會解散に於て機先を制せられた形であつた。其時は常に領袖であつた加藤高明伯、故に、尾崎行雄氏も發起人が本部に於て政府の暗打ち的解散、非立憲の解散と云つて演説したが、それは單に喝采するに過ぎ以上の價値がなかつた。原敬は果然として、百八十名の絶對的多數を贏ち得た。

之を今回の解散に比較して考へるに、濱口内閣は議會に少數である。併しながら寧ろ解散を避けやうとしてゐる。然も、政府が今までのやうに解散を勝する代りに、寧ろ に對策を安心せしめて置き、そして實際は抜き打ち的に解散したならば、どうであらう。それは、解散に機先を制する丈けの利益はあつたであらう。そして或いは多大な混亂が起つて、原敬が贏ち得た如く、百八十名の多數を得たかもしれぬ。併し立憲政治の賊には、常に寛大でなければならぬ。濱口首相は正直な人であるから、さうした戰略的な事はせぬ。そういう所が原敬と異る所であらう。

原敬が議會を解散したとき、彼は常に議會で、解散の心配をした一人のは、當時の政會の領袖で後、内閣の首班になつた一人

の下同然であつた。彼れは前列から見てゐると議場の横田千之助が殊の外度々首相席の原敬の所に行く。そして耳打ちしてゐる。何か其事ではないやうに思はれた。其内に原敬が解散案に反對すべく演壇に立つた。聞いてゐると、演説の本段になつて、原は云つた

「政府の考ふる所では、一般案に此議場に於て、決して成立しやうとは考へませぬけれども、左りながら此重大なる案は國民の公平なる判斷に訴へる外ないのであります。是に果して政府の主張を是なりとするか、非なりとするか、國民に果して諸君の提案を是なりとするか、非なりとするか、是に國民の公平なる判斷に訴ふるの外ないのであります。（拍手せる）此事は憲政上正當なる處置なりと考ふるが故に、茲に政府の所信を斷たに表明して置く次第であります」（拍手起る）。

下岡はこれを過激なと批評した。憲政會の府からも首相に質問ありと叫んでゐる。彼が、原敬の演説の中に解散の意味が示されてゐる事に氣が付かなかつたのである。

下岡の如きに評價する戰があらばこそ 原敬が演壇を下る。同時に、横田書記官長が前に紫の袱紗を置く、議長の大岡育造が立つて詔勅が下りましたと云ふ。議員の顔色がサッと變つたのである。それは大正九年二月二十六日の夕闇の迫らんとする頃であつた。

其日は朝少しく雪が降つた。後に晴れて、群集は衆議院に押し掛けた。傍聽席は例に依り溢れて置かれるやうな滿員である 議會附近の警衞は嚴重であつた。日比谷公園には巡査が三十人位づゝ一團になつて、數ケ所に陣取つてゐる。隱れた警官隊としては議會前の森村會館に七百、開拓館に二百、勸業銀行構內に五百、憲政會本部に一百、虎の門の附近に二百、警視廳に豫備隊として一千、全部で五千人近くの巡查が動員されてゐた 今逓信大臣になつてゐる小泉又次郎、當時の憲政會の猛者三木武吉が其頃、自動車に普選運動の旗を立て、院外團を連れて議會に乘り付けた事があつたので、其日は議會の正門からは議員以外は入るべからず、議員と雖も旗を立てゝ入るべからずと云ふ命令が出てゐた。今は政友會になつてゐる西岡竹二郎なども、改造聯盟の首領として、市中に普選のビラを撒

き、日比谷公園附近で演説しやうとして、警察と衝突した。上野の両大師前では普選に反對の愛國農民、東都青年黨が大會を開いた。周圍がこのやうに騒いでゐる中であるから、原敬が仕組んだ解散の簡潔の冷かさが殊更に目立つたのである。

此解散は政友會議員の大多數にとつて寢耳に水であつた。解散の夜、原敬は解散は已むを得ないが、諸君には氣の毒であつたと云つた。彼は解散が代議士に取つて何を意味するかを知つてゐるからである。それは反對黨の議員に對するのみならず、自分の黨の議員の事を思つてさう云つたのである。

だが、解散の詔勅が下つて、解散の聲が議會内に上ると同時に『衆議院只今解散さる』と云ふ號外を賣り出した新聞があつた。その新聞は解散のあることを、少くとも二時間前に知つて、號外を印刷し、議會と新聞社の電話をつなぎ放しにし、解散の聲の擧るのを待つてゐたのである。何故其新聞社のみが解散を早く知つたかと云ふにかう云ふ事情があつた。

其日其新聞の政治部長は議院構内の記者倶樂部の一室で原稿の整理をしてゐた。議場では普選案が上程されて、今の拓務大臣で、當時は政友會員、而かも普選委員會の委員であつた松田源治が委員長報告をしてゐる。だから外の記者はみんな議院の傍聽席に入つて、政治部長の居る室には他の一人の記者が居るのみであつた。其所へ今は政友會議員になつてゐる寺田市正が息を切らして飛び込んで來た。そして居合せた記者に向つて、

『君一寸外へ出て呉れ給へ』

と命令するやうに云ふ。其記者は默つて出て行つた。寺田は戸を閉めて、政治部長に向つて、今日議會が解散になる。平生御厄介になつてゐるから、早く知らせるのだと云ふ。政治部長は

『そんな事はあるまい。普選案は否決されるのだから、何にも解散の必要はないではないか』

『所が解散になるのだ。原總理が今朝幹部を集めて、解散を云ひ渡したのだ。それで總務の川原茂輔が僕を呼んで、解散の號令を擧げるのだから、本部へ酒やビールの用意をして置けと云ひ付けたのだ。總理が演説すると、すぐ其後で解散の詔勅が下ると云ふ。惜しいことである。これは間違ひはないから號外を用意しておき給へ』

と云つたのである。政治部長は半信半疑で、尚一應確かめやうと思つた。それで[illegible]の記者を探させて、寺田がかう云ふ話しをした。嘘か本當か、誰れか判つてゐる者を捕へて確かめて呉れと云つた。其記者はそれは嘘だらうと云ひながら出て行つた。暫らくすると其記者が驅け付けて

『あれは本當だ。今廊下で岡崎七郎（政友總監）を見付けたから、これ〳〵の話があるがどうかと聞くと、大丈夫だ、號外を刷つて置いてもよいと云ふ。もう、間違ひなしだ』

それで其新聞は號外に成功したのである。同じ新聞がそれより十日許り前に、平田東助の處から、内閣は普選を理由にして此議會を解散すると云ふ話を聞いた。それで或有力なる方面ではかう云ふ話があると書いた。すると原敬は自分の處へ出入する其社の記者を呼んで、

『君の所では馬鹿な事を書くものだ。政府は議會に多數を有つてゐるのに、何んで解散す

る必要がある。あんな記事は一體何處から聞いたのだ』

と云ふ。其記者は種の出所を知らなかつた。さう答へると

『世の中には下らん事を云ふ者があるので困る。誰れが云つたか判つたら知らして貰れ度へ』

と云つた。種の出所を心配してゐるのが明かであつた。解散した後に原は

『いつかの記事は山縣から出たのだらう。僕は山縣公だけには打ち明けて意見を求めて置いた。山縣は解散などゝ云ふ喧嘩は好きでないで、ず反對であつた。併し秘密を漏らすのは怪しからんと思つた』

平田東助は山縣の子分である。だから原が山縣から漏れたと思つたのは、必ずしも筋道ではない。

閣僚には原が解散の前日正式に相談したのである。だが閣僚の中でも後に政友會總裁になつた田中義一は最も早く相談を受けた。生前田中は云つてゐた。

『あの解散は十日か一週間も前であつた。原がやつて來て解散をすると云ふのだ。それは陸軍整備費と云ふ繼續年限の付いた費目がある。議會が解散になり、豫算が不成立になると、其繼續費が潰れる。だから、陸軍大臣の諒解を求めて置く必要があつたのだ。尤も其外にも解散に關係する要事もあつた。海軍にも何か繼續費があつたので、我輩の處へ來た足で、すぐ加藤友三郎の處へも往つた筈だ』

と、原が如何に解散に對して用意周到の計劃を立てたかゞ判る。

此解散は大正九年に行はれたのであるが、原の解散の決心は前年の例の議會で、選舉法を改正した時に出來てゐた。原内閣は衆議院に多數を制してゐた。だが政友會は絶對多數ではなかつた。中立團體の無所屬議員を加へて漸く多數になると云ふ狀勢であつた。此中立團體の無所屬議員を操縦する事は手數と金のかゝる事であつた。原敬は議會で絶對多數を占めなければ政治が行ひ甲斐のないやうに思つてゐた。だから大正八年に選舉法を改正し、政友會が絶對多數を占めるのに都合のよいやうな小選舉區制を制定した。其頃から原が腹心の閣僚、高橋藏相、床次竹二郎等と大体の議會は解散だと斷定して、選舉區の割當て、候補者の選定に奔走してゐた。原に解散の暗示を受けたものと見へる。

原は最後まで議會解散の口實なきに苦んでゐた。兎も角も政府は衆議院の多數に依つて支持されてゐる。それを解散するのは平地に波瀾を起す觀がある。だから無理な解散だと思はれないやうにする爲めに苦心した。議院外の騷擾、物々しき警官の出動など、すべて解散を尤らしく見せる役に立つた。

適當なる解散の理由がないのに苦んでゐるとき、故島田三郎が普選の目的の一つは階級制度を打破するにあると云つた。原は之を逆に取つて、階級打破は『現在の社會の狀態を打破すると云ふ意味に聞へる』と云つた。此重大な問題は議會を解散して國民の判斷に愬へなければならぬと、之を解散理由にした。彼れは絶對多數の獲得に、此尤もらしき理由を着せたのである。それに比べると、今の民政黨内閣が、議院に多數を占めたいから解散すると云ふのが、露骨であり、正直である。

× × ×

過去十二回の衆議院解散の中で、解散の詔勅が下る瞬間の場面が最も劇的であつたのは原内閣のそれであつたであらう。所で、解散の詔勅が議員休憩中に下る時がある。すると彼等は最早議員でなくなつたのであるから改めて議場には集らない。其時は、議長が詔勅を捧讀する場面は現出しない。議長は解散の詔勅を受取つて、議會が解散になつた趣きを議員の控室に傳へる。議員は黨派別に各控室に集つて萬歲を唱へる。そして選擧區に電報を打つた後に、議院内の控室か、或は黨本部に引き揚げて議員總會を開く。そして各選擧區に散らばつて了う。原内閣の次ぎに解散を行つた清浦内閣の時がそれであつた。過去に遡れば、日露戰爭直前に、議長河野廣中が勅語奉答文に政府彈劾案を入れ、そして衆議員が解散された時もそれであつた。

日露戰爭直前の解散は明治卅六年十二月十一日桂内閣に依つて行はれたのである。河野議長が勅語奉答文に彈劾の文字を入れたのは其前日であつた。即ち其日は午前に貴族院で開院式があつて、衆議院は其後直ぐ（午前十一時三十二分）に議事を開いた。議長の河野は

『今日の開院式の勅語に對して奉答文の議事を開きます。先例に依りまして議長の手許に於て起草いたしましたものがございますから、之を議題として宜うございますか』

と云つた。異議なしと叫ぶ者があつて、議長は重ねて云つた。

『御異議がございませんならば左樣いたします。奉答文でございますから敬意を表する爲め諸君の起立を請ひます』

議員一同起立した。

河野は、悠つたりとして、音吐朗々、奉答文を讀み上げた。初めの

『恭しく惟みるに車駕親臨して云々』

は先例の通りの文句であつた。中段に

『今や國運の興隆誠に千歲一遇なるに方りて、閣臣の施設之に伴はず、内政は彌縫を事とし、外交は機宜を失し、臣等をして發憤措く能はざらしむ。仰ぎ願くは聖察を垂れ給はん事を』と云ふ内閣彈劾の文句があつた。次ぎに來る『臣等協贊の任に在り愼重審議云々』の文句は先例の通りであつた　議員は中段に氣付かなかつた。朗讀が終ると拍手し、異議なしと叫んだ。議長は

『御異議がございませんから可決致します。御可決致しました以上は宮中の御都合を伺いまして參内の上奉答致す事に致します。今日は是にて散會いたします』午前十一時三十五分散會と速記錄に出てゐる。會議僅かに三分間、その内に議員は議席を棒に振つたのである。

廊下に出ると、犬養毅が誰れかに云つた。

『今の奉答文は少し變だぜ、もう一遍よく見る事だ』

と、それで議員の或者が議長室に行つて、奉答文を見せて貰つた。すると大變、これは内閣彈劾の上奏文になつてゐる。院内は怒濤の湧く如き騷ぎになつた。帝國黨の佐々友房、政友會の元田肇、交友俱樂部の大竹貫一等が先頭になつて、議長室に詰め懸けた。佐々は眞赤になつて、河野を詰問してゐる。河野は自分が是なりと信じた所を行つたのみだと云つて多くを云はない。議長を懲罰に付すべしとか、議長不信任の決議をしろとか云ふ議があつたけれども、奉答文起草は議長一任と云ふ形式になつて居り、そして議事に付した際に

賛成したのだから、どうする事も出来
なかつた。政府は[illegible]せしめよと云
ふ説を聞いた。政友会は内閣に[illegible]よ
いと思つたが、[illegible]
政友会は[illegible]の[illegible]
前の大[illegible]当時[illegible]に強硬に反対して
[illegible]我[illegible]の[illegible]
如何とも不可能。
と云つた。彼は内閣の行動に不同意で
あつた。併し政友会は[illegible]
[illegible]まいと思つたので
ある。

[illegible]の日である。[illegible]の後
[illegible]
[illegible]人もあつた。午後一時、[illegible]
の如く[illegible]時刻になると、[illegible]七八分
の入りであつた。[illegible]午後一時に[illegible]
[illegible]
[illegible]人許り[illegible]出て行
く。[illegible]にも入つて来ずに[illegible]として
ゐる。[illegible]何処からともなく[illegible]
[illegible]
人は[illegible]顔をして出て了つたのである。

[illegible]内大臣[illegible]
[illegible]内大臣
[illegible]から一つの[illegible]のであつて
ある。[illegible]
[illegible]。当日[illegible]
[illegible]
河野[illegible]
[illegible]内[illegible]
[illegible]
[illegible]内大臣を
[illegible]。[illegible]自分
[illegible]
[illegible]内大臣[illegible]
として[illegible]
[illegible]へ
[illegible]其
[illegible]
[illegible]
[illegible]の
であつた。[illegible]出て行
つたのである。
[illegible]が
[illegible]長

[illegible]
[illegible]入れた[illegible]
[illegible]なかつた。
それから[illegible]大臣[illegible]に
なつて、[illegible]小川平
吉[illegible]自分[illegible]それ
[illegible]
[illegible]
[illegible]中
[illegible]
つて、河野[illegible]文
[illegible]内閣
[illegible]
[illegible]た。[illegible]
そこで秋山[illegible]、小川平
吉、[illegible]ホテルに集めて、其所へ
河野を招いて[illegible]を河野に依頼した。
[illegible]の[illegible]秋山は[illegible]
官長の[illegible]
[illegible]に行くやうにした。そして[illegible]
[illegible]
[illegible]た。[illegible]
[illegible]

て止めた。これであの奉答文が議決されるに到つたのだ。

これが秋山の實話の要點である。だから小川平吉が關係してゐた事は事實である。秋山の背後に誰れが居たか。誰れも居なかつたか。一時は伊藤博文(侯)が居ると云はれたが、それは秋山自身否認してゐる。兎も角も此議會が解散になつた爲めに、桂內閣は日露戰爭を始めるに際して、五月蠅い議會がなくて濟んだ。奉答文の實際の結果は奉答文が彈劾してゐる桂內閣を助ける事になつたのである。小川が林田に宛てた手紙に、自分等主戰論者から見れば、あの解散のお陰で露西亞がいよ／＼強くなり、議會で下らぬ質問も出ず、開戰には好都合であつた。奉答文の目的はこれで達したと心得てゐると云つて居る。

× × ×

大正十三年一月三十一日清浦內閣が衆議院を解散したのも、議場休憩中であつた。其時の反對黨は所謂護憲派で、政府黨は床次の政友本黨であつた。尤もそれも公然とは內閣支持を聲明してゐなかつた。世間では之を野合と稱してゐた。清浦內閣は貴族院の研究會の擁立する所であつたから、長袖流何をか能くせんと初めから世間の輕蔑を買つてゐた。解散の其日の議場は初めより終りまで茶番氣分であつた。

其前日に大坂で護憲運動の大會があつた。加藤高明、高橋是清、犬養毅、尾崎行雄の連中が歸京する汽車が、木付川附近を通るとき、鐵道の上に枕木を重ね、石を積んであつた。汽關車がそれに乘り上げて一時不通になつた。衆議院の休會開けの議事は此事に關する質問で開かれた。

清浦首相は其日施政方針の演説をする筈であつた。所ろで衆議院が開かれると、革新倶樂部の濱田國松が此列車事件に關する質問演説を初めた。それに答辯すべく鐵道大臣小松謙次郎が登壇すると、議員は總理大臣に出ろと叫ぶ。小松は卷紙に書いた答辯の原稿らしいものを有つてゐたが、議員が騷ぐので演壇で立往生をしてゐた。其時三人の壯漢が議場に闖入したのである。衆議院の議場は原則として、議員以外のものは入れぬ事として神聖視せられてゐる。其所へ院外團と見へる壯漢が飛込んだのである。最初の人は目潰されたの(?)に押して、黒い詰襟の洋服を着た、肥つた男の顔であつた。それが身體を屈めるやうにして議場の通路を走つた。そして演壇に上つて萬歳々々と叫んでゐる。終には上着を脱いで、それを振り廻しながら踊るやうな格恰をしてゐた。第二、第三の壯漢も同じやうな事をやつた。其時は議員も演壇に押し寄せてゐる。一人の議員は演壇の上の水のフラスコを執つて大臣席の方へ投げ付けた。それが書記官長席の前に碎けた。今度は小松鐵相が手に有つてゐた卷紙を捩つて、それを演壇の下に投げた。外の議員がそれを拾つて、ズタ／＼に破つた。

その騷ぎの中に、壯漢は守衞に引張られて議場の外に出た。小松は演説をせずに自分の席に歸つた。議場が一寸鎭まると清浦首相が演壇に出た。其時まだ其所に突立つてゐた一議員が首相に向つて、何んで登壇するのだと怒鳴つた。清浦も

『施政方針の演説をするのだ』

と叫んだ。相手は

『何故鐵道の事件を答辯しないか』

と取り敢へしたら、それに連れて議場が又騒ぎ出した。質問中途にして高橋首相引込むと云ふ許で議場騒然、粕谷議長は休憩を宣した。休憩中に大臣達は大臣室に引取つて、茫然為す所を知らずと云ふ有様であつた。互に顔を見合せて、何うなる事かと心配するのみであつた。其時に誰れか、

『反対党は明日は一層猛烈な作戦があるだらうだ』

と話しに来た。首相は

『よし、それなら、此儘解散にする』

と云つた。議場休憩中の午後三時五十三分に内閣書記官長の小橋一太が解散の詔勅を粕谷議長の所へ持つて来た。議員は例に依つて[illegible]萬歳を高唱し、それから党本部に引揚げて行つた。政友会本部へは四時十分頃高橋首相、閣僚諸卿等と一緒に勝利に乗り付けた。そして大広間に入るなり、

『オイ、ビールの用意をせい。高橋総裁の無事な祝いと、議会解散の前祝いをやるんだ』

と叫んだ。此解散に於て[illegible]政府[illegible]は兵[illegible]たりたる、従つて[illegible]の間かれるのか[illegible]と辞職した。彼れに無理大臣になつたけれど、終に施政方針の演説なしなかつたのである。此点で日本には稀有な内閣の後に絶へたのである。

原内閣と高橋内閣の解散を比較して考へると、総選挙の情況に解散の日の意気込みに依つて已に決せられてゐるかの如く見へる、高橋内閣が如何なる政策振りを示すかは、此原稿を書く時には判つてゐない。従つて何とも予言する限りでない。だが併し、休憩中の解散は望ましくない。それは十分は政府が逃げた形になつて甚だしく国民の士気を沮喪せしめるからだ。

出版部だより

處女出版「西部戦線異状なし」の出版日から数へて第百夜の昨夜、深更の丸ビルで（[illegible]）[illegible]千夜一夜第二回配本の原稿整理が[illegible]千四百枚、綜合の原稿といふものは、シャーラザードの衣裳にも等しい彩色の重装に纏れあつて、部員二十名の血と汗に濡れてゐるといふ、[illegible]月九日には配本されて、[illegible]読者の御手許に届くはずであらう。堅く約束する保証する。申込は事業部のベルを鳴らされた[illegible]で、第一卷今日既に第四版目だ

「西部戦線異状なし」は百日目[illegible]版

[illegible]出版大[illegible]案内―を作れとの投書頻々。この月は又[illegible]氏の恋愛論集「文化的結婚とは」[illegible]判事の「友愛結婚」を出版する。友愛結婚、結婚離婚の[illegible]年に劃期的データを提供せるものと確信してゐる

我社出版物の評況は偏へに本読者の支持にあると思つてゐる。どんなに大きな期待をかけられても、背くまいと決意してゐる。作者諸君からの成長度を監視しつつ、頼りに御助言をいただき度い

友愛結婚

最新刊

リンゼイ著
原田實譯

戀愛と結婚の解禁時代來たる

戀愛觀としてのコロンタイズムはソヴエート・ロシヤの或る過渡段階を背景としてのみ理解され得る。いわゆる『一九三〇年』に懊惱する者の戀愛は、結婚は、全く別の見地から合理化され、桎梏となつた舊習から解禁されなければならぬ。この意味で、アメリカのリンゼイ判事の友愛結婚論が昨今歐米の全視聽を奪ひ去つたのは偶然でない。歐米と惱みを同じうする現代日本にとつて、本書は「西部戰線異狀なし」に劣らぬセンセイションを投ずるものだ。凡そ戀愛と結婚の受難者のよき結婚への暗示と指導を得んとする男女、父兄、教育者、否オール日本の男女は、老いたるも若きも、自分自身の爲めに又子弟子女のために必ず一讀さるべき書たるを信ず。敢て江湖の諸兄諸姉に薦む。

內容目次 中年の叛逆・舊い輩と新しい輩・結婚と道德・結婚生活と嫉妬・結婚の試煉・戀愛の精神的創造・友愛結婚の意義・產兒制限と友愛結婚・友愛結婚の法律化・一夫一婦制の精神・虛僞の貞操・或る愚迷の原因と救濟・牧師諸君と現代の道德・制度・法規には反對・雜草だらけの樂園

定價 壹圓八拾錢
送料內地拾八錢

四六判布表裝
上製六百頁

中央公論社發行

錄を保持する二大名著

賜台覽

西部戰線異狀なし

E・M・ルマルク著★秦豐吉譯

あらゆる國語の活字と印刷機を
休ませはしない——
それは我社が
主人公パウル・ボイメルの純情に
賭けて確信するところだ。
見よ！
日本版すでに
百三十版を突破す。

★

見よ！
全世界
三百萬部！
だが、更に——
凡そすべての國民が
その好むと好まざるとに拘らず
不斷の見えざる糸で「戰場」に
呼びかけられてある限り
この書「西部戰線異狀なし」は
國民の最後の一人が
讀みをはるまで

130版

四六判三百五十頁
定價一冊一・五〇
內地十二錢 鮮滿十八錢

社 發 行
振替口座
東京二四番

各人各様に興味ある時刻を[illegible]してゐる。この「一千一夜物語」は少年の文學であると共に、壯年の文學でもあり、老年の文學でもある。その變幻の如きは物語は面白く、全篇の組立が奇抜と私の胸を打つのである。水滸傳の西遊記、あるひは八犬傳の發端とは類を異にしてゐる。奇怪な形を帶びながら、その内面は人生の眞實である。[illegible]小説である。[illegible]眞實を描いたものは、永久に清新であると、私はこの古書を讀みながら感じた。

「千夜一夜の詩を讀め」

野口米次郎

亞刺比亞の詩は自由人の詩である。砂漠と高い空との間を彷徨する詩人達の詩である。それは心の詩である。自由な心の詩である。[illegible]も[illegible]く[illegible]千夜一夜の[illegible]秋[illegible]やうに、[illegible]良[illegible]無數の詩を含んでゐる[illegible]きてゐる。

[illegible]するに[illegible]千夜一[illegible]夜一夜は[illegible]……[illegible]

[illegible]ならば、[illegible]名[illegible]となるであらう。

不朽の價値

廣津和郎

私が七つか八つの頃、毎夜伯父から話して聞かされたのがアラビアン・ナイトの中の話だつた。それはまだ舶來物といふものがない時分で、伯父は大好いランプの光で古めいた本を讀みながら、それからそれへと[illegible]がた私達――私の兄やそれから附近の子供達や――に向つて、ぽつりぽつりと其の不思議な美しい物語を話してくれた。

だから私は日本の文壇のいろいろな物語よりも先づ最初にアラビアン・ナイトの中に出て來るエキゾチックな話を、胸に刻みつけられたと云つてもいい。

併し其の幼稚の懷しい私は、アラビアン・ナイトの譯本などの何であるとか、何處の譯がどうなどといふことを、別段調べて見た事はないが、唯バートンの英譯が完全であるといふ事[illegible]

[illegible]る如く、[illegible]は鷗外の南歐文學のシェークスピア者についても、人[illegible]さう言へると思ふ。これらの譯文が名譯である所以は、鷗外の[illegible]文章の個人性によつたのではなかつたか。

もともと人、個人的特殊性を持つテキストならば、それに相應した特殊の性を有する譯者との結合が不可解あの、又最も効果的であることは言ふまでもない。[illegible]しアラビアン・ナイトは、民族が長年月間に集大成したものは一大大衆文學であつて、その表現には殊に個人的特殊の跡が、ほとんど見られない。

また、これに關聯して、最も大衆に訴へる作品は無論[illegible]その特長の一つとしてゐる事實を指摘したいと思ひついたまゝに例をあげれば、[illegible]ナント[illegible]イル、ゾラ、日本でも田山花袋、菊池寛等、いつでもさうだ。

「千夜一夜」も原文は知らないが恐らく無名[illegible]であらねばならぬと思ふ。從つて[illegible]が現代語の一種の意譯法を採用し[illegible]時代と、必然的に[illegible]の[illegible]内容と方法とで完全な結合として人いに賞揚されてい[illegible]た[illegible]。

駝鳥漫談

上山草人



一、ハリウッドの風紀問題

よく聞く問である。ハリウッドを繞る俳優の生活は紊れてゐて鼻持ちのならぬ問題があると聞きますが、あなたの御感想は如何ですか、と。

然り、その點は、一應世間の非難に値する狀態であるかも知れない、然し、七八年の間ハリウッドに住んで彼等と交際するハリウッド人の立場として、一應の辯明の辭を、私は有つてゐる。一々名前は擧げぬが、亭主を四人も取り替へた女優や、女房とも情婦ともつかぬ女を再三とり替へてゐる名優や、之はと思ふ堅實味のある人が、世間の噂、否、非難を時々惹き起すのは、事實であるのだ。然し、茲で世間の各位から御高察を願ひたい事は、彼女及び彼等は、宛も身に一布だにつけずして奴隷臺の上にのぼつてゐるの如き狀態であるといふ事である。

彼女及び彼等の一擧手一投足は映畫の宣傳ヴァリユーとなつて世界に傳播する。アメリカ式の分業システムは實に整然と整理

されてゐて、撮影場の内外乃至は家庭にまでも、宣傳ヴァリューを見出さんがために見附役としての所謂宣傳係員が、會社の命令たると個人の附人たるとを問はず、一瞬間の弛みなくスターの連を取卷いてゐるが故に、隱し事といふことが絶對に出來ない狀態にあるのだ。その上、一般ファンの心理は、尋常茶飯事よりも、今賣り出しの新進女優とお茶を飲みに行つたとか、競馬を見に行つたとか、遊興の樂しみを俱にしたとかといふやうな色ッぽい事に大きな興味を有つてゐるので、其の種のポイントをピックアップされて吟人に宣傳されてゐるといふことも、一般世間の誤解を招く原因になつて居る。人間に情事の附帶しないものはない。一つの病院があれば醫師と看護婦との情事の噂があらうし、一つの會社があれば、婦人社員と上役との情事の噂のないものは、恐らく、一もなからう。男と女とが存する限り存在する所謂秘された情事が我がハリウッドにあつては宣傳ヴァリューとなつて擴大視さす、時には誇張されて世界に讀さるのだから堪らないのだ。その上に、映畫は各君御承知の如きスピードの速い近代藝術であるが故に、これに關係する者の神經もスピードが速い。從つて、これをとりまくこれら男女の情事もまたスピードが速いのは寔に止むを得ない。況んや映畫が喜んで映寫するのは、御承知の如く、九十パーセントは男女の情事ではないか、これを如實に演ずる俳優・女優は畫面に現はれる瞬間のみラヴ・バード（戀鳥）で居られやうか。即ち、彼女及び彼等の休息時にも家庭生活にもその氣分が附帶することを拒み得ない。世界の觀客諸君は、映畫面から、顏よき男女の情事を要求して居る。それは世間一般の生活の不滿を畫面に依つて補はふとする隱れたる心理であるのだ。彼女及び彼等はその要求を補塡せんがために美的生活をしなければならないのだ。言葉を換へれば、彼等の本職業が表に描かれた繪圖面であるとすれば、彼らの私的生活はそれの裏である。表から裏に滲み込んで行く事を責めるのは餘りに殘酷ではなからうか。

明治大正期の名女優松井須磨子が情人島村抱月氏の死を悼んで縊死したことは世の熟知するところであるが、彼女の死に關して樣々なる感想が思ひ述べらるる中で、彼女が藝術座のスターとして演じたる舞臺の上の役の性根が人間のローマンスを强調して表から裏に滲み込んで彼女の實生活をも浸り込めて了つたものであるといふ觀察を、同業者としての草人は抱いてゐる。また、先ほど中耳炎から腦膜炎に變じて急死した英雄兒澤田正二郎君の死に對しても同樣の觀察を抱かざるを得ない。即ち劍劇の主人公が常に英雄的で超人間的で倍加の敵をものともせず、夜盜の劍戟をも恐れず、況んや病魔などをも怖れずとす

るが如き、舞臺上の演劇的心構へが彼の日常生活にまで引き延ばされて、初期に於て數日の休養だにしたならば生命をおとすほどの大事には至らなかつたものだらうと想像されるのに、私が前段で述べたが如き實に同情すべき錯誤から、將來眞に劇壇の英雄見たるべき多くの春秋を殘してお芝居の英雄として斃れたことは遺憾至極である。

斯くの如く、ハリウッドの男女もまたそのメーン・ビズネスのために自分のプライヴエートを支配されるのも誠に止むを得ない次第である。切に觀客諸君の深き理解を望む所以であつてハリウッドの映畫人なるが故に特に不道德であるとか鼻持ちがならぬとかいふが如き謬見はやめて下さい。同業者の小生としては、寧ろ進んで寬大なる同情を請ふものである。況んや、映畫はまた一の思想宣傳の機關でもあるが故に、時には戀愛道德——結婚問題、男女の問題に關して可なり鋭いトップを切る場合もあり、それらを演ずる男女がさうした思想の影響を受けて行動するのを、田舍に居てワイ／＼非難することは大いに間違つてゐると私は信ずる。

斯く申す小生は、今回機會あつて我が懷しき日本に歸朝するや、友人諸君の手車に乘せられて大歡迎を受け、草人はい丶奴だといふお褒め言葉に預つてゐるやうであるが、映畫面では常に敵役で人を毒殺したり斬りかけたりしてゐるのだから、この表の藝が私の私生活を支配して、いまにバサリ人をバラさないものでもない。自ら戒飭すると共に友人諸君の御警戒を希望する。呵々。

二、日本人の眼

日本に歸つての最初の感想は、日本人の目玉の險い事である。—私の十一年間住(すま)つてゐたアメリカには「笑顏を保て(キープ・スマイル)」といふ標語があつて十一年前から今日まで常に絕間なく宣傳されつ丶ある。多分、小學校などでも、家庭でも、非常な力をもつてこの人間生活の最も大切な一表情を敎養訓練しつ丶あるものであらうと思はれる。從つて、私がアメリカ生活の間、人間の笑顏の御馳走を十一年間フンダンに喰べて來た事が、日本に歸るや否や、はつきりと印象せられた。

人間の生活は面白可笑しい事ばかりではないのだから、自然顰面(しかめ)や膨れッ面になり易いが、他人の感情のために己れの感情を殺して顏よき表情をなす事は實に大なる美事であると私は信ずる。アメリカは土地が廣く物資が豐富で人間の生活をさほど急迫におとしては居ないけれども、人間と人間との接觸に於て感情をイラだ丶せたり昂ぶらせたり、腹を立たせられたりする

場合のある事は、日本人と一向變る所がないのである。然るに彼等はこの「笑顔をたせ」といふ社會教育を受けてゐるが故に如何なる場合と雖も、常に微笑を以て之に對する努力を見る。途上、自動車の衝突があれば、その兩方ののりてが降りて來て先づ笑顔を以て相見える。誠に美しい狀景であつて日本人の想像だにし得ざる光景である。テキサスあたりの田舍から出て來た此の笑顔の訓練の少なき野人と雖も、久米正雄先生愛用するところの微苦笑位はその頰に泛べてゐる。

歸朝するに際し、私は郵船會社の某船に乘つたが、船員諸君の實に慇懃なる待遇を受けて、アメリカ人の手輕い待遇をうけた自分として尠からぬ恐縮を感じたが——即ち、船ボーイの如き下級船員に限らず事務長や船客係りなどの高級船員まで腰を屈め頭を垂れて船客に對する樣は誠に禮儀の訓練を見るのであるが、目玉ばかりは例外なのである。「いらつしやいまし」と云つて一揖する前を過ぎた後から名狀すべからざる脅迫を感じ目先三寸斬り込まれさうな豫感を感ずるのも實に日本人特有の眼の鋭さから來るのであるらしい。永い航海の間にそれらの人々と歡談を交へてゐれば皆好い人々であつて私に微塵も害心なども つて居ないらしいのである。日本に於いて途上を往來する老若を見るに皆斯くの如し。名刀を得ては街上に辻斬りをした我々の祖先はさう遠い祖先ではないのだし、またその辻斬りを怖れて街路を警戒して歩いた祖先も亦さう遠い祖先ではないのだから無理はないとも考へられるが、斯樣に常に生命がけで街路を歩み挨拶する日本人の眼光には多大の尊敬を拂ふけれど、今の時代となつて拔身にも等しい眼の光りをキラリ〳〵光らしてゐるのには、物騷千萬の感を抱かざるを得ない。私は、映畫俳優なるが故に何物よりも人間の眼に深甚の注意を拂ふものであるが、日本人ほどの深く、鋭く、ぬけ目なく構へた眼の光りを他の人種からは求められないのだ。その切れる眼は、先輩早川雪州を生み、また他の方面においても日本の誇りたるべき大事業をなした大人物を出してゐるのだから、この目玉の所有者たる日本人は眼の奥のしつかりさを表象して大いに誇つていゝのだが、願はくは拔身だけはやめたらどうか。即ち、日常生活に於ては微笑といふ鞘におさめて錆びないやうに、刃をコボさないやうにした方がいゝやうに思はれる。目を以て人を斬らなければならない日は一生涯に一二度で澤山だと筆者は考へる。眼を微笑の鞘に收め、金襴の袋に包み、之をまた絹の太紐でグル〳〵卷きに固く結へて、微笑を以て街路を歩くならば、外來人もまた一層の好感を日本人に對して抱くだらうと愚考する。ニューヨークは光の街、ハリウッドは日光の街、日本は眼光の街——斯うし

た感想を私は最初に抱いた。

三、安坐（あぐら）

私はあちらで映畫俳優として認められる以前は「東西時報」といふ月刊誌を發行して些さか日本人の文化及び生活を研究して居たものであるが、その雜誌のモットーは「米化以上」と唱へてゐた。米化とは廣い意味での所謂歐化で米國に於ける所謂アメリカニジエーションの意味であつて、これは當時アメリカが移民を消化せんがために掲げたる社會政策の一であり、在留民の有力者が之を譯して唱へた言葉であるが、私はそれに「以上」の文字を附して些さか異說を唱へたものである。アメリカが諸國の移民に對して米化を要求する事は誠に當然であるが、向ふに在留する我同胞がこの節に踊つて米化運動を興したことは充分考察の餘地があらうと信ずる。米國に在留する同胞が米國の法律を遵奉し、ある程度までその風俗習慣に順應することは小生も大贊成であるけれど、黑い髮の毛や瞳や、異つた祖先の血をもつた異種族が魂を擲げてアメリカ化す事の困難なことは云ふまでもないので、その間、さま〳〵なる障碍や不便を生じたのである。

「米化以上」の趣意は、アメリカの良き所を採り日本の良き所を殘し、尚、その上にも之を混合融和して兩國民の未だ有らざる特異の新生活を創造するのにあつて、極めて理想の高い運動であつた。その後、在留同胞もこの米化運動には多大の金を使つたが、結局、疲れて今はやめてゐる模樣であるが、そして、たまたま識者の意見を聽けば、私が唱へた米化以上には大贊成であつて、私が十年前唱へた「米化以上」の意見は現在の在留同胞間の有識者の提論となつたことを私は欣快としてゐる。俳優商賣となつてからも、この一種の生活革命に對する熱意は決して捨ててはゐないのだ。

日本へ十一年振りに歸つて色々な生活樣式を觀察するとき、私が米國沿岸に在つて主張した新生活と創造が到る所に散在するのを見ては坐ろに微笑を禁ぜざるを得ない。この種の命題に關しては、本誌の課題を頂戴しなくとも機會を得て十二分に披瀝したい熱情を持つてゐるから、他日漫談以外の形式で發表させて貰はう。

唯一つ最も深く痛感したことは、日本の疊を中心とする生活が日本の生活にいろ〳〵な混亂を來したものであるといふことだ。自分は永い間アメリカに居て、夢は毎夜日本に馳せ、疊の上にくつろぐ快よさを想見したもので、いま現在、その快よさに均霑して、飽くことなく日本の疊の趣味に溺れてゐるのであ

るが、快よさと主張とは別問題である。

人間は夜休息して晝働く、疊は人間を晝をも休息させる。而して疊を有するのは日本のみであるから、晝間休息するのは日本民族のみなのである。世界で一番金を有する米國人でさへ、夜寢て晝間は決して休息しない。土地が狹く人間が多く金が少ない日本人が、晝間も休息しなければならぬとは嚴かしいではないか。宿屋の女中が客に三ツ指をついて幾度も幾度も御辭儀して起ち、また、坐るそのエネルギーは實にムダな浪費ではなからうか。軍隊の體格問題は私の畑ではないから措くとして、日本の俳優又は女優が歐米のそれに比して最も劣るのは腰から下であつて、私の如きは日本人にあつては背の高い方と云はれながら彼等の中背の者と較べてなほ五六寸も低いのは、腰から下の不發達に原因して居るのだ。レヴューの時代が來て日本娘が白脛を觀客の前に誇るときとなつたのだが、生活に疊がある限り、その狀大根に類することを免れる事が出來ないらしい。穴居時代から鎌倉の安坐をかく時代までは日本人の腰から下が斯く短かくはなかつたのである。

私は非常に臆病だから疊廢止論が疊屋組合の排撃をうけてかの恐るべきタコ入りの肘鐵砲を喰ふことを怖れるが故に疊廢止論は主張しないが、疊の上に組み上げた小笠原流の禮儀作法、又は茶ノ湯、生花の小味な趣味を一應破壞して新生活の樹立に資したいと考へてゐる。直ちに全國民に椅子生活をして欲しいといふが如き新歸朝者流の生ナマ論を主張はしないが、現代のスピード生活とは、もう遠く入れ違つたところの膝を揃へてキチンと坐る禮儀作法は廢業したらどんなものかと考へてゐる。

坐ることをやめよ！　でなかつたならば、安坐に歸れ！　そして、若し、日本人が數百年かかつて練り上げた茶ノ湯、生花の靜謐な趣味は、それを明るい硝子窓の前、胸から上のテーブルの上に移して來たいと主張するものである。

疊ばかりの問題ではない。切迫つまつた現狀に於て日本人は自由に大膽に新生活を樹立して此の外來者をおどろかすところの混亂生活を整理する事が急務だと、アメリカ歸りの駝鳥がものを言ふ（終）（今回に限り口述筆記）

東京市の臺所

田中廣太郎

一

「濁水に都は半ば浸りつゝ上野淺草朝の鐘鳴る」といふ歌がある。本所區の隅田河畔に生れて明治四十三年頃の大洪水に遭つた身には此の痛ましい實感が折にふれまざまざと思ひ浮べられるけれど、荒川の放水路が出來てから以來は此の慘たる光景も全く昔の夢となつて仕舞つた。然るに此の大洪水に代へ之に幾百倍する慘禍を齎らした大震火災は忽ちにして東京の半ばを全く灰燼に歸して仕舞ひ、市民は只管其の復興復舊にと渾身の力を揮つたが、今や其の復興事業が略ぼ完成に近づくと之が事業費の總勘定を爲さなければならない時が來て、更に又痛ましくも增新税といふ濁水に不景氣の市民は浸されることになり而かも此の水は一寸引かない溜り水のやうな狀態にならうとしてゐるのである。「夫れ良禽は林を選び」と琵琶歌で聽かされてゐた筆者も曾ては內務省に在つて地方財政の事に與りながら東京市財政の行詰、其の將來の收拾困難なることを傍から同情して見てゐたのであるが、何時しか東京市の中の一員となつて東京市財政樹直しに參畫することになつて仕舞つたのである。浮世は輪廻の小車の如何に移り行くかを測り難いとは謂へ、思へば人のさだめばかり奇しきものはないのである。

遮莫東京市財政は一體現狀どうであるのか。先づ其の輪廓を大略記述すれば東京市昭和四年度の當初豫算額は約三億八百六十八萬圓である。之れは一般會計と十八の特別會計との豫算の總計額である。一般會計は八千四百五十一萬圓の歲出額であり、特別會計では電氣軌道事業經濟が四千七百四十四萬圓、電氣供給事業經濟が千三百八萬圓、乘合自動車事業經濟が五百九十二

萬圓、水道經濟が千九百三十萬圓である。此の外目星しい特別會計は公債償還金經濟、電氣事業減債金經濟、高速鐵道事業經濟、土地區劃整理清算金經濟、電氣事業工場勘定及貯藏物品特經濟、用品及工場經濟等である。凡そ人間が半身不隨にでもなるときには手足の方から先づ自由がきかなくなるものだが、東京市は電氣軌道事業經濟以外の特別會計は大體自給自足が出來、中には多少の餘裕のある經濟もあるのに、市の胴體たる一般會計は全く破産の狀態に在るのである。然し此の破産狀態は本年度に至つて突如として起つたものではない。大震災のあつた時からの財政經理の缺陷を今迄持越して來た處に復興復舊事業の總勘定をしなければならなくなつたからである。

二

今から振返つて見れば震災直後實は大增税をしなければ東京市財政の辻褄は合はなかつたのである。然るに其の事なしに今日に及むでゐるのは何が故であるか。之には當時の當局に色々な考があつたのであらうが、兎に角市民は公私共に復興の爲めに一意專心努力してゐるのであるから一應此の復興事業の完成を見るまでは何とか繰合せをつけてやつて行かう。その事業が濟むだ後になつて增税をする必要があるならば其の時に決めやうではないかといふやうな氣分で彌縫して來たのであらう。而かも此の間理事者の更迭は頻りに起つたのであるが、如何なる理事者でも新任匆々增税などといふたやうな不人氣な事をするものではない。何れも或は結局增税しなければならぬかも知れぬが、まあ能く研究して見てからやること、して先づ最初は增税なしの案で豫算を組まうといふ氣になる。然しそういふことではどうしても收支の均衡を得がたいこと當然であつたので、手品の種に土地賣拂代といふものを收入に計上したのである。成程東京市には賣り得べき多くの土地が在る。現在でも八千四百萬圓もの土地がある。然し此の不景氣に思ふ通り賣れるものではない。それを一年間に賣るものとして五百萬圓も土地賣拂代を計上した。而かも驚くべき事は或年度に某所の土地を賣拂ふものとして五百萬圓の土地賣拂代を收入に見積つて置き、それが賣れなかつたので收支の辻褄は事業繰越の計算や一時他の金を繰替へて之を合せて仕舞ひ、翌年度又同一場所の土地賣拂代五百萬圓を收入に計上し、それが其儘今日迄賣れずにゐるといふ事實がある。もしそれが假りに豫算通り五百萬圓に賣れたとしたとて同一の土地が兩年度に於て合計一千萬圓の收入となつて計上されてゐる譯なのであるから、倘ほ五百萬圓は收入缺陷となるのである。而かも此の厖大なる容の土地賣拂代は今日迄一

文の收入にもなつてゐないのである。斯樣にして震災後土地賣拂代は千二百五十萬圓も計上されてゐるのである。

又市稅收入を見るのに大正十二年度以降は大正十三、十四兩年度が豫算以上の實收のあつた外は每年缺損續きで、昭和元年度乃至昭和三年度は每年度平均二百三十六萬圓餘の缺損であるに係らず豫算額は依然として更改しない。それを更めれば增稅する外はないから、空の豫算を計上してゐたのである。

斯樣に穴の開いた財嚢を以て仕事をしてゐたのであるから、如何に節約を行ひ又事業費に多少の剩餘が出ても尙足りない足りないで終に其の收入缺陷が千三百萬圓に積つて仕舞つたのである。

三

而かも他面を見れば先にも述べたやうに復興事業の爲めに要した資金の大部分たる起債の償還期が到達したのである。

抑々東京市の復興復舊事業費の總額は三億五千八百三十二萬圓で之に對し一億四千四百五十五萬圓の國庫補助金があるが、他は市債、繰入金及一般收入を財源としなければならなかつた。復興事業の爲め東京市一般會計が背負つた公債總額は實に二億一千三十八萬餘圓之を昭和三十六年度迄每年五百八十七萬圓乃至千四百九十四萬圓宛償還して行かなければならぬ、而かも昭和三十三年度迄は每年度償還額が千百六十有餘萬圓を下らないといふ有樣で、昭和三十六年度迄に元利合計四億三千六百五十七萬圓の償還を行はなければならないのである。

加ふるに復興局で施行した國の復興事業費に對し市が政府から命ぜらるべき分擔金は一億二千萬圓で、市は之れが爲め每年四百二十三萬圓宛政府に納付すべき義務が正に負はされむとしてゐる。之は既定の事實なのである。

更に又國に於て施行した復興事業が完成すれば市が之れの引繼を受け市自らの執行した事業と合せて管理して行かなければならない順序になるのであるが、復興事業に依り道路の新設が九十七萬坪、橋梁の新設が二百八十三、大小公園の新築が五十四、下水道線路の延長が約百里、汚水處分場の新造が一つあり、又喞筒場が五、運河が五萬四千坪、中央市場が一、市立病院が五、塵芥處理工場が三、區役所が十二、託兒所並兒童健康相談所十四、公衆食堂十、質屋七、簡易宿泊所十、公衆浴場二、職業紹介所十二、授産場が七、新設せらるる等の事があるので、之れが爲め維持管理の經常費が五年度に於て前年度に比し百三十三萬圓も增加するの餘儀なき事情に在るのである。

四

そこで市はどうしても財政を樹直して此等の事項に適應した經理をするやうにして行かなければならないのである。それではどうすればいゝのか。

第一に市税の見積の過大なのは之を正當な程度に改訂しなければならない。

昭和四年度豫算は市税收入を二千五十八萬圓計上してあるが之を最高千八百五十萬圓位迄切落さなければならぬさうすると茲に二百萬圓豫算上で收入不足となるが之れは已むを得ない。

第二に今迄に累積した巨額の收入缺陷は之を整理しにでも埋めて行かなければならない。若し之れを一時起債して補塡し十年間に償還するとすれば年約百八十萬圓の財源を要することになるのである。

第三に震災關係の市債償還（昭和五年度償還額は千二百八十餘萬圓）と復興事業分擔金四百二十餘萬圓は何とか措置しなければならぬ。

第四に復興復舊事業の完成に伴ふ維持管理費の増加百三十餘萬圓は何とか財源を見出さなければならぬ。

これだけの事を考へても市が財政の樹直しの爲め先づ工面しなければならない金が毎年度二千二百二十萬圓許りとなるのである。之を唯に増税にのみ據ることにしたならば、それこそ市民は現在の二倍以上の負擔となつて、とても大變それこそ出來ない相談であり又爲すべきことではない。

そこで先づ第一に爲すべきことは市自身が身を詰めることである財政の整理緊縮として市の現理事者の採つた方針は市長以下局長までは二割乃至二割五分の減俸、それ以下の職員は減俸せずに俸與の一割乃至二割減を行ひ、而して人員の淘汰は積極的に行はないで缺員の出來たとき之を補充しない所謂自然淘汰に依る整理を行つて人件費の二分減を圖り、而して物件費に於ては平均二割を減することゝしたのである。

又既定繼續費の打切若は繰延を行つて市債費の減小を圖つたのである。斯樣にして結局二百八十九萬圓を節約から捻出し得ることになつたのである。

次に爲すべきことは政府に對して極力財政援助を請ふことである。東京市の復興公債に對しては政府は是迄利子の補給をしてくれてゐた。それが昭和三年度迄で大部分は打切となつてゐるのである。又國庫から借りた約七千三百五十二萬圓は昭和四年度から償還が開始するのである。又預金部から借りた約三千四百七十五萬圓も昭和五年度が償還開始期である。此等の利子

や元金に關し到底今日の財政狀態では完全なる支拂が困難であるから復興局の分擔金と共に何とか政府の好意に倚らねばならぬ。昭和五年度の復興關係市債償還額は約千二百八十二萬圓、之に分擔金四百二十三萬圓を加へると約一千七百萬圓となるのであるが、其の中公募したる外債の利子を政府で補給してくれるとすれば其の額約三百五十五萬圓、國庫借入金の元利償還を十年延期しくれるとすれば其の年額約四百七十六萬圓、復興分擔金の納付も同じく十年延期してくれるとすれば、其の額四百二十三萬圓、合計約千二百五十萬圓政府が積極消極的に市を援助してくれることゝなるので、此の市債及分擔金の關係で市が自分で支拂ふべき債務の額は約四百五十萬圓で足りることになるのである。

第三に此の如く政府の援助を受けるには東京市民自らも相當の負擔を分任しなくてはならない。今日のやうな不景氣の寒風颼々乎として吹き荒むとき負擔の增加は實に苦痛である、東京市は我が帝國の首都であるから國に於て特別に目を掛けてくれるべきであると思ふけれど、又政府の側から見れば此の東京市を援助するのは全國民の負擔に於てゞある。さすれば東京市民の負擔が全國民に比しても頗る重いといふやうな狀態になければ全國民から出し合つた金で救濟することは出來ないといふことになるのである。如何に東京市の富が震災に依つて破壞されたとて東京市の資力が全國平均以下に落ちてはゐない。然らば其の負擔が全國平均又はそれ以下では未だ輕いと云はざるを得ない。然るに各種の地方稅をとつて其の課率を見ても東京市民は未だ全國民よりも重い負擔をしてゐるとは謂ふことが出來ない狀況に在るのである。そこで東京市民が相當現在以上に負擔をしなければ政府は市が救援を要求する權利がないと考へるやうになる譯であるが、先に述べたやうに第一に市稅の見積更訂に依る不足額二百萬圓、第二に歲入缺陷補塡起債の償還年額百八十萬圓、第三に市債及分擔金の關係に於て市自らの負擔すべき年額四百五十萬圓、第四に復興事業の完成に伴ふ維持管理費の增約百三十萬圓、合計約九百六十萬圓の財源の必要が茲に當面焦眉の急に迫つてゐるのである。之に對し財政の整理をして先づ其の所要財源を捻出すること曩に述べたが如くであるけれど、それでは到底不足なので之れが爲めの財源を增新稅に求めるの已むない事情に在るのである。此に於て一面此の必要財源の額と他面市民の經濟力に臨み理事者は約六百三十萬圓の增新稅計畫案を持つてゐたのであるが、市會方面の意見もあつたので之れを容れて約五百二萬圓の增新稅をすることゝなつたのである。

五

然らば其の増新税の内容は如何と云ふに大體左の樣である。

(一)地租附加税に於て宅地の附加税は本税一圓に付三十七錢七厘其の他の土地の附加税は本税一圓に付八十八錢七厘の増率をすること(増税額七十九萬九千圓)。

(二)所得税附加税は本税一圓に付七錢の増率をすること(増税額百八十五萬二千圓)。

(三)家屋税附加税に於て賃貸價格三千圓を超ゆるものに對し賃貸價格千分ノ五以上の累進率を以て不均一課税を爲し、百二十四萬圓程度の増税を行ふこと。但し住宅専用でない家屋に付ては七千圓迄は増課しないのである。

(四)府税營業税附加税に於て其の税率本税一圓に付十錢を引下げること(減税額九萬圓)。

(五)雜種税附加税中不動産取得税に於て本税一圓に付七十一錢の増率を爲し(増税額六十八萬七千圓)荷積車税及自轉車税に於て六萬八千圓程度の減税をすること。

(六)特別消費税に於て其の課税標準を花代玉代の類に變更し娼妓を招致する場合に於ては其の百分ノ五、其の他の場合に於ては其の百分ノ十四とすること(増税額五十五萬五千圓)。

(七)新開免租年期地に對し一坪十三錢乃至四十錢の課率を以て段別割を賦課すること(税額三萬六千圓)。

(八)軌道に對し軌條一碼六十封度以下一メートルに付年六十錢(六十封度を超ゆるものは十封度迄を増す毎に一メートルに付十錢を増す)の課率を以て軌道税を賦課すること(税額四千六百圓)。

(九)商品切手發行に對し發行高の千分ノ十の課率を以て商品切手發行税を賦課すること(税額十六萬圓)。

(十)三號以上の金庫に對し年十二圓乃至三十圓の課率を以て金庫税を賦課すること。

六

以上に縷述したやうに政府の援助を期待すると同時に東京市自ら財政の整理緊縮を極度に實行し且増新税を適度迄行ふことゝして此度市の十年間の新財政計畫が樹立されたのである。然し此の財政計畫は東京市が唯生活して行けるだけの財政計畫である。謂はゞ裸の人形である。之れに如何なる衣服を纏はし如何に飾りを整へるかは次の問題として取殘されてゐるのである。此の財政計畫は唯單に基礎的財政計畫たるに過ぎないのである。

此の財政計畫が世に公にせらるゝや種々の批判が行はれたが、其の中に於て重なる非難は三樣あつた。

その第一は斯くまでに市民に重き負擔を爲さしめやうとする

ならば何が故に財政整理と共に行政整理を行はないか。人員を整理淘汰して後にこそ市民に負擔の增加を要求すべきでないかといふ非難である。

然し市役所にはそんな多數の冗員が毎日ぶら〱と遊むでゐる譯でもない。市民の負擔を大に輕減し得るまでに整理することの出來るものが居るのではないのである。よく人は職制を改正したらといふが一體どう職制を改正したらそんなに多數の人員を減じ得るのであらうか。我々は容易にそんな事を想到し得ないのである。而かも本年度に於て復興事業が終了するので數千人の人が自然職を失ふのである。その失職者の漲溢してゐる中へ更に多數の失業者を市役所から送出すといふ事はどんなものであらうか。勿論市役所は養育院ではないから、それ自身社會事業的に多數の不要の人を養ふべきではないけれど、然し全然不要の人用事のない人は居ないのである。唯比較的職務繁劇ならざる處に居る人があるといふ程度問題に過ぎない。それであるのに此の經濟界が萎微して何等求人してゐる方面もない街中に多數の人を放り出すといふことは考へものではなからうか。

生きむのみのかてのしろを得むと西東
　さすらふ人の子まちに滿ちけり
膝をかこむ稚兒らの顏を眺めつゝ
　身の行末を思ふ人もありなむ

曾て或年の某政府が行政整理を行ふた際筆者はかうした感想の歌を作つたことがある市長以下の減俸、吏員の賞與減も相互扶助的に行政整理に此の際代るものとして行はれたのである。東京市民の爲め眞によく働いて以て其の福利增進の爲め最も努力を吝まないものは實に下級吏員であると思はれるのである。

第二の非難は此の財政計畫に何等の新規事業が計畫されてゐない。斯くては東京市の如く日に月に發達の目醒しき都市の經營上に於て遺憾なきを得ないであらうかといふ點である。

之れは一應尤ものやうであるが、這般樹立されたのは基礎的財政計畫であること已述の如くである。固より財政計畫は何等法的效力のあるものではないから之れは單純なる歲入歲出の見積計算書に過ぎない。斯く斯くすれば若か若かの歲入が必要であるといふ計算を見易くした一覽表に過ぎないのである。新財政計畫はそれ自身の中に新規事業に關する收支を入れてないからとて、それは新規事業を將來に向つて排除してゐるのではない。唯今日のまゝ何をしないでも尙且五百萬圓の增税の餘儀なきことを明示してゐるに止まつてゐる。それ故に此の財政案は基礎的財政計畫案と前にも繰返へし云つたが、將來東京市が完全なる都市として必要なる施設をするには別にそれに對する計畫を立て、其の收入を一時起債とするなり、其の他土地賣拂代受益者負擔金等の税外收入に求めたり又は更に適當なる方面に

於て增税を行ふことにし得るのである。之れは東京市將來の經濟界の狀況にも照し適當に考へるべきことなのであつて、這回の財政計畫は決して新規事業の計畫を排除してゐるものではない。唯それ自身の中に新規事業を包藏して收支計算を立てなかつたといふに止まつてゐるのである。

非難の第三は這般の財政計畫中の新增税以外都市にふさはしき税種の倘存するのに何故それを採らなかつたかといふ點である。例へば滯在税、借地權税、土地增價税、庭園税の如きものを採るが適當なのに、それを棄したのは惡いといふのである。

筆者は他の機會に於て滯在税の不適當なることを述べた（雜誌「自治研究」第六卷第一號參照）、又借地權税も現行法制上許し難きものであり假りに百歩を讓つて違法でないとしても不適當なることを已に述べたことがある（雜誌「自治研究」第四卷第十一號參照）。土地增價税庭園税に至つては現行法制上全く市が自由に設定し得ないやうになつてゐる。それを世に都市行政の權威者とも謂はれてゐる人が恰も市に此等の税を設定し得る可能性があるのに之を看過してゐるかの如く難じてゐるのには筆者は一驚を喫することを禁じ得ないのである。苟くも此等のことを云爲する以上は法制位は少し研究してゐて然るべきものであるのに、そんな智識も養はないで大きな顔して批判を爲すが如きは其の大膽に驚かざるを得ないのである。然し世の中は斯かる似而非學者の說でも傾聽するから相當に無智識の者が多いことを知るのである。

厄介なのは半可通の空論家である。市財政の眞相を究めずに唯漫然感想で兎角の理屈を述べて見たがる。然し數字は冷靜である。增税しなければ東京市の財政は收支の均衡を得難いのである。誰人か自他共に嫌な增税等といふ事を好むでやるものがあらうか。それを斷行するの餘儀なき狀況に在ればこそ增新税案も出るのである。理事者は官人出身だからとて民間のことを知らないのではない。知つてゐながら尚且增税の提案を忍むで行はねばならなかつたのである。これだけの增税をしたからとて理事者は一文だつて自分の好む事業に振向けて使ふといふのではない。唯東京市が今日のまゝ生きて行くだけに已むなき增税なのである。

心ある東京市民は必ずや理事者の苦衷を諒とすることであらう。

東京市の臺所は實際苦しい。果して何時の日に麗しい春陽の春光が東京市の上に遍照するであらうかは一般經濟界の狀況如何が至大の關係を有してゐる譯であるが、當分其の訪れもなさゝうである。吾々は相倶に早く冬の去るのを衷心より臨護ふものである。

娼妓自廢九百八十七人

沖野岩三郎

一　二貫目の下駄

大正四年四月十日の午前であつた。銀座の救世軍本營に自動車を乘りつけた一人の婦人があつた。婦人係の伊藤君が會つてみると、新吉原京町壹町目の大まがき角海老樓の娼妓白縫といふのであつた。

白縫は樓主に虐待されて神經衰弱になつたから、今日限り廢業したいので、救世軍の助力を賴むといふので、伊藤君は早速それを引受けて、白縫の乘つて來た自動車を返し、電車に乘つて日本堤署に出頭すると、例により警察署から角海老の樓主に電話をかけると、間もなく樓主が見えて、警部補と伊藤君とに平等に頭を下げながら、

「旦那方、どうも此の花魁には閉口致します。此の花魁は元新橋の日野屋から小美代と名乘つて出てゐた藝者でしたが、私の所へ八百圓で下げて參りましたのですが、上方から母親といふのが來まして、貸せ〱とせがまれて、もう千三百圓からの貸しになつてゐるのでございます。そこへ蛎殼町の株屋で、此の花魁の馴染が惡い智慧をつけて、救世軍へやつて自由廢業をさせたんでございます。どうも斯んなに借り倒して置いて、さつさと自由廢業をせられては、手前共の商賣は忽ちに潰れてしまひます。誠に弱い商賣でございますから、ひたすら旦那樣方の御同情を願ひます」

と云つた。其の態度から物言ひが、さすがは吉原一流の樓主と思はれる程丁寧で、少しも聞きてに反感を催させなかつた。すると、白縫ははつきりした辭で、

「旦那、あなたは弱い商賣々々と仰しやるが、弱い商賣どころ

ですか、大まがきを看板にかけ、あれだけ盛んな商賣をしながら、私たちをあんなに虐待して、御自分ばかり懐を暖めてゐるんぢやありませんか。私はあんな虐待をされては堪りませんから、救世軍へお願ひして今日限り名簿削除をして戴くつもりです。」と云つた。夫れを聞いた樓主は、憤然として、

「何を云ふんです。かりそめにも廓内で一番大きな構へを張つてゐる角海老です。娼妓を虐待したなんて、そんな見ッともよく無い事を言はれては默つて居る譯には行かない。さ、どんな虐待をしたか、はつきり言つてごらん。旦那方にそれを聞いて戴いて、それが虐待であつたなら、唯今直ぐに廢業して貰ひます。さ、其の虐待の事實を言つてごらん！」と云ひながら、ぢりぢりと詰め寄つた。そこで伊藤君は口を出して、

「兎に角、どんな虐待を受けたのか、それを一通り申し立てゝみるがよからう。警察のお方にも御参考になりませうから。」と云つたので、白縫は警部に對つて、こんな事を言つた。

「虐待をしないどころか、私は大變な虐待を受けたのです。此間私が風邪氣で頭が重くて寢てゐる所へ、雁人が四五人私の室に來て、今は大正博覧會開會中で、東京へは全國の人たちが集つてゐるんだから、お客の吸收策に道中をするから出てくれないかと云ふんでせう。私は道中なんて全體どんな事だか知らないので面白さうなら少々の頭痛位は我慢して出ませうと申しました。するとまあ、大變ぢやありませんか、頭痛のする私の頭へ、入髪を滅茶苦茶に澤山して、何十本といふ櫛や笄を挿すんですもの、堪つたものぢやありません。その上に長い厚ぼつたい着物を着せられ、大きな帶を前で結び、此のウン氣に縕袍のやうなものを着せられ、高さ一尺重さ二貫目の三枚齒の下駄を履かせられ、仲之町の端から端まで八文字を踏ませられたのです。」

樓主は堪りかねて叫んだ。

「それは花魁の道中ではないか。それが虐待だとは途方もない！」

白縫は白い手を揮つて樓主を制するやうにして言つた。

「無論道中ですわ。けれども其の道中が私には大變な虐待でした。全體旦那は御自分の頭にあんな重いものを載せた事がございますか、旦那の履いてゐらつしやる其の桐の下駄は何匁ありますか。私は近頃リューマチスでスリッパを履いて段梯子を昇り降りするさへ苦しいのに、二貫目の下駄を履かされて、すつかり神經衰弱になつてしまひました。それに持病の脚氣が再發しさうです。これでも虐待で無いと仰しやるのですか。」

白縫の申立が餘りに意外だつたので、樓主も警部も啞然とし

て居る所へ、白縫は更に言葉をつぎ足した。
『ね、警部さん、私は思ひましたの、唯今は昭憲皇太后陛下の御諒闇中で、まだ、どなたも喪章をおつけになつてらつしやるのに、仲之町だけが治外法權ぢやありますまい。行けませんわね、今頃花魁の道中なんて、あんな騷ぎをするなんか……』
御諒闇中と治外法權の二句に、警部は厳粛な微笑を洩しながら、伊藤君に對つて『どうすれば善いかね』と相談するやうに言つた。
元來ユーマァに富んだ伊藤君は、强いて笑を嚙み殺しながら、
『二貫目もある三本齒の下駄を履かせられては、誰でも吃驚して神經衰弱を起しませう。リユーマチスも脚氣も萬更嘘ではありますまいから、兎に角名簿削除の御取計ひを願ひます。』と云つた。
形勢不穩と見て取つた樓主は、俄に聲を和げて言つた。
『白縫さん、それは餘りひどい。あなたは平生我がまゝ一杯にして、其の上に自由廢業とは、あんまり我々の弱點につけ込み過ぎます。しかし御規則には勝てませんから、廢業なさるも宜しいでせう。しかし前借金はどうして下さる？』
『それは、私が働いてお返し致します。』
『リユーマチスで神經衰弱で脚氣のあなたが、働いて千三百圓のお金を返せる道理はありません。そこで物は相談だが……』
樓主が聲を落して、警部と伊藤との前でした相談といふのは、一先づ白縫の馴染客である蠣殼町の吉木某といふ相場師の所に外泊休業といふ事にして、千三百圓の前借金を、其の吉木某から月賦償還にして貰ふといふ話であつた。
そこで樓主は吉木某に電話をかけ、いよ／＼白縫を預ける事に話が決り、娼妓の月賦落籍、一名娼妓の損料貸といふ事で、白縫は蠣殼町に外泊休業の身となつたが、偖、その後吉木からは一圓の月賦償還もしない。請求すると『是非預つてくれといふから預つてやつたのだ。室料、賄料、一ヶ月五十圓づゝ直ぐもつて來てくれ』との逆捻に、樓主も呆れ果て、たうとう見放すことにしたので、同年八月二十九日に目出度く自由廢業して郷里廣島に歸つた。
白縫が治外法權といふ言葉を遣つたり、諒闇中を擔ぎ出したりしたのは、それは彼女が郷里の高等女學校を卒業してゐたからであつた。
『やつぱり教育のお蔭だ。高等女學校を卒業してゐなかつたら、二貫目の下駄で神經衰弱と脚氣は起らないよ。』と伊藤君は笑つた。

二 泣いた婆アさん

「お待たせいたしました。」

ドアを開けて入つて來た伊藤君は、不思議さうに二人の顏を見た。一人は年頃二十三四歳で派出なお召の袷に紫縮緬の羽織を着てゐる。職業柄一見して夫れが娼妓とやり手婆である事がわかつた。娼妓に不思議は無いが、やりて婆が自由廢業に來ようとは、どうしても考へられない。

怪訝な顏で二人が暫く睨み合つてゐると、若い婦人は決心の色を面に浮べて、

「先生、私は新吉原揚屋町で勤めて居ます力代と申す娼妓でございますが、私がこんな稼業を始めまして僅か一年半の間に、銀行へ出てゐらつしやるお方が一人と、會社員のお方が二人と、私の爲にお金を遣ひ込をしまして、二人共今は監獄でお氣の毒な目に會つてゐます。そんな事を考へますと、私はもう一日も早くこんな恐ろしい稼業をやめたいと思ひます。どうぞ宜しくお願ひ致します。」と言つた。

力代が、さう言つてゐるうちに、側に坐つてゐた婆アさんの眼の色が段々變つて來た。そして、いよいよ力代が自由廢業をするのだと知るや否や、飛び上つて力代に武者振りつきながら叫んだ。

「力代さん、あなたは人を馬鹿にしてペテンにかけるにも程がある。今日はお天氣もよし、前々の約束だから淺草へ散財に伴はれて行つて上げようと云ふので、親方から一日のお暇をいただいて、活動を見せて貰つたり、御馳走になつたのは有難いが、歸りがけに、まだ時間があるから築地の伯父さんに一寸會つて歸る、時間は長く取らせぬ、新富座の直ぐ裏だと言ふので一緒に跟いて來ると、こんな異人館につれこんで、何だか變だ變だと思つて、先生が出ていらつしやる前に、念を押して問ふと、私の伯父さんは此所に勤めて居るんだと……まあ何といふ嘘吐きなんです。今やつと私はこゝが救世軍といふ自由廢業の本場だとわかりました。あゝ口惜しい、口惜しい。」

やりて婆アさんが、おいおい聲を立てゝ泣き出したので、伊藤君は宥めて言つた。

「おばあさん、事情をきけば、あなたの怒るのも無理はない。しかし、おばあさんの職業も感心した職業ではないから、力代さんとあなたと、二人共今の稼業をおやめになつたらどうです。」

すると、今度は婆アさん、伊藤君の腕に獅噛みついた。

「そんな事は出來ません。私の亭主はやつぱり揚屋町で妓夫を

してゐるんです。今、力代さんに自由廢業をされたなら、第一私は亭主から、年甲斐もない奴だと云つて叱られます。親方にも申譯がありません。ね、先生、お願ひですから、兎に角一度私と一緒に力代さんを歸して下さい。で無いと私は今日から首になります。歸して下さるなら、私の腹一つで、救世軍へ出直しても、私は見て見ぬ風をします。今日の所は是非二人ともお歸し下さい。』

やり手婆アさんは、伊藤君の軍服の袖に涙をぽと〱落しながら口說き立てた。これはペテンのかけ合ひだぞと思つた伊藤君は、ぢつと力代の顏を見てゐると、力代は突と立ち上つて、婆アさんを椅子に引据ゑた。そして言つた。

『お默りなさいな。おまいさんたちは、毎晩々々お客さんに、おべんちやらを言つて、ポチを買ふ氣樂な商買でせう。それにいゝ氣になつて私たちの事を主人に告口ばかりして居るぢやないですか。私たちの苦しさと云つたら、まるで地獄の苦みですよ。私は去年の六月に六百五十圓の前借金で、お職を張り通し、どんな月でも二百圓から三百圓の揚代を稼いでゐるのに、先月計算帳を見ると借金は百圓も殖えてゐるぢやないですか。廓の掟だと云つて印形も帳面も主人の方へ取あげて置いて、勝手氣まゝに計算されてゐる事がわかつたので、私はそれを取返して此の通り持つてゐるんですよ。あんた所へ、もう二度と歸るもんですか。歸りたいなら、おまいさん獨りでさつさとお歸り、私はこれから警察へ行つて、ちやあんと廢業しますから。』

力代はさう言つて、懷から帳面を取出して伊藤君の前に置いた。やりて婆アさんは、泣く〱電話を貸せといふ。そして樓主へ、今力代さんにだまされて救世軍へ來てゐるから直ぐ助けに來てくれと電話をかけた。力代よりも先づ自分を助けてほしいのである。

間も無く樓主は番頭と書記とを伴れて、自動車で駈けつけた。そこで伊藤君は力代の計算帳を前に、寸分洩さぬ會計檢査を始めた。九年間も測量器械の職工長をしてゐた數學的な頭腦で、ぎツち押に問ひ詰められて、樓主も番頭も書記も、ぐうの音も出なくなつた。そこで今度は伊藤君から貸座敷業廢業の說教。

『御高說を承り、大いに反省する所がありました。唯今直ちに稼業をやめるといふわけにはまゐりませんが、此上はせめて娼妓の取扱ひに注意します。』

樓主は、こんな挨拶をした。そこで伊藤君は力代と樓主とを伴れて日本堤署へ出頭して名簿削除の申請をすると、樓主は屑く『廢業の件は本人の意志通り、御規則の上で異存はありません。』と申し立てた。樓主の態度が如何にも男らしいので、伊藤

君は困つて其の心情を疑つて『こいつ油斷はならない』と思つてゐると、果して直ちに力代の父親と加判者の伯父とは、財産差押への處分を受けた。父は代々木の離せんべい屋であつた。家具や衣類根こそぎ差押へて評價六十圓であつた。ところが其の話をきいた米屋と家主が、競賣の場所へ配當加入の異議申立をしてくれ、米屋から四十圓、家主から二十圓の先取權で、無事六十圓を取返してくれたので、父親も伯父も泣きの涙で大喜び、救世軍様々と拜んで、萬事の畫策に對して伊藤君を神様だと云つた。神様と言はれ序に、伊藤君が出雲の神様になつて、靴下製造人と力代とを結婚させ、力代は靴下の刺繡を内職にして女工の三人も使つて、早稻田の常盤の森の片ほとりで、理想的な家庭をもつたといふ話。

三　最後の五圓札

『唯今新宿から一番電車で自由廢業をしたいと云つて驅け込んで來た婦人がありますから、直ぐお出で下さい。』

電話がかゝつたので、伊藤君は大急ぎで本營に行つてみると、年頃二十歳ばかりの、教育のありさうな婦人が待つてゐて、伊藤君の顏を見るなり聲をあげて泣き出した。

泣く〳〵語る所によると、此の婦人は十歳で父に死に別れ、十九歳の時母が大病して、ぱつたり家計に困つてゐる所へ、見知りの桂庵が來て新宿遊廓によい奉公口があるから世話してやらうといふので、うまく欺されて行つてみると、そこは聞くも忌はしき女郎屋。どうしても嫌だと、泣いて泣いて泣き通したが、入り替り立ち替り說きすゝめられ、そこを出てしまへば、母が忽ち困つてしまふといふので、一週間目に親方の言ふ通り泣く〳〵稼業に出る事にした。ところが何と考へても堪へ切れない稼業なので、いつその事死んでしまはうと覺悟を決め、其の機會を狙つて居るうちに、ふと救世軍の事を思ひ出し、今死んで母に悲みをかけるより兎に角救世軍へ驅け込まうと決心して、裏口の錠前をねぢ切つて逃げ出して來たといふのである。

こんな若い女が、あの嚴重な貸座敷の裏戸を無理にこぢ開けたといふのは、些と合點が行かないとは思つたが、伊藤君は、そんな事は問はないで、早速新宿署へ同行すると、例によつて電話で樓主を呼び出す事になつた。程なく樓主は一人のやりて婆ァさんを伴れて警察へ出頭した。やりて婆ァさんは、女を見るといきなり、

『旦那方、此の女は泥棒ですよ！』と叫んだ。

『泥棒ですつて、さ、私が、いつ、どこで何を盜んだ。言つてごらん！』

若いながら女も氣色ばんで詰問した。

「盗人たけ〳〵しいとは、お前さんのことです。おまいさんは昨晩、お客から五圓紙幣を受取つて、それを親方に渡しもしないで、裏木戸を開けて持逃げをしたんぢやありませんか。さ、其の五圓紙幣をこゝへお出し！」

やり手婆アさんは詰めよつた。

「何を言ひなさる。貸座敷へ遊びに來る程のお客さんが、女郎衆に金を取られて默つて歸るものですか。若しも私に金を盗まれた客があるなら、こゝへ證人に呼んで貰ひませう。さ、今呼んで下さい。」

女も負けてゐない。そこで、押問答の末、係りの警部補から貸座敷へ電話をかけて、昨夜登樓した男の住所姓名を調べてみると、此男は大抵一ヶ月四五回づゝ登樓してゐるが、來るたびに名前も住所も異つてゐる。昨夜は大阪府豊能町、源中藤橘と書いてあるといふ始末。結局女の意志が通つて、病氣虚弱の理由で名簿削除となつて婦人ホームに引取られる事になつた。

五日目に其の女が伊藤君の所へ、お禮に來たので、將來の事をいろ〳〵說き諭してゐると、女はぽうツと顔を紅らめ、

「實は私の郷里のもので、今、芝の今里町に住んでゐる知合の者がありますから、其人にお世話になりたいと思ひますが、先生から一つ手紙をお出し下さいませんでせうか。」と言つた。そこで伊藤君から手紙を出すと、翌日の午後二十五六歳の色の蒼白い青年が訪ねて來た。

青年の顔を見ると同時に、伊藤君はこれが五圓紙幣を渡したといふ其の遊び客に相違無いと直覺したので、だしぬけに、

「あの晩、裏口の木戸を、どうして開けましたか。」と問うた。

すると青年は頭を掻きながら。

「恥かしい話ですが、すつかり白狀致します。私は芝區の□□會社に勤めてゐるものですが、今から三ヶ月程前、會社の連中と一緒に高尾山へ遊びに行つて、其の歸り途に、友だちに引ぱられて新宿の遊廓へまゐりました。私はこんな所へ初めて足ぶみを致したのですが、其晩私の初めて會つた女、それは郷里の隣村の者でした。互ひに話し合つてみると、幼い頃小學校の聯合運動會で出會つた事のある間柄でした。それが病みつきで、其後私は凡そ三十回程遊びに行きました。私は元來酒も煙草も嫌ひです。で、多少の貯金もしてゐましたが、すつかり夫れも遣つてしまひ、衣類も持物も大抵質草になつてしまひました。それでも私は思ひ切ることが出來なかつたのです。そこへあの女が私と一緒に死んでくれと言ひ出したので、私も死ぬ氣になつて、四苦八苦して五圓の金を造りまして、それを持つて

登樓したのです。ところが、死ぬ相談から死んだ後の世の話になり、地獄だの極樂だのと言つて泣いてゐるうちに、私の會社から半町ばかりの所に救世軍の小隊のある事を思ひ出しました。それから自由廢業の事に氣づいて、どうせ死ぬのなら、今死ぬも十日向ふで死ぬも同じ事だから、一かバチかやつて見ようといふので、私は其の五圓札を女に持たせて、裏木戸の錠前を捻ぢ切つて逃してやりました。もう大丈夫だと思ふ頃、私は、さつき五圓渡したきり、あの女は來ない。どうしたんだ。」と云ひ出したんです。まさか外へ逃げ出さうとは思はなかつたと見え家内をあちこち調べてゐました。多分私を疑つて押入にでも隱れてゐると思つたのでせう。私は翌朝ぶん／＼憤りながら飛び出して來たのですが、どうか、無事に廢業してくれゝばよいがと案じてゐたのです。」と云つた。

そこで伊藤君は婦人ホームから其の女を呼んで來て、愈々將來を諭して、芝の隱れ家へ行かせる事にした。

二人は其の後、圓滿な家庭を作り、宇田川町で小さい店を出して、良人は足袋屋をやつてゐたが、翌年は玉のやうな男の子を産んでわざ／＼本營まで抱いて見せに來たさうである。二人は死を覺悟した時の五圓札を、記念の爲に神棚に祭つてあるといふ話。

四　學校の表と臼の筒

新宿二丁目の或貸座敷から、二人の連名で至急面會に來てくれといふ男文字の手紙が來た。しかも其の表書には救世軍婦人救濟係伊藤富士雄殿と書いてあつた。

變だなとは思つたが、義を見てなさゞるは勇無きなりと腹をきめて、行つてみると、名前の娼妓は二人とも一軒の貸座敷にゐた。來意を告げると貸座敷では俄に大騷ぎ、向ふ三軒兩隣の妓夫や番頭たちを非常招集して、伊藤君を奧の一室に閉ぢ籠めてしまつた。やりて婆アさんが來て煙草を勸める、喫まないといふ。酒をもつて來る、絕對禁酒だといふ。たうとう一時間ばかり待たされたが、面會も許さず樓主も出て來ないので、伊藤君は帳場へ來て、大聲で呶鳴つた。

「娼妓取締規則第十二條には、何人と雖も娼妓の通信面接文書の閱讀、物件の所持購買其の他の自由を妨害する事を得ず、これに反したるものは百圓以下の罰金若しくは三ヶ月以下の懲役に處すとあるのは御承知でせう。」

すると樓主が飛び出して來て、低頭平身、

「二人は病んでゐましたので失禮いたしました。唯今御面會いたさせますから・・」と云つて、伊藤君を元の座敷へ押戻し

お茶よ菓子よと云つてゐるうちに、また一時間を過してしまつた。そこへ妓夫が現はれて、

『旦那樣、唯今二人がまゐりました。こちらへお通し申しませうか。』と云つたので、樓主は、直ぐつれて來るやうにと指圖した。

伊藤君は、手紙の主だとばかり思つて、襖の開くのを持つてゐると、そこへ現れたのは五十五六と七十ばかりの年をとつた老人二人。いきなり伊藤君の前に兩手をついて、自分たちは二人の娼妓の連帶保證人で、今自由廢業をされては財産差押への憂目を見るから、どうか後二日間だけ名簿削除の申請を猶豫してくれよとの願ひ。伊藤君は二人の言葉が信じられないので、是非本人たちをこゝへ呼んでくれよといふ。たうとう樓主も我を折つて、二人を伊藤君の前に伴れて來たが、會つて話してみると、二人共、學校の表も通つたことの無い無學文盲で、登樓者に頼んで手紙は書いて貰つたものゝ、係廢業屆に警察へ出頭するといふ事が、恐ろしくて堪らず、伊藤君も手のつけやうが無く、其のまゝにして歸つて來た。すると其の翌朝樓主は伊藤君の自宅へ訪ねて來て、

『昨日はわざ〳〵お出で下さつて、有りがたうございました。二人の娼妓は、取敢へず休業させて親許へ歸しました。自由廢業など云ひ出されるのも、元は私共の不德から起つた事です。何分お手柔かにお願ひ致します。』と云つて紙包を伊藤君の前に差出した。

『これは何です?』と云ひながら、包を開けてみると中に拾圓紙幣が十枚ばかりある。そこで伊藤君は言つた。

『お金を下さるお考へなら、これでは少し不足ですネ。』

樓主は眼を圓くして、默つて伊藤君の顔を見詰めてゐた。

『すみませんが、五千圓ばかり頂戴出來ませんでせうか。それだけ下されば、今日中にあなたのお家に居る娼妓を一人殘らず落籍してしまひますが……』

伊藤君の意外な言葉に、樓主は金包を懐に入れて頭を掻きながら出て行つた。

それから三日目であつた。二人の中の一人が本營へ逃げ込んで來た。其の女の話を聞くと、二人は別々に妓夫の家に預けられて嚴重な監視を附けられた。二日目の晩に隣の室で三四人の男の話聲がする。

『どうせ、きづッ玉だから……』

『だつて、大きいきづッ玉だよ。』

『ちやア、君の手であれを下げて來るか。』

『大丈夫、僕の手で下げて來て振つて見せる!』

「いくらだ？」

「四本半にしてくれ。横濱へ振るから。」

次の室で聞いてゐた女は、其の用語を推察した。學校の表も通つた事の無い女ではあつたが、じやの道はへびで、それが自分を伴れて行つて横濱へ住替へさせ、四百五十圓取るつもりだといふ事を知つた。「きづッ玉」とは樓主の手にをへない娼妓の事で、其のきづッ玉を伴れて來る事を「下ける」といひ、住替へさせる事を「振る」といふのである。きづッ玉を下けて來て振れる腕のある紹介人なら、もう一人前の本職である。

そこで其の女は、これは大變だと思つて、夜の三時頃、便所に行つて其の窓から脱け出して、救世軍本營へ驅け込んだのであつた。

早速伊藤君が同道して新宿署に出頭すると、係りの警部補は書類を調べて、

「君は絶對安靜を要する大病だといふ届を出してゐるぢやないか」と云つた。女は驚いて、「私は此の通りぴん〳〵してゐます」との返事。能く〳〵調べてみると、鈴木といふ醫師から、急性子宮卵巣炎にて痙攣を起す故、一週間絶對安靜を要す。」といふ診斷書が出てゐる。伊藤君は、

一警察届に出られないやうに、絶對安靜の必要があつたのでせう。」と云つて笑つた。そんな事で即日名簿削除は無事に濟んだが、さて殘りの一人はどうなつたか、心配でならないので、翌日訪問してみると、もう廢業して故郷へ歸つたといふので、疑ひながら警察署へ行つて調べてみると、實際其の朝ちやあんと廢業届を出して立派に名簿を削除されてゐた。こいつ學校の表も通つた事の無い癖に、えらい事をしてくれたと感心して本營に歸つて、多分訪ねて來るだらうと心待ちに待つたが、十日經つても廿日經つても何の音沙汰も無かつた。

音沙汰の無い筈である。彼女の家に預けられてゐた其の女が二日目の夕方食事をしてゐる所へ、樓主が入つて來て、

「おまいさんも長らく辛抱して、よく勤めてくれたものだ。こんな水商賣には戀々したのも無理はない。おまいさんのやうな善人には、こんな稼業は不向きだ。私もつく〴〵同情する。それ程までイヤなものを、無理に引き止めようとはしない。今まで一つ釜の飯を食つて來た以上、親子も同樣ではないか。五百や六百の端た金の爲に私も住替だなんて、そんな吝嗇な事は云はない。どうせ女といふものは、相當な所へ縁付かねばならないものだが、物は相談だ、私の友人で、今朝鮮の銀行で重役をしてゐる者がある。半年前に妻君に死なれて今困つてゐる所だ。子供も何も無いが、何樣眞忿があつても、女中では承事が思

ふやうに行かない。おまいさんだつたら、容貌なり態度なり堂堂たる重役の奥様だ。是非一つうんと云つてやつてくれまいか。』といふのである。無學で無智な女で無くとも、一寸はまりさうな陷穽である。

寫眞を見せられる。樓主の妻君が來て勸める。たうとう承諾する。直ぐ三越へ行き白木屋へ行く相談。名簿削除が濟むと、果して三越へ伴れて行つてくれ、白木屋へもつれて行つてくれた。買物もどし／＼惜氣無くしてくれて、立派なお嫁さんの候補者が出來上つた。そこへ現れたのが朝鮮銀行の重役。早速略式の結婚式、あちらへ行つて本式の披露といふ事で二等寢臺車で新婚旅行兼歸任といふ、棚牡丹式の幸福な話。

汽車に船に二人は朝鮮に着いた。何といふ町か知らないが、繁華な町の大きな旅館へ入つた。朝鮮銀行は此の町にあるのかと訊いてみると、

『朝鮮銀行は京城にあるんだが、近いうちに此所に支店が出來るので、當分其の建築を監督しなければならない。まあ半月は此所に居るだらう。』と云ふ。銀行重役の奥様になつたので、すつかり有頂天になつてゐると、或朝大變な事が出來した。それは其の重役が、奥様の衣類から懷中物、金目のものをすつかり持つて何所かへ姿を消したといふ騷ぎ。泣く／＼旅館の女將に事情を打明けて相談したが、女將は頭から信じない。

『奥樣、そんな事はございますまい。多分夫れはお芝居でございませう。銀行の支店長になつて此の町へ近々入らつしやるといふお方が、そんな事をなさらう筈はありません。』

女將が取合つてくれないので、取りつく島が無い。と云つて一圓の金もない。何所へ行かうにも白い着物と長い煙管ばかりの知らぬ他鄕の空。段々宿賃も嵩んで行く。

或日旅館の主人が、宿泊料雜費二百五十圓餘の請求書をもつて來て、手前共、細元でございますので……と詰め寄つた。そこへ助けの神が現はれた。

『では、御戯言では無かつたのでございますのね。まあお氣の毒な。では何とかしてお力になりませう。しかしネ手前共では現金で、どうといふわけにも參りませんが、奥さまだけの御容貌でしたら、こゝで二年も御辛抱なされば千や二千のお金は直ぐに……』

それは旅館の女將であつた。さうして彼女は朝鮮の去る町で再び娼妓に賣られてしまつた。ところが其所で一年勤めた上福岡縣へ、きづッ玉として振られ、たうとう其所で重い病氣になつてしまつた。

其のことが本鄕の親元へ知れたので、早速母親が迎へに行く

と、樓主は二人の旅費に見舞金まで添へてくれ、親切にも停車場まで見送つてくれた。

歸つた彼女は、隣家の妻君に頼んで、伊藤君に面會したいといふ手紙を書いて貰つた。其の妻君は東北人で彼女の言葉を其のまゝに書いたらしく、「此のころはうすのつゝものめませぬ」云々とあつた。ユーモラスな伊藤君は、「奈良の大佛さまでも臼の搗は呑めまい」と洒落を言ひながら、尋ねて行つてみると、全く見覺えの無いまでに痩せ細つてゐた。そこで早速救世軍病院の醫師を招いて診斷して貰ふと、肺尖加答兒だが、今のうちに養生すれば全快するだらうとの事。で、伊藤君は診斷書を認めて貰つて彼女に渡し、直ぐ福岡警察署へ廢業屆を出すやうに勸めて置いて歸つたが、母親がそれに賛成しないで、たうとう其の屆書を出さずにしまつた。母親の言ひ條は、旅費から見舞金まで戴いた上、停車場まで見送つてくれる程の親切な親方に義理が立たぬといふのである。如何に無學で、うすのつゝも飲めない程に貧乏してゐても、もう智慧のつく頃である。彼女は一切を伊藤君に一任して廢業屆を福岡の警察署へ出すことにした。

間も無く彼女の病は癒えた。堅氣になつて働くやうにとの、伊藤君の忠告に從つて、兎に角婦人ホームへ來る事になつてゐたが、或日突然一人の男が彼女の家を訪れた。丁度母親が留守であつたので、彼女が應接すると、

「福岡の△△樓主からの訴へで、其方を拘引に來たのだ。直ぐ僕と同行し給へ！」と云つて懐から捕繩を取出して見せた。致方が無いので其の男に跟いて行くと、警察署へは行かず、不思議にも呉服橋外の福屋旅館に彼女を連れ込んだ。旅館の二階には樓主と三業取締の某とが鳥鍋で酒を飲んでゐた。そこで二人から手を代へ品を易へて九州行を說かれたが、もう彼女の心は石のやうに堅かつた。たうとう其所を逃げ出して電車へ乘らうとすると、刑事だと言つた男は、色を變へて追つかけて來た。そして五十錢銀貨を彼女の袂に入れたが、それを投げ出して置いて、救世軍本營へ逃げ込んで來た。

五、久米仙の宙返り

飯塚遊廓の中居樓でお職を張つてゐた花魁錦絲は或日計算帳を見せて貰ふと、五百圓の前借で稼ぎ初めて三年の月日を經過したが、借金は八百圓に殖えてゐる。これではならぬと自由廢業を決心したはよいが、無學の悲しさに、どうする事も出來ない。何でもいゝから救世軍へ驅け込めば助けてくれるといふ一念で、大膽にも或晩裏の板塀を乘り越えた。頑丈な忍び返しだ

と思つて、それを踏ん張ると、不意にぽきりと折れて、あべこべの久米仙が狹い小路へ宙返りをした。けれども氣丈な錦絲は起き返りさま五六間走つたと思ふと、俄に近所が騷がしくなつて『何だ〳〵、變な音がしたぞ！』と叫ぶ聲が聞えた。小路を表通りまで出ると電燈が明るいので乾度捕へられると思つて、まご〳〵してゐるうちに、塀際に大きな榎の木のあるのを見た。これ屈强と幼い時田舍の栗拾ひに練習した木登りの術で、する〳〵と其の上に攀ぢ登つて、靑葉の繁みに身を隱してゐると、果して裏門が開いて、番頭や妓夫が右往左往。

錦絲は度胸を据ゑて下を見てゐると、車夫の提灯が三つ四つ懷中電燈が二つ三つ、頻りに家の周圍を探してゐる。

『巢鴨驛へ行け。』『板橋驛へ走れ。』といふ聲と共にやがて提灯も懷中電燈も見えなくなつたが、まだ見張りが居るらしい。彼れ之れするうちに樓主の聲が聞えた。

『外へ出る筈は無い。多分物置の中に隱れてゐるんだらう。』

『さうだ〳〵、去年も出雲さんが物置に隱れてゐた。』

それは妓夫の聲であつた。そして程なく、妓夫が裸蠟燭を燈して來た。榎の上から男の顏が蒼白く見える。

『止せ〳〵、火の要心が惡い。それよりも出られないやうに外から釘付にして置け。』

主人の命令で、やがて、こん〳〵と鐵槌の音が聞えはじめた。

錦絲はほッと安心したが、まだ油斷がならないので、たうとう夜明前まで、蚊に襲はれながら榎の木の上で我慢して、いよいよ大丈夫と見込をつけ、小路へ降りようとしたが、氣付いて見ると、これは又滅法高い所まで登りつめたもの。一所懸命に攀ぢ登つた時は何とも思はなかつたが、偖降りる段になると、足がぶる〳〵顫へ、眼が舞ひさう。それでも用心しい〳〵降りて一の枝まで來た時、氣が弛んだ爲か二間ばかりの高さを矢のやうに辷り落ちてしまつた。

氣づいて見ると確に半時間以上氣絕してゐたらしい。これではならぬと元氣を出して、跛ひき〳〵夢中に五六町走つて來ると、向ふから辻車が來たので、それに乘つて木賃まで伴れて行つて貰うたのである。

伊藤君は取敢ず救世軍病院へ錦絲を送り込んで置き、「申請者自ら出頭する能はざる事由ありと認むる時は此限りにあらず」といふ取締規則を楯に陳情書と廢業屆を板橋署へ持參して、苦も無く名簿削除が出來たまでは善かつたが、四五日經つと板橋署の刑事巡査が來て、錦絲に直ぐ出頭するやうにと命令した。そこで伊藤君も一緒について行くと、もう貸座敷の女將も來てゐた。

召喚した理由は、錦絲が女將の指環を盗んで逃げたといふのである。そこで係り警部の前で二人が對質といふ事になつた。一問一答の結果、此の指環は女將のものでは無く、遊びに來た客が落して行つたらしいのを、錦絲が掃除中拾つて女將に渡したものであるといふ事がわかつた。

「ね、おかみさん、さうぢやありませんか。あの時私はまだ十八歳未滿で、店へ出られなかつたんでせう。だから、おかみさんが、あの指環を私に下すつて……」

錦絲がそこまで言ふと、急に女將は青くなつてしまつた。つまり錦絲が年足らずで娼妓の許可の下らない前から、いろ〳〵機嫌を取つて規則を犯してゐた事がバレさうになつたので、女將もそれきり默つてしまつたのである。

六、さすがの名譽職も

新吉原大川樓の娼妓が二人伴れで、救世軍本營に自由廢業の助力を請ひに來た。いろ〳〵事情を聽取つた伊藤君は直ぐ大川樓へ電話をかけた。

「今、あなたの所に勤めてゐる、花魁の太郎さんと花子さんが、こちらへ來て自由廢業をしたいと云つてゐますが、あなたは三業組合の取締でもあるし、殊に市會議員といふ名譽職も勤めてゐらつしやるお方ですから、默つて自由廢業をされたとあつては、お顔が立たないでせうから、兎に角こちらへお出でになつて、穩に名簿削除をしては如何でせう。」

それは伊藤君が大川樓主の顏を立てゝやつた義俠心からであつた。

程なく樓主は一人の妓夫を伴れて自動車を乘り付けた。そこで伊藤君を中心に五人が車座になつて相談會を開いたが、太郎の語氣がとても猛烈である。

「此間私たちは日本堤署へ呼び出されて、帳簿を調べられました。其時警部さんが、少しも借金が減つてゐないのはどうした事だと仰しやるので、私は、借金が減るか殖ゑるか、一度だつて帳簿を見せて貰つたことが無いので知りませんと申上げました。それを妓夫の若ちやんが親方に饒舌つた爲に、私は其の晩うんと親方からお小言を頂戴しました。けれども私は正直に申上げたのです。嘘を吐いて叱られるのは道理ですが、何所の世界に正直を言つて叱られる法がありますか。」

太郎は盛んに反抗するが、花子は始終默り込んで、自由廢業を企てたのを後悔するやうに俯向いてゐる。

「伊藤さん、私は一寸花子さんに、別室でお話を致したいですが、」

樓主の大川は起ち上りながら言つた。そこで伊藤君は次の室へ二人を案内すると、半時間程經つと、樓主はぶり〳〵しながら出て來て、

『花子も太い奴です、萬事伊藤さんにお任せして歸ります！』

と云ふ。

『どうしたんですか。』と云ふ伊藤君の言葉を耳にも入れず、表へ飛び出すので、伊藤君は太郎と花子に見送るやうに命ずると、自動車に乘つた樓主の方へ、二人は聲をかけた。

『左樣なら、どうも長々お世話樣になりました。』

二人はやつぱり眼に一杯涙を浮べてゐた。

『市會議員先生、どうしたといふんです？』と伊藤君は花子に訊いた。

『親方は私を別室に伴れて行つて、百圓やるから兎に角救世軍の棟の外へ出てくれ、太郎のやうな魂の腐つた奴は、もう持ちも提げもならないが、お前さんはまだ息が通つてゐるから、自由廢業をするなら、此の棟の外でしてくれ、今晩にでも親元へ返してやる、好きな客があれば、そこへでも送りつけてやる。おれが此の通り手を合せて賴む。三業組合の取締であり、市會議員である、名譽あるおれの所から救世軍へ逃げ込まれたとあつては、おれの顏が立たない。是非おれの自動車で一先づ歸つてくれ……と親方は斯う仰しやるんです。私が默つてゐると十圓紙幣を十枚私の眼の前で數へて、それを無理に私の懷に捻ぢ込むんです。けれども私、考へましたわ、私は親方に七百圓から借金になつてゐる形です。今、百圓呉れると云つても、さて家へ歸るといざ決算となるでせう。自由廢業は勝手だが七百圓を今返せ、そこに持つてゐる百圓を出せといはれるにきまつてゐます。私のやうな馬鹿でも、こゝから吉原まで百圓のお金を懷へ入れて行く事を、そんなに有難いとも思ひませんわ。一寸の虫にも五分の魂はありますから……』

伊藤君は成程とうなづいた。

こんな話をきいた私は、ペンをノートブックに挾みながら、

『東京の貸座敷業者は、三重縣の方へ視察に行く必要があるよ。』と云つた。

『何を視察に行くんだい？』と伊藤君は問うた。そこで私は其頃三重縣の或町で執行しつゝあつた娼妓表彰會の概況を語つた。

娼妓一同が廣い會議室の中央に席を占めると、一段高い所に取締役を始め町内の名譽職やら有志連が、ずらりと居並ぶ。起立、敬禮の號令下に組合長が嚴かに戊申詔書即ち勤儉詔書

を奉讀する。次いで警察署長から一場の訓示があり、僧侶のお說教があつて後に、報德會支部長が二宮尊德翁の勤儉力行談を講演する。最後に警察署長から、過ぐる一ヶ年間驅黴院へ入院しなかつた者に甲乙丙三種の賞品を與へる。それは能く衞生規則を守つた事の賞與なのである。」

「娼妓に對して戊申詔書と二宮尊德翁は振つてゐるね。」と伊藤君は喉をかすつて笑んだ。

「娼妓に勤儉思想を吹き込む。それが青年たちに傳道をする。青年たちが登樓しなくなる。隨つて驅黴院へ行く必要もなくなる……といふわけかね。」と私は言つた。

「では最初から一切登樓させなかつたら、娼妓全體に賞與が與へられるではないか。」

伊藤君はさう云つて笑つた。

「兎に角世の中には不思議な事がある。」

「さうだ、僕が今まで取扱つた自由廢業者七百人中にも、隨分奇拔なものがあつたよ。此の次には救世軍對警察官の珍談を少々話すから……」

私が其の約束をして別れたのは、大正六年の暮であつた。

（未完）

鐵道異聞

黨略線の解剖

伊藤金次郎

一　政黨の鐵道利用と　その手段方法

鐵道といへば疑獄、疑獄といへば既成政黨——この三題噺しをつくりあげ、柳家三五樓の近代落語のタネ本にでもなりさうであつたのは、昭和四年におけるわが政界裏面史の有力な所産であつた。

だが、かうした有力な所産は、昭和四年だけで、西の海へ、さらりと飛んでくれゝば、いゝだらうけれど、恐らく、一九三〇年の今年まで、賑やかに、持ち越すことだらう。小人、玉を抱いて罪ありといふが、今では、黨人、鐵道を抱いて罪あり、女、買ふして、牛を賣りぞこね、黨人、私慾に馳せて、鐵道地獄に落つ。——今や、それほど、鐵道は、黨人を煉獄の底に叩きこまんとするほど、盛んなる魅力を持つてをるのだ、恐るべし、戰くべし。

だが、黨人の鐵道あさりは、私設鐵道認可にともなふ選擧費や一般黨費の徴發のためのみではなく、かれ等の常套手段であるところの、我田引鐵が、今も昔も、露骨にくりかへされるのだから、國鐵と私設鐵道とを問はず、鐵道と黨人との宿命は、醫者に聽診器、猫に鰹節、坊主に法衣といつたほど、切つても切れぬ密接な因果關係かも知れない。

さて、鐵道利用の黨利黨益の纂奪方法を、大別すると、凡そ四ツに區分するを得るだらう。

即ち(一)が、例の採算のとれぬ私設鐵道を時の政府の權力で買收すること、こんどの越後鐵道みたいな實例で、苦境を救濟して貰つた當該私設鐵道經營者から、黨費の寄附ぐらい、朝めし前のことだ。ツマリ、損の行くものを政府が買收して、國家の金庫は、そろばんが採れぬけれど、黨人及び黨のふところは、あたゝかくなるといふ奴だ。

次ぎは(二)だが、これは、その反對に、鐵道材料その他國家の財産を、或る特殊な民間實業家乃至は會社に、法外な格安で拂下げることで、手近な實例としては、伊勢鐵道に對し、政友會の政府が、關西本線の揖斐川と木曾川の大鐵橋を、べらぼうな廉價で、拂ひ下げようとしたこと、これだ。たとへば右兩鐵橋を新たに架設するとせば、どうしたつて六百萬圓の巨費を要するであらうにも拘はらず、政府の奇怪な活躍は、これをわづかに、六十九萬一千圓の安値で拂下の許可が得たといふことは、誰だつて、底に底ありとにらまざるを得ない。現に、伊勢鐵道の取締役大川平三郎は、昭和四年六月、同社の總會に出て、二大鐵橋安價拂下げに言及し

「わづか、たゞ、わづかにです。かゝる右兩鐵橋を六十九萬一千圓といふ少額で拂下げを受けるに至つたのは、全く人生稀れに見る、

こぼれ幸ひといつてよい」——と、喜んでをるほどだ。だが、こんなこぼれ幸ひは、忽ち、天の攝理にかなはなかつたものと見え、時の鐵相小川平吉は、御らんのとほりとなり、伊勢鐵道社長の棚橋一衛も、伊勢鐵の名古屋乘入れが、このところ、夢の泡沫と消え去つた。

次ぎは(三)の手段に移るが、黨人者流の常套語をかりていへば、これは、「黨略線」といふもので、その文字どほり、黨略のために、左程、必要でない地點に巨大な國費を投じて鐵道を敷設し、その近郷近在の太郎兵衞や平作を、釣つて入黨せしめるものだ。こんな實例は、全國到るところ珍らしくなく、後段で述べる岩手縣の黒澤尻と秋田縣の横手間の鐵道及びこれに並行する盛岡と大曲間の鐵道なぞ、その甚だしいものだ。

お次ぎは(四)であるが、これは、(三)よりも、も少し、惡どいやり方で、卽ち、(三)の場合にあつては、たとへ、黨略にもせよ、實際に鐵道を敷設するんだから、がまんが出來るけれど、この方になると、「思はせぶり政略で、鐵道を引いてやるぞといふ素ぶりを見せつけ、——たとへば、少額なチップでは、カフエーの女給が、單に、しなを賣るのみで、容易に最後の胸襟を披かぬ、やうな、おれつたい態度を見せるにとゞまるのだ。失禮だがこの場合の女給の役廻りは、申すまでもなく政黨者流のことだ。實例をいへば、これも、いくらもあるが、信州輕井澤のふもと、岩村田から延長して、山梨縣韮崎に出づる鐵道豫定線なんぞ、その有力なる一つであらう。

で、この類例のものは、チップ——卽ち黨人への報酬乃至は、入黨者のあたま數において、未だ以て、女給——卽ち、黨人の滿足を買ふまでに立ち到らないので豫定線が、豫定線のまゝで、牛歩遲々、容易に着工の實を示さないものと見ていゝのである。

二　鐘と撞木の間が鳴る

その他、かぞへ立てゝくると、黨人の鐵道を以て地方民を釣る手段方法の巧妙さに到つては、天晴の奇術ではないが、底に底あり、裏に裏あり、全く、門外漢をして一驚を喫せしむるに足る。

現に、私の眼前にするなにがし大官が、打ち明け話しをこゝろみていふのに、

「地方民を釣るといつちや、聞きがわるいが、いろ〳〵な地方問題で、中央の當該官廳に陳情のため出頭する地方有力家も必ずしも誠意があるものとのみ限らないんだぜ。たとへば、わが黨だぞ、決裁が早きに失するといつて、よく同僚から注意せられるが、イエスか、ノーか、決裁を早くして小言を聞くのは、をかしい話しだが、實は、あまり早くその可否が決定してしまふと、滯京の餘地がないので、陳情委員は、花のお江戸の見物と、知人めぐりも出來ず、歸郷せねばならぬので、あんまり喜ばないのだ。そこで、政黨人が地方有志家の喜びを買はうとすれば、折角町村費の支辨で、ふところをいためずに出京に及んだものである以上、用件を、わざと、手ッとり早く片づけてやらず、若干の時日を引ッ張つておくのがかへつて功德となるんだぜと、その道の苦勞人から聞かされて、實は、わが黨も、それもそうかなと、はじめてさとッたような次第さ」——と。

むろん、陳情出京の全部の町村長乃至は、地方有力家が、それだとはいはぬけれど、[illegible]

いてみれば　ありさうな話で、さうした陳情委員の横着さは申すまでもなく、又た、一面、地方有力家の機嫌氣褄をとることに手段方法を選ばぬ既成黨人に至つては、地方自治遂行が少々、澁滯したにしたところで、かれら出京委員が、他人のふところで、東京見物の出來ることを喜んでくれゝば、それで、わが事成れり矣かも知れない。

禪家では、隻手聲ありといふが、地方有力家と、これを地方問題で、あやつるところの既成黨人とは、隻手、未だ聲を發せず、鐘が鳴るか撞木が鳴るか、鐘と撞木のアイが鳴るほど、微妙な双互關係を持つものと見える。所詮、既成政黨のどろ田に、足を踏み入れたものでなくては、容易に首肯の出來ない謎々である。

ところで、その一大官の打ち開け話しによると、鐵道で地方民を釣る場合、少くとも、これに關聯して、三人の利益が生まれてくるといふ。――えびで鯛を釣るのは、むかしから、狡猾ものゝ、仕事ときまつてをるが、鐵道で地方民を釣ると、三人までうまいことをするものが生れるとは、時勢のテンポは、意外な方面にまで、變化を見せてゐるものだと感心し、その理由を叩いてみると、まづ、鐵道を欲求してをる地方民に、黨人が、そつと手を廻して。

「貴公等の熱心一つで、鐵道敷設を骨折つてやらう」――と、いひ出すと、地方民は、その「熱心」のほどを占めすため、入黨の手つゞきもやるだらうし、更に、關係町村の一ト字から、たいてい千圓乃至千五百圓見當、もしくは、個人で、百圓乃至五十圓といつたところの、かれらの所謂「淨財」といふ奴を、選擧でも來た場合、その當該代議士候補者に、選擧費として、寄附するんだから、第一に、鐵道のえさで、その黨人が利福を受け、それから、小川平吉における春日俊文、山梨半造における居間立斷ではないが、その當該黨人及び當該大たてものと、地方有力家との間に介在して、運動資金授受の役目をつとめるところのブローカーが、當然、なにがしかの造り步き賃を、ふところにせしめてしまふ。そこで、鐵道のえさで、第二に利得に浴するもの、かうした大小ブローカーなのである。

さて、第三の利福者は？　といふと、これは、前に述べたとほり、いよ／＼となつて、出來ない相談の陳情のため、鹿つめらしい口實をもうけて、しば／＼東京に出頭し、ホンの三十分程、當該官廳で、わが黨内閣のお歷々に會見したゞけ、他の時間は、決裁が遲れるからとの理由で、東京見物や、嫁入りする娘の買物を集めたりしてをるんだから、公費支辨の私用遂成、即ち、鐵道のえさは、かうした方面にまで、うまく立ちまはるものを生むとのことだ。

出來るか出來ないかわからぬ鐵道のえさで、右のとほり、少なくとも、三種階級の人物を、それ／＼利得にありつかしめるのだから、鐵道といふ奴は、全く、地方民にとり、摩訶不思議な魅力の持ちぬしではないか。

だが、無い袖は振れない。袖があるから、三種階級をそれ／＼喜ばしめ得るのだ。しからば、その有る袖を振るものは、誰れだ？　申すまでもなく善良にして愚直な地方のもの持ちだ。かれらだ、既成政黨の膨大となるに逆比例して、田圃痩せたりと、だん／＼悲鳴をあげてくるのも尤も千萬なことだ。

遊女に、ボケると三代つづいた家倉庫も空

しといふが、阿成政策者流の手練手管ものにかゝつては、父祖伝来の田地田畑など、忽ち、荒廃して、その家屋敷は、世にいふところの「井戸塀」となつてしまふ。井戸塀とは、たんだ？。家屋敷、悉く、差押へられてしまつて残るのは、哀れ、井戸と塀だけといふ、諧謔にも亦た適切な、しやれなのだ。

三、党略鉄道の元祖、星亨

それほど、魅力の多い鉄道のことだ。日本近代政界の裏面史に有力な立ち役者が相つとめるのも、尤も千萬なところだ。何しろ、犬養木堂あたりの話しによると、そもそも鉄道問題を政争の渦中にとり入れて、党勢拡張の用具とした先覚者(？)は、恐らく星亨であらうといふのだから、星は、矢張り、政争の名人であり、党勢拡張の達人であつたといつていゝ。即ち、木堂がその青年の後、秋田に雌伏してゐた当時、政争といふものなぞ、単にしたくともなかつたものだらうが、一とたび、星亨が、鉄道政策を口實にして、中央の党争を地方に波及し、遠く秋田にまでその波紋を増長したゝめ、遂ひに、奥深い出羽の国にも政友会が生れ、犬養の流れを汲む国民党と政争を演ずることとなつたといふ。木堂は今後も知らず、あれほど、政界に多年暗躍する老政客でありながら、政権の座に座したことは、僅か一回、第一次大隈内閣の文相、第二回が、第二次山本内閣の逓相、第三回が、加藤高明を首班とする護憲内閣の逓相であつたといふにとゞまり、野に咆哮する年月が、あまりに長かつた関係上、利権問題で、地方民を釣つた例を聞かない。即ち、機会にめぐまれなかつたものである。そこへ行くと、政友会は、伊藤公のむかしから、桂と妥合した西園寺時代、第一次山本内閣時代、原時代——と等々、政権の掌握した年月が、比較的長いので、政権を活用「わるくいへば利用」して、地方民に喰ひ入つたものだ。

そこに、鉄道問題あり、河川改修あり、港湾の修築あり、学校の昇格及び移管あり、道路の築造ありといつた工合で、その堅持した積極政策は、地方民を動かすのに、まことに、便宜なものだつた。

しかも、その間、木堂をして、今に回想せしむる運動の如き補強策も出でたし、その衣鉢をつぐといはれた原敬も亦盛んに地方問題を利用したのだから、勢ひ党勢拡張に巧妙な政党といへば、国民党は、むろんのこと、憲政会よりも、まづ、政友会が、その随一におかれたものだつた。

現に秋田県の例でいへば、星の時代から活躍し、次ぎの原敬時代に至つて、最も信任を得た故人神田嘉兵衛の如きが出て、鉄道問題を、うんと利用したではなかつたか。人も知るとほり、奥羽本線の大曲は、東南遥かに南部に伸びて、前にも一寸書いておいたところの、東北本線の盛岡に出ようとする横断線路ではあるが、これを一個の都邑として見た場合、別だんとり立てゝいふほどの部落ではない。

にも拘はらず、こゝに急行列車が停車することは、出羽の国の首都、秋田市が近いだけに、奇妙に思はれたものだが、これこそ、神田の居住する土地柄でもあり、かれは、自身一個の便益を企図するためと、おのれの中央における勢力を地方民に誇示するため、あへて、こゝに急行列車を停車せしめるに至つたものである。しかも、神田が、これを決行す

るまでの經路には、今は故人、元の鐵道次官石丸重美が、その青年の頃、秋田縣廳の土木課にゐたのを、その當時から手なづけ、黨勢擴張に鐵道利用を深くも思念した榊田は、その後、機會を得て石丸を鐵道省に送り、外部から助力して、遂ひに、これをその要位におらしめ、更に、こぶんの井出繁三郎（當時鐵道省高級官吏）等を使役し、自身は、あれほど、政界大あたまでありながら、一度も官祿を喰まぬにも拘はらず、鐵道を利用して、政友會秋田大御所の位を獲得したものだつた。

星に發し、原が繼承したところの、鐵道の魅力を以て地方民吸引策は、少なくとも、秋田縣において、榊田が完成したものといつていゝ。

この外、政爭の激しい秋田縣では、一本の道路でも、單なる停車場の位置でも、これを仔細に點檢すると、それ〴〵政黨色が深くも浸潤してゐることを知るであらう。

死んだ秋田縣の篤農、最上直吉は、古い國民黨員で、死ぬまで犬養木堂に歸依してゐたゝめ、政治的に惠まれず、常に、肩で風を切る榊田一味の政友會を、面憎しと思つてゐたが、かれは辯に曰く。

「俺は、東京から故郷の角間川へ歸る時、奥羽本線を大曲まで急行で行き、そこから、一ッ西に戻つて、飯詰の驛から村へ這入るのが早いんだが、榊田の大曲まで、一ッやりすごされるのが癪で、大抵は、三ッ手前の橫手で下車し、そこから鈍行列車で飯詰まで行つたものさ」――と、いま〴〵しさうに鬱憤をはらしたりしたもんだつた。

四　小驛の誕生するからくり

さて、讀者諸君は、山陰線が、石見の益田から分岐して、山陽線と握手せんとする所山口線を旅行する時、先年、大毎と東日の日本風景投票で、百景に入選して以來、とみにその名を知られるに至つた長門峽を、こゝで下車するんですよと、乘合の土地ッ兒から、をしへられるであらう。

その長門峽行きの下車驛には、今、「長門峽」といふ小停車場が建設せられてをるけれど、あれは、大正九年五月、新設せられた鐵道省に、元田肇が、はじめて就任（原內閣だつた）して以來、新設せられた驛であつて、それまでは、長門耶馬溪の名の下に、高島[illegible]子の父、高島北海畫伯などが、郷土愛の一念から、しきりに、世に宣傳してゐたものだつたが、未だ以て、大に世上に謳はれるまでには至らなかつたものだ。

それを、元田鐵相、就任最初の鐵道視察に出た際、フト、この附近に大名行列をこゝろみると、土地の有志の面々、長門耶馬溪の景勝地であることを力說し、もしこゝに、驛を新設して貰へば、隱れた風土風色を天下に紹介し、併せて、維新の元勳を銅像に祀る山口を訪ふ外人客を、こゝまで、吸引し得られるんですが、どうでせう、元田閣下のお力で、なんとか一ッ御骨折りが……と、日向ぼッこの蠅みたいに、兩手をもんで、拜み奉つたものだつた。

すると、黨のために地方民の意を迎へ、かつは、自己の威勢のほどを誇示したい正直もの、元田老、忽ち。

「本省へ歸つて、なんとか協議してみよう。なに、大して六づかしい話しでもあるまい」

――といふ捌け方。

で、間もなく出來上つたのが、「長門峽」――

これ、まことに、市川氏の潔ぎよさであり、一眼体裁により、同方面の投票を政府に吸引したりとせば、市川氏の一顧、決して、政友会の党勢拡張に、功無しとは言へないだら[illegible]

当時、外務[illegible]で、[illegible]つた。同党大臣の手に[illegible]、不満だつた大臣官邸は、長門峡と同様の[illegible]身でもあり、かつは、郷里の先輩として、郷土関係に骨を折つてもいただけ、その頃、たまたま故郷にあり、同僚の市川氏、[illegible]る故に、一[illegible]に一駅な[illegible]して行くといふ[illegible]ぶりだ。

「入閣、[illegible]大臣になられ[illegible]た」――と[illegible]、[illegible]たといふ物語りも、当時、政界の一問題だつた。

長門峡駅は、かうして、音もなくこの世に出現したが、同[illegible]でもあり。[illegible]た。市氏、先方、[illegible]の所在地点から見て、その距離において、中間に一ツの駅が必要としたのだから、必ずも、党略駅といはれぬかも知れぬが、そこへ行くと、[illegible]の名[illegible]られた一小駅に、なんとしても、[illegible]ぐろしさである。

即ち、それは、名古屋駅を出て、[illegible]や、[illegible]不木の生れ[illegible]れ[illegible]へ行く中間、一イル弱といへに、わづかに[illegible]イル半[illegible]いづいふのか、[illegible]たいに二八田」といふ小駅の出現したこと、これだ。

[illegible]でも知るとほり、関西線は、関西鉄道時代[illegible]の名の下に、[illegible]であつた頃には、名古屋駅から、直ちに、[illegible]で、そんな[illegible]のところに、小駅[illegible]、つくらうといふ[illegible]を聞かなかつたものだ。それが、一とた[illegible]となるや、忽ちこの[illegible]した。[illegible]だつて、[illegible]の振[illegible]た、さうしたに、問題[illegible]されてならないに、今また、これだ。気の早いものが、木曾川や長良川に[illegible]であつたら、バスで[illegible]走らうと。いらいらするのも無理ではない。

では、どうして、こんなものが出来たであらうか? 諸君、この附近は、尾張西南部にくらいする[illegible]といふところで、こゝには、尾張[illegible]の[illegible]、[illegible]の古寺、名物[illegible][illegible]中、自己の勢力扶植と、[illegible]にうき身をやつしてゐる。したがつて、かれ、[illegible]民の御機嫌とりから、中央に[illegible]して、かゝる小駅[illegible]とは、[illegible]た次第である

[illegible]といへ[illegible]代[illegible]高間の生れたところだ。しかも、岡崎の生れた[illegible]村と目と鼻の間に[illegible]は、常に岡崎を仇敵視したもので、岡崎が、中央政界家として、地方のことに疎遠になり易い虚に乗じ、あらゆる地方問題を利用して、おのれの勢力維持に努力したもので、殊に、[illegible]したいのは、少なくとも、郷里においては、その政治家としての格式を岡崎と同一たら[illegible]に認められたいといふ[illegible]か。岡崎が、たまたま、名古屋[illegible]に現はれると、立会演説を申し込んだりしたものだ。

だが、人を人臭しとも思はぬ岡崎のことだ。一言市との立会演説を一笑に附して、返事もやらずさッさと中央に引つかへすと、一言輪さん、こんどは、[illegible]演説会を開き、

「諸君! 岡崎君は、卑怯にもわがはいの申し込んだ立会演説を引受け得なかつたのである。これ、果して政[illegible]なりや。思ふに、

わが黨に對し、いふべき言葉を持たないからであらう」――と、勝手にきめてしまふんだから愛嬌ものだ。

五　昔は敬遠、今は引く手あまた

しかし、考へて見れば、時代は變つたもので、鐵道や驛舍が、今では引く手あまたの流行兒だが、かつては、そんな便利なものが出來上つたんでは、土地の繁榮が、大きいところへ行つてしまふ。夜毎日毎の旅籠の客も、だん／＼無くなつてしまふ――と、まるで、「鐵道來」を、惡魔の侵入みたいに、もッぱら防止した時代もあつた。

その最も著聞してをるのが、東海道でいふと、岡崎であるが、岡崎は、廣重や十返舍一九のむかしから、東海道屈指の宿驛で、上り下りの旅人のため、大に、市が榮えたもんだつた。しかも、今、鐵道なんていふものが出來たんだでは、上り下りの客が、みんな素通りしてしまふといふので、停車場の設置に對しても大反對をやり、そこで、名は「岡崎驛」でも、實は、町から一里餘も離れた田圃の中へ敬遠したものだ。したがッて、岡崎と聞いて下車した客人は、とんでもない田圃の中で、大に面喰つたもので、今日、伊賀の上野をおとづれるものが、味はふのと、同一な有樣だつた。

しかし、今では、その岡崎市が、田圃の中の岡崎驛に、色目をつかつて、だん／＼そちらへ、街衢を伸長し、かつ、電車やバスまで設備して行つたから、兩者は一つの都市として、こゝに握手した。これ、卽ち、政客が鐵道を利用し得たりし頃の一つのエピソードなのである。

だが、今では、その反對で、驛といへば、どんな小驛でも、鐵道といへば、支那ではないが、時間外れに突ッ走るものでも欲しいといふまでになり、この間、政黨は黨人の黨略的暗中飛躍もあり、又た、もつぱら商人根性を出して來た鐵道省の八面玲瓏的お世辭もあり、あちら立てればこちらが立たず、九尺二間に雨戸が一本のやうな苦衷を味はふ實例も少なくない。

まづ、山陰道の小驛「三保三隅」驛を見るがいゝ。あそこは、山陰線が西に延長せられて、三保村か三隅村かに停車場を設けようとした際、前に述べた岡崎とは正反對に、兩村から、「俺にくれろ」と猛烈な運動が起り、鐵道省も、採決に困つて、なんと苦しいことか、三保と三隅の兩村のさかい目に驛舍を立てゝ、その驛名も、やゝこしくも「三保三隅」――。

そこで、なんにも知らぬ旅客は、驛舍開設當時、立て場茶屋一ッもない山間部落に放り出され、これは／＼と驚いたものだつた。しかし、その裏面を、仔細に眺めると、この附近は、政友會の領袖島田俊雄の選擧地盤であり、しかも、島田は、濱口内閣の商相俵孫一と、選擧毎に白熱戰を演じ、石見濱田の豪族俵孫一を向ふに廻しての戰ひは、いつも文字どほりの苦戰であつた。したがつて、かれの鄕黨への勢力扶植策は、並み大抵ではなく、地方問題の利用には、決して、等閑たることを許さないのである。殊に、三保三隅驛の出來る大正十一年は、政友會の高橋内閣と政友會の支持した加藤友三郎内閣であつた。かれは自黨の勢力を利用して、自己の選擧區内たる三保村と三隅村とを兩天秤にかけて、掌中に握らんため、かれの劃策時謀、その效を奏し、三保三隅といふやゝこしい驛名を生むに

至つたものである。侮るべからず、党人の党略を。

更に、この稿の冒頭に述べておいた党略線の一ツ、岩手県と秋田県聯絡の並行線の経緯を開陳すると、岩手県内を走る東北本線の「黒沢尻」から、秋田県の「横手」に到る横黒線は、そもそも大正三年に成立した大隈内閣が計画したもので、これは、同県における非政友の巨頭、阿部頑之作の勢力扶植のため、地方民を釣らうとしたものだつた。岩手県は、昔同県が原敬を生むだことにより、県北は勿論、阿部の地盤たる県南方面に到るまで、政友会の勢力が伸長し、阿部は、孤城を守つて、気息奄々の体だつた。そこで、これが局面打開のために、計画されたのが、横黒線の貫通。これであるが、しかも、その工事中に大隈内閣倒れて、政友会を持の寺内内閣生れ、更に、寺内内閣が、巧妙な原敬の内部侵蝕のために倒潰し、政友会内閣を成立せしめるや、原敬氏の進言で、非政友の勢力小縮なりとばかり、阿部いぢめを企画し、ツイ目と鼻の間の盛岡から、秋田の同志神田清兵衛の居城大曲に向つて、並行線がもくろみ、これが完成に邁進した。しかして、横黒線と盛岡、大曲間の並行線の間隔といへば、東北本線で約三十三マイル（黒沢尻と盛岡間）奥羽線で、約二十マイル（横手と大曲間）といふのだから、山又山の奥羽の地、而も交通、それほど繁忙でないのにも拘はらず、鉄道を接しての、かゝる並行線は、全く閉口であるのに、何より奇怪なのは、今や、岩手県北部の盛曲線が出来るぞ、作達ちは、今にして、政友会の軍門に降旗を掲げなければ、大隈内閣の置き土産たる、横黒線の工事を中止するぞと、土地の政友会員は、恰も、中央の意を含んだもの、如き言辞を弄して、盛んに県南の非政友を脅迫したもんだつた。

当時、頑之作は、アノ度の強い近視眼に、くやし涙をためて、鉄道をだしに、党勢拡張に妙を得た政友会内閣を痛憤したものだが、しかし、これは既成政党の誰れでもやりかねないところだ。要は、朝に在ること久しければ、その地位の便益をかりて、これをなすこと多く、しからざれば、その反対のみ。必ずしも大口は叩かぬものだ。浜口内閣だとて、その存在長ければ、どんな手品の底たねを、国民の前に暴露し来たらうとも限らないんだから……。

追記、さて、鉄道問題に就ての党略に関しては、尚は、書くべきもの、無いでは無いけれど、本稿執筆者の注文の枚数も超えたし、超特急が東海道を疾駆せんとする一九三〇年――鈍行列車の棚おろしでもあるまい。今は、このあたりでペンのレールの打切りとする。五、二、四、朝稿（完）

ダグラス・ファンを解剖する

――大衆はかくの如くに動く――

長谷川如是閑

一、大衆の行動

A「日本の大衆は、自分達の生活利害に關する問題や天下國家の休戚に關する問題には頗る冷淡な癖に、先頃のツェッペリンの來訪の際やダグラスの入國の際の氣違ひじみた熱狂は何うだ。恰も自分達の生存に關する事件でゝもあるやうに、命懸けで押しかけて、罷り間違へば、飛行船もダグラスも押し潰してしまうやうな勢ひだ。あんな行動が果して大衆の生活そのものから出たものだらうか？ 第三者の煽情的な手段に乘せられたのではなからうか？ いかに大衆は盲動するものだといつても、餘りに無意義な熱の浪費ではないか？ 大に反省を要する問題だと思ふが、社會的に觀て、あれが果して自然なのか、恐るべき變態ではないのか…」

B「一寸待ち給へ…さう矢繼ぎ早やに問題を連發させても答辯の仕やうがない。君が今提起した問題は、第一に大衆の行動と心理の問題、第二にそれの煽動者の問題、第三に大衆と藝術の問題、第四に大衆と所謂天下國家の休戚との問題即ち大衆と政治との問題等とで、とてもひと呼吸には答へられない」

A「然らば、先づ日本の大衆が、例へばダグラスのやうな一個の大衆藝術家に對して、フランス國民が嘗つてナポレオンに對して表はしたやうな熱狂的のカラ騷ぎを演ずるのは、日本人が民族的に輕佻な性質をもつてゐる故ではなからうか？」

B「所があの糞落ちつきに落ちついてゐると稱せられるアングロ・サキソン民族のイギリス人でも、チャプリンの英國來訪の際の騷ぎは、ダグラスの日本來訪に讓らなかつたやうだ。ノルマン勝王に押し渡られた際にも、泰然として「貴樣何にして來た」

てた顔をしてゐたロンドン兒も、チャプリンを迎へた時には氣違ひじみた騷ぎを演じた。大衆のあゝいふカラ騷ぎによつて、必ずしも民族的性質を云々するわけには行くまい。天下國家の休戚よりもフイルムの方が大衆にはピンと來るものだから。メキシコがフランスの附屬國だつた時分に、フエルチナンド國王になつて同國に渡つた際にも、大衆は、種馬の着いた時ほども騷がなかつたといふ話がある。馬に騷ぐほども、王様には騷がぬといふ所に大衆の面白味がある。」

A「日本の大衆のカラ騷ぎは、面白いといつて笑つてはゐられない現象だと思ふ。メキシコ人が王様に對するよりも種馬に對して騷ぐといふのは自分達の生活に交渉のあるものにより多くの關心をもつのだから充分理解されるが、日本の大衆は何にでも騷ぐのだから。單なる、憧れ者に過ぎない。」

B「さうだ、日本人はその點でやゝ特徴がある。先年アインシュタインの來た時にも大騷ぎを演じて、ア君は面喰つて、『私の學說が日本人の生活に直接何の影響もないのに、日本人は何うしてこんな風に私に關心をもつのだらう』と不審がつたといふ話だが、これなどはやゝ、日本人特有だらう。」

A「全くわれ／＼もア氏と共に日本の大衆を訝ぶかるね。空中ホテルだとか新來のチャンバラ大王だとか、充分宣傳された、いはゞ興行價値の豐富なものに大衆が大騷ぎをするのはやゝ吞み込めるが、相對性原理ファンに至つては全く不可解の現象だ。何うしても日本人は變だ。」

B「所がそこに大衆の行動の特徴があるのだ。大衆といふものは、常に行動の潛勢力をもつてゐるが、然しある中心が出來ないと決して動かないものだ。大衆の行動はつまり渦動のやうなもので、一つ中心が出來ると、直ちに大きな渦卷が起る、中心が出來ないと決して凝集しない。云はゞ氣流と同じで、その運動に必ず中心が要るのだ。大衆は昔の兵法に所謂『靜なること林のごとく、疾きこと風の如き』ものなので中心がない時には林の如く、中心を得ると風の如くだ。」

A「その中心といふのは？」

B「運動の動因を作る何ものかだ。平家の大軍は水鳥の羽音で運動を起したが、その場合には羽音がその所謂中心だ。」

A「それは全くの盲動だが、大衆の運動はたゞの盲動だといふのかね？」

B「大衆は、決して運動の目的を意識してから運動を起すものではないのだ。社會的の大衆ならば、社會的必然が運動の動力となるので、所謂『自然發生的』といふ奴だ。單なる一團の群集は、群する意識すら持たないと同じく、その群的行動に意識的

指令は全くもつてゐない。從つてそれが何うして動くかといふと、全く發生した中心に向つて凝集するのだ。」

A『何うして中心が發生する？』

B『平家の大軍の例によると、彼等は逃亡運動を起す中心を求めてゐたのだ。水鳥の羽音は「敵軍襲來」といふ定想的中心を發生させて全軍に逃亡運動を起させたのだ。彼等が意識的行動によつて逃亡を企てるならば、三々伍々密かに逃亡するか、又は全軍秩序整然として退却したであらう。然しそれは、無組織大衆の運動ではなく、前者は個人的の意識的運動で、後者は團體的に結成された組織大衆の意識的運動で、現在の問題とは別の現象だ。」

A『組織のない大衆の行動の中心となるものは一體何だ？』

B『それには二つの種類がある。一つは大衆の生活内容の必然による運動の中心で、他の一つは、大衆の生活形式の盲目的反復の運動の中心だ。前者は所謂衝動的群行動で、後者は個人の場合に、心理學者が「後天的反射運動」と名づけたものに似た群的行動だ。大衆はこの二つの動因で動くものなのだ。」

A『生活内容の必然といふと？』

B『大衆の生活が、現に要求してゐるものを求めるのだ。社會運動の先驅となつた、一揆や騷擾や一般的不安狀態などはすべてそれだ。その運動が意識化するのは後のことで、無組織大衆の衝動的行動が先づ起らなければ、決して組織も團結も起るものではない。さうしてその衝動的運動に中心が與へられたらそれは卽ち所謂生活の必然性に基いたものだ。かの米騷動の如きもその一例だ。」

A『生活形式の盲目的反復といふのは？』

B『それは個人の場合の後天的反射運動と同じやうなものだから、形式だけが、生活の必然によるそれと似てゐるだけで、實質的、内容的には、さういふ重要性をもつてゐるとは限らない運動なのだ。つまり、人間の群は永遠の昔から、生物學的に行動の一定の形式をもつて動いて來たもので、その形式は本來は、必ず生活の必然に基いたものだつたが、行動が反復されるうちに、その形式だけで動くこと丶なり、一定の外的條件を得れば、内容に拘らず、それに應ずるやうな運動を起すのだ。それが群的に動く時には、「後天的」とはいへないが、形式的反射運動なのだ。個人の場合には、例へば「お辭儀」をするといふ行動は、決して先天的ではないが、やゝ成長した人間は、敎へられた習慣に從つて、知人に會へば反射的にお辭儀をするやうになる。それが所謂後天的反射運動だ。群の行動の場合は、その形式の反射的反復を、先天的に繰り返へすのだ。例へば、ある指導的

人物の行動に盲從するといふのは、本來、さういふ人物が群生活の行動を有效に目的づけたので、ある人物から適當の指導的態度を示された群は、無意識にそれに追從する行動傾向をとる。のみならず、さういふ行動の反復の結果、人間の群は常に指導的中心の存在を探し求めてゐて、やゝそれに適應するものを發見すれば、直ちにそれに盲從する傾向をもつ。それを「隷屬の本能」など、叫ぶ學者もあるが、「隷屬」などゝいふ複雜な關係を「本能」といふやうな單純な行動傾向の中に入れるのは變なもので、それは動物の子供が母親の跡を追ふのと同じく、反射的の行動に過ぎないのだ。大衆は、常に中心を求めてゐるので、その形式さへ一致すれば、内容のない場合にも、運動を起すし、それも一種の反射運動なのだ。先きの平家の大軍の例は、空想的だがやはりそれだ。水鳥の羽音は、敵軍襲來の條件を外的に一致してゐたので、忽ち階的衝動を起したわけだ。」

A「ダグラスやアインシュタインの場合は？」

B「ダグラスの場合には、群衆は、内容的に要求してゐた大衆藝術を與へて呉れた人格を偶像化したのだから、ある程度で、生活の必然から出た中心を求めたものだといへる。然しアインシュタインの場合は、それと全く違つて、内容については何の要求も持つてゐないものによつて渦卷きを起したのだから、第二の場合に相當するのだ。指導的中心を求めて動くといふ大衆行動は、そこでは内容的に生じたのではなく、形式的に生じたのだ。アインシュタインは人類の學問的生活に於ける一中心であるといふ事實を、大衆は外部的にうけ容れて、それに對して、大衆的の形式的反射行動としての渦卷きを起したのだ。」

A「アインシュタインが何かの中心だといふことを、相對性原理が何かチンプンカンプンの大衆は、何うして知つたのだらう？」

二、煽情的手段

B「そこで次ぎの煽情手段の問題となる。それは今日の新聞紙といふ社會的感覺機關が大衆にさういふ感覺を與へたのだ。大衆はダグラスに於ては、眼親しくそのフィルムを觀て、それによつて感情を煽られたのだが、アインシュタインに至つては、全く新聞紙といふ感覺機關を經て感情を煽られたのだ。」

A「それには、新聞紙に對する大衆の盲目的追從といふこともあるだらう？」

B「然し、新聞紙そのものは、大衆のもつ興味を中心として作られてゐるもので、その感覺は、云はゞ大衆の感覺なのだから、どつちがどつちに追從してゐるのか問題だ。大衆に無論、相對

性原理そのものは知らない、然し、物理學的常識に近いまでに一般化された物理學をひつくり返す學説だといへば、大衆はそのコペルニクス的回轉を科學的に受け容れることは出來ないので、恰も世界價値顚倒の宗教でも現はれたやうに考へて、その宗祖を拜まうとするのだ。」

A「ダグラスの場合は生活の必然だといつても、やはり、同じやうな煽動やその結果の偶像化はあるだらう？」

B「ダグラスの場合に、生活の必然といふのは、必ずしも根本的の意味に於てさうだといふのではないのだ。一體、英雄の最も原始的な、腕力主義の勝利を禮讃するダグラス式——しかも盜賊專門で、大衆の生活から云つたら、最も極端に大衆の敵である筈の英雄型——の大衆藝術までに、大衆が追從するといふのは、決して現在の大衆自身の生活の必然性から出てゐるのではなく、全く大衆の社會に君臨する支配組織の要求から出た一般的教化の仕業なのだ。大衆は、この追從に於て、全く彼等自身を忘却し又沒却してゐるので、それは恰も一英雄の功を成さんが爲めに骨と化する運命にある雜兵共が「戰爭萬歲」を叫んでゐるやうなものだ。大衆に對する政治的支配は、大衆がもつ、原始的鬪爭形式への盲目的興奮を利用する必要をもつてゐる組織なので、その教化は、大衆をかゝる興奮に導くやうに組み立てられてゐるのだ。」

A「それでは、ダグラスに對する大衆の追從は、藝術に對する、大衆の生活それ自體から出た要求ではないといふのか？」

三、大衆と藝術

B「さうとは云ひ切ることは出來ない。それには次ぎの問題、卽ち大衆と藝術との關係を考へなければならない。「大衆は果して藝術をもつことが出來るか」といふ問題に對してさへ、所謂「藝術のための藝術」主義者は消極的の答を與へてゐる。大衆の追從する藝術は藝術でないと彼等はいふ。然し、それは階級的文化の產んだ特殊藝術だけを藝術とする見地だ。藝術は無論、大衆に根を持つものでなければならない。德川時代の藝術らしい藝術を見給へ、小說でも劇でも繪畫でも、悉く大衆的のもので、たゞそれだけが時代の藝術を構成してゐたのではないか。尤も僕は日本の德川時代、殊にその末期ほど藝術の藝術的意義卽ち大衆的意義を發揮したものは、世界に類例がないと思つてゐるのだ。その日暮らし職人でも、當時の第一流の俳優の假聲を使つたりして、第一流の小說家の小說や、第一流の戲曲家の劇やに出て來る人物だの文句だのを、殆んどすべての下層階級の人々が、その普通知識に取り入れてゐたといふやうなことは、德

川時代の日本を除いては、世界の何處にも見られない現象で、今日の日本などは、舊露では、一世紀前の自分の國と比べて全くゼロだ。今では一流の藝術は全く大衆が眼下に見下して超然としてゐるではないか。大衆もたゞ頭上高くそれを仰いで——仰ぎもしないで、全く沒交渉だ。そんなものが藝術であつてたまるものか。それは山海の珍味と同じく、贅澤な嗜好の玩弄物に過ぎない。藝術とは特殊文化の舌ざわりに適ふ代物のことではなく、大衆の生活の營養物のことだ。」

A「そこへ現はれたのがフィルム藝術だつたが、それが御覧の通りなのはどうしたものだ?」

B「ダグラスの藝術やチャンバラものやレヴューものやナンセンスものや、それは要するに現代社會の組織體の生理と病理なのだ。貴族や軍人の身體には、貴族的軍人的の生理と病理とがあり、商人の身體には商人的の、山賊の身體には山賊的の生理と病理とがある。封建國家の藝術に對して、資本主義國家の藝術はどんな形をとるかといへば、それらの國家の間に共通の生理や病理は、共通の藝術的形態として現はれ、各々特殊の生理や病理やは、それ／＼の國家に特殊な藝術の形をとつて現はれる。」

A「具體的にいふと、今のフィルム藝術に現代社會の生理や病理やがどう現はれてゐる?」

B「それは面倒な問題だが、一言でいへば、今云つた各種のフィルム藝術の順序に從つて、劍劇は、暴力を、レヴューは肉慾を、ナンセンスは頽廢を表現してゐるといふ譯で、可なり現代社會の生理と病理とを露はにしてゐる。」

A「暴力と肉慾と頽廢、それが資本主義社會の生理と病理とだといふのか?暴力と肉慾はいゝが、ナンセンスが頽廢とは?」

B「生活意慾が積極的となれば頽廢は現れない。たゞ甘味のために甘味を貪つてゐれば、感覺はつひに鈍痲して、生活は破滅する。それの逆も亦同じで、生活が破滅に瀕すれば、感覺は鈍痲して、たゞ甘味のための甘味を貪るやうになる。いくら甘いものを食つても根つから甘くなくなるので、益甘度を増すが、いくら増しても同様ならばいつそゼロにしたがいゝといふことになる。それが所謂ナンセンス興味だ。文化の終期には必ず、そのゼロの玩賞が起るものだ、帝國末期、封建末期の文化の歴史を見ればそのことは瞭然とわかる。今は資本主義文化に特殊の形で、そのゼロの玩賞が始まつたのだ。」

A「大衆にも、現代文化のアルコールが廻つたのかね?」

B「所で、新聞や商業主義者宣傳で動いてゐる大衆といふものの性質を考へて見なければいけない。今日の大衆は、由來、社

會的生活の必然性を意識的にか無意識的にか把握してゐるのだ。で當然、階級的教化の反撥が盛んに起つてゐるのだ。資本主義社會の末期的現象は、實はこれらの自覺的大衆の生理でも病理でもないのだ。それは大小ブルジョア層の大衆の生理と病理なのだ。ダグラスの日本來訪に狂氣となつて殺到した大衆は、そのブルジョア層の大衆なのだ。少くとも、その心理狀態に於てブル層の大衆なのだ。「教化」の利いてゐる、──君のいふ、アルコールの廻つてゐる──連中なのだ。」

A「それにして餘りに「大衆」だね。」

B「刑事學者は、刑務所にゐる人間の中の精神異常者の率を七割とか八割とか計算した相だが、して見れば娑婆の人間のうちにも、精神異常者の率は一割や二割はあらう。すると七千萬の日本人の中には、精神異常者は七百萬人から一千萬人の餘もゐるわけではないか。ダグラスの面を見やうと殺到したものが精神異常者ではないにしても、少くともアルコールの廻つた連中だとすれば、それが五萬や十萬あつたからといつて驚くには當らぬことだ。」

A「然し、大衆は、自分達の生活利害に關する運動では、中々そんな風に機敏に、迅速に、且つ一致して渦卷きを起さないではないか？」

四、大衆と政治

B「決して起さないことはない。──それで問題は、大衆と政治との關係に入るが、もう餘り話が長くなつたから簡單に片づけやう。衝動的に、所謂自然發生的には必ず起す。大衆のその意味での運動は一般的だ。革命は政治家が起してゐるやうだが、大衆の衝動的運動はその先驅的條件だ。社會が動態に入るのは、大衆が動くか又は動かなくなるかに依るのだ。動くのは、大衆の生活の要求だ、動かなくなるのは、大衆に君臨する支配の拒否だ。封建社會は農民のそれで倒れたが、資本主義の運命は勞働階級のそれに繋つてゐるのだ。然し、運動が、組織化されて政治行動の形態をとると、大衆はその「意識化」に歩調を合はせることの困難から、中々さう容易くは動けなくなる。政治は二つの理由から非大衆的のものとなる。一つは階級的の性質のためで、他の一つはその專門的の性質のためだ。政治は階級的支配の場合には、大衆を努めて除外する。或國家は、その極端だが、近代國家も、それの資本主義組織が完成して新らしい階級化が成立すれば同じことだ。大衆に政治的權利は與へられても、一般の權利關係から大衆にとつては權利の行使は不可能になる。所有者の權利は、無所有者の權利を零にする合法的の政治

組織や法律組織や教育組織を組み立てゝ、大衆を事實上政治から除外する。大衆は、かくして政治を理解する能力をさへ持たせられずに、支配する階級の利害に協同することの外に、自己の利害を考察する意識の作用を失つてゐることに何の不思議をも感じない位だ。かういふ大衆が一國家の体面などを考慮するのは、支配階級のアルコールの廻つた時だけで結構な筈だ、彼等は自己の体面を考ふることすら出來ないのだからだ。」

A それだのに何故、レヴユー、ナンセンスには殺到する。」

B それはアルコールが衝動にふれてゐるからだ。政治的教化のアルコールは大衆の衝動にはちつとも觸れない。けれども、中心が求める大衆の傾向はそこにも動くから、偶像が發見されゝば醉倒漢が出來る。ダグラスに行く大衆はナポレオンに行く大衆なのだ

A 君は大衆の行動を肯定してゐるのか、否定してゐるのか、何方なのだい？」

B 肯定しても否定しても、大衆のさういふ性質は何うにも出來るものではない。」

A では何うでもいゝ、問題だといふのかい？」

B さうではない。大衆は、社會的必然を意識せずに「行動」する人間的集團なのだ。社會はこの大衆の行動で歴史を作つて行くのだ。然し、大衆は中心がなければ動けない。少數の意識的行動者は、この社會的必然の意識即ち歴史過程の意識によつて、運動の中心を作るのだ。その羽音に意味をもつてゐる水鳥となるのだ。問題は「何うしてその中心が出來るか？」といふことではなく、「それは何んな中心だ？」といふことだ。努力と肉慾と解脱の中心は、崩壊の歴史の動きだ。大衆はそれに殺到することによつて、現代の破滅に貢獻するのだ。」

A 日本の大衆はその意味で滅亡的だといふのか？」

B その反對だ。大に動く大衆は、どんな中心を得ても大に動く。ナンセンスに強いものはセンスに強いのだ。子孫を無くするものも肉慾だが、子孫を作るものも肉慾だ。破壊するものも努力だが、建設するものも努力だ。常に世界文化の中心へ〱と動かうとする日本の大衆は、世界と共に滅びるだらうが、また世界と共に興るだらう。」

A チゴマにでもダグラスにでも殺到しろか！」

B それは確かに大きな間違ひだ、大きな空費だ。然し、自然の電光たる稲妻は大きな空費だが、その現象がなかつたら科學的電光もあり得ないのだ。振子は右に動く力で左に動くのだ。』

（完）

女性社會史考

石濱知行

（一）

歴史をつくるものは人間である。そして人間の約半數は女性である。社會史の發展過程において女性は男性とともに當然大なる歴史的役割をつとめて來た。それにもかゝわらず、從來の社會史からは女性の活動が全く排除せられてゐる。それは恰度、從來の社會史から社會に於ける被抑壓階級たる廣い意味での勞働者の演じた大なる役割が無視せられてゐるのと同じである。ランプレヒトの言葉を借りるまでもなく、從來の歴史、記述されたる歴史なるものが權力者中心のもとに意圖され、記述され來つたことがそのもつとも重大なる原因である。しかし、近代に於ける經濟的變革に伴なふ勞働者運動の勃興は、かゝる歴史觀を根柢からくつがへしたのである。勞働の自覺は、傳統せられた從來の誤れる歴史を勞働者中心の歴史に書きかへんとしつゝある。「勞働は、勞働に素材を提供する自然とともに作しその素材を富にかへるところのものである。しかし勞働は、もつと無限にそれより以上のものである。勞働は、すべての人類生活の第一根本條件である。まことにある意味に於いては勞働は人類それ自身を作つたと言はなければならぬやうな程度に於いて。」（エンゲルス）。にもかゝわらず、勞働者の歴史は、社會發展史に殘した勞働者の偉大なる功績は、全く埋沒せられてゐる。この埋沒せられたる貴重なる史料を堀り出して、權力者中心の歴史を全く塗り變へることは、近代無産者に課せられた重大なる使命の一つである。エルネスト・ウンターマンは、アメリカの歴史について次のごとく言つてゐる。「アメリカ大陸のいまだ記述されない、埋沒された歴史は、吾人に今日知られてゐる事實とま

つたく異なつたことを示してゐる。記述されざる歴史とは、即ちアメリカ大陸勞働者の歴史である。埋沒せられたる歴史は、公の文書の下積となつて塵にまみれ、とてもプロレタリアの思想家は見ることが出来ない。しかもプロレタリアの思想家は、僞言を吐きつつある支配階級の歴史家の罪を隱すべく、その眞實の歴史を摑かんとしてゐる。」

女性は、今日までの歴史において、二重の抑壓、搾取、支配のもとにあつた。その一つは、一般勞働者として奴隷所有主、領主、資本家等の權力者の桎梏のもとにあつたことであり、その二つはギネコクラティー(女性支配)以來、つねに男性の横暴なる支配のもとにあつたことである。女性は、かゝる二重の抑壓に苦しんだものとして一般男性勞働者よりさらにひどい境涯を經驗し來つた。かゝる二重の抑壓のもとに自由を奪はれた生活を續けて來たといふことは、女性の歴史が、女性の勞働が、女性の活動が、一般廣い意味での勞働者の歴史よりも一層、記述されたる一般の從來の歴史よりの排斥をうける原因となつたことはあやしむに足りないことである。社會史上、女性の活動が全くいままで省みられなかつたのは、主として以上のやうなわけからであると思はれる。

「無産者の解放なくして、女性の解放なく、無産者の勝利なくして、また、女性の勝利もない。」この言葉は、從來の女性が、いかに、一般的に抑壓せられたる歴史を有するかを物語つてゐる。女性の解放は、無産者の解放運動によつてのみ行はれる。女性の眞の歴史は、無産者の歴史家のみによつて、その全き眞の姿が描き出される。ベーベルの「女性と社會主義」、ラッパポートの「ルッキング・フォアウォード」等は、かゝる立場から書かれた著作である。

私は、さらに、その他の多くの資料によつて、社會史上に於ける女性の活動を、次に書いて見やうと思ふ。

(二)

人類男女兩性の最も原始的なる分業は、性的特質による區別にもとづいてゐた。女性は、男性との性的交渉により子供を生み、その子供をそだてることにいそがしかつた。女性は子供のために束縛せられてゐた。人類最初のそして堅固なる結合は男性と女性との間に於ける結合ではなくして、母親とそして子供との間に於ける結合であつたのである。女性が子供を生むといふことは、人類に示された最初の不可思議であつた。だから我我は、多くの民族の神話に於いて、自然に於ける女性の神的崇拜の多くの痕跡を發見することが出来る。イシス(一五)女神に

於いてエヂプト人は豐沃なる土地を祈つた。サイス(Saïs)なる祕密宮殿にまつられてゐたナイト(Neith)の神は、母性的・生產的力の人間化せるものであつた。かゝる母性の自然的なる力は、かくのごとく宗教的表現として示現されたのみではなくして、また原始的法律としても示された。乃ち子供は母の所有物であり、男性の所有物ではなかつた。子供は、母または母の屬するホルドに從ひ、母系によつて氏族團體は相續せられた。ここに母權發展の最初の礎石が置かれたのであつた。

女性は、自然の性的機能の相違によつて、かくのごとく子供の生誕およびその養育のために特に力をそゝぐ必要にせまられたが、しかし、その必要のないもの及び暇のあるものは、男子と同樣に狩獵を行ひ、戰鬪に從事する能力があつた。現に、かかる段階にあつて男女兩性の間に何等の力の相違がない原始民族が多く存在することは、ハヴロック・エリスが「男性と女性」のなかで說明してゐるところである。

人類の經濟的發展にともなつて、女性の活動の範圍も漸次擴大し來る傾向をしめした。女性は粗末なる家屋を立て、男性が狩獵で獲得し來つたところの動物の皮でもつて、被服をつくるに至つた。また、獸類、鳥類、魚類の肉を調理し、自ら原野に於いて球莖、穀物、果實等を採取し來つて、それを食用にするにいたつた。ここに、常に屋外に於いて狩獵、漁撈等を行ふ男性と女性との間に勞働に於ける最初の分業が行はるゝに至つたのである。

かゝる分業の結果として、男性は常に移動的となり、女性は定住的となつた。男性にとつては、女性の建てた小屋は、休憩所であり、そこへ危難の時には逃避し、そこで食料と被服とを得たのみならず、狩獵、漁撈で獲た獲物を貯藏したのであつた。殊に、火の使用を覺へてからは、その小屋は男性にとつてより重大なる場所となり、女性との結合がより必要となり來つたのである。火を守り、それを維持するものは、女性であつたのである。人類が火の使用を覺えたことは、人類の經濟的發展を劃期的に促進せしめた。當時の人類にとつての火の必要さは、今日我々が想像するよりもより大なるものであつた。かゝる經濟上大なる價値を有する火の守護者としての女性が、男性にとつてますます必要なるものとなり來つたことは疑を容れざるところであらう。

ドイツの社會學者ミユラー・リヤーは、その著「家族」に於いて家族の進化段階を、血緣時代、家族時代、個人または社會的個人時代の三つに大別し、血緣時代をさらに、四分して、その最初の時代を原始時代と呼び、その原始時代に於いては、人類は

その社会的本質に従つて初期には動物的の群居（Herde）をいとなみ、後期には人間的群居（Horde）をいとなんだことを述べてゐる。そして、このホルド（群）は、まづ年齢階級によつて編成された群の生活をいとなむ。この時代では女性は単に子供を生み、乳を呑ませ、子供を背負ひ、保護するだけのことしか行はない。群の生活はかゝる時代を経て、さらに性的区別による群の時代に入る。リヤーの所謂性的区別による群の時代といふのは、まさに、いまのべた男性と女性との間に労働上の最初の分業が発生した時代を指称してゐる。リヤーによれば、この時代に人間が入るとともに、女性は単に子供の生誕および養育に従事するにとゞまらずして、さらに、女性は草木、根、種子を採取し、それを調理する仕事にたづさはり、男性は野獣の捕獲およびこれの皮剥ぎをおこなひ、こゝに男女両性間に最初の分働の分割が行はれた。この男女の分化に伴ふ群の編成は、自然の結果として、その後、原始的結婚と特定家族の発生を誘致した。しかし、この原始的結婚と特定家族といふものは、今日の意味に於ける一夫一婦または一夫一婦制度にもとづける個々の家族ではなくして、二人の男女が相互の生活共同のために、ただ短期間同棲するに過ぎないのである。そしてこの時代の短期間の夫婦的結合は決して性欲的の必要のみから生じたのではない。何故なら単に性欲充足のためのみの必要だけにとゞまるならば、それより以前の性的関係形態である団体結婚で充分であるからである。この短期間の夫婦的結合は寧ろ経済的必要から来たのであつて、男性は自己の労働を補足して呉れる労働設備の一として女性を必要とし、そのために男女両性が短期間同棲し、それと同時に副として性的交渉を行つたにすぎないのである。

ここに於いて、男性は、単に自然的本能たる性欲の必要以外に、経済的に女性を必要とするに至つたのである。男性をしばしば小屋の暖爐に帰らしむるところのものは、一般の人が原始人間について想像するやうに家庭的情緒とかまたは妻子に対する単なる愛情ではなくして、それは唯一に素朴なる経済的欲求にすぎないのである。――リリー・ブラウンは、かゝる段階に於ける男女両性の関係を論じてかう言つてゐる。

この段階に於ける男女両性の分業についてカール・ブュッヘルは次のごとく言つてゐる。文明の低級にある種々の種族に於いても、男女両性による労働の分配は、習慣により確然規定されてゐるものであるが、その区分は種々の自然的原則のみがその根拠となつてゐるのではない。すなはち、すくなくも女性には一般に容易なる労働が課せられるものであるとは言ひ得ない

のである。文明人の普通の個別經濟に於いては、縱の區劃ありといふべく、男子には生產的勞働、女子には消費の統制といふ役割が課せられつつあるのであるが、自然人の經濟は、それを橫の區劃であるといふべく、男女兩性ともに生產に從事し、時には消費すら各別の範圍を有してゐることすら珍らしくない狀態にある。殊にもつとも著るしい事實は、植物性食料の獲得と調理とは、全部女性の務であつて、小屋を建てることも多く女性の勞働範圍にぞくし、男性は狩獵およびその獲物の調理を務としてゐる。……これらの區劃はきはめて截然たるものであるがゆゑに、その家族經濟を分類して、特殊男性經濟および特殊女性經濟とに分つことが出來るのである」そして、かゝる段階に於ける人類のかゝる經濟生活を暗示するものとして若干の現存未開人種の生活の例を示してゐる。例へば、野蠻の最下段にあるパロロ族では女性は尖つた棒をたづさへて森や原野におもむいて球莖、木根等を採取し、木に登攀して椰子の果實をとり、男性は狩獵に從事する。その他の未開種族でも、男性は主として狩獵を行ひ、女性は主として植物性食料の獲得に從事してゐる。そして、これら兩種の勞働は決して難易、輕重の別ある勞働ではなくして、當時の經濟においては、ともに重大なる生產的勞働であつたのである。いな、狩獵から農業へとうつりかはり行く傾向のあつた當時としては、女性の勞働の方が、むしろ重大であつたと言ふことが出來るのである。

女性は、かくして、男女兩性間の勞働の分割の結果として、主として、植物性食料の採取および調理をその勞働の範圍としたが、そのことは、植物と女性との間の關係をますます密接ならしめ、つひには女性は、原野に野生した食料用の植物を、人工的に採培する方法を知るに至つた。乃ち、女性によつて農業の方法が發明せられたのである。フォン・デン・シュタイネンは、耕作の方法を發見したのは女性であると明言してゐる。それについて、前に述べたビュッヘャーも次の樣に言つてゐる。耒耜耕作(Hackbau)は、今日でも尙ほ最もひろく行はれる農業法であつて、全中央アフリカ、中央アメリカ、南アメリカ、オーストラリア諸島、後インド、東インドの大部分に行はれてゐる。そして耕作は女性の勞働であつて、人類文化促進に資するところまことに偉大なるものがあると言はねばならない。女性は昔から行ひ來つた木根の採取からすゝんでつひに耕作に到達したものであることは疑のない明白なことである。從つてその耕作の主要物は澱粉に富んだ球莖および木根であるのは當然である。かくのごとくにして女性は農業技術上の經驗を得るに至つたものであつて、これ全く男性に缺けてゐるところである。かくし

て女性の勞働は、やがて生活必要品のもつとも重要なる部分を供給することとなり、よつてもつて恒久的な家族組織の基礎がすえられるにいたつたのである。ここに至つて、男性の仕事は、その家族の保護と動物性食料の獲得に從事することであつた。」

各國の神話中に農業の起源として傳へらるるものの大部分は、女性または女性生殖器と關聯してゐる。それは、女性の生殖の作用が土地の作用と似てゐるといふことと、女性が昔からその勞働として農業をいとなみきたつたといふ經濟的の事實とが重複して信ぜられて出來たが故であらう。そのいづれにせよ、農業が女性と深き關係にあつたことは疑のないところである。

女性はかくして農業の方法を發明したのみならず、長くそれに從事した。そして、當時に於ける人類の主たる生活が狩獵から農業にうつるとともに、その主たる生産たる農業をいとなんだものが女性であつたといふことは、またそれのみならず當時漸次發達し來つたところの手工業も女性の手中にあつたといふことは、社會における男女兩性の地位を變化せしめたのである。すなはち、かかる經濟的原因により、女性は社會に於いて、男性よりも優位なる地位に立つに至つたのである。ミユラー・リヤーは、かかる段階を、母權が最高度に發達し、氏族制度は母系氏族團體となり、女性支配又は女人政治（Gynaikokratie）が行はれた段階なりとして、それに原始亂婚段階なる名稱を附してゐる。そしてこの時代の經濟・社會事情を次のごとく說明してゐる、女性は先づ農業を手中に握つた。狩獵時代に於ける性的分業は、男性は動物的食料、女性は植物的の食料を作つたといふ點にもとづいてゐた。この分業の形態は、農業が發見されたあとでもなほ維持された。すなはち從來の植物性食料蒐集者たりし女性は、又初期の農業者となつた。男性は植物の耕作については一般に何等あづかる所がなかつたので、農業の初期に於いては、農業は一般に女性の手に依つて行はれたのである。そしてそれと共に、この時代に至るや、狩獵の成果は農業の成果よりも不安定のものとなつたが故に、この時代に於いては、女性は今や經濟的に優れたる立場となり、經濟の中心となつたものである。そのために勞役結婚（一三三三）なるものも發生した。女性が先づ先に定着したが故に、そして男性は、それに反して未だ放浪し移動してゐたが故に、彼が結婚せんと欲する時には、女性の下に移り行つたのである。恰度狩獵時代に女性が男性の下に移り行つたのと反對の現象である。女性は經濟的に男性よりも價値があつたが故に、氏族團體は、女性よりもむしろ男性を出したのである。何となれば、より大なる勞働力ある女性を、より小なる勞働力ある男性と交換しないことが、團體の利

益であつたからである。それにもかゝわらず男性が女性を自己の下に連れて來やうと思ふ時には、その氏族團體に對して賠償をしなければならなかつた。卽ち男性は女性を買ふか、又は勞役を以つてそれをつぐなはなければならなかつたのである。しかしこの時代には富があまりなかつたので、買ふといふのは容易でなかつた。それで、男性ははじめから女性の屬する氏族團體に移り行かねばならなかつた。そして女性は、花嫁税（Brautpreise）を高くするため、卽ち勞役時間を長くするために、男性を益々長く繼續的に自分の下に束縛して置くことの權利を手中に握つたのである。もし男性女性が各自、各自の氏族團體に止つてゐるとすれば、男性は單に母系家族（Mutterfamilie）の附屬物に過ぎなかつたのである。又子供に對しても男性は何等の權威をも持たなかつた。子供は男性の家族に屬せずして、彼の妻の家族に屬したからである。子供を連れて男性が狩獵または戰爭に行くことすらもが拒否されてゐたのである。斯くの如くすべてのことが女性中心主義であつたが故に、子供に對して男性が遺贈することも出來なかつた。

勞働の分業上に於ける變革は、かゝる女性中心の社會制度をつくり上げたのである。そこで、かゝる變革の行はれたところでは、どこでも、それに應じた女性中心の社會が出來たのである。例へば、北アメリカのヒューロン族の間では、農業は専ら女性が擔當し、土地とそれより生ずる農産物を管理した。また、被服、家具等の手工業を生産した。男性は單に漁撈を行ひ、僅かの手工業をなすにすぎなかつた。從つて、結婚もたい臨時に男性が妻の所に通ひ、狩獵の獲物を妻に分與し、夫たる男性は妻の財産および子供に對して、何等の權利を有さなかつた。女性はかくして生産物、生活必需品の上に絶對的の處分權を有し、家事についても壓倒的の權力を有してゐたので、氏族會の會長となり、氏族に關する重要事項を決定する權力を有した。その他、例へば、マライ族、ペルー人、ソロモン群島、等にも、かゝる女人中心が行はれた。我日本にも古代に天照大神をはじめ、その他の女帝で直接日本を統治せられた女性が居られ、九州の北部には卑彌呼のごとき支那と直接交通して威をふるつた女性のあつたことは、それより以前に、女性が社會の中心をなした時代のあつたことを推測せしめる。また琉球に女人政治の行はれたことは、伊波普猷氏の『沖繩女性史』（大正八年刊行）および、佐喜眞興英氏の『女人政治考』（大正十五年刊行）に明瞭である。

かつて、明治の末葉、當時の尖端女性達が、青踏なる雜誌を發行したが、それの宣言には、有名なる「原始女性は太陽であ

つた」なる一句があつた。けだし、その往古の女性中心の社會を指示したものであらう。

これを要するに、かゝる女性中心の制度が行はれたことは、その制度を可能ならしめた一定の經濟狀態があつたからであつた。すなはち、女性はたゞ子供の生誕およびその養育にだけあたり、主たる生產たる狩獵は主として男性の手によつて行はれてゐた經濟狀態が推移して、農業が行はれそのために一定の土地に定住し狩獵に代つて氏族の主たる生產となつたところの農業および手工業が主として女性の手によつて行はれ男性はたゞ副として狩獵、漁撈と若干の手工業をいとなむにすぎざるがごとき經濟狀態になつた發展段階において、はじめて可能であつたのである。

だから、かゝる經濟狀態がもし變革するならば、當然それと適應してかゝる社會狀態または政治狀態は他に推移すべきである。しかしてかゝる推移は間もなく來らざるを得なかつたのであつた。

一定の土地に定住し、農業をいとなむこと久しきに及ぶとともに、農業は漸次發展して大規模かつ力を要する勞働となり、ことにこの當時より漸次發展しはじめた交易のために農業的生產力をますます擴張する必要にせまられた。また、恰度原野に野生する植物の採取から女性が農業を創得したやうに、男性は狩獵から野生の動物を馴養しそれを牧畜することを創得し、その牧畜は農業とならんで當時の人類には重要なる原始生產となつた。また、かゝる經濟的生產力の發展は、かゝる段階に在れる各氏族の人口を激增せしめ、その結果として、近隣氏族間における狩獵地、耕作地等に關しての闘爭が盛となつた。かゝることは男性の力を必要とするに至つた。また、各氏族間の交易が發達しはじめ、それは主として男性が從事し、はじめは沈默交易、後には公然交易が行はるゝに至つた。女性中心時代の社會に於いても、船（當時は獨木船）の作製は男性の手工業に屬してゐたが、交易の發展にともなひ船の改良および增製がます〳〵必要となり來つた。

かゝる勞働は女性よりも男性の勞働力を必要とした。從つて生產力の發展に伴なふ、かゝる經濟上の變革は、社會の主要なる生產を女性の手より男性の手に移行せしめた。このことは、當然の結果として、社會に於ける優位の地位は女性から男性の上へと移つて行つた。前にのべた各種原始生產が盛に行はるゝとともに、富が急激に增加し、しかもその富はことごとく男性の手に集中せらるゝに至つた。こゝに女性支配を沒落せしめて男性獨裁を成立せしめた。從來、過去のすべての時代を通して女

性の財産であり、獨占物であつたところの子供も、かゝる變革とゝもに男性の手に移つた。

農業に於ける生産力の急激なる發展、その他の手工業、交易の發達は、從來に數倍する勞働力を必要とするに至つた。こゝに於いて前段階の支配者たりし女性は第一次的に、男性に隷屬する勞働者となり、子供もまたおなじ理由によつて父たる男性のための『勞働力および戰友』となつた。また、人口の增加に伴ふて近隣との交戰がしげくなるや、捕虜の數も多くなつた。捕虜は初めのうちは、みなこれを殺戮するをつねとしたが、氏族内の生産力が增加してより多くの勞働力を必要とし、かつかゝる勞働力を提供する多數の捕虜を食はしてやるだけ餘裕が生ずるにいたるや、これを殺戮せずして氏族内にとゞめて、これをして勞働力を提供せしめて生産に從事せしめた。これ乃ち奴隷および奴隷制度の濫觴である。

かくして、先づ第一次的に氏族内部の女性が奴隷となつた。『女性は奴隷狀態に入つた最初の人間である。男性の奴隷がまだ存在しなかつた以前に、女性はすでに奴隷となつてゐたのである。』(ベーベル)。次いで子供が奴隷となり、最後に、氏族成員外の捕虜が奴隷となつたのである。女性の男性への隷屬はこゝに始まり、それは今日に至るまでなほ繼續してゐる。それよりすこしおくれて、「隷屬の三形態」の最初の一つである奴隷制度が成立したのである。母權は父權に代り、自由は隷屬に變化したのである。

かゝる女性の地位の顚落、男性への隷屬は、かゝる經濟的變化にもとづいて發生した古代の法律および道德に明瞭に規定されてゐる。例へば、マナヴァ(Manava)からコーラン(Koran)に至るまでの東洋に於けるすべての法律は、女性の隷屬關係を固定的な、永久的なものとみとめてゐる。また、女性、女性の義務、女性の權利を取扱つたすべての文書は、女性をたゞ嫡子の母としてのみ生存の理由をみとめてゐるにすぎない。男性の嗣子相續人への利害關係は、國家の充分なる兵士への利害關係へと擴大し、結婚は國家の義務となつた。それ故に、支那では毎年、三十歳の未婚の男性が、二十歳の未婚の女性を結婚せざるものとして處刑した。インドでは結婚後八年にして子なき時はその女性を他の女性と交換することが出來、男の嫡子が死んでその後子供の出來ない時には十年經過のゝち、また女子を生んだものは十一年の後、他の女性を妻として現在の妻を離別することが出來た。イスラエルでは、子なき女は離別し、あるひは下婢と通じて子を生むことを許容した。またすべての民族では、女性の姦通又は不貞は死をもつて罰した。マヌー(Manu)の法典

によれば、女性は男性の完全なる所有物であつて、何等の財産をも所有し得ざることは奴隷と全く同等であつた。女性の獲得したすべてのものは、そのまゝ彼女の隷屬する男性の財産となつた。「生誕より死にいたるまで女性は完全に不自由である。娘としては父に、妻としては夫に、寡婦としてはその子供または親族に、隷屬する」とインドの聖なる書物マヌーの法典は規定してゐる。

かくて、女性は、その男性への隷屬以來、全く單なる子孫をつくるための機械にすぎざるに至つたのである。

（三）

血族による聯關と土地共有とを紐帶とする原始時代の社會形態が、村落共同體を最後最高の形態として、私有と奴隷制度の古代社會時代に入つて以來、女性は社會史上に果して如何なる地位をしめたか。

先づギリシヤを見やう。ギリシヤもその初期に於いては、なほ原始共同的な關係が若干存續してゐた。その當時に於いては、女性中心時代の風習がいく分か殘存し、女性は氏族會、種族會等の公共の會議に出席し、投票する權利を所有してゐたが、後代に至つてこの權利は男性の手によつて剝奪されてしまつた。

經濟が進化し、財産の不平等と人口の増加が著るしくなるとともに、隷屬の地位にあつた女性の困窮はます／＼大となり、從つて、勞働力とゝもに身體を賣却して奴隷となる女性が増加した。ギリシヤに奴隷制度が榮える前に、バビロニア、ユダヤ、エヂプト等に、奴隷制度がすでに盛に行はれた。「娘として女性奴隷として女性は男性の主人に對し嚴格な隷屬關係にあつたが爲に、財物視せられた女性（奴隷）と合法的な女性（自由人の妻や娘）との間には何等の差異もなかつた。女性は全體として同樣に悲境に沈淪してゐた。」東洋諸國の女性についてブラウンはそう言つてゐる。

かゝる女性の悲境は、古代に於ける高度の文化を形成したるギリシヤに於いてもまた盛大であつた。何故なら、ラッパポートの言ふやうに、「奴隷制度と女性の優越とは並び存し得ない」からである。

バビロニア等の東洋諸國では、男性はただ勞働を全く賤しきものとはせず、男性にして牧畜に從事するもの多く、女性は男性に抑壓されつゝも人間らしい地位に立つてゐたが、ギリシヤに入るとゝもに、女性は全く奴隷の境遇に陷入したのである。ギリシヤに於いて女性は男性の意思を有せざる財産であつた。父は娘の欲すると欲せざるとを考慮せずして娘を他人に嫁

として與へた。夫は自分の妻を他人に贈與しまたは他の財物と交換することが出來た。もし妻が子供を生む能力なきときには、神に對する犯罪者として離婚せられた。ソロンの法典は獨身を犯罪なりとした。嫡子をつくる目的をもつてのみ當時の男性は結婚することを許容されたのであつた。ギリシャでは一夫一婦制度が法律で定められた。しかし男性は何人でも妾を有することはみとめられた。娘が一度結婚して夫の家に入るときは、全く家庭內に封鎖せられて、外界との交涉を全く斷絶せられ、公の生活にも、社交的な生活にも加はることを嚴禁せられた。ギリシャの詩人は女性を讃美する多くの詩歌をよんだが、女性の實際の生活は肉體的にも精神的にも光をうばはれたる捕虜であつた。デモステネスは言ふ。男性が女性と接近するのは、嫡子をうるため、よく世話する同衾者をうるため、愛の遊戯を享樂するための情婦をうるためであると。ギリシャ人は愛より來る結婚といふことを知らなかつた。最もよい場合でも夫が妻に有する感情は、旦那がその嬖妾にもつ情である。貞操と抑制を强制せられた女性は、男性の情熱の對照とはならずして、その對象となり得たのは自由なる女僧アフロディット、乃ち賣淫婦(Hetäre)であつた。

エジプトでは、處女は年に一度生殖の神の神殿で他人に貞操を試嘗させたが、後代に至つては毎日イリス、アスタルト、アナヒタ、ミリッタ等の神殿に多くの女性達が集つて貞操を賣つた。それは下婢および女性奴隷が多かつた。自由人の妻も持参金を有するときにはその難を免れたが夫の抑壓ひどきときには夫より解放されんがために生殖の神殿に出でて貞操を賣つた。かくして宗教的信心と、困窮と抑壓との原因によつて、すでに古代に賣淫（Prostitution）なるものが生じた。それは奴隷制度の發達とともに發展した。そして賣淫は、藝術科學とともに、ギリシャの時代に至つて最高の段階に發達した。有名なる賣淫婦はもとみな女性奴隷であつたといふことは、賣淫なる社會現象は、如何なる理由によつて發生するかを明瞭に物語つてゐる。自由を抑壓され、經濟的に苦しまされた當時の女性が、自由を得る唯一の道は、賣淫婦となり、その美貌と才能とによつて詩人に唄はれ、畫家に描かれ、國民に崇敬されて、その結果有名なる人達の妻やその他の關係者となることであつた。ペリクレスの愛人アスパシア、ソクラテスの女教師ディオティマ、プラトーの女生徒ラステネイア、エピクールの女生徒レオンティオンは、みなはじめは賣淫婦であり、後に至つてこれら有名なる人々の伴侶となつた人達である。

イングラムによれば、ギリシャに於いてははじめ捕虜のうち

男性は殺され、女性のみが奴隷として使用せられた。ホーマーの時代にはすでに女性奴隷なる言葉が存在してゐた。女性奴隷は、家内工業および下婢の仕事を擔任した。女性奴隷が男性奴隷よりも特に虐遇されたと言ふグローテの考は誤りであつて、兩性は同様に主人の虐使をうけた。女性の奴隷は、その善行の報償として男性との性交を許容せられた。兩親の困窮のために、娘を賣渡しまたは質入し、その娘が女性奴隷の境涯に入り込んだことはテレンツおよびプラウトゥスの喜劇によつて描かれてゐる。また、女性奴隷の交易が盛に行はれて、キプロス、サモス、キオス、エッフェズースの市場では、女性は音樂師、舞踊女、賣淫婦として市場へ輸出せられた。また女性奴隷は、看護婦、仕事婦、下婢として使用せられた。また特殊なるものとしては隨行婦（Pedisequae）があつた。當時の主人又は女主人は、外出に當つて一人或は多くの女性奴隷を引き具して行つた。すでにホーマーの時代に於いても一、二人の若い女性奴隷を引き連れて同行したことが、イリアードに出てゐる。隨行婦の多少によつて、主人の財産の多寡が分別せられた

ローマに於いても、初期には農耕をいとなみ氏族的結合をなしてゐたので、女性の地位は良好であつた。家族の概念のうちには、兩親、子供、奴隷が入つてゐた。彼等は勞働を嫌忌しなかつた。すべての家族の成員は、一緒になつて勞働した。女性はむしろ尊敬せられて、妻は夫とともに客を應接し、祭りや芝居やサーカスに行く自由さを有つてゐた。そしてギリシャのやうに狹隘なる女部屋（Frauenhaus）に閉ぢ込められるやうなことはなかつた。

しかし、法律上に於いては女性は男性の後見、監督のもとにおり、自由なる財産の處分權を有してゐなかつた。古代ローマの法律によれば、女性は人間たる女それ自身としてではなく、財産として法律のもとに保護せられたのであつた。女性は、遺言も、遺贈も借財をする權を有さなかつた。

ローマが單なる素朴なる農業國から、一轉して世界的の帝國となり、掠奪がローマに殺倒して奴隷制度が世界歴史に於いて最高の繁榮を示し、世界の富がローマに流入した。自由なる小農の代りに廣大なる大土地たるラティフンデュームを有する大土地所有が發生し、自由なる小規模の商業や工業の代りに、奴隷を使用する大規模の工業、商業が成立した。かゝる經濟的・政治的の變革は、また、古代より傳統し來れる女性の地位を一層、被抑壓的のものとした。

かゝる變革の結果は、ローマ人が勞働を嫌忌し、これにたづさはるものを輕蔑し、すべての勞働を奴隷をして行はしめたこ

とがその一であつた。女性に對する男性の輕侮、從つて抑壓の强化がその二であつた。

奴隷制度の盛大とともに、從來家庭に於いて家事を統制し、子供の養育、敎育にも權利を有し實行してゐた女性は、それらの家庭内の仕事も奴隷のために奪はれ、または奴隷の手に渡し、自らは、夫の絶對的支配のもとに服從を强制されるに至つた。女性は國家に對し何等の權利も義務も有せず、從つて公事には全く無理解となつた。富の增加、從つて貧富の懸隔の增大は、上流者には贅澤と奔放なる情慾の享樂を與へ、下流者には奴隷化と賣淫婦化とを醸成した。上流の女性は、夫の絶對的支配のもとに、僅かに、美術の享樂と消費の享樂のみが許された。それもしかし、無制限ではなかつた。ポルテイウス・カトーはある大會合で、女性に對して次のごとき演説をした。「男性よ！享樂をのみ追及せんとする女性の欲望を制馭せよ。しからずんば女性はやがて男性との同權を主張し、國家生活に於いて男性を支配するに至らん」

かくして古代ローマの比較的自由なりし結婚制度は消滅し、女性の不貞のみが嚴罰に處せられた。女性は夫の無限の抑壓からまぬがれるために、賣淫婦に登錄するものが激增した。かくして女性の地位はますます惡化した。ユスケニアヌスの立法は草案中に左のごとき規定を設けた。女性はすべての官職――市民的たると國家的たるとを問はず――より除外すべし」と。かくて紀元第一世のころは、女性の地位は暗黑の最たるものであつた。「いかなる時代、いかなる國を問はず、未開人、野蠻人の間においてすらも、約二千年前のローマ帝國より以上に女性の地位の低かつた例はなかつたといふも誤がないであらう。婦人は何等の權利も持たず、終生他人の保護のもとに置かれた。女性は出生後父の所有物となり、結婚によつて夫の所有物となつた。」

イングラムによれば、女性奴隷は、ローマに於いて、劇場、浴場等、湯女、掃除婦、客を享樂させる仕事、舞踊女、唄女、隨行婦として使用せられた。女性奴隷には、コンテユベルニユームと稱する一時的の性交が主人に許容されたのが唯一の自由であつた。

ギリシヤ、ローマは、ともに、今日に至るまでその大なる影響を與へてゐるやうな立派なる文化を示した國家である。しかも、かゝる社會のもとに於いて女性は、その歷史に於いてもつとも慘虐なる境涯に陷つて苦悶したといふことは、大なる歷史の皮肉である。

（四）

古代社會の崩壞に續いて來たものは、中世封建制度の社會である。ここでは奴隷制度の代りに農奴制度といふ隷屬形態が行はれた。そして農奴は、領主に隷屬して貢租と賦役とを收奪された。女性もまたそれからまぬかれることが出來なかつた。

女性はしばしば賦役に引出された。その仕事は主として收穫および收納の勞働であつた。賦役の時には、子供をつれて來ることが許された。そしてこの賦役への女性の參加は強制的であつて、それに反する時には、罰金に處せられた。また女性は、被服、裝飾その他の手工業的生產を貢納として獻じた。ラッサールは言ふ。「女性は領主をよく經濟しようとする熱心のあまり家に歸ることが出來なかつた。夫のある婦は、麻製品や羊毛製品を領主に獻上し、麥芽を製し、パンを燒かなければならなかつた。……農奴は酒に醉つぱらつて領主をよろこばせ。……自分の妻に優美なる服を裝はせる義務をもつた。」女性はさらに結婚稅その他多くの雜稅を貢納する義務を課せられ、また、最も苦痛とするところの「初夜權」――それより前に領主が貞操を試嘗する權利――に絕對に服從しなければならなかつた。

中世の中葉以後、中世都市が發生し、商業工業に從事するものはギルドなる組合を組織した。ギルドは形式上は女性を排除した。しかし、實際上では、女性もまたこのギルドに參加した。女性が參加したギルドは、主として、紡績織物業の方面であつて、例へばドイツでは、ブレーメン、ケルン、ドルトムンド、ゲンチヒ、シュレジア、スパイエル、ストラスブルグ、ウルム、ミュンヘンには、それらの女性の參加したギルドが多かつた。その他、毛皮業、パン燒業、刺繡業、帶匠、革具業、紡績業、鞣皮業、金箔業、紡金線業等にも女性はギルド成員として或は徒弟、弟子として活躍した。パリその他二三の都會では婦人獨占のギルドがあつて、そのギルドの親方も女性がつとめた。それは主として織物業および、小賣商業の方面であつた。ギルドを組織した以外の職業に於いても女性は活躍した。浴場、理髮店の經營、女商、兩替業、稅監督官等になつた女性もすくなくなかつた。ギルドの發生は、中世に於いて、ごく僅かな間であつたが、勞働者を領主の權力、抑壓から解放した。同時に女性も農村に於いて農業に從事するよりは、都市に出でて、自立して勞働することによつて、若干の自由を獲得した。

しかし、中世の末期に從つて、ギルドが商業資本の觸手に攪亂されるとともに、女性は男性の徒弟、親方の非道によつて、ギルドから放逐された。女性の放逐は、十五、十六、十七世紀

に亘つて完成された。當時、各都市の人口は、男性よりも女性が多かつた。加ふるにギルドを追ひ出された多數の失業女性が發生したので、ここに深刻なる婦人問題が發生したのである。ウイルブラントは言ふ。『婦人問題は、職業が莊園より分離し、都市に手工業が發生した時に、乃ち家族内の分業とともに國民經濟的分業が發生した時に、はじめて發生した。だから、我々は中世都市に於いてすでに婦人問題を發見することが出來る』かゝる問題の解決のために企てられた社會政策としては、尼寺の建設、獨身女性慈惠院の設立等が行はれた。フランクフルト丈でかゝる設備が五十七をも數へたといふことは、失業女性、經濟的に困つた女性の如何に多かつたかを物語る。

その後、新航通路の發見、新大陸の發見とともに商路が擴張し、資本がヨーロッパに流入するとともに、貿易、交易によつて巨富を占めた商人達は、それを商業資本として、家内工業又はフエヤラーグ制度といふ經營を營んだ。ギルドを放逐せられた女性達は、家内工業として、商人統制の手工業に從事した。家内工業は、更に進んで、工場手工業となり、さらに工場工業となるにつれて女性の勞働區域が擴大した。機械の發明は、勞働を簡單にした。それは女性の勞働參加の機會を多からしめた。最近には産業合理化が行はれ、男性にして女性のために仕事をうばはるるものが多くなつた。勞働の範圍は擴大したが、しかし、女性も亦男性勞働者とともに今日全く資本家のヘゲモニーのもとに抑壓せられてゐる。かくして女性は、かつての日以來今日に至るまで、經濟的抑壓のために、人間としての自由を抑制せられてゐる。女性の解放は、だから、かゝる經濟的抑壓をゆるす制度の止揚によつてのみ可能である。

附言。本文は、女性社會史を判り易く書くを目的とした。締切時間の切迫は、資本主義下の女性をもつと詳細に書く餘裕なからしめた。本文を書くに當つて使用した主なる參考書を左に參考までにかゝげておく。

Lily Braun, Die Frauenfrage, 1901.
Willbrandt, Die Frauenarbeit. (A.N.u.G)
Bücher, Die Frauenfrage in Mittelalter, 1882.
Zetkin, Die Arbeiterinnen und Frauenfrage der Gegenwart, 1889.
Strasser, Frauenarbeit u. Rationalisierung, 1927.

外國語の世界

花園兼定

一

人間が與へられてゐる音聲を、何故言語に用ゐるやうになつたかは、一つの大きな疑問だ。一つの國語が、どうして、今の形に統一が出來たかを考へれば、一つの大きな不思議だ。言葉が、相手に與へる働らきも、いひしらず、いとも、いとも、くすしく、たへなるもの」だ。言葉は、互に個別の無用の背景の中に、言葉だけは光つてゐる。政府も、生活も、言葉を除いては、存在が困難になる。言葉は魔物だ。自分の觀た所、感じた所を世俗に明かにした人たちは、さういふ人たちは、磔にせられたり、焼き殺されたり」した。言葉のために、人は手を握り、或は人と戰ふ。言葉の影が恐ろしい。人と向き合ふことは恐ろしくない時でも、人の「言葉」は、全く一人の敵だ。言葉を通して人は戀をする。その場合、言葉は信仰だ。

けれども、ここに影のない言葉があることを發見した。形は完全に近いけれども、影がないのだ。ほんとうに知り合つた人と人との間でなければ、意味は分るけれども、信仰が容易に生れない言葉だ。話してゐる人と聽いてゐる人とが、ただ音聲を交換してゐるだけの言葉だ。見所だ。それは外國語だ。

二

人生に嫌やなものが、二つある。それは、人間の手と言葉だ。手や言葉から、人間は救を受けることもあるが、害を受ける場合の方が多いやうだ。けれども、そのままでは、人間の世界に、少しも恐ろしくないやうに思はれる言葉がある。それは外國語だ。

言葉には、皆な根が生えてゐる。私たちは多くの場合、その土の上に現はれたところだけを見てゐるけれども、その土の下に根があるのだ。外國語を、自分の庭に植ゑて見ても決して他の植物のやうには、成長しない。根に、間違つた根毛がついてゐたり、根毛が無かつたりするからだ。

外國語では、人は極めて稀れに興奮するだけだ。外國語は、われわれに取つて、それは魂と人形だ。それは、魂と影のない言葉だ。それは魂と手段だ。それは魂と進化だ。それは魂と鈎のないフックだ。

母國語の世界から、外國語の世界に出ることは、だから、一と通りの場合には、眞空に入ることだ。尤も、しまひには、その眞空が本然の姿であることを發見する。

私たちは、日本語の他に、一つ、又はそれ以上の外國語を話したり、書いたりする。けれども、その外國語は、影のない言葉だ。それを用ゐて、容易に人を打つことも出來なければ、容易に人を殺すことも出來ない。これで

ノを愛することも、人を救ふことも困難だ。

自分の話してゐる外國語が、どんな姿であるかは、自分には分らない。自分の歩いてゐる姿が、完全に自分に分らないやうなものだ。ラヂオで話してゐる時に、聞いてゐる人に達する自分の聲が分らないやうなものだ。けれども、若し、日本語を話してゐる西洋人と、われ／＼が日本語で話して見れば、大方の見當はつく。そして、初めに、大きな失望が來る。自分の外國語の醜い形を、鏡で見せられるやうなものだからだ。けれども、次には、自分の話してゐる外國語も、大方相手に取つては、聞いてもいゝし、聞かなくてもいゝものがあり、相手の責任、相手の感情生活とは甚だ薄い關係のものに見える時に、私たちは救はれるのである。結局、外國語の世界にあつては、辛辣な國語の強力を用ゐる場合と異り、相手の感情生活に對して（それが相手の生活全部に、直ちに影響する）大して惡いことをして居ないことを信ずることゝなるのである。

III

去年の夏、ハンガリーから、日本へ來たメッガー君といふ青年が、今、横濱に住んでゐる。メッガー君は、友人のH君と、GINZAを歩いてゐた。メッガー君は、日本に今まで來たことのない人だ。それでゐて、日本語で何でも言へるんだ。國にゐて、日本の旅行者（白鳥庫吉博士を含む）や、書物から學んだ日本語が、日本に來て、誰れにも了解されるのが、彼に取つては、一つの驚異なのである。メッガー君は、私たちの後ろに、知りもしない少女が歩いてゐるのを、見た。勿論私たちの前にも知りもしない少女が歩いてゐるのを、彼は見た筈だ。勿論それがGINZAの行進だ。

「あなたは、大へん、たくさんの、お孃さんの、うしろを、走つてゐらつしやいます、ねえ！」と云つたのは、彼である。私は笑つた。その言葉が異樣だからだつた。決して、私は輕蔑もしなければ、不快をも感じなかつた。これは、一つの例だ。

IV

去年の夏、私は、はじめて北海道の街を歩いた。札幌で、アイノ學者のバチエラー老人を訪ねた。その時、老人は、私に「自傳」をくれた。この自傳の中に、バチエラーさんが如何に、日本語に苦んだかが書いてある。

バチエラーさんは、田舍に引込んで日本語を勉強して歸つて來ると、話す言葉が、皆な田舍の爺さんのいふやうな言葉だといつて、學生に笑はれたと書いてゐる。

可成り、日本語が上手になつてから、バチエラーさんは、札幌の町で、知り合ひの奧さんに會つた。奧さんは、可愛い子供をつれてゐた。「奧さんは、何匹お子さんを、お持ちでございますか」と尋ねたといふ話も、一つの失敗として書かれてゐる。フロイド心理學から觀察したならば、その子供の顏が、ポチに似てゐたことから起つた間違だつたかも知れないが、兎に角、ありさうな文法の間違だ。

V

シンリキシヤ・デイズを書いたシドモア夫人はその本の中に、日本の特殊の數の呼び方の難かしいことを書いてゐる。動物は何匹、人は何人、家は何軒、船は何艘、人力車は何丁、

酒は何杯、長く丸いものは何本、平べつたいものは何枚、手紙書状は何通、本は何冊、鳥は何羽といふ例を擧げてゐる。パチェラーさんが、人間を何匹と數へたのは、無理のない間違ひだ。

目ざましい他の一つの例は、東京の米國大使館のソールスベリー君が、ゆふべ、ホテルへ、日本の、きれいなネズミを三人伴れて踊りに行つたりした話もある。これは、ネズミとムスメとの音の相似から來た間違だ。

もう一人は、印度の紳士で、文壇の人々の中に交友の多いサワルパル君が、あんなに完全に近い日本語を話しながら、「私は近頃まで——」と、彼は、赤坂BON・TONの明るい一階で、私に言つた、「電話で、モシモシといふのが、ムシ！　ムシ！といふのだと思つてゐた。」「そりや、君、つまりMonsieur Monsieur（いちやついてやがらあ！）なんだよ！」といつて、私は笑つた「僕は、また、Monsieur Monsieur かと思つてゐたのさ！」と、彼も笑つた。

サワルパル君が、日本語をしやべるのは完全に近く、日本人で外國語をしやべるのを聞いたことがない。

「なに、僕は自然に覺えて了つたの。日本に來て、半年ばかりすると、日本語が分つて來た。今年で、十四年目だが、つひ近頃まで日英辭書の小さいのを、始終ポケットに入れてゐてね、分らない言葉に出逢はすと、僕はいつも見たの。文法の本も讀んだが、やつぱり日本人のお友達が澤山出來たのが、よかつたんだね。一番いゝのは、カフエーですよ。いろんな言葉を敎へてくれるんでね。それから學生！」と、サワルパル君は、いつた。

彼の、「文法の本も讀んだが」は、ほんとうだ。文法は助だ　邪魔にさへなる。日本の發音文字、名詞と性、敬語、漢字、數詞、動詞變化の八分類、乃至十分類、等、等が、文法學としては、價値があるが、一々、それを頭腦に呼起すことは困難だ。日本人と外國語との關係に於ても、この事は、事實だ。

VI

米國大使館には、外交官補の語學研究の課程が設けてある。これに依ると、初め三箇月は書物を用ゐざる日本語會話、あとの九箇月間で、十二冊の小學讀本を學ぶ。かくして、一年の終りには、六百五十字の漢字が書けなければならないのである。そして、第二年目の終には、千八百三十字の漢字が書けなければならないばかりでなく、新聞の社説が讀め、手紙が一と通り書けるやうになることが要求されるのである。

外交と言葉とは不可分のものだ。イエスペルゼンは、彼の發明した國際語に關する著述の中で、この問題を記して、何故クレマンソーが巴里媾和會議で活躍したかを思出して、それを、彼のイギリス語の知識に因るものあることを書いて居る。

米國外交官の卵が、かういふやうにして、日本語學者となり得るものならば、日本としても、どれほど有難いか知れないのである。何故ならば、日本と米國との理解が、一層深められるに違ひないからである。

言語の學生に對して、イギリス外務省は、アメリカ以上に峻酷である。イギリスでは成績の悪いものを本國へ歸して了ふのである。英國大使館に、いつも一人二人の日本語學者が居るのは、その故である。

VII

けれども、どんなにうまくたつて、外國人の言葉が、その土地で生れた人と同じやうであり得ることは、絶對に困難だ。

——「僕はね、ソーバの會に行つて來た」とサワルパル君が、私の家の玄關口で言つた。

——「さうかい、儲かつたかね」

——「うまかつた」

——「澤山やつたかね」

——「何に、少しさ」

——「君は好きかね」

——「大好きさ」

——「よく金があるね」

——「なに御馳走さ」

それは、瀧野川の「蕎麥の會」の話であつた。

私が、東京で知つてゐる西洋人の中で、のびのびと話の出來る人といへば、早稻田大學のフランス語及文學の教授、荒野ヂョルジエット夫人、ロシア大使館の東洋語學者スパルウイン博士、この間までヂャパン・タイムスに居て、今は日本の文壇に出ることを、すすめられてゐる前述の印度の紳士サワルパル君の三人だ。まだ此の他に、關西には、ロシア人で、日本の比較文法を書いてゐるプレトネルさんがゐる。倉田百三の「出家と其弟子」を譯し、この頃、「大阪スケッチエズ」を書いたグレン・ショー氏がゐる。プレトネルさんとは、ヨーロッパから同じ船上の客となつた時、彼の日本語は、著しく私を驚嘆せしめたものだ。ショー氏は、初めて印度で、日本語を學び、日本に來た人で、大阪に住んでゐるので、この人の言葉には大阪アクセントが見出される。

こゝでは、東京日日に居て、クチヤクチヤした日本文の原稿が讀め、そしてイギリス語と日本語とを同一に話せるウヰリアム・フエーゲン君などを、勿論除かねばならぬ。フエーゲン君は、日本に生れて、お茶の水の師範附屬で日本の中學生と同じに勉强した人だからだ。

VIII

文法で、ブラウニングを讀んで失敗する以上に失敗することの確實なことは、文法で日本語を話さうとすることだ。チエインバレンの文法でも、アストンの文法でも、ローズ・インネスの文法でも、ランゲの文法でも、それは唯、人間の頭腦を混亂せしめるものだ。それでも、外國人は、誰れでも、もしその人が日本語を研究しやうとしたものならば、此等の文法は、幾度か讀んでゐる。スパルウヰンさんは、アストンの文法は、說明的でないところが特色で、そのまま覺えるシステムとしてよく、チエインバレンの叙述には、言語哲學があり、ランゲの文法は、日本語にドイツの文法の形式を當て箝めたものであると云つてゐる。ヂョルジエット夫人に取つては、ローズ・インネスは、伯林東洋語を學んでゐた時分からの、大切な、寶玉だ。

外國人は、英語で書かれた日本文法を見てうんざりするに、きまつて居る。そして、彼等は、文法から自由でありたいと願つてゐるが、やはり、それに縛られる。文法の重荷の下に、あえぎながら、生活する。融通の利かない、人間的でない、殘酷な文法の鎖に向つて内心反抗を試みるけれども、結局やつぱり、それに縛られる。聖書和譯の功勞者、ブラウン

が「日本語の未來の形」を發見した時、浮んでヘボンの筆へ融け込んで來たことが記錄されて居るが、此等の恩人の、日本文法の考證は、いづれも、外國人に、重き負擔を課税してゐる。彼等は、文法が凡てを解決するもののやうに考へ易くなる。そして、彼等は「黃色い」といふが、何故「赤色い」とはいはないかを、文法によりて、解決しやうと試みるやうになる。

IX

「史話、及び古傳、祖先祭の學、算術、占相術、時の學、辯論法、修辭、神の學、梵智學、靈の學、軍の學、星學、蛇、及び獸群の學、並に天地、風、虛空、水、火、神、人、家畜、飛鳥、草木、猛獸、以下、小蟲、羽蟲、螻蟻にいたるまで、更に法、非法、眞僞、不善、可愛、不可愛なるを識らしむ。もし語なからんか、法も非法も、眞も僞も不善も可愛も不可愛も、識りうることなし。」といふウパニシャッドの言葉がある。けれども、語、一語間、他に依りて語り來れる時、言語と聽者の語ることが生きて、而かも生氣（プラーナ）によりて呼吸し、眼によりて見、耳によりて聞き、意によりて思惟するが如く生存したり」と聞いて、「語は人體に入れり」といふウパニシャッドの言葉は、一層有難い。生氣（プラーナ）は、語よりも、更に偉大であるからだ。

外國人と外國人との間の話の場合には、言葉のアクションと、リアクションとが、異樣に交錯する。一々の言葉の歴史、聯想、暗示、その他の特性の相違から、互の知識が別々になる。てうど、言葉の關する限り、國の成色の内容が、全く別種のものである感じをさへ起させる。さうして、私たちは、屢々其處で、さうしやうと努力することに成功するならば、ただ、非存非慾の無記性である本然な見るのみである。母國語から、外國語の世界に出ることは、本然に歸ることであり、母國語の歴史からの一つの解放である。

山梨半造と齋藤實

馬場恒吾

善く云ふ者は齋藤實は德望のある名總督、山梨は頭の良い手腕家だと云ふ。惡く云ふ者は齋藤は愚物、山梨は惡黨だと云ふ。殊に山梨が疑獄に關聯して新聞に出されるやうになつて以來、齋藤が光つて、山梨は暗闇に葬られる形になつた。今は何方を向いても山梨に對する非難攻撃を聞く許りである。私は敢て山梨を辯護しやうと思はない。だけれども、彼れがそんな惡人であらうとは信じられない。

元より疑獄に關しての事は、裁判が濟まなければ何とも云へない。又裁判の結果がどんなになるかも、吾々の豫想し得る所ではない。新聞に出てゐる所の事件の内容は、朝鮮に取引所を建てんと企てた者が、山梨に五萬圓を提供した。其時は只政治運動に寄附すると云つた。それが後に取引所の運動に關係がある金だと思はれたので、山梨は金を返した。此事實が瀆職罪になるか、否かを、裁判所が決定するのである。

齋藤總督も五萬圓に祟たられた事實がある。今から十六年前、山本權兵衛内閣のとき海軍の瀆職事件たる所のシーメンス問題が起つた。齋藤は海軍大臣であつた。豫審調書に依ると彼れは中將松本和から五萬圓借りて別莊を作つた。松本はシーメンス事件に關聯して罪になつた。だが齋藤は情を知らずして金を借りたのであるとして罪にならなかつた。彼れは山本内閣の潰れると同時に海軍大臣を辭職して、それから六年間は世間に遠ざかつて居た。大正八年に同じ東北人たる原敬(總理大臣)に引張り出されて朝鮮總督になつた。そして一時は名總督と謳はれたのである。山梨だつて若し幸にして無罪にならば、他日又名總督と謳はるる日が來ぬとも限らぬ。人間萬事棺を蓋ふて定まる。

私は山梨論を書く目的で、種々の人に會つた。そして山梨を

良く云ふ者がないのに驚いた。終には托鉢の氣味で、何か山梨の善い所を聞かして呉れと云つて廻はつたけれども、私を感激せしむる何物をも聞き得なかつた。山梨に面會を求めたが面會出來なかつた。それ故に、四圍の情勢から云へば、私として最も容易な業は、山梨を罵倒する事である。だが、それが出來ない。

其昔は、私はまだ新聞記者であつたとき一度彼れと喧嘩をした事がある。私が勤めてゐる社の同僚の記者で、麻布の三聯隊へ豫備招集とかで三週間許り入營した者があつた。それが入營してゐる間に、私共の出してゐる新聞に三聯隊の酒保のうどんが惡るくて高いと云ふ記事が出た。その記事を見た兵隊が酒保に押掛けて、器物を破壞した事件が起つた。すると聯隊では入營してゐる記者を捕へて、お前へがあの記事を出したのであらうと云つて、彼れを軍法會議に付した。陸軍の造營物破壞の罪に問ふたのである。酒保は軍隊設備の一つになつてゐるからさう云へるのであらう。

新聞に勤めてゐるものを、三週間入營せしめられる事は、新聞の編輯をしてゐるものにはかなり困る事である。しかしそれは國民の義務だから已むを得ないとして、其上に其記者が有罪になつて長く監獄に入れられると吾々は大に困る事であつた。それで私は其時の陸軍大臣であつた山梨の處へ懇願に往つたのである。

私は何んとかして、其記者が早く新聞社へ歸れるやうに出來まいかと云ふ話しをしたのである。すると山梨は

「そんな馬鹿な事が出來るものか。軍法會議と云ふものは神聖なものだ。君等が陳情したつて何の役にもたたぬ

「大臣が仰つしやれば、どうかなるでせう。

「君は怪しからんことを云ふ。大臣の命令で軍法會議が動かせると云ふのか。そんな事を云ふと、君を引つくゝつて、軍法會議に連れて行くぞ。

と威丈高になつて怒鳴つたものである。私は、此上何を云つたつて駄目だと思つて、其儘引き下がつたのであるが、其の時の山梨の怒鳴つた聲がサバ／＼として心持ちが良かつた。少しも未練が殘らなかつた。山梨があんなにカン／＼怒るのは、稚氣があつて面白いとさへ思はれた。

彼れが陸軍大臣を罷めた後、私は時々彼れが和服の着流しで、新宿御苑の裏通りや、銀座近くを散歩してゐるのを見た。何日も夫人と同伴であつた。眞僞は知らぬが、彼れは家庭的に幸福でないと云ふ噂があつた。だから、私は當時は殆ど失意の地位にあつた彼れの姿を同情の眼で見送つた。私の頭には、山梨は

惡なべき男でないと云ふ印象が深く刻まれてゐる。だから、今日になつても、世間が彼れを取り所のない男のやうに云ふ事に對しては、承服出來ないのである。

　彼れが疑獄に引かゝりそうになつたとき、陸軍の巨頭――河合操、鈴木莊六(參謀總長)、宇垣一成(陸軍大臣)など――は山梨に向つて陸軍大將の官職を辭する事を勸告した。夫は陸軍大將として法廷に刑事被告人として立つ事は陸軍の面目に關はると思つたからであらう。然るに山梨は頑として聞かない。其聞かなかつた動機が種々に解釋される。其一說には山梨が陸軍大將の肩書を捨てゝ一平民になる。恰も今から十五年程前に大浦兼武內務大臣が大隈內閣の時瀆職事件にかゝつて大臣を罷め、子爵を罷め、全く隱居の身になつたから、罪には問はれなかつた。山梨が今軍職を罷める。すると恰も大浦のやうな立場になる。それで果して不起訴になつたか否かは判らぬが、若し不起訴にでもならば、彼れは大浦と同じく監獄に入る事を免れる爲めに大將を辭した事になる。それは卑怯だ。黑白は男らしく法廷で爭ふ。そして裁判で無罪になつたとき、立派に軍職を辭して見せると、それが彼れの腹であらうと云ふ。

　他の一說には、無罪になつたら、なんで大將を辭するものか。又、政界に復活する策動をするから、見て居れと云ふものがある。

　これは將來の事に屬するから、何方でもよいとして、山梨が現在軍職を抛たない心持ちには、辭職して罪を許して貰うたと云ふのは厭だと、かうした考へのあるのは山梨らしい行き方だと、私は思つてゐる。

　それと同時に、山梨は一度や二度の失敗で其政治的功名心を捨てる男でない事も事實である。今から五年前に、今の宇垣が加藤高明內閣の陸軍大臣として大將級五六人の首を切つた事がある。それは大正十四年の四月であつた。田中義一が此首切られ連中の筆頭として豫備役に編入される事になつてゐた。田中は首を切られるのは恥辱だと思つた。それで政友會入りを急ぎ、自分は政友會總裁になるのだから、陸軍大將の現役を辭職したいと申出たのである。それから數日して外の福田雅太郎、其他の大將連が豫備役に編入された。山梨も其中の一人であつた。所ろで其頃赤坂御所で觀櫻會があつた。政界の巨頭、大官、名士が招かれた。田中は政友會總裁となつて得意然としてゐる。外の豫備大將は失業して意氣悄然としてゐる。只山梨だけは少しも失意顏をしてゐない。田中さへ政友會總裁になる。俺れもこれから政治的進出をするのだ。今に見て居れと云ふ決心が其眉目の間に動いてゐた。其鬪志滿腹の爲めに、彼れは幾度か公生

淵から葬らるべき機会があつたに拘らず、其度毎にどうにかこうにか、再び社会の表面に浮び上つて来た。彼れと同時に豫備に編入された大将連が何れも鳴りを静めたに拘らず、彼れは政治的に活躍せんとした。大木遠吉伯（故人）、水野錬太郎、鈴木喜三郎と四人組を作つて、田中の政友会と床次の政友本党を結び付けんとした。それが失敗すると、彼れは大正十五年春の議会に梅田寛一事件で問題の人物となつた。箕浦は梅田代議士が山梨と通謀して政友本党の議員に脱党を勧誘した事實を認め、そして梅田氏に對しては[illegible]すべしと決議したのである。此事件丈けでも山梨は政治的に葬らるる筈であつた。其他にも彼れに關する金錢上の問題が屢ゝ新聞に出た。其度毎に彼れは一時は閉息してゐるやうであるが、暫らくすると又復活して来る。そして遂に朝鮮總督になつた。恰かも彼れは人氣を快復する戰術を心得てゐるかの如く思はれた。

尤も彼れを朝鮮總督にする事は田中の本意でなかつたと傳へられてゐる。田中は寧ろ避けられゝば逃げ度いと思つた。併し山梨に捩ぢ込まれると、田中は否と云へない理由があつたらしい。田中は遂に彼れを朝鮮總督にした。其頃田中は云つた事がある。

山梨の方皆は山梨よりはエライ、俺れの所に來て、山梨を何にして見れ、彼にして見れと表明するでのう一と云ふのである。山梨の闘志は、或は夫人の闘志であつたかもしれぬ。夫人は日清戰爭當時の陸軍の巨頭田村怡與造の娘である。山梨は田村に有爲の青年士官として見込まれたのである。これは山

青年士官としては確かに有爲であつたに相違ない。これは山梨とは仲の悪るい佐藤安之助氏から聞いた話であるが、山梨は陸軍大學校に於ける戰術の教官として群を抜いてゐた。佐藤は山梨の弟子として陸軍大學校に行つた事がある。其譯はかうである。

佐藤は日清戰爭の時柴樹にて負傷して片足をなくした。少尉であつたが、足がなくては軍人になつてゐてもつまらないと思つて、軍人を辭職しやうと思つた。所が、參謀本部第四部長の東條英教が云つた、陸軍には足が不自由でも出來る仕事がある、參謀本部に來て居れと。それで、佐藤は參謀本部に入れられ其所から陸軍大學に遣られたのである。其時、東條が云ふには大學には一級に五十人の生徒が居る、それが三組に分れて、三人の教官に順繰りに教へられる事になる。其中に山梨と云ふ戰術の教官が居る。他の教官に付く必要はない。君は山梨一人を専門に教はつた方がよいと。

佐藤は其當時を追懐して云ふ、戰術の教官として、山梨は他

の連中に比較して段違ひに良かつた。頭が非常に明敏である。事務的の才がある。勉強する。多くの書物を讀む。後に獨逸に留學せしめられ、大使館附武官となり、其見識を廣めたから、兎に角、陸軍部内の切れ者になつたのだと。後に山梨が陸軍大臣、佐藤が少將であつたとき、二人の感情が疎隔して、佐藤は陸軍から身を退いたのである。

日露戰爭の時、山梨は遼陽を攻めた奥軍參謀であつた。其時も彼れは外國の新聞記者を怒らしたが爲めに、日本の外債發行を頓挫せしめた事がある。日露戰爭は世界の注目を惹いて、世界中の有名な戰時通信員を日本に呼び寄せた。其中には南阿戰爭の通信で名を擧けたベネット・バーレーなどが居た。それらが先づ東京に來る。所ろで東京の軍部は彼等に戰地に行くのを許るさない。六ケ月も東京に滯在せしめた。彼等の本國からは早く戰場の通信を送れと云ふ催促の電報が來る。彼等は戰地に行かれないから、打電すべき何物もない。從つて、彼等は東京に居る時からして不平滿々であつた。そして遼陽の攻擊前に滿洲に行くのを許るされたとき、彼等は今迄の失敗を取り返さうと意氣込んでゐた。滿洲に來ては山梨の管轄に屬するやうになつた。

所ろで山梨が極端な祕密主義を取つた。外國の新聞記者を決して戰線に近づけしめない。遠くから大砲の音を聞かしたのみであつた。外國通信員は南阿戰爭の時は、兵卒と共に塹壕にもぐり、兵卒と共に突貫し、さうして初めて面白き通信が書けたのである。それが只遠方から大砲の音を聞くのみでは何の通信も書けない。今少しく戰線に近づかしめて見れと云つても山梨は頑として聞かなかつた。遂に頑張り通して、遼陽が陷落して二日目に初めて外國通信員を遼陽に入れた。戰爭の濟んだ後の遼陽を見て何になると憤つて、彼等の大半は引揚げた。それはまだよい。踏み止つた中には、日本が吾々に實戰を見せないのは、何か日本軍に缺陷があるからであらう。日本は遼陽を取つたけれども、日本軍の將來は必ずしも樂觀を許るさないと云ふ風な通信を出した。これが日本の外債を募集する人氣に影響して、其任に當つてゐた高橋是清から、窮狀を訴へて來た。日本軍の元締格の山縣からも苦情が出た。山梨の地位は風前の燈であつたが、兒玉參謀長の取り做して、漸く無事に治つたと云ふ始末であつた。

日獨戰爭の時は山梨は青島攻圍軍の參謀長となつてゐて、最早押しも押されもせぬ陸軍の山梨になつてゐた。だが其時も、東京朝日』の特派記者美土路昌一君に青島からの退去命令を出した。何か新聞に出したと云ふのである。新聞記者に對して高飛

中に出るのは彼れの為になつてゐる。
　田中義一が原内閣の陸軍大臣になつたとき、彼れは山梨を教育總監部から抜擢して次官にした。そして自分が尼港事件で辭職した後に山梨を大臣にした。田中の下の次官としては、山梨は切れ味を見せた。田中はあゝしたぼうとした男であつたが故に、只漠然たる希望としての方針を立てるのみであつた。山梨は即座にそれを具體的な政策として實行した。其方面では彼れの鋭い頭と事務的手腕が働いた。山梨はそれから原、高橋、加藤友三郎三代の内閣に陸軍大臣としてゐた。高橋内閣の時に彼れは陸軍の軍縮を行つた。それまでは一大隊が四中隊で編成されてゐたのを三中隊にした。師團、聯隊の數は減さずして内容を少なくした。門構は元通り、其數は二十八萬から約六萬減じた。其金は殆んど全部一般會計に返上した。陸軍から見れば一種の受難時代である。それが爲めに軍部内に於ける彼れの威信が減殺された。尤も世間一般は兎も角も彼れが陸軍の費用を減縮した事に對して好感を表したのである。
　此陸軍々縮は原敬内閣時代から議に上つてゐたのである。原は義務教育國庫負擔の何千萬圓かを捻出せんとした。それで中村啓次郎其他二三の政友會幹部に旨を含めて其金を海軍から取つて來いと云つた。中村等が海軍大臣加藤友三郎の處へ談判に行く。加藤は金を出すとも出さぬとも云はないで、
「君等は、いくらの家賃を出してゐるかね」
と聞いた。いくら〳〵と答へると、加藤は重ねて、
「僕が今住んでゐる家は元と陸軍少佐の住んでゐた家だ。陸軍の少佐は海軍の大臣が住むやうな家に住む。陸軍と海軍とはこれほど身代が違うのだ。金は陸軍から取る方がよい」
　それで加藤は陸軍をかう云ふ風に改革すれば金が出るのだと教へて呉れた。
　中村の連中は加藤に教へられて山梨の處へ談判に行つた。山梨は陸軍を縮少する意志のある事に言質を與へた。其結果が彼れが行つた縮少であつた。
　加藤の方も華府會議の結果として、海軍を縮少して、幾らかの金を吐き出した。併し如何に縮少するかに關しては、政黨人の容喙を許るさなかつた。政黨から行つた人々が八八艦隊を繰延べるとか云つたとき、加藤は
「君等はまあそんな事には觸れないで置き給へ、金さへ出ればいゝぢやないか」
と云ふ調子であつた。後に山梨は加藤友三郎内閣の陸軍大臣となつて敢て不平を云はなかつた。
　かうした事實に照らして見ても判る如く、山梨は外面は鼻柱

が強く、高飛車に出る癖があつて、誰れに向つてもガミ／＼云ふけれども、内心に弱い所がある。人の云ふ事を聞く。友人に妥協する。會つて見ると意外に單純な所がある。それが終に彼れが周圍の人に過られる原因になつた。今回の疑獄に彼れ自身が關係してゐる程度は判らないけれども、彼の周圍に醜陋事のあつた事は事實である。彼れは人に過られる。それ丈け彼れが惡黨ではない事は判る。

田中義一も陸軍に居る間は光つた。それが政界に進出すると如何に贔負目に見てもヘマの連續を演じた。山梨も陸軍大臣迄になつたのだから、陸軍に於ては一異材であつた事は疑はれない。それが豫備になつて政界進出を試みやうとすると、飛んだ泥濘に足を突込むに至つた。其所に彼等に共通な政治に對する認識不足がある。

彼等は政界を甘く見過ぎる。彼等の所に來る代議士が平身低頭して金の無心を云つたとき、彼等は代議士はどうでもなるものと思ふに到る。以て自分等の靴の紐を解かすべく、以て自分等の顎で使へる連中だと思ふ。それは階級制度の徹底的に行はれてゐる陸軍の空氣が彼等に起さしめた錯覺である。所ろで、事實は反對に、代議士ほど人を喰つた人種はない。彼等が選擧に出る苦心は軍人が戰場に出る苦心に比較して、優るとも劣る事のない惡戰苦鬪である。彼等は耻を忍んで軍資金を作らなければならぬ。彼等は幾萬人かの心を收攬すべく頭を下げなければならぬ。彼等は當選する爲めには泥をも舐める決心でゐる。だから、人が一度選擧に出ると、當選しても、落選しても、丸るで人違ひがした程、人間が鍛れて來る。惡戰苦鬪の結果として、腹が出來るのである。彼等は腰が低くても、人を喰つてゐる。今に我黨が天下を取れば、君等を顎で使つて見せると考へてゐる。それを田中や山梨が陸軍流に號令一つで動かさうとしても中々動かない。それ故に無理な手段を取つて政界を動かさんと試み、終には政治家としては失敗に陷る結果になる。山梨に禍したのは蓋し彼れが政界進出を志したからであらう。

山梨に比較して齋藤總督は人格者と云はれてゐる。私は元來人格者と云ふものに對しては警戒する。人格者と云はれるものは大抵、喰はせ者か然らずんば卑怯にして何にもしない男である場合を見た。齋藤總督がさうであるとは云はない。だが、人格者と云つた丈けでは何の賞讃の辭にもならない。

シーメンス事件の後六年間、彼れは一の宮の海岸で釣糸を垂れてゐた。故郷の水澤の町長にならうかとも云つた。所ろで、原敬は友人思ひの首相であつた。彼れは阿部浩、古賀廉造を起用

したと同じ心持ちで、友人の齋藤實を起用した。それまで朝鮮は寺内正毅、長谷川好道と云ふ如き長州系の陸軍々人を總督として來た。齋藤は薩摩系の海軍々人である。だから元老山縣は齋藤を朝鮮總督にする事を喜ばなかつた。けれども時の總理大臣が責任を以て推薦するものに山縣が反對する理由はなかつた。不平を押へて、山縣は原の推薦に同意を表したのであつた。

それだから齋藤は原の厚意に感激せざるを得なかつた。朝鮮に行く時は、此所を自分の死に場所にすると云ふ決心を有つてゐた。朝鮮に赴任の當時、京城の南大門から行く道で彼れの馬車に爆彈を投げたものがあつた。政務總監の水野錬太郎が何處かへ隱れたと云ふので有名の話になつてゐる。此時齋藤總督夫婦は泰然として逃げも隱れもしなかつた。生死を超越してゐた彼れの態度は、確かに朝鮮統治の上に一つの效果があつた。

齋藤が命を捨てゝかゝつてゐる事は事實だ。朝鮮北境を巡視して、舟で河をわたるとき、岸から狙撃される事があつた。齋藤は平氣で居る。此點は周圍の人を感心せしめる。

だが朝鮮統治の經綸と云ふ事になれば、吾々は齋藤總督に如何なる抱負があつたかをしらない。齋藤の前に寺内、長谷川は武斷的な彈壓政策を行つた。齋藤は之を緩めて文化政策を取つた。それは畢竟するに寺内・長谷川のした所をしなかつたと云ふ迄である。朝鮮人が齋藤總督の德望に感化されたは事實である。彼等は之を稱して寺内はサーベルで支配せんとするに對して、齋藤のは眞綿で首だと云ふ。それは寺内の武斷政治が獨立運動を勃發せしめたに對し、齋藤の文化政策は病氣を爆發せしめず、只それを内攻せしめると云ふ意味だ。病氣の除かれない事は同じだ。其病氣を如何にして除くかは、異民族を支配する世界各國が頭を惱ましつゝある難問題だ。

朝鮮統治の方針として論爭された點は内地延長主義と朝鮮自治主義である。内地延長主義は原敬に依つて強調されたもので、ゆく／＼は朝鮮を内地同樣に取扱ふと云ふのである。所で此主義に依ると憲法も朝鮮に延長される。現在の衆議院に百名以上の朝鮮代議士が出て來る、吾々は日本の政黨から出て來る代議士をすら持て餘すと思ふ事がある。それに百名以上の代議士を有する朝鮮黨が參加するときは、政界の混亂は想像するに餘りある。朝鮮黨が出て來ても、政界が混亂しない時機を待つとすればそれが何年の後になるか判らぬ。

内地延長主義の完成が前途遼遠であるに對して、朝鮮自治主義が唱へられる。それは外交軍事を除いて、將來は朝鮮人に或程度の自治を許るす。行く／＼は朝鮮議會を作らうと云ふのである。副島道正伯か京城日報の社長であつたとき、此説を新聞

に書いた。すると朝鮮にある他の新聞がそれを攻撃した。副島はそれを反駁せんとしたが、齋藤總督は反駁するのは止めて呉れと云ふ。副島は自分の主張を自分の新聞で書く事が出來なければ、新聞社長を辭すると申出た。然るに齋藤總督は、新聞社長を辭する事をも許さなかつた。今辭職されては總督府が朝鮮自治論に反對であるかの如く思はれて面白くないと云ふのであつた。副島は半上落下の地位に置かれた。齋藤は無爲にして化すと云ふ事に大悟徹底してゐる。

近頃の問題になつてゐる所の兒玉政務總監の進退に關する問題もさうである。田中義一に兒玉を推薦して、山梨部下の政務總監にならしめたのは、當時樞密顧問であつた齋藤である。民政黨内閣が成立し、齋藤が再び朝鮮總督になつたが、兒玉は矢張政務總監として殘つてゐる。民政黨内閣は兒玉を退けて、民政黨出身の誰れかを政務總監の椅子に据へると云ふ噂があつた。其時齋藤は京城の新聞記者に話した。兒玉總監が罷めるときは、自分も罷める。自分は兒玉と心中する積りだと。兒玉が上京したとき、彼れは此記事が掲載されてゐる新聞を振り回はして、自分が罷めれば齋藤も罷める。ならば、自分の首を切つて見ろと云ふ態度を示した。茲まで齋藤の態度は立派であつたと云へる。

所ろで、民政黨内閣は政務總監の椅子を斷念しない。齋藤に向つて兒玉の更迭を要求する。すると齋藤は答へて、自分はどうしても兒玉に辭職を迫る事は出來ない。若し是非とも政務總監を更へなければならぬならば、中央で然るべく取計らつて、呉れ、自分には其力がないと云ふ。惡く言へば優柔不斷であるが優柔不斷も齋藤の手に依つては恐るべき武器に變化せしめられてゐる。

だから世間で齋藤を愚物だと云ふのは當らない。愚物所ろか天下の政治家中に稀れに見る智惠者である。それ故にこそ彼れは原、高橋是清、加藤（友）、山本權兵衞、清浦、加藤高明、若槻の七内閣を通して八年間朝鮮總督であり、今又濱口内閣に依つて再び其地位に就いた。大賢愚の如しと云ふ人生訓は齋藤に就いて學ぶべきだ。山梨が表面利巧さうで實際は存外に罪のないのとよい對照である。

齋藤が岩手縣に生れて薩摩系になつた事は山梨が神奈川縣に生れて長州系になつたと同じだ。所ろで彼等は人物や性格迄が薩州系、長州系に似て來たのが面白い。齋藤が表面ヌーボーで内實細心である所は薩州先輩の代表的タイプである。山梨の表面利巧に見へて内心存外に生一本なのも長州人にある型だ。山梨が田村怡與造の娘を妻にした如く、齋藤は海軍省前の銅像に

なつてゐる仁禮景範の娘を妻にした。それも彼等が世に出る途を平坦にした事も事實である。

尤も齋藤は海軍部内の秀才であつたに違ひない。山本權兵衞が海軍大臣になつたとき山本は齋藤大佐を故ら少將に昇して次官にした。山本の次官である事八年、齋藤自身が山本の後を繼いで大臣となる事八年、後に朝鮮總督たる事八年、今又朝鮮總督の第二期を勤めつゝある。彼れの官歴は永くして堂々たるものだ。人の世に處するに、功は忘れられ易く、罪は容易に忘れられない。赫々たる功を建てるよりは、願くば大過なからんとする方が安全である。此點から云へば、齋藤は官場に生活するものゝ模範としてよい。

そして彼れは自分に近づくものに春風駘蕩の感じを與へる。彼れは實際に子爵の御前樣であるが、綽名にも御前樣と云はれる。彼れが友人と酒を飲み始めると屢々午前三時四時位になる。それが綽名の出來をなした。

彼れは西園寺公に愛されてゐた。西園寺公が文士招待をやつたとき、西園寺内閣の閣僚で其席に接待役として參列せしめられたのは齋藤一人であつた。齋藤は英國育ちの上に宮圍内の事情にも明るい。文士相手に話しも出來ると云ふのであつた。

併し西園寺に愛されたと云ふ事が、彼れに政界進出の誘惑を與へるとしたら、それは却つて恩が仇になる事だ。山梨も政界進出を試みさへしなかつたならば、今度の如き破目には陷らなかつたであらう。

山梨が朝鮮總督たりし一年有半の間に、彼れは朝鮮統治の上に、何を貢獻したか。彼れは朝鮮に於て何を爲さんとしたか。強いて求めれば、彼れは朝鮮に於て小學校を增加し、朝鮮兒童に普通教育を普及せしめんと企てた。それが彼れの殘した唯一の治績と云へやう。朝鮮人を治めるには先づ朝鮮人を教育せよと、これは問題が根本的である丈けに、朝鮮統治の上の一見識と云へる。併し朝鮮にはまだそれ以上に根本的な問題は橫はつてゐないか。

田中内閣が成立した頃、齋藤總督が海軍々縮會議の全權としてゼネヴァに派遣された。其留守中を今の宇垣陸相が總督の臨時代理として預つてゐた。留守を預つた丈けであるが故に、宇垣は齋藤總督の政策を變へるやうな何等の施設をしなかつた。只彼れは其間に朝鮮問題の根底が何處にあるかを見て來た。曰く、朝鮮人に食ふ道を與へる事にある。衣食足つて禮節を知る。要も何も朝鮮人が[illegible]出來るやうにしてやる。文化も數

育も先づ生活出來てからの事であると。

蓋しこれは問題の核心に觸れてゐる。日本は明治維新以來、西洋の産業政策を輸入した。そして同じ産業政策を朝鮮に移入しつゝある。それが日本に於て産業を勃興せしめると同時に、日本に多數の貧民階級を作つた。同じ産業政策は朝鮮に於ても貧富の懸隔を甚だしくする。朝鮮人が朝鮮に於て衣食する能はずして、滿洲に百萬、日本に二十萬移住した。滿洲ではそれが外交問題となり、日本ではそれが日本の無産階級を壓迫しつゝある。問題は限りなく發展する。

産業政策は終極に於ては朝鮮の富を增加する。それに疑ふ餘地は存在しない。併し其過程に於て、若し朝鮮の産業に從事する企業家が日本の大會社、若しくは日本の資本家である場合には、利益は日本に送られる。同時に朝鮮にもそれ以上の金が落ちるのであつても、朝鮮人はそれを不愉快に思ふ。

又餘りに進歩的な産業政策には、朝鮮人が追從し得ない場合がある。例へば、水利組合を作つて遠方から水を引く。それは日本人の地主にも朝鮮人の地主にも結局は利益になる。所ろで其工事には金がかゝる。其金を年賦懸け金にすると、資力のある地主は懸金を支拂う。資力のない朝鮮人は日本の高利貸から借金して懸金を拂う。そして大低は其高利貸しに土地を取られる。彼等は父祖傳來の土地を失つて流民となる。日本が善意で産業開發に努力しても、朝鮮人は其爲めに食へなくなる。そして日本を恨む。

近代産業の爲めに食へなくなつた朝鮮人を如何にして食はすか、それは近代産業の爲めに食へなくなつた日本人を如何にして食はすかと云ふ事と、同じ問題である。それが世界各國を通じて社會の根底を動かしつゝある重大な問題である。一山梨、一齋藤の人物論で取扱ふには問題が餘りに大きすぎる。

松竹トラスト論

S・O・S

◇

昨の二十六日の新聞は、一齊に帝劇『最後』の夜の光景を報道した。

「……最後の日——劇場はおごそかにうづめてしよんぼりとし、律子も嘉久子も地べたを見詰めて一擧同入りをした——恐らくは斷腸の思ひであらう」

とその夜の有樣を遺憾なく現はして居る。

たつた二昔前に、劇界の革命兒として孤々の聲をあげた帝劇が、早くも老ひて『松竹に身賣りするやうな年になり』は、律子ならずとも、誰か運命の神のいたづらに泣かされない者があらう。

このお手のもの、劇的光景のうちに、帝劇は松竹の委任經營に移つて只今、劇界に於ける松竹トラストの偉力に一段と光彩を添へた觀がある。松竹がその發祥の地京都の劇界を一手に收め、つゞいて大阪を席捲し、さらに東京に進出して以來僅かに二十餘年、東京では名小名のある劇場で、松竹に關係のないものは、唯一帝劇あるのみであつた。

その帝劇もつひに落城して、全國の芝居といふ芝居が悉く松竹の手によつてゞなければ、興行出來なくなつたのであるから、この最後に取殘された帝國の沒落が、大なるセンセーションを起したのも無理は無い。

帝劇を併呑した松竹は東京に於いてもいまやその所有するものに本郷座があり、またやがて松竹の經營に移さるべき超帝劇級の東京劇場を有つ外、歌舞伎、明治、市村、新歌舞伎、新派演舞場、淺草松竹座及び新富座の經營權を有し、關西に於いては白井の主宰する松竹[illegible]至つては大阪、京都の劇場を悉くその掌中に收めて居るのであるから、劇界に於ける松竹王國の地位は絶對不動のものとなつた。

加ふるに映畫事業に於いても亦松竹キネマ、帝國キネマが斷然他を拔いて同じトラストの兩翼を成す點に於いて、松竹王國の存在は、唯單に劇壇、映畫界に於ける興味の中心であるばかりでなく、廣く我國資本主義發展過程に於ける一個の現象としても、研究せらるべき充分の價値ある對象となつたと云ふも決して過言ではあるまい。

◇

白井、大谷兄弟が劇界に志して三十年、東京へ乘出してから二十餘年にして今日の覇業を成したことは、明治大正昭和を通じて稀に見る偉觀であるが、それだけにまたこの兄弟の努力も驚くべきものである。

まづその生立から見やう。この兄弟は白井を兄とし、大谷を弟として居るが、生れは兩人共十年の十二月で彼等は双生兒である。父はもと鹿兒島藩の小身で何でも足輕だつたと云はれて居るが、後京都に出て、そこで[illegible]座の中賣の株を買つて中賣となり。兩兄弟も

幼少の頃から父の業を助けて居たが、當時から劇界に大志をいだいて居た兄弟は、軈てこの夷谷座の小屋方と共同興行をなし、間もなく嘗つては中賓であつた夷谷座をば買收する程の財力と信用を得るに至り、つゞいて南座をその手に納め、漸次京都の劇場を買收して、今度は大阪に手を延ばした。大阪の振出しが辨天座で、こゝを本據に角、中、浪花、文樂等を手に入れ、道頓堀を全部兄弟の勢力下に置き、日露戰爭の後には、つひに東京に乘出して歌舞伎座の株の一部を手に入れた。京都で松竹兄弟が名を知られるやうになつてから京、大阪をおさめ、そして東京に乘出すまで凡そ十年の間だつたと云ふから、彼等が如何に無人の野を行くが如く進んで來たかゞ知られる。

東京進出の抑々の初めには面白いエピソオドがある。と云ふのは歌舞伎の株が、この兄弟の手に入つたと知つた時、當時歌舞伎經營の衝に當つて居た專務の田村成義は、社長の井上角五郎を說いて、兄弟の手から株を買ひ戻さうとした。

田村將軍が井上に云つたことは『あんな贅六野郎達に、この由緒ある歌舞伎を乘つ取られてたまるもんか、早速株を買ひ戻して下さい』と云ふのであつた。

そこで井上が大谷に會つて、歌舞伎の株を讓つて貰ひたい、あすこは田村が飽く迄も自分で經營したいと云ふから、と話をして兄弟の持株を二萬圓で買ひ戻さうとすると、大谷は、それなら奇麗さつぱりと自分の買つた株を歌舞伎に寄附しませう、もとく自分達兄弟は歌舞伎が經營したいから株を買つたので、株を買つていやがらせをして金にしたいなどゝ思はれちや馬鹿々々しい、と大見得を切つた。

そこで、あの兄弟は贅六どころぢやない、江戸ッ子も及ばない膽つ玉の太い奴だぞと云ふことになり、井上角五郎も政治家だし、田村成義も將軍と呼ばれる程の男だつた丈に、これが緣となつて、ついに歌舞伎の經營を任ぜられるやうになり、今日では大谷がその取締役會長の地位に据はるやうになつた。

◇

東京へ進出してまづ大歌舞伎の支配權を得た松竹は、明治座、新富座を同じ筆法でその經營下に移し、本郷座を買收した。その後田村將軍が最後まで孤軍奮鬪して居た市村座が、五十萬圓拂込の會社で七十二萬何千圓の借金に苦しみ、折角の六代目の興行もその都度債權者から差押へを喰ふやうになつて、二進も三進も行けなくなつたところへ、飛び出して之れまた委任經營にまで漕ぎつけた。すでに松竹が市村を經營すると云ふことになれば、債權者も競賣を見合せやうと云ふことになり、今度はあの新橋藝者が財界の好況時代に、大小成金共から、せしめた金で建てた新橋演舞場も持ち切れずして松竹の委任經營に歸した。

かくして、帝劇を除く全劇場をわが物にした大谷は、かねて帝劇に目をつけて居たが、帝劇は劇の革命に成功した山本久三郎が據つて居る丈あつて、他の劇場の經營者の如く容易に松竹の軍門に降らない。そこで大谷は歌舞伎と演舞場の眞中に東京劇場の建設に取り掛つた。

一體歌舞伎は、純然たるドラマを上演する劇場としては、世界にも珍らしい堂々たるものである。少くともこの意味に於いて、グロスター公が見えても、アメリカの記者團が來ても一夕見せるだけの價値は充分に有る。しかしあすこへは、まさか帝劇のやうに世界中の劇團から、何でもかでも引つ張つて來るわけには行かない。

その點では帝劇は調法に出來て居る、併し地利の點でも、歌舞伎座・明治座にも後れるが、唯惜しいことには舞臺が足りない。ところがいま大谷の手で建設中の東京劇場が出來上ると、帝劇の缺陷をすべて補ふだけの設備がある。この東京劇場建設の進行は少からず、帝劇を威脅して今度の帝劇の降伏となつたのである。蓋し帝劇としては東京劇場完成前に契約しなければ、完成の曉にはもつと〱不利な條件を忍ばなければならない。

松竹側から見れば東京劇場の建設も、帝劇攻略の爲めばかりでは無い、新しい歌舞伎、演舞場、帝劇派も多分に含まれて居る。前に述べたやうに、歌舞伎は松竹の手中に歸したと云つても、五百五十八人の株主を有する公稱資本金二百萬圓の立派な獨立せる株式會社である。そしてそこには古い傳統と、昔から家代々專屬して居た役者等が有つた。また演舞場も新橋の姐さん達や、そのまた古株たる待合料理屋のお神連が、單に株主であるばかりか、安々と重役として連らなつて居る公稱資本金二百萬圓、百二十萬圓拂込みの一つの別な會社である。而して見るといつ如何なることで、此兩者は松竹に反逆を企てないとも限らない。

かゝる萬一の場合を豫想して、恰かも德川幕府が大阪を直轄し、東海道仲仙道の岐路に御三家の一を置いたと、同一筆法を取ると云ふことは、彼等兄弟の滋味である。早く云へば東京劇場は帝劇を攻むると同時に歌舞伎、演舞場を抑へる一石二鳥式戰法の發露である。

（八）

孤立無援の革命兒帝劇は、永い間松竹勢の渦中にあつて氣息奄々のところへ、更にこの東京劇場なるシンガポール・ベースの建設正に成らんとするを見て、いまは如何ともする術なし、腹かき切らんか、二千に近い株主に大なる損失を負はしめ、專屬俳優等をやがて路頭に迷はさせるを如何せんと、遂ひに涙を呑んで松竹の軍門に降つたのである。創立以來經營して來た山本專務が文藝部一つをお土産に劇界を去るのに對しては、まさに一掬の涙があつてよからう。

帝劇はお世辭なしに劇界の革命兒であつた。第一に明治四十年三月の創立當時、いまの會長西野恵之助が專務で、山本はその下に支配人であつたが、まづ日本に例の少い女優と云ふものに目をつけ、女優養成學校を設け、廣く天下にその志願者を募集した。その第一期が森律子、村田嘉久子、初瀬浪子、河村菊枝、藤間房子、村瀬竜子等で、中にも律子は代議士辯護士の娘で、跡見花蹊女史の跡見女學校で、當時華族女學校、虎の門女學館と並び稱へられる貴族的教育を受けた上に、帝劇の出來た明治四十年に時事新報社が募集した全日本素人美人投票にいまの野津侯爵夫人、海軍少佐未亡人金田けん子に亞いで第三位當選の榮を擔つて、人氣の涌き立つたところとて、女優熱を一時に勃興せしめた。

たとひ帝劇女優の技藝が、さきの久女八に遠く及ばず、後の須磨子にたとふべくも無かつたとしても、現今の女優時代を現出した功に到つては沒することは出來ない。

また時間を短縮したことも、帝劇によつて爲された劇界の革命の一つである。帝劇出現當時の芝居はまだ德川時代以來の慣習が殘つて多くは午前の十一時頃から開かれて居た。帝劇が斷然それを改めたのである。さらに芝居を見るのか、酒盛りをするのか判らないやうであつたのを止めて食事は一切食堂に於いてのみ行ふことゝしたのも、帝劇によつて初めて試みられたところである。その外に前賣切符制度も、亦その功を帝劇に歸さなければならない。

もう一つおまけに『今日は帝劇、明日は三越へ』の標語的廣告を毎日筋書に入れたことも廣告界の一革命への寄與として加へてやつて置かう。

◇

松竹は帝劇の企てゝ成功したところは、すべて之れを採用して成功して居る、それにもかゝはらず、松竹は帝劇が失敗した人件費の高いことと、經常費の膨脹とは立派に防いで今日に至つた。すなはち革命兒としての帝劇には遺憾なく追隨したが、沒落期の帝劇の失敗は遠慮なく捨てゝ取らなかつた。

松竹トラストはかやうにして三十年餘りの間に白井大谷兄弟の手によつて築き上げられた。

いまその大きさを見るならば

一松竹合名社（個人商店）

一松竹土地建物興行株式會社（資本金二千萬圓）

一松竹興業株式會社（同七百萬圓）

一松竹キネマ株式會社（同六百八十七萬五千圓）

松竹合名社は法律上の合名會社でもなく、全く白井大谷兄弟の個人經營に屬するものでその大きさを評價することは出來ないが、昭和三年十一月その東京に於ける本郷座の所有權と同座以外關東に於ける營業權、俳優專屬權、各劇場專有權、劇場内賣店權全部を六百萬圓で松竹興業會社に賣つたから、あとは關西方面と未完成の東京劇場等だから大したものではあるまい。しかし兎に角この松竹合名社と云ふものは一個のスフインクスである。

松竹土地建物興業會社は、白井松次郎氏の主宰するところで、その下に養子信太郎が在つて大阪、京都を首め關西の劇界をすべて抑へ居り、松竹興業は大谷竹次郎が社長、大谷の女婿城戸四郎が專務として東京の劇界に君臨する本城である。この松竹興業の下に歌舞伎座（公稱資本金二百萬圓、拂込百五十六萬二千五百圓）明治座（資本金百五十萬圓全額拂込濟）市村座（資本金五十萬圓、繰越損金七十二萬九千圓）新橋演舞場（公稱資本金二百萬圓、百二十萬圓拂込）帝國劇場（資本金三百四十五萬圓拂込濟）新歌舞伎座（資本金百二十萬圓拂込濟）新富座（資本金八十萬圓拂込濟）の牙城がある。

松竹トラストを語るには劇と共に映畫事業を見なければ充分とは云はれない。

松竹がキネマに手を染めたのは大正九年三月で松竹キネマ合名會社の名の下にまづ松居松翁、田口櫻村、小山内薫等の顧問を集め、同年の十月にはいまの松竹キネマ株式會社を設け森岡格雄と玉木長之輔が支配人格で働いて居たが何分にも松居、田口、小山内の理想家揃ひでは營業は必らずしも思ふやうな成績を擧げ得られなかつた。

しかしかう云ふいゝ顧問を入れたのと、松竹の努力の結果は當時まで特殊扱ひをして三文文士も手を下さなかつた映畫の脚本も、名の有る文士が書くやうになつた。その上に國産の映畫と云へば劇の映畫化ときまつて居たのを、松竹は芝居でない映畫をつくるに成功したことは松竹トラストの映畫界に於ける貢獻として後世に傳はるべき事柄であらう。

松竹キネマは全國に直營館、特約館、歩合館を併せて四百五十ばかり持ち、之れだけでも先輩の日活にほゞ匹敵する勢力を有つ上に、最近には帝國キネマ演藝株式會社（公稱資本金五百萬圓、拂込二百萬圓）に白井が社長となるに及んで帝キネは完全に松竹トラスト中の一員となつた。之れまた全國に約三百の興業館を持つて居るが、松竹兄弟の企業心はそれでも飽き足らないで、淺草では常盤興

行会社（資本金百五十萬円払込済）を手に入れ、これは大谷が社長となつて居る。

かくして今や浅草公園には松竹トラストに関係なき映画館中目星しいものは僅かに富士館と電気館あるのみとなつた。

◇

かくの如く松竹トラストの劇界映画界に於ける勢力は、今映界事業界に於ける三井三菱のそれよりももつと驚倒的であつて、恐らくは劇界はもとより、映画界をも統一するに至るかも知れない。

従つてこの両方面に於ける第二の革命は松竹兄弟の手によつて成し遂げられるであらう。現に大谷は新劇引退の際に、新劇の劇界に於ける革命をすべて自分に負ひたが、今後は劇界に対し一革命を行ふと声明したと伝へられる。

劇界は今日まで厄介なる伝統が今尚ほ残つて居つて、劇団の名門に生れない者は、ほとんど永久に浮ぶ瀬が無いことや、多人数の弟子を連れて居つていまの長時間興行を余儀なくされ、従つて高き観劇料を取る等の弊に数ふるに遑ない程である。これ等革命こそ今後の松竹にて容易に行ひ得る、また彼等兄弟にはそれ丈の志もあらう。現に俳優の給料の如き昨秋に国に亘つて三割の引下げを行つたと伝へられ、また得つて新劇がマチネーの名によつて試みた二部興行を新作以来新歌舞伎その他に於いて實行しつゝあることと之れを併せ立てるものと云ふことが出来る。また彼等が一つの理想を有つて生きたる證據には、當り狂言のあとには屹度劇革新の為めの犠牲興行をなすことによつても知られる。白井、大谷の精力の旺盛なると事業に熱心なることは殆んど他に比を見ない程で、大谷の如き數多き各座の毎月の出し物を一人で定めることなどその一例である。

この精力主義と積極政策とが、よく今日の大松竹トラストの外形を整へたが、然らば松竹の前途何等の暗影なきかと云はゞ、それは遺憾ながらノーと答へざるを得ない。

松竹トラストは全く白井大谷兄弟の頭脳一つによつて運轉されて居る、彼等を助ける副門の孫子信太郎も、関東の女婿城戸も同じタイプの人間である。かく自己中心、絶對専制の結果はこの大トラストに人材が甚だしく欠乏して居る。否な松竹トラストは人材の蹂躙に累されて居る。

試みに新富町の松竹本社を訪ふたら重役室の外面には最近[illegible]がバラ撒いた面会強要等をなす者を警察に届出でよ、のポスターは恐ろしきまでにペタ／＼と張り出されて居る。また松竹の事業に関する些細の事項と雖も大谷以外の何者によつても語ることを許されて居らない。即ち松竹トラストに居並ぶ百人に近き重役なるものは之れ悉く兄弟の傀儡たり、小使たるに過ぎない。

見よ古来かくの如き専制政治の永續したためしが無い。いや亡びるものは専制政治では無く、その専制独裁政治を行ふ者自身である。

ナポレオン然り秀吉然り、近くは世界大戦中に忽ち起り、而して慌だしく亡びた福済神戸の貿易成金の雄、鈴木商店、神田銀行等々また好き前例ではないか。ナポレオンも秀吉も、金子直吉も神田鐳蔵も、いづれも類ひ少き英傑であるが、餘りに功を急いだ結果独断専行に流れ、人材を求めない結果、彼等の花々しき事業も遂に滅びたではないか。

独断政治、一族専制には利害相伴ふ、特に財政の点に於いて然りである。すでに劇界統一の形を現實にした松竹兄弟が、いまにして人材を天下に求め、その組織をば外形のほど整へるごとく、内面を固めるならば劇界と劇団と而して映画界の革命の為めに、松竹の存在は真に有意義たるを失はないであらう。

友愛結婚提唱是非

原田實

一

（Companionate marriage。私は試みにこれを「友愛結婚」と譯す。更に適切な譯語があるならば、もとよりそれを採るを以て至當とする。それの見つかるまで、この譯語を用ゐておく。

友愛結婚とは、アメリカの社會學者の間に用ゐられ始めた言葉で、千九百二十四年五月の『社會衞生學雜誌』に掲げられたナイト（M. M. Knight）の一論文にその起原を發する。その意義も使用者に依つて多少の差異なきを免れないが、これを最もモデレートに組織立てゝ而も最も熱心に主張してゐる同じアメリカのリンゼイ（B B Lindsey）に依つて、その意義は先づ確立せられたと見ていゝ。

リンゼイは、永らくコロラド州デンヴァーの少年及び家庭審判所（The Juvenile and Family Court）の判事として令名を馳せた人で、千九百二十七年五月に『友愛結婚』（"The Companionate Marriage"）といふ、可なり大册の一書を公にして、それの意義を極力解説し、また主張してゐる。リンゼイは、その審判所で實際に取扱つた多數の性的爭議、兩性關係に惱める青年中年乃至老年の階級、また無産有産、無教育、有教育の諸階級に亘る多數の性的事件の實際を、詳細に例示して、それらの惱みと紛擾とを解決救濟し以て個人の幸福と社會の能率とを達成せんとすれば、どうしてもこの友愛結婚の制度を法律的に確立するほかないとしてゐる。

そのリンゼイの言ふ意義に於て友愛結婚の特色を概括しよう。

今日多數の青年男女が、經濟上の事情、即ち金錢の缺乏から、結婚したくもすることが出來ないで惱んでゐる。彼等は既に性的に十分に成熟してゐる。性衝動は、原始的本能として強いものであるが、文化的生活は、性衝動に基づく生活に、想像の力に依つて、深きまた複雜な美的乃至藝術的な意義を附加してゐる。性生活の魅力は、人に於ては動物におけるが如く簡單でない。例へば、戀愛の意義に關する重深な現代の理解はその一例である。從つて、性衝動乃至性生活を、單に宗教に依つて、また杜撰式な道德に依つて、抑制し禁壓することの無

意識であることなしに、今日の青年男女は、意識的無意識的に感じてゐる。即ち彼等は、性の魅力に即かれ誘うて安然たることは出來ぬ。性衝動を無下に無視し去ることは出來ぬ。然るに、經濟上の事情は、上述の如く容易に彼等に結婚の自由を與へない。こゝに於て彼等は、必然的に結婚以外の方法に依つて性生活を營まねばならぬ。そして、それらは、概ね、經常に不健全に營まれる、個人的なまた社會的な無數の罪惡や不幸が、おのづからそこに胚胎する。

この關係は、然しながら實は、青年のみに特有でなく、中年者の間、老年者の間にすらもある。おしなべての社會不安が、そこに醸成されざるを得ないのだ。これは社會なり國家なりが、當然救濟解決せねばならぬ緊急の重大問題である。

然るに、結婚生活の費用は、一つには、妻が職業を放棄するが爲めに收入が減じ、一つには、子供の生れるが爲めに費用が嵩むに依つて、増大するのであるが、若しここに、妻が結婚前の如く就職して收入を得、また子供を生むことをしないならば、結婚生活は寧ろ夫婦にとつて結婚前よりは生計費の節減を結果するであらう。そしてこれは、法律の改定、乃至新定に依つて、即ち法律を以て先づ産兒制限を許容することに依つて、容易に到達され得る事柄である。更にそれに必要なる若干の條件を加へて、主張されるに至つたものが、實に、友愛結婚である。

從つて友愛結婚の特色を要約すると、

一、當分の間子供を生まない。その爲めには最も適切なる産兒制限の方法に關する知識が適切なる方法に依つて、合法的に授けられる。

二、未だ子供が無く、また妻が姙娠中でない場合には、夫妻は相互の承諾に依つて容易に離婚することが出來る。そしてこの離婚の場合には通例、妻は手切れ金を要求することが出來ぬ。

といふにあつて、それを合法的に法律に依つて規定しようといふのである。即ち、從來の普通の結婚制度と並んで、この新しき結婚制度を更に別に規定して、當事者にその何れでも自由に選ばしめんとするのである。

そして、友愛結婚を選んだ者は、適當なる時期、即ち、經濟上竝に身體上から見て最早や子供を生んでも育て得るといふ時期になれば、おのづから子供を生んで從來と同様の結婚生活に入るのである。斯くすれば、經濟上の束縛に依つて結婚出來ないでゐる者は當然救濟されて、早婚なる性的生活に入ることが出來、險惡な不健全な性的生活を一掃し、從つて、社會生活上の諸能率も向上して來るといふのである。

リンゼイ自身からいつてゐる——

「友愛結婚とは、法律に依つて承認された産兒制限を含み、また子供の無い夫婦は相互承諾に依つて離婚し得るの權利を含み、そしてその離婚の場合、通例は手切れ金の支拂ひを含まぬところの合法的結婚である」(「友愛結婚」序文)

そして夫は、「我がアメリカに於ては既に成立してゐるところの社會

的事實である。」だからこれを法律に依つて承認しさへすればよいと言ふ。なほ彼は、同書第七章「友愛結婚の意義」のうちで、一友人との對話の形式をとつて次ぎのやうに言つてゐる――

『ねえ、僕は、社會がこれから友愛結婚を創設しなければならぬと言ふのではなくて、それを認めろと説くのだ。なぜつて、事實に於て吾々は、既にそれを實行してゐるからだ。さうだ、吾々は實際それをやつて居る。吾々は、避姙結婚（チャイルドレス・マリッヂ）と産兒結婚（プロリフィック・マリッヂ）とを全然同一視する代りに、それの別物であることを認めなくてはならないのだ。即ち一方に對しては全く合理的である規則が、他方に對しては全く不合理的であることを認めなくてはならないのだ。原始社會では、勿論故意の避姙結婚なんていふものはなかつた。然し文明と生理學の發達とは、すべてを一變した。避姙結婚も、産兒結婚と同様の立場で、今日行はれてゐる社會制度の一部分だ。然るに吾々は公然とこれを承認することを拒むのだ。それは新しい、だから多少罪惡視される。實行上では卑まれないが、これを認めることが卑まれるのだ。繰返して言ふがそれは既に實行されてゐるのだよ。僕の抱懷する友愛結婚はただ、言ひ換へれば、屢々社會學者に依つて説かれ、社會學者の有力な一機關雜誌「社會衛生學雜誌」の上で年來主張され來たつた友愛結婚なるものはただ、合法的な結婚の一狀態だ。即ち、健康や經濟や氣質などの爲めに、結婚直後に於て子供を扶養し得ざる男女が、戀愛と友情と協力とを目的として行ふ結婚がそれなのだ。』

この友愛結婚の主張に對しては、宗教家や因循派たるキュー・クラックス・クランあたりからの反對は猛烈で、醇風を亂り淫蕩を公許せんとするに外ならぬものだとして、リンゼイの如きはその爲めに判事たる地位を脅かされ、最後にはつひにそれを奪はれたと傳へられる。然し、寛容に人間性の現實を眺めてゐる人々は、大體に於てこの主張に贊成してゐる。寧ろこれを、微温的だとしてゐる人々すらある。イギリスのバートランド・ラッセルの如きも、近刊の『結婚と道德』(=Marriage and Morals=)のうちでこれを論及して、「友愛結婚は賢明な保守主義者の主張である、青年達の性的關係に或る安定性を導入して現在の離婚狀態を捨てしめんとする企圖である」と言ひ、更に「判事リンゼイの主張が法律に具體化された場合には非常に恩惠豐かな影響を齎らすであらうといふこと、並びにその影響が道德的立場から見て一の收穫であるとして萬人から一齊に認められるであらうことをば、私は寸毫も疑はぬ」と言つてゐる。なほ、もつと徹底的な社會改造を欲する人々は、この主張をなほ姑息なりとし、寧ろ如何なる人々も經濟的に安心して子供を生んだり育てたりすることの出來るやうな社會を現出せしめねばならぬとしてゐる。

それは兎に角として、この友愛結婚の精神が、人間の意志に依つて人間の生活を支配せんとする熱烈なる道德に根ざす社會改造の意欲にあることは明白である。

ウエルズはその『歴史概要』(The Outline of History)で、人類の發達史上の一大標本だと讃稱して、プラトーの意義をば、意欲するがまゝに完全に人類の生活狀態を改造することが出來るといふ彼の信念のうちに見た。それまでは人類は、傳統に據つて神々を恐れつゝ生活した。然るにこゝに一人物が現はれて、吾々人類に向つて、大膽に、そして恰もそれが全く合理的な當然のことかの如くに、「諸君の生活を把握せよ。諸君を惱ます事物の殆ど全部は諸君の力で避けることが出來るのだ。諸君を壓倒する事物の殆ど全部は諸君の力で覆へすことが出來るのだ。それらの事物をば諸君は意欲するがまゝに處理することが出來るのだ」と主張した。プラトーは實にその一人物だつたといつてゐる。

ウエルズに依つて摘出而視されたプラトーのこの所謂「生活の意志的支配」こそは、人類生活の人類生活たる根本の特徴である。この意味に於てウエルズが、プラトーを人類史上の一大標本と見たのは、眞に適切でもありまた當然でもある。

人類の歴史、少なくも自覺後の人類の歴史は、實に「生活の意志的支配」の歴史だ。そしてこの意味の歴史に今迄の進步を與へたものは、もとより科學の發達である。科學の發達に刺戟されて、生活の意志的支配は、今やまさに、完成に近づかんとしてゐる概さへもある。否、今や寧ろ、意志が科學に壓倒されて、科學の發動の餘りに鮮かなのに意志が少しく眩惑されて、[illegible]とたゞ見入つてゐる傾向すらもある。僅々百時間を出でないで、ドイツから日本まで、人を乗せて[illegible]中を覗けば、寧ろ見る人の心が顫へるのだ。まさに[illegible]引摺られてゐるといつてい〻。その科學的文明の、社會的な全世界的な影響を閑却して、人間意志の軌道たる道徳を保持しようとするは、走る汽車の窓から狙ひを定めて、何時までも狙ひがついてゐると思ふのと同じだ。道徳は意志の軌道である。科學はそれを走る機關車である。生活を支配するといふ根本の方針に基づいて、道徳は、合理的に聡明に科學を操縱して行くだけの彈力を常に持たねばならぬ。

この意味に於て、友愛結婚の主張は、科學を支配し操縱して生活の意志的支配史上に一飛躍を試みんとする道徳的運動であると言つてい〻。卽ち、子供を生むことを「授かる運命」と見す、これを自覺的意志的に支配し、性的生活を適切に組織立てゝ、生活の幸福を意志的自覺的に把握せんとする人道的な道徳運動であるのだ。

三、

この「友愛結婚」を日本において提唱することの是非如何。中央公論記者はこの課題を作者に提出した。蓋し、作者は、中央公論出版部の委囑に應じて上述したリンゼイの『友愛結婚』卽ち "The Companionate Marriage" をば最近に譯了した。恐らくは、本稿が誌上に現はれる頃には、『友愛結婚』と題する其の譯書も既に世に現はれることであらう。この事實に基づいて、この課題は作者に提出されたものであらう。

私は必ずしも、友愛結婚の組織そのまゝを我が日本に實現することを適當と思はない。然し、日本における結婚の[illegible]する時。それ

を聰明な意志に依つて支配することの必要の益々迫りつゝあることを痛感する。社會組織の合、不合理は、もとより根本の問題だ。その根本の解決も切要だが、然し眼前の現實も捨てゝはおけぬ。現に如何に多數の人々が、經濟上の事情から生活を脅迫され、欲すれども營み得ざる結婚に惱み、不健全なる結婚外關係に於て不本意ながらに産兒し、或は辛うじて結婚し得ても、同樣にまた不本意ながらに産兒し、而もその生れたる子供の養教育に苦しみつゝあるか。そして結局、如何にそれらの無數の子供達が、不適切な事情のもとに教化なき或は賊はれたる生長を遂げつゝあるか。この事實は、恐らく、案外に廣汎に亘ると私は觀察する。決して所謂貧民階級の間のみでなく、無産サラリーマンの階級の殆ど全野に亘つてその事實が見られよう。

これらの諸階級の廣汎な領野に亘つて、欲せざるに、また歡迎せられざるに、無數の子供が刻々日々に生まれつゝある。然し、速や呑込みしてはいけない。これらの階級の多數者が利己的な享樂的な欲望の爲めに子供を欲しないのだと速や呑込みしてはいけない。現代は實に日本に於ても『子供の世紀』だ。子供の教育を考へない親は殆どない。殊に知識的無産階級、所謂サラリーマン階級において、この事實は顯著であり強烈である。冷酷なる皮肉やの所謂「甘いパヽ」や「甘いママ」が都鄙を擧げて隨所に充ちてゐるのだ。その「甘さ」を善導することは別の問題だ。兎も角その子供を思ふ意志は尊重せなくてはならぬ。特に都會に於てそれらの人々が、子供の養教育の爲めに苦悶しつゝある實情は、眞に涙なくしては見られない。然るに、それらの子を思ふ人々が、子供の生れ來るを歡迎しないのである。勿論、一人よく子供を養教育せんが爲めからだ。つまり多數の子供を歡迎し得ないのである。一人二人はよい。寧ろ熱望する。また三人もよいかも知れぬ。然し四人五人となつては、考へざるを得ないといふのがその本音だ。

現に日本に於て、これらの人々が産兒制限の方法に關する知識を得んとする欲求の熾烈さは、それに關する怪しげなる書物や、或は器具や藥劑が、非常に盛んに販賣されてゐる事實に依つて明證される。而もそれらは、非常な不安を伴ひつゝ應用されたり使用されたりしてゐるのである。その結果は、國民生活の明るさと國民的能率の上に非常な暗影と打擊とを與へないではおかぬ。

日本が亡國ならぬ興國として、國民の生活を國民自ら把握せねばならぬ以上、この性關係問題乃至産兒問題に關しても、國家的に科學を適切に支配して、國民の幸福と能率とをその暗黑狀態から救出しそれを益々增進の方途へ差向けねばならぬ。蓋し、適切なる産兒制限乃至調節の方法は、國家的な研究所に於て十分に研究されねばならぬ問題であらう。よし別途に於て、經濟問題の解決が成立つものとしても、養育術と醫術との發達に依つて小兒死亡率の縮減する反面に於て、小兒の質の向上を計る爲めの一法として受胎を調節することは、當然の合理的必要となつて來よう。

日本は未だアメリカ程に事情が切迫してならぬと見る者もあらうが、青年も中年も特に眞面目なる道德的センスの鋭敏なる者ほど、この問題に惱んで居ることは、日本とてもアメリカに敢へて劣らぬ——

よしあるにしても決して捨てゝおいてよい状態にないことを、私は痛感する。人の欲として性欲は食欲に似てゐる。禁欲に依らずして適當に解放することに依つて、聰明と習慣とで或る程度までこれを超越することが豫想される。性欲に惱むなどゝいふことは、意志を有する人類の名に於て恥らねばならぬのだ。

友愛結婚の第二の特色たる簡易離婚の問題は、日本に於ては今日では必ずしも重要問題でなからう。日本に於ては既に或る程度の離婚の自由が法定されてある。殊に女權の擴張が法と習慣との上に於てたほその途上にある場合であるから、手切れ金無しの離婚といふことも、理に陥ちて、却つて往々は人道に反するの結果となるかとも考へられる。

けれども、友愛結婚の第一の特色たる産兒制限の問題は、日本に於ても大いに考へねばならぬ緊急の問題である。この意味に於て、「友愛結婚」の提唱は、日本に於ても大いに暗示的でありインストラクティングであると考へられる。これに對する十分なる理解と適切なる批評とが最も望ましい。

最近、有力なる新聞雜誌に於て有力なる人々に依つて、この友愛結婚が紹介され或は批評されたことは、歡ばしいことであつた。「改造」一月號に於ける杉森孝次郎氏の「實際的性衝動の分析から新性道德の設立へ」、「婦人公論」一月號に於ける市川源三氏の「友愛結婚批判」、「朝日新聞」十一月二十日號より六回に亘る中川善之助氏の「Companionate Marriage」はこれであつた。

私自身は、不十分ながらリンゼイの『友愛結婚』を翻譯した。これに依つて、我が國の出來るだけ多數の人々が、寛弘な聰明な然しプンピシヤスな建設的道念的な——といつていゝリンゼイの主張から、多少ともの有意義な暗示を捉へ得るなら幸である。（一月四日）

劇藥でない催眠劑

眠れないが然し催眠劑を用ふるのは怖いといふ人が澤山あります。近頃では催眠劑自殺が猫いらずに代つて新聞紙を賑はして居る程です。そんな目的に用ひ得ない安全で良く效く催眠劑はないものかといふに決して左樣ではありません、近頃獨逸から輸入されたホパレットといふ藥がありますがこれは纈草根といふ神經病に良い藥草とビールの味つけに用ふるホップからとり出した成分でこれ迄の催眠劑と同じやうによく效きそして用量を過つても決して危險性がないと云はれます。

精神を過勞する人々とか婦人或は小兒等には大變重寶な藥が出來たと喜ばれて居ります。

一千一夜物語の文献的解説

酒井潔

東洋人の生んだ、世界最大の說話文學、一千一夜物語。これが相當の讀書人が、今だに童話の集大成位に思つてるのだから、腹が立つ。

先年私が某誌上で、散々ぱら千一夜物語の提灯を持つて、面白い〱とふれ廻つてから一部の人達には、これのいゝ所が解つた樣だつたが、まだ〱一般には通用しない。甚だ遺憾千萬の所、今度中央公論社が、これの完譯をやるとの事だから、此の際だと思つた故再び此の誌上でアラビヤン・ナイツの面白さを吹聽する。

元來此の物語の發端と云へば、昔々シヤアリヤルと云ふ偉い王樣があつたが、或る時其の愛妃と奴隷とが密通してゐるのを發見して、すつかり世をはかなみ、弟と一緒に旅へ出て色々な目に會ひ、さて國へ歸つてからは忽然大變な暴君になつて、世の中の女を、皆不信の塊だと云つて呪つた揚句、國中の緻縹よき女を一人づゝ、毎晩伽をさせ、翌朝はお手打ちと云ふので、毎日一人、女を殺して行つたので、國内の女が拂底して、遂には一女もなくなり、仕方なく大臣の姉娘シヤアラザアド姫が進んで、此の難局に當る事となり、王の御前にまかり出た。所が此の姫君とても博學多才の才媛で、永い〱面白い話をしては、先づ今晩はと云つた案配に毎晩々々、王樣の好奇心を引つ張つて、とう〱王樣が話の面白さで、殺伐な心を忘れる樣になつて仕舞ふまで、話し續けた。其の話が即ち千一夜物語だと云ふのだから、とてもたまらぬ程面白い物であつたに違ひない。シンドバッドの航海談や、「開けゴマ！」なんて話ばかりだつたら、一晩でシヤアラザアド姫の奇麗な首は、すつ飛んで居たであらう。

これで千一夜物語なるものが、大人の爲に書かれた素晴しい說話文學である事を推察して貰はねば困る。そんなら何故吾々が、此の物語を童話だと思ひ込んだかと云ふと、今まで幾度となく繰り返された飜譯のテキストが惡かつたからである。

所で、今吾々は博文館や、冨山房あたりから出て居る子供用のものを語る必要はないのだから、世界童話大系版、菊三冊、日夏氏譯と、世界名作大系版、四六、森田氏譯の二種について少々云つて見やう。

兩氏共其のテキストとして、レーン本を用ゐて居られる。そして兩氏共、此のテキストが本當の千一夜物語でない事を殘念がり、凡バートン本を使用する事の出來ぬのを遺憾だと言明して居られる。然し私の考へでは、レーン本必しもつまらぬ物ではない。あの精細なノート及び無數の挿畫等、まことに、東方サラセン文化の風俗史的研究には、甚だ有益なものであると思ふ。只レーンと云ふ人は、典型的道學者であつたと見えて、東洋人のあまりにも奔放無碍の饒舌を、英國の君子人達

に、其のまゝ取入れるのを論したものらしい。だから、レーンの譯は肝心の所で、端折つてと云つた具合にごまかして作つて居る。だから實際の所、あまり面白くないのである。

か様に、今までの日本に於ける代表的飜譯の採用、日夏版が二つとも、レーン本だつたキストとして用ゐねばならなかつた所に、千一夜物語が正當に評價されなかつた原因が存在する。

其處で、今後千一夜物語を、ありのまゝに皆々に見せやうとするには、彼のバートン本か、働いてマルドリュス本をテキストにして、これの完全な飜譯するよりやり方はない。と云つた際に、中央公論社が、バートン本を採用して、世界的の大事業を發表した事は、喜ばしくも亦頼もしい。

では、バートン本とはどんなものかと云ふと、これが仲々の問題で、うつかりしてると飛んだものを背負ひ込まされるから用心肝要である。先づバートン本の初版から述べやう。

初版は總紙表紙に、金で文字を表はした装幀で、一八八五年に「Benares. MDCCCLXXXXV: Printed by the Kama Shastra Society かつ初版の形式で十卷まで出た。次に一八八六—一八八八年迄に補遺版が六卷出た。此の六卷は表紙文字が銀になつた丈で、他は前の十卷と同様である。サイズは[illegible]。合計十六卷。

第二版は一九〇〇年—一九〇一年にかけて初版其のまゝのものにスタンレー・ウッドの挿畫を入れて、カーソン・ヘーパー社から發行された。これにはバートン協會員に配布するといふ文字が這入つて居る。初版も二版も限定版で千部限と云ふ事になつてゐる。右の二種こそ本當のバートン本であつて、愛書家達の垂涎物だが、とても〳〵今時手に這入る代物でない。若し出たら恐らく千圓以上は當然だらう。だから、一百圓やそこらでバートン本の寳物が出ても、努々初版とか二版とか思つて買ふ事は無用にされ度い。それから第三版は全然初版と同形式だが、挿畫製本等の出來はむしろ初版よりも上出來たとの事であるとは、少々曖昧な言ひ分だが、買い所[illegible]自身も、まだ此の初版二版にはお目にかゝつて居ないのだから斷う云つて置くより仕方がない。では、最近丸善其の他によつて、かなり這入つた百五十圓位のバートン本と云ふのは、一體どんなものかと、不審がられる方もあるだらうが、これは次に述べる第三版の所謂バートン・クラブ版と云ふもの、覆製なのである。

右バートン・クラブ版と云ふのは、第二版がうまく行かず、其の版權が他の本屋へ渡つた所、其の本屋が、如何にも會員組織の様な顔をして第三版を發行したのだ。これは一千部限定としてあるが、もつと沢山出たらしい。形式内容、初、二版と同様だが、製本の都合で、補遺の第三卷が二冊に分けてあるので、合計では十七卷になつて居る。それから百餘の挿畫が這入つて居るが、これは新しく描き下したのでなく、既刊の英佛譯の挿畫を集めたものであるから、油繪、水彩畫、エッチング、ペン畫等色々なものが混じて居て、調和の美はないが、變化はあつて、見るには一番面白い挿畫である。この版が時々市場に現はれて、初版とか二版とか能書をつけるが、初、二版は十六冊で、十七冊のは三版以下だと覺えて居れば先づ間違ふ事はあるまい。第三版の表題は、A plain and Literal Translation

of the Arabian Nights entertainments, now entitled the book of the thousand nights and a night with introduction explanat-ory notes on the manners and customs of moslem men and a terminal essay upon the history of the nights by Richard F. Burt n.

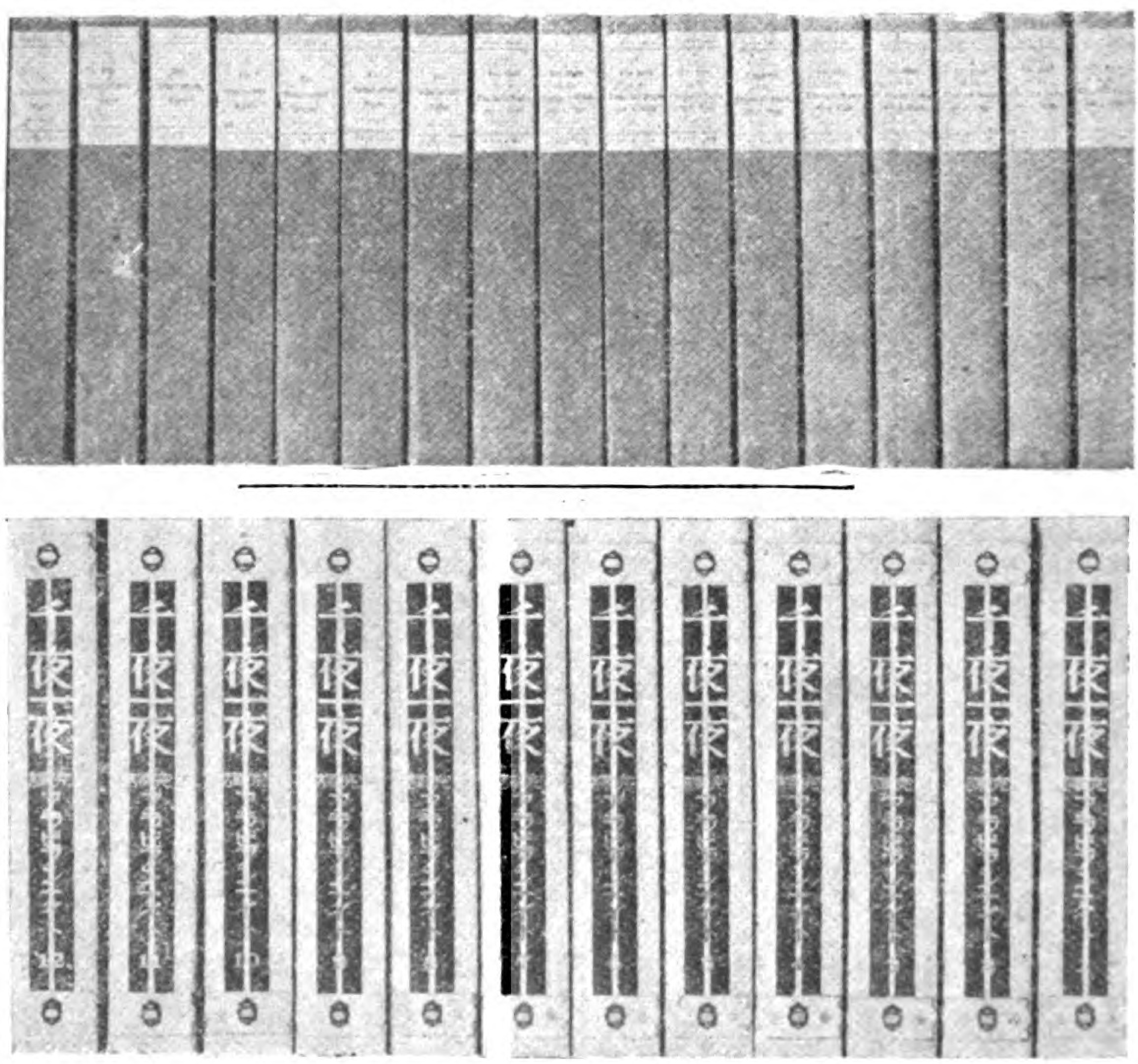
右三種はバートン本として、信用出來る善本である。この内のどれかをテキストとした譯なれば、始めて千一夜物語の完譯と云ふ事が出來るわけである。

以下バートン僞版を槍玉に擧げる。

(a)バートン夫人版、一八八六年—一八八八年迄に六巻、家庭用。

(b)ニコラス・スミッアーズ版。十二巻。挿畫七十枚程。平凡。内容骨抜き。

(c)メヂナ版。メッカ版。バグダッド版。アデン版等。これ等は頗る怪しからぬ代物で、バートン僞版の親玉である。形式は大抵第三版に似せて、如何にも、アラビヤ附近の都市から、發行された樣に見せかけて、實はロンドンで出して居るので、部數も一千部限定としてあるが、甚だ怪しい。うんと出て居るらしい。



バートン版（上）と中央公論社版（下）

(d)最近多數日本に輸入された、第三版そつくりの複製、只製本用紙印刷等の粗雜が目につくもの。これは米國邊で大仕掛けに作られたものではあるまいか？　然しこの版は内容挿畫共に第三版と全然同樣だから、今少々安價であつたら、讀書子の福音ともならうが、百五十圓見當では、僞版と知る限り、馬鹿らしくて手が出せぬ。尤も英書としては一册十圓にもつかぬのだから、さまで高い方でないかも知れない。

この位でバートン本の事は、大體説明し得たとして置く。

次はバートン以後に於ける、アラビヤ原書から直接完譯した佛のマルドリユス本について話さう。マルドリユス博士は有名な東洋學者で、此の大譯を初め猶數種のアラビヤ物を佛譯して居る。同氏の千一夜物語は次の題名で一九一八年にシャル

パンチェ社から發行された。

(1) Le livre des Mille et Une Nuit. Traduction literal et complète du texte arabe par le Dr J.C. Mardrus. L'édition complète, en 16 vol. in-8.

(2) L'édition complète et illustrée par le facsimilé en couleurs des miniatures et des encadrements qui ornent les manuscrits et les originaux Persans et Hindous. 8 vol. in-4. relié.

(1)は普及版で挿畫なし、十六冊。三十四圓。

(2)は素晴しい特帝本で、挿畫は印度やペルシヤの原畫から模寫した密畫原色版で、甚だ出版的價値の高いもの。(これは國際文献社から三冊の豪帖となつて、複製されて居るから、御覽になるがよろしい。普通版の倍大。八冊。百八十圓から二百圓)

所が、一九二六年にとても凄いマルドリユス本が巴里のピアッザ社から發行された。(此のピアッザ社は東洋物の特帝本を出すので有名である。此のテキストは勿論シヤルパンチエ社のと同様だが挿畫が違ふ。レオン・カレー(フランツ・ツーサン著『愛撫の園』の有名な挿畫を描いた畫家)の彩色密畫が各卷十二枚宛、ラシム・モハメッドの無數のコムポジシヨンがあるとんでもない立派なもので、一番上製が五十部日本紙に印刷して二百五十圓程、これが十二冊で完結される事になつて居る。

其の外、マルドリユス譯から面白い所を抜萃した本も數種ある。其の中で尤も讀者にお薦めし度いのは、次の本である。Anquetil社發行の L'art D'aimer En Orient, この本には、千一夜物語のエキスのエキスといつた所が大膽に載せてある。

それから、右のマルドリユス本が一九二三年に英譯されて、英國で歡迎されて居る。面白い現象である。其の表題は、

The book of the Thousand Nights and One Night, rendered from the literal and complete version of Dr. J.C. Mardrus; and collated with other sources; by E. Powys Mathers, 4 vols.

これで稀世の大説話文學千一夜物語の二大定本、バートン版と、マルドリユス版について大體お解りになつたと思ふが、ではどちらがいゝかといふと、各々特徴があつて俄かに甲乙は決定されぬが、ごく簡單にいつて見ればマルドリユス譯は非常に讀み易いといふ事が何よりの特色で、うるさい註を付けない所にも、此の本が讀み物として持つ力強い普遍性がある。これに反してバートン譯は仲々難解だ。然し、其の確實執拗な譯し振り、且つ精細な註釋等、まことに、千一夜物語譯者中の最高峯たるの名を辱かしめない。

右二者以外の良譯といへば先づ、アントアヌ・ガランの佛譯を擧げねばなるまい。このガラン譯は、芥川氏も推奬して居た通り、非常に讀み易くて、肝心な性的描寫の場面なんかも、バートンや、マルドリユス程は思ひきつて譯しては居ないが、レーン譯の様に思ひ切つて省略もして居ない。丁度量といひ、質といひ、讀み頃の本である。所載の話は、第一卷が三十九話、第二卷が、九話。第三卷が十一話。合計五十九話になつて居る。

此の本なんか、とつくに完譯されて居てもいゝと思ふが、それの無かつたのは既にレヤー・ブックになつて居る爲に、入手困難の爲だつたかも知れない。初版は一七〇四年。

Les Mille et Une Nuits [illegible]

8 vol.

次は例のレーン本である。

The Thousand Nights and One night, commonly called, in English, the Arabian Night's Entertainments. A new translation from the Arabic, with copious notes, by E. W. Lane, illustrated by many hundred engravings on wood, from original designs by W. Harvey, A new edition, from a copy annoted by the translator; edited by his nephew E. S. Poole. 3 vols. London. 1859.

此のレーン譯については、森田氏が其の譯書に於て詳述して居られるから、それを御覧になれば解るが、私が買ふ所は、其のノートと挿畫で、共に甚だ克明精密である。天空に飛騰する様な空想的な所は乏しいが、東方風俗の研究には、もつてこいの深切な書き方がしてある。

猶これ等以外に、千一夜物語の飜譯は、實に澤山ある。私の調べた丈でも三十種程あるが、それ等は文献的に大して重要な物でないから、此處に擧げる事を省略する。

以上で概略・千一夜物語の文献的槪說に盡したと思ふ。斯して見ると、吾々の此の大文學に對する智識は、レーン本位から始まつてガランに至り、更にマルドリユスを味つて、最後にバートンに至ると云ふのが本道らしい。

私がかつて、文藝市場社に居た時、マルドリユス本の完譯を計企した事がある。五百人位の固定讀者を得る自信はあつたが、經費の點で、殘念ながら決行出來なかつた。それが今日中央公論社によつて敢行される……多少私にとつては油揚、鳶の形ではあるが、そんな事はどうでもいゝ。とに角愉快な嬉しい事である。

中央公論がこのテキストとしてバートン版を撰んだ事は正しい。勿論マルドリユスでも甚だ結構だが、やはりナイツの完譯本と云へばバートンが第一に擧げられるであらう。

今度用ゐられるテキストは十七冊本であるから、多分第三版或は其の複製だと思ふが、此の版は挿畫に於て、一番大衆向に出來てゐる。吾々專門家から云へば、マルドリユス本のサラセン式密畫も有難いが、これは全部原色でなくては少々單調のきらひがあるから、結構バートン第三版の種々たる様式に富んだ寫實的な挿畫の方が一般には面白い事受合ひである

最後に發行者及讀者諸君に一言私の希望を申し上げて置く。

發行者へ

(一)可及的原書の挿畫を澤山入れる事。

(二)現在の日本では、バートン本なりマルドリユス本なりの完全無缺譯は不可能だと思ふ。然し、篇中至る所に出て來る、大膽な愛欲描寫こそ、ナイツ本來の大眼目であるから、出來得る限り、當局の了解を得て完全譯を出して戴き度い。

讀者諸君へ、

(一)本當の愛書家なれば、斯うした物の裝幀が如何に大切であるかを、よく御承知の筈だ。よろしく十圓なり十五圓なりを奮發して、中央公論社版のナイツを裝幀し直して、古代東洋の絢爛たる魔法の華を諸君の書架に飾つて下さい。

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルヂング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

古書賣買のお取次

主として地方在住の愛讀者諸氏の御便宜を計る目的で代理部の中に「古書案内」係を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。

古本御購入のお取次はもとより、御賣却希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次を致します。お問合せだけで御返事致しかねる様な種類のものならば、一應御送附下されば早速市内一流の專門家に照して正確迅速に評價してお返事を差上ます。

規定

A、御紹介には在校證書又は返信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、請品は右金額・期間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後右金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す時に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も深く御承知をきを願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、出版の程度等詳細にお知らせを願ひます。但古文書、錦繪等の如きは、現品を拝見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は當方で申受けます。

E、御紹介の宛名は、中央公論社代理部古書案内係一と明記して下さい。

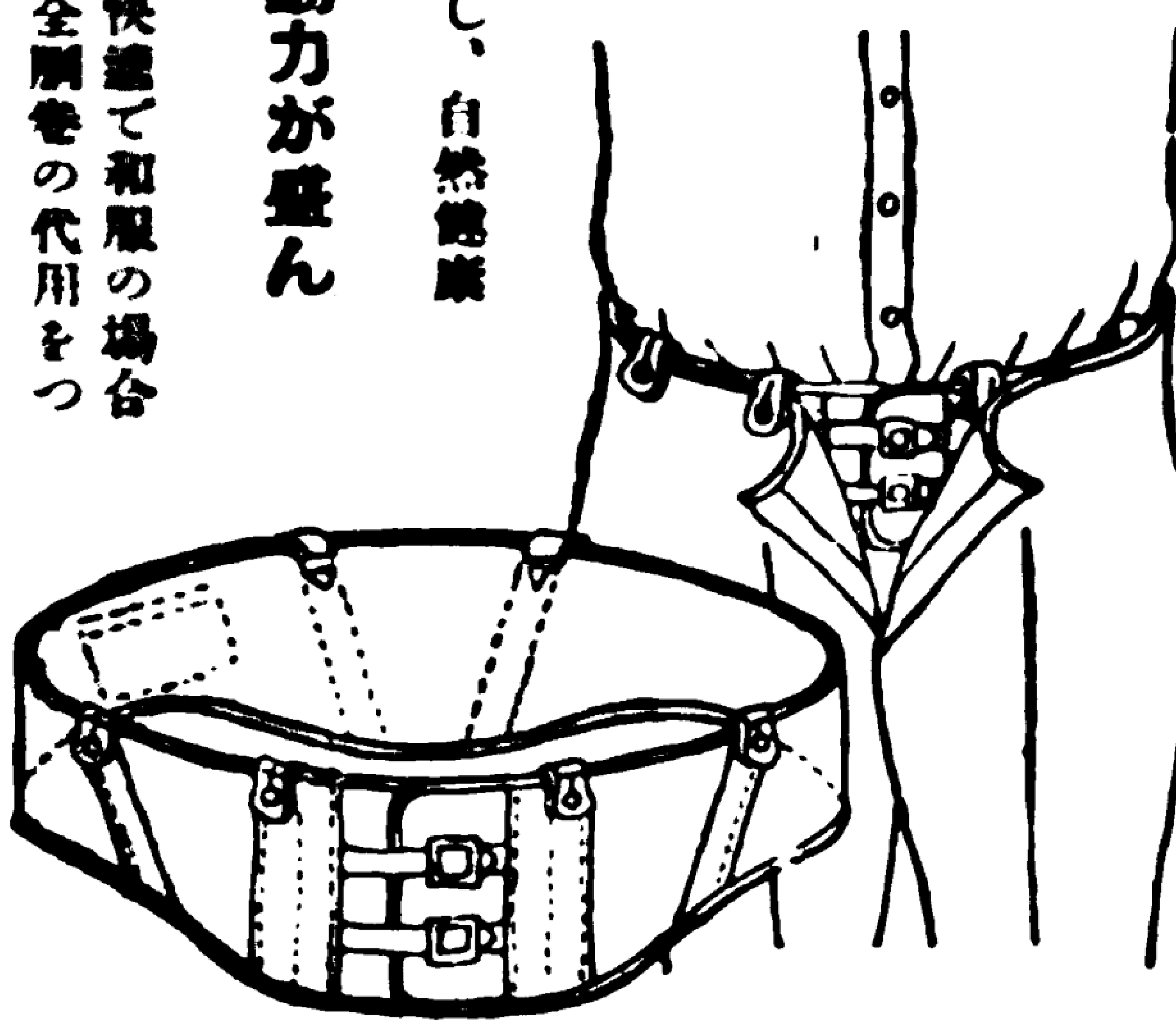
ズボン吊兼用
保健整形帶 **サッポーター**

(一)ズボンを腰で輕快に釣り支へます。
ズボン吊の如く肩の凝りや、胸脊の壓迫がなく、ゆるやかな氣分で常に居られます。

(二)姿勢を正しく、スタイルを端正に整へます。
座臥動作は自由で、姿をスラリと見せ、前屈みの人も姿勢の正しい習慣となります。

(三)胃の下垂を防ぎ、腸を保護し、腹力を強めます。
氣分を和らげ、神經過敏に陥る事を防ぎ、消極的病弱の原因を輕減し、自然健康を増進します。

(四)執務も活歩も愉快に、活動力が盛んになります。
下腹、腰骨、脊柱等のシマリ工合快適で和服の場合にもよく、殊に旅行外泊の際は安全腹卷の代用をつとめます。



(特大)周圍 鯨二尺七寸中心 (大)二尺四寸中心 (中)二尺一寸五分中心 (小)一尺九寸中心

定價 B混毛ネル地 三圓二十錢 C麻地一重 二圓五十錢
送料 東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

◆御注文には引き締めた腹廻り寸法をお報らせ下さい。

經濟と實用を兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

上等黑セル	五圓五十五錢
優等黑絹セル(甲斐絹膝裏附)	六圓七十錢
縞除・黑メルトン	四圓八十錢
上等ウーステッド	五圓六十五錢
黑サージ	四圓八十錢
上等黑キャージ(甲斐絹膝裏附)	六圓八十五錢
優等黑サージ(甲斐絹膝裏附)	七圓八十錢

寸法

	腹廻 鯨	股下
大	約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

御註文には必ず大中小の御指定を願ます。
送料 東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

◇昭和五年型の春着は

本社代理部へお註文下さい。

◇筒袖股引型、ダンブクロ型の極端な流行から脱して、最も紳士的な東京型の洋服を左の廉價で調製致します。

◇見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添附ノ事

【春着】

背廣服
F 三十八圓
G 四十五圓
H 五十五圓
I 六十圓
J 七十圓



洋服註文は代理部へ



【冬物】

背廣服　オーバ
A 三十八圓
B 四十五圓
C 五十五圓
D 六十圓
E 七十圓

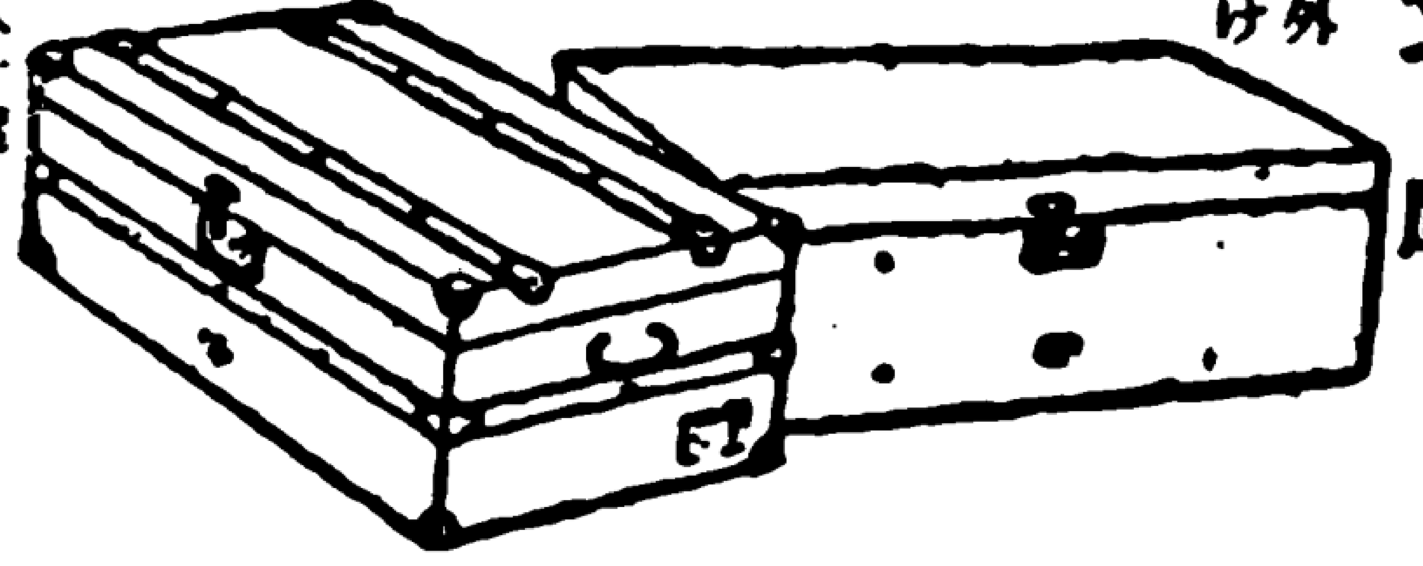
◇洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へる事は、經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「**Aノ背廣**」「**Bノオーバ**」と云ふ風にお指定の上**お年齢**をお申聞け願ひます。

◇代理部では御指定の種類のお年齢向なものを見立てゝ、明確な圖入りの寸法書をお送りしますから、これに各部分のお寸法を記載してお送り下されば、約二週間で居ながらにしてシツクリと體に合つた洋服がお手に入る譯でございます。

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番

昭和文庫



厚い鋼鐵板張りの外面には漆の高溫燒付けを施し、防蟲防濕の工夫をした堅牢な容器です。

縱二尺四寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分、內部は木板で圍み。ナフタリン樟腦入れまで設備してあります。

家庭用としては毛織物、貴重品類を入れ上製はトランクとしてそのまゝ送り出す事が出來、非常用としても、旅館や支部間よりも迅かに便利です。

定價　上製　九圓八十錢　並製　六圓八十錢

送料　東京市內配達料二十錢　地方荷造費三十錢　運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大一圓　小六十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢

領土四十五錢

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、織物固有の艶色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の雜巾と異り、塵りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價（金屬製容器入）　一圓

送料　東京市內十二錢　內地十八錢

領土四十五錢

スマドレ ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髮後や朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指頭で輕くマツサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髮は絹の樣に軟くなり、日々漆黑の艶を增します。

定價　婦人用　紳士用　特大瓶各二圓五十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢

領土四十五錢

スマドレ シャンプー

理想的洗髮液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す事は全く不思議な位で、スマドレヘヤトニックと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、極もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定價　特大瓶　二圓

送料　東京市內十二錢　內地十八錢

領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅及夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

此の外に秋のヘリオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも常に用意してありますから、お好みのまゝにお註文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各　二圓

（四季組合せ、又ハ四組）七圓五十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢

領土四十五錢

オプチサナ

獨逸藥品の偉力は世評の認める所ですが特にこのオプチサナはせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供も喜んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

當所々から醫家の纒つた註文がありましたが、今後十個以上纒つた御註文には多少の割引をいたします。

定價　二圓　送料東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

草津溫泉の精

本劑は古來有名な草津溫泉の主成分を蒐めたもので、天然物其まゝではありませんが、化學的操作を加へてありますから不純物なく、所謂湯の花に比較して數倍の効能があります。

本劑約二〇乃至五〇瓦は約一石の新鮮な溫泉となり、浴後の皮膚はサラツとしべたつくやうな事もなく、又布を着色する事もなく、風呂をも痛むこともなく、木質部は却つて丈夫になります。

其他含嗽料としてはコツプ一杯の水に一、二滴を、洗滌料消毒料には約一合の水又は湯に十滴乃至二十滴を用ひます。

定價　大瓶（四回用）　二圓　特大瓶（一〇回用）　六圓

送料　東京市內十二錢　內地二十七錢

領土五十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方により普通便より四日乃至十日間以上遅れますから、御註文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

新著月評

日夏耿之介著　明治大正詩史（下巻）

杉森孝次郎

もしも一つの詩史の著者が単なる何等衒学的研究、学殖の人であるならば、私はそれを読むに殆ど堪えないかも知れん。それは恰かも、一つの哲学を「博士」し、「教授」し、所謂ブロフェッスする人の普通または事務が、常人に哲学力のなんらの激刺なる、俊秀なるものなき、単に学殖的なるものである場合に、私、それを求、読し進むことの不難であらうやうに。實に、この問題は前者の場合に於いて最も典型的だとさへ断言することができる。

日夏氏の著を開卷し、読み進むにつれて先ず最も全編に感じたことがある。それは氏は此著に於いて、努力、模索、すくなくとも不断なる没頭的、計画的博捜または渉猟、深究、リサーチ的なる其の持続的従事を全盤立てる業績を力に餘裕ある者の如くに自然に示されてゐるのみならず、その各との材料の選擇されたる各材料に對する評價、批判の上に、すぐれたる直把力を偏れあやまたず、しばしば共に発揮にさへ示されてゐることである。「頑なな執拗と鋭敏な鑑賞とが併存する」（巻上頁九六）とは著者が清風に関してなした言だが、その鋭敏なる鑑賞は、たしかに此著に於ける最も生命的なる一性質だ。

鋭敏なる鑑賞力の持ちぬしは、最も多くの場合に於いて、即ち最も多くのさうした人々の場合に於いて、「頑な執拗」の補因となる傾向を多少特に持つ。極明が生む極端があるのだ。天才が同時に、唯一と再よりも近き距離を隔てては低能である側面を持つ常則と同一関係内の現象だ。日夏氏の著は、私が此瞬間まで読み進んだ限り、鋭敏なる鑑賞力を示せども、不満な點は比較的に其小であった。しかしながら、著者の如き、鋭敏なる鑑賞力あるきたざる深き直把力の持ちぬしである人としては、常に極度に、頑な執拗の補因とされざる根本的態度の愛護、維持を意とすべき理由がある。客観的なる、普遍公當的なる凌志、強烈なる主観的、創造的才魂が常に自他に負ふ一般的一時的にこれだ。私は他の余用等に妨げられて、此著の全讀を成し遂げてゐないから、その全體について責任ある明言、いな知義ある自信を構成しえないことを深く遺憾とする者であるが、既讀の全部だけを材料とする限り、著者の態度が浄き意味に於いて審判的であつたことを大體に於いて認め、敬謝する者である。實に、詩そのものの内在價値に對する評眼が関する限り、著者には匪酬自在なるものがある。かくして藤村も、晩翠も、[illegible]山も、露軒も、採山も、雄樹も、泣菫も、鉄幹も、醉茗も、鴎外も、物それぞれの本質と價値にしたがつて著者によつて簡明に再現されてゐる。むしろ例外的なる少許の場合について、私はただに再讀を期して著者の言に私がいかに承服しうるか、えないかを確めたいもの、詩があるが、それはいづれにしても例外的少許だ。また著者が詩の社會的位置に對していかなる研究、把握を直接、間接此著内に示されてゐるかを、私は全讀及び再讀後の問題として保留することを此瞬間は選ぶ者である。著者の鑑澤観の如きもおのづからその際に考察される便宜あるものだ。

著者の直把力、分析力、及び綜合力がいかに卓越せるものであるかは、卷上頁二八五前後の多くの頁にわたる晩翠論だけを讀んでも讀者の聰明だけを條件として十分に承認される。そこらにはブリリアントなるものがある。

著者の文章、むしろ表現の技術には、整理を要する側面と部分がある。卷上頁四七「國語に習熟な」に謂首してモンノターが無限の長

個個を試み、第十一行に終尾せる如きは最惡例に屬する。長いから惡るいのでは勿論ないが、惡るく長い。途中の「すぎなかつたが」あたりで一と息つかせべき旅行ではないか。同じ頁の上欄外註も同樣の遺憾を示す。これも二乃至三に切斷される誘惑を禁じがたい。同上頁五六「政治の監掌‥‥」の如き、また類似の批評を刺戟する、短くても、同上頁五〇「假令んば」の一センテンスの如き、最も親切なる表現とはいへない。著者の表現には本質的に詩的なるものがあると共に、また involved なるものがある。それの平明化乃至淺明化は斷然不可。それの深全化的超進の餘地は絕無ならず。表現は卽ち思索也。

此著こそは、何人も讀んで必ず深く、強く興味を感ずる。そして益する珍らしい一著たるに疑ひを容れる餘地はない。それは、いかにも豐富に、選擇ぶりよく、明治以來の（大正の部は未讀の部分を私として含む）詩を、結果からいうて極めてアトラクチヴに、ファスシネーチングに點綴してあることにその一因を持つ。そのサムプルスに刺戟されて、その詩の全體、その詩人の全部、明治、大正の詩を直接に進んで研究する興味を發展させない讀者はむしろ稀れであらう。專門的興味から見て一つの大なる先驅的、刺戟的生產で此書はすくなくともあるが、一般的興味から見ても極めて感謝すべき、ありがたい一つの惠贈物、頂戴物だ。今や日本研究の新機運が動きつつある。此著またおのづからそれの一つの重要なる文獻だ。（新潮社）

孫田秀春著　勞働法通義

中野登美雄

序文に於ける比喩的な叙述に從へば、勞働法は廿世紀の法律學が公法と私法の境界線上に生み落した公法を父とし私法を母とし、思想的には十九世紀を父とし廿世紀を母とする混血の麒麟兒であるが、然かも尙現在、中學通ひの腕白盛りな未成年者である。此文の筆者は一般法學上の見地から見て獨りこの混血兒のみならず、其の父たる公法もまた母たる私法もその肉體に於ては齡ひ老いたりとはいへ、其の素養に於ては尙青年の年境を脫してゐないと信ずるものであるが、それにしても勞働法學又は廣く社會法學は其發育の急速盛なるにも拘はらず、なほ父母に及ばざるは之れを認めざるを得ぬであらう。故に假りに勞働法學を以て未成年者だとすれば、勞働法學上の文獻に對して吾々評者のとるべき合理的であり人間味のある態度はその生活活動に間々の給付の質否に批判の眼を注ぐよりもむしろ其の將來に於ける健全なる發達を可能ならしむべき素質の診斷にあると思ふ。換言すれば筆者は各論に於ける個々の問題に對する著者の叙述に對する考察を避けて專ら總論における基本的問題特に著者の勞働法の研究に對する態度に考察の中心を置かんとするものである。

然らば著者孫田氏の此新法域に對する學問上の態度は如何、其研究に於ける方法上の基礎思想は孰れに在るか、簡單に言へば著者の法學特に勞働法學に對する方法上の態度は法律社會學的「」である。否、的確に言へば著者の態度は更に一歩を進めたものであつて、社會學上の因果關係的判斷又は認識を社會政策上、立法に課せられた特定の價值または目的を前提とするによつて定められたいはゆる『社會法』學派の『社會學的建設的方法』であつて、極めて活氣あり勇敢な創造的な方法である。一見すれば著者は單に理論的社會學的方法を勞働法の研究に適用されてゐる樣に見受けられる所がないでもない。例へば勞働法域の『限局概念』または指導的中心概念を確定するに當つて、これを社會的經濟的超法的領域の認識に於ける勞働の隷屬性または隷屬的

労働の概念にもとめられてゐる如きはそれてゐるが、併し仔細に観察すれば此基本的指導的概念は労働立法上の目的又は価値によつて換骨され、その本来の性質を失ひ、価値化され規範化された概念なるが如くに考へられる。更に云へば資本主義的組織のもとに於ける労働の資本に対する社会的経済的隷属性、労働者の資本家、雇主に対する隷属の存在と云ふ疑ふ可らざる認識によつて吾人の社会的道徳的意識に引き起された同情と之れによつて更に本能的又は意識的に誘致される労働者階級保護の要求または規範が問題の労働法学の最高概念であり、概念構成の指導的要素であつて、価値判断を離れ規範的内容を有せぬ理論的判断の内容としての労働の隷属そのものではない。

故に著者はリヒタアが労働法学上の指導的概念を法以外の領域にもとむるの法学の方法上無意義なることを強調せるに対し、これを排撃して『蓋し労働法の成立には寧ろ事實的発展がより必要なのである社会問題の から一定内容の法規を作り上げ、この法規を**法律制度に迄、斯くして更に既存の法律理論の体系に迄合成し、独自の法律領域を形成して行くその事柄的な要求が決定的なのである。**……』と述べてゐるが、此著者の見解はそれ自身に於て何が労働法なるかの概念確定の問題と此概念を前提とする**労働法そのものがいかにして発生せるかの問題、認識問題と発生問題を混同する極めて素朴な誤として難ぜらるべきものであるが、前に指摘した著者の社**会学的建設的方法から云ふならば非難はむしろこの建設的方法に於ける實践的問題と理論的問題との方法上の混同に加へらるべきものであらう。

以上述べた様な著者の労働法学に対する方法的傾向は労働法学と社会政策の関係に関する著者の説明に於て一層明確に示されてゐる。著者の述べる所によれば一の法律科学としての労働法学は法律理論的方法に據るべきものでなく、法律社会学的方法によるべく、ジンツハイマーの建設的方法に據るべきものであつて其結果としてカスケル、ニツパルダイ等の主張する様に労働法学は——著者は法と法学とを常に必ずしも区別して論じてをらぬ。或る場合には法を素材の意義にとり或る場合には認識の結果の意味にとつてゐる。然て著者は此題に於て労働法として掲げられてゐるが其意味は主観的には學であり客観的には法[illegible]的認識の結果を指す——社会政策とは全く別個の性質をもつものでなく『社会政策と共に又はこれと並行して法律的方法により隷属的労働生活上の諸問題を取り扱ひ、これが解決に任ずる學』——である。之れによつてみた

新刊紹介

親分子分、英雄篇（白柳秀湖著）唯物史観の上にたつて、日本古来の主従関係をとく。説く所、精明、三成、曾我氏、関ヶ原などについて、平易にして興味多し（四六判四〇〇頁、定価一、五〇 千倉書房）

機械と藝術との交流（板垣鷹穂著）現代藝術の持つ多くの新しい形態は、機械文明の反映として理解される。本書はそれが軍艦飛行機自動車及多くの建築に、いかに反映して居るかを取扱ふ。寫眞版三十六頁挿入（新菊判一五〇頁、定価二、七〇 岩波書店）

談話室、漫談篇（報知新聞調査部編）どの頁にも或は愉快な或は軽妙な或は皮肉な或は愛らしき小話が見出されて読者を喜ばせるであらう。（四六判三五〇頁、定価一、五〇 千倉書房）

詩集 **肥器類創世紀**（條御島稔著）（新菊判一一九頁、定価一、二〇 富貴堂書房）

歌集 **身邊雑唱**（楠田敏郎著）（四六判**二八五頁、定価一、八〇** 新秋月刊社）

真鍮の貞操切符（早坂二郎譯）。アプトン・シンクレアの "The Brass Check" の譯である。著者の體驗を根本資料としてアメリカの資本主義的ジャーナリズムを完膚なきまでに剔抉し暴露し裁断せるもの。（四六判六一七頁

ば勞働法學の目的は勞働問題の解決であつて法の認識でなく、法の研究は單なる手段なるが如くである。此點に於て著者はジンツハイマーの科學の本質に關する所說を承認するもの〻如くである『一體科學は認識に役立つものでなくして形成に役立つものである。認識は唯だ形成の手段たるものに過ぎない——法律學の終局目的は法律政策にあると言はなければならぬ。——』.

筆者は以上の基本的問題の諸點に關してかなり著者とは理論的見解を異にするものであるが、今以上の考察によつて著者のいはゆる『未成年』の素質を考ふるにその總育に於ては他の模範たり得べく又極めて多分のヴィタリテイを有し、後の點に於てはむしろ血の氣が有り餘るやうに見受けられるのであつて、その將來の健全なる發達のためにはエネルギーをコンテンプラテイーヴの方面に費すの賢なるを信ずる。併しながら總じて云へばこの著は組織的に且つ簡潔に勞働法上の總べての主要問題を取り扱つたもので、立法の不備であり、此方面の文獻の少ない日本に於ては獨り實際の領域に於てのみならず、學的方面にも寄與する所少なからざるを筆者は信ずるものである。玆に擱筆するに當つて自分は其妄評を謝し併せて著者孫田教授の多大な努力に敬意を表しその健康を祈りたい。(日本評論社)

定價一、九〇　新潮社)

新興ロシアの教育(山下德治著)　收むる所「新興教育の根本原理」「教育界の先達」「ソヴイエトの教育方針」等々。(四六判三六八頁定價二、五〇　鐵塔書院)

帝國主義の現段階(橘研究所編)　世界政治經濟過程の現段階即コミンテルの規定せる「第三期」を透徹に把握せんとする試み(四六判二二一頁、定價一、〇〇　鐵塔書院)

神まうで(鐵道省編)　最も信頼すべき神社案內(三六判五二〇頁、定價一、三〇　博文館)

俳文學大系(潁原、伊藤、橋本氏編)　第三卷、註釋編第一。「風俗文選、大注解」「蕉翁發句說叢大全」其他を收む。(四六判五四二頁非賣品、大鳳閣書房)

西方の人(芥川龍之介著)　晚年の作十一篇を收む。一篇として彼がいたましき生活を反映せぬものはない。(四六判二七六頁、定價二〇〇　岩波書店)

一乘の進化(永井義憲著)　(四六判二五六頁、定價三五　憲啓舍)

譯詩集ゲーテ以後1(小栗孝則著)　(四六判二〇四頁、定價一、〇〇　河發行所)

ロシアに於けるマルクス主義の勝利(デボーリン著・秋山憲夫譯)　(四六判八四頁定價三〇　永田書店)

メンシェヴィズムの危機(レニン著、秋田耕一譯)(四六判九〇頁、定價三五　永田書店)

國際社會民主々義批判(ロゾフスキー其他著・齋藤猛夫譯)　(四六判二〇九頁、定價八〇　永田書店)

藝術學研究第一輯(外山卯三郎編輯)　(新潮判一四五頁、定價二、〇〇　第一書房)

獨帝と露帝の往復書翰(大竹博吉監編)　(四六判三九〇頁、定價三、〇〇　ロシア問題研究所)

妖說天草丸(生田蝶介著)　パテレン教徒をあつめて島原により德川幕府の覆滅を企てた森宗意軒の變幻出沒を記す(四六判五二一頁定價一、三〇　不凡社)

浮世繪概說(田中喜作著)　(四六判一六八頁寫眞刷三七葉、定價一、二〇　岩波書店)

詩集月明集(後藤楢根著)　(四六判一二〇頁、定價一、二〇　童仙房出版部)

滯歐印象記(本間久雄著)　(四六判三六三頁、定價二、三〇　東京堂)

詩集「靑い夜道」(田中冬二著)　(四六判二〇五頁、定價二、五〇　第一書房)

富は自分の頭にある(野國千珊著)　(四六判二六二頁、定價一、三〇　騷人社)

橫の社會化と縱の社會化(佐藤々太著)　(四六判四五頁、定價三〇　建設社)

學校詩集(伊藤信吉編)　(四六判一七〇頁定價一、〇〇　學校詩集發行所)

雀おどり(加藤四朗著)　童話集(四六判一五八頁、定價五〇　木田書店)

生命の微光(佐野書吉著)　歌集(四六判六〇頁、定價一、〇〇　大地舍)

アメリカ通信

若槻全權一行の人氣

本誌特派員　清澤洌

一

ロンドン會議の成功、不成功は、政治家がどれだけ軍事專門家を制して、所謂政治的解決が出來るかにある。

ジユネーヴ軍縮會議が失敗して、この種の會議を軍事專門家に委すことの危險なことを知つた世界は、ロンドン會議には、その主要役者は政治家ならざるべからずとした。そしてその役割によつて舞臺に上つたのが若槻禮次郎氏である。

元の總理大臣であり、主席全權である若槻氏は、無論總べての對外交渉の矢表てに立つた。聲明書の發表も同氏がすれば、新聞記者の質問應答も一手にこれを引き受けた。財部海相は名は全權であるけれども、全然並び大名で、たゞあの愛嬌のある鷹揚な姿を、一緒に並べて居るといふにすぎなかつた。

併し財部海相が、單に一緒に歩くためだけに來たと思へば間違ふ。かれは若槻といふ政治家に對する軍部側のお目つけの任務を有するのである。若槻が行くところ、必らずかれが傍にある以上は、若槻の言說は常にかれを反映せざるをえない。

この財部海相が、米國においてまづその示威運動を示した例がある。當時、列席の人々は恐くかれが「脱線」したといつたが、併し私は必らずしもそうではないと思ふ。

全權一行を乘せた西比利亞丸がシアトルに入港した十一月十一日の夜、一行のために岡本領事主催で歡迎會が開かれた。招かれた者は同地の日本人ばかりで、地方人の辯として、何人も長い演說をやつて、その後で若槻全權の答辭があつた。

『一國の國防は絕對に安全なることを必要とする。われ等は何人からも脅されることがあつてはならぬ。併しながら軍備縮少は世界の與論である。われ等はこの世界の傾向に貢獻しなくてはならぬ。この矛盾をどうするか、そこにこの會議の重大性がある』

若槻氏の演說は如何にも政治家的で、どこからも隙がない。

その後で直ぐ財部海相が起つた。あの訥辯家で、後になるに從つて

自から辭職して、腕を縱横にふるつた。

『もしこの軍縮會議が不成功に終り、海軍擴張競爭が起つた場合には、日本のやうな貧しい國は、到底米國と競爭が出來ないといふものがある。日本は未だかつて金持であつたことはない、併しそれに拘はらず海軍を現在の地位に持ち來たしたではないか。 また八々艦隊をも造る筈であつたではないか。 海軍費を豫算からとることが出來ない場合には、畏こくも御手許金から支出したことすらある。 戰爭は金ばかりで勝つものではない、 そこに日本人の特性がある。見ろ、 米國には一隻の一萬噸巡洋艦もないのに、 日本は來年になると八隻もある……』

財部海相の演説全部を書くことは差控へるが、日本國民は他國の無理な要道に對しては決して屈しない、と日露戰爭を引合に出したりして大きな氣焔を吐いた。

晩餐會が終ると、海軍の高官が新聞記者席へ飛んで來た。 そして今の演説は日本に打電してくれるなと頼んだ。

『もしあれを打つやうなことがあると今後、信用できない者としてしまふぞ』

とまで附け加へた。 七八十人の出席者のある公會の席上で、全權が聲明したことを取次ぐことが、 なぜ「不信用な男」であるかは了解することが困難だが、 兎に角、 かうして問題は「財部海相の脱線事件」ですんでしまつた。

二

かう書く私とて、 その當時であれば、矢張り内容はその儘傳へなかつたに違ひない。 けれども、それは既に過去のことであり、それが單に財部全權が、列席の對手を日本同胞としてフランクな私見を述べたにすぎないものといふことで諒解したのだから、 こゝにたゞ一つのパッシング・インシデントとして書くのである。

たゞ問題はこれが果して「脱線」であるかどうかである。 米國の土地を踏んだその第一日において、 かうしたことをいふ可不可は無論問題になるであらう、 併し同行の海軍將校は——記者の口をふさいだその人すらも、 これ以外の考へ方をして居るかどうかである。

これを一面から觀察すれば、 米國における第一日は、即ち若槻、 財部兩全權が始めて全權としての公道を歩む第一日である。 この時に當つて、 海軍を背後に負ふ財部全權は、この決心を改めて僚友である若槻氏に確言しておくの必要を感じなかつたであらうか。 言葉を代へていへば、 當夜の大膽なる演説は、財部全權がシヤトルの在留邦人に語つたものでなくて、その舌鋒は若槻首席全權の方にむいてゐなかつたと何人が斷言するであらうか。

脱線であらうがあるまいが、 この「決心」の表白に對しては、若槻全權はどうしても耳を傾けざるを得ない。

この財部海相の「脱線演説」の效果は直ちに若槻全權に響いたと私は思ふ。 即ち一行がシカゴに着するや、 若槻全權は訪問して來た新聞記

者に對して、日本は補助艦につき七割の比率を要求すると聲明して全國を驚かしたのである。

米國の聯合通信は十二月十五日の日付けで左のやうな若槻全權の誤を傳へた――。

『補助艦に關する限り日本は最大なる海軍力を有する國に比して、七割の噸數を保持することを、單に希望するのみならず、これを主張するのである。　われ等は他國に比し劣勢を以て滿足する。併し深き研究の結果、この比率を主張せねばならぬことを確信せしめらるゝに至つた』

ワシントン府に入らうとする時、この新聞記事を見た一行の者は――若槻氏に接近する幹部の人すらも、　これは新聞の誤報であつて、若槻氏が今頃七割說を出す筈はないと主張した。　そしてさう打電した記者もあつた。

一行とサイベリア丸で同行し、　特に特別列車に同乘したコロンビア大學教授ショットウエル博士は、　日本の友人としてその新聞を見ながら一行の人に忠告した。『七割をいつてはいけません、また日本の意志は必らずしもそこにないのだから』

併しかう主張した人々も、　ワシントンに到着したその當日、日本大使館における米人新聞記者との會見において、　若槻全權が日本の主張が七割にあることを明白に述べたことによつて、　新聞の報導が誤報でないことを知つた。

今回の海軍々縮會議において、日本が七割を要求するといふことは、謂はゞ日本の有する最後の切り札である。　無論これは反覆交渉によつて、　多少の變更をやむなくせしめられるにしても、　まだ交渉にも入らない以前から、　これを發表することは、いかにも大膽であつたといはねばならぬ。

故に米國聯合通信は『日本全權の聲明は、日本が今回の會議に比率增加を重要な問題とするものとして、從來の內最も強力(フォーシブル)なるものであると當地の官憲は考へて居る』といひ、　またワシントン・ポストは一行入府當日の社說において

『普通の場合に於ては日本の要求（七割の要求と潜航艇における英米同率）は協定成立の望みを暗くするものである。そしてもしジュネーヴにおいて齋藤實全權が二ケ年以前にこれを主張したならば、三國軍縮會議はあれ以前に終末を告げてなつたであらう』

と論じ、　併し若槻全權の大膽(フランクネス)に對して敬意を拂つてゐる。

三

若槻全權がワシントン府にも入らない以前に、まづ日本の態度の內容を天下に發表したことに關する適不適の批評は、尙將來に待たねばならぬが、　少なくとも左のやうな重大結果を伴ふと思ふ。

第一には日本の態度を固有せしめ、　その交渉において拔きさしならぬやうにしたことである。　公開外交(オープンダブロマシー)は天下の傾向であるが、　たゞこれに伴ふ弊害は、　交渉に當つて妥協の餘地を少なからしめることである。　この意味は、　もし一國が要求の內容を秘密にし、　これを最後の切

り札として持つて居れば、交渉が進むに從つて讓歩するも、面目と體度を失ふことがないのである。然るに始めから細目的なる發表をなしてしまつた以上は、これを讓ることは卽ち日本國民と世界に對して面目を失することである。

この最も近い例は一九二七年のジュネーヴ會議である。英國のブリッヂマン海相も、米國のギブソン全權も、始めから余りにその態度を明らかにし、政府と國民と新聞の後援を得てしまつたが故に、その手前如何とも妥協の餘地がなくなつたのだ。「國防の最少限度」は、どう論議しても、そう幾つもある筈はないであらうからである。

第二に若槻全權が、その細目的比率を發表したことは、軍縮會議に專門家的色彩を濃厚にせしめたのである。

若槻全權はシアトル上陸以來、今回の會議がケロッグ不戰條約を基礎にしたものであることを縷々聲明した。それはワシントン會議の延長にあらず、從つてそこで決定された比率を承諾する義務はないことについて、改めて釘を打つたのであるのは明らかだが、併しもし今回のロンドン會議が不戰條約を基礎にしたものであれば、その出發點は軍備の大々的縮少であつて、比率の問題であつてはならぬ筈である。比率問題の固執は、戰爭を假定するところからのみ來る。

故に若槻全權より少し前に來た英首相マクドナルドの如きは、その最大の目的が英米の不戰を決定するにあつたに拘はらず、これについては絶對に觸るゝを避けて、あくまで平和と軍備縮少を表看板として押し通した。細目的の意見の現れたのは二三ヶ月後のことである。

一方不戰條約を基礎とするといひながら、まづ始めから比率を持ち出したのは、明らかに矛盾である。そしてその會議の規模目的を自から狹少ならしめた罪は若槻全權自からこれを負はねばならぬ。

然し若槻全權が始めから、この問題を米國において主要たる論議とする意思があつたかどうかは疑問である。シアトルに上陸した翌日、オリムピック・ホテルに於ける午餐會席上の第一の聲明には

「國防的最少兵力、これが吾人の基準であります。吾人は何國に對しても脅威を與へんとするものではありません、同時に何國たりともわが國に對し脅威となることを欲せないのであります。故に來るべき會議における日本の標語は『縮少及び無脅威』であります」

といひ、また十一月十六日にワシントンで發表したステートメントにおいても

「日本は縮少を主張する。日本は各參加國海軍々備の縮減を主張する。そして日本は相對的にその海軍勢力を縮小する準備がある」

と述べて居つて、一切基礎的項目に觸るゝを避けた。

その若槻首席全權が、なぜ、新聞記者の質問があつたにしても、日本の要求を明らかにして、ある意味で背水的陣をしいたか。財部海相の「脫線演說」が、政治家であるかれ、妥協的のかれに、影響しなかつたと何人が斷言しうるであらう。

四

若槻全權一行の任務が、米國において成功したか如何は、その任務

が何であつたかによつて分れる。

もしその任務が、米國の對日輿論を開拓して、これを味方とする點にあつたとするならば、それは必ずしも成功だとはいへない。

日本はロンドン會議に、前總理大臣と現任海軍大臣といふ稀に見る強力なる代表者を送つたに拘はらず、これに對する米國の輿論は、まるでこれを顧みなかつた。米國の新聞は若槻全權一行がシアトルに到着した日においてすら、極めて小さく、その記事を取扱つたにすぎなかつたのである。そして一行を送迎する人々は日本人だけであつて、シアトルにおいてはワシントン州知事すらも公務多忙を名として歡迎會に出席しなかつた。

元來、米國に對する外交の要諦は所謂マン・イン・ザ・ストリートを對手にするにある。輿論國であるこの國では、大衆を——それが如何に迂愚の衆であらうとも——味方にする以外に道はない。親日とか排日とかいつても、それは要するに根據のない感情にすぎないものである。

今回の一行が米國に來るについて、この邊の準備は全然缺けてゐた。否、五十名を超へる(一行英國に在る人々も含む)の内に、新聞記者係りすらない。この人を強いて求めれば、外務省情報部長の齋藤博氏であらうが、同氏は公式通譯官であり、事務總長であり、一行の中心である。この人に更に多忙なる事務を要求するのは、要求する方が無理である。

然らば大使館でその邊に備へるところがあつたか。大使館の幹部はいづれも優れた紳士であるが、この方面に目をつけるのには、余りに純粹な役人育ちである。現にわれ等に配付された全權一行の日程表には『寫眞屋の需により撮影さるること』といふ文字がある。寫眞屋、新聞屋——それが不用意の間に、かれ等の輿論機關に對する感情を現はしてゐる。

われ等は強國の一つとしてプロパガンダを必要としない。プロパガンダといふ文字すらも快よからざる聯想を作ふのを常とする。併しながらこれだけの大架裟な全權一行に、一人の輿論機關との仲介になる專任者を備へる必要がないのであらうか。

たゞ偶然にこの缺陥を満たしたのは、一行の内に萬緑叢中の紅一點として財部夫人がゐたことである。日本若友のレディーとして、一行の記事中には夫人のことが必らず特筆大書された。政府、外交中心のワシントン府においては別であるが、シカゴ及び以西の新聞では、だ題は一行でなくて財部夫人であつた。

こゝに序だから一行の顔觸れについて書いてなかう。一行を大別して四つに分つことが出來る。若槻、財部、外務、海軍これである。

若槻系は身のまはりには御曹子有格氏(日本銀行員)と、愛婿田原氏(特に外務書記官にまはして同伴)があり、この外お好みの川崎法制局長官、山川端夫の二氏があつて顧問となつてゐる。

財部系は當然お國の薩摩の色を濃くしてゐる。貴族院議員の樺山伯は、昔の樺山大將の令息、財部海相には恩顧ある人であつて、顧問としての適不適は別として、更に角一枚加へる必要がある。それから山本權兵衛氏の令息が外務省囑託として加はつてゐるが、これは夫人の

合弟である。これに牧野伸顕氏の令息が居るのは、牧野内大臣と隆厚誼に對する顧慮であろう。

海軍省は安保大將を以て代表され、左近司軍務局長が中心になつてある。外務は、全權の松平氏はロンドンに居るから、事務的なことは齋藤氏が中心である。

も一つ序に隨行新聞記者のことを書くと、今回の軍縮會議によつて、新聞の勢力が全く確立したといつてもいゝ。日本からの隨行記者は八人であつて（中央公論を代表する私は別として）それは左のやうである——

朝日新聞二人、毎日新聞（東京日々新聞）二人、聯合通信一人、電報通信一人、時事新報一人。

これをワシントン會議當時、日本新聞記者が十名も押しかけたに比して非常な相違のあることを知るであらう。

これは何を物語るか。強力なる新聞は益々強力になり、弱勢の新聞はその經濟的特派員を送るにたへなくなつたことを語るものでなくてはならぬ。殊に朝日、毎日の如きは、いづれもニューヨーク特派員をワシントンに駐在して、人力と金力を惜まずして活躍せしめて居る。ロンドンでも無論同じ事實を示すであらう。

かういふ會議に朝日、毎日等一流新聞は十萬圓内外を使ふのである。

五

私はさきに日本を發つ一行が、米國における輿論をとらへることについては、明らかに失敗したといつた。これに對して何等の積極的努力を拂はなかつたのが、その唯一の原因である

併しながらこれを他の方面から觀察すれば、即ちこれを專門家的立場からすれば觀察はまた別になる。

日本全權が海軍補助艦艇勢力の七割と、潜水艦の不[illegible]勢力を要求したことの適不適については前段に述べたところであつて、政治家的、大局的ではないが、併しこの問題を提出したが故に、米國朝野の注意は俄然これにむけられ、日本の立場といふものが、比較的によく諒解されるに至つた。

殊に若槻全權は日本においても、質問應答の雄として知らるゝだけに、新聞記者の應對についても、比較的に好感を得たやうであつた。

これについてワシントン・ポスト紙の記者は

『若槻全權はその大膽において、その態度において、またその容貌においてすらも、強く英國首相ラムゼー・マクドナルドに似て居る』

といつたのは、若槻氏に對する大なるコンプリメントといふことが出來よう。

若槻氏と財部氏とは二つの相對立した性格である。全權一行が通過するところ在留邦人は、到るところにおいて涙ぐましいほどの歡迎をした。特別列車がキヤスケード及びロッキー山脈を横ぎつた時に、折しもの大雪で、寒氣は零度を下つたに拘はらず、日本人の居るところ、われ等は、必らず停車場に立ち迎して、一行の健闘を祈り、贈物を贈つた。

汽車が大陸横斷の途ウエナッチーといふ驛に到着するのは午後十一時すぎであつたが、そこの邦人が停車場に出迎へるといふ通知があつた。若槻全權に『お待ちになつて同胞とお逢ひしますか』といふと『私はこれから寝るんだ、晝間ならどんな人にでも逢ふが、晩に逢ふのは先方の無理で、そんなことをしては身體が續かない。私は名古屋邊を通過する時にも誰にも逢ひませんでした』とそのまゝ寝てしまつた。

同じ話しを財部全權にすると『逢ふさ、いつまでも起きてゐる、この寒い雪の中にわれ等を待つてゐる愛國心を考へてくれ』と、他の人が寝てしまつた後を、夫人と展望車の中で待つてゐた。そして感激的に邦人と握手をした。

この小さいエピソードが示すやうに、若槻氏が理知的であれば、財部氏は情的である。薩摩人である財部氏には、見るからに純情が燃えてゐて、シアトルの「脱線演説」も、同地の邦人代表者が、日本の練習艦隊が半歳ぐらゐ前に來航し、日本海軍を賞讃嘆美するのに止まるところを知らなかつたのが、この純情人を刺激した一つの原因であつた。

この二人の全權の取り合せは決して悪くない。兩全權とも英語は大して出來ないが、併しそうしたことは末節問題である。兩全權の米人に與へた印象は案外良好であつたやうである。

六

これを米國側に觀ると、私は米國人の對外的、國際的の態度が、急速度を以て轉換しつゝあることを感ぜざるを得ない。

大統領フーヴァが、上院の有力なる反對を排して、國際司法裁判所に參加すべく、米國の代表者をして署名せしめたのは、全權一行が着米の前日であつた。米國がドイツの賠償問題解決に參加し、また國際銀行の一員となることに、今は少しも不思議とするものはない。孤立外交を誇つた米國は、もうその頭を國際外交の深味に突き入れてゐる。

この國際心が出來た米國には、日本側が突然七割の比率を持ち出しても、大して驚かないまでになつて居る。米國の新聞紙は『かつてかゝる要求をなすれば、會議は必らず破裂したにちがひない、併し今や時勢は變つてゐる』といつてゐたが、時勢はどう變つてゐるのか。われ等から見れば、米國が國際的に成人したといふ以外に何にもないのだ。故に有力なるニーヨーク・タイムスのワシントン特派員ウーラハンは『日本には日本の要求がある。もし要求が最後的のもので一分一厘も動かすことが出來ないものであるならば、國際會議を催ふして折衝する必要もないのだ』と高をくゝり、また同じタイムスは社説で『ある者は日本が合衆國及び英國の七割を要求したことについて驚きを感じたであらう。併し華府會議において日本の海軍専門家は同じ比率を望んだ、それが西部太平洋におけるグアム及び比島をふくむ英米の海軍根據地を放擲するといふ政治的讓歩をなすことにより六割（五・五・三）の比率に切り下げられた』といつて、始めから國際會議には「最少要求」といつたやうなものは

なくて、日本がある限度まで減少をするものと決めてかゝつてゐるの
である。
米國が、かうして他國の提案に對して寛大になつたことは、幾つもの國際會議に參加して、所謂國際心がでさたからでもあるけれども、もつと大きな原因は、アメリカが自國に對して自信が出來て來たからである。かつては外國の要求だとさへみれば、殊に日本の要備に對しては、悪名なるマグダレナ灣の軍港事件を上院の問題にしたのに始めて、極めて神經過敏であり、判斷着付いて他の主張に聞くの雅量はなかつたのである。

そのアメリカの地位は近來著るしく變つて來た。世界の大國である英國がその首相マクドナルドを送つて、米國の好意を求めたのは一い先頃である。昔日の威風はなくても、英國はまだ歐洲の心臓であり、中間權衡である。マクドナルドの渡米は歐洲が、ついにその自尊の足を屈して、米國の前に憐れみを乞ふたともいひうるのである。

先頃、西の使ひを迎へた米國は、今は東洋の強國の代表者を迎へて居る。米國が歐洲の心臓であれば、日本にもつと適切なる意味において、東洋の心臓である。かうして東西洋の盟主を迎へて、米國の國際的地位は益々確立して來た。米國は巨人の如く立つて居る自分を感じ得た。

こゝに誇持も生れるが、こゝにまた寛容と自重が生れる。それが今回の若槻全權の渡米を機會に最も明らかに現はれたと思ふ。

七

一ケ月後でなければ讀者の前に備へられないこの文の性質に鑑みて、若槻全權が米國大統領及び國務長官と如何なる諒解をえたかといふやうな内容的問題については一切書くことをしない。それは新聞の記報に任すべきものである。

たゞ併しこゝで特記しておきたいことは、米國の朝野が日本に對して驚くべき好意を有して居る事實である。米國新聞の社説は悉くこれを示してゐるが、有名なるマーク・サリバンは、若槻全權がワシントンを辭する日の夕刊紙にかういつてゐる。

「事情を知つて居る者は日本は平和促進の目的のために最も眞摯なる合衆國の提携者であると信じて居る。一九二一年の華府會議は日本の外交の轉換期である。始め日本はその古有の文明を近代化するのに西洋を模した。何が西洋各國を偉大にならしめたかを考へて英國とドイツに範をとつて、軍事的強力を主張した。併し一九二一年の會議以來、合衆國の方法と政策が最も價値あるものとしてこれをガイドとすることにした。

日本は信用するに足る。なぜなら日本は米國を眞似してゐるから。

といふ論理は如何にも米國人らしいエキスプレッションだが、かれは最後に

「この會議が失敗すれば建艦競爭が始まるであらう。日本は左樣な結

果を避けるために、會議における如何なる他國よりも信頼することが出來る。その理由は日本が米國に對する眞との友情からであり、平和に對する米國の政策に同感であるからであり、日本自身が採用した國策からであり、また他國に對する經濟的關係からである』と書いてゐる。

このサリパンの論調はまた大體の米國言論界の論調であつた。

かくの如く日本に好感を持つて來たのは種々な理由がある。第一には無論日本の態度が、比率の問題は別として、心から軍縮の成功を祈願して居ることが反映した結果である。

第二には今回の軍縮會議の豫備交渉に當つて、英國と米國と話しあつた關係から、米國は日佛の感情を非常に顧慮した。華府における米國全權側との會見においても、この點を說明したと信ぜられるが、日本に對するこの邊の遠慮が大分あつた。

第三に對日感情のいゝ理由は、米國は移民問題、支那問題について餘りに日本を虐めすぎたといふ感じが胸にあるからだ。そのリアクションが今來たのだ。

八

最後にいつてをきたいことは、世界は外交を專門的なる外交官の手から奪ひ去る時が來たといふ事實である。

マクドナルドもフーヴアも外交官ではない、併しかれ等の交渉は、會議を開催するまでに漕ぎつけたばかりではなく、前回のジエネーヴ會議に參加を拒絕した佛伊も、今回はこれを應諾せざるを得ないだけの外交をなしえたのである。

若槻全權は外交畑とは緣の遠い人である。併しかれは長い間の政治家として、大衆のサイコロジーを心得て居る。これが外交畑に役人として育つた外交技師の眞似の出來ない點である。

華府からニューヨークについたその夜、若槻全權はプラザ・ホテルにおいて早速米人新聞記者を引見した。例によつて大聲に質問應答をなしたが、終ると何か簡單なレフレッシュメントの準備が出來たことをいつて來た。『呑むものでもあつたら、どうです、新聞記者の諸君にあげては』と若槻氏がいふと、當夜の主人役である澤田總領事その他は

『あの連中はあれで澤山ですよ』

とこれを一口に排し去つてしまつた。

この事は極めて小さいことにすぎないが——たゞ昨夜の事で頭に印象が明らかだから、こゝに書くにすぎないが、この態度が職業外交技術家と政治家の相違である。小役人の眼には上官と勳等と大實業家と外交文書しかない。政治家にして（若槻氏がどれだけ偉いかは別な問題である）始めて一つの形をとつて居らないマスの力がどう動くか、どういふ影響があるかを洞察することが出來るのだ。

近來の外交が、寧ろ外交官にあらざる人の手によつて成功するのは、これが故である。殊に近來は所謂マン・ツー・マン 外交文書を避け

て。相互の懇談によつて解決することの傾向あるにおいて、若槻全權が米國を經由して會議地に赴いたことは當を得たことであつた。そしてその成績も、日本の如何なる專門外交家があげたよりも、これをあげえたことだけは確實である。

今度一行は十二月十九日午後九時にニューヨークについて、その翌日午後十時オリンピック號に乘り込むのだ。この矢のやうな旅行先きで筆をとつて居る私はいはんとするところ、よく意をつくさない。試みに私の意を要約すれば左のやうになる。

第一　若槻全權は日本の要求する比率問題を米國における論議の中心にしてしまつた。これは會議の目的を局部的、專門家的にならしめ、かつ日本の態度を固着せしめ、將來に禍ひすることなきやの懸念がある。

第二　併しこうして態度を明らかにしたことから來る利益もあつた。日本の主張が明らかになつた事、若槻全權の開放的な態度が賞讃を買つた事等がこれだ。

第三　今回の全權一行の重大な手落ちは、輿論指導に對する一人の責任者が居らなかつたことだ。幸ひに前述したやうな種々な好條件から大體大過なくしてすぎたが、米國の輿論を開拓するやうな手段は全然とらなかつた。この點で專門家的には成功で、國民的には失敗であつたといへる。

第四　以上はいづれにしても第二義的なることであつて、問題は若槻といふ文官的、政治家的全權が、どれだけ軍部の決心を制することが出來るかである。若槻全權が新聞記者と會見するやうな場合にも、財部全權は無論だが、他の軍部の高官は大概そこに連なつて耳を立てゝ聞いてゐる。かくしてどれだけ若槻全權が「政治家的解決」に猛進し得、かつ軍事專門家が同意するかが、今後の問題である。

日本は七割の比率をさへとれば、この軍縮會議が成功したといふであらう。軍縮會議に澤山の比率を割あてられることがどうして成功なのか。不戰條約を有して、これを發足點とするといふものが、軍備といふ不生産的なものに、澤山の費用を支出して、觀兵式觀艦式だけをやらしてゆくことがどうして成功なのか。

日本人にみんな軍事專門家になつてしまはなくてもいゝ筈である。

(ロンドンに出帆する日)

ウンベルト夫人の財産

——世界怪奇實話 IV——

牧逸馬

1

重苦しい八月の太陽が巴里を押しつけてゐた。ウヰリアム・ル・キユウ氏は、サラ・ベルナアルの招待を受けて、巴里郊外アンジヤン・レ・バンの湖岸に建つてゐるサラの別荘の午餐會へ出かけて行つた。別荘は大きな白堊の影を靜かな湖面に落として、遠くからは上下につながつて二倍に見えてゐた。

食堂の開かれる前ル・キユウ氏は、同じく招かれて來てゐた二人の紳士と、マリイ・ドルニヤックといふ、髪の毛の黒い、活潑な少女と一緒に、景勝の地として有名なその湖上にボウトを浮かべて時間を消した。ル・キユウ氏は、その二三個月前に、トウルに近い知人の家でこのマリイ・ドルニヤックに紹介されて、顔見識りの間柄だつたのだ。サロンのヴエランダから、美しい芝生の傾斜が湖に續いてゐた。四人は同じ汽車で巴里から來て、すこし早く着き過ぎてゐたので、食堂があいて呼び込まれるまでボウトを漕ぎ廻つた。

ウヰリアム・タフネル・ル・キユウは、有名な英國の老大衆作家だ。小説家として亦旅行家として廣く知られてゐて、多くの冒險並びに探偵物の作品があり、「モンテ・カアロの秘密」、「勝利への道」等、今では些さか古いが、彼の得意とする密偵ものなど、一頃は日本でも可成り愛讀されたもので、探偵小説の讀者には、懐しい響きを持つ名前である。

食卓でル・キユウは、古くからの相識であるゾラ夫人と並んだ。エミル・ゾラの夫人だ。ゾラが晩年に近い頃だから——、その死んだのは一九〇二年——この話はそんなに古いことではない。一九〇〇年の八月だつた。

するとル・キュウの右側に、一人の若飾り過ぎた、肥つた婦人が座つてゐて、何やかやとル・キュウに話しかけたのだが、正式に紹介されたわけではないし、それに、あまり人好きのするタイプでもなかつたので、彼は、食事の合間に、いゝ加減に應對してゐた。その婦人は、何方かと言へば餘り教養のない、智的でない人のやうにル・キュウは觀察した。言葉に田舍訛りがあつた。のみならず、その田舍訛りの會話の到るところに、盛んに巴里人の俗語を挾んで振り廻してゐた。妙にちぐはぐな效果だつた。

ゾラ夫人が、ル・キュウを指してその婦人に言つた。

「まだこの方御紹介申上げませんでしたわね。ウヰリアム・ル・キュウさんです、宅のお友達ですの。矢張り作家の方でいらつしやいます。」

夫人は、良人のエミル・ゾラのことをいふとき「愛するエミル」といふ言葉を使つた。

ル・キュウに對する婦人の態度は、忽ち變つた。それは、單に食卓で並んだといふ形式的なものから、急に全身的な敬意と愛嬌への躍進だつた。これが、テンサ・ウンベルト夫人だつた。

が、ル・キュウは、夫人の名前を聞いても、何ら格別の感興も注意も惹き起しはしなかつた。社交界の作法で、こんなことは人に行ふのが常だし、ことにあの名女優サラ・ベルナアルの招待だから、各方面の一流で食堂は一杯なのである。ル・キュウは、マダム・ウンベルトを何處かの金持の無智な夫人と許り思つて、無禮でない程度にあしらつてゐた。

當時倫敦の絶頂にあつたサラである。ちようど合衆國と加奈陀の巡業から歸佛した時で、サラを中心に食卓の話題は多岐に賑はつて往つた。が、ル・キュウの隣のウンベルト夫人は、しばらくその饒舌を收めて、何かしきりに考へてゐる樣子だつた。

やがて言つた。

「お仕事の方は如何ですか。お名前はよく存じ上げて居ります。ずつと昔あなたのお父樣にお眼に掛つたことがあります。今でもそれを考へてゐたのですが、やつと思ひ出しました。サラからも始終お噂を伺つて居ります。エミルのお友達でいらつしやいますつてね。あの偉大なエミルの！　そして、あなたも小說をお書きになるとは、まあ何といふお羨しいことでせう。御成功をお祈りしますわ。わたくしは作家の方が次つぎに立派な御本をお出しになるのを拜見しますと、あれ程樂しいお仕事はなからうと何時も思ひます。私の娘のマリイを御存じのやうですね？　マリイ・ドルニヤックで、先刻ホウトに乘せて頂いてゐるのを見ました。かう申上げれば、私が誰であるかお解りでせう。」

しかし、それでもまだル・キユウはこのウンベルト夫人が何者であるか思ひ出せなかつた。

佛蘭西の田舍トウルウズの洗濯娘が、雇主の息子と結婚して巴里へ出た。そして直ちに或る巧妙な物語を唯一の種に全市を煙に卷いて、吸血鬼のやうに他人の財産を吸ひ取り、殆ど一生涯、眞に無一文の身で大富豪の驕奢を擅にしたのだ。この巴里に於る一田舍女の驚くべき「大成功」こそは、近世における最大の傑作と目されてゐる有名な詐欺事件である。じつに二十年の長きに亙つて、無資産の洗濯女が皇女のやうな生活を續けた。文字通りの赤手空拳で、たゞ頭腦の働きと口先一つで國際的な名流に伍し、社交界の花形と立てられて凡ゆる榮耀榮華を極めたといふ、全く活社會を背景にした一つのお伽噺とでも言ひたいほど、それは不可思議な實談なのだ。

田舍の洗濯女テレサ・ウンベルト夫人が私かに自分のために書き下ろして、その一生をもつて獨演した名狂言だつた。

2

午餐が濟んで、客一同が芝生へ流れ出た時、ル・キユウはそつとゾラ夫人にあの食卓の隣人マダム・ウンベルトのことを訊いてみた。ゾラ夫人は、驚いたやうにル・キユウを見た。

「ウンベルト夫人を御存じないんですか。まあ、隨分迂濶ですわね。あの方は未亡人で、巴里一の、いゝえ、佛蘭西一の女のお金持なのです。もしあの方から招待狀が來ましたら、巴里のアヴエニウ・ドユ・ラ・グランダルメにある王宮のやうなウンベルトの邸へ是非行つて御覽なさい。あそこの晚餐會とリセプシヨンには何時だつて全巴里の社交界が渦を卷いてゐます。故くなつた良人のフレデリック・ウンベルトといふ人は、元の司法大臣グスタフ・ウンベルトさんの息子さんです。グスタフ・ウンベルトさんが故くなつてからもう五年になりますわね。ウンベルト夫人はすこしも洗練されてゐませんし、御覽の通り見たところだつてちつとも取柄がありませんけれど、でも、大變なお金持なのです。」

「妹さんのマドモアゼル・ドルニヤックとはちよつと會つたことがあるんですが、」ル・キユウが言つた。「しかし、あれがあの有名なウンベルト夫人とは氣がつきませんでした。」

ウンベルト夫人の評判を思ひ出したル・キユウは、何か自分の不明でも辯解する必要を感じたかのやうに、かう付け足した。

實際その時、「グランダルメ街の女王」の名を聞いたことのな

い巴里人が一人だつてあつたらうか。各紙の社交欄は毎日ウンベルト夫人主催の種々の宴會の報導で競爭的に華やかだつた。客の顔觸れは何時も閣僚、外交官、作家、音樂家、法律家、演劇人等、各分野の人氣者を網羅した巴里の粹だつた。ウンベルト夫人は、巴里にゐない時は、ヴエスウルのシヤトオ・ドユ・ヴエレクシオンの古城的な別莊で、又は南部のモンテ・カアロとボウリユウの間のデ・シクラメンのヴヰラで、年中大規模な招宴に日夜を送つてゐた。ぢつさいテレサ・ウンベルト夫人と言へば、巴里の華麗と流行のトツプと時代のトピツクを一身に集めた絢爛たる存在であつた。

エミル・ゾラ夫人は、このマダム・ウンベルトの良人は、元の法相グスタフ・ウンベルトの息フレデリツク・ウンベルトであるとル・キユウに書けてゐる。しかし、一說にはトウルウズの田舍の洗濯屋の倅だつたとも言ふし、また、實はフレデリツク・ウンベルトといふ、村の青年辯護士であつたともいはれてゐるが、たゞ勿論司法大臣の息子でなかつたことだけは確實である。洗濯屋の倅か辯護士か何方かだつたのだらう。

テレサ・ドルニヤツクといふ田舍娘に、廿一歳の誕生日が來た。テレサは、佛蘭西の農村の習慣に從つて、女の方から結婚の相手を求めて近村を物色し始めた。テレサの生家は、貧困を極めた小作農で、テレサも木靴を引き摺つて村の洗濯屋へ洗濯女に通つてゐる身の上だから、嫁に行くにしても持參金といふものがすこしもない、そして、今でもその傾向は多分にあるが、一體佛蘭西の下層の女は、持參金無しでは仲々結婚が困難なのである。が、後年巴里グランダルメ街の女王ウンベルト夫人として名を成す位の女だ。歷史あつて以來の驚倒的大詐欺師の面影は、早くもこのテレサ・ドルニヤツクの少女時代に色濃く現れてゐた。

かういふ種類の女性の人生冒險家は、多く何か一つだけでも人に秀でた方面を備へてゐるのが普通だ。例へば稀に見る美人だとか、素晴しく機智に富んでゐるとか、男性といふ男性を魅惑して止まない猛烈な性美を發散してゐるとか、兎に角何かの武器を有してゐるものだが、こゝに不思議なことには、このテレサ・ドルニヤツク後のウンベルト夫人は、何一つとしてさういふ長所を有つてはゐなかつた。極く平凡な、何處から觀ても何の奥行もない田舍女に過ぎなかつた。容貌も體姿も何方かと

言へば普通以下だつたし、人中での態度や口の利き方などにも、この種の女に附き物のやうに想定されてゐる超教養の滑らかさは微塵も見られなくて、まるで無教育を曝け出してゐるやうな粗野なものだつた。が、只一つ、テレサは「頭」を持つてゐた。打てば響くやうな確固した頭腦の所有者だつた。その上、生れ乍らの名優でもあつた。そして止まるところを知らない絶大な野心家だつたのだ。それにテレサは、男でも女でも、最初の一瞥で即座に判斷を下し、内的に識別する特殊の才能があつたと言ふから、先天的讀心家とでもいふ可きもので、それだけ一面から觀れば天才でもあり、同時に一種の變質者であつたことは疑ひを容れない。その變質者だつた證據には、粗朴な口から世にも眞しやかな嘘が流れるやうに出て、最後にテレサは、地球の知る限りの完成されたる偉大な嘘言家であつた。事實、一小作人の娘テレサ・ドルニヤックをして廿年の間グランダルメの街の女王テレサ・ウンベルト夫人であらしめたのは、只この祝福されたる嘘言の技能だけだつた。そしてそれは、主としてたつた一つの「或る素晴しい嘘言」であつた。

3

テレサ・ドルニヤックは、嫁資のないことなどをすこしも苦に病みはしなかつた。テレサは直ぐにかういふ空想を持ち始めた。トウルウズの町に大きな葡萄酒問屋をしてゐた富豪の伯父さんがあつて、それが最近ぽつくり死んだために、その遺言により三十萬法(フラン)——約十二萬圓——といふ財産が思ひがけなく自分へ轉がり込んで來たといふのだ。かうしてテレサは、便利にも、一人の「金持ちの伯父さん」を發明したのである。そしてこの「發明された伯父さん」は、發明と同時に——便利にも——すぐ死んで、その莫大な假想の財産をそつくりテレサに遺して逝つた。

　かういふ夢物語を暫く心の中で自分に言ひ聞かせてゐるうちに、テレサはそれが眞實のことのやうに自分でも思へて來た。女性の嘘言者にはかういふ風に自分でも眞實のことのやうに思ひ込んで嘘を吐く者が多い。テレサの場合も、その一つだつた。テレサはこの伯父さんの遺産のことを固い祕密として友達仲間の二三の娘たちに打ち開けた。若い女に祕密として話したのだから、テレサの計畫した通りに、それは間もなく村中へ擴まつた。テレサの前に求婚者の長列が現れた。三十萬法(フラン)の持參金付きである。テレサは醜女で生れも賤しかつたが、もう婿選びには少しも困らないことになつた。

　その求婚して來る男達の中から、テレサは若い辯護士を選ん

た。それがフレデリック・ウンペルトだつたが、ウンペルトは廿五歳未滿だつたので、佛蘭西の法律では兩親の合意がなくては結婚出來ないことになつてゐる。ウンペルト青年の父は早く死んで、母が殘つてゐたが、この母がテレサに會つて、結婚の承諾を與へる前に、伯父の遺した財產なるものの實證を見たいと申込んだ。

「承知いたしました。巴里の銀行へ行つて證券を引出して來て、現物をお眼に掛けませう。」

翌る日、お祭のやうに着飾つたテレサが、村人の驚異の眼に送られて巴里へ出發した。が、巴里どころか、テレサは次ぎの停車場で下りてしまつた。その村には、チュラックといふ中年の百姓が住んでゐる。チュラックは以前テレサに結婚を申込んだことのある男だつた。百姓にしては先づ金持の方だつたが、年を老り過ぎてゐるのと、それにテレサは、自分が支配し得るやうな良人を持つて何よりも巴里へ出て活躍したかつたので、チュラックを拒絶したのだつた。この男の所へテレサは行つた。チュラックが四十萬法許りの貯金をしてゐることを、テレサは知つてゐたのだ。大部分を公債にして自宅に仕舞つてゐることも調べて來てゐた。佛蘭西の百姓等の間には、銀行を信用しないで、家の中に財產を隱して置くことは珍しくない。テレサはチュラックを口說いて、三十萬法だけの證券を一日貸して呉れるやうに頼み込んだ。それを持つて早速村へ歸つて、フレデリック・ウンペルトの母に見せると、勿論母親はテレサの有と信じて、一も二もなく結婚の承諾が與へられた。

さうして結婚すると直ぐ、テレサは良人のフレデリックに、このからくりの凡てを告白した。フレデリックは一時病人になる程驚いたが、それでも、二人は段々愛し合ふやうになつて、結婚生活は可成り幸福だつた。が、結婚と同時に、テレサの心はもう村にはなかつた。巴里へ！　といふのがテレサの野心の第一歩だつた。巴里へさへ行けば、自分は機智一つで立派以上に世の中を渡ることが出來る。先づこの村を出て巴里へ移住しなければならない。巴里の舗道には、利口な人間にだけ見える紙幣の束が山のやうに轉がつてゐるのだ。テレサは斯う言つて良人を說いた。

良人のフレデリック・ウンペルトは、弱い性質の男だつたらしい。結婚と同時に、萬事テレサに牛耳られてゐた。若いウンペルト夫妻は、間もなく憧憬の巴里へ出て來た。もうテレサは、所謂ウンペルト夫人である。出市すると直ぐ、あの「ウンペルト夫人」としての驚嘆す可き欺瞞の生活が開始された。その根源は、常にウンペルト夫人の智力と空想力だけだつた。

それが其の後廿年間マダム・ウンベルトに豪奢の王座を許したのだ。途轍もなく尨大な財産を擁してゐるといふ評判だつた。實際素晴しい黄金の反映が後光のやうにウンベルト夫人から放射されてゐた。それによつて夫人は、未曾有の女富豪として巴里の社交界に君臨し續けたのだ。

その黄金色の反射、換言すれば、莫大な財産を所有してゐるといふ假信は、一體このトウルウズの百姓女の何處から來たものなのか――それが問題の中心であり、その正體こそは、正に一世を笑殺驚倒せしめて、未だに人の口に上つてゐる、こゝに謂ふところの「ウンベルト夫人の財産」なるものである。

何うしたら無一文の身で王侯のやうな生活が出來るか――この問ひに解答を與へるのが本篇だ。

4

巴里へ着いたと思ふと、恐しい貧窮がウンベルト夫妻の上に押つ被さつて來た。良人のフレデリックは直ぐに故郷の村へ歸らうと言ひ出したが、既に一家の主權を掌握してゐる夫人は、頑として歸村を許さなかつた。それどころか、却つて逆に出て無い金を掻き集めて、當時巴里第一の住宅街だつたオペラ座街に、最も貴族的な高價なアパルトマンを借りて住むことになつた。これが「ウンベルト夫人の生涯」への踏み出しであつた。全く夫人は鐵のやうな神經の持ち主であつたらうと想像される。次ぎにウンベルト夫人は、應接間の眼立つ個處に、誰でも訪客の眼に觸れずには置かないやうに、一個の大きな金庫を据え付けたのだ。その金庫は、三つの複雜な錠を持つた、鋼鐵製の嚴丈な物だつた。そして錠前の一つ一つに、如何にも法律的な、物々しく大きな封印が夫人の手によつて施された。

「ウンベルトの百萬事件」として知られてゐるこの大々的詐欺が發覺してセエヌ縣巡回裁判所へ持出されたのは、一九〇二年の五月九日だつた。それ迄に、このために數千の人が破産し、五人の自殺者を出し、三つの謎の死まで醸したのだが、これらの悲劇の凡ては、あの一個のウンベルト夫人の金庫から發生したものだつた。その金庫の中に、夫人の手品の種が潜んでゐたのだ。

エミル・ゾラ夫人の斡旋だつたに相違ない。アンジャン・レ・バン湖のサラ・ベルナアルの午餐會から一週間程してからたつ

たマダム・ウンベルトのリセプションへの麗々しい招待状がウヰリアム・ル・キユウ氏の許へ舞ひ込んだ。

アヴエニユウ・ド・ラ・グランダルメのウンベルトの大邸宅は、季節の花で謝肉祭のやうに飾られてゐた。廣大なサロンには、巴里の精粹を代表する人々の群集をもつて埋められてゐた。ウヰリアム・ル・キユウは、エミル・ゾラ夫人、知事アンリ・ラモウル、ジユウル・ギヨン黒伯爵とサロンの一隅を占めて雜談の花を咲かせてゐた。ラモウル氏は、半白の瘦せた紳士だ。何か金庫のことを言つて、暫時を待つてゾラ夫人と黒家の顏を見た。ル・キユウはこの突如として現れた非藝術的な話題に驚いた。ル・キユウはウンベルト夫人の金庫のことを知らなかつたのだ。

「金庫つて、何の金庫です。」

ル・キユウが訊いた。ラモウル知事は不思議さうな表情をした。

「御存じないんですか、このウンベルト家の金庫を。」と、驚いた時に佛蘭西人がよくするやうに眼を圓くして、「次ぎの間に置いてある有名な金庫です。四百萬以上の財產が這入つてゐる金庫です。隣の部屋にあるのです。こつちへ來て御覽なさい。」

かう言つてラモウル氏は、ル・キユウを案內して隣室へ伴れて行つた。其處は、サロンより一段小さな、しかし同じやうに善美を盡した別室で、開け放した窓に近く、四五人の客が腰掛けて涼を入れてゐた。丁度の八月の末で、蒸暑い晩だつた。ル・キユウは、ラモウル氏が指さす儘に部屋の隅を見た。成程そこには防火裝置を施した大型金庫が一個、壁に脊を付けて置かれてあつた。それは、高さ七呎、幅四呎程の家庭用としては珍しく大きな物で、周圍の纖細な裝飾とは少しも調和せずに、傲慢な態度で部屋の美觀を損じてゐた。金庫には三個の鍵穴があつた。鍵穴は三つとも赤い大きな封蠟で頑丈に塗り潰されてあつた。封蠟は、穴を塞いで樹のやうに盛れ上つて、其處から、一緒に塗り込んである幅の廣い封印用リボンが、各一本づつ垂れ下つてゐた。リボンは、初めは白色のものだつたらしいが、其の頃はもう廿年近い歲月によつて褪色されて鼠色に汚れて見えてゐた。

こんな所にこれ見よがしに大きな金庫を据えて置くなど、隨分人を馬鹿にした惡趣味であるとル・キユウは思つた。が、ラモウル氏とはそんな親しい交友でもないので、さうは言へなかつた。只その金庫の意味を多少の好奇心をもつて訊いただけだつた。するとラモウル知事が、嚴肅な顏付きと聲でル・キユウに告げたのだ。その金庫の中には、氣弱い者を卒倒せしめるに足る多額の財產が藏されてゐるといふのである。それは、その呪

縛的な巴里の夏の夜宴に相應しいミステリアスな秘話のやうにル・キユウには響いた。ル・キユウはミステリ・ロマンスの作家である。この金庫の祕密は、酷くル・キユウの小說家的イマジネエションを刺激して印象されたのだつた。

ル・キユウとラモウル知事が其處で立話ししてゐると、著名な法學者ワルデツク・ルツソオ教授と伊太利大使の夫妻が談笑して通り過ぎた。他にも世界的に有名な顔が到る所に見られた。實際ウンベルト夫人のリセプションは、佛蘭西が共和政體を知つてから最初の、そして最大の貴族的な集合であつた。

秋が來た。ル・キユウは、ウンベルト家の別莊であるヴエレクシオンの古城へ招かれて客となつた。冬までの數個月を其處で過ごした。夫人の妹のマドモアゼル・マリイ・ドルニヤツクも來てゐた。マリイの兄のロマンとも會つた。ロマンはマリイの三つ上で快活な青年だ。別莊の客は全部で十七人だつた。一同はシヤトオを取り卷く深林で狩獵を樂んだ。若い頃のル・キユウは探險家だけに鐵砲の名手だつた。

5

かうした表面スマアトな生活の裏に、この間にも、近世犯罪史第一の大掛りな詐欺は、テレサ・ウンベルト夫人によつて組織的に營まれつゝあつたのだ。ウンベルト夫人は、巴里グランダルメ街のあの金庫の內容物——或る一個の——を唯一の種に、一生涯を通じて前後實に二百萬磅——約二千萬圓——を詐取するのに成功したのである。若し小說家がこんなプロツトを考へて作品として發表したならば、公衆は其の非現實性を嗤つて一顧をも與へないであらう。が、この話は小說ではない。嚴正に事實であるのだ。しかも、度々言ふやうに、犯人は平凡にして無學なる一個の百姓女なのだ。想ふに、その平凡なるところ、その無學なるところ、何よりもその美人でないところ、そして能辯でないところが、却つて人々をしてこの稀代の女詐欺師テレサ・ウンベルト夫人を信じせしめ、あれ程長期に亘る其の犯罪を可能ならしめた最大の原因ではなからうか。

被害者の大群に、浮世の表裏に通じた、鋭い觀察眼の老成の實業家が多かつたことも、皮肉な一事であると共に、よく這般の心理的逆用の事情を物語つてゐる。

各種の記錄によつて尠からぬ相違點がある。が、凡てを取入れて態と雜然と話を進めて往かうと思ふ。從つて記述が前後したり、又多少重複する個處があるかも知れない。

グランダルメ街の金庫の祕密は當初からウヰリアム・ル・キユ

ゐの信念的空想を把握して離さなかつた。伯爵家の金庫は全巴里の幻想だつたと言つていゝ。莫大な財産が這入つた儘封印されてゐる金庫が、グランダルメのウンベルト家にある――これは巴里の話題だつた。巴里の常識だつた。同時に、巴里最大の好奇の的でもあつた。

セエヌ縣巡回裁判所の記録によると、このテレサ・ドルニヤツクはトウルウズの附近ボウセル村の生れとなつてゐる。普佛西枝人の二年度同地にドルニヤツク伯爵と呼ぶ赤貧洗ふが如き老人が住んでゐて、これがテレサの父だつた。丁度その頃は、普佛西との戰亂によつて無一物になつた貴族達が各地方に散らばつてゐた時なので、ボウセルの村人も、この乞食のやうなドルニヤツク伯爵を別に怪しみはしなかつたが、勿論伯爵などといふのは出鱈目で、只の其の日暮らしの小作人にしか過ぎなかつた。かうなるとテレサの虚言癖は親讓りのものかも知れない。とにかくテレサは、一八七四年に父の「伯爵」が死ぬと同時に、タルン地方のマルコツト古城が自分の有となつたと言ひ觸らして、この古城を嫁入りの財産にしてフレデリツク・ウンベルトと結婚したのだとも言はれてゐる。が、これは前述のチユラツクの遺体を借りてフレデリツクの發現を現實化したといふはうが正しいらしい。それからテレサは巴里へ出たのだが、一説にははじめは可成り苦勞もしたらしく、プロヴァンス街にさゝやかな家を借りて、良人のフレデリツクは法律事務所に通ひ、テレサも從順で節約な普通の主婦だつたとある。それでも、テレサはまだマルコツト古城の夢を捨てずにゐるし、自分から出たやうでなく、上下にこの話を廣めたものだから、出入りの商人など皆信じて盛んに掛賣りをした。フレデリツクでさへ事實と思ひ込んでゐたといふのだから、テレサの嘘の才能は正に技神に入るの類だつたのだらう。マルコツトの所有に關する色んな書類なども、テレサは何時の間にか僞造して持つてゐたことは言ふ迄もない。が、そのうちに借金で首が廻らなくなつて、二人はモンジユ街へ移つた。そこでも、マルコツトの古城が利いて、夫妻は當分日用品を借りることには困らなかつた。しかし、現金を見せない以上、さう長く引張つて置けるわけがない。たうとう出入商人の一人がタルン地方へ照會して、同地方にそんな城の存在しないことを發見した。さうなると、債權者は一度に殺倒して、流石のテレサも始めて言ひ拔けに困つたのだが、すると間もなく、一八八一年の三月である。

テレサは早くからこの計畫を樹てゝ、今まで必要な文書などを調べながら、じつと巴里人の心理を研究してゐたのだ。この時、誰が言ひはじめたともなく、こんな噂が巴里中へ擴がつて

往つたのである。

テレサ・ウンベルト夫人といふ女が、奇妙な出來事から亞米利加の一富豪と相識になり、八萬磅の財産を受け繼ぐことになつた――。

この私語が行はれてゐる最中、ウンベルト夫妻は夫人の主張により、オペラ座街一流のアパルトマンへ引越して、其處の應接間に、或る日、あの嚴かな封印を施した大型金庫が最初の姿を現したのだ。

『あら！　マダム、何が這入つてをりますの？　まあ、立派な金庫で御座いますわね。』

ウンベルト夫人が豫期した通り、この、客間に据え付けられた殺風景な怪物は、忽ち凡ての訪客の視線の焦點となり、誰もが驚異の眼を見張つて斯う質問した。これに對して、夫人は何時も輕く手を振つて答へた。

『あゝ、あれ？　御承知で御座いませう？　亞米利加から參りました財産。一千萬法(フラン)ばかりぎつしり詰まつてをりますの。あれでも、すこし小さいんですけれど――嫌ですわねえ、サロンにあんな物を置いて。お眼ざわりでしたら御免遊ばせ。でも、あんまり重いんでとても二階へは上げられませんでしたの。』

そして夫人は事も無げに笑つたが、聞かされた客は一齊に度膽を拔かれた。一千萬法と言へば四百萬磅である。時の八萬磅が何時の間にかこんな途法もない額に上つて、正直な人々の驚きと羨望のうちに、ウンベルト夫妻は暫らくして凱旋門の向うのアヴエニウ・ドユ・ラ・グランダルメに宏壯な邸を買つて移轉したのだつた。

かうしてウンベルト家は一躍して巴里一流の、いや、巴里第一の富豪となつた。凡ゆる階級の財政家が蠅のやうに夫人の周圍に群がつて來た。その中から選んで金を借りるに、夫人はすこしの不便も感じなかつた。交際は社會的に世界的に名を知られた人達ばかりとなつた。殊にエミル・ゾラ夫妻とサラ・ベルナアルはウンベルト夫人の親友だつた。フレデリツクの死後、ウンベルト夫人の派出な生活振りは一層激しくなつた。巴里の贅澤と流行と社交はウンベルト夫人が獨占した形だつた。ウヰリアム・ル・キユウが最も親しい交友の一人に數へられるやうになつたのも、此の頃からだつた。

グランダルメ街の大金庫は、依然として封印の儘で、一人として内部を見た者はない。

それなら、莫大なウンベルト夫人の生活費は何處から來たか――この金庫の中には何が這入つてゐる？

（次號完結）

編輯者雜記

昭和四年度におけるわが中央公論の進出は實に素晴らしいものであつた。昭和五年度はそれが充實と完成とを期して極力邁進する。さうして名實ともに日本唯一の大雜誌たるの面目と價値とを發揮する。期待せられよ、支持せられよ。

われらは本格的な正統的なジャーナリズムに立脚する。天下の伯樂たるを自任する。内容の純度は依然として已まない。毎號定價を度外視して一の大冊を敢てするもそのためだ。婦人公論は異常の發展をするし、新設の出版部も目覺ましく活躍して居るので、利益は思ひきつて本誌のために注ぎ込んでゆくつもりだ。何といつても一つくらゐ巍然たる大雜誌の存在は今の日本の現狀からいつて必要事だからだ。緊急事だからだ。われらの偉大なる中央公論を護り立てて行くことに吾等は限りなき歡喜を覺ゆる。

猪俣津南雄氏の「誰がマルクスを否定させたか」と三木清氏の「資本論」の[illegible]ことは、共に二木保幾氏の「マルクス價値論に於ける不均觀察と限界原理との矛盾」に對する反駁だ。前者はアンチ・マルキストの陣營に投ぜられた巨彈そのものであり、後者はその炸裂彈だ。

金解禁の斷行された荒木王國第三期に於ける日本銀行の姿を、新進學徒田中教授の筆に見よ。

第五十七議會の解散は恐らく本誌の店頭に出る頃と推定される。大山氏及馬場氏の好文字を讀者の前に呈し得る裏面にはわれらの並々ならぬ編輯的努力があるのだ。機密費に關する徹底的暴露への企劃によつても本誌の意ある所を了しられやう。

橋本和人氏の「嵐を衝いて」は氏が獄中より特に本誌に寄せられた作品だ。氏の×合法的活動は本論に於ても明瞭だ。

わが上山草人氏は世界人として歸つて來た。渡米前より、即ちまだ映畫世界人としてそれほど有名でなかつた時代から、特に本誌と淺からぬ親密關係を有つてゐる氏は、この歸朝を幸ひに、世態に向つて無遠慮な銳角的な言葉をなげかけて居る。今後數回に亘つて本誌のファン諸君を唸らせるであらう。今月號の氏は歡迎會に攻められ、思ふやうに揺らなかつたが、來月から思ひきり書いて貰ふつもりだ。

荒木王國の財産調べの定評は更なり、娼妓自由廢業また得がたい文獻だ。回を追うて興味はいよいよ増して來る。今年あたりはもつと問題が具體化してくるだらう。

創作欄新進作家の鋭な「失業都市東京」、文字通りの好短篇「高架線」を得て、錦上更に花をそへた。

「千夜一夜」(完譯アラビアン・ナイト)の申込みは殺到して喜んでゐる。あと締切までもう間もない事だから希望者は此際申込まれたい。効能書はここでは言はないが、讀んで面白く、取つておいて損のない珍重書だ。それほどの値うちが無くして何を好んで今更中央公論社が全集物の眞似をするものぞ。

「西部戰線」と「大東京案内」はまたまた大いに賣れてゐるが、これに劣らぬ賣行を見せてあらうことを信ずるものは、リンゼー判事の「友愛結婚」だ。これは今日までも隨分問題になつた結婚革命だが、若い紳士淑女の一讀を煩はしたいものだ。

文藝時評

正宗白鳥

私は、ダグラス・フエヤバンクス大歡迎の光景の破片を一瞥した。私自身は、フィルムに於ける彼等夫妻の面影さへ記憶に留めてゐないくらゐで、爪の垢ほどの敬意をも寄せてゐなかつたのに關はらず、目前、感激する群衆に取圍まれた彼等夫妻を見ると、普通人と異つた特種の男女に接した感じがした。人氣といふものは面白いものである。流行といふものは面白いものである。時代の變遷、歷史の推移といふと、言葉そのものからして重々しく思はれるが、碎いて見ると、人氣と流行のうつり變りが、古今の世界の歷史をつくり上げてゐると云つていゝ。新聞が大袈裟に書立てると、雜作なくそれに乘せられて、東奔西走するのは、今の世の習はしで、ジエッペリン飛行船が日本の空に現はれると、文學者までも、時代精神把握者たる本領を發揮して、詩や歌や文章によつて、それを讚美することを忘れないことによつても、新聞の宣傳力や人氣、流行の力が推察されるが、新聞が、ジエッペリン飛行船や、フエヤバンクス來訪を問題として、強烈に捉へたことも、日本現代の人心に動いてゐるある傾向を巧みに看取したゝめなのだ。

空には、威風堂々たる飛行船が現はれ、地には、映畫大王が現はれて、日本の人氣をさらつて行つた。飛行船は兎に角、映畫の勢ひは物凄いものである。アメリカ直輸入の映畫熱に大勢が感染されてゐるのだが、私は、先日、邦樂座で、二三の米國製トーキー映畫を見て、ある種の悲哀を感じた。畫中の人物が晴やかな聲で話してゐるのに、片隅の辯士は、低聲の日本語で止切れ〳〵に說明を試みてゐた。無聲映畫を取扱ふ辯士のやうな意氣も熱力もなく、畫中の會話の邪魔にならぬやうに遠慮ばかりしてゐた。それに關はらず、私は、まだ聞馴れないためか、兩方の言葉がごつちやになつて、どちら

も明瞭に解らなかつた。しかし、こんな不純な者でさへ、現代日本の青年男女には、純日本の藝術よりも興味深く思はれてゐるらしい。劇中の事件や情緒は、無論アメリカの通俗性に媚びたものであるが、それが、また日本の青男青女の心にかなつてゐるらしい。ダグラスが、人波に揉まれて苦しんでゐるメリーを扶け上げた寫眞と記事とを新聞で見たが、あのエピソードは、新代の若い人々に珍しがられたにちがひない。晴れやかな表情と態度を示した二人の姿に、アメリカ人生活の一片がきらめいてゐたが、若き日本も、その模倣を志してゐるのであらう。私は、歸朝後間もなく、文樂座の人形芝居を演舞場で見て、舊日本の女性の姿態が美しく藝術化されてゐるのを新たに感じたのであつたが、今日の日本の審美意識では、あゝいふものは、全く價値を失つたのであらう。日本の女は足が短くて、練馬大根のやうに不格好で、西洋の踊り子のやうな肉體美を現はし得ないと歎ぜられてゐる。しかし、古來の日本人は、何百年、何千年の間、アメリカ式レブユーに出演すべく訓練されて來たのではなかつた。小さいながらも弱いながらも、日本の國土日本人の肉體に適した藝術をつくつて來たのだ。黒い髪、黄ろい皮膚、短かい足に適した藝術をつくつて來たのだ。今日になつてだし抜けに西洋舞踊のイミテーションを志して、足の短かさなどに自己冒瀆を感ずるのは、頭髪の黒さを呪ひ、皮膚の黄ろさを悔ゆると同様なのである。

そこで、「日本獨創の新代の藝術新代の藝術の現はれること」こそ、我々の熱望するところであると云つて見たくなるが、それは、現實離れのした空想であつて、一代の潮流は、當分か、あるひは末長くか、外國の模倣に向つて進むのであらう。「レブユー」「トーキー」「イデオロギー」といふやうな外國傳來の新語が、現代の若い人々に新鮮な感じを傳へることは、明治初年來、次ぎから次ぎへと日本に渡來したいろ／＼な外國語と同様で、それ等の言葉から受ける敏感鈍感の度合をもつて、新人の頭腦の價値の測定にしてもいゝのである。

私はまだ「イデオロギー」といふ外國語の意味をよく知らない。二三年前から、雜誌の文學評論のなかにをり／＼散在して

ゐるのを見てゐたが、その言葉の意味を明瞭に調査したことはなかつた。「トーキー」といふ言葉だけは、日本の新人達よりも私の方がよく知る筈である。數年前、小山内君などの作つた「黎明」とか、幸四郎の勸進帳とかいふやうな、聲を出す映畫が日本にも出來てはゐたが、甚だ不完全なもので、本場の完備したものは、私の渡米前には、新らし者好きの日本へもまだ來てゐなかつた。そこで、私は、ハリウッドやニューヨークで、出來立てのホヤ／＼の奴を、見たり聞いたりして大に新知識を得たのであつた。トーキーとは、トーキングピクチュアの略語であることは、米國人が、ジャパニースをジャップと呼ぶのと同樣であるが、このジャップの國へは、トーキーは輸出されまいと、私は日本に於ける外國映畫の將來について杞憂を抱いてゐたのだが、一年未滿の短かい海外旅行から歸つて來ると、私よりも先廻りして、トーキーは早くも日本にどし／＼來てゐた。去年初春ニューヨークで大人氣を得てゐた「ブロードウエー・メロデー」や「ウオール街の狼」なんかも既に持込まれてゐるらしい。「原文對譯、トーキー英語」といふ小册子まで續出されてゐるのに驚いた。日本人はすばしこくつて利口である。しかし、私は、先日、ロイド主演の「危險大歡迎」を見て、アメリカかぶれの現日本の新人が、あゝいふ映畫を見てどう感じるかと思つた。「危險大歡迎」には、香港の支那街が材料として採られてゐる。其處に犯罪の巣窟があつて、多くの支那人が惡漢の手下となつて活躍してゐる。その結果は拋られたり捕縛されたりするのであるが、これに類した映畫を本場の米國で觀る時には、私は一種の不快を感じないではゐられなかつた。西洋人の目には日本人も支那人も同樣に映じてゐるので、祕密的野蠻國として支那の雜景を用ひ、白人種の優勝さを誇つて、米國の世俗の映畫觀覽者を喜ばせるために畫中の支那人に鞭を加へてゐるのを、我々が見て對岸の火災視して、むしろ痛快に感じてゐたとしたら、それこそ自己の鈍感を證據立てる譯である。支那街の代りに日本街を用ひ、支那人の代りに日本人を用ひることを敢てしないのは、たゞ日本人の抗議を煩く思ふために過ぎないのかも知れない。映畫製作者たる白人の腦裡には支那すなはち東洋、支那人すなはち黄色人種として存在してゐるのであらうと私は思つてゐる。

さて、「トーキー」といふ新流行語を、早くから具体的に熟知してゐた私も、「レヴユー」といふ言葉の内容はよく知らなかつた。この言葉は、マネキンなどと同様に、私の不在中に流行しだしたのではあるまいか。それで、私は先日、わざわざ浅草へ行つて、ある活動小屋で、「レヴユー」と明記されてゐるものゝ一齣を、群衆のなかにまじつて観賞した。レヴユーとは、こんなものを指して云ふのであるか。それなら、海外でよく見たものだ。喜歌劇やオペラなどは、西洋のものは我々日本人には理解されにくいが、所謂「レヴユー」は、異国人たる我々もよく楽んで見てゐられる性質の遊戯であるから、私は各国のを随分見た。着想でも、衣裳の色合でも、背景でも、踊り子の風姿でも、感覚の洗錬、技巧の美を盡してゐるパリの幾つかの「ミユーヂツクホール」の光景は、日本では縁の無いものとして模倣を企てないのがいゝとして、ニユーヨークやシカゴにある最も低級なヴオードビル気分は、早晩日本に起つてもいゝと、私は思つてゐた。私は、アメリカの二大都市で、殆んど男子ばかりで場内を充たしてゐる映画館を一つ二つ見たが、映画と映画の間に挿まれて、所謂「只今レヴユー」といふのが一齣演ぜられるのだ。それは、大した舞も意匠もない単調な悪踊りに過ぎないのだが、踊り子の足が練馬大根でなくつてすらりとしてゐるばかりでなく、どの女もこぼれるばかりの愛嬌をもつてゐるので、絶えず見物を享楽させた。彼女等は、踊りながら見物席の真中へ進んで来て、踊りに使つてゐる棒の先や、はたきの先きで、見物の禿頭などを撫でゝやるのである。撫でられた見物はほく／＼と喜ぶし、他の見物も面白がるのだ。

浅草のレヴユーは、これ等に比べると、如何に淋しいことであるか。舞台には冷風が吹いてゐた。薄っ汚い感じが先立つて、見物の享楽気分なんか打消されてはゐないのかと疑はれた。数日前、二三の歌舞伎芝居を見て失望した私も、この「レヴユー」を見たゝめに、却つて歌舞伎の有難さを新たに感じた。歌舞伎がまだすたらない筈である。

「レヴユー」に「猿の舞」といふのがあつたが、たゞ赤い衣を着けて早口に手足の運動をやるだけなので、「猿の舞」といふ大袈裟な名目には苦笑される。それだから、この猿の舞などのレヴユーを見ながら、折柄雑誌中の二三の小説を聯想

した。

「中央公論」に、小島勗氏作、「轉職十月間」といふのがある。病弱な男が××選擧演説會のために街頭宣傳に立つて、檢擧されて、留置場に入れられて、そこを脱走したことから說起して、彼れの逃廻る經路を叙したのである。活動寫眞の惡漢追跡や、大衆小說のおたづね者の出沒自在の行動の叙述と同樣の小說的價値を有つてゐるに過ぎないのだが、この小說の主人公は、ある一定の主義、ある一定の理想を有つてゐる點に於て、他の小說人物とは異つてゐる。異つてゐると見られるやうに、作者は讀者に要求してゐる。それが作者の味噌であつて、味噌の味噌臭きは上味噌でないのであるが、この作者の筆はさう臭くはない。眞面目に堅實に筆を運んでゐる。輕々しく時流に動かされるのではなくつて、ある所說を有つて製作に從事してゐるのであらう。しかし、眞面目とか堅實とかいふ人聞きのいゝ素質も、それだけでは仕方がないと、私はこの一篇を讀んで、今更のやうに感じた。これはたゞの叙事文で、私は讀みながら、眞に迫つた描寫に惹きつけられたところもなかつたし、深い心理に心を動かされたところもなかつた。官憲の壓迫のためにいろ〳〵な人の苦められてゐることが叙せられてゐるが、一つ〳〵を克明に書並べるなんか氣が利かない。しかも、この小說は、在來の古い小說の型を守つてゐるのである。現社會の不合理を打破して新しい社會を建設するために努力する鬪士の行動を叙說し、作者も全然その鬪士と心を一つにしてゐるらしいのであるが、それにしては、作者の文學があまりに陳腐である。古い皮袋に新しい(?)酒を容れてゐるのである。心が根本から新しくなり切つてゐるのなら、こんな舊型墨守の作品が現出されよう筈はないと私は感じた。假りにかういふ作品を新しいと認める青年批評家があつたら、私はその批評家の鈍感さに呆れるのである。周圍の景色を叙しては、人物の心理の常套的說明を加へる工合は、舊い和歌の方でさへ、昔から蔑視されたもので ある。「握り飯はボロ〳〵に崩れ……麵麭も濡れてグジャ〳〵になり……雨は歇み……太陽は昇らうとし……過去數ヶ年に互る鬪爭の土地を捨てなければならなかつた、鄕里では父親と弟が恐らく淋しく母親の位牌を守つてゐることであらう……

ここなど、叙してゐる結末なんか、いかにも悠々としてゐることか。作者は、所謂尖端的に描かんとしたから、知らず〳〵小説意識に捉へられたのであらう。かつて田山花袋氏が書いた、脱走兵士の小説には、この小説よりももつと新味があつた。

「陣戦十日」を読んだあとで、佐藤春夫氏の「大都会の一隅に向つて左傾する一詩人の唱」（改造所載）を読むと、文学的才分の相違が明かに看取される。文章が生きて動いてゐる。しかし、私は、この佐藤氏の新作には感心しない。この程度では、現代世相に対する風刺小説には成り切つてゐない。茶化してゐるに過ぎない感じが与へられた。小島氏のは、下手でも、古くつても、態度が真面目であり厳粛であるので、読後に不快な印象は残らなかつた。

藤森成吉氏の長編戯曲「蜂起」（改造所載）を通読した。この作者も、真面目な厳粛な作者である。氏の懐抱せる思想を概念に具象化するに便利なためか、氏は、昔の百姓一揆を材料に用ひてゐる。今度のなど、長くつても間の抜けたところがなくつて、どつしりしてゐる。しかし、氏の作中の人物には、ちやんと型が出来てゐる。作者は自分で意識しなくつても、長い間物を書いてゐると、おのづから型が出来てどうにもならなくなるものだが、藤森氏などは、むしろはじめから好んで型をつくつてゐるのではないかと疑はれる。百姓型代官型がちやんと出来上つてゐて、材料をそれに嵌めてゐるやうである。昔の百姓一揆といふものは、無智無力の農民が、生活の脅迫に堪へられないで蜂起したのであらうと、私は思つてゐたが、藤森氏の「蜂起」を読むと、農民の頭脳もなか〳〵すぐれてゐる。警句名言が自在に彼等の口から出るのである。これだけの才能を有つてゐたなら、割の合はない百姓仕事なんかしないで、他の方面で立身出世をしたであらうのにと、私には空想された。これ等の戯曲や小説に現はれてゐる農民や労働者を見ると、大抵は小さかしい。気の利いた理窟を云つたり、名句を吐いたりしてゐる。そこに、露西亜とはちがつた日本の国民性が現はれてゐる。いくら模倣をしても、他国の文学とは異なる所以である。露西亜の小説に現はれてゐる農民には魯鈍なものが多いが、魯鈍なれば二三庭

力も有つてゐるのであらう。小説にも、ドストエフスキーのやうな變に巨大なものが出たのであらう。

社會闘爭を描いた長篇「蜂起」の直ぐ前に、武林無想庵氏の小品「メダンの獨白」が掲げられてゐる。「蜂起」はガッシりした力の籠つた作であるに關はらず、私は讀んでゐるうち、他所々々しい氣持がしてならなかつたが、武林君のは、あまり上手でない身の上話であるのに、私は聞いてゐるうち、次第に親しみを覺えた。大袈裟に仕組まれた作品よりも、かういふ小品に却つてしみ〴〵した味はひが籠つてゐることが多い。話し上手でないと云つたもの丶、以前よりは餘程老練になつてゐる。異郷の風物を背景に、夫婦の詰らない爭ひを描出してゐるところに、以前ほど理窟張らないユーモアがある。センチメンタリスト、イデアリスト、ロマンチスト、世界に對しての「絶望者」だなど、理窟をこねて見ても、人間、浮世に年を經て來ると、落ち行くところはこんな者だらうと、氏の「獨白小説」を幾つか讀んで來た私は思つた。「妻子と一しよにゐる瞬間は、メフィストは遠慮して決して首を出さない。從つて絶望もエゴイズムもわたしの心から全くその影を消してしまふ。さうしてわたしは唯一個の好々爺に化してしまふ」と、作者は斷じてゐるのである。「その妻子に捉はれてゐるわたしの手によつて、これから翻譯されようとしてゐるエミールゾラは、遂に火宅をのがれ出るすべを知らない人間に對して、永遠に苦蟲をかみ潰しつゞけてゐるのだ」と、作者はまた云つてゐるが、ゾラだつて、火宅をのがれ出るすべは知らなかつたことは、あの煩瑣なことを刺戟的に書續けた騷々しい作風によつても察せられる。

一年間讀まなかつた「改造」「中央公論」などの論説を、久振りに見て、そのうちの某某等數氏が、議論の内容は兎に角、論者自身が、何年か前にさうであつた如く、今日も引續いて、絶えずシヤチコ張つて、ある學說を運轉してゐるらしく見せかけて、しかも、それを自慢してゐるらしいのを不思議に思つた。武林無想庵氏の小説にあるやうな、その時次第で起る心理の變轉の方に、シヤチコ張つた人達の理窟よりも一層多くの眞實性がある。元日から大晦日まで、コーヒー一杯呑むにも學說に基づいてゐるらしい勿體ぶつた口吻を弄する論者は、私にはえらい頭腦の所有者であるとは思はれない。

小泉信三氏の「新聞紙批評の必要」(文藝春秋所載)は、私が讀んだ今月の論說のうちの名篇であつた。氏の中央公論に寄せた「勞働者・・商品」の巻頭論文よりも確かに傑れてゐる。射られた矢がマトを外れてゐないのだ。新聞についての不平は、屢々聞かされてゐるが、小泉氏のこの論文ほど情理を盡してゐるものは、今まで見當らなかつた。・・・しかし、新聞の勢力はます〳〵強さを加へて、これに反抗しようとしても、普通人の力では、龍車に向ふ蟷螂の斧である。我々は朝目を醒ますと、まづ新聞を讀んで、新聞の色眼鏡を通して世間を見てから、生活の途上に上るのだ。我々は新聞紙上の世相人生は、正眞正銘の實質とはちがつてゐるのだと思ひながら、それに捉へられるのを如何ともしがたくなつてゐる。

中央公論新年號の馬場恒吾氏の人物評論は面白い。ことに數ケ月前に出た「若槻禮次郎論」には感心した。若槻氏その人が、あしこに現はされてゐる通りの人であらうとなからうと、一個の生きた人間が、明かにそこに浮出てゐた。たとへ論文であらうとも、その描寫は、型通りの人間しか描けない多くの小說家の小說以上であつた。

私は、幾つかの新年小說を讀んで、掛け聲のみ賑やかな割に、驚嘆すべき新文學の光のまだかゞやいてゐないのに失望した。二三の大劇場へも行つて、演劇の傳統的光彩のます〳〵薄らいでゐるのを見るにつけても、あんなものを打倒す力さへない新人の不甲斐なさを感じた。文學の方でも演劇の方でも、功名心に富んだ青年の腕を揮ふべき時代である。生煮えのイデオロギーなどに拘泥して、鸚鵡見たいな常套語を弄してゐないで、文壇意識でも演劇意識でも、あるひは社會意識でも旺盛にして、功名心を滿たせるのが、若い者らしくていゝのだ。若いくせに、功名心を卑しんでゐる顔をするのは、自己本來の面目を沒却してゐることになるのである。



失業都市東京

徳永直

失業者の波

1　街頭班

たとへば、打ち返してくる波の力が、しだいに弱くなり、遠くなり、沖合へ、沖合へとひいていつた潮が、渚邊にとりのこしていつた海草や、貝殻や、珍奇な小動物のやうに、小石川田市「太陽のない街」に、「悲慘な追憶」と「笑へない喜劇」と「幾つかの戀物語」とだけが取りのこされた。

一九二七年――。

大同印刷爭議犠牲者二千の彼らに、急速な「生活手段の方向轉換」が起つた。

彼らの多くは、郷里を持たなかつた。かつて、彼らが郷里の庇付を追はれて上京して来たやうに、いま、都市を追はれても、彼らの帰るべき郷里は、胸鮒の山河と同じく、他人であつた。

夜店商人、おでんや、牛乳配達、日傭人足、雑役夫、酌婦、女郎、八百屋、借傭見習、女給、納豆賣、等、等……

年期を入れた彼等の技術は、今の場合何の頼りにもならなかつた。厳重な印刷同業組合の黙まと（ノックアウト）と、新案職工手帳とは、潜り込んだ各工場から、すぐ彼らを撥ね返した。

数十の銀行と、数百の中小工場を、一気に大資本に併呑さしてしまつた金融恐慌後の東京に氾濫した失業者群の中で、彼らは闘争の疲労から、すぐ生活手段の発見に狂奔しなければならなかつた。彼らは街の角、界隈の縁日店で、スッカリ姿の変つた懐しい同志を発見した。

コーヒー一杯のカフェーで、嘗ての「ローザ女史」が、「漂泊する貧乏なデカダン」に堕落してるのに遭遇し、いゝヒヤかしの須崎遊郭で嘗ての女同志おきみが、青ざめた頬に、涙するのを見たりしなければならなかつた。

高枝と秋村が結婚した。といつても、従来の関係に、更に経済的に結合したに過ぎない。こんな實例は澤山あつた。「獨身者では食ひはぐれても、夫婦稼ぎは餓が廻つ」彼等はその諺とほり實行した。幾十組かの「争議夫婦」は長屋から、火事場泥棒みたいに、素早く移動した。

そして「太陽のない街」の小学校に、就学児童の空席が出来たやうに、トンネル長屋にも戸の開かない家が幾つも出来た。そして漸次にその空家を新らしく大同印刷工場に雇はれた新参職工達が埋めていつて、反動空気を濃厚にした。

彼らは生活手段に追ひまくられた。お互ひの消息は殆んど絶たれてしまつた。組合員七千を有し、評議会傘下の常勝軍の名を擅いまゝにした彼らも、いまはまつたく精魂盡きて壊滅したかに見えた。

袢纏を着た納豆賣が、指ケ谷町の電車通りから入つて来る角の電柱のところで、ボンヤリ突立つて見上げてゐた。疲れた青い顔の四十男は、萎びた蜜柑のやうにひしやげて見えた。その納豆賣は、第六班の班委員松澤である。

「失業者大會——主催勞働者農民黨」

剝がれそこなつた黄色い小さなビラが、風に吹きつけられたやうに、納豆賣の顏の上にとまつてゐた。——勞働者農民黨——疲れた青い顏に、懐しい憶ひ出が、疼きながら少しづゝ甦つてきた。

——失業者にパンを與へろ！　だ。ナァ流石、俺達の勞農黨だ——。

帽子も冠つてないボサボサ頭は、賣りあましの二三本の納豆を、籠の中でゴロゴロ轉がしながら、次の電柱から、その次の……電柱ばかり見て歩いた。——押しかけろ！　上野公園の會場へ——そうもゆかねえて……納豆賣は賣上の銅貨を腹掛の丼で、ぢやらぢやら探つた。……餓鬼も嬶も、まだ朝飯食はねえで待つてる筈だて……。

「オヤ、この近所はよくまあ、キレイに剝がしやがつたな」

植物園の坂の上まで、三丁ばかりも電柱について納豆賣は歩いて來たとき、すつかり怒つて立ち止まつた。——ヤツとこれ一つだ——

ソンとき納豆賣は變な顏をして口を噤んだ。電柱の向ふ側にも、よれよれの袷を着た失業者風の若い男がボンヤリ立つてゐた。

「變な野郎だ……」

納豆賣も素袷の男も、お互ひに險しい眼でヂロリと睨み合つたが、また一緒に、電柱のビラを見上げた。

「なア、おれたちの黨だて……」

納豆賣は手を伸して、ビラを撫でやうとした。すると、その素袷が怒鳴つた——剝がすんぢやねえぞ——。

え？　おどろいた納豆賣は手を退つこめて睨みつけた。——誰が剝がすと云つたい？　俺ァ黨員だぞ——

素袷は慣つて顏で、眼をパチクリさしたが、やがてニヤリとした。——俺だつてそうだよ——。

急速な和解が來た。彼等は同志だつたのだ。そして納豆賣と、素袷のまだ若い男とが、ニタニタ笑ひ合つたとき、彼等

の頭上で、黄色いビラが命令した。——往け！ 失業者大會へ！。

太陽はたかだかと上り、植物園の森の樹木に光りが眩しく揺れ輝いた。納豆賣は、もう正午だのに、まだ朝飯を食はないで待つてゐる筈の子供や妻を考へてゐる譯にはゆかなかつた。

「一高横から根岸へ抜ければ、譯あねえさ」

これも何處かで馘首になつたのに違ひない長髪の同志は、電車賃もバットも持たなかつた。

同志は街頭の何處にでも、ウヨウヨゐた。——おれもキツと職口に逢えねえ——納豆賣は籠の中で二三本の納豆をガタガタつかせて、電車道を踏み切りながら、長髪の同志に斷言した。——見ねえな、あの交番横にボンヤリ突立つてゐる若い男も、ホラ、本屋の店先にゐる書生ッポ見たいな絣の男も、ポストの傍に立つてゐる立ン坊も、みな失業者に違へねえぜ——

納豆賣はゼイゼイ息を切らしながら斷定した。

——でえいち、あの眼付でわかる、眼付でな——。

「ウヨウヨゐるもんさ……失業者はな」

班委員だつた納豆賣は、若い同志に教訓した。——そして、おれが皆同志なんだぜ、おめえ——。

太陽は弱い日射しを、ときをり下界に投げた。からッ風はつよく吹きまくり、街路の白埃を舞ひあがらせた。上野山上の西入口、東照宮の森のあたりは、鈍い灰色の雲が低く降りてゐた。

まつたく同志はウヨウヨゐた。公園の建物のかげ、樹木の間に、蟻のやうに列をつくつて緩く動いてゐた。

一様に、青い疲れた顔をした失業者達は、眼だけを鈍く光らせて、廣場の方へ雪崩れていつた。が、しかし、彼等蟻の群の動向は、決して一つでなかつた。眞つ黒くすじを引いたやうな正服の列に遮ぎられ、押されて、潮流はめちやくちやにどうどうめぐりしてゐた。

「何處だい？ 會場は？」

納豆賣は、籠毎に押し揉まれながら、前を歩いてゐる素袷の同志のトンがつた肩越しに前方を覗いた。

「自治館だい？」

右側を歩いてゐる勞働服の鬚ッ面が、憤つた顔で怒鳴つた。――畜生ッ、解散するんぢやねえかなア――

蟻の群は刻々に増大して行つた。黒い正服の垣は、漸次に前方へ押しやられて、博物館前の廣場まで、蟻の群が押していつた。しかし會場は、自治會館の前は、眞ッ黒な警官の群で、ギッシリ咽喉元を押へてゐた。

「おう、こりあ大したもんだ！」納豆賣は、籠毎押しひしやがれながら叫んだ。――どうだい、たいしやう、あの同志の數は――

まつたく、蟻の群は、博物館前の廣場ばかりでなかつた。右手の動物園前の遊歩場も、寛永寺附近の高台のあたりも――失業者は、蟻の群は溢れて、海の水平線のやうに盛り上つてゐた。

しかし會場は依然として口を開けなかつた。黒い警官の群も刻々に増えて行つた、時折けたゝましく金筋の警官を載せたサイドカアが砂利を飛ばして往來した。

東照宮の森の上で、鈍い灰色の雲が低く往來した。太陽はかげりながら、しだいに中心から辷り落ち、斜めな陽光を投げかけてゐた。

「おい日が暮れちやふぜ」

前の男の禿げのある後頭部ばかり、二時間も見詰めてゐた勞働服は、しびれを切らして怒鳴つた。

そのとき、蟻の群の前列から後方へ、風を喰らつた木の葉のやうに動搖が起り、流言が飛んだ――解散だ、解散だ――

「冗談云ふねえ、演説一つ聞かねえで……」

突如、警官の垣が動き出して、蟻の群の方へ密集して押して來た――解散、解散――

・
蟻の群は、ところてんのやうに揺れ動きながら、そのとき口々に叫び出した。

「お、主催者達が検束されてる！」

「横暴だ、取り戻せ！」

サツと開いた警官の垣を破つて、數臺の自動車が走り出した。車内には検束された同志が窓から首を出して怒鳴つてるのが見えた。

蟻の群は、警官の垣ごとに、自動車の方へ押して行つて、進路を遮ぎらうとした。

黒い垣と、蟻の群の流れとは、入れ違つて亂れた。自動車は進路を求めて、どうどうめぐりした。

「アッ痛てえッ」

納豆賣は揉み合ふ群衆に、押しつぶされてしまつた。――痛て、痛て畜生ッ――數本、數十本の足、下駄や泥靴に踏まれて納豆賣は悲鳴をあげながら、いま踏みつけた泥靴に噛みついてハネ起きた。

「この野郎ッ」

いきなり頭を持つてゆくと、前に軽く身體が動いて納豆賣は投げ出された。泥靴の主は××であつた。しかし、再び彼が武者振りついてゆかうとしたときは、彼は同志の手でシッかと取り捲かれて身動きが出來なかつた。

「ワッショー」

憤怒を咽喉に籠めて、納豆賣は皆と一緒に怒鳴りながら、ガッシリ手を組んだ――ワッショー

蟻の群に火が點いた――彼らは密集し、検束者が幾十人、列からひきぬかれても、ガッシリ組んで山下の方へ流れていつた。

「ワッショー　ワッショー」

蟻の群は電車通りへ溢れ出した。サイドカアが走せ違ひ、検束された同志が自動車で搬ばれていつた。そのたびに蟻の群から喊聲が湧き起つた。

電車が止まり、群衆は濶い通りに溢れた。警官の垣は、訓練された力を以て、蟻の群へ飛び込んで來た。素袷の同志を何處かで見失つてしまつた納豆賣は、火のやうに眼を輝かしながら怒鳴りつゞけた——ワツショ！　ワツショ！

電車通りに電燈が點いた。蟻の群は尻ッ尾を切斷されたみゝずのやうに、切れたところが今度は頭になつてピチピチ動いた。怒號と喚聲が街上を突つぱしり、蟻の群はしだいに、切れ切れになり散らかつていつた。

「開けちやあぶないッ」

上野山下の、電車通りから左へ入つた小路の、食堂兼酒場の帳場で、騒ぎに慄え上つてゐるお内儀が、ウツカリ覗かうとする女給に怒鳴りつけた。

「締めなさいッてば——」

しかし、新米の女給は、大膽に細目に開けて、この小路へ逃げ込んで來る男達の様子を見てゐた。内部の長いテエブルには、四五人の袢纏や、土工風の客達が、酔つぱらつた聲で怒鳴つてゐた。お内儀は憤つて戸口の方へ立つてゆかうとしたとき——、新米女給は頓狂に叫んだ。

「いらつしやア——い」

飛鳥のやうに、女給の脇下をくゞつて飛び込んで來た男は、古ぼけた焦茶の洋服を着た三十あまりの男だつた。

彼は素早く隅ッこのテエブルに、入口に脊を向けて腰を下ろすと、従いて來た新米女給に低い聲で云つた。新米女給はすぐまた怒鳴つた。

「葡萄割り、ブラン一丁——」

赤い液體の入つた大コップを盆にのせると、新米女給は焦茶服の男の前へ持つていつた。

「お待ちどうさま——」

コップを差しおいたとき、女給は思はずアッと聲をあげた。

「まあ！」

焦茶服の男は、及川であつた。——どうも後姿が見たことがあると思つたわ——

新米女給は、例の錦絲堀のおきんちやんだつた。焦茶服もビックリして、しかし低い聲でいつた。

「なんだ、君は此の家にゐたのかい……」

焦茶服のこの男は、ギロリとした眼瞼と、厚く大きな唇に微笑を浮べて、嗄れた太い聲を出した。及川は、大同印刷從業の若い連中に指導鬪將であつた。

「こいつあ有難い、君に頼むものがある……」

逢はれた男は、低い聲で新米女給に囁いた。そして洋服の内カクシから紙片れを出して云つた——こいつあ、チップだ

——」

「有難う！　たしかに——」

大分靜かになつた戸外から、四五人の土工風の男達が入つて來た。

「いらつしやーーい」

おきんは、そつちへ立つていつた。焦茶服の男は、イランを少しづつ呑みながら、戸外の様子を覗つてゐる風であつた。

この色の淺黑い顴骨の高い男は、いつもこの焦茶服を着し、勞働者上りらしい厚い肩幅と、太い首ッ玉を持つてゐた。

「どうでえ、俺達も、あの皆の目に乘つて演説した野郎が云つたやうによ、やはりその失業者で、がいとうふんしたんだ

ぜ」

テエブルの眞ん中の方で醉つぱらつた聲で、黑い阿彌陀帽を冠つた土工風の男が、ドンとテエブルを叩いた。

「とつとと、勿體ねえ、こぼれちやふぢやねえか……それだから俺らだつて街頭はんとかいふのに密着かなきやなんねえのさ……うん」

赤く爛れた眼をショボつかせながら、相手のシャツに腹掛しか着てない親爺は、兩手でコップを抱いて、何度も肯きながら、獨りで承知した。

「まだ表通りは騷いでるわよ」

焦茶服の耳許で囁いたおぎんが、戸外の樣子を語つた。しかし、焦茶服は腕の時計を見て焦きたてられるやうに立ちにつた。

「ぢや、いまのチップを頼んだぜ！」

及川は、こう云つて烏打を眼深に冠り直して、戸口のところへいつた。

「まだ危いから氣を注けてね」

おぎんの聲に、硝子戸の外で、焦茶服は……ウフン——と笑つて見せた。例もの不敵な笑ひ——何と不敵な笑ひ方だらう。あの人はあのウフンで百萬の勞働者を背負つてゐるのだわ——。

テエブルの眞ン中で議論してゐた土工の醉つぱらい達が、そのとき、コップをカチ合して怒鳴つた。

「街頭班、ばんざあ——い」

II　太陽を爭ふ

「こんちは……」

空家の多くなつた「太陽のない街」を、萩村は毎日、一軒々々たづねて歩いた。米袋を擔ぎ、味噌、醤油を車に積んで、

組織者の彼は、離散する爭議團幹部の聯絡係りみたいであつた。

會社の構内から追拂はれた彼等の消費組合は、反動空氣渦潮の八番長屋の眞ン中に、根城を据へた。

「おい、居ねえかい？」

泣き嗄れた赤ン坊の聲がするのに、戸はまだしまつてゐた。

「モウ十時だぜ、お内儀……」

細目に引き開けた入口から、首を突つ込んで、萩村はまだ寢てゐるお内儀に云つた。

「病氣かい？」

蒼い顏したお内儀は、枕の上で頭だけ動かした。

「親爺はまだ遊んでるかね」

納戸貸に間掛けたらしい狹くるしい土間の様子を見ながら、彼もガツカリした。此の組合員には、貸掛がモウ三拾圓から溜つてゐた。消費組合は未收金で破産しさうだつた。

「氣を注けなよ」

お内儀に、聲をかけられぬうちに、戸をガタンと締めて、萩村は其處を去つた。米だつて味噌だつてこの家にも失くなつてゐるのは分つてゐたから……。

奔三川たと云ふに、千川どぶはまだ水が解けなかつた。

「おいお内儀さん、親爺はまだ遊んでるかい？」

どぶ板の上で洗濯してゐる若いお内儀に、萩村は、きまつた挨拶をした。

「あ、昨日、神田の何とかいふ工場にもぐつたんだよ、ところがさ……」

このお内儀は、元氣よく、頬つぺたの赤い顔を振り向けた。

「何うしたい？　バレちやつたのか？」

萩村は、洗濯盥の向ふにしやがんだ。

「バれちやつたんだよ——馬鹿々々しいつたらないのさ。——君お爭議團の班委員を勤めてゐた筈だ——つて、同業組合の廻狀を突きつけて見せたんだつてさ」。

お内儀は、洗濯物のシヅクを飛ばしながら喋べつた。

「うちぢや、シヤクに障つて、よつぽどその工場主を擲り飛ばしてやらうと思つたつて云つてたよ」

「ぢや一日限りか？」

「うゝん、ところが職長が以前知つてた人だから、仲に入つてくれて、三日だけ働くことになつたのさ」

「畜生ツ、ヒデえことしやがんな」

何處の家でも、同じやうに聞かされた。萩村は默つて帳面をめくつた。この組合員のウチは、賣掛が四拾圓からあつた。未收金の數字は增える一方だつた。

「アンタ、米がないわよ」

お内儀は、彼の顔色をうかゞひながら云つた。ガラガラに似合はない、甘つたれた調子である。

「ソれに薪も、醬油も……だらう。」

萩村は、突慳貪に、突つ放した。

「さうだよ、氣が利いてゐるネ、砂糖もついでに……」

お内儀は、今度はフテくされて、圖々しくなつた。

「勝手にしやがれ！」

秋村は、持つてゐた帳面で、背を向けて洗つてゐるお内儀の頬つぺたを、ハタきつけた。

「オッ痛い……水ブッかけるぞッ」

お内儀は、本氣に慍つた顏をした。

寢かしてあつた子供が、眼を覺ましたらしく、陽の透らない家ン中で、泣き聲がした。

「抱つてやるよ」

赤ン坊を抱いて出て來たお内儀は、さう云ひながら、突立つてゐる秋村に、赤ン坊を渡して、背に結ひつけて貰つた。

「さう凪んなよ。組合だつて知つてる通りだ。いくら拂つてくれる？」

秋村は、鉛筆を舐めた。

「カミの惡い男だナ、三日働きやいくらだか、勘定して見な」

「七圓位、もらへるか？」

「冗談いつちやいけないよ。五圓だよ。七圓やつたら、お湯錢も殘らないぢやないか。」

バケツの中に、絞つた洗濯物を、タタキつけるやうに投り込みながら、お内儀は足りないものを胸勘定した。

「米と、薪五把と、醬油一升と、味噌二百匁と……」

「おい、おい」秋村は慌てゝ止めた――それぢやおめえ、入金どころぢやないぢやないか――

「あたいに惚れてんなら、その分だけ砂糖も……」

お内儀は、バケツを抱へあげて、ゲラ〳〵笑いながら云つた。

「ケッ……誰がおめえなんかに……」
萩村は笑ひもしないで、籠を肩にひつかけた。
「ヘイ、こんちは！」
つい眼の先の路次から、向ふ鉢巻の八百屋が出て來た。まだ若いこの八百屋は、嘗ての徒弟代表、久下平三だつた。
「ヨウ……」
顔見合せて、萩村は立止まつた。
「おい、お内儀さん、今日は野菜はどうだい？」
平三は、スッカリ商賣に馴れてゐた。
「平ちやんか、何があるんだい？」
行きかけたお内儀は、バケツを抱へたまゝ、擔いで來た籠の中を覗き込んだ。
「大根、赤蕪、ほうれん草、葱、キャベツ、白菜、人蔘……てとこだなア」
平ちやんは、ザッと品物をメクつて見せた。
「おめえ、すつかり商賣が旨くなつたナ」
萩村も一緒に覗き込んだ。
「おめえだつてさうぢやねえか、アハハハ」
若者は元氣よく笑つた。
「お互ひにうまくならなきあ、干上つちやふよ」
お内儀は、いぢくつてるばかりで、すぐ買ひさうでなかつた。

「どうだい、キャベツは……見切つちやふよ。そつちの大きいんで十錢だ。」

「腐りかけてんだらう」

十錢といはれて、お内儀は、そつちへ手を伸ばした。

「腐つてもキャベツ——つてことがあるよ。大丈夫だ。此處ンとこ少し、切つて捨てりやいい」

平ちやんは、お内儀の懐中加減を知つてゐた。

「チヤ、葱二本添へときナ、え?、いいだらう」

お内儀は、決して云ひ値では買はなかつた。

「あゝいいよ、ドウセ駄目だと云つたつて、ソウかつて、スッこむお内儀さんぢやねいんだから」

平ちやんは、馴れた手つきでキャベツと葱をとり出した。

「一寸待つとくれよ、これを干してくるから、愚圖々々してゐると、向ふ長屋の、スカップの娘どもに、場所をとられちやふから……。」

忙しさうに、アタフタバケツを抱へて、お内儀は、裏口へ行つちまつた。

「おどろいたね、あのお内儀は——これぢやこつちは稼業停止だ。」

萩村と顏見合せて、平ちやんは笑つたが、

「あのネ、萩村君」

低い調子で、顏を近づけながら

「今度の十八日會でね、地域別に地區委員會を組織しろつて、×から指令が來たさうだぜ」

「×の指令?」

萩村は訊き返した。彼等は十八日會員だつた。

「勞農黨のか?」

こゝで久下はハツとした。この男は爭議の終末頃から、所謂「隠れた指導權」への反對論者だつたのだ。綿貫が折紙をつけたやうに「民主々義の尻尾を出した奴隷人情論者」だつたことに氣がついた。

「ウン、吾々の黨だ!」

平ちやんは曖昧に云つた。――吾々の×――この男に、まだプロレタリア最高唯一の×の存在を語つてはならない。まだサンヂカリズムの舊い殼をくつつけ、急激な政治行動へ、一緒に飛躍し切れなかつた此の先輩へは、黨が協同戰線黨の中に於いてのやうに、カモフラージされなければならないのだ――八百屋は賢しい眼の奥で、突嗟にさう判斷した。

ちぐはぐな瞬間があつた。ウソ寒い風が、この五番長屋のトンネルへ飛び込んで來た。

「昨日の失業者大會は凄かつたよ」

八百屋は、相手の注意を外らすために、他のことを云つた。

「おめえ、やられたか?」

配達夫は、×の指令を、地區委員會を、深くは追究しなかつた。此の消費組合主義者には、彼等の消費組合の危機と、打ちひしやがれた「太陽のない街」とだけでいつぱいであつた。

「大丈夫さ。逃げるんぢやおめえ、自信があらあな、アハハハ」

元氣のいい若者は、天秤棒を持ち換へながら、昨夜の上野山下の騒ぎを語つた。

「ホンのおめえ危機一髪てえとこだ、その××を突き飛ばしといて、電車の後部に飛びついたまではよかつたが、おめえ、悲しいことに切符がねえんだ。」

「ホウ……」

「ところが有難えここに、同じ電車に、あのおぎんちやんが乗つてたんだ。まつたくホツとしたよ」

秋村も面白さうに一緒に笑つた。しかし、平ちやんは、その「××の指令」を、そのおぎんちやんが持参してゐたんだとは云はなかつた。

「中井や、寺石なんぞやられたらしいよ」

平ちやんがさう云つてるとき、不意に裏手の方で、お内儀の金切聲がきこえた。

「畜生ッ、おまけにナメた眞似をするなッ、このスキヤツプめ！」

物干竿らしい音が、何かに打つ衝かつたやうにひびいた。途端、赤ン坊の火のつくやうな泣聲が起つた。

「あのお内儀、また喧嘩してんな」

秋村が先へ立つて、長屋の路次を廻つた。案の定、千川どぶ越しに、お内儀は物干竿を振りあげながら、向ふ岸の長屋のお内儀連を相手に、勇敢にハタき合つてゐた。

凍てついたどぶの兩側に、幅三尺ばかりの空地が、千川どぶに沿ふてゐた。

「どうした？　お内儀……」

秋村に聲をかけられると、益々元氣づいたお内儀は、赤ン坊を背で振り廻しながら、また向ふ岸の嬶連に毒づいた。

「アノ裏切りの鳥どもが、あんなに物干竿を高くしやがつたんで、こちとらの干物は、太陽の日にブラさがらないんだよ

――この意地惡る阿魔どもがッ」

お内儀は、また物干竿を振りあげたが、向ふ岸の嬶連中も多勢だけに、負けてゐなかつた。

「チヤ、こつちも高くしろよ」

二人が手傳つて、一間ばかりの棒切れを繼ぎ足した。

「生意氣な、此方だつて高くすらアい」

向ふ岸の嬶連も、てんでに繼ぎ足した。

「コン畜生ッ、ハタキ落すぞッ」

「オッ、面白い、やつてみやがれッ」

お内儀は、ありつたけの棒切れを運んで來た。向ふが三尺すれば此方が五尺……すると向ふがまた八尺……破けた襦袢の袷や、繼ぎの當つたズボンや、おしめや、赤い褪めかゝつた腰卷が、千川どぶを挾んで、三尺——五尺——一丈と、太陽をめがけて、だんだんにセリ昇つていつた。——

III　黒　表

大同印刷の西向の通用門が、石柱と鐵扉の門に改築された。門は朝六時に開かれて、七時五分には、ガッチリと閉ぢられて、夕刻五時のサイレンが鳴りひゞくまでは開かなかつた。

爭議團が、叩き破り、乘り越へ、團旗が翻へつた門は、もう無かつた。そしてその新らしい門からは、新らしい職工達が、神妙に出入した。

大同印刷會社は、急速に回復しつゝあつた。此の會社のアフレで喰つてゐる近隣の中小工場からは、爭議中に流れ出てゐた仕事が回收されはじめた。壹阡萬の資本が、三ケ月の爭議に依つて、殆んど壞滅したかに見えたのは、ホンの表面だけにしか過ぎなかつた。新鋭の獨逸式三色及六色輪轉機、オグデン式製版法の特許權——大川家の大資本は幾十の「頭」を持つてゐた。大同印刷が躓き轉んだつて、起き上るときには、他の「頭」と同じやうな、資本集中化の、獨占化の新階段を

踏んまへてゐたのだ。

「此の雑誌も、今月きりで大印に舞ひ戻るんだつてさ」

西向きの通用門から、五丁と離れてゐない多賀印刷工場でも、恐慌が起つた。印刷場から製版場まで五六十人位のこの工場は、火事泥式に、大印の争議中を、夜つぴて仕事してゐた。

「返さねえつて頑張りやいいぢやねえか」

文撰場では職工達が、工場主と同じやうな心配をした。

「ソウはいかねえさ、だつておめえ、こんな古ぼけた活字よりか、トムソン鋳造機で、毎日新らしい活字で作つた雑誌の方が、註文主にや有難えからうナ」

まつたくだ！　端つこのケエスで、富ちやんはそう云つた。黒くなつて、字ヅラが丸くなつたやうな活字は、富ちやんが作つた大印の文撰場では、見たことさへなかつた。此處の印刷場のエンダラロールなんか、歯車の音からして異つてゐた。

「心ぺいすんない、頭が禿げらア」

それまで黙つてゐた富ちやんの背後の文撰工が怒鳴つた。深く考へることは怖ろしいことだ。

「ソウだとも、ソウだとも」

六號場の連中が、一緒に口を揃へた。

富ちやん――は、うまく此の工場にもぐり込んでゐた。この男は廿一だといふのに、ちびで丸顔なために、まだ十八九にしか見えなかつた。小僧ッ子……、雛ッ子の故に、此處の文撰長は多寡をくくつて雇つたのだ。

製版場は二階になつてゐた。窓からは日がささなかつた。北向き硝子窓に、大同印刷のコンクリートの建物が映つて見

えた。

工場ン中は、ヒドク無氣力であつた。大印爭議が敗北してからは、中小の工場主達は、從業員をすつかりナメてかゝつた。嘗てS勞働組合が、大正十三年の爭議で獲得した二割の賃銀値上が、何日のうちに、全日本の印刷工の給料を引きあげてしまつたと同じく、今度の爭議の慘敗は、急速に十三年前の低い賃銀に追ひ落されてしまつた。S勞働組合が闘爭の結晶だつた臨時工制度廢止も、またゝくうちに復活されて、工場主達は雇傭者の六七割を臨時工にして、退職手當及解雇手當とを、一緒に奪ひとつてしまつたのだ。

S勞働組合の本部は、襲ひかゝる次ぎ次ぎの彈壓に、絶え間なく移動し、この多賀印刷工場では、五六人殘つてゐた組合員まで脱退してしまつて、いまは富ちやんきりであつた。

——卑怯者、去らば去れ——吾等は——

ポツンポツン活字を拾ひながら、富ちやんは淋しくなると唄つた。隱れてビラを貼り、機會を捕へてアジつても、工場ン中は少しも動かなかつた。年老つた奴らは、富ちやんを子供扱ひにした。

「組合入れたつておめえ……」

古參の植字工は、組上げた版こを、紐で結きながら振り返つた。

「失業したら俺ンちの、七人の家族が保證してくれッか、馬鹿野郎め！」

工場ン中は、いくらかの不平を持つてゐても、濃厚な反動空氣に支配されてゐた。職長の怒鳴り聲と、ロールの響きとの外は、從業員達は、元氣な笑ひ聲すら立てなかつた。

しかも、此の植字場の親爺共は、すつかり臆病になつてゐた。景氣の好かつた時代の、華やかな經濟鬪爭の勝利だけが、古い追憶となつて彼らを支配してゐた。近頃の犧牲の多い、そして經濟的には何の勝目もない爭議に對して、彼らは

入り込んでゐた。近代工業プロレタリアの資格は、彼ら親爺共から剝奪されて、次の若い「手借ッ子」達に移動してゐたのだ。

富ちやんは、もう此等、特權貴族の經濟ともに斷念しなければならなかつた。彼が此の工場に××つてから、もう一ケ月も經つたのに、一人の××も作れないことは、彼等の十八日會へも氣恥かしかつた。

文撰場も、植字場も、解版場も、巻枠場も、悉くが驅馬のやうに、押しひしやがれて働いてゐた。

「おやッ！」

富ちやんは、巻枠場で新入りの男を發見して驚いた。——あいつ、どうしてもぐり込みやがつたらう？

卅五六の、鬚ッ面の、ヒョロ高い男が、横顔を見せて、わき目もしないで働いてゐた。——あいつ、食糧班に働いてゐた吉公だ——

「おい？」——

職長が事務所へ行つたスキを覘つて、富ちやんは、懐しい同志の肩をた〻いた——畜生ッ、うまく×つたなア——

しかし、その懐しい同志、鬚ッ面の男は、罪惡でも犯した人間のやうに、悸ッとして振り返ると、サッと顔色を變へた。

「久し振りだつたなア」

富ちやんは、吉公の驚いた顔色に頓着しなかつた——大丈夫だよ、親爺は事務所に行つてんだから——

鬚ッ面は、目をモグモグさしたきりで默つてゐた。何て元氣のない顔だ！富ちやんはつよく肩をた〻きながら云つた。

「兄貴、歸りに一緒にならうぜ！」

退けた工場の表通りには、夕闇が這ひ寄つてゐた。疲れた青い顔、力のない咳をする年若い女工達の顏………工場で精氣を吸ひとられて、滓のやうになつて吐き出された顏達が、幾つももつれながら、夕闇の中に消えた。

「おれからおめえ、もう四ヶ月だぜ！」

富ちゃんは、吉公に密着いて歩きながら云つた。

「その間、おめえ何邊(どいか)の工場で稼いだか？」

ひよろ高い男は、首を振つた。

「そいつあ、辛らかつたなア」

この吉公には、たしか家族が多い筈だつた。路次をめぐり七番長屋の入口まで來たが、吉公は、始終默りがちだつた。

「おめえ、ひどく元氣がねえなア」

立止つて、富ちやんはノッポの鬚ツ面を振り仰いで見た。そんとき、吉公はやつと聞きとれる位の聲で呟いた。――俺を、組合から除名して呉んねえか――

「除名？」

富ちやんはびつくりした。――何故だい？

吉公は、ヤッパリ俯向いたきりだつた。

「このまゝぢや、俺の一家族は餓(かつ)え死ンなくちやなんねえ……」

富ちやんは意味が判らなかつた。並んで歩けない狹い路次を、富ちやんは吉公の家まで背後から從いて行つた。

六疊一間きりの家ン中に、四人の子供がガヤガヤ騒いでゐた。室の隅ッこには、動かない置物のやうに、吉公のお母(ふくろ)が、襤褸ぎれにくるまつて寢てゐた。

「お上んなさい」

頬の落ちたお内儀が、病人の足の方からこたつの中味の手焙を引き出して持つて來た。小さい炭火が、淋しく赤かつた。

「いいんだよお内儀さん、俺達は若えんだから楽かねえ、もとんとこへ持つててくれ」

富ちやんは、ポケットに手を突込んで、上り框に腰掛けた。

「いつたいどういふ譯だい？　兄貴……」

唖の叶けないこの老職人の顔をみながら、富ちやんは柔らかに訊ねた。——おそこの職長に、組合を脱退するといふ誓約でも入れたのかい——

鬚ッ面は、疊の上へ眼を落して、淋しく膝頭を撫でた。

「そんなんなら構ふもんか、頑固に脱退とか除名とかしなくてもいゝぢやねえか、それも戰法の一つだ、機會が來るまでおとなしくしてりやいゝぢやねえか」

富ちやんは、若いが苦勞してゐた。廣い戰線は各種各樣だつた。小父ちやんと叫びながら首ッ玉へ獅がみついてくる子供達をあやしながら、富ちやんはニコニコ笑つて云つた。

しかし、どうしたことだ？　吉公は首を振つて、ポツリと云つた。

「それが、三年經たなきお駄目なんだ」

「三年？」

富ちやんは、吉公の眼頭に浮いた涙を發見けて覗き込んだ。

「S勞働を脱退して、三年經つたら同業組合の黑表から取り除けてやると云ふんだ——」

おお——同業組合の黑表政策が、こうして首を締めてゐるんだ——富ちやんは、初耳の吉公の言葉におどろいた。彼は吉公の眼から落ちる涙を見詰めながら、續いて云ふ言葉がなかつた。

「勘辨してくれ、富公——」

吉公は、痩せた片手を壁に突いた。子供達は父の尋常ならぬ樣子に感づいて、これも俯向いてゐる母のまはりにとりまき、病人は室の隅で、石のやうに動かなかつた。

富ちやんも土間へ眼を落したきりだつた。——こんな衰へた身體では他の稼賃も出來まい。まして若い者と違つて、工場の潜り込みは利く筈がない——三年、三年、畜生ッ三年だ。

「手を上げな兄貴、手を——」

しばらくしてから、富ちやんは云つた。——組合の方は俺に任せな、なアいいだらう。よく相談してまた來るよ——

富ちやんは戸外へ出た。黒表政策——世帶持ちは、これで多くやられるに違ひない——戰線から谷底へ轉落してゆく多くの同志達。彼は口笛を吹きはじめた。カラッ風の吹きあげる清水谷の裏通りを歩きながら、彼は淋しさを追ひ退けるやうに、ヒヨウヒヨウと吹き鳴らした。こんなときに、彼は彼等の思慕する中井の馬ッ面を憶ひ出した。あの男は口笛が素敵にうまかつた。何時だつたか、會合の歸りに「沖の漁火」といふのを、口笛で吹いて聽かされたのを憶ひ出した。

「あの男も、こんな淋しい時は詩人になるんだ。きつと——」

こんなことで氣を腐らしちや不可ない——彼は彼等の旗である中井を考へた。あの詩人はおまけに、おぎんちやんに惚れてやがる……それは誰にも氣がついた。

「でも中井は、口笛のうまい割に、女をつくることは下手なんだぜ」

久下や、清瀬なんかもこう云つて笑つた。——あれでおぎんちやんだつて、やつぱりそうなんだ——

あの革命家は、ヒドク初心なんだ——彼等はそう云つて笑つた。革命家と詩人——そうだ！　三年前に、日本から姿を消した奈良も、矢張りそうだつた。あの鬼瓦みたいな男が、しかも玄人の詩を作り、相當な素人俳優だとは誰が知つてるやう——。

「俺は、そいつを知つてんだ」

彼は滅入つた氣持を引き立てやうと、ソンなことばかり憶ひ出さうと努めた――奈良は、工場での兄弟子であり、一緒に同居もしてゐたので。日本から姿を消してもう三年――

「大阪の郷里に行つて來る――」

こう云つて出たきり音沙汰が無かつたんだ。それから、××する途中を、殺られたとかいふ風説が二度ばかり――。

――神戸の旅の夜は更けて――

彼は口笛を鳴らしながら、間借りしてゐる二階家の家へ入つて行つた。

「おや？」

二階の自分の室の入口に、一足の見馴れない泥靴が重ねてあつた。彼は變に思ひながらソツと障子を引き開けたが、思はず聲を立てた。

「お、奈良ッ」

室ン中にゐた男は、慌てゝ手で制した。富ちやんは、自分の聲の高かつたのに氣付きながら、ソレでもソワソワした。

「ど、どうしたい？」

廿五六の、獅子のたてがみのやうな長髮を掻きあげた男は、落ちついた態度で、ニコニコしてゐた。

「まあ、背後を締めろよ」

その聲にも、懐かしい聞き覺えのサビがあつた。

二疊の自分の室ン中で、まつたく偶然にも、××××から歸つたばかりの、三年前の兄弟子を見出したのだ。

「…………」

富ちやんは何と云つていゝか判らなかつた。彼はキチンと膝を立てゝ、頬を赤くしながら、奈良の大きな獅子ツ鼻から吹き出る、バットの煙を、ボンヤリ見詰めた。

IV 地區委員會

まつたく三年振りで、兄弟子と富ちやんは、室の隅つこに轉がつてゐる眼醒時計が九時から午前一時へ廻るまで、奈良のバットが一本きりしか無くなるまで、語り合つた。

「久し振りで、抱いて寢てやるかな」

富ちやんが促がされて寢床を作つたとき、素ッ裸になつた奈良は、大きな圖體を、ボサボサの芯ばかりになつた毛布の中へ潜り込ませて來た。「抱かれて寢る」ホンに、富ちやんは三年前まで、そんな氣がしてゐた。ちびの彼には、一枚の蒲團に枕を並べると、子供が親爺に抱かれたやうな恰好だつた。

夜が更けても風は絶間なく雨戸を揺すぶつて音をたてた。富ちやんは、すつかり昂奮してゐた。兄弟子の氣息がしだいに整ひ、やがてそれが鼾に變化つていつても、富ちやんにはそれどころでなかつた。四時間のうちに、兄弟子は、いつたい自分に何を語つて聞かせたか？

而も驚くべきことは、三千マイルの遠い地點から、ツイ今しがた歸つて來たばかしの兄弟子は、大印爭議の經過の細末に至るまで、爭議團員の自分より詳しく知つてゐた。爭議終末頃から急速に離反して行つた高木、石塚一派の從業員出身の幹部の行動まで、更に、寺石と衝突して自ら民主々義者に轉落しつゝある秋村さへも、彼はハッキリと批判し、論斷した。

「そこで重要なことはだ、かゝる狀勢の下に於て、君らは如何に行動すべきかだ――」

印刷同業組合の黑表政策、沈頽し切つた各工場内部の空氣、急速に陣營を離反し、墮落しつゝある舊幹部一派、かゝる心

うちの彈壓――そうした情勢を、難問題が提出されても、この獅子ッ鼻の、餡袋のやうに大きな顔面を持つた兄弟子は、終始、眉一つ寄せないで、ニコニコ聽いてゐた。そして最後に、矢張り依然のところへ立戻つて來て云つた――そして重要なことは、かかる状勢の下に於て、君らは如何に行動すべきかだ――。

兄弟子は、その大きな眼玉、茶つぽい瞳に絶へず柔らかい愛情を微笑ませて語つた――二匹の象と、五つの卵とを合せたら、幾つになりますか？ と小學教師に質問されたら、小さい悪戯小僧は、眼玉をクルクル動かして首を捻ねるだらう、二匹の象――素敵に大かい、鼻の長い象がまづこの悪戯小僧の頭を占領してしまふに違ひない。小つぽけな卵と大かい象と――數と形象とは、印象派の描いた馬の尻尾の線蹟のやうに、コンガラがつてしまふだらう――。しかし、公理は厳然として、依然、二匹の象プラス五個の卵エコールの七である。――ここだよ、富公――。

獅子ッ鼻は、バットをまた吐き出した。

「俺達は藝術家だ、藝術家の故に、インテリに比べると、ひどく感情的だ。前の話に例をとれば、悪戯子供のやうに感情的なんだ。形と色に迷はされ易いんだ。感情につまづき、こんがらがるんだ、秋村なんぞがその例だ。

しかし、公理は厳然としてゐる――。緊縮政策に首を絞められていつた憐れむべき吉公も、意識的に陥没した惜むべき高木一派も、道化師のやうな正義人情派の秋村も、ソレは一聯の反動には間違ひない――。

兄弟子は、明瞭に断定する。――なあ富公、凡ては科學的に判斷し、政治的に行動しなきあ不可ねえ、去年の金融大恐慌、大爭議の頻發と慘敗、軍事内閣の出現と對支政策――

厚くつて大きな掌を、ユックリ動かしながら兄弟子は最後を結んだ。――問題の本體は凡て簡單さ、しかし行動となる場合は、ヒドく複雜になる。ソコで×××、吾々の×、プロレタリア××の×の機關に依つて判斷され決議されなけや不可ねえ――そして最後に尤も××なことは、吾らの決議だ！ 鑛の中に喰ひ入り、鐵をとろかしてゆく火のやうな××

だ！ ×の指令は何時も、その鐵をもとろかす吾々の×に依つてのみ燃え上るんだ!!

兄弟子は遠廻しに云つた。しかし、富ちやんにはそれが×××つた。——俺は吉公の涙で胸を塞がれ、工場内のモウロク親爺共に燻ぼらされてゐたんだ……俺はモツと××されなけあ不可ねえ。

——そうだ、俺達が手も足も出ない程、叩きのめされてゐるときが、また一等希望に××いたときなんだ——。見ろ！地球上の誰もが絶對に(必然な公理を除いては)拒ぎ切れない此の世界的な失業者群の大氾濫を！

富ちやんは、毛布の中で、足を硬ばらしながら考へた。空氣は重くなり、沈んで、眼醒時計は二時を過ぎた。

奈良の鼾はたかくなり、富ちやんの頭は益々冴へていつた。——この行ひ澄ました禪僧のやうな兄弟子は、しかし、自分自身のことは何一つ話しやがらねえ——。

どんな具合に旅行し、どんな方定を、明日には持つてゐるかも……四時間のうち、吾々の行動——の他は、露西亞のことを少し話したきりだ。

全世界の最高智識を集めた科學、政治經濟、歴史地理、そして更に全世界地圖に、××の××を×へてゆく人類進化の最高原理、世界資本主義の侵略に對抗する××軍の武備訓練、×××の攻防法等、等、何とまあ素晴らしい××大學だ。

インド、支那、蒙古、朝鮮、更にアフリカ、イギリス、アメリカ、カナダ等、等、等、數十種の國語、數種の皮膚とが、唯一の、全地球を×××××××で、人類選手の××××が××××つて握手する大學滿堂の光景——。

「×××はプロレタリアの××だ！」

××！ そうだ、俺達は××を持つてゐる。そして俺達は××××を××にしなければならない。

今日の侘びしさが、すつかり富公の頭から拭きとられた。——俺達は、明日を如何に行動すべきかだ——。

しかし、習慣になつてゐる富ちやんが、翌朝六時過ぎに眼を覺ましたとき、どうしたんだ？ 奈良は寝床に見えなかつた。

「ケッ、まるで風見たいな野郎だ」

嵐のやうに来て、嵐のやうに、彼が眠つてるうちに去つたのだ。富ちやんは彼自身には分らない、嵐のやうに忙しい世界が、兄弟子達にはあるのだと思つた。――俺達は離ッ子だ、よし、俺も兄弟子達のやうに育つんだ！

その晩方、彼は胸をふくらまして、寒い風の吹く清水谷の坂をおりながら、十八日会に出掛けて行つた。俺達の戦線で……しかし奈良のことは、誰にも話しては不可ない――。

赤坂通りを横切り、お荷谷を半ば降つたところで、富ちやんは、小さい路次を左に入つて行つた。

地区委員会の××××――彼等の十八日会、彼等の四百人も所属した第五班の後身十八日会は、近頃はまつたく廿人くらひの出席者しかなかつた。而も、その廿人のうち安藤、亀井、大宅のぶ子一派は、高木達の一派に参加する気勢さへ見えてゐた。その一派に脱退されれば、残るところは、高枝を筆頭にアトは離ッ子ばかりだ――。

清瀬と黒岩が共同で借間してる二階家が、高い石垣の下にハリついてゐた。

「い、ちび、高枝おそいぞ」

裏口から上つてゆくと、室の入口で憤つた顔で黒岩が怒鳴つた――おめえ、大変だぞ――。

ジヤケツの上からオーバを着た黒岩は、梯の際の暗いところで立つた。――安藤一派が到々脱退を声明して、いま引き揚げやうとするところで、ど、どうする？　潰つちまふか――。

成程、室ン中からは、緊張した声が途切れ途切れに響いて来た。セツからの黒岩は、富ちやんにまで怒り散らした。

「まあ、待てよ、帰つたつてはじまらない」富ちやんは黒岩を制して、室ン中へはいつた。

室ン中はギツシリいつぱいだつた。向ふ障子際に安藤達一派が顔を揃へて座つてゐた。椽側の柱を背にして、清瀬が座長になつて居り、それから椽際へ、久下、高枝、おぎん等が並んでゐた。清瀬と安藤との論争で、人々は富ちやんが入つ

て來たことも氣付かなかつた。

室ン中は、中心を失つてゐた。清瀨は座長を忘れて、ひどく咳き込みながら(肺を患つてゐるのだ)きれぎれに、安藤を罵倒した。安藤は、初手から計畫的に、脫退を聲明して、S組合の不統一、不聯絡を罵り、高木一派の新勞働組合に參加する理由を、いや結果を密着けやうとした。明らかに、室ン中は對峙してゐた。

「不統一、不聯絡にしたのは、彈壓のせいぢやないか、その彈壓をハネ返すのは俺達の責任ぢやねえか」

久下は、眞赤に怒つてゐた。清瀨は咳が止むとすぐさつきの安藤の言葉尻を摑んだ。

「君あ、高度のスローガンを取換ろと云ふ——だが、俺達は工場勞働者だ。俺達の要求が高度だと云ふんなら、君の取換へるスローガンと云ふのは、どの階級のスローガンなんだ……」

「小市民層を代表するんだつてさ」

おぎんが皮肉つた。しかし安藤は急所を突かれても平氣でゐた。彼等は最初から態度を決めてゐた。大宅も、細井も、心の中で信じてゐた。——若僧のガチャ張共め、官憲とイタチごつこしてりや、それで豪いと思つてやがんだ、馬鹿野郞め!

「本部は年ぢう移動して、組合員は何處に賴つてゆけばいいんだい、え?」安藤は、青二才共をナメてゐた——俺達は爭議で慘敗した。俺達は事實一歩退却させられてゐる。右を見ても左を見ても、爭議團員は氣息奄々だ。高度なスローガンを景氣よくおつたてるのはいいさ、しかし、皆を其處まで引ッ張つてゆけると思つてるか、阿呆め!」

清瀨が座長席の机を押しやつて、安藤の方へ詰め寄つた——慘敗?何時吾々が慘敗した?おいモ一度云つて見ろ!

「慘敗さ」安藤は鼻で笑つた。——二千人もおつ放り出されりや、まさか勝利でもなからうぢやないか——。

「貴樣、おれ達は政治的に捷つてんだぞ、慘、慘敗とは經濟的丈に……」清瀨は、また咽喉がつまつて、咳き入つた。

富ちやんは默つて安藤の顏を見た。モウ駄目だ、此の男達は、單なる××××××だつたんだ!　××××××、××は

深ぎよく清算しなきあならない!!

默つてゐた黑岩が、ツカツカと安藤の前へ行くと、いきなり怒鳴つた。

「きさま、社民黨にゆけッ」

「なにッ」嚇ッとなつて安藤は立上つたが、黑岩の太い腕がブルブルふるえてゐるのを見ると、其儘、障子を開けて外へ出やうとした。

「出て失せろ!」

久下が、背後から浴びせた。安藤が立上つたのを見ると、龜井、大宅たち七八人がゾロゾロ立ち上つた。

「待て安藤……」

そのとき、富ちやんが云つた。

「なんだ、まだ用事があるのか?」安藤が障子からヌッと顏だけ出した。

「いや、×つてしまつたお前に用事はねえ。しかし、貴樣の背後にゐる諸君に、貴樣達ダラ幹に迷はされてゐる大衆諸君に用事があるんだ」富ちやんは、障子際に立つて行つて聲をはげました――諸君、諸君は迷はされてゐる、欺されてゐる。不幸にして吾々の眞實が判らないのだ。吾々の×は一つしかない。諸君が吾々の眞實に氣付かれたならば、明日にでも再び歸つていただきたい。吾々はより新らしく×く戰野で、諸君を×つてゐやう!!

ボソボソと梯子を降りてゆく足音を追掛けながら、富ちやんは怒鳴つたが、云ひ終るとドッかと座つてしまつた。

足音がしだいに遠退き、室ン中に半分ばかりの空所が出來た。障子を洩れる風が、肌寒くブッツかつて來た。

清瀨は机の上に顏伏せたまま、啜り泣き、黑岩と久下は、頑丈に腕を組んだまま默り、高枝やおぎん達は、顏を伏せてゐた。

——三ヶ月の爭議を闘ひ拔いた吾々の陣營にも、凡ゆる分子が内包されてゐたんだ。三ヶ月の白兵戰、陣地爭奪の保壘戰から、一歩、濶い、尨大な散兵戰の陣野に投げ出された今日、指揮刀を握つてゐた舊幹部の中に、幾つもの腐つた、或は腐つてゆく分子が出て來たんだ。——しかし、吾々は潔ぎよく淸算しなければならないのだ——。

「さあ、みんな始めやうぜ、これからだ！」

富ちやんは、小さい火鉢を室の眞中に持ち出して云つた。

「淸瀬、メソメソすんない。どうせあいつらは道連れぢやねえんだ」

このちび公の言葉には元氣があつた。俺達は先頭を歩いてゐるんだ！　如何なる場合も吾々が多數ではないだらうぢやないか！！

「一イ、二ウ、三イ……」

高枝が、手で指しながら數へた。——タッタ九人よ——。

富ちやんも見廻した。九人は決して少數ではない、しかし、眞實のことを云つて、この殘つた九人の顏觸れにも、プロレタリア黨の黨員の資格を持ち得るものが幾人あるだらうか？

黑岩は元氣で正直だが思慮がない、おぎんちやんはしつかり者だが、理論に疎すぎる。高枝は種々な點で申分ないが、荻村と結婚してゐることが妨げやしないか？　淸瀬は病身だし、目ぼしいところをザッと見て、黨員資格者は久下一人きりではないか——。

「澤山さ、サア地區委員會組織案に移らうぜ」

淸瀬が氣をとり直して云つた。プリントを一枚づつ渡して一條づつ讀みはじめた。

「本地區委員會は、小石川北部第一地區と稱す」

戸外で雨戸が揺れた。──しかし、まあ、取り殘された顔觸れは、ホンの雛ッ子ばかりじやないか──富ちやんは、皆と一緒にプリントをめくりながら、一座を見渡した。

「本地區は、市部委員會に所屬し……」

片隅で、滴制がまた咳き入つた。

「よし俺が代はらう」

富ちやんが、滴制に代つた。──未來は青年のものだ。──昨夜の兄弟子の言葉を憶い出しながら、富ちやんは元氣よく讀みあげた。

「本地區委員會は、本地區内に於ける各大中小××の調査及宣傳組織を任務とす……」

風は益々激しく、雨戸を揺すぶり、夜氣は深くなり、室ン中の雛ッ子達は、熱心に眼を光らせてゐた。

新生活

一四ケ月

「おい、お内儀さん」

三番長屋へ、車を引つ張つて入つて來た折屋の小僧が、かじかんだ手で戸をたゝきながら怒鳴つた。

「お内儀さん」

高枝が立つて行つて戸を開けた。霜解けの泥をベタベタ引摺りながら、小僧は中へ入つて來た。──おお、冷めてゑ。

「何だい？　またいそぎかい？」

高枝は、入れ代つて戸外へ行くと、車の中の刷本を覗きながら、上から順に、一束づゝ持上げた。——御苦労さん、隨分重たいね——。
「あゝ、重てえさ、口絵が多いんだもん……」
小僧は框のとこの陶火鉢に獅がみついて、赤くなつた耳朶まで温めながら、目を細くして喋べつた。
「キングの折り込みだよ。ア……明日いつぺいだ」
明日いつぱいおどろいたね？　上り框に積み上げながら、高枝はちやくれたちび小僧のひしやげた顔へ、眼を丸くして見せた。今度は小僧が細い眼を剝いて怒鳴つた——おや？　お内儀さん丸儲だね、ヘエ——。
成程、赤い手柄をかけて、若い内儀は頰を靑ざめさしてゐた。——ヘエ、似合ふぜお内儀さん——。
「バカヤロ、ちやくれたことを云ふんぢやないよ」高枝は、小生意氣なチビ小僧の頭をなぐりつけた。その癖、急に顔を赧くしてまた怒鳴つた。——サッサと貸札をおいて、歸るんだよ——。
「アイ、アイ」小僧はそれでも、陶火鉢におつつけた頭を動かさうともしない。
「時にね、お内儀さん、あの先隣りのおつる婆さんとこは、今朝まだ戸が開いてねえが、病氣かね？」
高枝は、サッさと折臺代りの餉臺のとこへ刷本を積みあげて、病父の寝床の仕切に、小さい屛風を立てた。千川どぶに面した裏の引立窓から、弱い朝の日射しがこぼれ落ちた。
「あの婆さんは、スッカリ滅入つてんだよ。あの婆さんにとつちや大同印刷は、まつたくお太陽さまだつたんだからネ」
高枝は、折の寸法を測りながら云つた。——寝てんだよ必度、飯も食はないで、あの監獄みたいな工場で、ヤモリのやうに仕事臺にとつついてる夢でも見てるんだよ」
「わからねえ」小僧は身體を起しながら首を捻つた——變な婆だな、三百圓も貯めてる癖にしやがつて、何が不服で婆

か面白くねえんだらう――。

刷木のスミを合して丁付を爪で押さへて、竹ヘラでポンポンとしごいてから、高枝は小僧に背を向けて、チャンと坐り直した。

「働きたいんだよあの婆さんはね。せいぜいお前さんらの仕事でも廻してやんなさいよ」

「さうは不可ねえさ」小僧は自分が主人のやうに威張つた――ダツて、餓えかゝつてゐる家へだつて順でしきや廻んないのに、あの貯め込み婆んちだけ廻してやる譯にや行かねえさ――。

小僧は何度も首を振りながら、戸外へ出てゆくと、手荒くガタンと戸を閉めた。――おや晴たぜ――。

病父が眼を覺ましたらしく咳をした。高枝は指先と肩に、調子をつけながら、死人のやうに、冷たい刷紙をハタハタいた。病父が屏風の下から嗄れた聲を出した。

「太陽が射して來たけえ？」

高枝は手を伸して、引戸窓を少し押して見た。太陽が斜めに落ちて來た。――起きて見る？　風も無いやうだわ――

うん――病人は高枝の手に縋がみつくと、身體を半分起して蒲團の上に坐つた。――やつぱり陽がいい、ああ、一度は結ふものさ――

病父は、高枝の手拭を冠つた頭を見てボツボツと呟いた。

「孩村でなくたつて、世間でも皆さうさ、年がら年中、ひつつめ髮ぢや花聟だつて面白くあんめえ」

いやなこつた！　高枝は顔をしがめた。――おとつさん、よしなさいよ。いまも折屋の小僧にからかはれたばかりぢやないか――。

高枝はまた仕事を始めた。病父は汲んでもらつた熱い湯を啜りながら、湯呑を兩掌で抱いて、咽喉をゴロゴロ鳴らした。

「おめえのお母だつて、若い時分にやよく髷を結つたもんさ……おめえみたいに白粉ッ氣なしの花嫁なんて、昔なら離縁

ものだて……」

髷に結つて、赤ン坊こさへて……高枝は背筋に冷たい慄えを感じた。――いやなこつた――。

萩村が穿き換へて行つた汚れたズボンが、窓先の物干竿に、膨れた棒のやうにブラ下つてゐた。爭議前からモウまる四ケ月、妾はあの人との四ケ月の性生活の以外に何があつたらう？

朝の七時には、あの人は家を出てゆく。ズボンを穿いて、袢纏を着て帳面を持つて、鞄を擔いで――。晴雨に關係なく、この灰色の死にかゝつた長屋ぢうを、ゴミ箱浚ひと同じやうに。臺所から臺所を廻つて歩く、そして午後の八時か九時頃、ゲツソリ疲れた顏で歸つて來る――。

「おきみちやんが病氣で家へ歸つてるよ、うん、ヒドイ梅毒性の肺らしいんだ――榮公のとこは七拾圓も未收が溜つてるが、一文も入金しねえ、それかと云つて、彼處ぢやお内儀の葬ひ出したばかりだからな――」

あの人は、歸つてくると、飯よりも何よりも先に、グツタリした調子で、そんな出來事を毎日報告する。

「お湯にでも行つてらしやい」

最初の二ケ月ばかりは、あの人はよくめかした。お湯にも行き、髭を剃つたりしてゐた。しかし、近頃ではあの人は、だんだんそうでなくなつた。何處かでブランでもひつかけて來ると、まるでアナキスト見たいなことを云つて當り散らした。

「頭が痛い」

爭議當時にやられた頭の傷が再發したらしく、そんなときは、頭を冷やさせたりした。

あの人は、本を讀まなくなつた。勞農黨の機關紙も、組合の報告書も――あの人はだんだん運動に無關心になつてゆくのだわ――

太陽が翳り、彼女は凍えた掌を陶火鉢に持つて行つた。病父は咳をしながら、またゴソゴソと寢床に這ひ込んだ。

最近は、口もひけるやうになつた。あの人は陰鬱になり、近頃ではあの人は、獣のやうに眼を怒らせて、妾を殴らうとする！

おお、四ヶ月の結婚生活で、妾はあの人に何を得たか？ 動物的な性的晶結の他には、あの人が、燃え切れない石炭が、しだいに熱を失ひ、やがて依然のやうに黒くガサガサに冷え切つてゆくのを見たのだつたわ——！」

あの人は無口であり、同志だつた。元氣で頑丈で、あの人は妾に社会の見方を教へてくれた。それが爭議の終末から、寺石一派と衝突してから、まるでイタチに道を切られたやうに、あの人は貧いサンヂカリストに逆戻りしかゝつてゐる。

長屋の家ン中と同じやうに暗くなつてる——。

長屋おうの、呻吟を、悲鳴を——惨敗に終つた苦痛を組合に向つて呪咀にして投げかけてゐる長屋おうの叫びを、あの人は静悄に、毎日聴いて坐つてゐる。そしてあの人自身も行詰つて暗くなつてるんだ——。

——ネエお父つあん——！

彼女は、少しためらひながら云つた。

——あの人もね、父つあんと同じやうに、赤ン坊を欲しがつてんだわ——

破けた屏風の中から、すぐ嗄れた聲がした。彼女は、少し顔を顰めながら、昨夜、秋村が寝床で云つたことを考へてゐた。

——そりやそうさお前、子供は可愛いもんだ。秋村でなくたつて、俺だつて孫の顔が見て死にてえよ」

赤ン坊は可愛い——妾だつて赤ン坊は可愛い、妾は亡くなつたお加代と一緒に、人形の首ッ玉に、赤い着物を着せて、毎日負ぶつて遊んだ子供時代があつた。——あの人は昨夜寝床で、痛む頭を揉んで貰ひながら、小さい聲で話した。

——俺は何だか、赤ン坊が産れたら……といふやうな氣がする。そしたら、この灰色の、ガサガサした世界が、も少し働きよくなるかも知れない。俺は、いま毎日眞ッ暗なところを歩いてゐる。息が塞がりさうだ！ 誰かこの前のやうな奴を

たゝき破つてくれるもの――お前、赤ン坊産んでくれないか！

あの人は感傷的になり、眼に涙さへ溜めてゐた。妾の手もあの人の手も慄へてゐた。妾達は夫婦だ――昨夜ほど、あの瞬間ほど、四ヶ月の生活で、そう感じた事は無かつた。妾はのめりさうだつた。危なく頷きかけた――しかし妾は自分をおさへて、やつと……拒んだ。

「だめ……ねえ、だつて妾達は、そんなときぢやないでせう――！」

しらじらしい辯解――自身にすら嘘ッパな感じのする辯解を、妾は何度もくりかへしたんたわ――あの人の眼、失望、憤怒、自嘲、憐愍――妾は仕方なくアヤすやうに晴やかなければならなかつた。

「ねえ、妾、明日髷に結つてみるわ、ねえいいでせう」

しかし何て重ッ苦しい頭髪だらう。生れてはじめて結つた丸髷――いいわ、とても素敵だよ――隣りのお内儀に褒められて、ツイ鏡を覗いて見た位の、可笑しな氣持もあるけれど――若しか、平ちやんや富ちやん達に見られたら、妾何て辯解するんだらう？

「冗談ぢやない」

男に媚びる氣持――媚びて自分も愉快になれる氣持――おお、妾は大變なことをしてゐる！

妾達は解放されなければならない！　飛んでもない！　そして妾はあの人をあまやかしてはならない。それでなくてさへ、あの人は立止まらうとしてゐる。誰が聾ッ！

「お父つあん、妾あ云つとくわ、妾あ金輪際赤ン坊なんて産まないから……」

誰が聾ッ！　赤ン坊産むのは、女の權利だ。自由意志だ！　妾達はいま赤ン坊どこの騒ぎぢやないんだ。×んでゐてはならないときなんだ!!

妾はあの人をあまやかしては不可ない。男達はみなそうなんだ。腑に結つて赤ン坊を負つたら、男はすぐ我儘になるだらう。あの人は今だつて妾を毆り兼ねない。妾は赤ン坊と一緒に、へつつい の傍で生涯を、あの男の奴隷にされなきやならないだらう！

妾達は解放されてない。妾達が赤ン坊を産むときは、妾達が自由に、男の手を借りずに育てられる時代でなんだ！

彼女は立ち上つて、手鏡を持つて來た。そして鋏をとりあげて、まだ結ひ立ての元結に突つ掛けたとき、表の戸がガラリと開いた。

「御免下さい」

高枝は土間へ立つてゐる洋服の男を見ると、とたん、厭な顔をした。此の男は×××の××だつた。

「近頃は、景氣は如何です」
いかゝ
カクシに手をつつこんだまゝ、色の黒い口鬚の男は、ニヤニヤして云つた。不承不承に立つていつた高枝の肩越しに、家ン中を覗きながら、

「御新婚で、ずいぶんお樂しみだつてぢやないか、へゝゝゝ」

××は、丸腑を無遠慮にチロチロ見た。彼女は此の××に恨みがあつた。死んだお加代の顏が、生々しく甦つて來た。

「何か用事なの？」

彼女は、顏ぢうを險惡にして投げつけた。

「いいや、まあそんな顏をしないで……ときに、例の十八日會はどうしたかね？」

彼女は愕ッとしたが、顏色に出さなかつた。畜生ッもう嗅ぎつけやがつた！

「どうもしないわ、あれが惡いの？」

「いや、悪いつてわけぢやないが……、萩村君は消費組合かね？」

高枝は首だけで肯いた。――これぢやモッとしつかりしないと、ドヂを踏むぞ――彼女はそう考へてゐた。

「この次の十八日會は屆出てくれ、でなきや――いいか、解散だけでは濟まさぬぞ――」

二人は閾越しで睨み合つた。

「一昨日來やがれ！」

××の後姿が、長屋の路次を曲るまで見送つて、彼女は戸を閉めると、また手鏡と鋏を持つて坐つた。

「おめえ、壞しちやふのかい？」

屛風の中で、病父が云つた。

「ええ、妾が馬鹿だつたのさ、お父つあん……」

元結がプッツリ切れて、髷の根がガックリ落ちた。髷の中味の髷形が、醜るしくころげ出た。

「ねえ、お父つつあん、妾あね」

くるくる髪を纏めて、ピンで止めながら、

「萩村が、また髷を結へと云つたら、こんどはソックリ頭髪を切つて、斷髪になつちやふわ、ホホホ」

彼女は笑ひながら、油に染みた手を洗ふために、臺所に降りて來たとき、フト氣たゝましい聲を聽いた。

「大變だ！　みんな來とくれ、大變だ!!

高枝はビックリしながら、戸の外へ飛び出すと、隣りのお内儀が、また頓狂な聲で喚めいた。

「首を縊つてるよ、おつる婆さんが首を縊つてるよう――」

11　奴隸根性

三番長屋の、どの家からも、慌てた人々が駈け出して出た。

「首を縊つてんだよ、おつる婆さんが——」

隣りの越後出のお内儀は、懐ろの赤ン坊を、ズリ落しさうにしながら、口から泡を飛ばして、一番先に駈けつけた高枝の胸倉を掴んだ。

「ほら、あれ、あれを見な——」

いゝさんの外れた戸口が、閾からはづれて五寸ばかり口を開いたまゝ、斜めに歪んでゐた。内部は真ッ暗で、ヒンヤリした空氣が、覗き込んだ高枝の鼻ヅラを撫でた。

「見えねえ、サッパリわからねえ」

背を押し分け、高枝に代つて覗いた筋向ひの粂さんが、赤くたゞれた眼をシヨボつかせて云つた。

内部は真ッ暗であつた。閉められたまゝの裏の引窓の割れ目から、わづかな光線が、黄色い壁に落ちて、ホンの底明りに、二本の足首が、フラフラと宙に浮いてるのがわかつた。

「戸を打ちこわせ、戸を——」

ガタガタ揺れた戸が、閾からはづれてしまふと、風を煽つて内部に倒れた。

「…………」

人々は窒息したやうに、息を呑んでしまつた。おつる婆さんは、黒いボロ切れのやうに、室の隅ッこの柱に、ブラ下つてゐた。

「おつるさん……」

隣り同志で、一番親しかつた越後出のお内儀は、疊の上へあがつてゆくと、ボロ切れを引ッ張らうとした。

「さ、さわつちやいけねえ」

婆さんが、お内儀を背後から引き戻した。——誰か交番に行つて來い——。

皆、家ン中に入つて來た。一人暮らしの婆さんの家は、室の隅々まで冷々としてゐた。

「もう、助からねえな、こう鼻汁を垂れてちや——」

婆さんは、芯の喰み出た褞袍の内懐ろに手を突つこんで、胡麻鹽頭を振つた。人々は顏を反向けた——根のゆるんだ頭髮がボサ／＼に垂れかゝり、氣味惡く硬直した横顏が、壁ぎわにハリついてゐた。越後出のお内儀は、婆さんの背に顏をおつつけて啜りあげた。

「おつるさん、おめえあまあ何だつて、こんな眞似を……」

其處へ、袋貼りをしてゐた初つあんも、友達だつたおたつ婆さんも、消費組合の店から駈けつけた秋村も顏を出した。

「おめえ……おめえ……」おたつ婆さんは、眼が涙で遮ぎられ、死人の顏がよく見えかつた——やつぱり、首縊つたんだなあ——

皆の足許に、足継ぎにしたらしい石油箱が倒れてゐた。そして室の隅に、婆さんの大切にしてゐた郵便貯金の帳面を包んだハンカチと、眼ざまし時計と、珠數とが並べられてあつた。

「そのお婆さんには、息子が一人あつた筈だわよ」

背後から、高枝が云つた。

「さうだよ、北海道の札幌に出稼ぎしてゐるちう話を聞いたが……」

隣りのお内儀が、すぐ憶ひ出して云つたが、札幌の何處だかは分らなかつた。眼ばかり拭いてゐたおたつ婆さんが、そんとき泣きじやくりしながら云つた。——その息子も、行衞不明になつて、こゝんとこ二年ばかり音信もねえつて、おつるさんは泣いてゐたよ——。

其處へ、正服と私服の二三人が、人々を押し分けて入つて來た。

「さあ、皆戸外へ出ろ」と正服は、兩手をあげて皆を追ひ出した。——お前達は、身寄りの者か？

「いんや」榮さんは、たゞれた眼をショボつかせて云つた——旦那、この婆さんは一人殺しだて、身寄りなんか此の長屋中にやありやしねえ——。

榮さんと、越後屋のお内儀と、高枝だけが家ン中へとめおかれた。私服は手帳に一々記しながら榮さんに訊ねた。

「ヘエ、此の婆さんは、寅年生れの五十二で、ヘエ、あつしが使ひ走りの小僧だつた時分、この婆さんはモウいつぱしの解版女工だつたんで——」

榮さんは、何でも知つてるやうに答へた。——あの爭議で大同印刷を馘首になつたんで——

警察醫が入つて來た。死體は柱から下ろされて、型通りに檢べられた。刑事は家の隅つこのハンカチ包みを開けて、郵便通帳を開けた。爭議の終りに受取つた二十年勤續の退職手當參百八拾何圓か、ソツクリ預け込まれたまゝであつた。

「何か病氣でもあつたか？」

刑事は首を捻つて訊いた。刑事には自殺の原因が分らなかつたのだ。榮さんは思案深く、眼をシコボつかせて云つた。

「旦那病氣なんかねえが、近頃はヒドクぼんやりしてはゐました。此の婆さんはね、旦那」榮さん自身には婆さんが何故首を縊つたかゞハツキリ判つてゐた——此の婆さんは働くところがなくなつたんで、首を吊つたに違ひねえです——

この婆さんは、二十年もの永い間、あの工場ン中で暮して來た。監獄のやうに頑丈なコンクリートの壁の中で、婆さんが大事にしてゐた眼ざまし時計と同じやうに働いて來たのだ。婆さんはあの工場の煉瓦の塀を透して、金網の窓の中で、世界を樂しんで來たんだ。煉瓦塀の中、金網の窓の中で、あの婆さんは生活を保證され、其處で飼ひ馴らされて來た——。

自分ですら急に工場を追つぽり出されて、頭腦は中心を失ひ、胃腸をこわしてしまつたやうに、このお婆さんのためには

工場ン中は、お太陽さまだつたのだ!!

　室ン中は、寒氣と消毒藥の臭氣で、息苦しくなつた。高枝は引き窓を押し開けた。

「そうだ、奴隷根性が首を縊つたんだ！」

　高枝にも、榮さんの云ふ事がよく判つた。自分達には――このおつる婆さんや、家に寢てゐる病父や、この榮さん達や――そして自分にすらも――。

「この奴隷根性が、飼馴らされた卑屈な傳統の血が、妾達階級の大多數に巣喰つてんだわ――」

　彼女の心の底で、ピリッと、この死人へ泣いてやりたい卑屈な感情が疼いた――。

「馬、馬鹿な」

　彼女は、窓から、ペッと唾を吐いた。

　警察の者は引揚げていつた。長屋ぢうで一晩を通夜することになつた。

　夜になつて、人々が集つて來た。榮さん、初つあん、おたつ婆さん、越後出のお内儀、高枝達夫婦――おつる婆さんの生前の友達が、十人あまり室の隅々に坐つた。

　榮さんが、荒削りの棺に入れられた死人の前に、らうそくをたて、鐘をたゝいた。人々は淋しく首を垂れ稱名を唱へた。

「可哀想に――よく働いた人だつぺ。飲んだくれの亭主には早く死なれるし、伜は出稼へ行つて行衛不明になつちまふし、――この婆さんは、工場が亭主で、預金帳が伜で暮らして來ただべよ」

　おたつ婆さんが云つた。この家ぢうの失業者達は、淋しく棺を見やりながら、おたつ婆さんの言葉に背いた。

「こんなに、こうやつて、働きたくも働かれねえで、ボンヤリしてなきあならねえほど辛れえこたあねえ」榮さんがしみぐと云つた。――俺ア婆さんがボンヤリしてゐるから、無理に温泉に行つてみろとすゝめたんだよ、うん――金より命

が大事だから四五日行つてみなと勸めたら、思ひ切つて出掛けて行つたが、二日目に歸つて來たつけが――そして益々眠られなくなつたと云つてたよ」

榮さんは、惡いことをしたやうに眼をシヨボつかせた。

「成程、俺にしたつて溫泉へ行つたからつて落ちついてゐられねえ――百圓やるからと云はれたつて、このオチオチしない氣持、何だか、渡瀨がしらちやけたやうな心持が癒るもんぢやねえからな、惡いこと勸めたい――」

首を垂れた失業者達の胸に、榮さんの言葉が、ひしひしとこたへた。彼等は益々淋しい顏になり、うちひしやがれたやう俯向いた。

彼等の頭腦に、爭議前の工場の生活が甦つて來た。たまにでも酒も呑め、活動寫眞の一つも覗け、工場の仕事臺にとりついて、眼の一つも瞑つてゐれば、足は凍え、手はかじかみ、五體は疲れ切つても、何時か時計は終業時間のところまで進むのだ――おお、終業のベルの魅力――生活は保證されてゐたのだ――。

この老失業者達の胸からは、もうすつかり火が消えてた。若い連中の燃え上る反抗の熱情に、ホツカリ移り火したケシ炭のやうに赤くなつた火が、いまはしだいに消え、灰のやうに白ちやけ、饑じい思ひをしなかつた工場生活の永い追憶だけが殘つてゐた。

「わるい夢を見たもんさ」

初つあんが、袋貼りの糊でカサカサになつた掌で、髭ツ面を撫でた。――秋村さんのめえだが、おまけに爭議團の幹部は、金を貰つてどうのかうのと云ふ評判さへあるんだし――

爭議後の長屋では、會社の逆宣傳が、反動の潮先に乘つかつてゐた。秋村は憤つて初つつあんを睨みつけた。――冗談云つちや困るぜ初つつあん、そんな噓つぱちを――

「そりや當さ、萩村さんが身を持つて證明してらあ」爰さんが、すぐとりなした。しかし、とりなし切れないものが、まだ這ン中にあつた。二十年勤續のこの棺桶の中の婆さんまで懲戒解雇にならなきあならないほど、爭議は負けつちまつたんだ！

　老失業者達には、大同印刷と8勞働組合の二つの喧嘩より他には何も判らなかつた。大同印刷の背後に、印刷同業組合があり、それに財閥關係が結びつき、更に政黨關係、內閣の政策までが、自分の××のまはりにあることが判らなかつたやうに、8勞働の背後に全國評議會があり、そして勞働者農民黨とどんなに有機的に結びついてゐるかもわからなかつた。彼等は爭議中、陣營の背後で、モウ此邊で止めたら――そんなことを呟いてゐたのだ。

「最初の解決條項は、二百人の馘首で、二度目は五百人、三度目はとうとう全員さ」

初つあんは呟いた。モウ此の男は反動にさへなつてゐた。二百人のときに讓歩すれば、せめて二度目に眼をつぶつて我慢すれば……。老失業者達の眼はこう云つてゐた。

　ろうそくの火がゆらめき、越後出のお內儀の懷中でも、おたつ婆さんの背中でも、子供が眠りこけ、空氣は重く沈み、寒氣が人々の膝から這ひ上つて來た。

　而も、萩村でさへが、勞農黨の中に、プロレタリア最高の×が指導し、全國的に否××××の鍵を握つてゐるやうとはハツキリ知つてゐなかつたのだ！

　彼は長屋ぢうの呻吟が、暗い空氣が、そしていままた濃厚にされた奴隷根性が、心の底でカスのやうに溜つてゐた。この氾濫する失業者達の呻吟を、憤激にして支配階級にタヽキつける道を開けてやることが、彼自身の奴隷根性で遮ぎられてゐたのだ！！

　爭議當時衝突した寺石の言葉が、このサンヂカリズムの殼を背負つた男の前に、橫暴に大手を擴げてゐた――政治闘爭

化した濶い戰線の大局の勝利のためには、一爭議團の經濟的勝利は犧牲にされても仕方はない――。

――馬鹿にしやがつて――彼の奴隷的人情的正義論が彼をより盲目にしてしまつた。

高枝は默つて坐つてゐた。――おお、此老失業者達と、平ちやんや富ちやん達とはどれだけの相違だらう！　あの小僧ッ子達も、此の人達から生れて來たのだわ、しかし、あの小僧ッ子達はまるで違つた時代に生きてゐる!!

夜は更け、らふそくは燃えつくし、人々は首を垂れて追憶しては、死人の前に鼻を鳴らした。

「モウ止しませうよ、馬鹿々々しい！」

我慢し切れないで、高枝が不意に云つた。室ぢうの人々は驚いて高枝の顔を見つめた。

「何が、悲しいもんか――」高枝は、ヒステリカルに叫んだ。「妾にあ、却つて滑稽だわ、この婆さんは、この婆さんの奴隷根性が首を縊らせたのだわ」

彼女はキョトンとしてゐる失業者達を睨みつけて怒鳴つた――何が悲しいんです。あんた達は此の婆さんの死を悲しむ前に、此の婆さんは首を縊るまへに、何故怒らないんです。何故怒鳴らないんです。俺達からパンを奪つた奴は誰だ？　この婆あに首を縊らせた奴はどいつだと！

萩村が驚いて立ち上つて來やうとした。彼女は素早く立つて、夫の前へ進んで行つて怒鳴つた。

「あんただつてさうよ、あんたは奴隷根性に中毒されてゐる。妾達階級の胸の中には、妾達の父のそのまた父の、母のそのまた母の、永い間の被壓迫階級の、奴隷根性の血が巣喰つてゐるんだ！　妾達はそれを投げ棄てやう、數千年の××を破つて××るために、妾達の奴隷根性を、この婆さんと一緒に×むつてしまへ!!」

作者附記――本稿と、長篇「太陽のない街」の終局との間に「一、解散、1足袋、2論爭、3濱松行」の部分が記錄紛失のため未脱稿になつてゐますので、本稿を先に發表することになりました。その點讀者諸賢にお詫びしておきます。（以上）

一



高架線

横光利一

　まもなく高架線となつて横たはるであらう高い漆喰の平面、――その平面を支へる鐵の角柱の集りが、地上に長い洞穴を造つてゐた。夜になると、此の鐵の洞穴は雜閙した市街の中央に眞暗な線を引き始める。市街をうろつく浮浪人らのいくらかは、風に吹き寄せられた塵埃のやうにいつの間にか此の洞の中へだんだんと溜り込んだ。

　雨が降ると洞の中は滿員になつた。彼らは柱と柱との間に重なつた木材の上へ、濡れた雜巾をぶつけたやうに倒れてゐた。肩を擦り合せて寢てゐる着物が、どちらの着物か分らなかつた。泥足の間から、まだ眠らぬ顏がときどき夜警の足音をききつける。下の木材やコンクリートの高低に從つてうねる襤褸の中から、ここには似合しからぬまるまる肥えた太股の皮膚が、芽のやうに露れてゐた。彼らの誰もは、

動かうともしなければ、話さうともしなかつた。ただ深夜になると、それらの幽塊の間に挾まれた新聞紙の乾いた部分が、ちくちく濡れた部分に食はれていくだけだつた。

浮浪人達の中には、此の鐵の洞を根據として動かぬ者が三十人ほども集つてゐた。町の夜警の高助は洞の中から彼らが動かねば動かぬほど助かるのだ。町會は警察へ浮浪人を追へと迫る。追へば彼らが塊つてゐるより危險である。捨ててをけば、町の女や子供の夜遊びも危くなる。そこで町會は紹介所から廻されて來た浮浪人の高助を拾ひ上げて來て、夜警にした。——彼は芥虫の老人で歩くと今にも肩根の生えさうな恰好である。

高架線の洞穴を挾んで高助の喘息友達の保市がゐる。保市はやがて取り拂はれるであらう高架線の踏切番だ。二人は年が三つ違ふがどちらもだんだん子供のやうになつて來た。高架線が眼の前で出來上れば、保市も浮浪人の中へ落ち込むより仕様がないのだ。

高助は洞穴の前を廻つて來ると、踏切の保市の箱の中を覗いてみた。ブリキ箱の火鉢の上で、凹んだ藥罐の尻が灰の中へ坐つてゐる。保市は青い旗を持つたまま居眠りの最中だ。

「おい、起きなよ、終列車はまだぢやねえか。」

貨物驛に集つた眞黒な貨車の中へ、雨に打たれたレールの群れが刺さつてゐた。

「おい起きてなつて、危ねえよ。」

保市は眼を醒すと、いきなり飛び出してウインチを解き出した。

「おい、おい、終列車はまだぢやねえか。」

すると、保市は暫くぼんやり霧の方を見てゐてから、急にまたウインチを捲き上げた。貨物自動車が深夜の泥水を跳ね

上げながら。鎖の下をかひ潜つて疾走した。一人の立つてゐる足の下では、高架線と交錯してゐる地に、鐵道の作業場が、大きな穴を開けてゐた。

——高助は拍子木を叩きながら、ガードの鐵の中へ這入つていつた。雨が脊虫の合羽の上で跳ね返る。彼は歩きながら、洞穴の中の浮浪人を嚇しつける恰好ばかり考へるのだ。彼は浮浪人達が汚いと云つては怒る。道へ足が出てゐると云つては怒る。頭に魚の骨がたかつてゐると云つては怒る。とにかく、彼には怒ることだけが此の世の何よりの樂しみになつてゐるのだ。

しかし、彼の一番恐れたのは夜中にときどき起る喘息の發作であつた。それは長い浮浪生活から成長させた彼の唯一の不動產だ。一度發作が起り出すと、番小屋の床几の上から轉がり落ち、庭の上を這ひ廻り、火鉢の薬罐を蹴倒してもとまらなかつた。それが長く續くと、昔を忍ぶかのやうにときには街路の石に抱きついたまま、朝まで咳き續けることがあつた。保市と友達になつたのも、實は此の街路の石からだ。

浮浪人の中には一人若い女が混つてゐた。彼女は男を選ばなかつた。觸つた男が忽ち彼女の餌になつた。一人の老人は鬚を垂らして娘と孫とを連れてゐた。胸から肩へ帽子を幾つも連ねたまま、いつも洞穴の口に立つてゐた。マッチの空箱ばかり集めてゐる男、女の化粧道具を小脇にかかへて柄のついた鏡ばかりを覗いてゐる男。炭で地べたに繪ばかり描いて喜ぶ男、乞食の夫婦、必要以上に着物を身につけ、いつも片手に下駄を持つてゐる老人、五分をきにモルヒネ注射をする大工——洞穴の中は、拾つて來た鍋やタオルや殘飯や、男達の延びるに任かせた頭髪で掃溜のやうな匂ひがした。しかし、この洞穴の汚さは、町の汚物を集めて來た汚さだ。町の裏通りの不潔さは絶えず彼らに洗はれてゐるのと同樣だつた。それにも拘らず、町にとつて彼らの集つてゐると云ふことが、一層の不潔となつた。町會は高架線を建設した鐵道省に責め

つけた。鐵道省は警察に注告した。すると、警察は町を憐むよりも、此の都會の田虫のやうな浮浪人を憐んだ。浮浪人達は、北風が吹けば柱を盾にして南を向いた。南の町が雜鬧すると、顔をそ向けて北に廻つた。彼らは柱を中心に絶えず生活を移動させながら、日々默つて暮してゐた。食物がなくなると、浮浪人の中の若者は魚や香物を町から兩手に持つて來て、老人や子供に分けてくれるのだ。こゝでは飢えるものは誰もなかつた。働いて食ふものは一番馬鹿な人間だと思つてゐるかのやうに、たゞ彼らは動かないだけであつた。朝になつて、近くに見える職業紹介所に並んだ勞働者の群れを眺めてゐても、動き出すものは一人もなかつた。夕暮れになつて、霧のかゝつた鳥居の下を緋鯉のやうに泳ぎ出す藝者達の群れを見てゐても、洞穴の中は靜まつてゐた。しかし彼らは、夜警の脊虫の高助だけは、恐れねばならなかつた。彼は用もないのに出て來ると竹で地べたを叩きながら、怒鳴り立てるのだ。浮浪人は高助を恐れるよりも、高助の連れて來る警官が恐いのだ。

晝になると、此の靜かな洞穴を中心にして、上と下との世界は最も活動を續け出す。上は高架線の作業場で下は地下線の作業場だ。高架線では、數臺のコンクリート混合機が砂利と砂とセメントを食ひながら、絶えずねば／＼したコンクリートを吐き出した。一輪車のネコトロが樽と樽との山の間を、縱横に辷つていく。セメント銃（ガン）が漆喰の窪みを狙つて、コンクリートを吹きつける。杭打ちの煤烟とセメントの粉が、追つ驅け合つて渦を卷く。壓搾機のモーターの爆音と、リベッティングの釘打ちと、投げつけられる鐵材と、――攻め上つて來る音響の中で、起重機の翼が悠々と廻轉する。――

踏切番の保市は踏切の箱の中から、起重機の廻る翼を見る度に、ちり／＼首を斬られるやうな思ひがした。

「いやな奴ぢや、お奴は魔物ぢや。」

或る日、保市は高架線を見上げながら高助に云つた。

「お前さん、首になつたら、どこ行きだ。」

「俺ア、首になんぞならねえや。」

「ならねえたつて、お前、あれが出來りや、お前も俺もゐられめえ。」

「ならねえ、ならねえ。」

龜のやうに脊中を張ると急に高助は歩き出した。が、またくるりと廻つて戻つて來ると、

「ならねえぞ。」

「ならねえたつて、考へて見な。線が出來りや、お前も俺もおけらぢやねえか。」

高助は縮の下から起重機の羽根を見上げたまゝ、默り出した。彼は線が出來ればどうして首になるのか、幾ら考へても分らなかつた。

その夜、彼は一眠りしてから夜警に出た。月が両丁にあたり出すと、ふと、昼間保市に云はれた言葉を思ひ出した。――待てよ、線が出來ると、首になる、と――

彼はまた急いで踏切りへ出かけていつて、箱の中へ首を突つ込むと云つた。

「おい、首にや、ならねえぞ。」

箱の中では、保市は丁度喘息の發作が起つて咳き込んでゐるときであつた。高助はぼんやりしたまゝ、長く延びて慄へてゐる保市の咽喉を眺めてゐた。すると、急に自分の息も詰つて來た。

「おッ、こりや、」

と彼は云ふと、箱から顔をひつ込めた。が、迫つて來る保市の咳が脊中へ乗り移つて來た。彼は片手で箱の戸を掴んだまゝ、最初の咳を喰ひ留めやうとして延びたり縮んだりし始めた。彼は周章して湯呑を探した。と、とう〱引き摺り込

まれて彼も一緒に咳き出した。二人は暫くお辭儀の稽古をしてゐるやうに頭を擦り合しては、離れてゐた。ぜい〳〵鳴る咽喉の笛が、一方が停ると、また一方が鳴り出した。保市は高助の脊中の瘤を抱きかゝへた。高助は、突きかゝるやうに頭を保市の腹へくつつけた。保市は湯呑に湯を注ぐとぶる〳〵慄へながら、高助の口の傍へ持つていつた。

「飲めよ。飲めよ。」

云つてゐるうちに、波を打ち出した高助の瘤に突き上げられて、湯はこぼれた。高助は保市の胴に抱きついたまゝ、「水、水、」とうなり出した。保市はまた湯呑に湯を注ぎかけやうとすると、今度は自分がやられて揺れ始めた。彼は横に羽目板へ頭を擦りつけながら、俯伏せにならうとして、腹の上の高助を蹴りつけた。高助は保市の腹の上から辷り出すと、踏み込んだまゝ、椅子の足を抱きかゝへた。

保市は高助の瘤を踏臺のやうに踏みつけながら、椅子の上へ圓くなつた。二人は一つの椅子を中心に、下と上とでかはる〳〵咳き續けた。ぶく〳〵二つの脊中が波を打つた。咽喉が伸縮しながら、絞るやうに、鳴り續けた。すると、急に高助は激しく襲つて來た咳に揺られて、立ち上つた。椅子の上の保市の腰が、高助の頭に突き上げられた。保市の身體が椅子と一緒に、床の上に轉がつた。藥罐が火鉢の上で、顚覆した。灰が箱の天井を突き拔くやうに、舞ひ上つた。高助と保市はまた同時に灰の中で、咳き出した。二人は箱の入口へもたれかゝつたまゝ、脊中を互に撫で合つた。しかし、それでも二人の咳きはとまらなかつた。二人はいつの間にかまた別々に放れると、地面にへばりついて咳き始めた。

間もなく、保市は鎖の傍まで這ひ寄つて、ウインチを解き出した。貨物列車が眞黑な塊りのまゝ頭の上を飛びぬけた。—暴風のやうな音響が遠ざかるに從ひ、その後から、また保市と高助の咳きが、盛り上つて來た。

二人の發作の停止したのはそれから二十分もしてからだつた。汗に濡れた顔面に灰を浴びたまゝ、まだかすかに鳴る咽喉の笛を聞いてゐるかのやうに、どちらも首を垂れて默つてゐた。高助はまたこれから夜警に廻らねばならぬのだ——

「俺も、もう直きに死ぬだ。」と彼は云ふと、自分の小屋の方へ歩き出した。

高架線が出來上ると浮浪人がゐなくなる。浮浪人がゐなくなれば、高助に用はない。何ぜ用がなくなるのか。此の簡單なことが高助に分つたのは、それから一週間もしてからだつた。彼は町の酒屋の番頭から説明を訊いたのだ。その夜、高助は夜警小屋の中で毛布を冠つたまゝ、算術を考へるやうに考へ出した。すると、だん〳〵浮浪人に養はれてゐるのは、「俺だ、」と云ふことになつて來た。彼は毛布の中でいきなり唾を吐き出した。が、無暗に悲しくなると飛び起きて保市の所へ出かけていつた。

保市は地面にぺつたり顔をくつゝけながら、板の隙間から地下鐵道の作業場を覗いてゐた。高助は保市の高く今にも突がつた咳き出しさうな桃尻を見つけると、何も云ふことが出來なくなつた。そのまゝ保市の傍へ蹲み込むと、彼も一緒に穴の底を覗き出した。穴の中では、露出した埋設物の鐵管が、肋骨のやうに絡まり合つてぢい〳〵音を立てゝゐた。泥水の湧き上つて來る下の方では、黒々とした古い土の断面の縞の中で、手足を壊された骸骨の頭が半面を仰向けたまゝ、靜まつてゐた。

「今日はこれで五つも出た。あれは墓だとさ、」と保市は云つた。

「墓か。」

墓なら興味がないと云ふやうに、高助は立ち上つた、しかし、保市は蹲み込んだまゝ、

「見ろつてよ、お前、あの墓から、小判が十三枚飛び出たさうだよ。」

「小判か。」と云ふと、高助はまた急いで穴の中を覗き込んだ。彼はよく見える板の隙間を取らうとして保市の頭をぐん〳〵隅へ押しつけた。二人の口から吐き出す息が湯氣になつて、板の木目の上から跳ね返つて來た。

「小判はねえぢやねえか。」と高助は云つた。

「ねえさお前、今頃ありや、俺だつてとつちまアな。」

高助は不平さうに立ち上ると、青く空のクレインの姿を眺めてゐた。

「お前は首にならねえのか。」と突然高助は云ひ出した。

保市はのろのろ起き上つて膝の塵を拂ひながら、

「しやうがねえさ、首にならねえたつて、此の年ぢや、知れてらアな。」

保市が箱の中へ這入らうとすると、高助はそのまま眞直ぐに自分の小屋の方へ戻つていつた。

彼は歩きながら、雲を呼ぶやうに小屋から逐放される日の幻想ばかりを呼び集めた。彼は通りかかつた町の男を見ると、ひよこりと頭を下げて笑ひかけた。洞穴の前まで來ると、その暗い洞は、いつもと違つて俄に大きく、新しく見え始めた。

彼は中へ這入つてみた。ぼろぼろに錆びたトタンを立て廻した中で、四五人の浮浪人が首を集めて蹲んでゐた。セメントのくつついた古い機械の間で、モルヒネ患者が慄へてゐた。高助は柱に手をつきながら奥の方へ廻つてみた。草のやうに茫々と繁つた頭髪のより集つてゐる中で、魚の骨を舐めてゐる女の兒の唇が、ときどき街路から輝く自動車のヘッドライトに浮き上つた。材木だと思つて乘ると、古下駄の山が、崩れ出した。高助は洞穴の中の顔が自分を見上げながら、いつものやうに柔順に警戒してゐる空氣を感じると、愉快になつた、と、不意に、彼の足へ、ぶくぶく膨れた腕が巻きついた。

「こりや、放せ、放せ、」と彼は云つた。

膝へ擦りよせて來る顔が生温く鰻のやうに昇つて來た。高助は足をあげながら、柱の間で傾くと、身體がだんだん、低くなつた。彼は彼を下へ引き摺り降ろさうとする相手の頭を、踏へながら、ばたばたした。足の間で、鞍のやうに盛り上

つて來る顏が、しつこく、彼の手首を舐め始めた。彼は動きとまると、相手の顏を覗いてみた。が、いつまで待つても射し込まぬヘッドライトにいらいらし出すと、マッチを擦つた。明るくなつた足の下から、眼脂を溜めてにたにた笑つてる女の顏が、舌を出したまま、延び上つて來た。高助は痫をぴつたり鐵の柱へくつつけると、肩を縮めた。破れた着物の裾から投げ出された女の足が、穢の擦り落ちた皮膚の部分を鱗のやうに生白く浮き上らせ、ちりぢり、高助の方へ動いて來た。高助の首は夜警の體面を忘れて女の足と一緒に、延び始めたが、指もとまで燃え上つて來たマッチの火に手を燒かれると、彼は狼狽へて叫び出した。

「こりや、お倉、放せ、放さんか。」

高助は足踏みしながら漸く女から放れると、洞穴の入口まで逃げ出て來た。彼はそこで、苦しさうに息を吐き出しながら、更めて洞の奥の方を覗いてみた。

「あ奴は、蛇ぢや、」と暫くしてから彼は云ふと、急ににこにこして小屋の方へ戻つていつた。

洞の中では、職業紹介所からあぶれて來た老人達が、だんだん多くなつて來た。しかし、浮浪人らは仲間が增しても減つても同じであつた。吹き込んで來る煤烟の中で、お洒落は平鏡を持つて笑ひながら、終日自分の顏を覗いてゐた。畫家は馬の糞ばかり畫いて樂しんだ。モルヒネ注射の大工はふらふらしながら、針で腕を刺しそこねてはひよろけてゐた。その間に挾まつた帽子屋の老人は冷える周圍の漆喰のために、喘息を起し出した。しかし、喘息は帽子屋だけではなかつた。後から混つて來た老人達は殆ど大半が喘息にかかつてゐた。夜中になつて、柱の隅から誰か一人が咳き始める。すると、急にあちらこちらの闇の中から、風のやうに喘息が卷き起つた。一度起ると、老人達は朝の太陽が昇るまで、下の材木を抱きかかへて咳き續ける。さうして、漸く咳きがとまつた頃になると、職業紹介所の前でひしめき合ふ勞働者の逞しい群

が、鐵柱の間から見え始める。昨日あぶれた洞の中の老人達は今日こそと思つて出かけていく。すると、またはぢかれて落とされる。落とされた老人達は作業場の焚火の傍で圓陣を作りながら、ぼんやり若者達の雇れる姿を眺めてゐた。かうしてそこで落ち合つた老人達は仲間となると、洞の中へ日日新しく流れて來た。だんだん洞の中は老人で詰り出した。

これらの老人達の頭の上では、進行する高架線が一日に六百樽のセメントを、呑み込み出した。五臺のコンクリート混合機が、十臺になつた。巨大な鐵塊の横腹で締めつけられるリベットが、終日終夜、火を噴いた。その下の店々では、こぼれる火屑で店頭の日覆を焼かれて町會へ訴へた。掘り返される道路の惡さのために、商品が賣れなくなつたと云つては、いつも、また町會に膨れて來た。しかし、町會では、進行する高架線と地下線の動力を阻止することは、不可能であつた。町會は鐵道省には負け續けてゐなければならぬのだ。

或る日、夜警の高助は町會から呼び出されると、突然、そのまま首になつた。理由は高架線の下の浮浪人がますます增加して來たからだと云ふ。高助のごとき老人では、最早や彼らを警戒することが出來なくなつた——高助は洞の中で增加して來た老人の群れのために、投げ出されたのと同樣であつた。

それにしても高助にはこれはあまりに意外だつた。高架線が出來れば首にはならう。しかし、今頃突然、彼の小屋から投げ出されやうとは——

彼は毛布をかかへて外へ出ることだけは、漸く分つた。彼は保市のゐる箱の前へ來た。が、彼を見ると、急に保市の姿が遠く見え出した。彼は保市には默つて箱の前を通り過ぎると、職業紹介所の前へ來た。しかし、そこには馬が一疋、曇り日の下で靜に首を垂れてゐるだけだつた。高助は暫く、馬の尻から落ちる糞の重なりが、盛り上ると崩れる形の面白さに見惚れながら、ぼんやり下を向いて立つてゐた。彼の後の方から騒ぐ人聲が聞えて來た。洞の中から出て來た老人の群

れが、地下鐵道の作業場の上から底を、重なり合つて、覗いてゐた。高助もその方へ歩いていくと、彼らに混つて下を覗いた。下では高架線を潜り拔ける地下線いつぱいに擴がつて、瓦斯洩れの青い焔が土の中から燃え上つてゐた。

「火事だ。」と不意に高助は云ふと、街の方へ馳け出した。が、また急に立ち停ると、彼は不服さうにのろのろ老人達の間へ戻つて來た。

一人の老人は歸つて來た高助を見て云つた。

「お前、あれは小判だとさ。」

「小判ぢやねえ、火事だよ。」と一人が云つた。

「火事だ、火事だ、」さう云ふ聲の方が小判を包んで、だんだん大きくなつて來た。街路からは群衆が馳けて來た。穴の底では工夫達が土を火の上へぶつつけた。

高助は人が集まれば集まるほど、首を切られた自分を明瞭に感じ出した。彼はひとり群衆から離れてガードを潜ると、いつのまにかまた自分の小屋の前へ戻つてゐた。彼は障子の破れ目から中を覗いた。中では自分のかけておいた藥鑵が、ひとり湯氣を立てて鳴つてゐた。彼は足音を忍ばせて中へ這入ると、柱にかかつた拍子木を一つ叩いた。常とは變つて俄に大きな音を立て出したその拍子木に驚くかのやうに、彼は周章ててそれを柱へかけ直さうとした。すると、その姿勢の中から、彼がいつも夜警を終へてさうするときに思ひ出す女の顔が――洞の中の女の顔が、足が、手が、彼の首に絡まりつき、彼の手首を舐め始めた。――お倉だ――彼が、あの洞の闇の中へ這入つたときにいつの間にか斬りつけられてゐた傷口から、今頃突然血が噴き流れて來たのである。

小屋の中から出て來た高助の顔は、全く前とは變つて眉毛を吊り上げながら、生き生きと血をさして笑つてゐた。

その夜高助は夜が更けると洞の中へ這入つていつた。彼は暫く鐵柱の影に身を潜めたまま、お倉の居所を窺つてゐた。密集してゐる柱のために、曲りくねつた雛型の廊下のやうに見える洞の中では、お倉の姿を一目で探すことは、困難であつた。殊に洞の中のお倉の居所は毎夜のやうに變つてゐるのだ。高助は毛布を冠つたまま、手探りながら、眠つてゐる人々の胸や手足の群れの間を渡り出した。いつものやうに街角から掠ふヘッドライトが、ときどき見覺えのある鍋の縁や古下駄を浮き上がらせては、消えていつた。高く積つた板の上に、寢てゐる痩せた肋骨があるがと思ふと、急に足もとで古トタンが音を立てた。びしよびしよ濡れた殘飯を踏みつけると、足の裏へひつついた紙片が、騷ぎながら彼の後から追つて來た。

高助は先夜彼がお倉に足をとられた所まで這入つて來ると、マッチを擦つた。下では、膏藥をはり廻した老婆の脊中が、瓦礫の中から傷口の肉を爆かせて覗いてゐた。その傍に倒れてゐる畫家とお洒落れの叢がつた髮の中から、鏡の面が光つてゐた。股と股との間を、鼠の脊中が流れていつた。それらの鼠は、前から高助の移動につれて追はれて來た鼠の群と一つに塊ると、組み合された膝の垣や老人の胸の間を、網のやうに擴がりながら辷り出した。高助はマッチを擦りかへながら、鼠の後を追ふやうに奥の方へ忍んでいつた。しかし、彼の行くさきざきからは、いくらぐるぐる廻つてみてもお倉の姿は見えなかつた。彼は踏みこむと、その一夜を綴る自分の場所を搜さうとした。すると、遠くの方から、夜警の拍子木の音が聞えて來た。高助は獵犬のやうに、首を立てた。彼は自分と代つたその夜警の顔が見たくなつた。だが、今頃洞の中でひとりごそごそ動いてゐては、夜警に疑はれるに定つてゐた。もし疑はれて怒鳴り出された所を見つかれば、お倉は何と思ふだらう。――しかし、高助はいつの間にか近づいては離れていく拍子木の音に調子を合せながら、自分も頭を動した。

「うむ、お奴は、初めてぢやねえ。」

高助は俄に分別くさい顔つきで思案に暮れながら、やがて、新しい夜警に飛びつき出すであらうお倉の顔を、考へた。

――こりや、今夜でなくちやア――お倉の奴はまだ知りやしめえ。

拍子木の音が消えていくと、高助はまた逆に洞の中を廻り始めた。暫くすると、彼はふとモルヒネ患者の顔を見附けて立ち停つた。彼は周章ててマッチを擦り變へた。と、落された鳥の群れのやうに滿ちてゐる襤褸の中から、仰向きかかつた乳房が見えた。お倉だ。――彼は顔を近々とお倉の傍へ擦り寄せた。豐かた乳房の間の窪みの中で、飴色の微細な皺が行列を作つて動いてゐた。足は開きかかつた襟の垢の中から、毛孔の縮んだこぶらの半面を覗かせながら、重たげに曲つてゐた。高助は毛布を深く冠り直して足で女の腰を踏みつけた。女は眼を開けると、また眠つた。彼は女の耳をひつぱつた。女は彼の手を拂ひ除けながら、仰向きになると、急に血の込んだ大きな眼を開いて高助を見詰め出した。高助は女の耳に口をよせると小聲で云つた。

「おい、嫁になれよ、嫁に、毛布をやるぞ。」

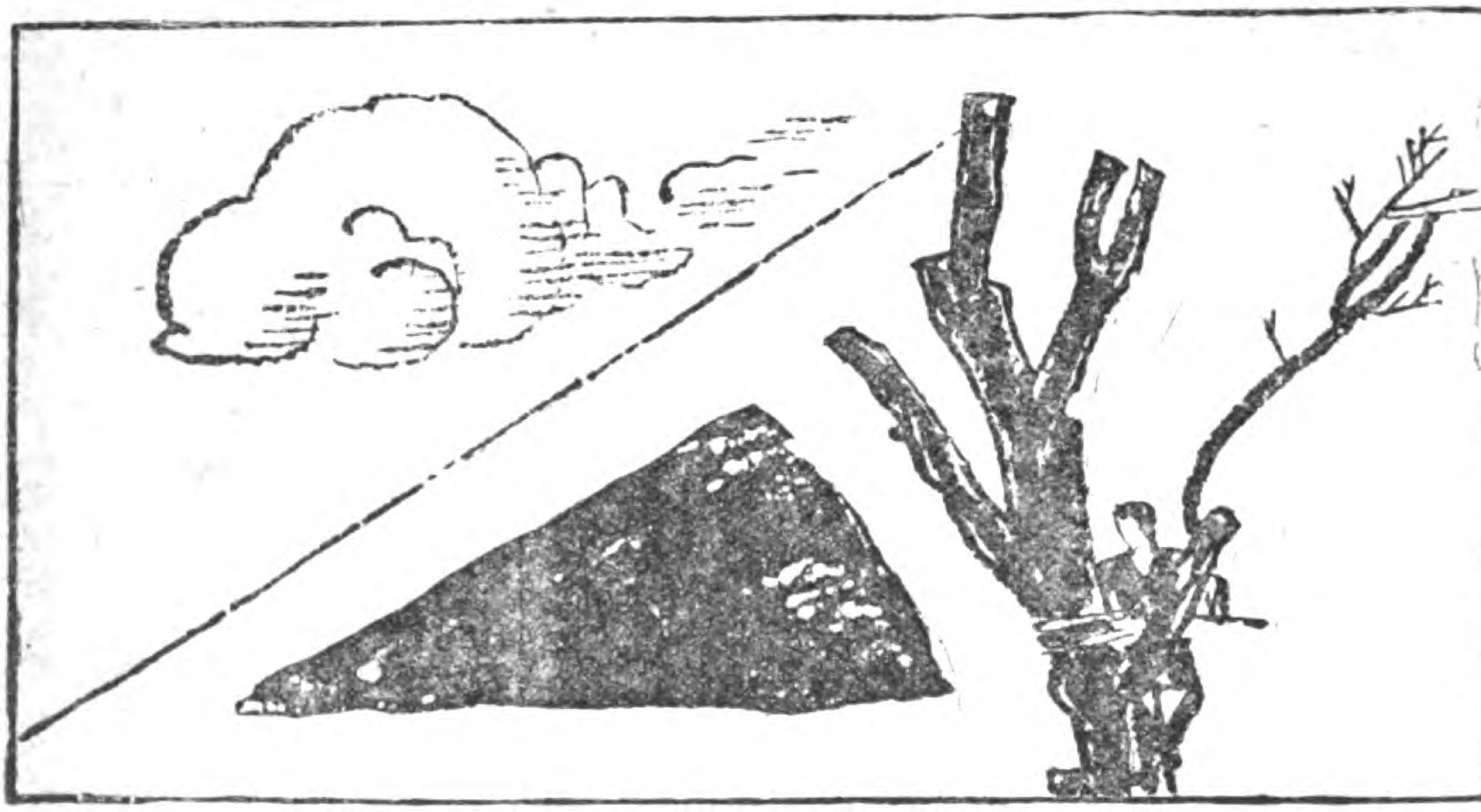
女は虫をつけた胴のままで、にやにや下から笑ひ出した。高助は、地べたが突然笑ひ出したやうに感じると、そのまま闇の中へ沈み込んだ。――

しかし、間もなく、高助の喘息の發作が、いつの日よりも激しく襲つて來た。彼は乳房の上へ額を擦りつけながら、うめき出した。鼻のさきが、放れまいとして喰ひつく嘴のやうに、咳く度にだんだん深く皮膚の中へ喰ひ込んだ。彼の片足は傍のモルヒネ患者の懐の中へ刺さつたまま、腹を蹴つた。手は投げ出された一本の股を絞めつけながら、搖れ始めた。

高助の周圍では、彼の咳きに眼を醒して動き出す者が、多くなつた。モルヒネ患者は彼に蹴られる度に、腰を躍らせて慄へてゐた。それを中心に、その周圍の者らは起き上つたり、坐つたり、動搖めきの波を漸次に次の波に傳へながら、柱を廻つて擴り出した。あちらこちらの老人達の群れの中から、また新しく咳き出す者が、續出した。初めはそれは共通した巨大な器官から噴き出す噴出物であるかのやうに、合唱しながら、一連の咳きが停ると、また一連の咳きが、舞ひ上つた。

と、それらの呟きの中心は旋風のやうに追つ駆け合ひ、絡まり合ひ、だんだん高調に達すると、咆哮しながら、崩れ出した。轉がるもの、這ひ出すもの、抱き合ふもの、——ざわめき立つた洞の中では、鍋が飛んだ。草履が柱から柱へ叩きつけられながら、渡つていつた。

高助は洞の中の騒ぎを感じると、逃げ出さうとして立ち上つた。しかし、柱を放れると、忽ち横たはつてゐる身體に足をとられて、投げ出された。彼は見えない膝と膝との間へ頭をつつ込んだまま、呟き續けた。周圍の足が、彼の身體を突き合ひ出した。骨だらけの足と足との波の中で高助の脊中の瘤が浮いたり沈んだりして、のた打つた。彼は頭をシャベルのやうに床につけると、亂れた兄や汚物を拂ひながら、這ひ廻つた。殘飯が擦り剥けた顏に、べたべたへばりついた。扁平な干物になつた敵の死骸の牙が、彼の頭にひつかかつて來た。しかし、彼はもう息が切れさうであつた。呟き出すものも飽きたかのやうに、腹の皮は痙攣したまま、動かなかつた。彼は古下駄の積み上つた中へ顏をくつつけると、兩手で穴を掘り始めた。しやくり上げる度に、咳に代つて血が咽喉から噴き出て來た。彼は彼自身の血の後を追ふやうに頭をますます深く。掘り下げた下駄の穴の中へ突つ込んだ。と、穴の底から、輝いた海や花や帆船が現れ出すと最後に、巨大な赤い月が天空のやうに浮き出て來た。南無、南無、南無、と彼は呟いた。すると、彼の身體はその中へ辷るやうに流れ込むと、彼は下界を足で蹴りつけた。



良寛と蕩兒

相馬御風

時

文化五年前後、晩春。

人物

良寛和尚（五十歳頃）
山本由之（良寛の弟、四十五六歳、名主役）
やす子（由之の妻、四十歳前後）
馬之助（由之の長男、二十歳前後、名主見習役）
權六（由之の家の下男、三十歳前後）
三太（敦賀屋の下男、二十五六歳）

場所

越後國出雲崎。

第一場　橘屋の離座敷

海に臨んで建てられた、良寛の生家出雲崎橘屋の離座敷。中二階とも云ひたいほどに高い様。前は庭。上手は廊下によつて母屋に通ずる。下手は壁。壁に接するほどに衣桁が置かれ、衣桁には黒い麻の衣、袈裟、頭陀袋などが懸けられてゐる。正面の下手には、さゝやかな床の間、上手は欄干のある肱掛窓。障子の明け放たれた窓からは、夕映の色うつくしい静かな海と、海のあなたに朧に霞んだ佐渡の島山が見えてゐる。

法衣を脱いだ良寛和尚と、その弟の由之とが、そこで對酌してゐる。二人とも胡座をかいてゐる。二人ともかなりに酔が廻つてゐる様子。

由之。（銚子を取上げて）まあ、も少しおあがんなすて。

良寛。（盃を突出しながら）いや、もう大分廻つたやうだ。えゝ加減にしてごぜんにして貰ひませうて。

由之。なあに、また何はかもおかつとりませんして、まあ、ゆつくりとおあがつておくんなさい。何しろかうしてお前さまと二人で酒を飲むなんてことは、久しぶりのこんだでのう。

良寛。ほんに久しぶりのこんだ。久しぶりといへば、かうした生きのえい肴を食べさせて貰ふのも随分と久しぶりだ。やつはりこゝの魚は格別だて。わしはさかなが食ひたうなるとは、こゝを思ひ出すでのう。

由之。（笑ひながら）その外の時は忘れてゐなさるといふわけかの。

良寛。（笑ひ〳〵頭を撫でながら）いやさういふわけではないがの。アハヽヽヽ。

由之。アハヽヽヽ。

良寛。ところでの、わしがこのやうに魚も食へば酒を飲むのを、えらい見識ではなしつける手合もたまにはあるといふも

んだっ、さう、さうっ（膝を打つて）何でもあれは去年の夏だつた。托鉢の途中、わしが粟生津の茶屋の店に腰かけて茶飯のおさいに餅の昆布巻を食つとるとの。やはりその店に腰かけて辨當をつかつて居つた生若い雲水が、いきなりわしの方へ向き直つてえらい見幕でわしをけなしつけたつてもんだ。だどもわしの方ぢやどうも何とも云うて見やうもないだでたゞ默つて食つて居つたわけさ。ところが面白いことには其の雲水さんと、どうしたはづみかいつの間にやら話が合うての。その日は一日一緒に連れ立つてあの邊を托鉢をし、宿も同じ家に厄介になることになり、不思議な縁だ不思議な縁だと云ひ／＼二人は枕をならべて寢たやうなわけさ、ところが、お前さま次の朝起きて見ると、その雲水さんあんまり蚤がひどうて夜中寢んで明かしたといつて泣きさうにかまけるがんさ。そこでわしは、かう云つてやりました。どうだの、わしは自分が食ふ代りにや食はれるがんも平氣だ、お前さまはどつちもだめだと見えますの。まあせい／＼修行して蚤にでも蚊にでも平氣で食はれて居られるやうになつたら、お前さまも魚でも何でも食ひなさるがえいさ。こんな風にからかつてやりましたがんさ。アハヽヽヽ。

由之。や、これはおそれ入りました。アハヽヽヽ。

良寛。世の中は面白いもんだでのう。

由之。どうもお前さまにやかなひませんわい。（嘆息するやうに）まつたくお前さまは一番お悧巧だちや。自分だけ若いうちにさつさと自由の境界へ逃げ出してしまつて、あとの苦勞をばわしのやうな者に委せて超然としてなさるがんだもん。アハヽ……。

良寛。いや全くすまんことだ。お前さまにそれをいはれるとわしは穴の中へでももぐり込みたうなる。（沈み込む。間。）わしのやうなものが此の家の跡を繼いでだどもの、居つて見なさい。五年とたゝんうちに此の家は潰れて居つたに相違ない。そこへ行くと流石にお前さまは……

由之。（相手の言葉を抑へて）そんなことはまあいはんどいておくんなさい。實は、わしとても同じこと、先程もいろ〳〵お話しましたやうな周圍の事情から、家の借財も大分嵩みましたし、それに此のわしがこのまゝ名主役を勤めて居たのでは、何かにつけて町もやかましくなるばかりのやうだししますで、いつそ此際隠居した方が家の爲にも、自分の爲にもよからうと思ひますのさ。

（由之がなほも話し續けやうとしてゐた時、由之の妻のやす子が行燈と新らしい銚子とを持て這入つて來る。やす子は四十前後などとは見えぬほどに苦勞やつれをしてゐる。それにどこか病氣でもあると見えてすべての起居がものうげに見える。）

やす子。どうしたものか今日は一向お酒が賣れませんのう。

（かういひながら銚子を程よいところに置き、行燈を適當の場所に据ゑ、更に窓の障子をしめながら）

やす子。またこれで日が暮れると風が寒うございますでのう。

（良寛は心ありげにやす子の萬事にものうさうな動作を見てゐたが、ふと我に返つたやうに）

良寛。いや、これはしたり、話に夢中になつて暗うなつたのも知らずにゐましたわい。町は山とは比べものにならん程暖いと思うて居つたが、これでも夜になると流石にひえ〴〵しますのう。秋も暮れて行くといふのに。

（やす子良寛の前に坐つて酌をしにかゝる。）

やす子。どうか一つお燗のえいところを。

良寛。（盃を差し出しながら）わしはもう充分やりましたが、折角だでもう一つ貰はうかの。

（良寛盃を下に置かずにすぐに一口呑む。）

うむ、成程、これはえいお燗ぢや。

（やす子更に山之の方に近寄つて無言で酌をする。山之も默つて受ける。）

山之。（一口呑んでから、先刻からずつと話の續きを考へて居たやうな様子で）それにのう、良寛さま。わしも一つは近頃つくづくお前樣の境界が羨ましうなりましたがんさ。無論到底お前さまのやうに悟り切つた境界には到り得んまでも、せめて自分の好きな國學と和歌の道にだけでも深く進んで行つて、少しは世間をも氣樂に渡れるやうになりたいと思ひまして……。

良寛。（一向氣乘りがしないやうに）ふむ、なるほど。

山之。なにしろ父上はあの通り若い時から國學にばかり打ち込んで居られ、到頭京都まで行つてあのやうな無慘な最後をとげられる、その後を繼ぎなさる筈のお前さまは、又お前さまでさつさと世を遁がれてしまひなさる。結局一番馬鹿を見たのはわしで、二十四五の若盛りから今日まで全く苦勞をしつゞけて來ましたわい。それかと云つて土地第一の舊家といはれて來た由緒ある此家の勢力を、今更むざ〳〵と他人の手に渡したうはなし、さうでなうてさへ隙があつたらとねらひ續けて居る敦賀屋のやうな成上り者も居るのではあり、その間に處して立派に家の體面も保ち、活計もちやんと立て丶行かうといふのは、それは〳〵一通りの苦勞ぢやありません。だども、わしもすつかりもう此頃では疲れ切つてしまひました。つく〴〵世の中が厭になり、その反對に自分といふものがいとしうなりました。そんなわけで、先刻もお話した通り、一日も早う隱居させて貰はうと思ひますのさ。それにしても……。

やす子。（由之の云ひ淀んでゐるのを幸に）お前さま！　そげいな事よりも何よりも、此間から云うて居つた馬之助の事をお賴みしたら。

（馬之助の名を聞くとひとしく良寛は急に興味ありげに）

良寛。馬之助がどうかしたかの。さういへば先刻から馬之助の姿が一寸も見えんやうぢやが、どこぞ遠くにでも行つて居

られるかの。

やす子。いゝやの、良寛さま、そこどこではないがんでござります。あれの爲にはわたしは毎日泣いて居りますぞえ。どうしてあのやうな放埒者になりましたやら、今日もやつぱり昨夜からの居續けで、どこにどうして居りますことやら、いまだに顔を見せんがんでござります。家の樣子はお聞きなさいました通りだん〳〵苦しうなる一方なのに、旦那がこの通り自分の好きな道にばかり氣をとられてゐなさいますし、それに馬之助が又……。

（やす子泣く。）

良寛　（獨語のやうに）全く困つたもんさ。どうなるといふもんやら。

良寛。（嘆息するやうに）仕方がないさの。災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよからう。それより外に災難を遁れる道はない。永い間威張りつゞけて來た此の家だ。いつか一度は亡びにやならん。お前さまや馬之助やわしのやうにさういふ時節にめぐり合せた者が損なのだ。お前さまの隱居の望みも尤もなら、馬之助の放蕩にも無理はない。またおやすさまの嘆かつしやるのも尤もぢや。たゞお互に無理をしちやならん。何よりもめい〳〵に自分が大事ぢや。家は傾いても、めいめい自分といふものを傾かしちやならん。まあ、さうくよ〳〵せんでお互に自分をいとしみ生かして行かうではないかの。（間）おや、いつの間にやら波の音がえらう高うなつたやうぢや。

いにしへに變らぬものは荒磯海とむかひに見ゆる佐渡ヶ島なり

まつたく昔ながらの波の音だ。靜かな時もあれば、荒れる時もあらうが、海ある限り岸ある限り、波は永遠にやむ時がない。（間）おやすさん、久しぶりのこんだ。も少し機嫌よう醉はして貰ひませうかの。

（やす子あわてゝ涙を拭ひ銚子を取り上げて良寛の方へ進み寄る。）

良寛。（盃を取上げながら、しみ〴〵とやす子の顔を見てゐたが、やがてやす子の注いでくれた酒を一口ぐつと呑んでか

ら）おやすさ、お前さまどこか加減でも悪いかの。どうもやつれ方がひどい。

やす子。はい、いゝえ。

（曖昧な返事をしたが、やす子は又しても袖で涙をおさへる。）

（由之は腕を組んで深い物思ひに沈んでゐる。）

（折から廊下の方から下男權六の聲が聞える。）

權六。おつかさま、若旦那が今歸つて來なされました。こゝへ來なさるやうに云ひませうかの？

やす子。（びつくりして起ち上りながら）え、馬之助が……（かう云ひかけて思案にくれる）

由之。（むづかしい顏付で）來ん方がえい。

良寛。（さびしさうに）わしも今夜はどうも逢ひたうないやうな氣がする。

やす子。それでもせめて御挨拶だけなりと……。

（やす子かう云ひ殘して立ち去る。良寛と由之とは異つた表情でそれを見送る。ところで此の場面を閉ぢる。）

第二場　光照寺境內

（光照寺は良寛剃髮の寺である。舞臺は本堂の前庭。上手は松の茂つた丘。下手は廊下を隔てゝ庫裡があり、町から境內への通路は庫裡の入口に向つてつけられて居り、下手の方は丘へ上る細道があるのみである。凡ては高臺の感じ。上手寄りにやゝ盛りの過ぎた櫻の立木が二本。その根本あたりに二つ三つ石をあしらふ。

前の場より三日の後。時刻は午後三時頃。さしたる風もないが、櫻の花が殆ど絶え間なく散りつゞけてゐる。

もぢりの綿入を着た橘屋の下男權六が、尻はしより草履つばきの姿で寺の庫裡から現れ、いそ〳〵と本堂の正面

まで來て立留り本堂に向ひ手を合せて恭しく拜む。

折からつひ近くで若い男の聲でうたふ山雲暗オケサが聞えて來る。

「仇し仇浪寄せてはかへす

寄せてかへして又寄せる」

唄の聲がだん〳〵近くなつて來て、うたひ終るか終らぬうちに、上手の丘の細道の木立の間から、ひよつくり唄の主の姿が現れる。

それは近頃此町で最も羽振のいゝ敦賀屋といふ豪家の下男三太である。三太は山林の見廻りにでも行つて來たらしく、膝きりの山着物を着、股引に草鞋ばきといふ扮裝、手拭で頰被りをし、腰に山刀をさし、木の枝を杖につ
いてゐる。

權六はまだ拜みつゞけてゐる。

三太。(權六の姿を見つけて、びつくりしたやうに一寸立ち留つたが、すぐにその方に近寄つて行き、揶揄するやうに)おい、權さ、えらい御信心だなあ。(獨語のやうに)せつねえ時の神賴みか。へん。

(嘲笑を殘したまゝ三太は權六の背後を通つて下手の通路へと步を運ぶ。)

權六。(急に振り向いて鋭く)おい、三太、一寸待て。

(三太びつくりして立とまり、權六の方へ向き直る。そしていかにも怒に燃えてゐるらしい權六の樣子を見ると一層嘲笑的な態度になり)

三太。(頭に輕く手をあてゝ)や、こんちは。

權六。(喧嘩腰になり)何だと、こんな畜生。もう一遍云つて見ろ。さつきほざいたことをもう一遍ほざいて見ろ。

三太。（やはり嘲笑的に）聞えましたかの。一心に佛様を拜み申したつたお前さまの耳にも俺樣のお言葉が通じましたかの。やつぱりどうも佛樣のお言葉よりは俺樣のお言葉の方がたしかだと見えるて。

權六。（ます／＼怒に燃えて）何だと、この野郎。汝ァ、一體そりや誰に向つて言つとるがんだ。この俺を誰だと思つとるがんだ。（壓迫するやうに）あやまれ。おとなしうあやまれ。えいか、あやまらんとなると……

（權六はもう拳を固めてゐる。）

（ふと、本堂の椽に良寛の姿が現れる。良寛はぼんやりそこに立つて、二人の爭ひを眺めてゐる。）

（權六の激昂がたかまるにつれて、三太もます／＼勢込んで來る。）

三太。（權六の方へ二三歩後戻りして）へん。相も變らずえい氣でけつかるわ。知らんと思つとるがんか。おい、人が知らんと思つとるがんか。えい氣になりあがつて、百姓や漁師の身を切るやうなお上納金まで使ひ込み、ゐたゝまらなうなつて身を隱したりしたたァ、どこの名主樣だ。百姓八十四人の連名で江戸表へ駈込訴訟までされたなァどこの名主樣だ。人が知らんと思つて、またそれでもえい氣で居るがんか。來年にでもなつて見ろ。俺樣こそ立派な名主樣のお下男さまだ。あやまるなら、その時あやまつてやらあ。それまでの事ァ、汝の方こそおとなしうしてけつかれ。それが汝等の爲だわ。

（權六の憤怒は極度に達した。彼は夢中になつて三太の方へ飛びかゝつて行つた。三太は杖にしてゐた木の枝を振りかざして身構へた。）

權六。野郎、もう承知がならんぞ。

（かう叫んだ權六が今將に三太に肉迫しようとした瞬間、堂の椽を驅け下りて上履きの草履を穿いたまゝ二人の間に飛び込んだのは良寛であつた。）

良寬。（動作は敏速であつたが語調はおだやかに）これ〳〵何をしなさるがんだ●

（勢込んでゐた二人も良寬の姿が目に入ると、急に双方とも氣ぬけしたやうになる。）

權六。（半ば泣き聲になつて）それかと云つて、このまゝぢや……

（かう叫んで權六は再び斧を振り上げて追ひ縋らうとする。三太もそれに應じて杖を振り上げる。）

三太。（聲ふるはせて）俺だつてかうなつちやア……

良寬。（兩手をひろげて二人をなだめるやうに）まあ待たつしやい。そないにお前だち人をなぐりたいなら、此のわしをなぐらつしやれ。わしこそお前だちのどつちからもなぐられてえい人間ぢや。さあ、なぐつてくらつしやれ。

（二人は全く力拔けがしてしまつた。二人とも暫くぼんやりして良寬の除に立ちすくんでゐたが、まづ三太の方からこそ〳〵と、それでも何となく權六の方へ威を示すやうな風も見せながら去る。）

（良寬はそれを見て、ひろげてゐた兩手を下におろし、口惜しさうに三太の後を見送つてゐる權六と相對す。權六三太の姿の見えなくなつたをきつかけに良寬に取縋る。）

權六。まことに濟みません、とんだ事をしまして。（間）ただどもあんまり口惜しいもんだで……

（權六腰に挾んだ手拭を取つて目を拭く。）

良寬。（やさしく、おだやかに）いや、尤もな事ぢや、惡いといへばどつちにも惡いところがあるが、又どつちにも尤もなところがある。それでもまあたいした事にならんでよかつた。喧嘩をしてもせんでも、なぐつてもなぐらんでも、晴れん氣は晴れんもんぢや。そこどころか、爭へば爭ふほど憎しみが增して行くばかりぢや。憎しみはお互の損だでのう●

權六　はい。（肯く）

良寬。（獨語する如く）打つ人も打たるゝ人も諸共に如露また如電應作如是觀（再び權六に向つて）打つ者はいつかは打た

れる。威張る者はいつかは威張り返される。それが此の世の有樣ぢや。權さや、今かうして橋屋がおち目になつたのも、お前が斯うして敦賀屋の若い衆に威張られるのも、みんなさうなる時節が到來したのぢや。滅びる者はいつか一度は滅びんばならん。一番大事なことは無理をせんこつちや。今の橋屋の苦みは、すなほに運命を迎へずに、無理に無理を重ねて來た結果ぢや。頭を下げる時節が來たらすなほに頭を下げるがえい。打たれる時節にはすなほに打たれるがえい。滅びる時節が來たらすなほに滅びるがえい。死ぬ時節が來たらすなほに死ぬがえい。それが本當に自分を生かす道ぢや。それが本當に自分のたましひを生かす道ぢや。徒らに滅び行くものにばかり心を惹かれて居つて、自分々々のたましひまでも滅びさせちやならん。どうぢや、わしのいふことがよう解つたかの。

權六。はい、ようわかりました。だども（暫くいひ淀んで）良寛さま、わしに一つお願がございます。これこそ本當に一生のお願でございます。

良寛。何ぢやの、それは？

權六。外の事ではございません。あの家の若旦那さまの事でございますが、どうかお前さまから一つ此際若旦那さまにみつしりと意見をしてやつてくんなさるわけにはいきませんかの。この事は大旦那もおつかさまも毎日のやうにさう云つてゐなさつた事でございます。もう此上は良寛さまでなうてはだめだ、どうか一つ良寛さまに來て貰ひ申して馬之助の心を入れかへさせて貰はんことにやつてのう。お前さまもそれについては此の間から大旦那さまからも、おつかさまからも聞きなさつたでございませうども、此の權六からも折入て御願申します。

（權六は額を土につけるほどに頭を良寛の前に下げた。權六のその話を聞くと良寛の顏は急に一層暗くなつた。）

良寛。うん、よし〳〵。その事はよう解つとる。（間）だども、のう、權さ、わしにはどうも云ふ言葉がないのぢや。馬之助の今の境界に立ち入つて深く心の中を察して見れば見るほど、ます〳〵わしにはいふ言葉がわからなうなるのぢや。

だが、まあ、お前のそのしんみに思うてくれとる心持は、わしにもようわかつた。（かう云つてほと〳〵思案にあまつたといふ風に）それはさうと、お前は使に来てかうぐづ〳〵して居つては、家の人達もさぞ待ちかねとるこつたらう。早う歸つてわしの先刻の返事を云つといて貰ひたいもんぢや。今のお前の話はわしもあとでよう考へて見るでの。

權六。（初めて我に歸つたやうに）ほんね、大事な使のことをすつかり忘れて居りました。そんではわしは歸ります。どうか、良寛さま、わしの一生のお願でございますけい、今のこと何分よろしうお頼み申します。

（權六は丁寧に頭を下げて、やがて悄然と立去つた。良寛はその姿の見えずなるまでさびしさうに見送つてゐたが、再び本堂へ戻らうとして、ふと庭隅の櫻の立木に目をとめた。折から出て來た風に吹かれて、櫻の花片が吹雪のやうに散りつゞけた。）

良寛。（花吹雪を仰ぎ見て）おう、散るわ、散るわ、それにしても又何といふ心忙しい散りやうぢや。

（こんなことをいひながら、我知らずその櫻の木の方へ歩み寄る。）

良寛。（木の幹を見上げて）この木も大きうなつたもんぢや。わしが十八の年に此の寺で剃髪して貰うた頃にや、まだほんの小さな木だつたがなあ。さういへば、あれからもう三十年の月日が過ぎ去つた。まるで夢のやうぢや。まつたく何もかも夢ぢや、夢ぢや。

（よろめくやうに櫻の木の幹につかまる。花が盛に散る。場面とぢる。）

第三場　橋屋の茶の間

（北國の特色ある廣い高い茶の間。前は土間、後ろは唐紙を隔てゝ奥の間がある。正面の壁の上高く大きな神棚。その下あたりの欄間に槍、薙刀、高張などが掛けてあり、柱といはず、戸締といはず、凡て漆を塗つてあり、

壁も戸も皆焚火の烟に煤けてゐるが、いづれもよく拭き込んであるのでつや〳〵しい。上手はやはり板戸を隔てゝ表の間があり、その二つの間の境と一直線に土間の入口の格子戸がある。その格子戸をあけて出ると更にそこに表の土間があり、その土間を通つて大戸をくゞり往來へ出るやうになつてゐる。

茶の間の下手は中障子の板戸を隔てゝ下の間がある。土間はその椽に沿うてずつと裏まで通じて居るのである。

茶の間の中央より少し下手寄りに大きな爐があり、爐には自在鍵が吊してあり、大きな鐵瓶がそれに掛けられ、その下に火が微かに燃えてゐる。下手の板戸に寄りかゝるやうにして、奥の端のところに大きな茶棚が置かれてある。又板戸の上の欄間には行雲流水の四字を書いた大きな額が懸けてある。

（前の場より二日の後、午前十時頃。爐の正面の座に主人の由之が坐つて居り、座右に茶道具が散らばつてゐる。同じく爐の下手の座には妻のやす子が坐つてゐる。）

由之。（腕組しながら）昨日は馬之助の野郎、割合に早う戻つたやうだが、まだ寢て居るかい。

やす子。いゝえ、今朝はよい事に早う起きましての。お前さまの歸んなさらん前に、一人で臺所へ來て朝飯を食べまして、それからずつと二階の部屋に引込んで居ります。

由之。何をしとるだらうのう。お前ちよつとこつそり見て來たらどうだ。

やす子。さうでございますのう。一寸見て來ませうか。

（やす子立つて上手の板戸を音せぬやうに明け、隣の間に入る。馬之助の居る二階への梯子はその間から架けられてゐるのである。）

妻の後姿を見送りながら、由之は煙管を取り上げてものうさうに煙草を二三服すふ。）

（やす子やはりこつそりと戻つて來る。由之その方へ向く。）

やす子。（座についてから由之の方に顔を寄せるやうにして）何かしきりと本を讀んでは考へ込んで居ります。

由之。（考へ込むやうに）さうか。

やす子。それにしても良寛さまは何をして御座るがんでせう。お前さまが先刻出て行きなさると直ぐに離れへ行きなさつたきり出て來なさらんがんでござります。

由之。（苦笑しながら）まさか寢ても居んなさらんだらうて。

やす子。ほんねのう。（やはり微かに笑ふ）

由之。やつぱり海を眺めて歌を考へでもゐなさるこんだらう、良寛さまのこんだもん。

やす子。それはさうと、一體いつになつたら良寛さまは馬之助に話をしておくんなさるがんでせうのう。來なさつてから今日でもう五日にもなるがんに、たゞの一度も馬之助を呼んではくんなさらんし、たゞの一言もそれらしい事を云つてはくんなさらんがんだもん。わし、ほんね、どうなるこんだやらと思ふと、居ても立つてもゐられんやうな氣がしまして。

由之。わしも初めは頼み申してもだめなこんだとは思うて居つたども、今ぢやもうそれより外に道がなうなつたやうに思ふがんさ。

やす子。どうでせうのう。丁度今あんた案配に馬之助も落ち着いて居りますしするで、どうでもかうでも良寛さまにお願申して見たら。

由之。それもさうだのう。だども、わしからは工合が惡い。お前一つ遮二無二頼んで見たら。

やす子。さうしませうかのう。

（やす子今にも立ち上らうとしたところへ、土間へひよつくり良寛の姿が現れる。）

（由之もやす子も「丁度いゝところへ」といふやうな表情で迎へる。しかし、法衣を着、袈裟をかけ、手に笠や

風呂敷包みや頭陀袋や鐵鉢などを持つてゐる良寛の樣子をはつきり認めた時、二人の顔面には、非常な驚きと失望の表情が現れる。)

やす子。まあ、良寛さま、お前さまは……

良寛。いや、あんまり永うなつたし、それに今日は格別の天氣だで、わしはおいとま申さうと思うてさ。おまけに大分山も戀しうなりましたでの。アハヽヽヽ(幾分淋しさを含めて笑ふ。)

やす子。(ます／＼失望の色を深くして)まあ、それはあんまり……

由之。(同じく失望の表情で)これは驚きましたのう。何もそげいに急いで歸んなさらんでも……

良寛。別に急ぐといふわけぢやないども、いつまで置いて貰うて居つても際限のないこんだで。

由之。(幾分皮肉に)一向何もお構出來なんだ上に、面白うない事ばつかお聞かせ申しましたもんのう。

良寛。いや決してその樣なわけぢやありませんわい。だどもわしぢやとてさう幾日も庵をあけて置くことも出來んもんで。

(こんな事を云つてゐるうちに良寛は椽鼻に腰かけていつの間にか一通りの支度をしてしまつた。)

良寛。(脚絆の紐を結びながら)それはさうと、馬之助はどうして居りますかの。

(良寛のその言葉に由之とやす子は意味ありげに顔を見合はす。由之「急いで呼んで來い」といふやうな合圖をする。)

やす子。(立ちかけて)はい、はい。馬之助は今朝は家に居ります。わしすぐに呼んで來ますでの。

(やす子いそ／＼として馬之助を呼びにと次の間に行く。)

由之。(幾分安心したやうに)良寛さま。それでは又近いうちに來てくんなされ。これからは時候もようなるばかりでのう。

良寛。來ますとも、來ますとも。何しろ冬中あの山の中に雪に閉ぢ籠められて居るもんだで、春になるともうぢつとして

は居られんがんさ。

山之。(煙草を吸ひながら)わしも存のうちに一度國上さまにお参りがてら五合庵をお訪ねしたいと心がけて居りましたども、何しろいろ／＼とごた／＼しとりますもんで、つい出かけられずにしまひましたやうなわけでのう。

(そこへやす子が戻つて來て元の座に着く。やす子の後から馬之助が悄然と出て來て、一人だけ離れた場所に坐り、默つて良寛の方に向いて頭を下げる。憂鬱な表情。山之とやす子とは共に緊張した表情で馬之助と良寛とを見比べてゐる。)

良寛。(馬之助の方を見て感慨的な表情で)お、馬さんか。いや又しても幾日も厄介になりました。

(馬之助再び無言で頭を下げる。)

良寛。馬さん、どうだい、近いうちに一度遊山がてら五合庵へ出かけて來なさらんか。山の中は又山の中で氣晴しになることもありますわい。殊にこの頃の山の風情と來ちや、何ともいへんえいもんぢや。そろ／＼もう散りかけては居るが、それでもまだ山櫻はいい頃だし、それにもうぼつ／＼ウツギやツツジも咲き初める頃ぢや。鶯が鳴く、鳩が鳴く、時時は雉子の聲も聞える。どうぢや、近いうちにやつて來なさらんか。何か珍らしい山の草でも摘んで來て、それで一杯やるのも又格別なもんぢや。それにお前さまも大分歌が上達しなさつたやうだしするで、一つゆつくり山の中で二人で詠み合うて見たうもある。どうぢやの。

馬之助。はい。(唯これだけ答へて又頭を下げる。)

やす子。(かなりいら／＼して)良寛さま、これも(馬之助の方へ一寸顔を向けて)伺はせますども、お前さまも是非近いうちにもう一度來ていただけますまいかの。

良寛。さうさのう。

やす子。(當惑さうに)さうでないとしますと、此の間からお頼して來たあの事を是非何とか……

山之。(やゝ絶望的に)いや、その事はもうえいだらう。わしも今考へたことがあるで。

良寛。(二人の會話は聞かなかつたやうに)馬さん。今云つた事を是非やつてもらひたいもんぢや。道だつて近頃はえらうようなつたし、それに若いもんのこつた。のう、是非近いうちにやつて來なされ。わしはどういふもんか、お前さまが一番いとしいがんだ。歌もお前さまのが一番わしの心にぴつたり來るところがある。一つ二人で心ゆくまで詠み合うて見たいもんぢや。どうだの?

馬之助。(深く何か感じ入つたらしく)はい。それでは是非一度まゐります。歌なんてだめでございますども……

やす子。(ます〱いら〱して山之に)お前さま? えい折でございませんかの。何とかお前さまからもお願申して見なさいましたら?

山之。(氣むづかしく)もうえいつて云つとるだないか。

(良寛はその時むつ〱草鞋を履きかけて居たが、ふと手をとめて足先を見つめたまゝで)

良寛。馬さん!

馬之助。はい。

良寛。誠に濟まんが、お前さま一寸手を借してくんなさらんか。どうもわしは手がふるえて草鞋の紐がよう結べんでのう。

馬之助。はい。

(返事と共に馬之助は立つて良寛の傍に行き、土間に下りて良寛の履きかけた草鞋の紐を結びにかゝつた。山之もやす子もいつにない馬之助のこの柔順な樣子を不思議さうに眺めてゐる。

かうして馬之助が良寛の足もとにしやがんで一心に草鞋の紐を結びつゝあつた瞬間、良寛の頬を傳はつて流れた

凪、涙の雫が馬之助の頸に落ちた。馬之助は驚いて片手の掌で頸筋を撫でた。そして仰いで良寛の顔を見た。良寛の目からは涙が溢れてゐた。二人はやゝ暫く無言で顔を見合せた。良寛は立ち上つて涙を法衣の袖で拭いた。續いて立ち上つた馬之助も同じく手先で涙をおさへた。)

良寛。(やがて快活さうに)それではおいとまします。みんなお達者でゐなされや。そのうち又來ますでの。

やす子。(立上つて)ほんね、どうしても行きなさるかの。どうか是非又近いうちに……(かう云ひ〳〵縁界まで歩いて來る。)

(山之も無言のまゝやす子の後に續く。二人とも土間に下りる。良寛は錫杖を突き鐵鉢と笠とを片手に持つて土間の戸口へと歩む。やす子は慌てゝ良寛の先に立つて戸を明けてやる。山之は良寛の後に續いて門口までも見送らうとする如く歩を運ぶ。

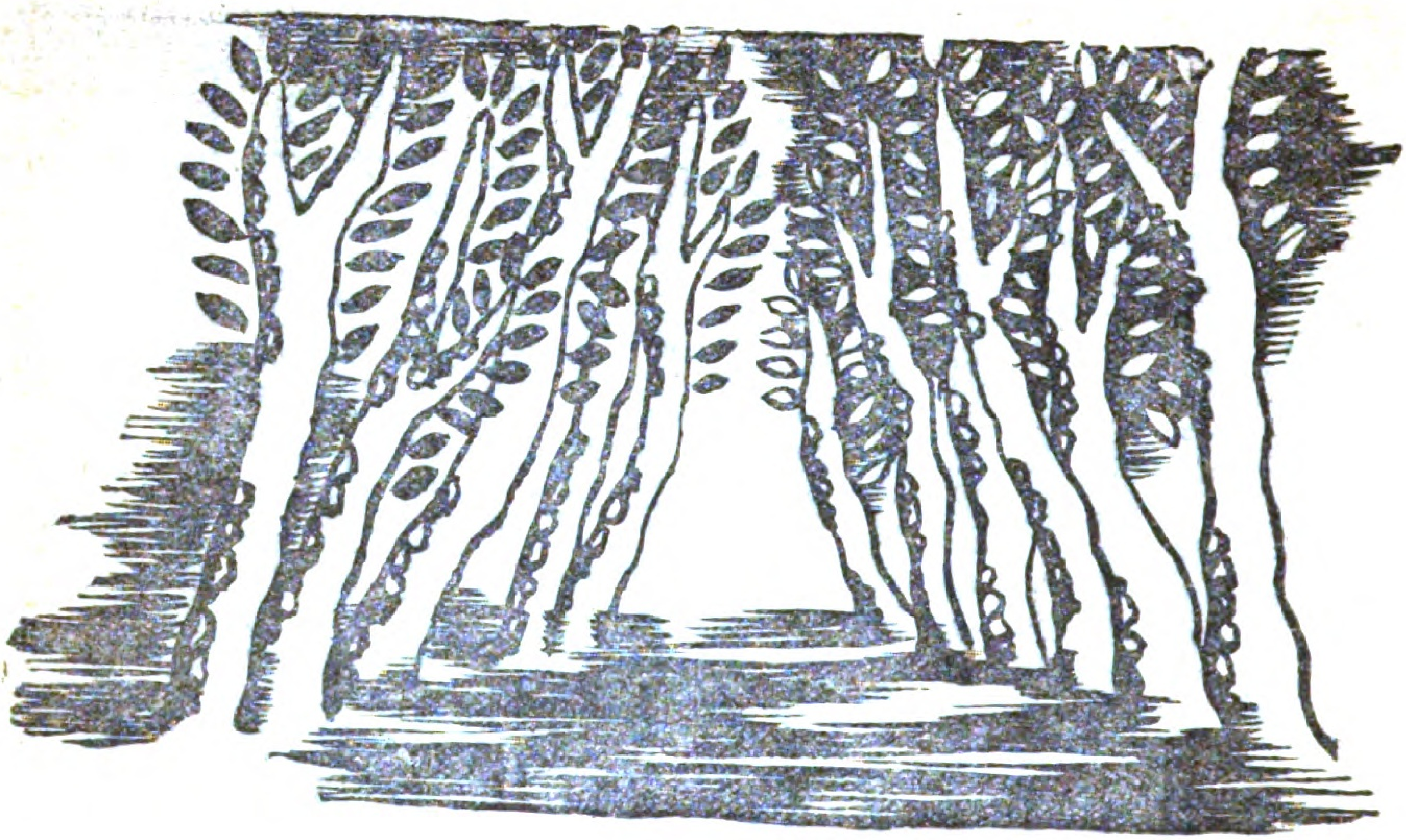
馬之助一人は元のところに悄然と立つて、相變らず手で目をおさへて居る。良寛戸口のところまで行つて振返つて馬之助を見る。)

良寛。馬さん。先刻の約束は忘れなさんなや。待つとるでの。

馬之助。(涙聲で)はい。

(山之もやす子も馬之助を顧る。)

— 幕 —



大陸（長篇小説）

谷譲次

2

資本十字軍に從軍して莫斯科征服に出かけてゐた若いバアリングトン・クウパアが、倫敦へ歸つて來た。謎の露西亞を見て來たといふ自慢が、彼を肥大にしてゐた。實際クウパア達の組織してゐるオックスフォウド同期生倶樂部の爐ばたの雜談は、當分は彼を中心にするに相違ない。「調査」の充滿してる鞄を自邸へ置くと直ぐ、クウパアは自動車の鼻を倶樂部へ向けた。

倶樂部員は紙の帽子をかぶつて、おどけた服裝で玄關に整列してクウパアを迎へた。

クウパアは、留守のあひだに、サウェイト・ラシアに對する倶樂部員の興味が倍になつてゐるのを發見して驚いた。それはトロツキイ自身がフロイド・ロイドに語つたやうに、方々の刊行物に書き散らすトロツキイのペンのためだつた。かうしてトロツキイは何時の間にか資本家の新聞紙を通じてサウェイトの宣傳をしてゐたのだ。倶樂部の二階では、みんながクウパアのためにウヰスキイ曹達を買つた。剝製の牡鹿の頭の下で、モロツコ皮の大椅子の底から葉卷の煙といつしよにオウスチン・ソルスベリイ卿が意見を吐いた。

「トロツキイのやつ盛んに書いてゐるね。あいつの警告はわれわれにとつて非常な利益だ。何故つて、考へて見給へ。われわれはあれを利用して、トロツキイと一緒になつて政府を脅かさなくちやならない。そして否應なしに露西亞と仲直りさせるんです。さうすれば、總選擧を前にして勞働黨の出鼻を挫くことが出來る。赤化宣傳に對抗するためには、一般の賃銀をほんのちよつぴり上げればいゝでせう。」

バアリングトン・クウパアが答へた。

「トロツキイの英吉利嫌ひは今始まつたこつちやないんだ。こつちも好かれちや迷惑だが、亞米利加にだつてやつは別に好意を持つてゐる譯ではない。色いろ言つてゐるやうだが、表面に英吉利の海外貿易を心配してゐるやうにも、露西亞市場における亞米利加の先取權を吹聽してゐるやうにも聞こえる。どつちだつてやつは内心は有難くないのだ。要するに、亞米利加をだしに使つてわれわれの氣を引いてゐるだけだ。トロツキイの結論は、一時の必要の前に、英吉利と亞米利加への敵意を相殺して、客觀的な立場から、サウェイト・ラシアの窮乏を訴へてゐるに過ぎない。世界革命の幻滅に眼の覺めた彼の第一聲の泣き言です。英吉利か亞米利加か何方かの手を借りなくちややつて往けないことに今頃氣がついて、あゝして英吉利に縋ついてゐるんだが、人は時々思つてる正反對のことを言ふものだ。トロツキイの本心はむしろ英吉利の資本の助力が欲しいんです。見えすいてゐるぢやないか。このことはサウェイト國内でもはつきり感じられるのだ。僕はこれを

報告の冒頭にしやうと思つて歸つて來た。」

誰かゞ言つた。

『トロツキイは仲なか觀てゐる。華盛頓の露西亞政策が最近すこし變つて來て、二三歩サウエイトとの握手に近づいてゐることは事實だ。僕はそれを證明することが出來る。この間白亞館へ或る男が高給で雇ひ入れられたのだ。特別の椅子がそいつのために急造されたのだ。その男は、露西亞國内のどの經濟學者よりも露西亞の商業的潜在能力を知つてゐるといふ名代の露西亞通なんだ。勿論猶太人さ。おまけにフウヴアは、亞米利加商品の販路を凡ゆる方面へ飛躍的に進出させることを大統領看板の第一にあげてる。もしフウヴアが過去の氷を割つてサウエイトを認めたとしたら何うだ。北大西洋は忽ち「メイド・イン・USA」を上甲板にまで滿載した星條旗の貨物船隊が帶のやうに續いて海上の交通整理が必要になるだらう。ウオウル街のエイジエント達は留紙幣を詰め込んで歩けなくなるだらう。こんな時に英斯科と背中合せを續けてるなんて、英吉利は馬鹿の骨頂だ。政府に任せきりぢや何をするか知れたもんぢやない。まるでわれ〳〵の損失で亞米利加を肥らせるやうなものぢやないか。』

歸つたら言はうと思つてゐたことをみんな先廻りして言つてしまふので、クウパアはびつくりした。詰らなくなつた。ただ如何にも長途の旅行をして來た、少壯氣鋭の事業家らしく、幾分の粗暴をもつて、痰壺へ煙草で染色された唾を吐いた。

オウステン・ソルスベリイ卿が斷定した。

『それなのに、大臣連中と來たら總選擧で眼の色を變へてる。が、その間も、事實は進展してゐる。議會だつてやつてる。ボルドウキンが田舍の別莊へ行つたといつて、世界が運轉を中止して待つ時代ではないんです。意味の判然しない喧嘩は早く止す程利口です。歴史的にも地理的にも利用し合ふべく運命づけられてゐる二つの國が、大學生みたいに青臭い政治的議論の相異や、主義なんかといふ空氣に色の着いたやうなものを言ひ立てゝ絶交してるなんて、成人の世界にあり得べ

きことだらうか。通商を開始するなら今だ。この内閣は、平和と常識の道を歩くために露西亜を許したと言へは、迎合民も抑下するに決まつてる。それはこの際、労働党の通俗体を折るためにも絶対に必要なんだ。

クウパアは露西亜から帰朝して土産話をする筈なのは自分だか誰だか解らなくなつた。黙つて聴いてゐた。

トロツキイの狙つた通りだ。トロツキイは、コンスタンチノウプルのホテルでちよい／＼ペンを動かした許りで、英吉利の輿論といふやつを形成する政治好きな貴族の意向を、彼らの無意識のうちに、自分の思ふやうにこんなに變へちまつた。資本家の新聞閥なんか、トロツキイにかゝつては無機物の道具でしかなかつた。彼はそれを上手に使つたのだ。

トロツキイはトルキスタンからオデッサまでサウエイト政府の賓客として自動車旅行を續けた。自動車はフオウドだつた。長い途を驢馬のやうに跳ね上つてトロツキイの骨を揉みくちやにした。トロツキイは、瀬戸物の煙管と上官的な微笑を口の兩隅へ挾んで、オデッサで最新式の砲艦クラスナヤ・ズヴエツダ號へ乘せられた。コンスタンチノウプルへ着くとまた自動車だ。横丁といふ横丁を出たり這入つたり、何度も同じ町を走つたりしたのち、やつとサウエイト領事館へ入れられた。萬事が極秘だ。勿論誰も面會は許されない。許すも許さないもない。いま領事館の客になつてるのはアンゴラから來た毛皮商人だ。彼の小さな商賣關係以外にはちつとも重要でない人物なのだ。コンスタンチノウプルのサウエイト領事がさう表明した。なに？ トロツキイだつて？ あのトロツキイかい。あのトロツキイならトルキスタンにゐる筈だよ。第一トロツキイには君、瀬木みたいな口髭があるぢやないか。ところがいま來てる客は髭なんか無くてすべ／＼してるのだ。外國の通信員達はさうですねと表面納得したやうな顔をして笑つた。領事も笑つた。土耳古の新聞は皿のやうに沈默を守り續けた。ユウマアを解しないのが土耳古人の惜しいところだ。トロツキイはやがてこのコンスタンチノウプルから

改めてブルサ地方へ流されるのだ。

トロツキイを看視してゐるのは憲兵(オグプ)のイワノフ大尉と彼の部下だ。トカトリアン・ホテルへ移つてからは、トロツキイは寢臺の中で原稿を書いて暮らした。イワノフは藥壜を持つて始終部屋へ這入つて來て、原稿を揃へたり、郵便局へ出しに行つたりした。今移動すると命が危ないといふ醫師の證明を取つて本國政府へ送つたのも彼だ。イワノフはトロツキイに心服してるのだ。しかし、何時までもコンスタンチノウプルに置いとく譯にも往かない。土耳古の首府へ送らうといふ事になつた。首府はアンゴラだ。祕密のうちに移さなければならない。あの岬の向ふまで船でやつて、あすこの停車場でこつそり汽車へ積まう。明方がボスフオラスの灣を桃色に輝かしてゐた。爽やかな風だ。魚のにほひをホテルと領事館の窓まで運んで來るのだ。赤旗を掲げた小汽船が一艘沖がかりしてゐた。一人の女と多勢の男達を乘せたボウトが海岸から漕いで行つて乘り込むと、汽船は、大きな汽笛を一つコンスタンチノウプルの屋根々々へ轉がしてマルマラの海へ消えてつた。それをみんなが見てゐた。見せるやうにしたのだ。あの船でトロツキイと家族の一行は何處かへ行つたのだらうと外國の通信員も土古耳の新聞もさう思つた。トロツキイは早起きだ。船の出るところを見つけてしまつた。トカトリアン・ホテルの窓からだ。彼は拍車を脱つただけの騎兵の長靴をはいてる。重い鋲が打つてあるし、おまけに窓ぎわの床には絨毯が無いから、歩く度びに大きな音がするのだ。それは毎朝隣室のイワノフにトロツキイの起床を知らせる役目をした。イワノフはトロツキイ夫人から貰つたトロツキイの古着の背廣の襟を立てゝ部屋の戸を開けた。窓に空氣の流通が宜くなつて、窓が風を吸ひ込んで窓掛けが内側へひらく〳〵したので、トロツキイはドアがあいて人が這入つて來たことを知つた。振返つて見なくてもイワノフであることは判つてゐた。イワノフは何時も朝飯までは裸足で歩き廻るのだ。そのはうが脊髓のた

めにいゝと信じてゐるのだ。だから朝猫のやうに足音を立てずに現れるのはイワノフに決つてた。早朝から猛烈な音を立てるトロッキイの靴とは極端な對照だつた。この裸足を好むのは彼の出生地である西伯利地方の習慣であらうとトロッキイは判斷してゐた。トロッキイは大きく肩を振るやうにして、部屋の眞ん中へ歸つて、貝殼の象眼をした卓子の隅へ腰を載せた。

「お早やう、イワノフ君。」

恐しく皺の寄つた鼻柱に強度の近眼鏡が今にも落ちさうに止まつてゐた。にやく\してゐるためだつた。イワノフ大尉は最敬禮をしさうにする右の手を叱つた。

「お早う御座います、長官。」

「あゝイワノフ君、君とは天氣の批評以外のことを話し合つてもいゝんだつたね？」

トロッキイが言つた。イワノフが妙な顔をしてゐると、隅のダブル・ベッドの上で毛布が人の形なりに動いて、トロッキイ夫人が眼を覺ましたらしい。こつちへ寢返りを打つて、枕の間から夫人の聲が笑つた。

「お早やう、イワノフさん。」

イワノフはそれを救ひの神のやうに歡迎して、寢臺の中の他人の細君には眼をつぶるべきであることをすつかり忘れて、醜態を誤魔化すために何か言ひながら其方のはうへ進まうとした。トロッキイが停めた。

「サウエイトの船が出て行つたね。」

「さうですか。小麥でも積みに來たのでせう。」

「ゆうべのうちに入港してゐて、朝になるのを待つて出帆したのだ。例の小細工だ。僕を何處かへ逃れ出したやうに見せかけやうといふのだらう。」

イワノフは天井の方へぐるつと眼を捲き上げて、大きな十字を切つた。

「長官、仕方がないのです。かうやつて私達があなたのことで骨を折つてゐるのは、本國から遣されてゐる暗殺者からあなたを守るためです。そりやあスタアリンはあんたの死顔を見たいでせう。現に今だつてこのホテルの廻りには色んな風に變裝をしたやつがうよ／＼してます。みんなあなたの咽喉頸を狙つて締めつけやうといふスタアリンの指です。ところが、私らは赤衞軍の人間だ。別の内容を受けてる。殺させないやうにして、あなたに殘りの人生をたつぷり樂しませゐといふのです。これは解つた話だ。私らはそのために苦心してる。あの船なんか大方そこらから出た芝居だらうと思ふのです。」

トロツキイは解つてる／＼といふやうに默つてうなづいて見せた。夫人は寢臺の上でぢつとしてゐた。起きたくてもイワノフがゐて起きられないのだ。廊下から珈琲のにほひが流れ込んで來た。それが如何にも故郷から遠い外國のホテルの朝らしくトロツキイには感じられた。こゝの珈琲はいはゆる土耳古珈琲といふ泥みたいなやつで、一日に三杯以上飲んだら三晩不眠に惱まされなければならないやつだ。イワノフはすつかり彈みがついて、神父の前へ出て懺悔をする時のやうにすこし涙ぐんで饒舌りつゞけた。

「長官も御存じでせう。何しろ、莫斯科を出る時の騷ぎたらなかつた。まだ同志レニンが生きてゐて、クレムリンの宮殿内の机の前に据わると、あの方は脊が低いので、机の向うに首だけ浮いて見えたといふ頃です。一頃私らの仲間にこんな言ひ草が流行つたもんです。いま同志レニンがちよつとGPUへ指を上げて合圖して、同志トロツキイを縛れと言つたら、GPUは直ぐトロツキイを縛るだらうかてんです。縛る縛らないで私らはみんな賭けをして、營舍内は毎度割れつ返るやうに賑やかだつた。が、間もなくレニンは死ぬ。あなたは縛られる。」

「イワノフ、君は何を言つてゐるのだ。」

イワノフ大尉は囘想を反芻しながら、口をもご〳〵させて憤氣込つて部屋を出て行つた。扉が締まるのを待つて、夫人は毛布を撥ね退けて起きた。

スタアリンの東洋人的な薄黒い顔が、不調で亂らないやうに人民委員會を見渡した。彼はいまかう言ひ終つたところだ。

「するとつまりトロツキイを安全に國境外へ出してやることは、多分の危險を承知の上で冒す一つの温情的行爲と解釋していゝんだな。」

スタアリンは倫敦の場末の仕立屋みたいな顔を頬杖で支へて頭をがく〳〵させた。會議用の長方形の机を取り卷いてゐる人民委員會は暫らく誰も何も言はなかつた。時計の音がスタアリンを焦々させた。

「僕は諸君とすこし違ふ。僕がトロツキイの肉體的滅亡に贊成なのは、サウエイトの永遠の利益においてゞある。死人は口を利かないから本人のためにもいゝのだ。却つて同情のあるやり方だと思ふ。」

みんなが一度にがや〳〵言ひ出した。その中でチチエリンの言葉が聞えた。

「急速な肉體的滅亡はトロツキイを殉教者のやうな壯烈なものに飾つてしまふかも知れない。そしてそれはやつの支持者のあひだに何よりの刺戟として作用するかも知れない。僕はそれを恐れるのだ。」

「一應理窟だな。」スタアリンは爪を嚙みながら言つた。スタアリンは爪を嚙む癖があるのだ。「いつそ斯うしやうか。トロツキイなんて何ら重要でない人間だ。何處で何をしやうと一向サウエイトには影響のない人物だといふ印象を與へるために、皆く輕く取扱はうか。この意味であつさり追放して知らん顔してるのだ。實際用のない人間なんだからな。何んなに無關心でゐることも出來るし、またさうしても差閊へない譯なんだ。」

さう決議された。それから、國外追放の法律上の形式の討議に移つた。これは可成り長く續いた。結局かういふことにきまつた。それは、「サウエイトの一市民をして、サウエイトの國外からサウエイトへの愛國に基く或る一つの強制的職務に從事させるために、彼をサウエイトの外部へ無期限に派遣する」のだ。それだけのことだ。民族派共產黨はかうしてクレムリンから異分子を追つて、サウエイトの對外政策をすこし許り看板の塗更へをした。勿論何十人といふ刺客の群がトロツキイ一家の後を追つて莫斯科から放たれた。事實トロツキイを莫斯科から次の南下驛までドライヴした自動車の運轉手は、その目的のための拳銃をポケットにあつためてゐた。その後彼らは色んな形で隨所に出沒した。が、トロツキイが、命じられた通り穩和しく「或る一つの強制的職務」なるものに「從事」してゐる限り、彼らも引金に指を當てることが出來ないのだ。その「強制的職務」といふのは、要するに國境外でぶら〳〵してることだ。そして、逃げないことだ。逃げたら、いや、鳥渡でも逃げさうな樣子を見せたら、直ちにあれ程議論の焦點だつた「肉體的滅亡」が大手を振つてやつて來る。そのための刺客群なのだ。このことは、スタアリンはじめ人民委員會が初めから決めて掛つてゐた無言の、そして發言を必要としないほどに共通の理解だつたのだ。計畫されない計畫だつたのだ。

早くトロツキイを逃がさなければならない。凡ゆる機會に、逃げたい誘惑と可能性を與へなければならない。お人好しで幾分頓馬なイワノフ憲兵大尉が特に側近の看視長に選ばれてついて來てゐるのも、そのためだ。イワノフは前の晩に今夜は軍服の儘で寢ろと言はれた時に何だらうと思つたが其のとほりにした。明方頃へ懷中電燈を照りつけられて起された。その懷中電燈を渡されて厩へ行つた。厩の庭には煙草の煙のやうな色の霧が詰まつてゐた。哨兵が濡れて立つてゐた。指が動かない程寒かつた。藥のにほひが淸々しかつた。破目板を蹴る馬の足音がしてゐた。馬の鼻から白い息が吹いたり消えたりしてゐた。イワノフの頰がそれにさわると、あつたかい海綿のやうな感じがした。朝早く何かするのは無闇に悲壯で嫌なものだ。寢不足と寒氣がイワノフの行動を小刻みにしてゐた。それでもやつと自分の馬を引き出して兵營の門まで

行つた。[illegible]に隊長が立つてゐた。隊長は笑つて紙片を渡した。そこに住所が書いてあるから急いで行けと言つた。開いて見ると、たゞストラストナヤ八一とあつた。馬を走らせて、まだ眠つてゐる莫斯科の町へ出た。月が殘つてゐた。イワノフは月を背にして馬を驅つた。モスクワ河の水のにほひで、鼻の奧が痛かつた。ストラストナヤ街の目的の家へ着いてみると、玄關の階段の下に大きな自動車が停まつてゐた。四五人の人影が往來のあちこちをぶらぶら歩いてゐた。男だか女だか判らない。長い外套を着た人達が階段を下りて來た。眞ん中の一人が、中途に立ち停まつて、入口を振り返つた。

「おゝ、レウ・ダヴィイッドウヰッチ！　あり得べきことでせうか？」

それは甲走つた女の聲だつた。泣いてゐるやうだつた。すると、玄關口が大きな人影を吐き出した。その人は軍帽をかぶつて、毛皮外套の襟を頭まで立てゝ、すつぽり顔を隱してゐた。階段の上の入口の横に、イワノフよりずつと上級らしいはやりの制服を着た士官が立つてゐた。士官は、出て來た人物の頭上に軍帽を見ると、進み寄つて手を伸ばして、軍帽を奪ひ取つた。力一ぱい足許に叩きつけた。軍帽は二三段階段を轉がつて横へ落ちた。無帽になつてもじやもじやの頭髮の露れた男は、兩手を腰のところで握り締めるやうにして、士官へ向き直つた。

「レオン！」

女が叫んで駈け上らうとした。傍にゐた男達が女を抱きとめた。無帽の男は、士官をその儘にして、階段を走り下りて長い身體を曲げて自動車のドアを潜つた。女がつゞいた。他に二三人乘り込むと自動車は走り出した。イワノフは、馬を急がせてついて行つた。田舍道へかゝつても、自動車は速力を落さなかつた。それは次の驛の發車時刻を考慮に入れてゐるのだつた。おかげでイワノフは樂について行くことが出來た。白樺の林の間に、黒土が朝日に光り出してゐた。樹の下を通る時は、素早くおじぎをしなければならなかつた。頭が枝に觸れて、襟頭へ露を落すのを防ぐためだつた。莫斯科からつぎの停車場で彼は馬に別れた。それきり莫斯科とも別れた。そんなことゝは知らずに、妻も、讀みかけの小説も、前の

休日に家へ歸つた時のまんまにして出て來たのだ。車室に落付いて始めて、イワノフは出かけに軍帽を奪ひ取られた位の高い人物が、前軍事委員長トロツキイであることに氣が付いた。そして、護送かたぐ〵車内まで見送りに來た上官の一人に自分がこれからトロツキイ一家と一緒に國外を放浪すべき役目を持つたことを言ひ渡された。他に何も聞かされはしなかつた。往く先々の領事が心得てゐるから其の言ふ通りにせよと言つて、人々は、トロツキイ達と握手して發車眞際に下りて行つた。彼の部下として、四五人の下士や兵卒が殘されてゐた。彼らは旅行そのものに驚いてゐるに相違なかつた。一隅に集まつてこそ〳〵話し合つてゐた。そのうちに肩を貸しあつて朝から居眠りを始めた。硝子の義眼のやうなトロツキイの眼が、挨拶をしたものか何うかともじ〳〵してゐるイワノフを見て、笑つた。或ひは、汽車の震動のために笑つたやうに見えたのかも知れない。

「同志、これからは僕と僕の家族が君達の仲間入りをするのだ。それとも、君のはうから僕らに仲間入りして呉れるかね。」

イワノフ大尉は直ぐにトロツキーが好きになつた。夫人は、膝の上で指にハンケチを捲きながら、窓の外を見てゐた。同車の客も多勢ゐた。暗殺の目的を持つた者がその大部分だつたらう。イワノフ大尉は兵卒を指揮してトロツキイ一家の手荷物を整理した。それらは莫斯科から車内に抛り込んであつたのだ。

トロツキイは逃げないか? まだ逃げないか? 早く逃げるやうに、逃げざるを得ないやうに、トルキスタンでの生活も可成り非道いものにした筈だ。そして、看視長がこのイワノフ大尉だから、逃げやうといふ氣さへ起こせば、その機會は幾らでもあつた筈だ。積極的に逃亡に誘導しやうとしたことさへあつたのだ。もしトロツキイがこの脱走の可能性を利用しさうに動いたら、直ぐに公然と彼を處分する手配がすつかり出來てゐたのだ。サウエイトの命令する「職務」に服さない者は、非共産黨員だ。革命への反逆者だ。誰でも一分間の卽座裁判で死刑を宣告し、同時にそれを執行することが出

來る。刑客達はトロツキイを包圍して移動しながら、彼が出て來るのを待つてゐた。萬一うまく脫走したとしたら、トロツキイといふ名前の上に亡命の一白色露西亞人といふ肩書を與へるだけだ。それは「あのトロツキイ」にとつて、死以上の極刑ではなからうか。何方でもいゝ。莫斯科は爪立ちしてゐる。

トロツキイはそれを知つてゐるのだ。散歩なんかにだつて彼は決して一人で門はしない。ホテルの廊下でさへも、イワノフと一緒でなければ歩かないのだ。そして何かのことでイワノフが遲れたり先に行かうとしたりすると、トロツキイは必ずイワノフと腕を組む。人が見たら、忠實な看視長イワノフが詭先に紛れてトロツキイの腕を押さへて行くのだと思つて、その要心深いのに驚いて感心したりすることであらう。イワノフ大尉自身は、こんなに親しくして呉れる前軍事委員長に感謝を捧げてゐる。莫斯科はまだ當分待たなければなるまい。

かういふ最中だ。一體トロツキイは何處にゐるのだといふ大きな聲が、突然歐羅巴中へ投げ出された。二月十九日のことだつた。誰も確固した返答は出來ないといふのだ。コンスタンチノウプルにゐるんぢやないのかと僕は空氣に訊いた。空氣は、トロツキイが赤い某號に乗せられてボスフォラスの海を横切つて、コンスタンチノウプルのサウエイト領事館に密輸入されたといふのは、サウエイトらしい出鱈目で何うも他にゐるやうだといふ一般の噂を傳へて囁いた。その十九日に、トロツキイの秘使と稱する男が、倫敦と巴里と伯林へ同時に現れたのだ。三人の男だ。彼らは同時刻に三市のデエリイ・メエル系統の新聞と通信社を歷訪して、トロツキイ自身が現在の所在と最近の感想を書いたものだと言つて、一つの原稿を賣込みに持ち歩いた。値段は三市ともまちまちだつた。初めは何れも持込みにしては馬鹿に高價いことを言つた。が、斷はると直ぐ折れて、しまひに只でいゝから出して呉れと頼み込んだ。勿論どこでも怪しんで買ひはしなかつた。三人のエ

イジエント達はお互ひに識らないらしいのだ。しかし、この三つの原稿は大同小異で、明白に一つの個處から出たものらしく、何うも莫斯科あたりではないかといふのだ。新聞社も通信社もエイジエント達でさへコピイを見ただけで、原文の原稿を見た者は誰もないのだ。そのエイジエントも十九日きりで、翌日は何處の社へも姿を現さなかつた。こんな評判も立つた。トロツキイにはサウエイトの手によつて二三人換玉が使はれてゐて、それが時どき方々へ出るのだといふのだ。ほんとのトロツキイは露西亞國内を一歩も出たことはない。疾うの昔にGPUの手に掛つて壁に立つてゐるといふのだ。壁に立つといふのは、スタアリンの氣に入らないやつを莫斯科のリユビヤンカ廣場に面したGPUの本部へ引つさらつて來て、其處の地下室の壁に立たゝして、ぽん〳〵撃ち殺してしまふことだ。あいつはこの頃顏が見えないが到々壁に立つたらしい。おれは近いうち壁に立ちさうな氣がするなどと言つて、サウエイト・ラシアでの行衛不明は皆これだ。僕がモスクヷに行つてる時も、夜中にリユビヤンカの横町を通ると銃聲が聞こえるといふことだつた。トロツキイはこの壁に立つてしまつた。それをスタアリンが何だかんだと外部へ向つて誤魔化さうとしてゐるのだ。だからこそトロツキイの代理なるものを三人も莫斯科から派遣したりする必要があるのだ。うわさはさう言つた。

間もなくマダム・トロツキイと子供達だけコンスタンチノウプルから獨逸へ入國を許されることになつた。これで、そのうちにはトロツキイも獨逸へ住むやうになるだらうといふのだ。しかし獨逸側から條件を持ち出したのだ。それは凡ゆる政治的活動から隱退して、靜かなそして明白な生活をするといふ約束だ。

トロツキイはその誓約書に署名した。それを伯林へ行きたいといふ嘆願と一しよにコンスタンチノウプルの獨逸領事へ差し出した。領事は外務省へ何うしたらいゝかと電報を打つた。外務省はそれを責任といつしよに閣議へ廻した。

トロツキイは病勢が進んで長いことないといふのだ。敵も味方も何處か青々とした景色のいゝ所で死なしたいと言つてる　コンスタンチノウブルは氣候の變化が激しくて、禿山ばかりで　流刑者を一層感傷的にしていけないのだらう。アンゴラへやらうとしたら、其處のサウエイト大使が肘を突き出してトロツキイを拒絶した。

トロツキイの送り先は困難な問題になつて往つた。歐羅巴中にトロツキイの押しつけ合ひが始まつた。土耳古の政府も色んなことを言はれるのでコンスタンチノウブルに置くのは困ると言ひ出した。妙に疑はれるのが嫌だといふのだ。白い方にとつても赤い方にとつても危險人物なので、それに居住を許しとくと兩方から變な眼で見られるのだ。うつちやつて置くと政治的な思想的な國際問題が起りさうだといふのだ。悶着は土耳古人の好物の一つだけど、それは國内だけで澤山なのだ。が、さう言つても、何處も快くトロツキイを受取つて呉れるところがないので、國外へ出すことも出來す、土耳古の政府はすつかり當惑して、土耳古帽を脱つて頭を掻いてる形だ。

エストニアのリガ市で發表された。トロツキイの凡てを抹殺する最後の記念のために、サウエイト政府は、革命後サマラ地方に彼の名をとつて命名されたトロツクといふ小都會の名をシャパイエフと改めた。これですつかりサウエイトの上からトロツキイの痕跡が消えたと莫斯科は清々した。

獨逸へ入國が許可されるためには何でもする。どんな屈辱的な誓約も嫌はないとトロツキイが言つた。コンスタンチノウブルの獨逸領事を通して外務省へ申し入れたといふのだ。彼が獨逸へ來たがつてるわけは、健康を回復するために、

六個月程ウキイスバアデンにあるベンドレル教授の病院へはいつて日光療法を受けたいのだ。この入院中は、獨逸の要求通りに凡ゆる政治的活動から遠ざかつて靜かな明白な生活を送るであらうとトロツキイが聲明したといふのだ。入院中だけ政治的活動から隱退して靜かな生活をするもないものだと歐羅巴中が笑つた。笑はせるために作られた話なのだ。伯林で發行される白系露西亞字新聞ルルの特派員がコンスタンチノウプルから大事に提げて來た話だといふのだが、例の莫斯科から金を貰つてあちこちに散らばつてゐる「トロツキイの代理（エイジエント）」からの「入電」であらう。トロツキイのことに關する限り、白と赤もこんなに仲よく握手出來るのだ。

二月廿八日に土耳古の外務大臣イスメツド・パシヤはトロツキイ問題が五月蠅くなつた。土耳古に置くことにして、公式に許可を與へやうと決心した。勿論トロツキイとしてゞはない。偶然前サウエイト軍事委員長と同姓の一外國人としてだ。毛皮商でも煙突用石材仲買人でも何でもいゝ。とにかく「トロツキイ」ではないのだ。

トロツキイの財政的逼迫と來たら非道いものだといふ人があつた。金はふんだんに持つてるといふ説もあつた。巴里の共産黨の有志がこつそり據金して送らうとしたら、第三インタナショナルが干渉して止めてしまつた。あいつは金には困らない筈だ。必要以上に莫斯科から送つてあるといふのだ。

三月十八日だ。普魯西の内務大臣グルツエシンスキイが急にトロツキイに好意を示し出した。無條件で入國を許すと言ひ出した。聯邦閣議もそれに同意した。トロツキイはコンスタンチノウプルを發つた。尠くともトカトリアン・ホテルの

トロツキイの部屋は空つぽになつた。原稿の書き損じと使ひ古した安全剃刀の刄が四五枚殘つてた。トロツキイは何處へ行つたかもう完全に判らなくなつた。ベル・グルツェシンスキイと莫斯科の間に眼配せが交されて、それでグルツェシンスキイの態度が急變して、微笑でトロツキイを引き出して警察や通信網の不完全な途中の小國で何う斯うしたといふのではないのだらう。きつとまだ土耳古にゐるのだらう。しかし、逃げたら殺さうと思つて待つてゐても逃げないし、そのうちに段々好ましくないことを饒舌り出しさうなので、最近モスクヴがいらいらしてゐたことは事實だ。一體トロツキイが悪いのだ。やつと來たらレニン時代からの餘計なことをあんまり知り過ぎてる。

トロツキイがホテルからゐなくなつた翌る朝早く、コンスタンチノウプルの町端れのスタンボウル街道に屍骸が轉つてた。此處はシヤアザアドの井戸のある所で、飲料水を保護するために青銅の組格子で圍つてある。樹の影が濃くて通行人の休み場處になる四つ角だ。屍骸は組格子の直ぐ下に仰向けに倒れてゐた。顏に木の葉が摘つて掛けてあつた。それはイワノフ砲兵大尉だつた。イワノフは胸部へ何發も射拔かれて樂天家らしい死に方をしてゐた。辻強盗に襲はれたのだといふことだ。あの邊は人氣が荒くていけないのだ。土耳古人は動物を大事にすると特別の祝福が來ると信じて、野良犬に町中の人が食べ物をやつて街路に飼つてゐる位だが、人命はあまり尊重しない。ことに強盗に殺された屍骸などは悪魔の次に唾棄すべきだ。警察は眼觸りだと言つてイワノフの死體を何處かへ持つて行つてさつさと埋めてしまつた。すぐ忘れられた。

トウエルスカヤの市電通りを眞つ直ぐ行くと、白露停車場からバルチツク線方面へ走つてる鐵道線路へ出る。莫斯科だ。

こゝらは郊外だ。ちぐはぐの敷石が反つたり歪んだりしてゐて、片つぽの隅を踏みつけると片つぽが上るのだ。その隙間から生々した土が覗いてる。そこには、雑草の芽も見られた。春だ。新開地の日光は建物の壁と女の顔を白く見せるのだ。子供達の脚は長い。みんな柵に腰かけて、脚をぶらん〱させて笑つてた。ベゴワヤ・ウリザの横丁から「十月」兵營へ通ずる。兵營の前は人で黒山だ。中庭は赤旗の森林だ。新兵の入隊式があるのだ。カザン地方からやつて來た八十人の百姓達だ。やつらは掘り出された許りの鑛石のやうに健康で愚鈍なのだ。何といふ素晴しい動物どもであらう。新しい軍服を着せられてすつかり驚いてる。眼を圓くして、肘を突つき合つて並んでる。胸の釦鈕に一つづつ蒼空の色が映つてるのだ。號令がぶつつけられた。やつらは互ひに眞似し合ひながら、怖さうに地面に片膝をついた。それは、煉瓦の塀が崩れるやうな不細工な眺めだつた。鼻つ先に長い赤旗の裾が靡いた。顔を拭くやうにそれを掴んで、接吻した。起ち上つて宣誓した。赤い誓だ。右手を上げて、頭を下げて吹鳴るのだ。この宣誓は六つの文句から成り立つてる。トロツキイ達が考へ出したものだ。

一、無産階級の息子であり、サウエイト共和國の市民である私は、いま勞農軍の戰士のタイトルを受取る。

二、露西亞と×××の無産階級の前に、そしてこのタイトルの名譽のために、私は意識をもつて軍事を學び、よき兵士となり、私の瞳子と人々の利善を破滅と崩壞から守ることを誓ふ。

三、つねに××の嚴律に服し、勞農共和國によつて任命された上官の命令は直ちに異議なく遂行することを誓ふ。

四、サウエイト共和國の市民の價値を低めるやうな凡ての行爲から、私自身は勿論、兵營内の同志の誰をも遠ざけるやうに努力することゝ、私の思想の全部をあの偉大なる唯一の××、×××の勞働者の解放に絶えず集中することを誓ふ。

五、勞農政府の最初の呼び聲一つで、サウエイト共和國の×に向ひ、すべての危險と戰鬪と防禦の中に、サウエイト共和國の存立と、××××の信念と、人類の兄弟愛のためには私の努力と生命を惜まないことを誓ふ。

六、もし私が悪意の下にこれらの誓の一つでも破つたなら、私は一般の侮蔑を受けた上、革命軍法によつて厳罰に處せられるであらう。

口々にこんなことを喚いた。何のことか言葉の意味も知らずに、たゞ教へられた通り繰り返してるのだ。何時までも繰けられた。聲が大きいので門前の群集はふえる一方だ。營舎の二階の窓から澤山の顔がこの騒ぎを見下ろしてゐた。その窓は聯隊の教室なのだ。そこでは學課が行はれてゐた。約二百人の兵士が空間を満たして、てんでに勝手なことを考へてゐた。彼らはすつかり先を知つてゝ、眠つてゝも返事が出来るのだ。十二小隊附きの若い政治教官が淺黄の制衣を着て教壇に立つてゐた。教官は女のやうな美少年で共産黨員だ。何時も傲慢に構へて誰にでもうなづいてる。この軍隊内の政治細胞は大佐から元帥まで一人に一人づゝ附いてゐて政治警察と陸軍省へ將校の動靜を報告する看視人なのだ。かうして共産黨は組織の徹底を計らうといふのだ。教室ではその若い政治教官がいつもの共産主義手ほどきといふのをやつてる。何故學課といふとこれなのだ。教官が順序によつて問ひを出すと、部屋中の兵隊が聲を合はせて答へるのだ。まるで教理問答だ。神學校とあんまり變らないのだ。只こつちは少々亂雑で、おまけに汗臭いにほひがしてるだけだ。細い教官の聲に續いて兵士達の合唱が戦闘車のやうに轟いてゐた。食べることゝ着ることの心配がないので、みんな幸福さうだ。

「何のためにわれ／＼は赤衛軍を必要とするのか。」

「サウエイト・ラシアを敵から救ふために。」

「サウエイト・ラシアの×は何か。」

「×××のブルジョア階級。」

「そのブルジョア階級の××××は？」

「英吉利と佛蘭西と亞米利加と日本。」

『何故われ〳〵は世界のブルジョア國家を×として戰鬪準備をしなければならないのか。』

『なぜならブルジョア階級は國際的に團結して×××のプロレタリアを押さへつけてゐるから、そして世界のプロレタリア階級を××するのがサウエイト・ラシアだから。』

『何故ブルジョア國家はサウエイト・ラシアを怖れてゐるのか。』

『何故なら早晩プロレタリア階級と赤衞軍が現在の×××××を×して、彼らの國に勞働者と兵士の×××を×××ことを知つてるから。』

聖教問答は終つた。美少年の教官は上氣した額部を襯衣の袖で拭いて教壇を下りた。みんなはお互ひに脇腹を狙つて拳固を食らはせながら笑つて二階の階段を馳け下りた。肩に手を廻し合つてぶら下りつこして練兵場へ出た。宿舍は練兵場の向うに霞んでるのだ。左右には遠くに痩せつこけた白楊の整列がある。練兵場は泥んこだ。鏡みたいに固まつた殘雪が、黑い塵埃に覆はれて陽影にうづくまつてゐた。それが時々日光の角度によつて鋭く眼を射つた。兵隊達は練兵場を横切りながら自然馳けつこになつてゐた。ダニエレフ軍曹が土くれを蹴飛ばして叫んだ。

『畜生！　やらせねえかなあ。こんな風にして突つ込んで行くんだ。俺は眼の前に現れたやつを誰でも張り倒すぞ。波蘭でもルウマニアでもいゝや。あいつと來たら生意氣で手に負へねえんだし、見ろ、俺たちはこんなに鬪志といふやつではち切れさうぢやねえか。』

『おい〳〵、ダニエレフ、君はそんなことを言つてトロツキイの二の舞ひを演じても知らないぞ。』

美少年の政治教官が追ひついて言つた。ダニエレフ軍曹は口びるを尖らした。

『誰に聞こえたつて構はねえのです。あの向うの方の大將方がやれと言へば、私らは何時だつて斯うして突擊しますよ。みんなやり度がつてうづ〳〵してゐるんです。』

軍曹はうしろの莫斯科市の方角へ首を曲げて向うの方の大將方と言つた。それは、見えてゐないけれど、クレムリンの宮殿を意味したのだ。教官が何か答へやうとした時、銀灰色のジャンカア機が空に現れた。みんな立ち停まつて仰いだ。何處も闘志で一ぱいなのだ。赤衛軍は若い。共產黨の宣傳が利いて、主義のための××を愉快がつてるのだ。何處の國の××へでも、それがコミユニスムのものである限り、何時でも××に出かけて行く氣でゐるのだ。やつぱりトロツキイが殘つてるのだ。

晩飯が濟むと、兵隊達は兵隊倶樂部へ集まつて共產主義ルウレットをして遊んだ。彼らは教理問答よりもこの方をよろこんだ。赤衛軍に共產主義理論の釘を打ち込むためには色んなものが必要なのだ。共產主義ルウレットもその一つとして考案されたものだ。圓盤の上に一から廿までの數字が書かれてあつた。圓盤は中央で一つの軸に支へられてゐて、くるくる回轉するやうに出來てるのだ。四五十人の兵士たちが圓盤を取り卷いて騷いでゐた。一から廿までの數字の前へ、廿人の兵士が出鱈目に据わるのだ。誰かゞ圓盤の縁に力を加へて廻す。圓盤は軸に乘つて初めは勢ひよく、段々弱りながら廻りつゞける。周圍の廿人は位置を變へずに回轉の停まるのを待つてゐる。みんなの眼が盤に注がれる。圓盤がとまると、まはりの兵隊の一人ひとりの前に數字があるのだ。その數字によつて、十二なら十二番の問題を貰ふのだ。問題は紙片にタイプライタアで刷つて番號が打つてあるのだ。圓盤で八の數が當つたやつには八番の問題をやるのだ。問題は時々變るのだ。兵士達は紙を開いて問題を讀んで答案を書いて出すのだ。

無產獨裁の目的は何か。

何故宗教は廢すべきか。

露西亞のプロレタリア赤衛軍と他の資本主義國家の軍隊との相違點は何か。

なぜ×××の資本主義を倒して其處に×××××を××しなければならないか。
歷史が約束するプロレタリアの××とは何か。
世界××における赤衛軍の役割を說明せよ。
紙きれには夫ぞれこんな問題が印刷してあつた。兵隊たちは當つた問題を眺めて、答案を前に鉛筆を舐めた。答案は出しても出さなくてもいゝのだ。さうしないと遊びにならないからだ。やがて答への出來る者は答案を書いた。一人が纏めて、共產黨から出張して來てる敎官の机へ持つてつて置いとくのだ。翌日敎官が結果を發表するのだ。等級をつけて賞品を吳れるのだ。兵隊倶樂部の談話室の戶棚には何時もこの賞品が飾つてある。それはかうして陳列して共產主義ルウレットを奬勵するためなのだ。石鹼、タオル、鉛筆、安物の剃刀、齒刷子、レニンとマルクスの肖像のはいつた飾り扣鈕、莫斯科名所繪葉書、ビスケットの袋、靴下等だ。

『おい、みんな來て見ろよ。また靑盟のやつらが樂書に來たぞ。』
誰かゞ兵隊倶樂部へ飛び込んで來て呶鳴つた。みんなはルウレット遊びをうつちやらかして廊下へ崩れ出た。押し合ひへしあひして狹い廊下を進んで行つた。電燈の光りが暗かつた。向うの告知板のまはりに人が搖れてゐた。共產黨靑年同盟の連中なのだ。そこらまで來ると、廊下の壁は兩側とも大きな文字で一ぱいだ。赤ペンキでべた〱に書いてある。これがみんな靑年同盟の樂書なのだ。中には兵隊たちのもすこしはあるのだ。
ブルジョアよ、死へ急ぐがいゝ!
キヤピタリズムは人類の重荷になつてる。重い荷物を背負つてる人はちよつと押せば轉ぶのだ。
法王と敎會に呪ひあれ!

第三インタナショナルはおれ達の××と××だ。

兵士諸君！　世界地圖を俺たちの×で××に××××さう！

告知板には掲示と聯隊の新聞が貼つてあるきりだ。それを取りまいてこの赤い文字が一面に飛躍してるのだ。ポスタアもある。巨大な怪物が人間を頬張つて口から血が垂れたりしてる。怪物には資本主義と希臘教會と二つの言葉の説明がついてる。共産黨青年同盟の有志がペンキ罐と刷毛をぶら下げて始終兵營や學校や工場を廻つてかういふ樂書をして歩いてるのだ。政府はむしろ奬勵してるのだ。到るところで凡ゆる機會に染み込ませて置いた方がいゝからだ。共産黨青年同盟は樂書が古くなつてあまり刺激を與へなくなつた頃を見計つて今夜のやうに廻つて來て又新しいやつをなすりつけて行くのだ。彼らは思慮深い顔をしてる青年達だ。何んなに放任して置いても決して拙いことを書きはしないのだ。今だつて、兵士たちがわい〳〵言つて見物してると、彼らはペンキ罐を下ろして手早く仕事に取り掛つた。慣れた態度で靜かに書いて行つた。兵隊達には、彼らがみんな大變な學者のやうに見えて尊敬と驚異の對象だ。

十月兵營の裏はスヰウスキイの森だ。そこでは女學校の教師が野外教授をしてた。先生は頬の蒼い斷髮の若い女だ。生徒は草の上に座つて草の葉を弄つてゐた。それは授業といふよりも講演に近いものだ。

「今度赤衞軍を參觀に行きますが、あそこに見えるのが赤衞軍の十月兵營です。赤衞軍はプロレタリアが×××××するために一番××な道具です。」

それから斯う言つた。

「中産階級を滅ぼさなければなりません。××××の人をブルジョアとプロレタリアに××××する××工事が第三インタナショナルの××なのです。」

フロイド・ロイドが十月兵營を見せて貰つて、半日スボウスキイの森を迂路ついたのは、彼がはじめて露西亞へ行つた時だ。ロイドは近く開催される筈の共産黨大會へ記者團の一人として出席するために來たのだ。

サウエイト外務省（ナルコミンデル）の新聞課長グレゴリ・ワインスタインは探し物をしてゐた。黄色く燒けた新聞雜誌や書類が、床から棚から彼のポケットまで埋めつくしてゐた。この部屋は五階で無闇に陽當りがよくて、おまけに窓かけがないので、何もかも直き變色するのだ。机と椅子だけは隅々に金具の光つた素晴しいものだ。机の眞ん中に、金いろの天使が地球を抱いて、その地球が時計になつてる置時計が飾つてある。これらは革命の時に貴族の邸から掠き出した物だ。それはいゝが、何て非道い埃だ。ワインスタインは背伸びをしてふうと息をした時、戸口のところに人聲がしたのでそつちを向いた。

フロイド・ロイドは汚い階段を五階まで登つて來たので汗を掻いてゐた。亞米利加の雜誌記者ですと佛蘭西語で言つて名刺を出した。ワインスタンは無愛想な男だ。無愛想だからこゝに置かれてるのだ。默つてロイドを見た。ロイドは、インタヴユウを取つたり統計を集めたり原稿を送つたりしたいのだが、さういふ便宜は何處で計つて貰へるか。原稿の檢閲は何處で受けるのかと訊いた。ワインスタインは笑つた。

「檢閲？　露西亞は自由國です。そんなものはありません。」

「電報も構ひませんか。」

「郵便局へ行つて何でもお打ちなさい。」

「今度の大會の記事もそれでいゝですか。」

「勿論です。」

しかし事實はロイドの打つた電報はあまり着いてゐなかつた。打つた覺えのない電報が澤山着いてゐた。

（未完）

定價		
一冊	八十錢	送料壹錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

每月一回 一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で總代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年一月十八日印刷
昭和五年二月一日發行
（禁轉載）

發行者 編輯人　島中雄作

印刷人　竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ內ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ內 五三五・五三六・五三七番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ
新マツダ
瓦斯入電球

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly

Terms of Subscription: Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

